

響け！ユーフォニアム～北宇治のスーパー自由人～

キングコングマン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

北宇治高校吹奏楽部には、あまりにも自由すぎるトランペッターが居る。

ラフではありますが、主人公のイメージとして、自分が描いた絵を貼っておこうと思います。

こんな顔しておいてめちやくちや変人です。

目次

北宇治の自由人

その男、トランペッター

悪口

パート練

名もなき演奏者

劇薬

Moon River

朝の一幕

自由人

本気

河川敷ステージ

馬子にも衣装

緊張

自由曲

じゃれ合い

絶不調

負い目

凜花

実力不足

性質

誘い

遊びつくし

おみくじ

美女と野獣

1

8

13

18

23

28

35

40

44

48

53

59

66

71

76

81

87

91

98

102

107

113

118

保健室にて	266
オーバーワーク	260
兄妹	252
ライバル心	246
幕間：距離感	240
結果	232
エゴと愛	226
感想	220
再度	215
復帰報告	210
本心	205
ユーフォの子	200
愚痴大会	193
公園で	186
どん底	179
崩壊	174
むかし話	168
最悪	163
波乱	156
噂	151
納得	147
発表	142
当日	137
違い	132
マドンナの憂鬱	127

明静のエース	414
線香花火	406
信用	399
2日目	394
罪悪感	388
合宿開始	383
母親	378
プールサイドヒストリー	372
プール	367
名前呼び	362
特別	356
花火大会	349
恋愛観	342
付き合う？	335
不安材料	330
許可	324
傘木希美	318
唯一のオーボエ	312
記念撮影	306
真夏の自由人	
結果	300
直前	293
手綱	285
お礼	279
焦り	272

再びの	571
覚醒	563
覚醒の自由人	
優子	556
いつも通り	549
中川夏紀	544
風邪	536
帰宅	531
滝透	525
一方	518
雨曝し	513
台風	506
原点	498
相談	491
内心	484
足止め	476
スランプ	470
不調	463
ネガティブトランペッター	455
関西大会	450
緊張	444
前日	440
誰の為に	433
存在	427
不穏	420

父親	694
親	688
本音	682
実力	675
進む路	669
自分の音	662
見学②	656
見学	651
私のお気に入り	643
部長	638
勇気	634
壁	626
私なんか	621
愛情	616
問題	608
幕間：文化祭②	599
幕間：文化祭①	590
初めての	584
選択	581
オーディション前日	576

北宇治の自由人

その男、トランペッター

「サッカー部どうー!?」

「美術部で自分の才能を開花させませんかー!?」

4月の初め、春の陽気麗かな放課後。風物詩とも言うべきか、桜の花びらと共に、各部は新入生を必死に取り込もうと、あちらこちらで声を張り上げる。

それはここ、京都府立北宇治高校も例外では無い。春先にしか見れない貴重なイベント。そんな光景を、面白がる様に見つめる男子生徒が居た。

「おー、やってるやってる」

ぴっしりと真新しい制服に身を包んだ、新入生がごった返す中庭を屋上から一人、双眼鏡を覗いて、その光景を見つめている。

「お、野球部は新入生ゲットか?……あ、美術部がフラれた」

側から見れば奇行者か不審者にしか見えないその男の名は、秋川忍（あきかわしのぶ）と言った。

身長177センチ、体重62キロ。細身の身体に、整っていると見える顔立ち。そして、毛先に天然パーマの混じった黒髪。

彼は、北宇治高校の2年生だ。

何故彼がこんな事をしているのかと言うと、特に理由は無い。ただ面白そうと思っただから、わざわざ家から双眼鏡を持ち出し、こうやって文字通り高みの見物をしている訳である。

「それで……懐かしの吹奏楽部様は……」

そんな独り言を呟きながら、秋川は双眼鏡を左右に揺らす。何度か視線を動かして目に着いたのは、校門の前。一番人が来るであろう目立つ場所に、その集団は居た。

「おー、場所は悪くない。……多分、あすか先輩の提案だろうなー」

太陽の光が反射して金管やら木管やらの楽器がキラキラと輝いて

いる。北宇治高校吹奏楽部である。

「気合いはいつてんねー。今年は何人入るかな？」

そんな事を言いながら、秋川は双眼鏡の倍率を上げる。すると、黒いストレートの髪を腰まで伸ばした女性が、指揮棒を振り始めた。それと同時に、吹奏楽の演奏が秋川の耳にまで届く。

「ははっ、相変わらずひでえや」

遠くから聞いても分かるほどのひどい演奏。一言、それだけ言うと、秋川は視線を別の場所に移した。

「おっすタツキー、何人入った？」

新学期が始まって2週間。朝、学校に来ると秋川はとある男子生徒に話し掛けた。

「おっすアツキー。今年は二十二人。まあ、去年より少ないな」

秋川の問いかけに、タツキーと呼ばれた男子生徒はそう返す。この男子生徒の名は、滝野純一。秋川と同じクラスで仲がいい男子の1人だ。

彼は吹奏楽部員。ここでの何人入ったと言う話は、吹奏楽部に入部した人数の事を指している。

「へえ、結構入ったじゃん。こりゃ、吹奏楽部も安泰ですなー」

秋川がそう言ってケラケラと笑うと、滝野は困った様に苦笑いになった。

「……それが、そうも行かないっぽいんだよなあ……」

そして、困ったと言う風な言葉を返す滝野。

「何？、”また”問題でも起きた？」

そんな違和感を感じ取った秋川は、興味津々にそんな事を聞く。またと言う言葉に滝野は一瞬反応したが、いつも通りに戻った。

「……問題というか、新しい顧問が結構な人でな……」

「あれ？、新しい顧問で、松もっさんに決まったんじゃないの？」

「松本先生は今まで通り副顧問だよ。新しく赴任して来た先生が顧問になったんだ。ホラ、全校集会で挨拶してただろ？」滝、って人」

「ああ、確かに全校集会に居た様な……」

秋川は全校集会で件の顧問が挨拶していた事を思い出す。確かフルネームは「滝昇」と言った筈だ。語呂が良く、面白い名前だったので秋川の記憶の片隅に残っていた。

「あの人が顧問になったんだ。噂を聞くと優しいそうじゃん？」

全校集会では遠すぎて顔はつきり見えなかったが、若くて顔も良いとの評判だ。女子ばかりの吹奏楽部の顧問となれば、人気が出そうなものだが。

対して、滝野は渋い顔になった。

「……アツキーは話した事ないからそう言うんだよ。……ある意味あの先生のお陰で、本気で全国大会出場目指す事になったんだし」

「へえ、良いじゃん。目指せば？」

深刻そうにそう言う滝野に対し、秋川はあっけらかんと返す。そんな秋川に、さらに困った様な表情を滝野は浮かべた。

「お前なあ、そんな部活じゃ無い事ぐらい知ってるだろ？アツキーだって去年までは吹奏楽部に居たんだし」

「まあ、そうだけど。……じゃあ何？、その滝センサーが無理矢理その目標を決めたわけ？」

「そ、それは……」

秋川の問いかけに、滝野はどこか口籠る。いきなり来た新しい顧問に一方的にそんな目標を定められたとしたら、滝野がここまで口籠る事は無い筈だ。と言うか、もしそうだとしたらいきなり環境が変わった事から部内で反発が起きて、先生自身も居場所が無くなる筈である。

「まあ、良いや。とにかく、大変な様で同情するよー」

しかし、そんな事はどうでも良いのか、ケラケラと笑って秋川は続けてそう言い放った。

「……ホント、お前は自由人だな」

そんな他人事のような秋川に対し、一つため息をついて滝野はそう返した。

秋川忍は、去年までは北宇治高校吹奏楽部に所属していた。担当楽器は、トランペット。面白くて目立つからと言う理由で、5つの頃からずっとその楽器を吹いている。

始めたキツカケは単純。母親が近所の市民楽団でトランペットを吹いていたからだ。

トランペットに限らないが楽器の上手さと言うのは、経験がモノを言う。5歳の頃から10年以上練習して来た秋川の実力は、残酷ではあるが中、高から始めた人間とは比べ物にならないくらいレベルが高かった。

が、そんな秋川には、致命的な問題があった。

「お、タツキー。そのウインナー美味そうじゃん。一個頂戴」

「……返事する前に取るのやめてくんない？」

昼休み、滝野の弁当からウインナーを勝手に取る秋川。

そう。この男、かなりの自由人なのである。

協調性という言葉とは一切無縁なその性格は、チームプレイの側面が強い吹奏楽において、彼を悪い目で見える人間も多かった。

個人練が多く、あっちへフラフラ、こっちへフラフラ。そして、偶にやる全体練習にフラツと顔を出す。

しかし、実力は突出している。実際、彼の実力は強豪校で1st、それどころかソロパートを張れるくらいの力量だ。

だが、彼は“家から一番近いから”と言う、しょうもない理由で吹奏楽弱小校であるこの学校を選んだ。それが運の尽きだったのだろう。あまりにも実力の差がある事が、上級生からの嫉妬対象となった。

そして“ある事件”を境に、秋川忍は吹奏楽部を退部したのだ。

「あ、今年のソロコンどうしょ？」

しかし、トランペットを吹くのを辞めたわけでは無い。近所の市民楽団で偶に吹いてるし、今もこの様に数ヶ月後に始まる楽器のソロコンテストに応募しようとしている。

去年は部活に所属してたから学校からエントリー出来たが、今は退部している。すると、個人でのエントリーになるのだろうか？

滝野のウイナーを盗んだ事はもう忘れたのか、秋川はそんな事を眩く。

「お、今年も出んのか？」

滝野も興味津々なのか、そんな事を聞く。

「もちろん。でも、もう退部しちゃったからなー。そうすると個人でのエントリーになんのかな？」

「そんな俺に聞かれても分かんねーよ。放課後に松本先生に聞いてみれば？」

確かに、滝野の言う通りそれが一番手っ取り早い。去年も手続きなどは松本先生にやってもらった記憶が秋川にあった。

「そうね、帰り際に松もっさんに聞いてみるわ」

恐らく個人でエントリーしろと言われるであろうが、一応ダメ元で秋川は聞いてみる事にした。

「失礼しまーす」

放課後、職員室の扉を2度叩き、秋川は扉を開ける。

「2年3組の秋川です。松本先生はいらっしゃいますか？」

続けてそう言って、秋川は職員室の周りを見回す。しかし、それらしき人影は見当たらなかった。

「いないよー」

中に居た先生からそんな事を言われ、なんだハズレかと、秋川は「分かりましたー」と一つ頭を下げ、職員室を後にしようとする。

「松本先生は今、外出されています。要件があれば私が聞きますよ？」

すると、秋川の背後から男の人の声が聞こえた。

そのままゆっくり振り返ると、身長の高い、眼鏡をかけた若いイケメンの先生がそこに居た。

伝えてくれるのならば都合が良いと、秋川は要件をその先生に話す。

「じゃあ、伝えてくれますかね？秋川がソロコンについて聞きたい事があると言ってたって」

「ソロコン？」

秋川の口から”ソロコン”と言う言葉を聞くと、若い先生は即座に反応した。

確かに聴き慣れない言葉ではある。

「はい、もう吹奏楽部を退部したので、ソロコンテストは個人でエントリーした方がいいのかを教えて欲しくて」

続けて秋川がそう言うと、若い先生は少し考える素振りをした。

「……なるほど、分かりました。でしたら、私が少し調べてみますね」

そして、薄く微笑んで若い先生はそう言う。

「え？、そんな、悪いですよ？」

秋川としてはこの先生がどんな人か知らないが、そこまでやってもらう義理も無いので、遠慮がちに断る。

「いえ、良いですよ。これも私の仕事ですから」

「仕事って……」

何か察した様子で秋川はそう呟く。

ソロコンについての調べ物が仕事。それはつまり……

「……ああ、申し遅れましたね。私、この春から北宇治に赴任となりました、滝と言います。吹奏楽部の顧問も兼任しますので、そう言

う調べものも私の仕事です」

思い出したかのように自己紹介をし、滝と名乗った先生は、淡々とその述べる。

対して秋川は……

「……………わお……………」

思ってもいなかった出会いに、そんな返事しか返せなかった。

悪口

「ソロコンですか。確か秋川君は、去年も出てましたよね」

「え、何で知ってるんですか？」

とりあえず調べてみるから待つと伝えてくれと職員室に招かれ、秋川は滝先生のデスクの隣に座っている。

やっぱり優しそうな先生だなと言うのが、秋川が持つ彼への第一印象だった。

「松本先生から聞いたんです。吹奏楽部の説明を聞いている時に、去年唯一ソロコンに出た生徒が居たと」

「あー、なるほどー。まあ、確かに松もつさんには手続きでお世話になりましたからねー」

滝先生はパソコンでソロコンの事を調べてくれているのか、キーボードをカタカタと打ちながら、そんな事を話す。

「でも、凄いですね。ある意味、ソロコンで賞を取る事はコンクールで金賞を取るより難しいとされてますから」

すると、滝先生は感心した様にそう言う。

「へえー、そんな事も知ってるんですか？こりや、光栄な事ですか」

対して秋川は、ケラケラと笑ってそう返した。

何を隠そう、秋川は去年のソロコンテスト、トランペットで最優秀賞を受賞していた。

ソロコンテストとは、集団で演奏する吹奏楽とは違い、1人のみの演奏での大会だ。そこにあるのは、ピアノの伴奏と、己の実力のみ。

総合力が試されるのが吹奏楽コンクールだとしたら、このソロコンテストは正に自身の実力のみ勝負。周りに自分の技術不足をカバーしてくれる人間は居ない。誤魔化しが全く効かない厳しい条件で最優秀賞を取るの、並大抵の実力では不可能なのだ。

それはつまり秋川忍と言う奏者が、並外れた実力を持っていると言う事に他ならない。

「うーん、そうですね。秋川君の条件だと、学校エントリーで参加できそうです」

そして一通り調べ終わると、滝先生はパソコンを閉じ、薄く微笑んで秋川の方を見やった。

「お、ホントですか?」

秋川としてはダメ元での相談だったのだが、それなら都合がいい。しかし、次に滝先生が発した言葉に、秋川は困惑する事となる。

「ええ、なにせ、秋川君はまだ吹奏楽部に所属してる事になってますから」

「……え?」

意地悪そうに笑って言う滝先生に対し、目を丸くする秋川。

「そんな筈無いですよ? 去年、前の顧問に直接辞めるよう言いましたから」

「その時、退部届は出しましたか?」

滝先生の問いに、秋川は腕を組んで記憶を手繰り寄せる。確かに口では辞める事を伝えたが、退部届は……

「……出してないですね……」

ほぼ辞めたみたいなものだが、正式な手続きはして無い。それはつまり、秋川がまだ吹奏楽部に形式上だけだが所属している証拠だった。

「なら、一度部活を辞めてください。そうしたら個人エントリーでしましょう」

すると、滝先生が淡々とそんな事を言ってきた。個人エントリーとなると、手続きを自分でしなきゃいけないので面倒なのだが……

「えー?、まだ一応吹奏楽部に居るんですから、学校エントリーになりませんか?」

駄々をこねる様に秋川はそう言う。

「なりません。形式上だけでも所属してるなら、部活に顔を出してない人をソロコンに出させる訳にはいきませんから」

しかし、ピシヤリと滝先生にそう言い切られた。

すると秋川は、わざとらしく膨れっ面になる。

優しい先生から、融通の効かない先生へと、秋川の中で滝先生への認識が変わりつつあった。

「秋川君には、二つ選択肢があります。このまま部活を辞めて個人エントリーするか、それともこれから部活に顔を出して、学校エントリーするか」

すると、滝先生がそんな事を提案して来た。秋川は少し考える。

「うーん、あの部活にいても、面白い事なんて一つも無いからなあ……」

「面白く無い？」

一言、秋川がそう言うと、滝先生の眉がピクンと跳ねた。

「先生は、吹奏楽部の演奏をもう聞きました？」

そして、今度は秋川の方から逆に質問される。滝先生はどう言おうかと少し迷った後、「ええ」と、一言だけ返した。

「聞いた感想、どうでしたか？面白さも何も無かったでしょ？」

あまりにもストレートな秋川の一言。まだ赴任したばかりだが、それでも目の前の人物が顧問を担当する部活の悪口を言ったのである。しかし、滝先生はそれに怒るどころか、「そうですね」と冷静に秋川の悪口に対してそう返した。

「面白さ以前に、演奏として成り立ってませんでした」

そして、そんな秋川より更にキツイ言葉を言い放つ。なるほど、顔が眩しい先生ではあるが、相当良い性格をしているらしい。

優しい顔をして、口から出る言葉は毒が強すぎる。

「……おー、言いますねー。ともかく、そう言う事なんであんまりあ

の部活に戻る気がしないんですよー」

そんな滝先生に対し、困った様に笑って秋川はそう言う。それはつまり、遠回しにあの部活の内部が腐っていると云ってるようなものだった。

すると、滝先生は中指で眼鏡を直し、体を秋川の方へと向ける。

「……なら、それが変わったとしたら、どうしますか？」

優しく微笑む顔から、挑戦的な笑みに変わり、滝先生は秋川を見つめる。そこには、自分がああの部活動を変えろと言う、明確な信念があるように秋川は感じた。

「……もちろん、面白かったら戻りますよ？」

そんな滝先生に対して、文字通り面白がる様な表情を浮かべて秋川はそう返す。

この秋川忍と言う男は、単純明快。吹奏楽部に入ったのも面白そうだからと言う理由で、辞めたのも、つまらなくなつたからと言う理由で去つて行つた。

そして、この目の前にいる滝昇という男。口も悪く、イケメンでいけすかない男だが、秋川はこの先生の事を”面白い”と感じていた。だって、普通なら顧問に就任したばかりの部活を批判されたら、誰だって怒る筈である。

しかし、この先生は怒る素振りを見せるどころか、秋川に同調して更にキツイ言葉を言い放つたのだ。

「数日後、恐らく音楽室で合奏をやります。そこに秋川君も来て貰えますか？」

すると、滝先生からそんな提案をされた。

「良いんですか？ ほぼ部外者の様なもんですよ？」

秋川が遠慮がちにそう言うと、滝先生は更に口角を上げる。

「ええ、曲がりなりにも私が顧問をする部活の悪口を言われたんです。見返したくもなるものですよ」

滝先生がそう言い放つと、秋川は大きく目を見開いた。

「ははっ！、良いですねえ！そういう事なら、喜んでお邪魔します
!!」

やはりこの先生は面白い。

秋川の滝先生に対する評価が、この短いやり取りで固まった。

パート練

「なあ、タツキー。俺、放課後部活に顔出すわ」
「ぶふっ!!!」

翌日の昼休み、滝野と一緒に昼を食べていた秋川がそう宣言すると、ストローでコーヒ牛乳を飲んでいた滝野が嘔き出した。

「うおっ、きつたないなー。かかったらどうしてくれんのよー」

自分の机ではなくて助かったが、滝野の惨状を見た秋川が少し顰めっ面になる。

「ゲホっ！ゲホっ!!……悪い。あまりにも突然だったから。……と言うかアツキー、それ本気か？」

まるで正気を疑う様な目で、滝野は秋川を見つめてそう言う。

「?、本気も何も、少し顔出すだけだけけど？」

対して、何が悪いのかと言う雰囲気を出し、秋川はそう返す。すると、滝野は周りに聞こえない様に秋川にの耳に顔を近づけた。

「……今はたださえ部活の雰囲気が悪いんだ。そんな状態でアツキー来たら、益々混乱するだろうが」

「……そうかな?、案外、みんなもう”あの事”なんて忘れてそうだけど?」

周りに聞こえない様耳打ちする滝野に対し、秋川も小声で返す。普通なら辞めた部員が再び部活に顔を出しても何も思われぬのだが、秋川には少々特別な事情があった。

「忘れるもんか。小笠原先輩なんか未だにトラウマでその話題になると落ち込むんだから」

「……俺は、気にしてないんだけどなあ……」

「アツキーが気にして無くても周りが気にするんだよ。……現に、お前が退部してから、俺や後藤以外の吹奏楽部員に話しかけられたか?」

「……吉川」

少し考える素振りをして一言、秋川はそれだけ呟いた。

「あいつは例外。ともかく、今アツキーに来られちゃ非常に不味い」

滝野がそう言うと、秋川は困った様な顔になる。と言うのも、既に滝先生に合奏を見に来るよう誘われたのだ。ここで部活に顔を出さないと言う選択肢は無い。

それに、あの面白い先生がどうやってあの軍団をまとめ上げるのかも、秋川としては気になっていたのだが。

「……どうしてもダメ？」

気になる事がありすぎて諦め切れない。秋川がそう聞くと、滝野は少しバツの悪そうな顔になった。

「……正直、今の吹部はアツキーに負い目を感じてる奴らばっかだ。なんせ、お前が辞めたタイミングが悪すぎたからな」

すると、ありがた迷惑と感じたのか、滝野の言葉に対し秋川は顰めっ面になる。

「それはあの吹部がつまんなかったから辞めたわけで、皆に負い目を感じて貰う必要はないんだけどなあ」

「中にはそう思わない人も居るって訳だ」

そして困った様に笑って滝野はそう返した。正直、滝野もあの事件に対して少しながら秋川に負い目を感じている。

なので、彼は一つの提案をした。

「………どうしてもって言うなら、ペットのパート練にだけなら顔を出しても良いぞ？」

「パート練？今そんな事やってんの？」

部活に所属してた時は、唯の駄弁りの事を指していたその言葉に、秋川は首を傾げる。

「ああ、滝先生が課題曲を出したんだ。その曲のパート練。もつとも、本気でやってる人なんて何人居るのやら」

滝野は苦笑いになって、そう言い捨てる。彼の言い草からして、まだあの時とあまり変わってないのが秋川にも分かった。

「よし、じゃあお邪魔しよっかな？久しぶりに香織先輩達にも挨拶したいし」

しかし、あの先生が来てどんな雰囲気になっているのか、秋川も気になったのでそんな理由付けをして、部活に顔を出す事にした。

北宇治高校吹奏楽部のパート練習と言うのは、名ばかりのものでその実、割り当てられた教室で話し込む雑談会でしか無い。

それはここ、トランペットパートも例外では無く、まともに練習してる人間なんざ1人も居なかった。

1人、この教室から離れて個人練をしている生徒もいるが、そんな事を気にする素振りを見せる人は、誰も居ない。

今日とて、各々会話に花を咲かせる筈だったのだが……

「……なんでアンタが居んのよ？」

開口一番、明るい髪と頭に大きなりボンを着けているのが特徴的な女子生徒が、悪態を吐く様にそう呟く。

「えー？、良いじゃんー。久しぶりにどんなもんか見に来ようと思ってるー」

しかし、秋川はどこ吹く風。軽い口調でそう返す。他の2年生と3年生は心底驚いた様な表情をしている。

いつも通りなのは、何も知らない1年生の吉沢と言う女子生徒と、事情を知っている滝野。そして……

「来るんなら一言言いなさいよ。いきなり来たら皆んなビックリしちゃうじゃない」

先程から秋川に話し掛けている、吉川優子と言う2年の女子生徒だった。

「あれ？、今日の昼休みにタツキーに行くって伝えただけ？」

秋川がそう言うと、吉川は滝野の方をキツと睨め付ける。何故こんな大事な事を言わなかったのかと。対して滝野は、思いつきり目線を逸らしていた。

「で？なんの用？アタシ達、これからパート練習なんだけど？」

そして吉川は秋川の方へ向き直り、そんな事を聞く。

「そのパート練の見学。新しい顧問になったから、どんなもんかと思つて」

「残念ながらあまり変わつて無いわよ？そもそも顧問としてまだ全然顔を出してないんだから、変わる筈ないじゃ無い？」

「おー、確かに」

淡々とそう述べる吉川に、納得した様な表情を浮かべる秋川。どこか小慣れている様にも見えるやり取りだった。

そして、秋川は吉川から目線を外し集まっているトランペットのパートメンバーを見やる。

「メンバーは変わつてないな。タツキーから聞いたつすけど、パートリーダーは香織先輩になったんすね。お久つす」

すると秋川はショートカットに髪を切り揃えた、優しい雰囲気を纏った美人さんに対してそんな事を言う。

「う、うん。久しぶり、秋川君。元気そうで良かったよー」

唐突に秋川に話しかけられ、美人さんは少しぎこちなく挨拶を返す。

「もちろん元気つす。香織先輩も元気してたつすかー？」

「うん、ぼちぼちかな？」

彼女の名は、中世古香織。3年生で、その優しさと可憐な雰囲気漂わせる整った容姿から、「吹奏楽部のマドンナ」と呼ばれる存在だ。

彼女には秋川も一年生の頃からお世話になつていたので、良く懐いていた。

「それで？どうする？久々に吹いてくの？」

すると、吉川がそんな事を聞いて来た。

「いや、今日はペット持つて来てないから、見るだけにするよ。本当は他パートも見て回りたかつたんだけどねー」

「そんな事したら、あすか先輩にぶん殴られるわよ？」

「ははっ、だよねー。見つからない様に大人しくしときますわ」

雰囲気は、悪くない。滝野がトランペットのパート練だけ顔を出して良いと言つたのは、これが理由だ。

今のトランペットメンバーは1年を除いてある程度秋川の事を知っている。なのでギクシヤクする可能性が少ないと踏んでいた。

結果、お通夜みたいな空気は避けられている。

「で、話は変わるんだけど新しく入った一年生って、その子だけ？」
すると、秋川は話題を変えて、唯一この場にいる一年生の吉沢を指して、吉川にそんな事を聞く。

「あともう一人居るわよ。……今日もパート練には来てないけど」

「今日も？」

意味深な言い方をする吉川に対し、秋川は首を傾げる。

「いっつも一人で個人練してんのよ。なーんか」あなた達とは違いますから」
みたいな空気出されて、好きじゃないのよね」

少し顔を顰めて、吐き捨てる様にそう言う吉川。なるほど、この吹奏楽部にも、まともに練習してる人間はほんの少しだが存在するのだ。

「……へえ」

対して秋川は、興味津々と言った表情で返事を返す。

此処では珍しいタイプのその個人練をしてる子に、少なからず興味が湧いたようだ。

名もなき演奏者

時刻は夕方。外の方では野球部の掛け声が響く。校舎内は普通なら楽器を吹く音がひっきりなしと聞こえてくるはずなのだが、ここ北宇治高校ではその音は聞こえない。

「♪、♪、♪、♪、♪」

そんな中、学校の渡り廊下をぐい機嫌に鼻歌を交えながら歩く男子生徒が一人、秋川である。

何故彼がこんなにも機嫌が良いのか。それは、先程のトランペットのパート練で、滝先生の話聞いたからだ。

やっぱり、面白すぎる。

秋川の機嫌が良い理由は、そこに詰まっていた。

聞くところによると、滝先生は顧問になった初日早々、目標を定めたらしい。

『去年の様に緩い部活のままやるか、全国大会を目指すか』

そう部員達に聞き、多数決を取ったと。吉川はあんな言い方されたら誰だって全国大会に手を挙げると愚痴っていたが、秋川はそれを心底面白がっていた。

本気で、頭の先までぬるま湯に浸かったあの連中をどうにかしようとしてるのだと。

そして極め付けが、自分の出した課題曲に対し、『聞けるレベルになつたら再び自分を呼びに來い』と言い放ったそうだ。

恐らく、今の時点で楽器の音が聞こえない事実を、滝先生も把握してるだろう。そして、その結果どうなるかも予測してる。

自分たちで定めた全国大会出場と言う目標。その枷がある限り、逃げ道はない。

しかし、これを理解してる人間は、あの部員の中で片手で数える程しか居ないだろう。今、滝先生はあの連中がどれだけ本気なのか、天秤を掛けている。

逃げ道を潰した上で、当人達を試しているのだ。中々にえげつない事をするものだと、秋川は面白がっていた。

「♪、♪、……ん？」

すると、鼻歌を歌っていた秋川の耳に聞き慣れた音が入ってくる。乾いていて、それでもって力強いその音色。彼が10年以上聞き続けているものだ。

「……吉川が言ってた子かな？……上手いな……」

美しく伸びやか。それでいて力強さを感じるその音色は、紛れもなくトランペットの音だ。演奏している曲は、海兵隊。滝先生が出した課題曲。

「……」

秋川もしばらく聞き入る。彼は生粋のトランペッターだ。上手い演奏を聞けば、闘争心が湧いて来るのは必然だと言えるだろう。

その演奏を聞いて、秋川はある事を思いつく。

「明日は、持ってこないとな……」

ポツリと、そんな独り言を残して、秋川は再び鼻歌を歌いながら歩いて行った。

北宇治高校吹奏楽部、一年。トランペットパート所属の高坂麗奈にとって、屋上でトランペットを吹くのは日課となっていた。

元々高いところから吹くのが好きと言う一面もあるが、それ以上に雑音が聞こえるあの場所で吹きたくないと言う感情の方が強かった。

毎日毎日、一人での練習。吹奏楽部が本当に存在してるのかと疑いたくなるこの北宇治で、彼女の乾いた綺麗な音だけが、今日も校舎に響き渡るのだ。

「……スウー……」

いつもの様にマウスピースを口につけ、姿勢を正し、真っ直ぐ正面を向く。正しい音は、正しい姿勢からだ。

そして、いつもの様に彼女のソロコンサートが始まる。

海兵隊は、難易度で言えば簡単な曲だ。だからこそ、実力が如実に

出て来る。

一音一音が長く、それでいて同じフレーズを繰り返す為、ひとたまた音を外したりリズムが狂えば、すぐに粗さが目立つ。

そんな中で、高坂は完璧に近い形で演奏をこなしている。

まるで私の奏でる音を聞けと言う風な、堂々とした音色。今日も下校時間になるまでその音だけが聞こえる。

が、この日限りは、そうでは無かった。

プアーーーーー

高坂の耳に、別の金管の音が入って来る。

「……誰？、中世古先輩……？」

演奏を止め、その音の主を探るために高坂はキョロキョロと目線を動かす。楽器は、恐らく同じトランペット。綺麗なチューニングB（ベー）の音だった。

あの部員の誰かが、ようやく練習を始めたのだろうか？しかし、それにしても音が綺麗過ぎるし、周りにそれらしき人影も見えない。そんな疑問も束の間、名も姿も見えないそのトランペット演奏者は、高坂の耳に訴えるかの様に演奏を開始した。

「……………嘘でしょ……………」

先程まで高坂が吹いていた、海兵隊の曲。その序盤、たった1フレーズ聞いただけで、彼女は驚愕の声を漏らしていた。

音が、生きている。

そんな感想が真っ先に出て来るほどの、力強い演奏。それでいて、丁寧で繊細な部分も見受けられる。

その演奏は、強弱の付け方が抜群に上手かった。

高坂が今まで聞いて来た中でも、トップを争うほど。ちゃんと曲を理解し、盛り上がる場所は強く、落ち着く場面では繊細に。

なんとも感情の豊かな演奏だ。

1分弱ほどのトランペットパートが通しで流れると、その音はようやく止む。音が完全に聞こえなくなってから数秒、夢から覚める様

に、高坂はハツと我に帰った。

「……後で、先輩達に聞いてみようかな……」

こんな演奏をする先輩がいたとは思わなかった。最近この環境にやさぐれ気味だった高坂はそう呟く。

その表情は、薄く笑っている様にも見えた。

「個人練?、今日はしてないかな?」

下校時間が近付き、高坂が先輩である中世古に早速あの音色について尋ねる。

しかし、アテが外れた様だ。高坂は「そうですか……」と、心底残念そうに肩を落とした。

「えっと、他の人にも聞いてみよっか?」

すると、優しい性格からか、中世古がそんなお節介を焼いて来た。

「いえ、結構です。……あの中には居ないと思うので」

しかし、高坂はピシヤリとそう言い放つ。「そ、そう?」と、中世古も困惑気味になってしまった。

「で、でも、どうしてそんな事を聞いたのかな?」

このままでは会話が終わりそうだったので、中世古は親切心から会話を繋げようと、高坂に対して遠慮がちにそう聞く。

「……いえ、大した事じゃないんです。……今日、個人練をしてたら、もの凄く上手いトランペットの音が聞こえたので……」

「……それって……」

中世古には心当たりがあるのか、何か考え込む様な仕草をする。

「香織せんぱーい!!早く帰りましょー!!」

すると、遠くの方から吉川が大きく手を振って、中世古のことを呼ぶ。タイミングが悪いなど、高坂は心の中で舌打ちをした。

「う、うん!!今行く!!あ、こ、高坂さん?この話は……」

「良いですよ。少なくとも、ここに居ない事は分かりましたから」
直接的な物言いの高坂に、中世古の顔が少し引き攣る。

「あ、あはは。そ、それじゃあね?……偶には、パート練も出てくれると、嬉しいかな?」

「……………考えておきます」

そして、先輩後輩とは思えない様なやりとりをして、中世古は吉川の方へと小走りで向かって行った。

劇薬

「もー!!最っ悪っ!!!何なのよあの先生!!」

トランペットパートに充てられた教室。そこでは吉川が、荒れに荒れていた。無理もない。今日は、北宇治高校吹奏楽部にとって、正にXデーとも呼べる日だったのだ。

滝先生から出された課題曲。その合奏を披露した。いや、最早あれが合奏と呼べるものだったのか。それを聞いた滝先生から出てきた言葉は、『私の時間を無駄にしないで頂きたい』だった。

「ゆ、優子ちゃん、落ち着いて……?」

3年生の副パートリーダーである、笠野沙菜が、悪態を吐く吉川を宥める。

本来は中世古の役割なのだが、生憎彼女は今、パートリーダー会議に出ている。唯一とも呼べる癒しが居ないトランペットパートの雰囲気は、良いものとは呼べなかった。

皆、下を向いて落ち込んでいる。それ程までに滝先生にキツイ言葉を浴びせられた。ぬるま湯に浸かって来た彼女達にとって、それは劇薬を通り越した、毒とも言えるものだった。

「……………アツキーが、居たらな……………」

ポツリと、そんな声が聞こえる。その言葉を発したのは、トランペットパートの2年、黄色いハート型のヘアクリップが特徴の、加部友恵と言う女子生徒だった。

「……………友恵、縁起でも無い事言ってるじゃ無いわよ」

キツとした目線を加部に送り、怨嗟のこもった口調でそう言い放つ吉川。加部のその発言に、皆バツの悪そうな顔をしていた。

(……………アツキーって、誰?)

だが1人、それが誰の事を言ってるのか分からない人物が居た。高坂である。隣に居た一年の吉沢に、周りに聞こえない様、そう耳打ち

をする。

(えっと、2年生の秋川って言う先輩。……去年までトランペットパートに居たんだって)

秋川がパート練に訪れた時は、吉沢も居たので高坂に同じく耳打ちでそう返す。対して(……ふうん)と、何処か合点が行ったかの様な納得した表情になり、高坂は再び元の姿勢に戻った。

「お待たせ、ちよつと皆来てくれる?」

すると、パートリーダー会議から帰って来た中世古が、教室に入るなり、トランペットパートの面々を集める。

「……どうでした?」

今後の方針が決まったのだろう。皆、次に中世古が出す言葉に耳を傾ける。

「……取り敢えず、今日は解散。これからまたパートリーダーで会議して、今後の方針を決めるんだって。……来週の水曜日にはまた合奏があるから、それについても話すと思う」

つまり、何も決まっていないう事だった。

中世古の回答に、パートの面々は困惑し、高坂に至っては不機嫌な表情を隠そうともしていなかった。

「……個人練で吹くのは、構いませんか?」

鉄仮面を貼り付け、淡々と中世古に対し、高坂はそう聞く。

「う、うん。それなら大丈夫だよ?」

「そうですか。では、失礼します」

そして、高坂は自前のトランペットケースを持ち上げ、それだけ言い放つと、足早にその教室から去っていく。

一刻も早くここから立ち去りたいと言う態度にも見えた。

「……何あれ?、相変わらず感じ悪いわね」

そんな光景を見て、いつもの様に悪態を吐く吉川。

雰囲気は、最悪だ。しかし、それはトランペットパートに限った話では無かった。

滝先生がここに赴任して来てから3週間、亀裂は、深くなるばかりだ。

「お、滝先生、また会いましたねー」

「こんにちは、秋川君。先生と会ったらまずは挨拶しましょうね?」
一方こちらは渡り廊下。秋川が担任の先生に提出するプリントを職員室に提出した帰りに歩いていると、部室から戻って来る滝先生とバツタリ出くわしたのだ。

「こんにちはー。あれ?、部活はどうしたんですか?」

この時間はどこの部活も活発に活動している。それは吹奏楽部も例外では無い筈のだが、疑問に思った秋川はそう聞く。

「今は自主練習と言う形でやるそうです。私は強制する指導は好きじゃありませんから」

先程あれだけ部員達にドギツイ言葉を浴びせたのにも関わらず、平然とした顔で滝先生はそう返す。

そんな事情など知るよしもない秋川は、首を傾げた。

「ははっ、呑気ですねー。ここ最近、学校に残る事が多いですけど、楽器の音なんて一つも聴こえて来ないですよー?」

カラカラと笑って、秋川はそんな事を言う。すると、滝先生はその鉄仮面から、少し口角を釣り上げた。

「ええ、ですから少し、薬を与えておきました」

「おー、少しテコを入れたと?」

「はい、刺激たつぷりのやつをです」

相変わらず淡々と述べる滝先生に対し、秋川はクツクツと笑う。やはり面白い人で、見てて飽きない人だ。

「なるほどー、劇薬にならないと良いですけどねー」

「なりませんよ、そのために顧問の私が居ますから」

やはり、あの部活を変える事に自信がある様で、さも当然かの様に滝先生はそう言い放つ。

「それで、秋川君。合奏の予定が決まりましたよ」

続けて、滝先生は約束していた合奏の事に触れた。

「おー、ようやくですかー。それで、いつやるんです?」

秋川にとっては、最近の最大の楽しみである海兵隊の合奏。興味津々、目を光らせて滝先生の言葉を待つ。

「来週の水曜日です。それまでには、聞ける演奏になってますよ」

滝先生は、そう断言する。あの部活勧誘で聞いた演奏が、聞けるレベルにまでなるとはにはわかには信じ難いが、秋川はこの先生なら何かしてくれそうな予感がした。

「それで秋川君、一つ相談なのですが……」

すると、続けて滝先生はそう言い、中指でメガネを整える。何事かと、秋川も首を傾げて滝先生を見やる。

「合奏の当日、あなたも一緒に吹いてみませんか?」

「………はい?」

予想外過ぎる滝先生の提案に、遅れて秋川の反応が返って来た。最初の話では演奏を聞くだけだった筈なのだが……

「この前、中庭で海兵隊のトランペットパート、吹いてましたよね?」

「………ありや、見られちゃったかー」

先日、いつも屋上で吹いている誰かさんに感化されて、中庭でトランペットを吹いた事を秋川は思い出す。

実はあの時、渡り廊下を歩いていた滝先生に、その姿を目撃されていたのだ。

「なぜ、君が私の出した課題曲を吹いているかは分かりませんが、その気があるのなら水曜日の合奏、合流しても良いですよ?あなたはまだ吹奏楽部に所属してますから」

滝先生にそう誘われ、秋川は少し考える。今のままでは乗り気では無いと言うのが、彼の本心だった。

本心も隠すことが下手な秋川は、思った事をそのまま口にする。

「……それは、これからですかね?この校舎に音が戻れば、その気になるかも知れないです」

その言葉は、この北宇治高校吹奏楽部が、本気で全国を目指す度量があるのか？そう問われている様なニュアンスも含まれていた。

秋川の面白がる様な、それでいて何処か挑戦的な笑み。それを見て、滝先生も再び薄く笑った。

「良かった。なら、問題なさそうです」

期待通りの回答に、秋川は更に嬉しそうな表情になる。やはり、この先生は面白い。北宇治高校吹奏楽部は今、この先生の手によって正に変わろうとしていた。

Moon River

「おー、走ってら走ってら」

翌日、秋川が渡り廊下からグラウンドを覗くと、体操着姿に着替えた哀れな吹奏楽部員達が、まるで運動部かのようにグラウンドを走っていた。

走り終えたであろう部員は、そのへろへろの状態で楽器を吹く。特に肺活量の必要なホルンやトロンボーンには地獄の状態で、誰しもが顔を真っ赤にして必死に音を出そうとしている。

あれは、体力を付けるとか肺活量を鍛えるとか、そういう目的では無い。

走れば、息が上がり、呼吸が乱れる。そしてその状態で楽器を吹けば、当然まともに音は出ない。すると、奏者はどうにか音を出そうと工夫をするのだ。散々いじめ抜いた肺を、極力使わない様に音を出すにはどうしたら良いのか？

結果的に、効率の良い吹き方を覚えるわけである。……少々強引な手法ではあるが。

「……なんだ、楽しそうじゃん」

一言、秋川はその光景を見ながら羨む様にそう呟く。去年はあんな練習、するはずも無かった。と言うか、案さえ出なかった筈である。見てみると、負けず嫌いな奴はオーバースピードで息が上がり、楽器を死にそうな顔で吹いている。

吉川が良い例だ。

対して、頭の良い人は自分のペースを考えて走り、息も切れず何食わぬ顔で吹いている。

中世古が良い例だ。

目的通りであるなら前者の方が良いのだが、それぞれの個性も見れて面白い。

「あはっ、タツキーとか倒れちゃってんじゃん」

そんな吹奏楽部とは思えない様な練習風景を、秋川も面白がる様に見つめていた。

「タツキー、昨日は面白い事やってたな」

翌朝、秋川が学校に登校すると、机に突っ伏している滝野に対し、楽しそうな声色を隠さずに話し掛ける。

「……話し掛けるな。全身筋肉痛なんだ」

全力疾走なんて久しぶりだった滝野が、突っ伏したままそう返す。しかし、秋川にはそんな事などどうでも良く、気にする事なく会話を続ける。

「遂に練習始めたのか？、どう？滝先生の練習」

秋川が興味津々にそう聞くと、滝野は突っ伏した状態からゆっくりと上半身を起こした。

「長い。そしてしんどい」

短く一言。だがそこには数え切れない程の恨み節が込められてる様にも思えた。

「おー、そんなにか。なら、そろそろ反発の声も出てくるか？」

いきなり環境が変わったら、反発するものが必ず出て来るだろう。それにあの部活の事だ。そのまま黙って指導を受ける人間は寧ろ少数派な筈だ。

「……それが、そうでも無いんだよ。この前アツキーに話した海兵隊の合奏、つい最近滝先生に聴いてもらったんだよ」

「え？、そうなの？」

滝野の発言に、秋川は驚きの声を上げる。確か合奏は来週の水曜日だった筈だ。

「そこでボロカスに言われたんだよ。『聞くに耐えない』とか、『合奏として成り立って無い』とか」

「ふーん、まあ、全国を目指してるならねえ？」

秋川がそう言うと、滝野は痛い所を突かれたのか、苦虫を噛み潰したような渋い顔になった。

「……そこなんだよ。『これが、全国大会を目指してる演奏なの

か』って、先生自身に言われたんだ。それが起爆剤になったんだろうな。今は何がなんでもあの先生を見返してやろうって、来週水曜日にある合奏に向けて、皆んなムキになってる」

「……ははー、成る程」

滝先生が水曜日にやると言ったのは、この事だったのかと、秋川は納得する。一度合奏させて酷評し、部員達に発破を掛けたのだ。

自分達で決めた全国大会出場と言う目的がある為に、逃げることも出来ない。

既成事実を作り、やるべき事を一つに絞り込ませる事が絶妙に上手い先生なのだろう。中々な性格をしている。

「……まあ、頑張りなさいな」

「はあ、……アッキーは気楽で良いよなー」

秋川が適当に激励の言葉を投げ掛けると、滝野がゲンナリとした顔でそう返して来る。

まだ、判断しないと云うのが、秋川の心中だった。

「………で、今日はロングトーンですかい」

放課後、意図的に家に帰らなかった秋川は、吹奏楽部員に見つからない様に、校舎をぶらぶら歩く。すると、一つの音を真っ直ぐに出し続ける練習、ロングトーンの音が、校舎のあちこちから聴こえ始めた。

この練習は、基礎中の基礎。これが出来なければ、自分の出す音が安定する事はまず無いし、音も掠れたものしか出ない。

「低音はまだマシだけど、壊滅的なのはホルンとトロンボーンだな。2秒もしない内に音が乱れてる」

ある程度聞き分け、そんな評価を下す秋川。改めてこの部活のレベルの低さを実感する。……本当にこの調子で来週の合奏に間に合うのだろうか？そんな感情が湧くほどだ。

「……ペットは、……うん、まあ合格にしとこうかな？」

そして。最後に秋川は、自分の担当楽器パートに、渋い顔でそんな

評価を下した。

「……ああ、ムズムズするっ！」

楽器の音が戻ってきた校舎。それを聴いてると、秋川の心の中で新たな感情が生まれた。

「はい、ではもう一度」

そのまた次の日、ここはトランペットパートの教室。滝先生の掛け声に、またかと、パートの面々はうんざりした様な顔になる。

そして始まるのは、海兵隊の最初のフレーズ。もうこれを、両手では数え切れないくらい程吹いている。

「はいやめ、……加部さん、また音がズレています」

「っ……すみません」

名指しでミスを指摘され、項垂れる加部。そんな彼女に、吉川や中世古から、「ドンマイ」やら「落ち込むことは無いよ」など、励ましの言葉が掛けられる。

「もう何回もこの部分を繰り返しています。そろそろ出来て貰わないと困りますよ?」

しかし、それを踏み潰すかの様な、滝先生の一言。それに、吉川が険しい顔を向けて反論した。

「友恵はちゃんと練習しています!滝先生が他のパートに行っているときもずっと!そんな言い方しないで下さい!」

「ですが、出来て無いものは出来てません。本来ならここは、基礎中の基礎。こんなところで躓かれては困るのですが」

「っ!!それは、友恵は高校から始めた初心者だから……!!」

「吹奏楽を始めてから1年も経って、まだ初心者を名乗るのですか?」

核心を突く滝先生の発言に、言葉を失ってしまう吉川。対して加部は、ポロポロと涙を溢していた。

そして、滝先生は左手首に巻いた腕時計を確認し、「そろそろですね」と呟く。

「他パートのチェックに行つてきます。今のフレーズが完璧に吹けるまで、”絶対”に次のパートには移らないで下さい。では、失礼します」

淡々と言い放ち、楽譜を纏めると滝先生はそのまま教室を後にする。強烈すぎる指導を目の当たりにし、シんと、重い沈黙が教室を支配する。

「なんなのよ!!アイツ!!!」

怒り心頭。ダンツ、と、右足を地面に叩き付ける様に踏み込み、そんな事を叫ぶ吉川。

昨日から始まった、滝先生による各パートの見廻り指導。その厳しさは、誰の想像をも超えていた。

先程の加部に対する、冷徹な物言いが良い例だ。始まってから2日目、すでに何人も部員が泣かされていた。

そんな指導を目の当たりにし、このトランペットパートにも、不穏な空気が流れている。

♪—————

しかし、そんな空気を無視する様に、先程何回も滝先生にやり直させられた部分を、これ見よがしに吹く人物が一人。

その音色は、文句を言う暇があつたら練習でもしたらどうだ?と言わんばかりの、挑発的なものだった。

「……………高坂さん。それは嫌味のつもり?」

「……………何がでしょうか?」

そんな吹き方を感じ取つたのか、吉川が高坂に突っ掛かる。対して高坂は無然と、自分より身長の高い吉川を見下ろしてそう返す。

吉川が嫌味と感じた理由。それは、先程の滝先生による指導で唯一、高坂だけが注意を受けなかつたのである。

なのにも関わらず、一人こうしてそのフレーズを吹いている。挑発

と取られても仕方が無い。

「……今、友恵がアイツに悪口を言われたばかりでしょ!?なのになんでそんな事が出来るのよ!」

「別に、私は私の練習をしてただけですが」

「だから!!友恵の事も少しは考えなさいって言ってるのよ!!」

「なら、練習をして克服すれば良いだけの話じゃないですか?」

「っ!!、こんのっ……!!」

「ストップ!!」

すると、ヒートアップして来た二人を黙らせるかの様に、中世古がそう叫ぶ。正に鶴の一声。我に返った吉川は、一瞬にして大人しくなった。

そして、中世古は困った様に微笑む。

「……とりあえず、休憩しよっか?もうずっと吹きっぱなしだし」

中世古がそう言うと、吉川はシユンと項垂れて「……ハイ」と、聞こえるか聞こえないかぐらいの音量で返事をした。

「高坂さんも、それで良いかな?」

「………ハイ」

高坂も、中世古の問いにそう返す。相変わらずの鉄仮面だが、その声色には、明らかに呆れが含まれている様に思えた。

—————
パァ—————
—————

すると、窓の外からまた別の金管の音が聞こえて来た。トランペットの音だ。今は全員集まったのパート練習。いつもは個人練ばかりしている高坂も、この教室にいる。

では、いったい誰が?

一通りロングトーンを終えると、続けてそのトランペットの音は、とあるメロディを奏で始めた。

「…………アツキーだ…………」

そう呟いたのは、滝野だった。

聞こえてくるメロディは、”ムーンリバー”と言う曲。

元々はおの名女優、オードリー・ヘップバーンのバラードで、その歌を、トランペットに落とし込んだものだった。

「…………綺麗…………」

3年の笠野が、そう呟く。バラードらしく、ゆったりとした曲調。この歌が主題歌になった、”ティファニーで朝食を”と言う映画作品は、ニューヨークの、ゆったりと流れる日常を舞台としたラブロマンスだ。

その雰囲気に取り添う様に、問い掛ける様に秋川のトランペットが響く。

音のズレがなく、完璧なロングトーン。海兵隊の曲もこのロングトーンは重要だが、この教室に聞こえて来る秋川のムーンリバーは、次元が違った。

しかし、それよりも……

「……………」

誰しも、秋川の演奏に黙って耳を傾ける。上手い以上に、人を惹き付ける演奏だった。

まるで歌っているかの様な音色。語り掛ける様な自然な音の強弱。技術の上にある、才能の部類。それを感じさせる、圧倒的なパフォーマンスだ。

そして演奏が始まってから2分。最後のフレーズを吹き終わり、教室に静寂が訪れる。

先程の嫌な空気など、どこかに吹き飛んでいた。

「…………練習、再開しよっか?」

中世古の掛け声と共に、トランペットパートの面々は黙ってマウスピースに口を付ける。

あれほどの演奏を聞いて、皆、黙って居られるはずも無かった。

朝の一幕

週明け、月曜日の朝。再びの合奏まであと3日。春も後半、暖かくて過ごしやすい陽気は、中々目覚めるのに苦労する。それは秋川も例外では無く、未だ寝ぼけ眼の顔を晒して、昇降口で靴を履き替えていた。

「ふあああ……………」

大きなあくびを一つして、上履きを出し、靴を下駄箱に入れる。すると、彼が来るのを待っていたかのように、一人の女子生徒が近づいて来た。

「！、居た！…………来て、秋川」

上履きに履き替えたばかりの秋川にそう声を掛けたのは、吉川だった。偶に廊下ですれ違った時などは軽く喋る事もあるが、今日は待ち構えていたかのようにだった。

「おつすー、吉川。何？」

なんだか雰囲気がおかしい。しかし、それに気付く事なく、秋川は気の抜けた挨拶を返す。

彼は低血圧で朝は弱いため、ブーツとしていて吉川の様子が少し変な事に気付いて無かった。

「良いから、来なさい！」

そして、少々無理矢理に、未だに寝ぼけ気味の秋川の手を目を覚まさせるかの様に引っ張って、吉川は人気のない場所へと移動した。

「何？、吉川。大事な話？」

「そう、大事な話」

無理矢理手を引っ張られ、少し目が覚めて来た秋川がそう聞くと、吉川は頷いてそう返して来た。こう言うところは、周りくどく無くても助かる。

「…………アンタ、この前の金曜、どっかで吹いてた？」

そして、どこか真剣な表情で吉川はそんな確認をして来る。早速本

題に入る様だ。

「金曜?、……あ、屋上で一曲」

まだ完全に起ききつて無い頭を回し、思い出したかの様に秋川はそう言う。その日は、秋川がムーンリバーを屋上で演奏した日だった。

「……やっぱり。あれ、アンタだったのね?」

「おう、どうだった?俺のムーンリバー。良かったべや?」

その時の事を思い出したのか、秋川は期待の眼差しで吉川に感想を求める。

「今はそんな事いいの。と言うか、なんであの時演奏したのよ?」

しかし、吉川にそんな事を言われ、秋川はシユンと落ち込む。どうやら期待した答えでは無かった様だ。

「最近、校舎内で楽器の音が増えたから、俺も吹きたくなつたんだよ。なんだよ? いけなかったか?」

そして、拗ねる様に秋川はそう吐き捨てた。自身の演奏に感想を貰えなかった事に、ご不満の様だ。

「そんな事で拗ねないの。でも、そっか……」

秋川の口からその事実を確認した吉川は、考え込む様に腕を組む。何やら言いにくそうにしている雰囲気だ。

「……なんだよ? 用件があるんじゃないの?」

いつもなら思った事がそのまま口に出る彼女が言い淀む姿に、秋川も違和感を感じてそんな事を聞く。

そして、しばらく経った後、意を決した様に吉川は口を開いた。

「アンタ、吹奏楽部に戻る気?」

真つ直ぐ、秋川の目を見据えて、吉川はそんな事を聞いてくる。冗談でも冷やかしても無い事は、秋川にも分かった。

気の抜けた顔から一転、彼も吉川を真剣に見つめ返す。

「どうかな?、滝先生が言うにはまだ籍はあるらしいけど、俺自身、ちよつと面白そうだなって思ってるかな?」

「面白そう?」

秋川の口から出た予想外の言葉に、吉川は疑問の声を上げる。

「うん、去年よりもずっと面白そうな部活になってるなって。ここ最近、雰囲気が変わって来てるから」

そう言っつて、秋川は楽しそうに笑う。裏も何も無い、屈託の無い表情だった。それを見て、吉川も困った様にクスツと笑った。

「アンタのその性格、相変わらずなようね。じゃあ何？近いうち戻つて来んの？」

「……いや、それは水曜の合奏を聞いてから決めるよ」

真剣な表情に戻った秋川がそう言っつと、吉川が少し目を見開く。

「……なんでアンタが合奏の事知つてんのよ？」

「タツキーと滝先生本人に聞いた」

「……あんのバカ……」

相変わらず口の軽い滝野に対し、恨み節を呟く吉川。身内の恥をどうしてこうもベラベラ喋るのか。

「……まあ良いわ。でもそれつつまり、アタシ達を試すつて事？」

すると、真剣な表情で吉川はそう聞く。

言い方は悪いが、概ね合っている。

今、彼女達は試されているのだ。それは滝先生に、部活に戻ろうとしている秋川に。

そして、ぬるま湯に浸かり続けて来た自分自身に。

「試すじゃ無いけど、そこで”面白いな”つて感じたら、戻るよ」

秋川もそれが分かっているのか、何処か挑戦的な笑みを浮かべて、そう言い放った。

「……なるほど、上等じゃない。……本番で去年の比じゃないところ、見せてやるわよ」

喧嘩を売られた吉川は、少し不機嫌な表情ながらもそう返す。しかし、不貞腐れている訳ではなく、その中には闘争心がある様に秋川には見えた。

「お、良いねえー、その心意気。期待しておるぞー？」

「上から言ってるんじゃないわよ!」

冗談めいて秋川がそう言うのと、吉川のツツコミと共に秋川のケツに蹴りが入る。

なんともハードなツツコミだ。

「痛ってー!……相変わらず容赦無いじゃん」

「アンタが舐めた口きくからよ」

吉川は悪びれる様子も無く、「ふんっ」と鼻を鳴らし、不遜な態度でそう言い放った。

「ははっ、そりゃ失敬。……でも、期待してんのは本当だぞ?」

そして、そんな吉川に対し、秋川は真っ直ぐ彼女を見据えてそう返した。

「……うるさい、バーク」

「ありや?、褒められて照れてる?」

「そう言うところよ!馬鹿!!」

「痛って!!」

口の減らない秋川に対して、再び吉川のタイキックが炸裂する。

……中々彼も勉強しないタイプな様だ。

「じゃあ、アタシ行くから。明後日、ちゃんと聴きに來なさいよ?」

「もちろん」

釘を刺す様に吉川がそう言うのと、ケツをさすりながら秋川がそう返す。そして、恥ずかしさからか、目も合わせず秋川の横を抜けて、足早にその場を去ろうとする。

「……あー、それともう一つ」

すると、何かを思い出したかの様に吉川はそう呟き、一瞬足を止める。

「……あの時の演奏、良かったわよ」

そして、振り返らずにポツリと、秋川に向かってそれだけ言い放った。

「……え？」

いきなりのその褒め言葉を秋川は飲み込めず、もう一度聞き返してしまう。

「っ!!じゃあ!もう行くから!!!」

しかしそれに返す事はなく、吉川はさつきより早いスピードでその場を去って行った。

その光景を、秋川はポカンと見つめている。

「……何だよ、急に可愛くなっちゃって」

不意を突かれた形になった秋川の頬は、少し赤くなっていた。

自由人

遂に再合奏当日。あのボロクソに言われた演奏から1週間。パート練ばかりやっていた面々が、一樣に音楽室へと集まっている。皆、気合が入っている。もともと、その殆どが滝先生への個人的な恨みの様なものなのだが。

「絶対文句言わせない」

「なんか言われたらマツピ投げるし」

所々、そんな文句とも言える声が聞こえて来る。しかし、それは腐った感情から来る愚痴ではない。

絶対にあの先生を見返してやろう。

そんな、明確なハングリー精神から来る、自信とも呼べるものだった。

各々、来たるべき合奏に備え、準備をする。マウスピースの感触を確かめる者、自身のパートの指運を何度も復習する者、音が綺麗に出る様に、管の中に息を吹きかける者。

そんな事前準備は、1週間前は全くして来なかったのに、今は全ての部員が最高のパフォーマンスを発揮する為にその準備をしている。

「約束の日になりました。この1週間の成果が楽しみですよ」

すると、滝先生が教壇に近づき、部員が揃っているのを見渡すと、そんな事を言う。

「演奏の前に、観客を用意しました。音楽と言うのは、聴き手がいなくて成り立つものですよ。彼には客観的に演奏を見てもらい、評価をしてもらいましょう」

『観客？』

『先生とかじゃない？』

滝先生の提案に、小声でそんな事を話す声が聞こえる。

「では、入って来て下さい」

滝先生がそう声をかけると同時に、音楽室の扉が開かれた。

「やほー、皆元氣ー?」

何処か気の抜けた声を出して入って来たその男子生徒に、過半数の部員が目を見開く。

『秋川!?!』

『アツキー!?!』

思わぬ人物の登場にザワつきが大きくなる。目を見開く者、目を逸らす者、呆然と秋川を見る者、反応は様々だ。

唯一、一年生だけはその空気に困惑していた。

「彼、秋川忍君には、あなた達の演奏を評価して貰います。彼は去年のソロコンの最優秀賞受賞者、不足は無いでしょう」

滝先生がそう言うと、今度は一年生達が驚きの声を上げた。

『嘘?!』

『なんでそんな人が北宇治に居るのよ?!』

ヒソヒソと、そんな声上がる。初心者には首を傾げるものばかりだが、経験者である一年生は、皆驚きのリアクションを取っていた。

すると、パンパンと、滝先生が2回手を叩いた。

「はい、そこまで。皆さん色々聞きたい事はあると思いますが、まずは合奏です」

その掛け声で部員達は正気に戻ったのか、自らの担当する楽器に集中する。

「良いですね?……では、鳥塚さん、お願いします」

滝先生がそう声を掛けると、チューニングが始まる。長い、B♭の音。滝先生に声をかけられた3年のクラリネット担当、鳥塚ヒロネがその音を出すと、着いてくる様に別の楽器も同じ音を出す。

「……ああ、良いなあ……」

小声でしみじみと、秋川はそう呟く。久々にこの音を聴いた気がする。この音を聞くと、程よい緊張感と共に演奏が近づいている事を実感する。

これから自分は主役になるんだと。これから自分の音で観客を魅了するのだと。そんな高揚感が身を包むのだ。

そして、数秒の後、その音は途切れた。

「……よろしいですか？……では、始めましょう」

その声と共に、滝先生の左手が上がる。遂に曲が始まる。そして、1、2と手でリズムを取り……

「………さん」

その掛け声と共に、合奏が始まった。

………そして、最後のフレーズ。滝先生が右手を上げると同時に、曲が終わる。

数秒、沈黙が流れる。次に滝先生が発する言葉に集中してる者ばかりだ。そして滝先生が全員居るか確認する様に、左右に目を配らせる
と……

「良いでしょう」

その言葉に、部員達が一斉に目を見開く。

「細かいところを言えば、まだまだ気になるところはありますが、何よりも皆さん、今……」

滝先生がそこで区切ると、ポンと、1回手を叩いた。

「合奏”してましたよ”」

その言葉と共に、各々喜びのリアクションが出て来る。ガッツポーズをする者。少し目元が潤んでいる者。反応はそれぞれだ。

「では、この合奏を聴いてくれた観客にも、感想を聞いてみましょう」

すると、滝先生は顔を秋川の方へ向け、意地悪そうな表情でそう聞いて来る。部員の面々も、一斉に秋川の方へ視線を移した。

”面白くない”と言った事を、まだ根に持っているのだろうか？だとしたら、相当執念深い人だ。

やっぱり、この人は……

「そうですね、”面白い”演奏でした」

この吹奏楽部と同じく、そんな言葉がピッタリだ。秋川がそう言い放つと、皆んな微妙そうな顔になる。

唯一、トランペットパートの面々だけが、満足そうな顔をしていた。

「……決めました。俺、これから部活に出ようと思います」

そして、同じく満足そうな顔と共に、秋川がそう宣言する。

「別に、構いませんよ？秋川君はまだ吹奏楽部のメンバーですし、練習や大会に出ても問題ありません」

滝先生も賛成な様だ。……まあ、この人にとっては分かりきっていた事なのかも知れないが。

「ただ」

すると、それだけでは済まさないぞと言う風に、滝先生は一言付け加える。

「無断で部活を休んだ期間が、秋川君には多過ぎます。一言、皆に言うべき事があるのでは？」

………本当にこの人は先生なのだろうか？悪魔か何かから転職して来たのかと思うほどのネチっこさだった。

しかし、秋川にとって今はそんな事どうでも良い。座ってた席から立ち、ペコリと深く頭を下げる。

「無断で部活を休んですみませんでした。これからは毎日真摯に部活動に励みますので、よろしくお願いします」

これは、北宇治高校吹奏楽部一の自由人と呼ばれた、1人のトランペット吹きのお話。

本気

「秋川、あきかわしのぶです。あ、因みに秋川の川は“がわ”じゃ無くて“かわ”ね。アツキーって呼ぶ人も居るから、それで呼んでも良いよー」

そんな気の抜けた自己紹介を終え、秋川は持って来ていた細長のケースを開ける。

中から取り出したのは、自前のトランプペットだ。

「担当はトランプペット。と言うわけで自己紹介にここで一曲……」

「コラコラ、隙あらば目立とうとしないの」

すると、秋川がマウスピースに口を付けて演奏しようとしたところに、とある女子生徒からツツコミが入った。

「えー？良いじゃんー、あすか先輩ー」

ブーブーと、わざとらしく膨れ面になる秋川。この黒髪を腰まで伸ばし、メガネを掛けた女性の名は田中あすか。低音のユーフォニアム担当で、この吹奏楽部の副部長だ。

「ダーメ。特に君は問題児だからねえー。……それに、何で戻る事をアタシや晴香に言わなかったのかなー？」

そして、田中はゆらりと立ち上がって薄らと笑みを浮かべて秋川に近づく。しかし目は笑っておらず、こんなにも怖い笑顔は見た事がない。

「いやー、何せ急に戻りたくなかったものでして、それなら先に来ちゃって事後報告で良いかと……」

「良いわけないでしょーがー!」

「あでで!!」

反省の色を見せない秋川に対し、田中はヘッドロックを喰らわす。しかし、それはじゃれ合いみたいなので、何処かほのぼのとした雰囲気だった。

そして秋川が苦しそうに田中の腕を2、3度タップすると、ようやく腕を離れた。

「ふうー……とりあえず、今ってトランペットパートって空いてるんですか？」

部活に復帰したは良いがトランペットを吹けないとなると秋川も困る。田中に向かってそう聞くと、彼女は少し考える素振りをした。

「うーん、編成上は問題無い筈だけど、晴香はどう？」

そして、田中は顔をバリトンサクスの持っている少女に向かってそう尋ねる。

「……だ、大丈夫だと思う。一応、全パート埋まってるし」

少々困惑気味にそう返したのは、小笠原晴香と言う少女。ふたつ結びのおさげの髪型に、少し気弱そうな雰囲気纏った、吹奏楽部の部長だ。

「香織は？」

「こっちは大丈夫だよ？秋川君の实力は折り紙付きだし」

そして、トランペットのパートリーダーである中世古にも、了承を得る。

「よしーじゃあOK！、これからこの部活の為に干からびるまで奉仕なさいな！」

問題無しと確認すると、田中はそう言ってバシッと秋川の背中を叩く。その勢いのまま、秋川はスタスタとトランペットパートの前に歩いて行った。

すると、こちらを見てニヤニヤしているある少女が秋川の目に入った。

「……………何だよ？」

「別つっぴー？、なに？アタシ達の演奏、そんなに面白かったの？」
ニヤついた顔で、少し小馬鹿にした様にそう言ったのは、吉川だった。

「もちろん。まあ、技術で言ったら全然だけどねー」

「相変わらず一言多いのよ、バカ」

そして、小突く様に吉川は触ったまま秋川の太腿を軽くパンチする。それは、「おかえり」と、暗に言っている様にも秋川には感じた。

「はい、では秋川君の自己紹介も終わった事ですし、小笠原さん、これを皆さんに配っていただけますか？」

秋川が席に着いたのを確認すると、そう言っただけで滝先生はプリントの束を部長の小笠原に渡す。そして、そのプリントが全員に渡った事を確認すると、

「それでは皆さん、お待ちせしました。サンフェスに向けての練習メニューです」

そう宣言し、皆、配られたプリントを注視する。そこにはサンフェスまでの予定がビッシリと詰め込まれていた。

平日はおろか、土曜日曜も練習メニューで埋め尽くされている。

「さて、残された日数はそう多くはありません」

そしてポンと、1回手を叩き、滝先生は部員の注目を集めさせる。

「しかし皆さんが若さにかまけて、ドブに捨ててる時間をかき集めればこのくらいの練習量は余裕でしょう」

何食わぬ顔で、えげつない事を言う滝先生。「やっぱムカつく」と、小声で呟く声が聞こえた。

「サンフェスは楽しいお祭りですが、コンクール以外で、有力校が一堂に集まる大変貴重な場でもあります」

続けて、滝先生はサンフェスの説明をする。つまりそれは、有力校を見に来た観客が大勢いると言う事だ。

「この場を利用して、今年の北宇治はひと味違うと思わせるのです」最後に滝先生がそう宣言すると、秋川の心臓が高鳴る。彼が言ってるのは、伏兵である自分達があつと驚く様な演奏を見せて、”北宇治はダメだ”という認識を改めさせてやろうと言うものだった。

こんなに面白い事はない。

「でも、今からじゃ……」

そんな弱気な発言をしたのは、部長の小笠原だった。確かにサンフェスまで時間は無い。そう思ってもおかしく無い。

「出来ないと思いますか？」

滝先生の問い掛けに、小笠原は俯く。

「そうですね。秋川君はどうですか？」

すると、復帰したばかりの秋川に向かって、滝先生は聞いて来た。「うーん、出来るかどうかより……」

秋川は滝先生の言う通りになった時のことを想像する。周りから、『今年の北宇治は違うじゃん』『何だよ、良い演奏するじゃん』などの、称賛の声が浴びせられる。そんな演奏を、もし自分達が出来たとしたら……

「そうだったら、最高に面白くなって思います」

屈託のない笑顔で、秋川はそう言い放つ。やはり彼の中にあるのはこの感情。面白いか、面白くないか。

秋川のその一言は、弱気な音楽室の空気を一変させた。誰しもがその光景を想像したのだろう。

武者震いをしてる者までいる。

そして、滝先生もその言葉に対し、挑戦的な笑みを浮かべた。

「彼の言う通りです。我々は挑戦者。出来るか出来ないかと言うよりやるかやらないかです。それに、私は出来ると思っています」

すると真っ直ぐ、どこか遠くを見つめる様にして、滝先生はそう言う。彼の見つめる先は何なのか？そしてその答えは、直ぐに彼の口から出る事となる。

「何故なら私達は、全国を目指しているのですから」

この中で一番本気なのは、紛れもなく滝先生なのだ。

河川敷ステージ

あの吹奏楽部が、変わりつつある。

それは、今年入学した一年である、高坂麗奈も感じ取っていた。まず、意識が変わった。”どうせ頑張っても”から、”頑張ればもしかして”へと。少なくとも、やる前から諦めている人間は居なくなっただと思う。

あの先生、滝先生のおかげだ。

実は高坂がこの高校に入学した理由は、滝先生が今春にこの学校に赴任すると知っていたからであった。

彼の指導を受けたいから。

そんな理由で、弱小校と呼ばれる北宇治高校に入学した。弱小校とは聞いていたが、予想以上のレベルの低さに、高坂はなるべく表には出さない様になっていたが、少々疲弊していた。

そんな時、”あの音”を聴いた。

高坂麗奈は、生粋のトランペッターだ。負けず嫌い、目立ちたがり屋、気の太さ。花形であるこの楽器を演奏するにあたっての性格は、バツチリと言える。

自分が一番。自分は”特別”。そんな事に固執する様な少女だった。

「……あれ?、秋川先輩?」

部活が終わると、電車通学の高坂は京阪の宇治駅で降り、そのまま宇治橋を渡る。今日も西日が照りつける中、その橋を渡っていると、遠目に河川敷で突っ立っている秋川の姿が見えた。

今日、部活動に復帰したと言う、2年の先輩だ。

秋川はどうしてか部員から人気の様で、トランペットパートはおろか、他パートの先輩達からも「おかえり」やら「何してたの?」やら色んな人たちに声を掛けられていた。

そして高坂も、そんな秋川に少しながら興味を持っていた。

その理由は、やはりソロコンの最優秀賞受賞者と言う点が大きいだろう。

偶に聴こえて来ていたあの上手すぎるトランペットの演奏が、彼のものだとは分かってはいたが、そんな巨大な実績を持つてゐるなんて高坂も思つていなかった。

ソロコンの最優秀賞受賞なんて高すぎる壁。そんな壁を乗り越えた人が、どういう人なのか。

それとは別に、彼には何か別のものを持つてゐる気がした。

しばらく河川敷で立つていた秋川を見ると、彼はおもむろに持つていたトランペットケースを開け、マウスピースの確認を始める。

そして、そのままチューニング。彼のトランペットは、金色と言うよりは白金に近い色で、形は高坂と同じ、スタンダードなB♭管トランペットだ。

姿勢を直し、目線を真っ直ぐに。正しい音は、正しい姿勢からだ。

そして、トランペット特有の切り裂く様な甲高い音が、宇治川に響き渡る。

♪—————

やはり綺麗だ。チューニングの音を出したただけで実力が分かるなんて嘘かと思うかもしれないが、彼のロングトーンは、正に別格。

ブレもムラも一切無い、お手本中のお手本の様な美しい音だった。

そして、チューニングを終えて一拍置くと、そのまま演奏に入った。

「……………ふう……………」

演奏を終え、満足げに一息つく秋川。彼はこの河川敷で、よくトランペットを吹く。川なので大きい音を出しても近所迷惑にはならないし、ランニングをするおじさんや、犬の散歩をしているお婆さんがオーディエンスとして居る。

部屋の中で籠つて吹くのも悪くは無いが、秋川はこうして外で吹く方が好きだった。

”音楽は、聴き手がいてこそ”

それが、秋川忍の信念。

なので人の営みがある外で吹く事は、秋川にとって自然な事でもあった。

彼は、その河川敷に来る全ての人たちを振り向かせるつもりで、トランペットを吹く。

負けず嫌いで、目立ちたがり屋で、河川敷でも平気で吹けるくらいに気が図太い。

今日の客は、自分の演奏を聴いてどう思ったのだろうか？

そんな事を考えながら、秋川は演奏後の手入れをする。

「……もう終わりですか？」

すると、秋川の背後からそんな声を掛けられた。偶にお爺さんやお婆さんから「上手いねー」と声を掛けられる事はあったが、それにしても声が若いなど秋川は感じ、ゆっくり声の主の方へ振り向く。

「おー、……君は……」

そこには宇治橋から秋川の元まで来た、高坂の姿があった。

「今日はバタバタしててあんま話せなかったねー。君、いつも屋上で海兵隊吹いてた子でしょ？」

屋上で毎日個人練をしていた事を当てられて、少し驚いた表情になる高坂。

「はい、一年の高坂です。聴いてたんですか？」

「うん、上手い子が居るなーって。今の2年、3年じゃあそこまで吹ける人は居ないから、多分新生生だろうなって思ったんだよねー」

ケラケラと笑って、そう返す秋川。言ってる事は中々に失礼だが、事実だったので仕方がない。

「高坂さん、だっけ？今俺、ここで一曲吹いてたんだけど、聴いてた？」

すると、続けて秋川が高坂にそんな事を聞く。

「ええ、今日は”ムーンライト・セレナーデ”でしたね」

「お、良く知ってんじゃないん！で、どうだった？」

この様に演奏した後に感想を聞くのは、彼のクセでもあった。”音

楽は聴き手がいてこそ”と言う考えが、ここにも出ているのだ。

「……上手かったです」

素直に、しかし何処か言いにくそうに高坂は一言、それだけ言う。彼女は生粋のトランペッター。もちろんプライドも高い。自分より上手い相手を褒めるのは、なんだか負けた気がするのだ。

しかし、それを補って秋川には“上手い”と言わせるほどの演奏技術があった。

「おー、そりや嬉しいですねー」

いつもの様にのんびりとした声で、楽器の手入れをしながら嬉しそうにそう返す秋川。彼の手元を見てみると、丁寧に優しくトランペットに傷や埃が無いか確かめている。

それだけでも、彼がその楽器を大切にしている事が分かった。

「……恋人にするみたいだな手付きですね」

そんな秋川を見て、ポツリとそんな事を呟く高坂。対して秋川は突然の高坂の発言に目を丸くした。

「……それって、トランペットが彼女って事？」

そして、嬉しそうに微笑んでそう返す秋川。

「はい、……嫌ですか？」

「ううん、寧ろ光栄だねえ」

言葉通り誇らしげに、大きく胸を張って秋川はそう言う。トランペットが彼女。中々良いでは無いか。

「名前を付けるとしたら、”みゆき”かな？」

「へえー、何ですか？」

「好きな歌手の名前」

ほぼ初対面とは思えない様な、自然なやり取り。秋川が人気な理由は、ここにあった。いつでも自然体に、嘘偽りなく話す。言葉の節々から本心と分かる発言。それが相手にも伝わり、話しているとなんとも心地が良いのだ。

「……よし、じゃあ、俺は帰ろっかな？、高坂さんはここで吹いてくの？」

楽器の手入れを終えた秋川がトランペットをケースに仕舞うと、立

ち上がって高坂に対しそう聞く。

「いえ、私もそろそろ帰ろうかと思えます」

「そっか、じゃあ。またね」

そして、それだけ言うと高坂の横を通り過ぎて、秋川は河川敷に停めていた自転車にまたがり、颯爽とその場を後にする。

「……不思議な人だな……」

河川敷に風が吹く中、ポツリと、高坂はそんな事を呟いた。

馬子にも衣装

サンライズフェスティバル。通称、サンフェスは、ここ一帯の吹奏楽部が一同に集まって演奏する、マーチングバンドのイベントだ。

吹奏楽と言っても、ただホールで楽器を吹くだけでは無い。

マーチングと言って、音楽に合わせて行進したり、フォーメーションを組んで演奏をする体系の物も存在する。

コンクールの様な演奏は”聴かせる”側面が強いが、このマーチングは、”魅せる”側面が強いのだ。

「はーい、来週の本番に向けて衣装配るから、順番に取りに来てねー」

そして音楽室では、その本番に着る衣装が配られようとしていた。衣装が入っているであろう段ボールを持ちながら、部長の小笠原が皆に声を掛ける。

「まずは、パークスから、堺さん」

そして、衣装が次々に配られて行く。

北宇治のマーチング衣装は、青と白を基調としたもので、女子はスカート。男子はパンツタイプのものとなっていた。

「はーい、聞いてー！」

全員に衣装が配り終わると、小笠原が注目を集めさせる。すると、隣に居た副部長の田中が説明を始めた。

「今日の練習はー、グラウンドが空いているのでー、外でやりまーす！」

身振り手振りと、忙しい仕草をしてそう宣言する田中。外と言う事は、恐らく行進の練習でもするのだろうか。

「試着終わったらジャージに着替えて、グラウンド集合で」

「はーい！」

田中がそう説明すると、部員から返事が返って来る。

「じゃあ音楽室女子、男子は準備室で着替えて下さい」

そして田中に続く様に小笠原がそう言うのと、衣装を持って男子は音楽室から出て行った。

「おー、やっぱカッコええなー」

準備室。男子に割り当てられた教室では、衣装に着替えた秋川がしみじみと滝野を見てそう漏らす。

「だろ？、ウチの衣装はセンスが良いって他校でも評判だからな。サンフェスじゃあ他校の女子を釘付けよ」

調子に乗った滝野が、鼻高々にそんなビッグマウスを披露する。

「まあ、タツキーは似合ってるって言うより、着せられているって言った方が正しいかもねー」

「なんだと!?!」

しかしそんな鼻をへし折るかの様に、秋川が心無い言葉を浴びせる。滝野は雷に打たれた様な顔になっていた。

「似合ってるってのは、この子みたいな事を指すんだよー」

すると秋川は一人の男子生徒の袖を引っ張り、滝野に見せつける様に目の前に立たせる。

「君は一年なのにタツパがあるねー。……えっと、名前は？」

「あ、塚本です。トロンボーン」

秋川が連れて来たのは、一年のトロンボーン担当の塚本と言う男子生徒だった。彼は180センチに近い高身長と、スラっとした細身のスタイルなので、この衣装がよく映えている。

「それに、衣装で女の子を釣ろうなんて、だからタツキーは彼女ができんのだよ」

「うわーん!!ナツクル先輩!!アツキーがいじめるー!!!」

秋川にボコボコに言われた滝野は、ナツクル先輩と皆から呼ばれている、3年のパークス担当の田邊名来に泣きつく。

対して泣きつかれた田邊は、心底鬱陶しそうに苦笑いしていた。

「まあ、そう落ち込むなタツキー。これから変われば良いじゃないか?」

「……グスつ、それって、今の俺がダメダメって事じゃないですかあ

……」

妙に勘の良い滝野に、露骨に目線を逸らす田邊。まあ、今の滝野がモテるとは、誰も思っていないだろう。

「まあ、その衣装に負けなくらいの演奏したら、女の子も振り向くんじゃない?」

「……そんなん出来んの、アッキーだけだっつーの」

秋川の提案に、不貞腐れた様な態度で滝野はそう返した。

「うわー、これって、焼ける?」

グラウンドに集合すると、何処からかそんな恨み節が聞こえて来る。

まだ季節は5月の初めであるが、太陽さんはあまり親切では無い様だ。

そして、パンパンと、注目を集めさせる様に田中が2回、手を叩く。

「はい、良いですかー?、今日はまず、楽器を持たずに練習をします。初心者的一年はステップ練習をして下さい。他は全員行進の練習から始めます。足が揃ってないとある意味演奏のミスより目立つので、気合を入れて行く様に」

「はい!」

行進は一步62・5センチ。これは決められている。演奏をしながらの行進なので、下を見て歩幅を確認する事は出来ない。

つまり、この62・5センチの歩幅の間隔を、まずは体に叩き込まなければならぬのだ。

少しでも歩幅がズレると、かなり悪目立ちする。

「あ、吉川ズレてるー」

「わざわざ言わんで良い!!!」

秋川が吉川をおちよくると、すぐさま吉川のツツコミが入る。各々

の歩幅の感覚のズレ。これをまずは矯正しないと、マーチングとして成り立たないのだ。

「はいそこ、ライン揃ってないよー!」

「こら、ちゃんと前見て!」

その後も指導係の小笠原と田中から、注意の声がグラウンドに響く。楽器を吹くまでには、まだまだ時間が掛かりそうだ。

「はい、5分休憩ねー!」

しばらくすると、田中の掛け声と共に雀の涙ほどの休憩が取られる。

強い日差しの中、運動不足気味の吹奏楽部員の面々は、少々グロツキーとなっていた。

「あつっー。こりや焼けるなー」

そんな事を言いながらジャージの襟をパタパタと仰ぎ、中に風を送る秋川。

「まあ、こんだけ外で行進の練習すんの、初めてだしな。運動部かつーの」

対して滝野は、タオルで汗を拭きながら秋川に対しそう返した。

「タツキー、日焼け止め持って来た?」

「来ると思うか?」

「悪い、聞かなかったことにしてくれ」

そもそも男子なのであまり日焼けを気にすることもないが、この日差しでは明日に影響しそうだった。

「はい、これ」

すると2人の後ろから声を掛けられ、秋川と滝野は同時に振り向く。

「私の日焼け止め、使って良いよ?」

そこには、自前の日焼け止めを差し出す中世古の姿があった。

「おー、香織先輩。いいんすか?」

「うん、2人とも、持って来て無いんでしょ?」

そう言つて、中世古は薄く微笑む。流石マドンナらしく、その姿に滝野はボーッと見惚れていた。

「流石、エンジェルって言われるだけの事はありますねー」

「もー、それ言ってるの、優子ちゃんだけでしょー？」

対して秋川は、自然体に中世古と会話をしている。少量、クリームを手のひらに付けると、秋川は容器を滝野に差し出した。

「ほら、タッキー」

「え？、あ、いや!!、自分はいいつす!!日焼けには強い方なんで!!」

秋川に声を掛けられて正気に戻った滝野は、背筋をピンと伸ばして軍隊の様な返事をする。

その姿に、中世古も困つように笑った。

「そ、そう？なら良かった」

ガチガチな滝野に対して困惑気味にそう言うと、中世古は秋川から日焼け止めを受け取る。

「どう？、練習。感覚掴めて来たかな？」

すると、中世古がそんな事を聞いて来た。

「そうですねー、去年は殆ど練習しなかったんで、何かと苦労してる感じですかね？……はあ……愛しの”みゆき”が恋しいです」

「みゆきっ！」

突然女性の下の名前である言葉が秋川から出て、中世古は首を傾げる。

「俺のトランペットの名前です。この前、高坂さんに『トランペットを彼女の様に扱ってる』って言われたんですよねー。なんでテキトーに名前付けとききました」

「あははっ、良いねーそれ、私も付けてみよっかな？」

「お？、そうですねー。……”ユウコ”とかどうですか？吉川が泣いて喜びますよっ！」

「もー、先輩をおちよくらないの」

意地悪そうな笑顔で秋川が吉川の下の名前を提案すると、困った様に笑って中世古はそう返す。

「香織せんぱーい！ちよつと来て下さいよー!!」

すると、遠くでその吉川が中世古に対して大きい声で呼んでいるのが確認できた。

「あ、じゃあ、私もう行くね?」

「はい。あ、日焼け止め、ありがとうございます」

去り際、秋川が日焼け止めを貸してくれたことに対し、礼を言う。

「うん、いいよ。後半の練習も頑張ってるね」

「先輩もー」

そんなやり取りをすると、一つウインクをして、中世古は吉川の前へと向かって行った。

「……………タツキー。何で空なんか仰いでんの?」

「天使に逢えたことに祝福を……………」

秋川の隣では、手を合わせて空を拝んでいる滝野が、よく分からない事を呟いていた。

緊張

吹奏楽部のイベント当日は、とてつもなく朝が早い。まず楽器を運ぶために学校に来なきゃいけない。

フルートやトランペットなど、小さな楽器は担当だけで持ち運べるが、大きいホルンやパーカスになって来ると、話が違って来る。

「ほらー、タツキー・ファイター!!」

「いっぱーっ!!!」

何処ぞのCMで見る様な掛け声をかけて、滝野が自身の背丈の半分はあろうパーカスの楽器を、トラックの荷台に積むために持ち上げる。

早朝から元気な事である。

それを秋川が受け取ると、効率良く、楽器を傷つけない様に考えた配置で置いていく。

こう言う時の力仕事は、男子の宿命と言ったところだろう。

「はい、チューバお願いしますー」

すると、チューバを肩に担いだ塚本が、秋川の元へとやって来た。高身長にデカイ楽器を担いでいるので、威圧感が凄い。

「はいー、塚もっさんは頼れるねー。タツキーと違って」

「うるせー!」

塚本からチューバを受け取った秋川が滝野に向かってそう言うのと、悲痛なツツコミを滝野は入れた。

「ホルン居ます」

「トランペット、全員揃ってます」

荷物を積み終えると、次は音楽室で各パートリーダーから全員揃っている旨の報告が行われる。

全員いるのが確認されると、今度はバスによる移動が始まる。

「おろろ?、なんだ、吉川一人じゃん。香織先輩に振られた?」

バスの席で一人で座っていた吉川に対し、秋川が小馬鹿にする様に

そう聞く。

案の定、吉川は梅干しみたいなの渋い顔になった。

「……うっさいわね。アンタはどうなのよ？」

「俺もタツキーに振られた。と言うわけで、失礼します」

「あ、ちよつとー」

吉川の返事を聞く前に、秋川は隣の席に座る。相変わらず自由で、距離感が近い。

「……はあ、もう、好きにすれば？」

そんな秋川に慣れた様に吉川はそう返す。ここ最近はあまりの彼の自由人っぷりに、吉川も突っ込むのが疲れて来ていた。

「はい、こちら点呼オーケーです。運転手さん、出発して下さい」

その後、部長の小笠原から点呼が終わると、バスはサンフェスの会場に向けて走り始める。

「……ねえ、秋川。緊張してる？」

すると、吉川が少し俯き気味で、隣席の秋川にそう尋ねる。声色から、緊張しているのが分かった。

「してる様に見える？」

対して秋川は軽く、いつも通りひょうきんにそう返す。

「……ホント、アンタは相変わらずね。ある意味羨ましいわ」

そんないつも通りの秋川に、吉川は呆れる様に、しかし言葉通り何処か羨ましそうな表情でそう言う。

「ある程度の緊張は、いいと思うよ？でも、し過ぎても駄目だし、しなすぎてもダメ。」本当に出来るのかな？”って言う気持ちと、”俺は絶対にできるんだ”って言う自信が、上手く噛み合った時、最高の演奏が出来ると思っうな」

変わらずひょうきんに、しかし、表情は何処か真剣は顔つきで秋川はそう答える。

その言葉は、彼がソロコンと言う厳しい舞台で戦って来た、経験から来るものだった。

「……そう。じゃあ、アタシはどうなのかな？」

すると、吉川は助けを求める様な声でそう呟く。

「俺には緊張してる様に見える。……うーん、そうだな。今日の晩飯の事でも考えてみれば？」

にこやかに笑って秋川がそう提案すると、吉川も釣られる様に笑った。

「ふふっ、なにそれ？変な慰め方ね？」

「うん、いいねー、その顔の方が、いい演奏が出来ると思うよ？」

緊張でガチガチに固まっていた吉川の指先は、いつの間にか解れていた。

「おー、洛秋も立華もいますなー」

会場に着くと、両手で双眼鏡の形を作り、その隙間から他校の集団を覗いて秋川がそんな事を呟く。

今はチューニングの時間。それを終えている秋川は、面白がる様にその2校を見合わせている。

「先立華、その次北宇治、そしてその次洛秋。……順番としては最悪だな」

すると、同じくチューニングを終えた滝野が、お手上げと言う風に秋川にそう返す。立華と洛秋は、マーチングの強豪だ。特に『水色の悪魔』と呼ばれる立華の演奏は、全国からこの高校の演奏を観に来る人がいる程の、マーチングの人気校だ。

「いや、寧ろ都合が良い。前に立華、そのあと洛秋って事は、通して見る人が殆どでしょ？なら、北宇治の演奏も必然的に見られるって事よな？」

「そりゃ、そうだけど……」

北宇治の行進は、その2校の間に挟まる様にプログラムされている。それ即ち、観客が自分達の演奏にも注目をせざるを得ないと言う事だった。

”音楽は、聴き手がいてこそ”

その信念を持つ秋川にとって、この順番は正に天啓とも言うべきものだった。

「じゃあこれは、大大、大チャンスだよ。期待されてないところに一発どデカイ大砲。観客の度肝を抜くには最高の舞台でしょ」

「……そう簡単には言うけど……」

「あれ？、そんな言葉が出るほど、タツキーは練習してなかったの？」

すると、秋川は挑発する様な目つきで滝野に向かってそう言い放つ。

対して滝野は、ハツとした様な表情になった。

「……悪い、今のは無しで」

「ははっ、オーケー。今のは聞かなかった事にしてあげるよ」

そう。今日自分達はこのサンフェスで、“北宇治高校吹奏楽部ここにあり”と、宣戦布告をしに来たのだ。こちらから仕掛ける戦いに、何処に緊張する要素があるのか。

「よし、じゃあ、偵察も終えたし、そろそろ戻るべや？」

「だな」

秋川がそう言うのと、滝野も一言それだけ返し、集合場所へと戻って行った。

『立華高校吹奏楽部の皆さん、準備をお願いします』

出番が近づいて来た。それにつれて、部員の緊張感が高まって行く。

「いっぱい練習したんだから、大丈夫……」

「あの粘着悪魔、もう完璧にできてるって事分らせてやる……！」

自問自答、滝先生への恨み節を連ねる者など、反応は三者三様だ。

「次、立華でしょ？」

「うん、次に一つ挟んで洛秋」

「間に挟まれた高校、可哀想だよな」

「逆に目立って良いんじゃないか？」

外野からは、そんな声が聞こえて来る。北宇治に期待している観客なんて、カケラも居ない。

「うるせーよ……」

誰かが、そんな愚痴を溢した。

『続きまして、立華高校吹奏楽部の皆さんです』

そしてアナウンスが、場内に響き渡る。遂に来る。

わああああー！！

最初に聞こえたのは、歓声。

「来た……」

そして、段々と聴こえて来る演奏。じわじわと、それでいて威圧的に、私達が王者だと言わんばかりの圧を纏って登場する。

「うわ、上手すぎる……」

「緊張して来た……」

一瞬にして、呑み込まれそうになる。しかし、全くお構い無しに、立華の演奏は場内に響く。

「全く外さない……」

「こりゃ、ウチら悲惨だわ」

「俺、なんか自信なくして来た」

「大丈夫、大丈夫……」

立華の演奏に、北宇治に混乱が起こる。圧倒的。そう言い表しても良いほどのパフォーマンスだ。

そんな混乱を感じ取ったのか、部長の小笠原が声を掛ける。

「ちよつと!?、もう出番だよ?みんなしっか」

—————
♪—————
—————

すると、そんな混乱を切り裂く様に、甲高い金管の音が鳴った。トランペットの音だ。

静寂。皆その音の方向に注目する。その音の元は、高坂だった。

「……い、バカ、高坂！なに音出してんのよ!?ここ来たら音出し禁止って言われたでしょ!?!」

一瞬遅れて、吉川から注意が入る。しかし、高坂はどこ吹く風。涼しげな顔で、「すみません」と一言だけ言った。

「…………やるじゃん」

誰にも聞こえない声でそう呟いたのは、秋川だった。

「ビックリしたねー」

「気が変になるかと思ったよー」

混乱していた面々は、高坂のやらかしに、リラックスしたムードになる。

緊張と緩和。それが、偶然ながらに完成した形となったのだ。

『続きまして。北宇治高校のみなさんです』

すると、場内アナウンスで声が掛かる。

「先生、スタートです!」

1人の生徒が、滝先生に向かってそう促した。対して滝先生は、靴紐を結び直すとゆっくりと立ち上がる。

「……本来、音楽というものは、ライブに己の実力を見せつける為のものではありません」

口調もゆっくりと、滝先生は部員に語り掛ける。

「ですが、ここにいる多くの他校の生徒や観客は、北宇治の力を未だ知りません」

そして、体の向きを部員の方向へ変え、滝先生は薄く微笑んだ。

「ですから今日は、それを知ってもらう良い機会だと、先生は思います」

そして、片手を開き、薄く微笑むその顔は、挑戦的な笑みへと変わった。

「さあ、北宇治の実力、見せつけて来なさい!!」
滝先生がそう高らかに宣言すると、部員達はいつぶりだろうか、明るい笑顔を見せた。

「「はい!!」」

北宇治の挑戦が、今始まる。

自由曲

———— ピーツピツ！ピツピツピ

ドラムメジャーの田中が笛の音でリズムを取り、続いてパーカスが小さくそれに合わせる。

まずは一步、62・5センチ。左足から。

———— スウ……

それと同時に、ブレスの音が微かに聞こえる。

———— ノーノーノー————

行進と共に始まった曲は、RYDEENと言う曲。テクノポップの元祖とも言えるこの曲は、未来的なメロディとシンプルなフレーズが特徴の曲だ。

立華の演奏の余韻が残る中、それを塗り替える様に北宇治の行進が続く。

徐々に、しかし確実に、観客がこちらに顔を向ける。

「あれ？」

「カッコいいね」

外野の声が塗り替えられて行く。

「結構上手いじゃん」

「何処だっけ？どこ？」

皆が、北宇治に興味を持ち始める。

秋川は演奏しながらも、行進しながらも確かな興奮を感じていた。やはり、音楽はこうでなくては。

隊列は、乱れず。62・5センチの幅を完璧に覚え、堂々と前を向いて皆演奏をしている。

私の、俺の演奏を聞け。

そう叫んでいる様な、堂々とした演奏だった。

「何処の高校？」

「知らない。調べてみる」

そして、行進の最中、殆どの観客が北宇治に視線を移す。恐らくこの観客は、立華や洛秋を見に来たのだろう。しかし、今この瞬間は、自

分達が主役として、その視線を独占しているのだ。

「ああ、良いなあ……………」

演奏が終わると、秋川は青空を見上げて、そんな事を呟いた。

サンフェスが終わると、中間試験を経て、次は夏に向けてのコンクールだ。

吹奏楽コンクールは、全国の吹奏楽部がその頂点を目指す、言わば野球で言う甲子園の様なものだ。

北宇治の所属する京都府は、京都大会、関西大会、そしてそれを超えると念願の全国大会と、2つの関門を突破しなければならない。

激戦区と呼ばれる関西地区。その中で全国に出られるのは、たった2校。狭き門もここまで来ると、大渋滞を起こしそうだ。

「まず、これからのスケジュールを皆さんにお配りします」

滝先生がそう言うと、真っ黒に染まったスケジュール表が、各自に回される。最初はこの黒文字に引いたものの、今では既に誰も文句を言わなくなっていた。人の慣れというものは恐ろしい。

「さて、ここからが重要な話なのですが……………」

プリントが全員に行き渡ったのを確認すると、滝先生が口を開く。

「今年は、オーディションを行う事にしたいと思います」

続けてそう告げると、音楽室が少々ザワつき始めた。

「え、オーディションって……………」

「はい、私が一人一人、皆さんの演奏を聞いて、ソロパートも含め大会に出るメンバーと編成を決める。という事です」

淡々と、滝先生はオーディションについて説明する。そして、その言葉を呑み込むのに少々時間を要し……………」

「「ええー!?!」」

驚愕の声が、音楽室に響き渡った。

コンクールに出るメンバーの上限は、55名。それ以上は出す事は出来ない。

そうすると、部員の多い吹奏楽部は、そのメンバーから漏れる人が出てくる訳である。

昔の洛秋なんかは、そもそも部員が足りずこのメンバー上限の半分程度の人数で全国金賞を取っていたと言うバケモノじみた過去もあったが、今ではコンクールに人数漏れが出る事など殆どない。

北宇治では代々3年生が優先的にコンクールに出る決まりだった。しかし、滝先生は全国を目指している。ならば、選ぶ基準は“学年”では無く“実力”だ。

「トランペットは、何人で編成すんのかねえ」

トランペットパートに充てられた教室で、呑気に秋川がそう呟く。今のトランペットパートの人数は、秋川含めて8名。なので55人中、全員がオーディションに受かるという事はないだろう。

「アツキーは受かるでしょ? つか、受かんなかったら大問題だよ」ケラケラと笑ってそう返したのは、2年の加部だった。確かに去年ソロコンの最優秀賞を取っておいて、メンバー落ちしたら大波乱も良いところだ。

「それより、ソロパートよソロパート。それも、オーディションで決まる訳?」

「?、滝先生が言ってたんだから、そうなんじゃない?」

深刻そうにその話題に触れる加部に対し、さも当たり前かのように秋川がそう返す。

「……って事は、ペットのソロパートがあつたら、アツキーも吹く気

がある訳ね？」

「あたり前じゃん」

一体何を言ってるんだと言う顔で、秋川はそう返す。一瞬、高坂の眉が少しながら動いた。

「はあ……そう、まあ、そうよね……」

対して何が考え込む様にして、加部はそう呟いた。その横で吉川も、何か考え込む様な表情をしている。

「お待ちせー。課題曲と自由曲の譜面もらって来たよー」

すると、パートリーダー会議から帰って来た中世古が、分厚い楽譜の束と共に教室に入ってきた。

「お、待ってましたー！滝先生のセンス拝見ですなあー」

秋川が目を輝かせ、その楽譜に食いつく。楽譜の他に、二枚のCDも添付されていた。

「課題曲はプロヴァンスの風、自由曲は三日月の舞だね」

机の上にCDと楽譜を置きながら、中世古が説明をする。

「プロヴァンスは聞いたことあるけど、三日月の舞ってどんな曲だ？」

後者の曲については秋川は全く聞いた事が無かった為、そう言っって首を傾げる。他のパートメンバーも、同様に分からない様だった。

「そうだね、とりあえずCDがあるから、一回流してみよっか？」

中世古の提案に、他のメンバーは一樣に頷く。そしてプレイヤーにCDを入れ、曲が始まった。

「お、最初から見せ場じゃん」

秋川が、楽しそうにそう呟く。出だしからハイトーン気味の難しい音程。その主旋律を担当するのは、トランペットだった。

全体的にダイナミックで、アップテンポの曲。聴くだけでも難しさが伝わって来た。

最初は全体で主旋律を奏で、次に各パートの楽器で目まぐるしく変わる様に主旋律を繋げる。

そして曲も中盤に差し掛かった頃、それは聴こえて来た。

「……あるじゃん。ペットソロ」

ニヤリと笑って、秋川はそう呟く。ゆったりとしたリズムのそれは、周りの音が一切無い、トランペットだけの音が聞こえるパートだった。

1分弱の、一つの楽器だけの独壇場。目立たない訳がない。トランペッターなら、誰しものが吹きたがる様なオイシイ場所だ。

その後は、ゆったりとしたリズムを続け、最終的には最初のテンポに戻って、クライマックスへと向かう。

こうして、三日月の舞の試聴が終わった。

じやれ合い

コンクールに向けての練習が始まった。まずはパート練。各々譜面に触れて、曲の全体像を掴む。花形であるトランペットは、主旋律を担当する事が多い。

そして、この三日月の舞も、例に漏れず主役はトランペットだった。「違う違う、ヨッシー。そこでブレスしなかつたら、後が息続かないよ?。」

音を出していたトランペットパート一年の吉沢秋子に対し、秋川はそう言って演奏を止める。

「は、はい。でも、ここブレス無しでもなんだか行けそうじゃないですか?。」

対して吉沢は、首を傾げて秋川にそう返す。

「そう?、じゃあブレス無しでやってみて?出来なかつたら今日一日、肺活トレーニングの刑ね?。」

「そ、そんなー!。」

意地悪な笑みを浮かべてそう言う秋川に、吉沢は困り果てた様な表情になる。

ここはトランペットパートの教室。各々、曲の得意なところや苦手なところを、確かめる様に何度も繰り返し吹いていた。

「はい、じゃあ、24小節から行ってみよー」

「ううー……はい……スウー……」

—————
♪—————
—————
♪—————
—————

吉沢がこれでもかと言うくらい大きく息を吸うと、勢い良くトランペットの旋律が流れる。しかし、それも最初だけで、後半になるにつれて徐々に音が弱くなっていき、最終的にはすかしっ屁の様な音しか出なくなっていた。

「はい、じゃあ肺活トレーニングのご案内ー」

吹き終わった吉沢に対し、いい笑顔でそう宣言する秋川。吉沢はがつくしと肩を落としている。

「あはは、秋川君、あんまり虐めちゃダメだよ?。」

そんな2人のやり取りに、中世古が軽く笑ってそう言って来た。

「甘いですよ香織先輩。ヨツシーは経験者。そして俺達は全国を目指してる。全体のレベルアップの為に、俺は鬼にならねばならないのです……」

仁王立ちになり、しみじみとそう言い放つ秋川。トランペットパートは、彼のこのひょうきんな性格により、かなり雰囲気良かった。

一人、高坂だけは相変わらず個人練に行っていたが。

「なーに偉そうな事言っちゃってんのよ？アンタだって、まだ完璧じゃないでしょ？」

そんな秋川に突っ掛かる様に、呆れた声で吉川がそう返す。

「吉川だって、出だしのハイトーンしんどそうだったじゃん。あれ、コンクールでやらかしたら恥ずかしいぞー？」

相変わらず小馬鹿にする様に秋川にそう言われ、吉川の顔がみるみる赤くなって行く。

「う、うっさいわね!!じゃあ、アンタがやってみなさいよ!!」

凶星を突かれたのか、吉川は少し声を荒げてそう言い返す。一言、「りょーかい」と秋川が言うのと、秋川はすぐさま立って姿勢を正し、確かめる様に短く一音出す、

♪————♪、♪————♪

そして出だしのフレーズを、一音も乱す事なく、完璧に吹いてみせた。

「…………相変わらず、腹が立つぐらい上手いわね」

心底不服そうな顔で、吐き捨てる様に吉川がそう言う。

「そりゃどうも。もっと褒めて良いよ？」

「一言余計だっつーの!!」

「あでっ!!」

ドヤ顔でそう返す秋川に対し、吉川のタイキックが炸裂した。

因みに吉沢は、肺活トレーニングを免れていた。

「よし、そろそろ、片付けしよつか？」

中世古がパートメンバーの面々に向かってそう言うと、一同は一斉に時計を確認する。

時刻は下校時間に近づいており、それまでほぼ休み無しで吹き続けていた。

「あ、じゃあ私、高坂さん呼んでくるよ」

すると、3年の副パートリーダーの笠野が、個人練をしている高坂を呼ぶ役を買ってくれた。

「うん、じゃあよろしくー」

中世古がお願いすると笠野は立ち上がって教室を出て行く。

それを見届けると、各々片付けを開始する。楽譜立ての片付け。譜面の片付け。それぞれに帰る準備をする。

「あれ？、アツキー先輩、ペットの手入れですか？」

すると、トランペットのパーツを取り外していた秋川に対し、吉沢が興味津々にそう聞いて来た。

「ん？、そうだね。毎日の手入れだから、欠かせるのだよ」

「え？、毎日ですか？よく出来ますね……」

毎日と言う言葉を聞いて、吉沢は驚いた顔になった。トランペットは吹奏楽の中では小さめの楽器で手入れも簡単だが、さすがに毎日手入れをするのは中々に骨が折れる。しかし、秋川は神妙な顔になり、人差し指を振った。

「ノンノン、分かかってないなーヨッシーは。」みゆき”は毎日構ってあげないと、すぐ拗ねちゃうからねー。だからこうやって、愛を確かめているのだよ」

「みゆきっ？」

吉沢にとっては聞き慣れない言葉に、首を傾げる。

「秋川君の彼女さんだよ……。今はバラバラにされちゃってるけどね？」

すると、中世古が付け加える様にそう言う。それを聞いて、吉沢の顔がどんどん青ざめていった。

「そ、そ、それって、事件じゃ……!!!」

すぐに警察をと、吉沢はポケットから慌ててスマートフォンを取り出すと……

「んな訳無いでしょ!」

「あてっ!」

吉川が、譜面で吉沢の軽く頭を叩いてツッコミを入れた。

「何? アンタ、自分のトランペットに名前なんて付けてんの?」

そして秋川の方へ向きを変えると、吉川は怪訝な顔でそう聞く。

「もちろん、お陰様で美しきは保っている」

しかし、さも当たり前前だと言う風に秋川がそう返した。

「……確かに、汚れも傷も一切無いわね」

そう言って、吉川は秋川のトランペットをまじまじと見つめる。彼女の言う通り、秋川のトランペットは新品かのように綺麗だった。白金の光沢は鏡の様に輝いていて、パーツを外しても錆などは一切見当たらない。

それは彼が、誰よりも楽器を大切にしている何よりの証拠だった。

「だろ? 毎日愛でる事で、みゆきは一層美しくなるのです……」

「うわっ、キモっ」

恍惚な顔でそう言う秋川に対し、吉川は少し引いた顔で一言、ドギツイ言葉を返した。

まあこれに関しては、秋川の言葉が悪すぎる。

「うっせ、バーカ」

対して秋川は舌を出し、子供の様な悪口を返す。

「無機物を彼女にしてどーすんのよ?」

「彼女のつもりでって事だよ」

「と言うか、みゆきってネーミングセンス……将来のアンタの子供に同情するわ」

「なんだと!?!」

そして、いつものじやれ合いが始まった。それを見た吉沢は、こっ

そりと中世古に近づく。

「あのー、香織先輩？」

「ん、何かな？」

秋川と吉川に聞こえない声で、二人は話す。

「あの二人って、なんだか仲良いですよね？なんでですか？」

吉沢がそう聞くと、「うーん」と、中世古は少し考える素振りをする。

「これと言って理由は無いんだけどね？一年生の頃からあの二人ってあんな感じなの。なんだろう？馬が合うってやつなのかな」

「？、なんか、変な関係ですね？」

そんな中世古の曖昧な回答に、吉沢は不思議そうな顔でそう返す。

「あははっ、そうだね。変な関係」

対して中世古も、軽く笑ってそう返した。

「はいはい、そこのお二人。じゃれあいは良いけど、ちゃんと片付けもしなよ？」

「じゃれあつて無いですよ!!」

そして、冷やかす様に中世古がそう言うと、少し顔を赤らめて吉川がすぐさま反論して来た。

絶不調

「楽器にとつて、天敵の季節が来てしまった……」
音楽室、窓の外の曇天を恨めしそうに見上げながら、秋川はそう呟く。

まだ6月前だが、関西一带は、予定より早い梅雨真っ只中で、外は雨が降っている。今日は合奏練習の日で、周りを見てみると全パートが集合していた。

「ペットは金管だから、まだ良いじゃないですか」
すると、隣に居た一年のトロンボーン担当の塚本が、そんなことを言ってきた。他パートの後輩なのに何故こんな仲が良いのかと思うかも知れないが、そもそも吹奏楽部と言うのは女子が多く、男子は肩身の狭い思いをする。

すると数少ない男子同士、他パートでもすぐに仲良くなれるのだ。サンフェスの練習の時は着替えて一緒に教室になる事もあって、秋川と塚本は先輩、後輩の間柄としていつの間にか仲良くなっていった。

「分かってないなー、塚もっさんよ。金管だって、油断したらカビとか生えるんだぞー？」

秋川は尚も恨めしそうに空を見上げてそう返す。

楽器にとつて湿気は、天敵と言える。特に木管。オーボエやクラリネットは、その影響を受けやすい。湿気で水を含んでしまった楽器は、安定した音を出せなくしてしまうのだ。

「ああ、こんな環境で、みゆきも可哀想に……」

「楽器に名前付けてるんすね……」

悲痛な顔でトランペットに頬擦りをする秋川に対し、苦笑いになって塚本はそう返す。

空模様と同じく、秋川の気持ちも下がり気味だった。

すると、音楽室の扉が開き、部長の小笠原が入ってくる。

「はい、それじゃあ、今日から合奏始めます。滝先生は別件で遅れて来るので、まずはチューニングと基礎練から始めましょう」

「「「はいー」」」」

こうして、合奏の準備が始まった。

「少し、音が安定してないので、各自気をつけて」

「「はい」」

「自分の耳で、自分の音と周りの音。ちゃんと確認しながら外さな
い様に」

「「はい」」

「じゃあ、5分休憩で」

小笠原の掛け声と共に、緊張感が張っていた音楽室が、少しばかり
緩む。滝先生はまだ来ておらず、今は彼女が中心となって練習を進め
ていた。

「あー、なんか調子上がらん……」

秋川が音楽室の天井を見上げながら、そんなことを呟く。
周りに迷惑が掛かるほど集中力が散漫なわけでは無いが、秋川の気
持ち的には絶不調と言ったところだった。

「おー、アツキーがそんな顔してんの、初めて見たかも」

すると、天井を見ている秋川を上から覗き込む様にして、茶髪を後
ろで一つに束ねた髪型にした一人の少女が話しかけて来る。

「あ、なつきち」

その吊り目気味の少女は低音パートの2年。ユーフォニアム担当
の、中川夏紀と言う少女だった。

「なーに？スランプ？」

椰揄う様に、秋川に対して中川はそう聞く。

「スランプと言うか、気が乗らんのよねー。雲はどんより、空気はジ
メジメ。このままじゃ性格まで湿っちゃうよ」

「なるほどー。いつも全開のアツキーが、今はエンジンが掛かりに
くくなってるってわけねー」

へらりと、皮肉っぽい笑顔を浮かべて、中川はそう返す。この少女、1年の頃から何かとトランペットパートの吉川に絡んでいたので、その過程で秋川とも仲良くなっていた。

話してみると意外と気が合い、今ではたまにこう言う軽口を飛ばし合う事もある。

「で、どうなの？オーディション。受かりそう？」

すると、中川の方からオーディションの話題に触れた。

「もちろん。ソロも取るつもり」

そして、秋川は即答する。対して中川はへらりと笑顔になった。

「ふーん、相変わらずなんだねー」

そして、何処か含みを持たせた様な口調で、そう言い放った。

「ちよつとどいてくれる？そこ、邪魔なだけけど？」

すると、その二人の横から不機嫌そうな声が聞こえて来た。二人ともその声の主の方向に顔を向けると、吉川が口調通りの不機嫌そうな顔で立っていた。

「避けてけばいいでしょー」

対して中川は避けるどころか、逆に反発する様にそう言い放つ。そんな態度に、吉川の顔が一層険しくなった。

「ふんっ、ごめんあそばせっ！」

「うわっ！おい、何すんの！」

そして、わざと中川にぶつかる様にして、横を去っていった。

「……………相変わらずだねー」

そんな光景を見て、秋川はそんな事を呟く。

「ったく、どうせ香織先輩に誘いと断られたんでしょ？」

中川も不貞腐れる様に、悪態を吐いた。

今のやり取りでもわかる様に、この二人はとことん反りが合わない。

大体は今の様に吉川の方から突っかかって来る事が多いのだが、中川も中川で中世古関連で吉川を揶揄う事もあるので、どっこいどっこ

いと言ったところだろう。

「あ、葵先輩、塾ですか？」

すると、ここから程近い場所で、2年生がそんな事を言っているのが聞こえた。

「うん、ごめんね」

そう言っただけでテナーサックスを持って立ち上がったのは、3年の斎藤葵と言う少女だった。

「じゃあ、晴香、後はよろしく」

「あ、うん……」

斎藤はそれだけ言うと、足早に音楽室から去って行く。そんな斎藤を、小笠原はどこか複雑そうな表情で見っていた。

「葵先輩、今日も塾かー」

そんな光景を見て、他人事のように中川がそう呟く。

「まあ、3年生だしね。受験とかもあるんじゃない？」

同じく他人事のように、秋川もそう呟いた。

「で、なつきちはどうなの？」

「？、何が？勉強？」

すると、秋川から唐突にそんな事を言われ、中川は首を傾げる。

「オーデイションだよ。受かりそうなの？」

秋川がそう尋ねると、中川は微妙な顔つきに変わった。

「うーん、どうかな？アタシはあんま真面目じゃ無いから、落ちるかも知れない」

「じゃあ、今から真面目になりや良いじゃん」。

あまりにもストレートにそう言い放つ秋川に対し、中川は一瞬目を逸らした。

「……………あははっ、アッキーはホント相変わらずだねー。……………そうだね。今回は真面目になってみよっかな？」

そして、何か決意したように、中川はそう呟く。

「うん、そっちの方が面白いと思うよ？」

そんな中川の呟きを聞いて、秋川は屈託のない笑みを浮かべる。やはり変わってないなど、中川は心の中でそう呟いた。

「アタシをこんだけやる気にさせたんかだから、もしオーデイションに落ちたら、何か奢ってもらおうかな？」

「えー？、そんな金無いよー？」

冗談めいて中川がそう言うと、秋川は困った様な顔になってそう返した。

負い目

「もう一度、オーボエソ口前まで」

今日も合奏練習。滝先生がそう言うのと、「はい」と、部員たちの返事が返ってくる。

「1、2、さん……」

滝先生が掛け声と共に手を振ると、ゆったりとした演奏が流れる。そして数秒演奏した後、滝先生はたんたんと、楽譜立てを叩いて演奏を止める。

「粒が粗いです。もっと滑らかに音を繋げられませんか？そして、穏やかにオーボエを迎え入れて下さい」

「はい」

滝先生がそう注意すると、再び部員の返事が返ってくる。

「テナーサククス。出だしがブレてます。一人づつ、斎藤さんから」

「……はい」

滝先生がそう言うのと、斎藤から一言返事が返ってくる。そして、「さん、はい……」と滝先生が合図すると、テナーサククス特有の、低く響く音が教室に鳴り響く。

この一人一人吹かせる練習は、実力が思いつきり露わになる。他の楽器に紛れて音を誤魔化す事が出来ないからだ。

出来ていれば、えもいわれぬ達成感を味わえるし、出来ていなかったら、自分の拙い演奏を周りに聴かれ、とてつもなく恥ずかしい思いをする。

「……もう一度」

演奏が終わると、滝先生からそう告げられる。どうやら彼の求める音ではなかった様だ。

しかし、斎藤は一向に吹こうとしない。

「……どうしました？」

「……」

滝先生が吹こうとしない斎藤にそう問い掛けるも、返って来たのは

無言だった。

「……分かりました。斎藤葵さん、今のところ、いつまでに出来る様になりますか？」

「……………」

滝先生に直接的な言葉を投げかけられ、斎藤は口籠る。

「……残念ながら、コンクールは待つてくれません。”いつまでに”と目標を決めて課題をクリアして行く。そうやってレベルを高めて行かないと、良い演奏は出来ません。分かりますか？」

「……はい」

皆、心配そうに斎藤を見つめている。彼女が受験勉強も頑張っている事を、ここにいる全員が知っているからだ。

しかし、田中と秋川。その二人だけは、真剣な眼差しで斎藤を見つめていた。

「ここは、美しいハーモニーで旋律を支えなければいけません。今テナーサクスのあなただけが音を濁しています。受験勉強が忙しいのは分かります。が、同時にあなたは、コンクールを控えた吹奏楽部員でもあるのです。……もう一度聞きます。いつまでに出来る様になりますか？」

「……先生」

滝先生の問い掛けに、思い詰めた様な顔で斎藤はそう返す。

「なんですか？」

そして、無言。言おうか言わまいか、そんな葛藤をしている様だった。黙る事数秒。意を決した様に斎藤は顔を上げた。

「私、部活辞めます」

斎藤がそう宣言すると、音楽室が少しざわつく。

「……理由はありますか？」

「今のまま部活を続けたら、志望校には行けないと思うからです」
滝先生がそう聞くと、斎藤は慚然と返す。

「前から悩んでいたんですが、これからもっと練習が長くなる事を

考えると、続けるのは無理です」

「……そうですか、分かりました。後で職員室に来て下さい」

「……はい」

それは機械的で、全く感情のこもってないやり取りだった。

「斎藤先輩！辞めないでください！」

「葵！待ちなよ！」

周りから、そんな声が聞こえる。しかし、それに斎藤は反応する事なく、音楽室から出て行った。

ガタツ

すると、勢い良く椅子から立ち上がる音が聞こえ、一人の生徒が斎藤の方を追って行った。

「……タツキ。あの子は？」

「えっと、確か一年の黄前さんって子」

秋川が小声でそう聞くと、滝野も同じく小声で返す。

「ちよつと！、晴香?！」

するともう一人、小笠原が立ち上がって、同じく斎藤と黄前の後を追って行った。

いきなりの出来事に、音楽室は哑然とした空気になる。

それを見て滝先生は「ふう……」と、軽く溜息をついた。

「皆さん、今日の合奏練習はここで終わりにします。後は、パート練習や個人練。好きにやって下さい。では、失礼します」

そう言い放つと、滝先生は楽譜を纏めて音楽室から出て行く。

音楽室は、未だ騒めきに包まれていた。

斎藤葵が吹奏楽部を辞めても、コンクールに向けての練習は滞り無く進む。

それはここ、トランペットパートも例外では無い。

今日のパート練は6名。残りの2人、中世古と秋川は、個人練に行っている。

今日は珍しく、高坂がパート練に居た。

「はあ、葵先輩、辞めちゃったなー」

2年の加部が、どこか上の空でそう呟いた。

「……そうね」

それに吉川が、譜面を見て指運びを確認しながらそう返す。

「受験勉強って言ってたけど、なんで今なのかなあ？」

「分かんないわよ。まあ、人生の分岐点でもあるんだし、ああ言うのも一つの手なんじゃ無い？」

「うっわ、優子ドライバー」

淡々とそう言う吉川に対し、加部はひょうきんにそう返す。

「……負い目も、あるんじゃないかな？」

すると、3年の笠野がそう呟いた。

吉川と加部、滝野の2年生組は、バツの悪そうな顔になる。

「負い目？」

その言葉の意味を汲み取れないのか、吉沢が首を傾げてそう聞く。

「……ああ、負い目って言うのはね」

「滝野、アンタちよつと黙ってなさいよ」

滝野が説明しようとする、釘を刺す様に吉川が上から声を被せる。まるで臭い物に蓋をするかの様に。

「……もう何ヶ月もはぐらかしてるだろ？アツキーだってあの事はもう何とも思っていないって言ってたし、このまま隠し通せる筈も無いだろ？」

滝野がそう言う、眉間に皺を寄せて吉川は「……ツチ」と、一つ舌打ちをした。

「……去年、一年生。今の二年が大量に辞めて行った事件って、知ってる？」

そしてその話題に触れたのは、またしても笠野だった。只事ではない雰囲気、吉沢も生唾を呑む。

「……はい。噂だけは」

ポツリと、笠野の問いかけに吉沢はそう返した。

「当時の北宇治は……もう秋子ちゃんも知ってると思うけど、真面目な部活とは程遠かったの。……特に当時の三年生。その人達はあまり部活に真剣に取り組んで無くてね？それを見た一年生の一部が、反発しちゃったんだ」

笠野と説明に、吉沢はコクリと頷く。ここまでは噂通り、しかし、それが斎藤葵が辞めた理由と何があるのだろうか？

「それで、私たち2年生は、不真面目な3年生と、部の雰囲気を変えようとする1年の子達との板挟みに遭っちゃってね？今でも辞めて行った当時の子達に対して、負い目を感じてる子もいるんだ」

それを聞いて、吉沢は納得行った様な顔になる。確かにその立場になつたら、辛い事になるのは確実だ。

怖い3年生と、いつ暴走するか分からない1年生。それが混ざって爆発しない様に、当時の2年生は奔走していたのだ。

しかし、それなら一つ疑問があった。

「でも、それは昔の話で、アツキー先輩は戻ってきたじゃ無いですか？」

吉沢は納得行かない様な顔で、笠野に対しそう言った。その渦中にもし秋川がいたならば、戻って来た彼に負い目を感じる事は無い筈なのだが。対して笠野は、困った様に笑う。

「……そうだね。でも、アツキーは”特別”だから」

笠野の”特別”と言う言葉に、高坂が一瞬反応する。

「お疲れー。やっぱ外は良いですなー。俺の演奏に野球部も釘付けだったわ」

すると、計ったかのようなタイミングで、秋川が個人練から帰ってきた。

「ん？、あれ、どしたの？みんなして変な顔して」

「……アンタより変な奴なんて居ないわよ」

そして、吉川がいつも通り秋川に突っ掛かる。反応を見る限り、どうやら話は聞かれていなかった様だ。

「何でも無いよ。さあ、休憩終わり。オーデイションも近付いてるんだから、練習に戻るよ」

そして、笠野がそう告げると、何事もなかったかの様に各々練習に戻って行った。

「……………」

ただ二人。一年の吉沢と高坂は、何処かその光景に違和感を覚えていた。

凜花

「あれ、今日部長居ないの?」

翌日、音楽室に小笠原の姿が無かったので、秋川がそう聞く。

「おー、体調不良で休みだつて」

対して、滝野が楽譜の準備をしながらそう返した。

「ふーん。で、あすか先輩があそこに居るって訳?」

いつもなら滝先生か小笠原がいる音楽室の教壇の上には、副部長の田中の姿があった。

「まあ、昨日あんな事があつたからな。部長は斎藤先輩と仲良かったし、相当堪えたんだろ」

まるで他人事かのように、滝野はそう答える。まあ、実際殆ど話した事がないので他人の様なものなのだが。

「はいはい。じゃあ、チューニングから始めるよー」

「はい!!」

田中が掛け声をかけると、一様に演奏の準備をする。教壇に立つ人間が変わっただけで、やる事は変わらない。

こうして、なんだか慣れない田中あすかの主導による練習が始まった。

「はい、ここまで。今日の合奏はここまでとします。各自、今日は何処か気の抜けた演奏でしたよ?明日までには気を引き締めて下さい」

「はい」

滝先生がそう告げると、いつもの様に返事が返ってくる。何処か空虚。そんな感想を抱く合奏練習が終了した。そして、合奏の片付けが始まる。

各々自分の楽器を片付ける中、トランペットパートの一人が遠い目で天井を見つめている。

「あー……やる気が起きん……」

練習が終わっても、秋川は未だに絶不調だった。

「相当だな。アツキーが滝先生に注意されてるところなんて、初めて見たぞ？」

合奏後の片付けをしながら、椅子にダラけた姿勢で座る秋川に対し、滝野がそう返して来る。

今日は、秋川も滝先生に注意を受けていた。『注意力が散漫』、『音がいつもより適当過ぎる』。そんな事を言われていたのだ。

「この時期はどうも気が乗らんのよねー。……はあ、どうしよつか？タツキー？」

「んなもん俺に聞かれても分かるかつーの。ほら、椅子片付けるからさっさと立て」

個人的な相談をする秋川に対し、滝野はそう一蹴する。こう言うところは、男友同士っぽいやり取りだった。

「あー、無理。このままじゃ廃人になる……」

「何でもいいけど、今日は俺らペットパートが片付け係なんだから、アツキーも早く片付けろ」

そして、ゆっくり椅子から立ち上がると、渋過ぎる顔で秋川も片付けを始めた。

雨が降っている。空を見上げると、こっちまで陰鬱になって来そうな厚い雲が、すぐそこまで迫って来ている。

こんな状況で良い演奏をする方が無理だと、何処か秋川は開き直っていた。

なので学校に残って吹く気にもなれなかった秋川は自宅に帰り、リビングのソファアーの上でダラけた体勢をして、ボーツとテレビを見つめていた。

「あれ？兄ちゃん今日早いじゃん」

すると、ソファアーの後ろから、女性の声が聞こえる。

秋川に話し掛けたこの少女の名は、秋川凜花（あきかわりんか）。黒

髪のショートカットにサイドテールを加えた髪型。ぱつちりとした目と忍とは対照的な小さめの身長が特徴の、彼の2個下の妹だ。

「やる気が起きんで帰ってきた」

対して忍はテレビから視線を離さず、凜花に対しそう返す。そんな兄を見て、凜花は一つの溜息をついた。

「はあ、まあ、この時期に兄ちゃんがやる気無くすのは、いつもの事だもんね。じゃあ、アタシのトランペット聴いてよ」

「外雨降ってんのに、何処で聴くんだよ」

「予報ではもう直ぐ止むの。したら、河川敷に行こ？」

だらけてテレビを見ている忍の肩を揺らし、凜花はそうお願いする。

彼女も、忍と同じトランペッター。こうして実力のある忍に音を聞いてもらおうとする事は、しばしばあった。

「……チューニング、ちゃんとやるとけよ？」

「やたっ」

忍がそう言うと、凜花は小さくガッツポーズをする。彼女はもう中学三年生。それにしても、兄にベツタリな感じだった。

「それで、兄ちゃん。最近どうなの？」

「どうって、何が？」

すると、唐突に凜花に話題を変えられ、忍は疑問の声を返す。

「部活、復帰してもう結構経つでしょ？」

興味津々にそう聞いてくる凜花に対し、なんだ、そんな事かという風に、「ああ」と忍は呟く。

「俺はどうって事ないけど、顧問が変わって、周りの部員の意識も変わったかな？ 面白い人が増えてきた」

「へえー、兄ちゃんが”面白い”って言うなんて、ベタ褒めじゃん」

「実際、面白いぞ？」

ニヤリと笑って、凜花の方を向いてそう言う忍。そんな顔を見て、凜花は少し驚いた顔になった。

「……おー、こりや想像以上みたいですな。何？ 北宇治ってそんなところだったっけ？」

「そんなところになったんだよ。一回、演奏の見学でもしに来れば？」

「あははっ、そこまでは遠慮しておくよ。……でもそっか、北宇治かあー……」

そう言っつて、何か考え込む様な仕草をする凜花。

「……北宇治っつて、頭良かったっけ？」

すると、続けて凜花がそんな事を聞いて来た。

「中の上ぐらい。何？、お前北宇治受験すんの？」

凜花ももう中学三年生。そろそろ進路について考えなければならぬ時期だ。

忍がそう聞くと、凜花はニヤリと笑って、

「うん、今、選択肢の中に入った」

不敵な笑みを浮かべながら、そう言い放った。

実力不足

「お、ハイトーンそこまで出る様になったの?」
「へへっ、ビックリした?」

場所は河川敷。まだ曇り空ではあるが、雨が止んだことにより、忍と凧花はそこでトランペットを吹きに来ていた。

「じゃあそれ、ロングトーンやってみ?」

「えー!?これロングトーンでやんの!?……じゃあ、兄ちゃんがお手本見せてよ」

凧花にそう言われて、「いいよー」軽く返事をし、忍はトランペットを構える。



そして、いつもの様に悠々とハイトーンのロングトーンを綺麗に出した。

「おー!すごいすごい!ねえ兄ちゃん!今のどうやって出したの!?!」

そんな忍に、目を光らせて凧花はそう聞いてくる。こう言う素直なところは、凧花の強みでもあった。良い演奏は、良いと絶賛する。

基本プライドが高く、自分が一番だと思っている人間が多いトランペッターだが、そう言う意味では凧花は珍しいタイプだった。

「つて言ってもなー。俺の感覚と凧花の感覚じゃあ違うし……まあ、俺の感覚で言わせてもらおうと、大きい音を出し過ぎない様に意識するって感じかな?」

「ほー。じゃあ、それでやってみるね!」

そして凧花は素早く立ち上がり、先程の忍と同じ音程のロングトーンを吹き始める。



しかし忍と比べると、あまり音が安定していなかった。

「ははっ、やっぱり俺と凧花じゃ、感覚が違ったみたい」

「うーん、兄妹だから行けると思ったんだけどなー」
軽く笑ってそう言う忍に対し、凜花は不服そうな顔でそう返す。
こう対比すれば実力の差がある様に見えるが、忍がバケモノじみた
演奏技術を持っているだけで、凜花の実力も相当だった。

彼女とて、忍と同じく5歳からトランペットを吹いている身。河川
敷には散歩している人達が、あの二人は何者なのかと、興味の視線を
注ぐ者も少なくなかった。

「よーし、じゃあ今度は何か変えてみて吹いてみよー」

「おー！」

忍の掛け声に対し、凜花も元気よくそう返す。その後は、日が暮れ
るまで2つのトランペットの音が河川敷に響き渡った。

斎藤葵は、ほぼ毎日と言って良いほど、塾に通っている。今日は塾
の帰りに小笠原と食事をしたので、いつもより遅くなっていた。

塾の帰りは、いつも宇治川の河川敷を通る。人はあまり来ないが、
灯りは多い方なので安心して斎藤もこの道を使っている。

聞こえるのは、風邪で草木が靡く音と、遠くで微かに聞こえる車の
音のみ。

今日もその音をBGMに帰っていると、いつもとは違う音が聞こえ
て来た。

—————
♪——、♪♪♪、♪——、♪——
—————

金管の、特徴的な乾いた音。それが、二つ聞こえる。

その音がトランペットだと言う事は、斎藤にもすぐに分かった。

「……上手いなあ」

歩きながら、何処か羨ましそうな口調でそう呟く斎藤。先日、吹奏
楽部を辞めたばかりだ。そんな事を知ってか知らずか、あてつけの様

に河川敷に響くその音を聞いて、斎藤は苦い顔になる。

「……こんな時間まで……熱心だなあ」

もうとつくに日も暮れ、宇治川を見ると真っ黒に染まっている。そんな環境で誰が吹いてるのか、斎藤も少し気になった。

「……秋川君……？」

河川敷のベンチ、街灯の下で、男女揃ってトランペットを吹く姿が確認できる。

その内の一人は、斎藤が良く知っている人物だった。

「凜花、そこまで。そろそろ帰るぞ？」

「待って兄ちゃん。まだ、あと一回だけ」

「そう？、じゃあ、もう一回」

そして綺麗なトランペットの旋律が、また河川敷に響き渡る。二人とも、顔は真剣そのもの。そんな光景を、斎藤はボーツと眺めていた。

「っだー！ダメ！全然違うー!!」

そして、演奏が切れると、女の子の方が頭を抱えてそう叫んだ。

「もうおしまい。気持ちはヤバいほど分かるけど、親父がもう晩飯だって」

そして、そう言っつて忍はスマホの画面を凜花に見せつける。対して凜花はものすごく不服そうな顔になりながらも、渋々とトランペットの手入れを始めた。

「ありや、グリスがもう無いや。兄ちゃん持ってる？」

「お、ちよつと待ってな。グリスグリス……」

そして、後ろに置いてあったトランペットケースを取るために忍が後ろを振り返ると……

「あ」

「あ……」

その光景を見ていた斎藤と、目が合った。

「へー、秋川君の妹さんなんだ」

「はい、雨が上がったからって、一緒に練習しに来たんですよ」

宇治川の河川敷、街灯の下のベンチで、秋川と斎藤が話している。大事な話をすると言う事で、凜花には少し席を外して貰っている。

秋川はいつも通りだが、斎藤はなんだかやりづらそうにしていた。

「……コンクールの曲をやったの？」

「いや、今日はほぼ妹の面倒を見てましたね」

「そっか、良いお兄ちゃんなんだね」

「少しは時間も考えて欲しいですけどね」

困った様に笑って、秋川はそう言う。そして、少しの無言。斎藤がやりにくそうにしている理由は、やはり部活を辞めたからだだろう。

それを秋川も感じ取っているのか、お互いに気まずい雰囲気の流れていた。

「……………ごめんね」

すると、斎藤が突然秋川に謝った。

「?、……………何がですか？」

その“ごめんね”が、何を指しているのか分からず、秋川は聞き返す。

「……………去年の事。ずっと謝りたかったの。私、あの時何も出来なかったから……………」

ぽつりぽつりと、独白する様に斎藤は秋川に対してそう言った。

「……………別に、斎藤先輩が気にする事じゃ無いです。俺が辞めた理由も、あれが原因じゃなくて、つまんないって思ったから辞めただけで」

「でも、その”つまんない”って思うようになった原因を作ったのも、私達だから……………」

「……………」

斎藤の核心を突く発言に、秋川は何も言えなくなる。秋川自身も、心の底ではあの事件が原因だと思っっているのかも知れない。

それ程の出来事だったから。

「……………それが、部活を辞めた理由ですか？」

秋川の問い掛けに、斎藤の肩が少し跳ねる。

「……それは違うよ。受験勉強が忙しくなったのは本当。今日だって、塾帰りだし」

「……そうですか」

斎藤がそう言うのと、秋川は短くそれだけ返す。彼には、斎藤のその言葉が本心で無いように思えた。

「思えば、私はそんなに吹奏楽が好きじゃなかったんだなって思ったよ」

「……本当ですか？」

「……ホントだよ」

やっぱり、本心じゃ無い様に見える。このままでは斎藤が後悔すると、秋川は感じていた。

「……じゃあ、音楽は嫌いですか？」

「……え？」

すると、思ってもいない質問が秋川から飛び出し、斎藤は目を丸くする。

「色んなしがらみがある吹奏楽じゃなくて、普通の音楽です。オーケストラでも、ジャズでも、ロックでも。何か好きな音楽はありますか？今聴きたい音楽でも良いです」

「……どうして、そんな事……」

「大事な事なんです。答えてくれますか？」

真つ直ぐ、斎藤の目を見て秋川はそう言う。そんな彼の視線に充てられたのか、斎藤は少し考えた後、

「……ジャズかな？」

一言、それだけ答えた。それを聞いて、秋川は薄く微笑む。

「分かりました。じゃあ、一曲吹きますね」

「え？、な、なんで……」

「音楽が好きなんですよね？じゃあ、ここで一曲吹きます。それを聞いてから、もう一度辞めるか辞めないか決めて貰って良いですか？」

尚も真つ直ぐ、秋川は射抜く様に斎藤を見据えてそう言う。そんな視線に耐えかねたのか、斎藤はついに視線を逸らした。

「……………」

「…………無言って事は、吹いて良いって事ですね？…………じゃあ、お待ちせしました。本日は秋川忍のソロコンサートにお越しいただき、ありがとうございます」

すると、秋川は優雅に一礼して、コンサートの司会の様な口調でそう言った。

「本日は、貴女にピッタリの素敵なナンバーをご用意しました。どうぞお聴き下さい」

そして、そう言う秋川は姿勢を直し、正面を向く。正しい音は、正しい姿勢からだ。

「…………スウ……………」

そして、観客一人の、秋川のソロコンサートが始まった。

「…………お？、ニューヨークニューヨークかあ、良いセンスしてるなあ」

席を外していた凜花が、そんな事を呟く。聞こえて来たのは、フランク・シナトラのバラード。”ニューヨークニューヨーク”。この前吹いたムーソリバーと同じく、歌をトランペットに落とし込んだものだった。

夜の宇治川。その静かな河川敷に、優雅なメロディが流れる。

「…………あの人、これ聴いて、何を思うんだろうなあ……………」

ポツリと、凜花はそう呟く。しかしその言葉は、真つ暗な宇治川にかき消されていく様に、霞んで行った。

「……………ありがとうございました。…………どうでしたか？斎藤先輩？」

曲を吹き終わると、いつもの様に秋川は感想を求める。

「やっぱ上手だね。ソロコンで賞を取るのも納得だよ」

対して斎藤は、何処か吹っ切れた様に微笑んでそう言った。

「……そうですか。それで、部活には戻りますか？」

秋川がそう聞くと、斎藤は黙り込む。そして、しばらく経ったのち、意を決した様に彼女は秋川を見つめる。

「私は」

「あ、おかえりー。兄ちゃん」

忍が戻って来たのは、演奏が終わってからしばらく経った後だった。

帰って来た彼を見つけると、凜花が軽く声をかける。

「凜花」

すると、何処か弱気な声で、忍は妹の名前を呼んだ。

「ごめん、俺、まだまだ実力不足みたい」

そして、軽く笑って忍はそう言い放った。心から笑ってない事は、凜花には直ぐに分かった。兄妹である。尊敬する兄の心の機微を感じ取れないほど、凜花は鈍く無い。

「……何があったか分かんないけど、今日は私が慰めてあげよう」
そう言って凜花は足りない身長を目一杯伸ばし、忍の頭を撫でた。

「ははっ、俺は出来た妹を持ったね……」

夜の宇治川は、何処かしんみりとした雰囲気纏っていた。

性質

「おーっし、久々に晴れたな！」

秋川が音楽室から空を覗き、言葉通り晴れやかな表情でそう言う。ここ数日続いた曇天も遠慮してくれたのか、久方ぶりに見る青空だった。

「やっぱり晴れはいいですなー。塚もっさんや」

声色もいつもの様に戻り、秋川は隣に居た塚本に対してそう言う。

「俺は、曇りも好きですけどね」

同じく空を見上げ、秋川の隣に居た塚本はそう返す。

「でも、どっちかって言うത്？」

「そりやまあ、晴れの方が好きですけど……」

こんなどうでもいいやり取りは、男子特有と言ったものだろう。

「みゆきも喜んでおられる」

「またそれですか」

ともかく、曇り空の頃とは打って変わって、いつも以上にテンションの高い秋川だった。

「昨日は休んでしまつてすみませんでした。体調も戻ったので、今日からまた頑張ります」

教壇に戻って来た小笠原がそう言うと、周りから拍手が起きる。それに、「拍手するところじゃ無いって……」と、恥ずかしげにそう言った。

「これからは皆勤賞で頼むよー？私はい、楽器と戯れる為にここに居るんだからー」

すると、田中が手を挙げておちよくる様にそう言った。

「分かってるよ。じゃあ、チューニング。ヒロネから」

小笠原がそう言うと、いつもの様に練習が始まる。しかし、テナーサクスの席を見ると、ポツカリと穴が開いた様に一つの空席が目立った。

「何か、違うんよなー……」

ここは、トランペットパートの練習教室。ソロパートを吹き終えた秋川が、微妙そうな顔付きでそう呟いた。

「違うって？フツーに上手かったじゃん？」

対して滝野が、何処が悪かったんだ？と言う風に、秋川にそう返す。

「違うんよ、タツキー。ここは何って言うか、こう、もつと”孤高”な感じを出さなきゃいけないですよ……」

そして考え込む様にして、秋川は唸る。

「孤高って、どゆこと？」

それに反応したのは、2年の加部だった。曖昧な秋川の発言に首を傾げる。

「このソロパートは、三日月の照りつける草原で、ヒロインが優雅に、そして孤高に踊っているシーン。それを表現するには、俺の技術じゃまだ足りない……」

身振り手振り、オーバーな体の動きをして秋川はそう説明する。

「そんなストーリーあったっけ？」

「無い。今俺が考えた」

加部の問い掛けに秋川はあっけらかんと返し、パートメンバーは一様にズッコケる。

何とも自由人らしい秋川の考え方だった。

「もう一回ソロ吹いてみるから、聞いてみ？」

そう言ってもう一度姿勢を直し、秋川はトランペットを構える。

—————
♪—————、♪、♪♪—————……

やはり上手い。誰が聴いても、そう思う様な音色。パートメンバーも秋川の音に耳を傾けるが、誰一人何が違うのか見当も付かなかった。

そして、柔らかい音と共に、ソロパートを吹き終える。

「……ふう、……どう？」

「やっぱ、何が違うのか分かんねーよ」

滝野が、微妙な顔つきになって秋川の演奏にそう評価を下した。

「だーかーらー。違うんだってー。……はあ……俺、個人練行ってます……」

期待した感想では無かったのか、がつくしと肩を落とすと、秋川は個人練の為に教室から出て行った。

「……何か、分かる気がするな？」

秋川が教室を出て少し経つと、今度は中世古がそう呟いた。

「分かるって、アイツの言ってる事がですか？」

そんな中世古の言葉に反応したのは、吉川だった。彼女は分かっているのか、首を傾げている。

「うん、なんとなくだけど、音の性質が違うって言うか、すっごく上手なんだけどね？でもそれが曲に合ってるかどうかは、別の話で……」

中世古も何処か迷ってる様に、そう呟く。

「気分屋だから、テキトーな事言ってるだけじゃ無いですかあ？」

すると、吉川が馬鹿にしたような顔でそう言い放った。

「もー、そんなこと言わないの。優子ちゃんだって、秋川君の音に対するこだわりは知ってるでしょ？」

「そりゃ、知ってますけど……」

そんな吉川に、困ったように笑ってそう返す中世古。それに吉川は、面白くない様な顔になった。

—————
♪—————、♪、♪—————……
—————

すると、先程のか秋川が吹いた場所と同じフレーズが聞こえて来る。

もう秋川が個人練を始めたのか。……いや、違う。

「……高坂さんだね」

今日も一人で個人練習をしている、高坂麗奈だ。

一人、中世古が、何か思い詰めた様な表情でそう呟く。空を切り裂き、全てを置き去りにする様な、”孤高”の音だった。

「……うん、私も、個人練行ってくるね？」

「え？、あ、はい……」

そして、譜面台と椅子を持って、中世古も足早に教室から出て行く。残されたパートメンバーは、その光景を何処か複雑そうな面持ちで見つめていた。

誘い

最近、学校の空気がどこか浮き足立っている。理由は数日後に行われる祭りがあるからだろう。

”あがた祭り”

毎年、6月5日から翌日6日まで行われる宇治市の祭りだ。通りには屋台も出るので、街が一様にイベントの空気になる。

そして、春多き高校生達は、この時期になると突然ソワソワし出す。

「なあ、アツキー。5日って何してんの？」

昼休み、購買で買ったパンを食べながら、滝野が秋川に対しそう聞く。それはこの北宇治高校でも例に漏れず、何処か落ち着かない雰囲気醸し出していた。

「何って、部活だよ」

対して、弁当のタコさんウィンナーを頬張りながら、秋川はそう返す。

「ちげーよ、その後だよ。あがた祭り。もう予定入ってんのか？」

滝野がそう言うと、秋川は興味なさそうな表情から、怪訝そうな顔に変化させる。

「……なに？、タツキー。もう女の子誘うの諦めたの？」

少し小馬鹿にした様な、挑発する様な笑みを浮かべて秋川はそう言う。

彼も地元民。この祭りの重要さは理解している。恋人のメツカとまでは行かないが、それでも異性を意識するには十分なイベントだった。

「ぐっ!!、余計なお世話だっつーの!……実はなあ、俺の妹が、お前に会いたいつて言ってるんだよ」

凶星を突かれたのか、滝野が誤魔化す様にそう言う。対して秋川は首を傾げた。

「妹? タツキー。妹居たんだ」

「ああ、2個下のな」

「てか、なんで俺に会いたがってるの? タツキーの妹さん、俺会った

こと無い筈だけど……」

秋川は色々思い出そうとするが、滝野の妹に会った記憶など、頭の中に存在しなかった。

と言うか、滝野に妹が居る事さえ、今知ったぐらいである。

「去年のソロコンの最優秀賞受賞者が、どんな人が会ってみたいんだってさ」

「へえー、そんな事知ってるなんて、光栄ですなあ。うーん、確か予定は入ってなかったと思うけど……」

秋川は考える様にしてそう言う。すると、滝野は意外そうな顔になった。

「あれ？、ホントに入って無かったのか？てっきり吉川と行くもんだと思ってたけど」

「………なんで吉川なんだよ」

吉川の名前が滝野の口から出た途端、バツが悪そうに秋川は顔を背ける。

それを見て滝野は困った様に苦笑いを浮かべた。

「あのなあ……素直じゃ無いつてのは、後々損するぞ？」

「……タツキーに言われたくないかなーって」

「なんだ？この」

バカにする様な秋川の発言に、滝野は少し顔を顰める。

しかしこれ以上言っても無駄だと感じたのか、諦める様に「はあ………」と一つため息をつく

「相変わらず素直で無い様で。……まあ、良いや。とりあえず、他の予定が入ったら断っても良いから、考えといてくれよ」

「だから、予定無いって」

何処か含みを持たせた滝野のその発言に、鬱陶しそうな顔をして秋川はそう返した。

祭りの雰囲気は充てられているのは、この吹奏楽部も例外では無

い。

「はい。では、今日はここまでです。各自、今日言われた事をクリアする様にして下さい」

「はい」

いつもの様に滝先生がそう言うのと、今日の部活が終了する。すると、トランプペットを持ったまま、すぐさま吉川が中世古に近づいて行った。

「香織せんぱーい！あがた祭り、一緒に」

「ごめーん、その日はもうあすかと晴香と約束しちゃった」

「えー!?」

が、一瞬にして振られた。ご愁傷様である。

「あ、あの！秋川先輩!!」

すると、今度は少し離れた場所で秋川が1年に話しかけられた。

「君は、……えーっと」

見慣れない顔だったので、秋川は必死に思い出そうとする。

「ふ、フルート一年の高橋ですー」

高橋と名乗った少女が自己紹介をすると、秋川は合点が行ったかのような顔になる。

「おー、姫先輩にいつもイジられてる……」

姫先輩とは、フルートのパトリーカーの姫神の事だ。秋川に変な覚え方をされていた高橋は、少し困った様な顔になった。

「は、はい。その高橋で合ってます……」

しかし、事実でもあったので、渋々と言った感じで高橋は肯定する。「で、どしたの?」

秋川がそう聞くと、高橋は何処か言いにくそうに、体をソワソワさせる。

そして、一つ深呼吸をした後、意を決した様に口を開いた。

「あ、あのー！あがた祭りの日って、空いてますか!？」

「祭りの日?」

秋川がそう聞き返し、高橋は一つ大きく頷く。と言う事は、彼女か

ら誘ってくれていると言う事だろう。

普段の奇行が目立ち過ぎて、霞みまくっているが、秋川はイケメンと言える顔立ちだ。

177センチの高めの身長に、シュツとしたスタイル。そして、そのひょうきんな性格。

人気が出る要素は揃っている。

「あー、そーねえー……………」

対して、秋川は考える。確かに、滝野は予定があつたら断つても良いと言っていた。

確かに女の子とのデートは楽しい。だが、それ以上に…………

「……………」

秋川は、吉川の方を無意識に見つめていた。中世古に振られて、しよげているところを加部に慰められている。

「……………ダメ、ですか?」

秋川から返事が無かったからか、痺れを切らした高橋がおずおずとそう聞いてきた。

「ん?、ああ、そうだねえ……………遠慮しとくよ。その日は、予定入ってるからさ」

「そ、そうですか……………失礼します……………」

秋川に振られると、高橋は目に見えて落ち込み、その場を去る。

「……………ありや、悪いことしちゃったかな?」

トボトボと、悲壮感を漂わせた高橋の背中を見ると、秋川は聞こえない声でそう呟いた。

そして気を取り直し、しよげている吉川の方へと向かう。

「お、なに吉川?、香織先輩にまた振られたー?」

「……………何?、冷やかしなら帰ってちょうだい」

いつも通り、小馬鹿にする様に秋川がそう聞くと、吉川は不機嫌な顔を隠そうともせずに、低めの声で秋川に対しそう返す。

いつも通りのやり取りだ。秋川がおちよくり、吉川が鬱陶しそうに返す。

「いやはや、これで何連敗か……………記録更新したんじゃない?」

「うっさいわねえ、アンタはどうなのよ？」

すると、吉川の反撃が来た。秋川は少し考える素振りをすると、続いて薄く笑う。

「そうだねえ、”まだ” 予定は無いかな？」

そして、何処か含みを持たせた様に、そう言い放った。

「なによ、アタシと同じじゃない」

「そうだね。吉川と同じだ」

秋川がそれだけ返すと、二人の間に沈黙が走る。ここで祭りの話題を先に出してはダメだ。そんな頑固な気持ちだが、二人の中に共通してあった。

「……ねえ、秋川」

「……なに？」

そして、最初に口を開いたのは、吉川の方だった。

「………やっぱ何でもない！早く片付けしなさいよ！そこに居られると邪魔なの!!」

「あでっ!!」

しかし、いつも通り秋川に突っ掛かる様にして、タイキツクを喰らわす。対して秋川は、「へいへい」と、気怠そうに返事をして、楽器の片付けを始めた。

「バーカ………」

その言葉を呟いたのは、果たしてどちらなのか。それは当人達にしか分からない。

遊びつくし

祭りが始まる。

当日、宇治駅の周辺は人でごった返していた。元々観光地の側面が強いので人は多い方なのだが、今日は特別だ。

祭りの熱に充てられた屋台通りは、カップルや家族連れ、友達同士などでごった返している。

「いくぞー、凜花」

「ちよ、ちよっと待って兄ちゃん！」

秋川家の玄関で忍がそう言うと、凜花が慌てて2階から降りてくる。

「ペット持った？」

「もちろん！」

お祭りだと言うのに、二人の手にはトランプペットケースが握られていた。

忍がそう聞くと、凜花はニッコリと笑ってケースを忍に見せつける。

「じゃ、行くべや」

「行くべやー」

準備が出来たことを確認すると、忍は玄関の扉を開ける。そして、普段より何処か賑やかな街に、二人は繰り出して行った。

「遅いぞアッキー。10分遅刻」

「そりゃ、隣のに言ってくれ」

宇治川の河川敷、先に待っていた滝野にそう言われると、悪びれもせずに忍はそう返した。

「ごんにちはー。妹の凜花ですー。兄がいつもお世話になってますー」

そして、凜花が滝野に対し挨拶をする。自由過ぎる兄を持ったからだろうか、礼儀はしっかりとしていた。

「こんにちは。俺はアツキーと同じトランペットパートの滝野純一つす。……で、こっちが……」

滝野も軽く自己紹介をすると、続けて隣に居た少女に目線を移した。

「た、滝野さやかです！に、西中の吹奏楽部でトランペット吹いてます！」

緊張の面持ちで、さやかと名乗った人物は自己紹介した。

「おー、君がタツキーの妹さんかー。トランペット吹いてんだねー。凜花と同じじゃん」

興味津々に、忍は滝野の妹であるさやかを見つめる。

結局、忍は滝野の言う通り、滝野の妹と会うことにした。男2人女1人ではバランスが悪いと言うことで、さやかと同じ年である凜花も一緒にお祭りに行こうと言う流れになり、今に至る。

「あ、秋川忍さんですよ！北宇治の！」

すると、もう一度確認する様にさやかが忍に対してそう聞く。

「うん、紛れもなく忍です」

忍がそう言うと、さやかは詰め寄る様に忍に近づいて行った。

「去年のソロコン、すっごい良かったです!!私もあんな吹き方したって、そう思いました!!柔らかくて、優しくてあったかい……今までで一番感動した演奏でした!!」

そして、目を最大限に輝かせて、さやかは忍の演奏について熱弁する。

「おー、そりや光栄なこつて。てか、よく俺の事なんか知ってたね？」

「当たり前です！こころ辺でトランペットを吹いている人で、秋川さん知らない人は居ないですから!!一年生でソロコンの最優秀賞を受賞するなんて、出来る事じゃないですから!!」

なおも、少し鼻息を荒くしながら、さやかは忍について熱弁する。少々熱が入り過ぎてしまっていたのか、流石の忍も苦笑いになっていた。

た。

「そ、そりや良かった。取り敢えず、屋台とか回ってみる?」

「さんせー」

「だな」

忍がそう提案すると、凜花と滝野からも了承の声が返ってくる。

「はい……」

そして、さやかは何処か熱っぽい声でそう返した。

「射的って、コツがあるんよなー。大きいのを狙うんなら、技術が必要なんすよ」

場所は射的屋。忍と滝野、2人して射的の銃にコルクを詰めながら、しみじみと忍はそう言う。

「なんか、プロっぽい事言ってるなー」

それに、滝野は半笑いになってそう返した。

「ホントだってー。俺は射的には一番自信があんだよ。と言う訳でお嬢さん、何か取って欲しいリクエストとかありますか?」

気分は西部劇のガンマン。ハードボイルドに銃口を息で吹きかける仕草をして、後ろで控えていた凜花とさやかに、忍はそう聞く。

「はいはい!私、あのチューバ君が欲しー!」

「わ、私は、トロンボーンのとロンちゃんか……」

凜花は元気よくチューバ君を、さやかは少し控えめにトロンちゃんをリクエストして来た。

「りよーかい。じゃあ、タツキーはチューバ君を、俺はトロンちゃんを狙うわ」

「えー?なんで俺が……」

すると、忍に巻き込まれた滝野は、少し渋る仕草をした。

「麗かな乙女達が、俺たちの勇姿を見ているのだ……ここで決めなきや、男じゃ無いってもんでしょ?」

「そっだぞー!」

「……兄さん、カッコ悪い……」

すると、忍の発言に乗つかる様にして、凜花とさやかが続いた。

「分かった！分かったよ……じゃあ俺がチューバ君で、アッキーがトロンちゃんな？」

困った様に滝野がそう言うのと、忍は満足そうな顔になる。

「よーし！じゃあ、さやかちゃん、見ていてくれ……華麗に、そして豪快にトロンちゃんを墮として見せる……」

「か、カッコいい……」

キザつたらしくそう言う忍に対し、さやかは熱っぽい声でそう返した。

「なんだ？この茶番劇は。」

すっかり日も暮れ、祭りの雰囲気にも各々慣れて来た。祭りという事で、遊びに遊びまくった4人の両手には、戦利品がたんまりある。

金魚掬いで取ったスーパーパーボール、水風船。射的の景品。

特に忍と凜花は肩にトランプペットケースを背負って居るので、中々の光景になっていた。

「大分遊んだし食ったな。もう大体回ったかな？」

ついさっき買ったわたあめを頬張りながら、忍はそう呟く。

「そうだなー。じゃあ、神社の方にも行ってみる？」

すると、滝野がそんな提案をして来た。

「お、いいねー。じゃあ、おみくじで運試しでもしますか」

忍も乗り気の様で、滝野の提案に賛成する。

「あ、秋川君、滝野君」

すると、前から見知った顔が3人、歩いて来た。中世古と、田中、小笠原の三年生組だ。

「おー、香織先輩、あすか先輩、それと部長じゃ無いつすか」

「それとつて何だよ」

忍にオマケの様な扱いをされた小笠原が、すぐさまツツコミを入れた。

「あははっ、君達は随分お祭りを楽しんでる様だねー。スーパー帰りの主婦みたいになってるよー?」

4人の光景を見て、田中が大きく笑ってそんな指摘をする。

「そりやもう、大漁ですわ。これから神社でおみくじ引いて、もう一発景気付けです」

「おー?そりやいいねーアタシ達も神社の帰りなんだー」

そんな田中に、忍も全力の笑顔で返す。

「あれ、後ろの2人は?」

すると、中世古が忍と滝野の後ろに着いて来ていた妹達に触れる。

「俺らの妹です。右がタツキー。左が俺のつす」

「へえー、2人とも妹さん居たんだね。こんにちは」

「こ、こんにちは……」

中世古に挨拶され、凜花とさやかも緊張の面持ちで挨拶を返す。流石に3つも離れた先輩には、緊張する様だ。

「ふふっ、緊張しなくていいよ?私は中世古香織、北宇治のトランプペットパートのリーダーをしています」

中世古がそう言つて一礼すると、それに見惚れる様に凜花とさやかはボーツと彼女を見つめる。

これは、マドンナの魔性にやられたか?

「あ、よ、よろしくお願いします!!」

そして、我に返った凜花が、少し顔を赤らめて慌てて礼を返した。どうやら彼女はやられたらしい。

晴れてカオリストの仲間入りだ。吉川にたつぷり可愛いがられる。

「先輩達は、これからどうするんですか?」

すると、忍がそんな事を聞く。

「アタシ達ももう大分回ったからねー。もうすぐ解散かな?」

そう返したのは、田中だった。

「そうですね。じゃあ、また明日、部活で会いましょう」

「うん、じゃあ、まったねー」

田中がそう言つて軽く手を振り、忍の横を通り過ぎる。

「またね。それとアッキー。あんまり部活で問題行動起こさないでよ?。」

続いて、釘を刺す様に、部長らしく小笠原が忍に対してそう言う。

「はっはー。善処しますー」

「もー、ホントに分かつてんだか」

適当にそう返す忍に対し、小笠原は困った様になった。

「じゃあ、私達そろそろ行くから。じゃあね、秋川君、滝野君。……

オーデイション。お互い頑張ろうね?。」

そして、最後に中世古が2人に激励をくれた。

「はい、先輩も」

「は、はい!頑張るっす!」

それに、2人も各々の返事を返す。

「あ、そうだ」

すると、何かを思い出した様に、中世古はそう呟く。そして、少し意地悪そうな顔をして、忍の方に近づく。そして左手で口を隠す様にして、顔を忍の耳にまで持って来た。

「優子ちゃん、まだ神社に居たよ?。」

「え?。」

いきなりの発言に、忍は驚いた顔になって聞き返してしまう。それを見て満足そうな表情になると、中世古は今度こそその場から離れて行った。

「じゃあ、頑張つてね?秋川君!」

最後に、いい笑顔で中世古は忍に対してそう言う。

その頑張つては、果たしてどんな意味で言ったのやら。

おみくじ

このお祭りの名前の元となった、あがた縣神社は、そこまで大きい神社では無い。

隣には10円玉で有名な平等院鳳凰堂があり、その影に隠れる様な小さな神社なのだ。

しかし、そんな神社もお祭りの日になれば賑わいを見せる。境内には、屋台通りと同じく沢山の人が見られる。

そして、賽銭箱の前では、2人して手を合わせている男達が居た。

「何お願いした?」

「世界平和」

滝野がそう聞くと、忍はぎつくりとそう返す。どうやら壮大なお願いを神様にした様だ。

「世界平和って……オーディション上手く行きますようにとかじゃ無いの?」

「オーディションは自分の実力でなんとかなるでしょ?こう言うのは、自分が叶えられないお願いをするもんなんですー」

ケラケラと笑って、忍はそう言う。それに滝野は、「アツキーらしいな」と、それだけ返した。

「じゃあ、次はおみくじタイムー。一番運勢が悪かった人は、景品の荷物持ちね」

「おー!良いねー!」

「えー!」

忍の提案に、凜花は食い付き、さやかは困惑した声を上げる。妹である凜花と、付き合いの長い滝野は慣れているが、さやかはこの忍の自由奔放さに振り回されていた。

「……でも、素敵……」

だが、それぐらいでへこたれる彼女では無かった。恋は盲目と言うが、それに近い状態に、さやかはなっていたのである。

しかし、恋慕ではなく、憧れに近い感情ではあった。

100円玉を箱の中に入れ、おみくじを各自一枚引く。折り畳まれ

た白い紙が、紐で結ばれている。

それを4人一斉に解いて、中身を確認する。

「お、やたつ、私大吉」

凜花は大吉。

「あ、私末吉」

さやかは末吉。

「げ、俺凶じゃん……」

そして、滝野は残念ながら凶を引き当てた様だ。

それに続く様に、忍も中身を確認する。

「お、中吉」

紙を開くと、上の方に大きな文字で”中吉”と書いていた。その下

には、金運やら仕事運やら様々なアドバイスが書いてある。

「という事で、タツキーがビリだねー。じゃあ、よろしく」

「はい……」

そして、忍は問答無用で滝野にトランプケースを除いた荷物を預ける。それを見て、凜花とさやかも無遠慮に滝野に荷物を預けた。

「……あのー、自分これじゃあおみくじ読めないんですけど……」

滝野が悲壮感を漂わせた顔でそう言うと、忍は滝野が右手に握っていたおみくじを取る。

「俺が呼んであげるよ。何から聞きたい？」

「……恋愛」

不服そうな顔で滝野がそう言うと、忍はおみくじに書いてある内容を読み上げる。

「待人、来ず。しばし待たれよ。だつてさ」

「フアツク!!!」

忍がそう言うと、心底恨めしそうな顔で、滝野はそう叫んだ。

「さやかちゃんはどう？」

「私は、こんな感じ。凜花ちゃんは？」

隣では、この数時間ですっかり仲良くなったさやかと凜花が、おみくじを見せ合って居る。

それを見て忍も、自分の引いたおみくじに目を落とした。

願望 油断する事なかれ。足元を掬われぬ様注意すべし。
学問 危機感を持つべし。
失物 出る、気長に待つべし。
そんな、ありきたりな事が書いてあった。そして、忍の目に一つの
アドバイスが留まる。

待人 自ら行くべし。相手は待っている。

恋愛運の欄には、そんな事が書いてあった。
それを見て、忍は周りをキョロキョロ見渡す。一体、何を探しているのか。

縣神社は、小さな神社だ。境内は狭く、周りを見回せば何処に誰が居るのかがはつきりと分かる。

待人なんて、すぐに見つかる様な場所だ。

「……居た」

忍が何度か境内を見回すと、遂に目立つ大きなリボンを頭に付けた、1人の少女が忍の目に入った。なぜか1人、ベンチに座りスマホの画面に顔を落としている。

「……タツキー、ちよつと行ってくるわ」

「えっ、何処に?」

そして滝野の疑問に返事を返す事なく、忍は足早にその少女の元に向かつて行く。

「おー、待人、来たるだつて! さやかちゃん、良いの引いたねー」
対して、こちらは妹達。感心した様に凜花がそう言うと、さやかは何処かもしもじとし出す。

「そ、そうかな? ……じゃ、じゃあ、忍先輩と……」

そして、恋愛運が良かった事をダシに、何処か恥ずかしそうな顔でさやかが忍の方向へと顔を向ける。

「……あれ?」

しかし、そこにはもう忍の姿は無かった。

「おねーさん、1人？良かったら、一緒に屋台でも周らない？」
祭りの空気に充てられて、こうしてナンパが起こる事は、珍しくは無い。

それは今、吉川優子の身に起こっていた。

吉川は、けっこうモテる。小さい身長とその可愛らしい見た目は、男子の視線を惹き付けやすい。なので、この様にナンパされる事も、初めての経験では無かった。

「あ、ごめんなさい。今、友達と待ち合わせをしていてー」

慣れた様に、猫撫で声でそう返して、仮面の笑顔を張り付けてそのナンパ師の方向へと顔を向ける。

しかし、その顔は一瞬で無表情に変わった。

「……なんだ、アンタか……」

心底面白く無い顔をして、吐き捨てる様に吉川はそう返す。

「なんだよー？せつかく一人ぼっちのところを話し掛けてやったのにー」

そのナンパ師の名は、秋川忍と言った。忍はすぐさま吉川の隣に座る。

「何？迷子？」

「んな訳無いでしょ？夏紀と友恵が願い事するって言うから、ここで待ってんのよ」

そう言って、吉川は賽銭箱の前の行列を指差す。そこには、言葉通り中川と加部の姿があった。

「吉川は行かないの？」

「神頼みって、あんま好きじゃ無いのよね」

忍がそう聞くと、吐き捨てる様に吉川がそう返す。妙にリアリストな部分があるらしい。

「……で、なんでアンタは1人なのよ？場違いなトランプットケー

スまで持って」

「んー、迷子？」

すると、逆に吉川から質問され、忍は肩をすくめてそう返す。それを聞いて、吉川は心底呆れた顔になった。

「迷子なのアンタの方じゃない。……はあ、アンタと一緒に行動していた奴に同情するわ」

どこか馬鹿にするような顔で、吉川はそう言い放つ。

「……で、何の用よ？」

すると、吉川が真つ直ぐ忍の目を捉え、そう聞いてくる。何かを期待する様な、そんな目。

それを、忍も感じ取っていた。

忍は、おみくじに書いてあった事を思い出す。

自ら行くべし。相手は待っている。

中吉のおみくじに赤文字で書かれていた、恋愛へのアドバイス。忍は、そこまでスピリチュアルなものを信じるタチでは無い。しかし、今のところあのおみくじ通りに事が進んでいる。

ならば、今は都合よくそれに背中を押してもらおう。

おみくじという免罪符を貰った忍は、薄く笑って吉川にある提案をする。

「なあ、吉川。今から2人きりになろつか？」

美女と野獣

「やっぱやんなくて良かったんじゃない?」

「こう言うのは気持ちなの!もうオーディションも近いんだから、ここまで来たらお願いしていいよ!」

賽銭箱の前、中川が気怠そうにそう言うと、加部が必死にそう返す。中川としては賽銭箱の前に並んでまで何があるのかと言いたところだが、加部はこう言うスピリチュアルな部分は信じるタイプらしい。

「アタシとしては早くおみくじ引きたいんだけどねー」

「こう言うのは神様にお祈りしてから引いた方が効果があるの!ほら、もうちよつとで順番来るんだから付き合って!」

引くにも引けない感じになっているのか、ムキになって加部はそう言う。対して中川は「はいはい」と、受け流すようにそう返した。

「お?」

すると、中川が何かを見つけたのか、面白がるような声を上げる。

「ねー、友恵。あれ」

そして、意地悪そうな笑みを浮かべて、とある場所を指さした。

「えー、何?……ほう……」

それを見て、加部も面白がる様な口調に変わる。

そこには、ベンチで隣同士に座っている忍と吉川の姿が確認出来た。

「……私たち、お邪魔みたいかなー?」

「……そうだねー。優子にこの後はお好きにどうぞって、メッセージ送っちゃうか?」

そして、2人ともニヤつきながら、スマホに向けてメッセージを打ち始めた。

「……2人きりつて、アンタ……」

突然の忍の提案に、吉川は驚いた表情になる。こうも直接言われるとは思ってなかったのだろう。驚くと同時に、頬が少し赤らんでいた。

「嫌?」

「嫌って言うか……」

吉川は俯く。顔は赤く、何か迷っている様な態度だ。

「あ、アタシ、夏紀とかも居るし……」

ピロンツ

すると、吉川の右手に握られていたスマホから、通知の音が鳴った。

吉川はそれに逃げる様に、スマホを確認する。

「……あんのアホ共……」

そして恨めしそうな表情に変わって、スマホに向かって恨み節を呟く。吉川が一瞬、賽銭箱の方へ顔を向けると、これでもかと言うくらいニヤついた表情を浮かべている中川と加部の姿があった。

「……良いわよ。で、どこ行くの?」

すると、観念した様な口調で、吉川は忍にそう言い放つ。それに忍は、ホツとした様な表情を浮かべた。

「良かった。ちようど、良い場所があるんよね」

そして、そう言うと、忍は吉川の手を取る。

「あ、ちよつと!!」

そのまま吉川の手を引っ張り、忍は元の場所へと戻って行った。

「お、アツキー、どこ行ってたんだ? さやかが随分と探して……つて、吉川?」

元の場所へと戻ると、少し驚いた顔で滝野がそう言う。吉川は、少し顔を赤らめて、無言で俯いていた。

「あれ、兄ちゃん、その人誰?」

すると、続けて凜花が首を傾げて、そんな事を聞いて来た。

「吉川。トランペットパートの同級生。それより凜花、お前のトラ

ンペット、貸してくれる？」

そして、足りなさすぎる吉川の説明を終えると、忍が凜花にそうお願いして来た。

急なお願いに凜花は面を喰らう。

「え、良いけど、何で？」

「何でも。ダメかな？」

忍にそうお願いされ、凜花は少し考える。自分の知らない女の人と、兄は手を繋いでいる。そして、繋がれている女の人は、どこか恥ずかしそうに俯いている。

兄が言うには、この女の人もトランペット吹きらしい。しかしこの人は今。トランペットを持っていない。それを踏まえて、兄は自分にトランペットを貸して欲しいと頼み込んで来た。

……つまり、ラブ&ピース？

「良いよ。マッピ、ちゃんと綺麗にして返してね？」

一瞬で状況を理解した凜花は、肩に担いでたトランペットケースを忍に渡す。

「おう、サンキュー。じゃ、ちよつと借りるね。じゃ、吉川、行くべや」

凜花からケースを受け取ると、簡潔にそれだけ言って、再び忍は吉川の手を引っ張り、その場から離れる。

「……あんな静かな吉川、初めて見たな……」

遠くなる2人の影を見ながら、滝野はそう呟く。

2人が向かって行った先は、河川敷の方だった。

「もー、忍先輩、何処にも居ないよー……凜花ちゃんー、どっかで見なかったー？」

すると、タイミングが良いのか悪いのか、忍の事を探しに行っていたさやかガクシと肩を落として帰ってきた。

「今、どっかに行っちゃったよ？」

「えー!？」

どうもこの滝野さやかと言う少女は、兄と同じく、こう言うのにと

ことん運が無いらしい。

「……………ここまで連れてきて、何するつもりなのよ?」

やって来た場所は、宇治川の河川敷。宇治橋に近い場所で、祭りもあつてか、人通りがかなり多かつた。

「何って、トランペット持って来てんだから、そりゃ吹くだろ」

「はあ?!(どこで?!)」

まるで当然かの如くそう言い放った忍に対し、驚いた声で吉川はそう返す。

「うん、元々は凜花とここでコンサートでもやろうと思つたんだけど、吉川見て気が変わった。吹けるよな?」

そう言つて、忍は凜花のトランペットケースを吉川に渡す。吉川はいきなりの展開に困惑している様で、呆然と演奏の準備に取り掛かる忍を見つめていた。

「な、なにもここで吹く事無いんじゃない?」

周りを見渡しながら、吉川は顔を引き攣らせてそう言う。今日は特に人通りが多い。河川敷には、カップルや家族連れ、様々な人達がい

た。そんな中でこの男は、一緒にトランペットを吹こうなどと提案して来たのだ。

「嫌?」

「嫌に決まってるでしょ?!何でこんな目立つ場所で、アンタと一緒に吹かなきゃ行かないのよ?!」

「俺は、吉川と一緒にここで吹きたいけど?」

反論する吉川に、忍は真っ直ぐ彼女の目を見据えてそう言う。そんな彼の視線に、吉川は一瞬にしてしおらしくなってしまった。

「っ!!……………っもー!!吹けば良いんですよ!吹けば!!」

そして、しおらしい状態からヤケクソ気味に声を張り上げて、吉川はケースからトランペットを取り出す。その顔は、夜でもその赤さが分かるくらいに、真っ赤に染まっていた。

それを見て、忍は満足そうに微笑む。

「流石吉川。……確かに、ここは目立つね。トランペットだから、音も高く大きい。でも、この河川敷にいる人達は、俺達の演奏に絶対注目するはずだよ」

忍は目を輝かせ、嬉々としてそう言いながら演奏の準備を進める。

”音楽は、聴き手がいてこそ”

秋川忍の信念。つまりこれは、彼にとっては最高のステージに他ならないのだ。

「それに、コンクールじゃあもつと多くの人に聞いてもらうんだから、こんなんでビビってちゃ、本番で力出せないよ?」

いつもの様に、どこか挑発する様に、忍は続けてそう言い放った。

「……ホント、アンタって相変わらず。……良いわ。やってやろうじゃないの」

そして、そんな忍の気持ちに充てられたのか、腹が決まった吉川は彼と同じく演奏の準備を始めた。

「で、曲は何にすんのよ?」

吉川がそう尋ねると、忍は少し考える素振りをする。そして、何か思い出したかの様に、忍は薄く微笑んだ。

「………そうだね、”美女と野獣”とか、どう?」

忍そう言うと、吉川は一瞬目を見開く。それは、吉川もよく知っている曲。

何故なら、1年生の頃に遊びで、忍と一緒に二重奏をした曲だったからだ。

「………良いわよ。って事は、アタシが上のパートね?」

「………うん、よろしく。じゃ、チューニングしよつか?」

忍がそう言うと、2人してマウスピースに口を付ける。そして、チューニングB（ベ）の音が、宇治川の河川敷に響く。その音を聴いた人達が、一斉に忍と吉川の方に視線を向けた。

「……………よし、いい？秋川」

「……………うん、良いよ？吉川のタイミングで」

チューニングを終えると、何処か2人だけの世界が出来上がっていた。

忍がそう言うと、吉川は姿勢を正し、正面を向く。正しい音は正しい姿勢から。

そして、最初のフレーズを、吉川が奏でた。

————— ♪ ————— ♪ ————— ♪ —————

ゆったりとしたメロディーが、河川敷に響き渡る。メロディーを加えた事によつて、さらに観衆が集まり始めた。「なにになに？」や、「何かのイベント？」など、興味を持った声が聞こえてくる。

この美女と野獣は、セリーヌ・ディオント、ピーボ・ブライソンのデュエット曲。この曲と同じ題名の映画は、誰もが知るデイズニーのミュージカル映画だ。

種別を超えた恋をテーマにした映画。そのクライマックスに流れる、バラード調の曲。

吉川がまず女性パートを何小節かソロで吹く。緊張で、少し音が震えている。

そして、それを吹き終わると、今度は忍が男性パートをソロで吹く。『大丈夫』、『緊張しないで』。そんな事を問い掛けているような、寄り添う様な優しい音色だった。

それを聴いて、張っていた吉川の肩の力がどんどん抜けて行く。

観衆が、さらに集まり始めた。

忍と吉川の周りに、人だかりが出来始める。「上手いねー」やら、「高校生？」やら、そんな声が聞こえてくる。

そして、サビ。2人の音が重なり、その音が河川敷を包む。2人の周りには、既に大観衆と言って良い人だかりが出来ていた。忍が思いつきでやった、ゲリラの路上ライブ。皆、2人のデュエットに耳を傾けている。

夜の宇治川。そこには、2人だけの世界が広がっていた。

「……………ふう」

吉川が、一息つく。どこか気持ちの良い余韻も含めた、そんなため息。

そして、隣の忍と共に一礼すると、周りから拍手が沸き上がった。

「せんきゅー、せんきゅー」

そんなオーデイエンスに、忍は手を挙げて答える。どこか気持ちの良い、それでいてロマンチックな二重奏が終了した。

観衆の拍手に一通り応えると、忍は吉川の方を向く。

「どう?、良かったでしょ?」

ドヤ顔で、演奏をし終わり未だ余韻に浸る吉川に、忍はそう問い掛ける。

「……………そうね、悪くなかったわ」

そして、吉川は柔らかく微笑んで、忍の問いかけにそう返した。ゲリラライブなんて、吉川は初めてだったが、なんとも言えない、不思議な感情が彼女の中に湧いていた。

「……………また、やっても良いわよ?」

そして、吉川は忍の方を向いて、にこやかに笑ってそう言い放つ。祭りの灯りと、仄かな街灯に照らされたその笑顔は、心の底からの純粹な笑顔で、子供の様に無邪気な、それでいて、とてつもなく魅力的なものだった。

「……………そりゃ良かった」

そして、そんな吉川の表情に、忍も目一杯笑ってそう返す。

互いに、目を見つめる。吉川の目の色は、綺麗な水色。それに吸い込まれるかのように、忍はその瞳を見つめる。

「……ねえ、秋川」

すると、どこか艶っぽい、大人びた声で、吉川は忍にそう問い掛ける。

「……何？」

そして、吉川の目をじっと見据えたまま、忍がそう返す。すると、どこか瞳を潤ませたその表情で、ポツリと、独白するように吉川は語りかける。

「……アタシ、私ね？」

「……おい、お前ら」

すると、何処か夢見心地な雰囲気をぶち壊すような、冷たい声
が2人の間に割って入る。

2人とも背筋が凍る感触を覚えながら、壊れかけのロボットの様に、その声の主の方にゆっくりと顔を向ける。

「……何やってるんだ？」

そこには、鬼の形相をした副顧問の松本先生が、仁王立ちをして立っていた。

「……アツキー。お前、この学校に入学してから反省文書くの何回目だ？」

「うっさいなー。今ちようど原稿用紙が埋まるように、文章のカサ

増しを考えてんだから黙つとれい」

翌日、”公共の場で人を集めて演奏した”と言う、何とも曖昧な理由で、忍は反省文を書かされていた。

見慣れた光景なのか、滝野はおろか、クラスメイトで心配する人間は1人もいない。

「はあ……全く、巻き込まれた吉川が可哀想だよ」

滝野がため息を一つ吐いてそう言う。あの後、2人して松本先生にこっぴどく叱られ、こうして今、原稿用紙2枚に及ぶ反省文を書かされているのだ。

「でも、あいつだって楽しそうに吹いてたし」

しかし、忍は反省文を書いていると言うのに、どこか満足げな顔をしてそう言った。

「……まあ、アツキーが納得してるならそれで良いけど」

そんな楽しそうな忍の顔を見て、滝野は深く突っ込まず、それだけ返す。何があったのかは滝野も何となくは察していたが、ここで言わないのは男の友情と言ったところだろうか。

「うん、……それに、昨日は最高の演奏だったからねえ」

そして、尚も満足そうな顔をして、窓の外に顔を向けて忍は続けてそう言い放つ。

それは自画自賛なのか、それとも誰かに向けた褒め言葉なのか。

まだ夏も始まったばかりだが、忍は頬にほんのりと熱を感じていた。

マドンナの憂鬱

「優子ちゃん、音、良くなったね？」

「……え？」

トランペットのパート練。休憩中に中世古がそう言うと、吉川は褒められるとは露ほども思っていなかったのか、素っ頓狂な声を出した。

「何かあったのー？お祭りの日から、急に変わった感じだけど？」

何処か揶揄うように、ニンマリと笑って中世古は吉川にそう聞く。

「な、何でも無いですよー。香織先輩ー」

吉川は苦笑いになってそう返す。忍が個人練でここに居なかったのは幸いと言ったところだろうか。寧ろ、忍が居ないタイミングで中世古が話し掛けた様にも見えたが。

「えー？あの後、アッキーとなんかあったんじゃないのー？」

「ちよつと！友恵!!」

すると、加部からおちよくる様にそう言われ、少し顔を赤らめる吉川。

せつかく中世古が遠回しに言ったのに、ものすごい勢いでぶち壊して行った。

「別に隠す事ないじゃん。もうアンタらが河川敷で二重奏したことなんて、吹部の人達は殆ど知ってんだから」

「くっ……!!」

加部のその言葉は凶星だったのか、黙りこくってしまう吉川。

祭りの日、あれだけ目立つ演奏をしたのだ。たまたまあの場所に居合せ、それを聴いていた北宇治高校吹奏楽部員の手によって、忍と吉川のゲリラライブは瞬く間に噂として広まってしまった。

あの時は祭りの熱に充てられていたのか、吉川も勢いで演奏してしまっただが、今思い返すと恥ずかしい事この上ない。

真っ赤な顔になって、加部の言葉に俯くのみだった。

「ただいまー。個人練から戻ってきましたー」

すると、忍がトランペットと楽譜台を持ちながら、いつもの様子で帰って来た。

「どうだった？」

「全然ダメ。やっぱり俺にはあのソロパート、合わないっぽいんだよねー」

滝野がそう聞くと、憂鬱な顔になって忍はそう返す。様子のおかしい吉川とは対照的に、忍はどこか違和感を感じるぐらいいつも通りだった。

すると、吉川は極力忍と目を合わせない様に、席を立ち上がった。

「あ、アタシー、こ、個人練行って来ますね！」

そして帰って来た忍と入れ替わる様に、吉川は慌てて個人練の為に教室から出て行く。

「……………分かりやすー」

そんな光景を見て、加部が困った様に笑ってそう呟く。他のパートメンバーも同じ様な顔をしていた。

「？」

1人、今まで何の話をしてたのか分からない忍だけが、首を傾げていた。

「はい、ストップ。トランペット、ここは高らかに、月へと向かう主人公を気持ち良く見送るシーンです。大きく、それでいて堂々と吹いてください」

「「はい」」

そして、合奏練習。いつもの様に滝先生から細かい指示が飛ぶ。今はトランペットパートが演奏時の注意を受けているところだった。

部活が終わり帰り道、いつもの三年生組、中世古と田中と小笠原の3人で下校している最中、中世古が神妙な面持ちでそう呟いた。

「愛？」

いきなりの中世古の発言に、田中と小笠原の声はハモリ、同時に首を傾げる。

「優子ちゃんの事。今日、滝先生に散々言われてたでしょ？今日だって、秋川君が来るまではすごい良い音出してただけど、あの子が近くに来た途端に、音が乱れはじめたんだから」

続けて中世古がそう言うのと、2人とも納得した様な顔になった。

「あの子が恋ねえ……ずっと香織にベツタリだったから、ちよつと意外だったかなー？」

田中が何処か他人事の様子にそう言う。

「あははっ、まあ一年生の頃から、そんな気はしてたけどね。2人も仲良かったから」

中世古が軽く笑ってそう言うのと、小笠原は不思議そうな顔になる。

「仲良かった？ケンカばかりしてた様に見えたけど……」

「もー、だから晴香はダメダメなんだよー」

「はあー!?何よそれー!」

中世古に馬鹿にされた様にそう言われて、小笠原は不服そうに文句を返す。

「でも、合奏練習に支障をきたすぐらい集中力が無くなってって、……アツキー、あの時何したんだろねー？」

すると、ケラケラと笑って、田中が面白い様にそう言う。

「もー、あすかだって噂は聞いているでしょー?……でも、あんな事されたらって、私も少し憧れちゃうなー」

そして、何処か遠い目をして、中世古はそう呟いた。

「なーに?…って事は、優子ちゃんにライバル出現って事?」

そんな彼女を見て、小笠原が茶化す様にそう言う。

「もー、違うよ晴香ー、例えばの話。……それに、あの2人の中に、

私が入り込む隙なんて無いしね」

そして、中世古はどこか羨む様な、懐かしむ様な表情で、そう呟い

た。

彼女は、去年2人が入学した時から、ずっと忍と吉川を見て来ている。いつものケンカに見えるじゃれ合い。遊びで一緒に二重奏を吹いていたのを、影からこっそり見た事もあった。

そして、一度忍が部活を辞めた時、吉川が酷く落ち込んでいる姿も。そんなやり取りをもうずっと見続けているものだから、秋川忍が好きとかどうこうではなく、いつしか2人のその関係性を、中世古は羨む様になっていた。

「あーあ、私も、秋川君みたいな素敵の人に出会えたらなー」

空を見上げて、夕日に照らされて何処かアンニュイな表情に見える彼女の横顔は、正に儂いマドンナと呼ぶに相応しいものだった。

違い

”音楽性”

その曖昧な言葉は、高校の吹奏楽部において、演奏者には求められない。何故なら、曲の音楽性を創り上げていくのは、指揮者である顧問の先生だからだ。

顧問の先生が『ここは儂げに』と言えば、演奏者である生徒は柔らかくその部分を演奏するし、『ここはダイナミックに』と言えば、強くフォルテツシモの音を奏でる。ジャズのような自由な音楽も良いが、吹奏楽は総合力の音楽。一人一人好き勝手に演奏してしまっただけは、いくら技術力が各々高くても、まとまりが無くなってしまふのだ。

それはここ、北宇治高校吹奏楽部でも例外では無い。

だから演奏者は、指揮者である滝先生に言われた事を頭の中で反芻し、滝先生の目指す音楽性に向けて最大限の表現を研ぎ澄ます。

しかし、ソロパートはどうか？

周りの音は無く、一つの楽器のみの音が響く。そこでは、自分が自由に演奏したって、周りに迷惑は掛からない。

曲の世界観に合わせる必要はあるが、自分の、演奏者の持つ音楽性と言うものを唯一出せる場所が、このソロパートなのだ。

「…………アツキー先輩、そんなジロジロ見られると、吹き辛いです」

「あ、ごめんごめん。気にせんでいいよー」

放課後、屋上。三日月の舞のソロパートを吹き終わると、高坂が忍に向かってそう言い放つ。

対して忍は、悪びれもせずにそう返す。

彼は今、高坂麗奈のソロパートを聴いている。

この2人の”音楽性”と言うのは、真逆と言っている。

同じトランペットでも、吹き手によってその人の性格や嗜好、そして取り組む姿勢などが見えて来る。

高坂麗奈のトランペットは、一言で言うならば”孤高”。他を寄せ付けず、自分が一番なのだ。全ては自分の理想のため、他を置き去

りにしてでも、その高みに登る。そんな音。

対して、秋川忍の音は、“情”と言ったところか。優しく、問いかける様に、寄り添う様に。一步一步、歩いては振り返り、道を示してくれる様に。決して置き去りにはせず、しかし確かな演奏技術を持って聴き手を導く様な、そんな音。

どちらも魅力的で、どちらも正解だ。

「うーん、やっぱ音が良いね。正に”孤高”って感じ。高坂さん、大丈夫？ちゃんと友達居る？」

「バカにしています？それ」

ソロパートを聴き終えた忍が、そう問いかけると、無表情の顔を少し崩して不服そうに高坂はそう返す。

忍は、悩んでいた。未だに三日月の舞のソロパート部分の解釈に苦しんでいるのである。

「私が吹いたんですから、今度はアツキー先輩が吹いてくださいよ。そう言う約束ですよね？」

「おっけー」

高坂にそう言われると、忍は立ち上がり高坂と場所を変わる。

「……おー、ここは良いねー。景色が良くて」

「ですよね。私もここからの景色が好きで、良くここで吹くんです」

忍がそう言うと、ようやく高坂が笑顔を見せて、そう返して来る。そこは高台に位置する北宇治高校らしく、眼下に街が一望出来るような場所だった。

「じゃあ、行きますかねー」

一言、忍がそう言うと、チューニングの音を短く出す。そして姿勢を正し、正面を向いて、三日月の舞のソロパートを吹き始めた。

「……………」

ソロパートを吹き終わった忍が、高坂に感想を求める。

「……上手いです。上手いんですけど、なんか違うって言うか……」
「だよー。はあ……ここまで曲と相性が合わない、流石に落ち込むよ」

高坂の感想に、ガツクシと肩を落として暗い声でそう言う忍。
相性というのは、誰にでもある。全部の曲を、完璧にこなせる人物など居ない。

例えば、同じ演奏技術を持った2人が居たとして、曲の雰囲気はその内の1人とすこぶる相性が良く、もう1人がそこまで相性が良くなかったとしたら、どうなるだろうか？

答えは決まっている。高校の吹奏楽部の音楽性は顧問が決めるものだが、もしその顧問の音楽性と演奏者の音楽性がマッチした時は、かなりのアドバンテージとなるのだ。

して、この三日月の舞と言う曲のソロパートは、どうであろうか？

いつしか忍は、このソロパートの部分を”三日月の照りつける草原で、ヒロインが優雅に、そして”孤高”に踊っているシーン”と、例えた。

もしその解釈が合つてるとしたら、”情”を基調とする秋川忍の音楽性とはすこぶる相性が悪い事となる。

そして逆に、高坂麗奈は……

「……うん、なんとなく分かったかな？ありがとね、高坂さん。付き合つて貰つて」

何処か納得した様に忍がそう言うと、楽譜台を持ってパート練の教室に戻ろうとする。

「……あの、アッキー先輩」

しかし、高坂が呼び止める。

「何？」

呼び止められ、ゆっくりと振り返る忍。

「……オーディション。私、負けませんから」

そして、真つ直ぐ忍の顔を見据えて、高坂はそう宣言した。それを聞き、忍は一瞬考え込む様な顔になる。

「……そうだね。一応、俺の考えも言っておこうか」

すると、忍はそう言つて一旦楽譜台を置き、高坂の方へ体を向き直す。どこか雰囲気が変わつた忍の姿に、高坂の体が少し強張つた。

「確かに、ソロパートを決めるのは滝先生だけど、俺は別に”負けても良い”と思つてるよ」

「……………え？」

忍から出た意外すぎる言葉に、高坂が気の抜けた声を返す。

「いや、違うな。別に、勝ち負けとかどうでも良いんだよ。音楽に勝ち負けは無いしね。そこにあるのは良い音か、そうで無いか。違う？」

「……………合ってます」

忍の問い掛けに、高坂は真剣にそう返す。

「たまに、それを免罪符にしてサボつたりする奴も居たけど、基本的には音楽は勝ち負けじゃ無くて、良いか悪いかなんだよね。……そして高坂さんは今、すっごい良い音を出してた。正に孤高つてやつだね」

「……………」

持論を述べる忍に対し、高坂は黙つて話を聞く。

「俺は高坂さんみたいな音を出せない。正直、無茶苦茶悔しいよ。自分が出せない音を、1個下の後輩が吹いてるんだからね」

忍の口調はひょうきんだが、内容はかなりシリアスなものだった。

「……………でも、私にはアツキー先輩みたいな、優しい音は出せません」

すると、高坂は尚も真剣に忍を見つめ、そう言い放つた。褒められると思つていなかった忍は、少々驚いた様な顔になる。

「……………ははっ、そう言つて貰えて光栄だね。……そうだね。だから、もし俺がソロパート落ちてても、俺は高坂さんの音の方が良かった」

たつて、納得出来るかな？今の演奏を聞いて、そう思った」

そして、いつも通りひょうきんに笑つて、忍はそう言い放った。

「つて事で、自分は失礼しやす。じゃあ高坂さん、オーデイション頑張つてにー」

最後に忍はそう言つて、楽譜台を持ち直し、校舎の中へと消えていく。

「……やっぱり、不思議な人だな……」

去つていく忍の背中を見ながら、ポツリと高坂はそんな事を呟いた。

当日

「あれ？、珍しつ。もう出るの？兄ちゃん？」

「……おー、……吉川に早く来いって言われた……」

オーデイション当日の朝、リビングで凜花が朝食の手伝いをしていると、学生バッグとトランペットケースを持った忍が、ものすごい眠そうな顔で、もう出ようとしていた。

対して凜花は聞き覚えのあるその名前に、少し考える素振りをする。

「吉川って……ああ、あのあがた祭りと一緒に居た……」

「おー、その吉川。……ふあああ……何で俺がこんな早よ出なきやいけねーんだよ……」

朝にすこぶる弱い忍は、大あくびをして軽く悪態を吐きながら出る準備をする。

何故彼がこんな早起きかと言うと、昨日の夜、吉川から『明日は早く来て。遅刻したらオーデイション受けられない体にしてやる』と、謎の脅し文句が添付されたメールが来たので、それを無下にする事も出来ずに今の早起きに至ったと言うわけだ。

「……今日オーデイションでしょ？だからじゃ無い？」

「普段から練習してんだから、そのままやれば大丈夫だっつーの」
心配そうにそう聞く凜花に対し、忍は眠そうな態度を崩さずそう返した。

「……兄ちゃんは、それでも無さそうだけど？」

「当たり前ーだろ？普段から誰より吹いてんだから、落ちる気しない」

「おー、自信満々ですな」

オーデイション当日なのに忍はいつも通り。緊張する筈も無かった。それは普段から誰よりもトランペットを吹いていると言う、自信から来るものだった。

「で？ソロは？」

「ソロは微妙。まあ、全力は出すけどね。なる様になるんじゃない

？」

このように凜花にソロパートのことを聞かれても、あつけらかんと
そう返す。

「まあ、頑張つてよ。ソロパート落ちたら、また私が慰めてあげ
よー」

「そうならない為に全力は尽くさないとな。兄の威厳を保つ為に」
椰揄うように笑って凜花がそう言うと、忍も軽く笑ってそう返す。

「じゃあ、行つてきまー」

「行つてらー」

そして、いつもよりかなり早く、忍は学校に向かった。

忍が吉川に来るよう言われた場所は、人気の無い校舎裏。いつもよ
りかなり早く忍が学校の門を潜ると、複数の楽器の音がポツポツと聴
こえてきた。皆、不安で練習しているのだろう。

「……吉川も、練習してんのかな……」

今のところトランペットの音は聞こえて来ないが、吉川を待たせる
と後が怖いので、忍は少し早歩きで指定された場所まで歩いて行く。

「……遅いー!」

「5分だろ? 許容範囲、許容範囲」

案の定怒った。まあ、ギリギリで行動する忍も忍なのだが。

朝は早い、吉川はいつも通りで、緊張で寝不足という事も無さそ
うだった。

「で、何の用? 練習でもすんの?」

「もちろん、ていうか、アンタにアタシの演奏、ちよつと見てもらい
たいのよ」

すると、意外な提案をして来た吉川に、忍は目を丸くする。

「吉川の? 良いけど、なんで?」

「問題が無いのかと、客観的な意見が欲しいの。アンタは音楽に關しちや正直すぎるからね」

そう言つて、吉川はケースからトランプットを取り出す。いつもより素直な彼女に、忍も少々面を喰らっていた。

「お、おう。まあ、見てやつても、いいかなーつて」

そして、どこか辿々しく忍はそう返す。

「そう、じゃあ、よろしく」

吉川はあつさりど、そう返す。いつもならこんな返しをすると、タイキックが飛んでくるのに、今日はオーデイションでやる部分の指運に集中している。それを見て、忍はようやく理解した。

吉川は、このオーデイションに本気なのだ。

そして、素早くチューニングを終えると、譜面を一通り確かめて、吉川は忍の方を見て合図する。

「……じゃあ、24小節から行くわよ?」

「……うん、やつてみて」

ならば、全力でそれに応えよう。こうして、忍による吉川の演奏チエックが始まった。

「……どうだった?」

「全体的にまとまつてる。この調子じゃ、落ちる事はないでしょ」

一通り吉川が吹き終わると、忍がそんな評価を下す。心からの評価。忍は音楽では絶対に嘘をつかない。それは、吉川も分かっていたので、小さくガッツポーズを取る。

「もう終わろっか、そろそろHRも始まりそうだし」

すると、忍がスマホの時刻を吉川に見せて、そう提案する。

「……そうね。なんだか、アタシだけ吹いちゃって悪いわね。アンタも練習したかったでしょ?」

「いいよ、どうせ吉川が誘ってくれなかったら、ギリギリまで寝てたし」

「はっ、緊張感無いわねー」

忍が軽く笑ってそう言うと、吉川が軽く小突いてそう返す。

「実力なら自信があるからねー。毎日毎日吹いてんだから、緊張する事も無いんですよー」

そして、忍はいつも通りひょうきんに、そう言い放った。

「あら、相当な自信家ね?……じゃあ、ソロパートを取る自信もあるって事?」

すると、吉川は少し俯いて、声をワントーン低くして忍にそう聞く。

「うーん、全力は出すけど、受かるかは分かんないなー」

いつもは自信満々の忍が、何処か弱気な発言をした事に、吉川は驚いた。

「……なに?、あんだだけ大口叩いておいて、受からないかもしれないって言うわけ?」

「違う。音楽性の違い。生憎、この曲とすこぶる相性の良い一年が居るからねー」

忍がそう言うと、吉川はさらに考え込む様に、厳しい顔をする。その一年は、吉川もよく知っている。

「……でも、アンタはソロパート吹く気なのよね?」

「当たり前じゃん。言ったでしょ? 全力は出すって」

吉川の問いかけに、忍は即答する。それを聞いて吉川は、少し悲しそうな顔になった。

「それなんだけど……ううん、なんでもない。オーディション、アンタなら大丈夫と思うけど、油断しないでよね」

そして、何かを言いかけるが、吉川はそれを誤魔化す様に、忍に激励の言葉を送った。

「……分かってんよ。音楽で手を抜くなんて、あり得ないからね」

忍もなんだか吉川の様子が何かおかしい事に気付いたが、それには反応せず激励の返事だけを返す。

「じゃあ、片付けよっか?」

「……うん」

吉川がそう言って朝練の片付けを始めると、忍もそれを手伝う。片付けの途中も、何か思い詰めた様な顔を吉川はしていたが、この時の忍は、それに触れる事はしなかった。

発表

「ではこれより、オーディションを始めます」
放課後、遂にオーディション。滝先生が音楽室でそう告げると、室内に緊張感が張り詰める。

「私達が参加する、A編成でのコンクールは、1チームにつき最大5名しか参加する事が出来ません。つまり、ここにいる何名かは、必ず落選してしまう事になります」

滝先生が淡々と続けてそう言うと、部員の顔がさらに強張る。

「皆さん、緊張してますか？」

「してまあ〜すう……」

滝先生の問いかけに誰かが情けない声でそう返すと、軽く笑いが起こった。

「ですよね。……ですが、ここにいる全員、コンクールに出場するのに恥じない努力をして来たと、私は思っています。胸を張って、皆さんの今までの努力の成果を見せて下さい」

滝先生がそう言うと、皆、真剣な顔つきに変わる。それは、先生の言う通り、自らが努力をして来たと言う何よりの証だった。

「では、始めます」

「二「よろしく願います」二」

こうして、オーディションが始まった。

トランペットのオーディションの順番は、すぐに来た。

まずはパートメンバーが音楽室の前に集められ、1人ずつ音楽室に入って行き、滝先生と松本先生の前で1人、演奏する。

「では、中世古さんから」

「はい」

「頑張ってください！香織先輩！」

まずは三年生から。中世古が呼ばれ、吉川が応援の言葉を掛ける。

それに応えるように頷くと、中世古は音楽室に入って行く。
音楽室の外で待っているのもので、オーディション中の中世古の演奏は、他のパートメンバーの耳にも入る。

やはり上手い。強豪校でもメンバーに入れるほどの音色だ。
そしてもちろん、ソロパートの音色も聴こえてきた。

トップバッターの中世古が終わると、次は笠野が入って行く。笠野は、中世古と比べると少し長めだったように思う。

それが終わると、次は2年生組。最初は滝野が入って行った。
そんな感じで、淡々とオーディションは進んで行く。

そして遂に

「次、秋川君」

「うーい」

忍の順番が来た。気の抜けた返事を返すと、楽器の中の埃を飛ばすように息を吹きかけ、音楽室へ向かう為に立つ。

「……秋川」

すると、順番待ちの吉川から話し掛けられた。

「何？」

「……何でもない。トチったら、只じゃおかないわよ」

吉川から、応援とも取れない、激励とも取れない微妙な言葉を掛けられる。

「とーぜん。滝先生と松もっさんをメモメロにしてくるわ」

それに軽く笑ってそう返すと、忍は軽い足取りで音楽室へと入って行った。

「2年3組、トランペットの秋川忍です。よろしくお願いしまっす」

「はい、お願いします」

音楽室に入ると、中央に滝先生と松本先生が並んでいた。オーディション前の挨拶をすると、滝先生からも挨拶を返される。

「秋川君は、去年ソロコンテストで最優秀賞を取ってますね?……」

流石に、大舞台を経験したとあって、あまり緊張はしてないですね」
滝先生が、机の上に置いてある紙を見ながらそう言う。恐らく、今

までの奏者の評価や点数などが書いてあるのだろう。

「そりゃ、もちろん。今からだって滝先生と松もっさんに早く聴かせたくて、ワクワクしてますよー」

「松本先生だ！バカモノ！」

相変わらず忍がひょうきんにそう言うと、松本先生から注意の言葉が入る。

そのやりとりを見て、滝先生は満足そうに頷いた。

「良いですね。いつも通りです。では、早速始めましょうか。では、36小節から」

「はいはい」

こうして、秋川忍のオーデイションが始まった。

「はい、結構です。では、次に行きましょう」

忍のオーデイションは、滅茶苦茶早かった。指定されてた場所から、何小節か吹いただけで、滝先生に止められ、次の部分に移る。そんな事を何回か繰り返した後、遂にその場所が来た。

「ソロパートです。124小節から、良いと言うまで演奏して下さい」

淡々と滝先生からそう言われる。しかし忍は少し俯いて、何か考え込む様に黙る。

「……どうしましたか？ソロパートですよ」

それに怪しんだ滝先生は、再度忍に演奏するよう促す。

そして数秒、一通り考え終わったのか、何か決意したような表情で忍は前を向く。

「……はい。では、行きます」

そして、ソロパートを吹き始めた。

数日後、音楽室。

今日は、待ちに待ったオーデイションの結果発表だ。

再び、音楽室が緊張感に包まれている。「受かっていますように……」や、「あんだだけやったんだから大丈夫」など、発表を目の前に反応は三者三様だ。

「それでは、合格者を読み上げる。呼ばれた者は返事をする様に」
「はい！」

松本先生がそう告げると、すぐさま結果発表が行われる。

「まずはパーカッション、田邊名来！」

「はい！」

「加山紗希！」

「はい！」

名前が、読み上げられて行く。

呼ばれて喜ぶ者、ガッツポーズをする者。

「瀧川ちかお！」

「はい！」

「サックスは以上の7名」

「ううっ……!!」

松本先生に名前を呼ばれず、泣き崩れる者も居る。

各々全力で挑んだオーデイション。その結果に、一喜一憂する者がいる。

そして、トランペットパート。

「では、最後にトランペット！中世古香織！」

「はい！」

「笠野沙奈！」

「はい！」

「滝野純！」

「はい！」

「吉川優子！」

「はい！」

「秋川忍！」

「……はい！」

「高坂麗奈！」

「はい！」

「以上6名！ソロパートは、高坂麗奈に担当してもらおう事になる」

松本先生がそう告げると、音楽室の騒めきが一層大きくなる。吉川に至っては、「ええ!？」と、驚きの声を隠せないでいた。

「……はい！」

そして、そんな騒めきを一扫する様に、高坂は高らかに、返事を返す。

そんな光景を忍は、薄く微笑んで見つめていた。

納得

部活の雰囲気、少し変だ。

オーデイションの発表後、各パートでは、とある話題で持ちきりだった。

「高坂さんって、そんな上手かったっけ？」

「香織はともかく、アッキーが落ちるなんてねー」

トランペットのオーデイション結果である。ソロパート、三年の中途古が落ちた。2年の忍が落ちた。

そして、1年の高坂が受かった。

オーデイションは、実力勝負だ。忬度は無い。良い演奏をすれば受かるし、悪い演奏をすれば落ちる。

しかし、しかしこの結果は、北宇治高校吹奏楽部に衝撃をもたらした。

” 去年のソロコン最優秀賞受賞者が、ソロパートを吹かない”

その事実は、今の2、3年生を中心に、大きな波紋を呼んでいる。

秋川忍には、実績がある。実力も、誰もが認めている。部長の小笠原も、田中も、中世古も、そして、1年の高坂も。

しかし、忍はソロを吹かない。なまじ実績がある以上、このオーデイション結果に納得してない者は多かった。

「お、タツキー見ろ。もうすぐ出来上がるぞ……！」

そんな中でも、忍はいつも通りだった。昼休み中にトランプタワーを、真剣に作っている。

「……相変わらずだな、アッキーは」

そんな忍に対し、複雑そうな顔で滝野はそう返す。かく言う滝野も、オーデイションの結果に何処か納得してなかった。

同じクラスメイト。同じトランペットパート。1番近くで忍を見てるのは、ある意味この男なのだ。

「タツキーは、納得いってない？」

すると、そんな滝野の心中を察したのか、トランプタワーに視線を向けながら、忍は滝野にそう聞く。

「……そりゃ、こっちの台詞だ。アツキーは納得してんのか？」

「してるよ。俺はオーデイションで全力を出したし、結果受かった。ソロは落ちたけどねー」

相変わらずひょうきんに、いつも通りに忍はそう返す。対して滝野は、尚も納得してない顔をしていた。

「でも、お前は……」

「去年、ソロコンの賞取ったって、言いたいのか？」

滝野が次の言葉を言う前に、ズバリと忍が言い当てる。心を読まれた滝野は、バツの悪そうに「……ああ」と、それだけ返して顔を背けた。

「……タツキー。ソロコンの選曲って、自分で出来るのは知ってるよね？」

すると、視線をトランプから滝野に移し、忍がそんな事を言い始める。それに滝野は、無言で頷いた。

「それってつまり、”自分の得意な曲のジャンルで戦える”って事なんだよねー。トランプペットのソロコン曲って言っても、色々あるし」

「……それが、どう関係してんだよ？」

忍の言わんとしてる事が滝野には分からないのか、そう返すと忍は困った様に笑った。

「もー、鈍いなータツキーは。ソロコンは”自分が曲を決めれる”。コンクルの曲は”顧問の先生が決める”。こう言えば分かる？」

忍がそう言うと、ようやく滝野はハツとした表情になった。

去年のソロコン、忍は圧倒的な演奏を披露した。それは滝野も知っている。しかし、それは忍が、”自分の音楽性に合った曲”を選んだからだ。

温かみを感じる、そんな選曲をしていた。自分の最高の”音楽性”

が出せる曲を選び、それを研ぎ澄まして圧倒的なパフォーマンスを見せた。

しかし、今回の三日月の舞はどうか？

滝先生の”音楽性”は、どうなのか？

そのソロパートは、どんな”音楽性”を持っているのか？

そして、その曲の”音楽性”と忍の”音楽性”は合っているのか？

答えは、”相性”。それに尽きた。

「分かった？まあ、今回は運が無かったのかなー？。俺もあのソロパートの意味を毎日毎日考えたけど、結局分かんなかった。そして、高坂さんはそれを理解出来た。それがこのオーディションの結果でしよ？」

滝野は啞然として、忍の言葉に耳を傾けていた。

ハイレベル過ぎる。技術が云々とかでは無い。技術の上の、心の部分。そこを徹底的に理解して、あのソロパートを吹けているかどうか。

練習で、忍がしきりに『何か違う』と言っていた理由が、この言葉で滝野はようやく理解出来た。

「……でも、ウチの吹奏楽部員に、そこまで考えられている奴が居るとは思えないぞ？」

しかし、懸念が一つ。

忍は実績を持っている。それも、眩し過ぎる実績を。

そんな目先の実績に目が眩んで、本質が見えてない部員が沢山いる。寧ろ、それが過半数だ。

だからこそ、1年の高坂がソロパートを吹く事に納得の行っていない者が多い。

「そうなんだよねー。どうしよつか？……あ！」

忍がそう言うと、今まで必死に積み上げて来たトランプタワーが崩れる。

それはまるで、土台の緩い北宇治高校吹奏楽部を表しているかの様

な、不吉なものだった。

噂

各々オーデイション結果に不安があっても、練習は滞り無く進む。何故なら北宇治高校吹奏楽部は、全国を目指しているからだ。だから演奏中は他の事を気にする暇も無い。自分の出す音だけに集中しないと、直ぐに滝先生から注意が飛ぶ。

「吉川さん。また音がブレてます。ここはトランペットの主旋律。ミスをすればかなり目立ちます」

「……………はい」

そんな中、吉川は集中力が切れていた。今日何度目かの滝先生注意を受け、しよぼくれて返事を返す。

「あなたはコンクールメンバー。落ちた人達の為にも、全力を尽くさねばなりません。分かりますね？」

「……………はい」

皆、吉川の集中力が切れている理由は分かっている。

オーデイションの事だ。

吉川優子は、先輩である中世古の事を誰よりも尊敬している。崇拜してると言ってもいい。

彼女が一年生の頃から、いつもベツタリ。まるで子犬の様にくっついて離れない。

その中世古がソロパートを吹けないとなり、吉川は本人以上に落ち込んでいると。

「……………では、次は全体通しで演奏します」

「「二はいー」」」

そしていつも通り、淡々と練習が進む。

「はい、では今日はここまでとします。全員、今の感覚をしっかりと忘れずに、お願いします」

「「はー」」」

滝先生がそう告げると、今日の練習が終わる。

「あの一、先生、このリストに書いてある毛布って……」

すると、部員の1人がスケジュール表を持って、滝先生にそう聞いて来た。

「毛布です。皆さん、家にある使っていない毛布を貸して欲しいんです」

滝先生が部員達に向かってそう言うのと、「はい」と返事が返ってくる。

「毛布？それ持って来て、何するんですか？」

すると、ペットパート1年の吉沢が、忍に向かってそう聞いて来た。

「地獄の泊まり込み演奏。干からびるまで吹かされるぞー？」

「ええー!?!」

相変わらずひょうきんに忍がそう言うのと、吉沢は困った様な顔になる。

「だっははは！、冗談冗談、まあ、当日までお楽しみって事で」

「えー？気になりますよー」

そんな吉沢を揶揄う様に、笑って忍はそう返すと、吉沢はさらに困った様な顔になる。

やはり、今日も忍はいつも通りだった。

「この音が上手く行かないんだよねー」

「テンポが急に変わるところだからねー」

一方、こちらはトランペットの三年生組、笠野と中世古。

2人で楽譜を見合わせ、笠野の苦手な部分を中世古がアドバイスしている。

「……………」

そして、その光景を吉川は1人見つめていた。

見た目は、いつも通りだ。中世古が落ち込んでいる様子はない。

「香織ー！、パーリー会議ー！」

「あ、うんー!ごめん、また後でね？」

すると、小笠原から呼ばれ、中世古はパーティーダー会議のために

一度音楽室から出て行く。

その隙を見計らって、吉川は中世古の楽譜を何枚かめくった。

「……っ!!」

そして、とあるページの端。吉川はその文字を目撃してしまう。

” ソロオーデイション

絶対吹く!!”

そんな文字が、書かれていた。

それを見て、吉川が目が少し霞む。やはり彼女も、ソロパートを吹きたかったのだろうか。

「高坂って、ラツパの?」

「はい、ララ、聞いちゃいました」

すると、吉川の耳に、そんな会話が入って来た。その話し声の方向を見てみると、ホルンパートの何人かが会話をしていた。その話題をしていた一年生は、吉川と目が合うとバツが悪そうに視線を逸らす。

「……ちよつといいかな?」

そして吉川はその集団に近寄り、そう言い放った。

「はい、では、今日の練習はここで終了です」

「「「ありがとうございます!」」」

今日もいつも通りに滝先生がそう告げると、いつも通りに部活が終了する。

「塚もっさんや、この後暇かえ?」

すると、忍がトロンボーンパートに近寄り、塚本にそんな事を聞いて来た。

「この後ですか?」

それが予想外だったのか、塚本は少し驚いた顔になっている。

「うん、駅前の楽器屋でグリス買っただけ、一緒に行かんかい?」

「楽器屋つすか？……そうつすね。ちか、瀧川も連れていいつすか？」

「テナーサックスの？いいよ。じゃあこっちはタツキーも誘ってみるわ」

「どうやら楽器屋への誘いらしい。忍がそう言うのと、滝野を誘いに再びトランペットパートの場所へと戻って行く。」

「秋川」

すると、吉川から声をかけられた。忍は顔を吉川の方へと向ける。なんだか真剣な、それでいて思い詰めている様な表情をしていた。

「……何？」

そんな吉川の雰囲気を感じ取ったのか、忍は怪訝そうな顔でそう返す。

「この後、暇？」

吉川は尚も真剣に、端的にそう聞く。どうやらデートのお誘いと言う感じでは無さそうだ。

しかし、これから重要な話をされるのだろうかと言うのは、忍にも分かった。

「………良いよ。大事な話なんですよ？」

忍がそう言うと、吉川は黙って一つ頷いた。それを確認すると、忍は踵を返して再びトロンボーンパートの方へと向かう。

「悪いねー、塚もっさん。ちよつと今、先約が今入った」

「なんで俺らより遅く先約が入るんすか」

片手で謝るポーズを取って忍がそう言うと、塚本は苦笑いになってそうツツコミを返す。

「まあ、ちよつと急用って事で。代わりに後日なんか飲みもん奢ってあげるから、許してな」

「そこまでしなくて良いつすよ？」

塚本がそう返すと、忍は少し苦笑いになる。

「もー、先輩の厚意は素直に受け取っときんさいな。じゃあ、この埋

め合わせはまた後日でー」
そう言うと、忍は塚本に向けて手を軽くひらひらさせて、吉川の方へと再び戻って行った。

波乱

「……で、それを俺に言って何になるの?」

「何って、アンタは納得してんの!」

近所の公園、ジャングルジムの側で、2人の男女が会話をしている。しかし、甘い雰囲気などでは無い。

「してる。なんで? 吉川はしてないの?」

「してるわけ無いじゃない! 香織先輩は今年で最後なのよ! それに! アンタだって、去年あんなだけ実力があつたのに……!!」

吉川優子は、混乱していた。高坂がソロパートを取ったのも、中世古が何処か諦めがついた様な顔をしているのも、忍が納得するような表情を見せているのにも、彼女は全てに納得がいつて無かった。

「それより高坂さんが良い音を出したからでしょ? 香織先輩よりも、俺よりも」

対して忍は淡々と、しかし真つ直ぐ吉川を見据えてそう返す。

「それに、俺はそんな理由で滝先生がソロパートを決めたとは思えないよ」

続けて、忍はそう言い放つ。

「でも! それは事実であつて」

「だからなんだよ? ……吉川。お前、この事香織先輩に言ったりしてないだろうな?」

吉川の言葉を遮り、いつもひょうきんな忍が睨め付ける様に吉川を見据える。

忍が怒る事など、殆どない。しかし、その言葉には確かな苛立ちを孕んでいた。

「っ!! ……」

痛いところを突かれたと、吉川は顔を背ける。それは、無言ながらに答えている様なものだった。

「……………言つたんだな?」

忍の問い掛けに、吉川は無言で頷く。すると、忍は一つ、「はあ……」と、大きなため息をついた。

「言っちゃったもんはしょうがない。……で、香織先輩はなんて？」
「……………」そんな事ない。私は納得してる”つて…………」
俯いて、力無く吉川はそう呟いた。

「……………」そっか。じゃあ、この話は終わり。帰るべや」
そして、いつも通りに戻った忍は吉川の横を抜け、公園を後にしようとする。

「アンタは…………」
すると、吉川は震えた声でそう呟く。その声に、忍はもう一度吉川の方へと振り向く。

「アンタは！…………何でそんなにもっ！…………何でそんなに残酷に…………」
泣きそうな顔で、吉川は忍を睨め付ける。彼女も、何処かでは分かっているのだろう。

実力で言えば、中世古はどう足掻いても高坂に届かないのだと。
忍が納得してるのも、私情は無く、ただ純粹に音を評価した結果なのだ。

実力で決まったオーディション。それが、どれだけ残酷な事かを。

「…………俺は、納得してるよ」

「アタシは、納得してない」

忍がそう言うと、吉川はキツと忍を睨めつけてそう返す。

このソロオーディションの結果に1番納得していないのは、競い合った3人の演奏者では無く彼女、吉川優子だった。

「…………納得してないから」

そして、吐き捨てる様にそう言い放ち、忍の横を抜けて吉川は公園を後にしようとする。

「…………吉川、お前、妙な事考えてない？」

すると、そんな吉川の様子に違和感を覚えた忍は、怪しむ様にそう聞く。

「……………」

しかし、それに反応する事なく、吉川は公園を去って行った。

その時は、唐突に訪れた。

「余ったものは、壁に貼り付けてください」

音楽室に似つかわしくもない光景が広がっている。滝先生に持つてくる様言われた毛布。それを、音楽室全体に敷き詰める。

なぜこんな事をしてるのか。それは、毛布が持つ消音効果にあった。

「先生、終わりました」

「はい、ご苦労様です。これでこの部屋の音は、毛布に吸収され、より響かなくなります。響かせるにはより大きな音を、正確に吹く事が要求されます」

滝先生が、この毛布だらけの音楽室の説明をする。

実際の会場は、この音楽室よりも何倍も広い。会場いっぱい自分達の音を響かせるには、普段からこの様な環境で吹いて意識しなければならぬのだ。

「では皆さん、練習を始めましょう」

「はい！」「」

そして、みんなが演奏の準備に取り掛かろうとしたその時、

「先生！一つ質問があるんですけど良いですか？」

吉川が声を上げた。

「なんででしょう？」

滝先生がそう言うと、吉川は一瞬考え込む。そして、意を決した様に顔を上げ、

「滝先生は、高坂麗奈さんと以前から知り合いだったって、本当ですか？」

音楽室が、一瞬にして静まり返った。

「それを尋ねて、どうするんですか？」

滝先生は動じる事なく、質問にそう返す。

「優子ちゃん、ちよつと……!」

隣にいた中世古が止めようとするが、それを無視する様に吉川は滝先生の前に出る。

「噂になってるんです! オーディションの時、先生が鼻負したんじゃないかって! 答えて下さい! 先生!」

詰め寄る吉川に対し、滝先生は涼しい顔を崩さない。

「鼻負したことや、誰かに特別な計らいをした事は一切ありません。全員公平に審査しました」

「……高坂さんと知り合いだったと言うのは?」

吉川がそう聞くと、滝先生は少し考えら様に間を取り、一拍置く。

「……事実です」

滝先生がそう言い放つと、音楽室が騒めいた。

「父親同士が知り合いだった関係で、中学時代から、彼女の事を知っています」

そして、淡々と滝先生はそう述べた。それを聞いた吉川の詰問は続く。

「何故黙ってたんですか?」

「言う必要を感じませんでした。それによって、指導が変わる事はありません」

「だったら……!!」

「だったら何だっ言うの?」

その言葉に、音楽室の全員がその声の主の方向へ顔を向ける。

そこには、これでもかと言うくらい険しい顔をした高坂の姿があった。

「先生を侮辱するのはやめて下さい。何故私を選ばれたか、そんなの分かってるでしょ?」

そして、高坂は吉川をキッと睨め付ける。

「香織先輩より、私の方が上手いからです!!」

その高坂の発言に、吉川は激昂する。

「アンタね!!自惚れるのも良い加減にしなさいよ!!」

「優子ちゃんやめて……!」

中世古の静止も虚しく、吉川は今度は高坂に詰め寄る。

「香織先輩がどれだけ気を遣ってたと思ってるのよ!!それを!!!」

「吉川!」

すると、高坂に手を出そうとした吉川の腕を、忍が掴む。

「うるさいーアンタもアンタよ!!何で1番実力のあるアンタが!落ちる結果になってんのよ!!」

そしてその手を振り払い、今度は、忍に噛みつき始めた。もう止まらない。誰もがそう感じていた。

「なんでアンタより高坂なのよ!!アンタだったら!アンタだったらアタシはまだ納得出来たのに!!!」

そんな吉川の悲痛な叫びを、忍は黙って聞く。

「悔しくない訳!?一年にソロ取られて!!アンタはずっと負けず嫌いだっただじゃない!?!」

「……………」

噛み付かんばかりの距離で、吉川は忍に詰め寄る。

忍も吉川の中世古に対する思い入れが深いのは理解している。だからこそこの様に散々なことを言われても何も言わない。

しかし、次の吉川の言葉は、忍には許せなかった。

「こんなん!誰がやったって一緒じゃない!!!こんな意味ない音楽なんて!やらない方がマシよ!!!」

忍の中の、何かが切れた。

「……………言いたい事は、それだけ?」

身も凍る様な、冷たい声。そして、次の瞬間……

—— パァンっ!! ——

音楽室に響く破裂音。

その場にいた、全員が驚く。中世古も、高坂も、その他のトランペットのパートメンバーも。そして、滝先生でさえも、目を見開いている。吉川は、勢いで床に倒れそうになるのを足で踏ん張る。

そう。忍は、吉川の頬を思い切り叩いたのだ。

「……………目、覚めた？」

叩いてから数秒後、静まり返った教室の中、忍は吉川に対しそう聞く。

「……………元々覚めてるわよ」

そして、先程の激昂した様子が嘘のように、落ち着いた声で吉川はそう返す。

1年は茫然と、それ以上に2、3年生は、信じられないものを見るかのような表情をしていた。

「……………皆さん」

そしてその静寂を破ったのは、滝先生だった。いつもなら淡々と言うその口調が、何処か戸惑いの色を纏っている。

「……………皆さん、準備を進めておいて下さい。そして秋川君は、私と共に今すぐ職員室に来なさい」

「……………はっ」

冷たく、凍える様な滝先生の命令口調の声に、忍は一言、それだけ返す。そして、まだ衝撃で立ち尽くしている者しかいないこの音楽室から、2人して出て行った。

「ううつーううつ……ううつ……」

1人、そんな光景を目の当たりにして、中世古は遂に泣き崩れてしまった。

最悪

中世古香織は、夢を見ていた。

「もー、あの2人、どこにいるのー?」

それは去年のいつ頃か、実際に目にしたものだ。

部活も終了の時間、個人練に出かけたある2人がいつまで経っても帰って来なかったのだ。中世古が校舎内を探し回っていた時のものだった。



何処からかトランペットの音が聞こえて来る。その音の方向に、引き寄せられる様に中世古は歩みを進める。

音の元は、ある教室から聞こえて来た。音は2つ。その教室に近づくとその音は消え、今度は2人の話し声が聞こえて来た。

「違うってー。ほら、ここメゾピアノでしょー?」

「あ、ホントね」

中世古がその教室のなかを覗く。そこには、2人の男女が隣同士で座っていた。教室にはその2人以外誰も居ない。

入り口に背を向けているので、2人とも中世古の存在には気付いていなかった。

彼女も花の女子高生。興味が湧いた中世古は、取り敢えず声を掛けず、面白そうに影からその光景を見つめる。

「ここはお互いに心を通わせた2人が、信頼し合って踊る場面だろうか? お前、美女と野獣、見た事ないの?」

「ちっちゃい時に見たけど忘れたわよ。そんなもん」

「つかー! ドライなやつちゃ! まあいいわ。こんくらい強気なベルも悪くない」

「バカにしてんの? それ」

お互いに軽口を飛ばし合い、男の子は心底楽しそうに、女の子は鬱陶しそうに、それでいて何処か満更でも無さそうに会話のやり取りをしている。

それは、とても自然で、お互いに心を通わせている様な、魅力的な

ものだった。

「じゃあ、サビから。いくよー」

「うん」

そして、2人は同時にトランペットの音を奏でる。二重奏だ。ゆったりとしたメロディ。それに中世古は耳を傾ける。

あつたかくて、寄り添う様な、そんな音色。女の子の方はまだ慣れてないのか、何処か吹きにくそうにしている。

それを男の子が導く様に、語り掛ける様に支えて演奏する。

そこには、2人だけの世界が広がっていた。

「……いいなあ……」

そんな光景を見て、中世古はポツリと、そう漏らした。

「……………あ……………」

目が覚める。夢から覚めた中世古は、何処か名残惜しそうに、そう呟く。

そして上体を起こすと、確かめる様に自分の頬に手を触れた。

「……ははっ、私、寝ながら泣いちゃってたんだ……」

手に濡れた感触を確かめると、中世古はそう呟いた。

「……はあ。体調悪い……今日は休んじゃお……」

そして、中世古はそう言っただけで再び布団の中に潜り込んで行った。

トランペットパートの空気は、最悪の一途を辿っていた。

今日はパート練。しかし、練習の為に充てられた教室の中には、パートメンバーの半分しか居ない。

中世古は、今日は体調不良ということで休み。高坂は、相変わらず個人練に行っている。吉川は、まだ練習に顔を出していない。

そして忍は、1週間の部活停止処分を受けていた。

「どうなんのかな……」

ポツリと、2年の加部がそう呟く。

「……分かんねーよ」

それに滝野が、深刻な面持ちでそう返す。

トランペットパートだけでは無い。ここは最悪だが、他のパートもこんな雰囲気だった。

忍が、吉川の頬を叩いた。

それは、今の2、3年には相当ショックだった様で、あの時は中世古はおろか、部長の小笠原まで泣き出しそうな表情をしていた。

「……アツキー先輩、コンクールで吹けないんですか？」

すると、一年の吉沢が、同じく深刻そうな表情でそう聞いてくる。

滝先生からそう言う処置が下されても、なんらおかしくは無い。それ程の事を、あの時忍はした。

「……分かんない。多分、部活には戻れるだろうけど、コンクールがどうかは……」

それに対し、悲痛な顔で三年の笠野がそう返す。すると、吉沢は勢い良く席を立った。

「……いい、嫌です！だって、アツキー先輩は上手いじゃないですか！」

吉沢は泣きそうな顔になって訴える。

吉沢秋子は、心の底から忍を尊敬している。

「オーデイションに落ちた私にだって！まだ丁寧に教えてくれてますし！それに……」

彼女は、オーデイションに落ちた。しかし、それを見捨てる事なく、忍は吉沢に指導をしていたのだ。

「……」

それは同じくオーデイションに落ちた加部にも同じ。吉沢の悲痛な訴えに、顔を背ける。しかし、それ以上に……

「誰よりも、トランペットが好きじゃないですかあ……！」

吉沢は泣きながら、消え入る様に、追い続ける様にそう言い放つ。その言葉を聞いて皆、痛いところを突かれた様な顔になる。分かっている。そんな事。

秋川忍は、音楽に嘘をつかない。そして、誰よりもトランペットに對し、真つ直ぐで純粹だ。

楽器を毎日手入れしたり、ソロパートで思う存分悩んでいたその普段からの忍の態度が、それを示している。

だからこそ、忍が吉川を引つ叩いた理由を、パートメンバーは何処かで分かっているのだ。

「……」また、辞めたりしないよね？」

震えた声で、加部がそう呟く。

「……バカな事言ってるじゃねーよ。面白くなつたって、アッキーも言ってたじゃねーか。辞めるわけねーよ」

それに反応したのは、滝野だった。それを聞いて加部が勢い良く席から立ち上がる。

「だってー、アッキー、」去年と同じ事」したんだよ!?!またつまんなくなつたって、思ってもおかしくないでしょ!?!」

叫ぶ様に加部がそう言うと、滝野も勢い良く席を立つて加部を睨み付ける。

「あん時とは、状況が違うだろうが!アッキーは今の部活は面白いって言ってるんだ!そんな事になる訳ねーだろう!」

「何処にそんな根拠が!!」

「ストップ!!!」

いつも静かめな笠野が声を張り上げ、ヒートアップしてきた滝野と加部の口論を止める。

もう、ぐちゃぐちゃだ。チームとしての形を保てていない。

「……あの、一つ聞いていいですか？」

すると、今度は吉沢が、そんな事を聞いて来る。その表情は、何かを決意した様なものだった。

「……何かな？」

それに笠野が返す。そして、一瞬考え込む様に下を向いた後、ここに居るパートメンバー全員に尋ねる様に、吉沢は口を開いた。

「去年の事件のこと、詳しく教えてくれませんか？」

吉沢のその言葉に、メンバーは一様に顔を背ける。しかし、笠野だけは、吉沢をしつかりと見据えていた。

「……そうだね。もう、ここまで来たら、秋子ちゃんにも話しておこうか？」

「ちよ、沙奈先輩！」

すると、加部が反対する様にそう言う。しかし、笠野は真剣な表情を崩さない。

「もう無理だよ。このままじゃチームが崩れる。それに、秋子ちゃんと同じトランプペットパートの仲間。知る権利はあるでしょ？」

「……………」

笠野が諭す様にそう言うと、加部は黙りこくってしまう。笠野が滝野の方に顔を向けてみると、一つ、彼も頷いた。どうやら話でもいいと言う合図らしい。

そんな反応に困った様に一瞬だけ笑うと、吉沢の方に顔を向け直し、本題に入った。

「……今から話す事は、誰にも言わないでね？」

真剣な顔付きで笠野がそう言うと、吉沢は強く頷く。

その話は、北宇治高校吹奏楽部に今も尚重くのしかかっている、秋川忍の過去だ。

むかし話

秋川忍は、周りから自由人と呼ばれる。

彼は、一言で表すなら単純明快。良い音だと思えば良いと答えるし、悪い音だったら悪いと答える。そんな男。

全ては自分の楽しいと思つた事から、行動を始める。そして、それをやり遂げる。その強さが、忍にはあつた。

しかし、それが必ずしも正解だとは限らない。

北宇治高校吹奏楽部の去年と言えば、それはもう緩みに緩み切つていた。ろくに練習もせず、パート練で聞こえて来るのは、楽器の音の代わりに聞こえる姦しい喋り声のみ。

だが、忍はそんなものは気にしてなかつた。

練習しない人は、放っておけば良い。

そんな考えを、彼は持つていた。吹奏楽は、チーム競技の側面が強い。しかし当時の忍はそんなことよりも、自分がどれだけ良い音を出せるかに傾倒していた。

つまり、部内の人間関係に一切興味を示さなかつたのである。

だが孤独になつた訳ではなく、一つ違いがあつた。

それは、音楽を本気でやろうとする人間に対しては、積極的にコミュニケーションを自ら取つていったのである。

中世古、吉川、滝野。音楽に真面目に取り組む人間には、楽しそうに自ら音楽の話題を振りに行つた。

しかし、不真面目な3年生がそれを見てどう思うか？自分達は話しかけられず、真面目にやっている人達のみで楽しそうに会話が進む。

最初は、まだ良かった。生意気な一年が、何かしていると。この緩い部活で本気で音楽に取り組んでいる変人が居ると、当時の3年生はそんな目で見ていた。

だが、それが無視出来なくなる事が起こつた。

忍が、ソロコンの最優秀賞を受賞したのである。

生意気な1年生に、大きすぎる実績が付いた。

しかし、忍は自分の在り方を変えようとはしなかった。

いつも通り音楽に真剣に取り組んでいる人間には積極的に話しかけ、そうでない人には決して自分から話しかけない。

実績が付いた忍に無視された3年にとっては、それは面白く無い事だろう。嫉妬心と言うのは、誰でも持っている。

そこから、忍に対する嫌がらせが始まった。

挨拶の無視。練習内容を、わざと忍に教えないなど、最初は軽いものだった。

しかし。それに、不運が重なる様な出来事が起こる。

当初から不真面目な3年生に反発していた1年生の一部が、実績を持つ忍の力を借りようとしたのである。

”秋川忍はソロコンテストで最優秀賞を取った。なら、そんな実績を持つ人間が説得すれば、先輩達も変わるかも知れない”

そんな、浅はかな考え。

当初は忍も断った。そんなもので変わるはずが無いと分かっていたからだ。

しかし、1人の女子生徒にしつこいぐらいに頭を下げられ、遂に根負けした忍は、その反発していた1年生集団と3年生達に抗議をしに行く事となった。なってしまった。

そしてそれが、非常に不味かった。

ただでさえ、目の上のたんこぶの様な扱いを3年生達からされている忍が、別に3年生と対立している1年の中に加わった。

そしてそれを見た3年生が、何も思わない筈がない。ソロコンの最優秀賞受賞という実績を鼻にかけ、して欲しくもない説教をされる。そういう風に、3年生達には映る。

嫌がらせは、苛烈を極めた。

つまり、矢面に立たされた状態となったのである。それも、今までとは違い露骨に、より直接的に。

合奏練習で忍の席と楽譜台が用意されないのは当たり前。楽譜をメチャクチャに引き裂かれ、忍だけ楽譜が無い状態で練習をした事もあった。

しかし、忍は怒らなかつた。寧ろ、明るく振る舞つたのだ。席を用意されなければ、『目立って逆に良い』と笑つて返し、楽譜を引き裂かれれば、『もう覚えてるから全然オツケー』などと、得意げに返す。

それを面白く思わない3年生は、嫌がらせを続ける。そして忍はいつも通り、ひょうきんにやり過ぎす。また、嫌がらせが起こる。

そんな事が、続いていった。

「……………そんな、……………酷い……………」

話を聞いた吉沢が、悲痛な面持ちでそう呟く。その場にいた加部と滝野は、俯いて無言のままだ。

「……………そうだね。私達も止められれば良かったんだけど、その時の3年生はもう暴走状態で、……………ごめんね?」

笠野がそう説明すると、吉沢は首を横に振る。その”ごめんね”は、嫌がらせを止められなかった事に対するものだろう。

しかし、下級生にとって3年生の怖さというのは、想像以上のものがある。それが血眼になって、忍に嫌がらせをしようとすると、止めろと言う方が難しい話であつた。

「……………アツキーは強い子なんだよ。……………でも、”あの事件”だけは、アツキーにとって絶対に許せなかつたんだと思う」

「……………ごめん!、アタシ、無理!」

続けて笠野がそう言うと、耐え切れなくなつたのか、加部は教室から逃げる様に出て行ってしまった。

それを見て、吉沢は生唾を飲む。どんな出来事があつたのだろうか。そして、笠野は覚悟を決めた様に話し始めた。

「……………アツキーが、自分の楽器を凄く大切にしているのは、秋子ちゃんも知ってるよね?」

その笠野の言葉を聞いて、吉沢の血の気が引いて行く。忍は、命の次に、いや、自分の命と同等に楽器を大切にしている。それがもし、散々な扱いを受けたとしたら？

人には、絶対に超えてはいけないラインと言うものが存在する。

「はい、ちよつと休憩ー」

去年、音楽室。合奏練習中に、当時の部長がそう言うと、各々休憩に入る。

まあここから10分20分と休憩を伸ばすのが関の山なのだが。

「タツキー、トイレ行くべや」

「お、良いぞー」

忍が滝野を連れションに誘う。いつも通り、ひょうきんに。そして自前のトランペットを滝野の椅子の上に置くと、忍は音楽室から出て行く。いつも通り、忍の席は用意されていない。

そして、それを見計らった様に、その集団はトランペットパートに近づいて来た。

「へえー。あの子のペット、こんななんだー」

「なーんか、面白味に欠けるわよねー」

椅子の上に掛けてある忍のトランペットを見てニヤニヤしながら、3年生がそんな会話をする。

そしてその内の1人の右手には、油性ペンが握られていた。

「もつとさー、こう、彩が必要だと思わない？」

誰が見ても醜悪と呼べるニヤついた顔。しかし、誰も声を上げられない。”反論したら、次はお前だ”と言っている様な、凄まじい圧があった。全員いるこの合奏練習の中、見せつける様に。

この後の事は、容易に予想が出来る。

「や、やめて下さいー」

すると、怯えながらも1人の少女が、その3年生達に噛み付いた。

吉川である。

「あ？、何？アンタもコイツと同じなワケ？」

ギロリと吉川を睨め付け、ドスの効いた声で3年生はそう言い放つ。それに怯んだ吉川は、一瞬にして大人しくなってしまった。

そこには、邪魔したら許さないと云っている様な、怨嗟が込められている様にも見えた。

「……先輩、私からもお願いです。辞めて下さい」

すると、吉川の前に立つようになり、続けて中世古がそう云って頭を下げた。

「やめない」

しかし、3年生は尚も顔をニヤつかせて、そう言い放った。

そして、その手で忍のトランペットを持ち上げる。

「へー、良いの使ってるじゃん」

「!!、やめっ……!!」

中世古が手を伸ばした時は、もう遅かった。

まずは、1人が、そのトランペットに”バカ”と書く。

「あの子には勿体ないよねー」

そして、続けてもう1人が”死ぬ”と、直接的な文字を書く。

「アタシ達もつと良い様にしてあげるからさー」

そして、もう1人がそう云って忍のトランペットを受け取った瞬間
……

「何やってるんですか？」

身も凍る様な、冷たい声が音楽室に鳴り響く。

3年生達は、ゆっくりとその声の方向へと振り向いた。中世古と吉川は、それを見て絶望的な表情になる。

そこには、あまりにも無表情にその光景を見つめる、秋川忍の姿があった。

「……何って、アンタのトランペット。可愛くしてあげただけど

？」

そう言つて、3年生の1人はトランプットを投げる様にして忍に返す。それを、忍は両手で受け止める。

無惨な姿に変わり果てたトランプットを見て、忍は一つ、大きく深呼吸をした。

「……言いたい事は、それだけですか？」

そして、3年生達の前まで歩いて行き、右手を大きく振りかぶる。

「秋川君！やめて!!!」

中世古がそう叫んだ時には、もう遅かった。

そして、その日以降、忍は部活に顔を出さなくなつた。

崩壊

絶句。吉沢の反応は、まさにそれだった。

「明かされた忍の過去、それは、想像以上のものだったからだ。」

「……なんですか、それ」

それと同時に、怒りが湧いて来る。何故、一番真剣に取り組んでい
る人間がこんな仕打ちを受けなければならぬのかと。

吉沢は、忍が自分の楽器に名前を付けてまで溺愛している事を知っ
ている。

何故、そんな事態になるまで放っておいたのかと。

「何で誰も止めなかったんですか!?アツキー先輩達が楽器を大切に
してる事なんて、ここに居る誰もが知ってる筈じゃないですか!?!」

吉沢は、声を張り上げる。目の前には1年も2年も上の先輩が居る
が、そんな事は関係ない。

吉沢秋子は、秋川忍を尊敬している。それはもう、心の底から。自
由で、ひょうきんな性格。卓越した演奏技術。それでいて、決して頑
張る人を見捨てない。

吉沢は、そんな忍の姿を間近で見ている。

そんな先輩が受けた仕打ち。それを聞いて、怒らないはずもなかつ
た。

吉沢の怒りに、その場にいる滝野と笠野は何も言えず俯いてしま
う。

忍に対する負い目。それは、トランペットパートに降り掛かった呪
いの様なものだった。

「そうね、悪いのは私たちよ」

すると、教室の入り口の方から、そんな声が聞こえる。皆その方向
に顔を向けると、吉川が入り口で立っていた。

「……………優子ちゃん……………」

「……………吉川……………」

「……優子先輩……」

パートメンバーの反応は驚きだった。何故なら誰しもが、今日は吉川は来ないと思っていたからである。

吉川はそんな空気をものともせず教室に入ると、演奏の準備をする。いつも通り、淡々と。

しかし、皆その異変に気付いていた。

「……吉川、お前、その顔……」

ひどい顔。女性にこう言うのもなんではあるが、吉川の今の顔は、そう表現するしか無い様なものだった。

目の下には大きいクマが出来ており、髪は少し乱れ、目は何処か虚になっている。恐らく、一睡もしてないのだろう。

「ゆ、優子ちゃん、今日は……」

「練習しますよ。アタシはコンクールメンバーですから」

笠野が止める様促す前に、吉川はそう返す。大丈夫では無い事は、誰の目から見ても明らかだった。

しかし、ただ一人。吉川だけは彼女の事を睨め付けていた。

「……優子先輩。あの後、アツキー先輩と話しましたか？」

「ちよつと秋子ちゃん……」

吉沢の突き刺す様な問い掛けに、一瞬、吉川は肩を震わせる。横では笠野が、必死に吉沢を止めようとしていた。

「……秋子ちゃんには、関係無いでしょ？」

尚も準備をしながら、吉川はそう返す。すると、吉沢は一層険しい顔になった。

「関係あります！確かに！優子先輩を叩いたのはアツキー先輩です！でも！ただ怒ったからって理由で叩いたんじゃ無いのは、優子先輩が1番知ってる筈でしょう!？」

笠野の静止を振り切って、吉沢はそう吉川に詰め寄る。初めて見る吉沢の激昂に、滝野も笠野も驚いた顔になっている。

「……分かってるわよ」

ただ一人、吉川だけは俯いてそう返す。そして、淡々と楽譜台に楽譜を設置する。

「じゃあ！優子先輩が居るべき場所はここじゃ無いと思います!!」
「……………」

吉沢の詰問に、吉川は無言を返す。しかし、それが油に火を注ぐ結果になったのか、さらに吉沢は感情を露わにした。

「仲直りして下さい！優子先輩！アッキー先輩だって、嫌いで優子先輩の事を叩いた訳じゃ

「うるさい!!!」

すると、尚も言い詰める吉沢の言葉を遮る様に、吉川はそう叫んだ。怯んだ吉沢は、一瞬にして静かになってしまう。

「分かってる。…………分かってるわよ…………アタシが悪いって…………」

震える声で、吉川はそう言う。

「…………吉川…………」

その光景に、滝野は驚いた表情でそう呟く。吉川がこんな表情をしてるのを、滝野は初めて見た。彼女は、吉川優子は勝ち気な性格だ。弱いところを見せる事など、殆どない。

そんな吉川優子が、涙を流していたのだから。

「…………個人練、行ってきます」

すると、吉川は準備した楽譜台とトランペットを持って、フラフラとした足取りで入り口の方へと向かう。

しかし、それを通せんぼする様に、吉沢が扉の前に立った。

「…………逃げるんですか？優子先輩？」

そう言っただけで吉沢は、吉川の目を真っ直ぐ見据える。その視線に、吉川は咄嗟に顔を背けた。

「逃げないで下さい！ここで逃げたら、絶対に後悔します！優子先輩がアッキー先輩に会うって言うまで！私はここを退きません!!」

吉沢の意思は、固い。それを見て吉川は、少し呼吸が荒くなった。

「…………はあ、…………はあ」

そして、ただでさえ良くなかった顔色が、みるみると青ざめて行く。
「大丈夫？ 優子ちゃん？」

そんな吉川の異変に気付き、すぐさま笠野が近づいた。しかし、状態は一向に良くなるらない。

「はあ……!!はあ……!!」

呼吸はどんどん荒くなつて行く。そして、ゆっくりとその場に吉川は倒れ込んでいった。

「ちよっ！ 吉川！ おい！」

そして、それを見た滝野も吉川に近寄る。間違いない。これは……

「ほ、保健室！ とりあえず保健室に！」

慌てた笠野が、吉川の肩を持ってそう言う。

「はあ……はあ……つはあ!!」

吉川は、過呼吸を起こしていた。

「あれ？、兄ちゃん、部活はー？」

ここは秋川家。台所でコップに麦茶を淹れながら、凜花がリビングのソファで寝っ転がってテレビを覗いている忍に対し、そう聞く。

「部活停止食らった。1週間」

テレビを見ながら忍がそう答えると、凜花は飲んでいた麦茶を勢よく嘔き出した。

「はあ!?!部活停止!?!兄ちゃん、また何かやったの!?!」

「吉川ぶん殴った」

「吉川って……あの吉川さん!?!はあ!?!何で!?!」

凜花は尚も驚いてそう聞く。彼女は吉川とは殆ど面識が無いが、祭りの日になんだか忍と良い雰囲気になっていた事を覚えていたからだ。

「今までやって来た音楽を馬鹿にした。以上」

そんな混乱気味の凜花に、忍はテレビから凜花に視線を移し、ピシヤリとそれだけ言い放った。

「……殴った事めっちゃ後悔してんじゃん」

しかし、忍の顔を見て、何か察した様に凜花はそう言い放つ。対して忍は、膨れっ面になった。

「してない」

「嘘。そんな寝不足な顔見せられても、説得力無いよ?」

凜花の言う通り、忍の顔も吉川と同じくひどい顔になっていたのだ。

「……実はしてる」

そして、観念した様に忍はそう言い直した。こう言うところは素直である。

それを聞いて、凜花は困った様に笑った。

「何があつたか分かんないけど、後悔してんならちゃんと謝るときなよ?」

「……分かった」

諭す様に凜花がそう言うと、忍はやりにくそうにそう返す。これではどっちが年上なのか分からない。

すると、忍はソファから立ち上がって、リビングを後にしようとする。

「あれ?、兄ちゃん、どっか行くの?」

家にいる時は、90パーセント以上の確率でソファに寝っ転がっている忍が立ち上がったので、凜花はそう聞く。

「外で吹いてくる。……今日はお前の面倒は見れないぞ?」

すると、何か考えている様な顔をして、忍はそう返した。

「ふーん、分かった。晩飯までには帰って来なよ」

そんな忍を見て、凜花は入れ替わる様にソファに座り、満足そうにそう言い放った。

どん底

吉川優子は、夢を見ている、

「トランペット、好きなの？」

それは、まだ吹奏楽部に入部したての時。

新しく入部して来た同じトランペットパートの男の子に、なんとなく話し掛けた時の夢。

「もちろん。5つの頃から一筋よん」

当時から何も変わらない。ひょうきんな彼。満面の笑みで、そう答える姿は、トランペットが心の底から好きな事が伝わる。

「って事は、10年か。どうりで上手い訳だ」

今では考えられないくらい外面良く接してたと、夢の中でも苦笑いになる吉川。もうこの1週間後にはこの口調は無くなり、現在の粗暴な感じになっていたのだが。

男の子は褒められると、嬉しそうな顔を隠そうともせず、そのままケースからトランペットを取り出した。

「でしょー？じゃあ、一曲吹いてあげよつか？」

そして、自慢げにそう言い放つ。

「え、でも、もう先輩達来ちゃうよ？」

「大丈夫。すぐに終わる曲だから」

そして、その男の子は自信満々にそう言うと、マウスピースに口をつける。

思えば、彼のソロを初めて聞いたのは、この時が初めてだったなどと、夢の中でぼんやりとそう思い返す吉川だった。

「……………ん……………」

目が覚める。いつの間に、ベッドで横になっていたのか。寝た状態のまま顔を左右させると、ここが保健室である事が分かった。

そして、ゆっくりと身体を起こす。

「お、起きた？」

吉川が上体を起こすと、中川がへらりと笑って吉川にそう聞いて来た。

「……なんだ、アンタか」

「ごめんねー、アツキーじゃなくて」

不機嫌そうな顔で吉川がそう言うと、揶揄う様に笑って中川はそう返した。いつもならここで吉川が噛み付くはずなのだが、寝起きであるからか、少しボーッとしている。

「……あんま覚えてない。倒れたの？アタシ」

「うん、過呼吸だって。落ち着いたら、今日はもう帰りなさいって、滝先生が」

起きて頭が冴えて来て、段々と吉川も思い出して来る。

「夏紀がアタシを運んでくれたの？」

「いや、運んできたのは沙奈先輩と吉沢ちゃん。吉沢ちゃんなんか、私のせいで優子先輩が倒れちゃった”って、号泣してたよ？」

「……まあ、半分そうなんだけどね」

苦笑いになって、吉川はそう返す。吉川自身も、いつも大人しい吉沢が、ああ言う風になるとは予想してなかったのだ。

「……よいしょと……」

「大丈夫？、立てる？」

吉川がベッドから降りようとすると、心配そうに中川がそう聞く。「うん、大分良くなった。もう一人で歩けるし、アタシ、もう帰るね？」

ベッドから降りると、少し笑って吉川はそう言う。顔色も悪くなく、足取りもしっかりとされていて、本当に大丈夫な様だ。

「……うん、今日はもう帰った方が良いよ。家に帰って、布団にくるまって、眠くなるまで色々考えれば良いんじゃない？」

そして、中川は薄く笑って、諭す様にそう言った。

「……ぷっ、何よそれ、フツーなら気にしない方が良くって慰めるところじゃないの？」

中川の変な慰め方に、吉川が軽く嘖いて、そう返す。少しひねくれ

た中川らしい慰め方だった。

「お、そんだけ元気があんなら、心配要らないっぽいかなー?」

「うっさいわね。あんま調子に乗るんじゃないの」

そして、いつも通りのやり取りも戻って来た。

「じゃあ、アタシもう帰るわ」

そう言っただけで保健室まで誰かが持ってきて来てくれたであろう学生バッグを肩で持つと、出口まで吉川は歩いて行く。

「うん、あ、後、最後に一つだけ」

「何?」

すると、思い出したかの様に中川が吉川を呼び止めた。それに吉川は反応して中川の方へ再度振り返る。

そして、そのいつもニヤけた不真面目そうな顔から、何処か真剣そうな表情に変わる。

「……アツキーは、いい男だよ。逃したら、もう2度と会えない様な、そんな人だと思う」

そして、吉川の目を真っ直ぐ見据えて、中川はそう言い放った。

対して吉川は、その視線に同じく真っ直ぐ返す。

「……分かってるわよ」

一言、それだけ言うと、吉川は保健室から出て行った。

「……………明日、どうしよっかな……………」

中世古は、悩んでいた。

彼女は、誰もが認める優等生。私情で学校を休んだ事など、一回もない。

しかし、今日ばかりは、人生で初めてずる休みをした。それ程に、あの時の光景がショック過ぎたのだ。

「……………はあ……………」

一つ、ため息をついてベッドに仰向けに寝転がり、天井を見上げる中世古。

彼女は、パトリーカー。今思うのは、トランプットパートがどのようなになっているかだけが気がかりであった。

中世古は目を瞑り、あの時の光景を思い出す。忍が吉川を叩いた理由は、彼女も何となく分かっていた。

秋川忍は、誰よりも音に真面目に取り組んでいる。

だからこそ、音楽に邪な感情が入る事を、絶対に許さない。

滝先生が高坂麗奈と知り合いだった事。それに関しては、忍としてはどうでもいい。昔からの仲なんだなとは思わない。しかし、その事実が自分達の音楽に介入するような事があれば？

そんな事実が、真剣に音楽に打ち込んでいる人達に知れ渡ったら？

それで、出す音に影響が出たとしたら？

全員が居る前で忍が吉川を引つ叩いた理由は、そこにあった。

ピーンポーン

すると、家のチャイムの音が、中世古の耳に届いた。一瞬、居留守を使おうとも考えたが、彼女の性格的にそれは許さず、まだ少し怠さが残る体をベッドから起こし、玄関まで向かった。

「はいー、……って、晴香……」

「お芋、買って来たよ」

中世古が玄関の扉を開けると、そこには焼き芋の袋を持った、小笠原の姿があった。

「やっぱりお芋は美味しいねー」

「相変わらず、マドンナとは思えない食べ物に興味だね……」

中世古の部屋で、小笠原が買って来た焼き芋を互いに食べながら、そんな会話をする。

「いいじゃん。好きなんだから」

そう言って焼き芋を頬張る中世古に対し、小笠原が苦笑いを返した。そして、すこしの沈黙が流れる。

「……部活は、どうなってるのかな？」

その沈黙を破ったのは、中世古の方だった。対して小笠原は、少し表情を曇らせる。

「……どん底って感じ。……みんな、集中力が切れてる。……特に2、3年生は……」

正にどん底。雰囲気と言えば、去年1年生が大量にやめていった時以上かもしれない。小笠原がそう言うと、中世古も同じく表情を曇らせた。

「……トランペットパートは、どうかな？」

中世古がそう言うと、小笠原は少し肩を跳ねらせる。そして顔を背けるようにして小笠原は事実を述べる。

「……アッキーは、一週間の部活停止処分。高坂さんは、相変わらず個人練習してる。……優子ちゃんは……」

そして、小笠原が吉川の事をどう説明しようかと、少し悩んだ後、「……途中で体調不良になって、今日は先に帰ったよ」

流石に過呼吸で倒れたとは、言えなかった。小笠原の説明に、「……そっか」と、考え込むようにして中世古はそう返す。実際に目にしたわけではないが、それでも状態が良くない事は、小笠原の反応を見て中世古も分かった。

中世古は、少し俯いて考え込む仕草をする。

「……私たちが、何とかしなきゃね」

そして、何かを決意したように、そう呟いた。それを聞いて、小笠

原は「……………え？」と、素っ頓狂な声を返す。

すると、独白するように中世古は語り始めた。

「私、後悔してるの。去年、秋川君に対する先輩たちの嫌がらせを止められなかった事。それで彼が部活を一度去って行った事」

「……………」

中世古の独白に、小笠原は黙って耳を傾ける。

「……………私、このまま何もなかったら、絶対また後悔すると思う。一生すると思う。だって、秋川君が部活で一番音楽が好きだって事は、晴香も知ってるでしょ？」

中世古の問いかけに、小笠原は「……………うん」と、短くそう返した。小笠原も、去年忍に積極的に話しかけられた人物の内の人だ。彼の音楽に対する情熱は嫌と言うほど知っている。

「じゃあ、このまま終わりたくない。せつかく私たちは全国を目指してるんだもん。せつかく秋川君の言う通り“面白い部活”になっただんだもん。それが崩れるなんて、私はイヤ」

強い決意を持って、中世古はそう言う。忍が音楽が好きな事もあるが、それ以上に彼女は今、喧嘩別れの様な状態になっている渦中の二人を、どうにかしたいと言う気持ちの方が強かった。

「……………そうだね」

そんな中世古の言葉に充てられたのか、小笠原もなにか決意したような顔になって、そう呟く。

「……………晴香、協力してくれる？」

「……………うん、もちろん」

中世古が小笠原を真つすぐ見据えてそう言うと、小笠原も覚悟を決めたようにそう返す。

どん底に落ちたのならば、あとは這い上がるだけだ。

公園で

いつもより早く学校から帰る時と言うのは、変な違和感を感じる。ここ最近、練習詰めで帰るのが毎日夕方になっていった吉川にとつて、今日の様に明るいうちから帰るのは、久々のことだった。

どこかブーツとして、明るい街を見ながら帰宅をする。

その景色は、どこか知らない場所に来た様な錯覚を覚え、不安な様な、そして何処か冒険心をくすぐられる様な、そんな感覚に吉川もなっていた。

”アツキーは、いい男だよ。逃したら、もう2度と会えない様な、そんな人だと思う”

吉川は、そんな街の景色を見ながら、中川に言われた事を思い出していた。

それは、彼女自身が一番知っている。忍と一番距離が近いのは、紛れなく吉川だ。

「……はあ……何話せば良いのよ……」

ため息をついて、少し俯いて吉川はそう呟く。

忍の事を一番理解してるのは、吉川だ。だからこそ、あの時忍が怒った理由を一番よく解ってるのも、また彼女だった。

確かに女性を叩いた忍の罪は大きいが、そうされても仕方が無い事をしたのだと、吉川もどこかで納得している。

だからこの様に何処か会いにくそうな顔をしているのだ。



すると、ある方向から楽器の音が聞こえる。トランペットの音だ。こんなところで誰が？

吉川は、その音色に聴き覚えがあった。それがなんだか気になって音の方へと歩みを進めると、それは公園で鳴らしている事が分かった。

そして、バレない様に木陰からその光景を覗く。そこには、子供た

ちに囲まれた、一人の男の姿があった。

「おー!!すげー兄ちゃん!!ラピユタじゃん!!パズーじゃん!!」

「ぼつかお前、パズーなんかより全然上手いだろーが」

興奮した小学生ぐらいの男の子にそう言われて、男は冗談めいてそう返す。

吉川の目に映ったその男は、紛れもなく忍だった。

彼はいつも通り、楽しそうにして、子供達の相手をしている。……相手にしているとと言うよりかは、一緒に遊んでいると言った方が正しいのだが。

「もう一回!もう一回吹いて!!」

すると、別の男の子がもう一度と、忍に催促する。

「えー?、またー?、しよーがないなー」

口調は面倒臭そうだが、顔は満面の笑みで忍はそう返す。

そして、姿勢を直しマウスピースを口につけて、再び忍は演奏を始めた。

♪、♪ー♪♪、♪ー♪

聴こえてきたメロディは、『ハトと少年』と言う曲。”天空の城ラピユタ”と言う、とあるアニメ映画のワンシーンで流れる、トランペットソロの曲だ。

高らかなハイトーン気味のそのメロディは、主人公が街の人々を毎朝起こすために鳴らしていると言う設定のものだった。

それに沿う様に、軽快に、そして伸び伸びと忍は音を奏でる。

この音を聴いている人達全員が、気持ち良い朝を迎えられる様にと、そんな思いを込めて。

そんな忍の姿を、吉川はジッと見つめる。

その演奏を聴いて彼女が覚えたのは、懐かしさだった。

だってその曲は、忍が初めて吉川に聴かせたソロの曲だったからだ。

1分も経たずに終わる、短い曲。それを吹き終わると、再び子供たちから歓声が起こった。その光景を満足そうな顔で忍は見つめている。

……やっぱり、秋川は秋川だ。

それが、この演奏を聴いて吉川が思った事。それが胸にスツと入って来ると、自然と足取りは忍の方へと向いて行った。

そしてお互いに、目が合う。

「あ、……吉川……」

最初に話し掛けたのは、忍の方だった。吉川の姿を見て、ホツとした様に薄く微笑む。

「やつと来た。とりあえず、あっち座ろつか？」

そして、忍は公園のベンチを指差し、続けてそう言い放った。

「……なんで公園で吹いてんのよ？」

公園のベンチ。隣同士で座り合う。しかし、吉川は俯き、忍は子供達を見つめていて、お互いに顔は合わせていない。ぶん殴られたのが昨日の今日なのだ。やはりと言うべきか、何処か吉川はやりにくそうにしてる。

「吉川の通学路だから」

対して忍は、いつも通りだった。あつけらかんと、吉川に対してそう返す。

そんな忍に、何故か安心感を覚える吉川だった。

「……アタシを、待ってたの？」

「うん」

吉川の問いかけに、素直にそう返す忍。それを聞いて、吉川の心臓が一つ、跳ねた。

「なにそれ、ストーカーじゃない」

「俺としてはストーカーした甲斐があったけどな」

そして、軽口に軽口を返す。いつものやり取り。まだ互いに目は、合わせていない。

「……部活停止なんでしょ？吹いていいの？」

すると、俯いたまま、吉川は暗い声でそう聞く。

「部活には出ちやいけないだけだから。校外ならどこで吹いたっ

て、俺の勝手でしょ？」

「……ホント、アンタって相変わらず」

忍がひょうきんにそう返すと、俯いたまま吉川は薄く笑う。そして、その俯いた顔を上げ、ようやく忍の顔を見た。

「……ねえ、秋川。……まだ、怒ってる？」

不安そうに、少し瞳を揺らしながら吉川は続けてそう聞く。それに対して忍は、すぐさま首を横に振った。

「俺は怒ってないよ。って言うか、ホントなら殴られた吉川が怒るところじゃない？」

尚もひょうきんに、忍はそう返す。それに吉川は確認する様に、忍に叩かれた右頬に自ら触れた。

「……そうね、傷ものにされちゃったから、怒ってるってよりか、傷心してるって感じかも」

そして、意地悪な笑みを浮かべて、吉川はそう言い放った。それを聞いて、忍は困った様に笑う。

「……そっか、傷ついちゃったか。……じゃあ、ちゃんと謝らないとね」

そして、忍はベンチから立ち上がり、吉川に向かって頭を下げた。

「ごめん。昨日は叩いて。お詫びに2、3発殴っていいよ？」

素直に忍が謝り、頭を下げて、自分の顔を吉川に突き出す様にして忍はそう言う。

「良いわよ。アタシだって普段からアンタのケツ蹴ってたんだから、おあいこって事で」

それに吉川は困った様に笑ってそう返した。それを見て、忍もホツとした様な表情になる。

「……そっか、良かった」

忍がそう呟くと、少し無言の時間が流れる。どちらも、何か言いたそうにしているが、中々に言葉が口から出ない状態だった。

「……………吉川はさ、オーディション結果に納得してないんだよね？」
そして、今まで伏せていたその話題に触れたのは、忍の方からだっ
た。

吉川は、一瞬目を見開く。

「吉川はさ、誰がソロパート吹くべきだと思う？」

そして、忍は視線を吉川に向け、しっかりと目を捉えて彼女にそう
問いかけた。

それに吉川も、真っ直ぐ見つめ返す。

「……………アタシは、香織先輩が吹くべきだと思う」

忍の眼を真っ直ぐ見て、強い口調で吉川はそう言い放った。

「それは、音だけを聞いての判断？」

そんな吉川に対し、何かを試しているかの様な口調で、忍はそう聞
く。しかし吉川という少女の頑固さは、しぶといものがあつた。

「違うわよ。アタシの個人的な感情。……………でも、ソロパートを吹い
ても良いと思うぐらいの積み重ねを香織先輩はして来たって、アタシ
は思ってる」

吉川は、真っ直ぐ忍を見つめてそう返した。

吉川は、忍が誰よりも音に純粋な事を知っている。それを分かった
上で、彼にそう言い放つたのだ。

音だけではなく、今までの行動も含めて。中世古に吹いてほしい
と、吉川は心の底から思っている。

「……………」

そんな吉川の光景を見て、忍は腕を組んで考える。

彼とて、1年の頃は中世古にお世話になった身。彼女の性格の良さ
を知っている。彼女がトランペットに真面目に打ち込んでいたのも
知っている。

でも、音は……………

「……俺は、高坂さんが吹くべきだと思ってるよ」

音は、誤魔化せない。どれだけ中世古が性格が良くても、どれだけ後輩から慕われようと、音の良し悪しは分かる。分かっってしまう。そこに嘘をつく事は、忍には絶対に出来ない。

忍のその発言に、吉川の瞳が揺れた。

「吉川はさ、高坂さんの音って、どう思う？」

そして、忍は続けて吉川にそんな質問をした。

「……ずるいと思う」

それは果たして答えなのか。吉川は、再び俯いてそう答えた。それを聞いて、忍は納得行った様な表情になる。

「ずるい、か。……そっか、そうだよな。ずるいよな。1年であんだけ吹けて」

「……うん、反則だと思う」

突如現れたスーパー1年生。それが、あつという間にソロパートを搔つ攫って行った。

それはとても格好良くて、とても美しくて、そして……

「……なんで、今年なのよ……もう香織先輩は、今年で最後なのに……」

とても、残酷な事だった。

吉川は薄らと涙を浮かべて、恨めしそうにそう言い放った。

「納得、してない？」

「してない」

忍がそう聞くと、吉川は即答する。彼女は納得していない。でも、ここで急に中世古にソロが変わったとしても、吉川にとって良くない事は、忍は直感的に理解していた。

……なら、納得させる為には、どうしたら良いのか？

「……じゃあ、やり直してみよっか？」

忍は、覚悟を決めた様に、吉川に対してそう言い放った。

「……えっ？」

吉川は忍が言った言葉の意味がわからず、そう聞き直す。

「オーデイション、もう一回。今度は皆が居る前で」

忍のその提案は、ある意味現実を突き付ける様なものでもあった。

愚痴大会

「やっぱりさあ？ 鼻負するつもりなくても知ってる知らないじゃ違
うと思うんだよねー？」

「結局、高坂さんをソロにするためのオーディションだったって話
もあるらしいよ？」

「高坂さんのお父さんって、結構有名なトランペット奏者なんで
しょ？」

「じゃあ先生嫌とは言えないねー」

噂ばかりが広まる。全くもって、根も歯もない噂。

疑惑が広まる中、滝先生は無言を貫いた。だがそれが問題に蓋をし
ているかのように映り、部員は不信感を募らせて行った。

「なーんか、去年ソロコンの賞取ったアッキーが落ちるのも納得っ
て感じ」

皮肉のように、誰かがそう言う。この事実が、滝先生が高坂麗奈を
鼻負していると言う疑惑を、さらに加速させていた。

しかし、それとはもう一つ別の話題も、部内で沸き起こっていた。

「でも、アッキーが優子叩くなんてねー」

「ねー。何で叩いたんだろ？ 優子ちゃんとあんなに仲良かったの
に」

「もしかして、アッキーも滝先生側とか？」

忍が吉川を引っ叩い事件。忍は悪い事に、部員全員がいる前で叩い
た。皆あの光景を見た。だからどちらかと言うと、滝先生の話題より
忍の話題の方が大きくなっていった。

「ごめんね？ 昨日は休んじゃって」

「いえ！ 体調は大丈夫なんですか!? 香織先輩！」

ここはトランペットパートの練習教室。中世古がそう言うと、吉川

が心配そうにそう尋ねる。

取り敢えずは中世古は戻って来た。しかし、部活の雰囲気が変わったわけではない。

地獄のような雰囲気、トランペットのパート練習。皆、口には出さないが、ピリピリした空気を纏っている。高坂も、吉川も、そして他のメンバーも。

それは、皆オーディション結果に納得してない証拠でもあった。

「ストップ。……皆、音がバラバラ。集中出来てない。……取り敢えず、今日は一日個人練にしようか？」

中世古の提案に皆、暗く俯いて頷きを返す。

トランペットパートは、まだ崩壊したままだ。

「……私が、なんとかしなくちゃ」

そんな光景を見てポツリと、誰にも聞こえない声でそう呟き、覚悟を決めた様な表情になる中世古だった。

「……最悪……」

「だろうね」

翌日、2年3組の教室。滝野がそう呟くと、忍が軽い感じでそう返した。

「だろうねって、お前……今渦中にいるのに随分と呑気な……」

「まあ、どのみち今は部活出れないからねー。こうして一歩引いた場所から見ると、改めて酷さつてのが分かるもんですよ」

あいも変わらずいつも通りな忍に、滝野は少し顰めっ面になる。

「……部内は今、お前と滝先生の噂で持ちきりだ。アツキーも分かっただろう？あの場で吉川を叩いたんだ。皆ショックを受けてる」
「確かに俺は吉川を叩いた。後悔もしてる。でも、それが間違いだとは思ってないよ」

それに対して、忍は真っ直ぐ滝野を見つめ返し、そう答えた。それは滝野も分かっている。忍の性格的に、あんなつても仕方のない事な

のだろうと。

「……ホント、アッキーは真っ直ぐ過ぎるな。それで？吉川とはもう話したのか？」

すると、滝野は話題を部活の雰囲気から吉川個人の話に変える。

「うん、一昨日、仲直りした」

「二昨日って、早いな？」

一昨日と言う事は、吉川が過呼吸を起こして倒れて、そのまま帰った時だろう。

メールで仲直りでもしたのかと、滝野は勘繰る。

「吉川の通学路の公園で待ち伏せしたからね」

しかし違った。もっと直接的な方法だった様だ。

「待ち伏せて……そんなストーリーカー紛いな事……俺は吉川にまだ怒っていると思ってたんだけどな」

そんな行動力の権化の様な忍に、滝野は苦笑いになってそう返して来た。

「確かにあの時は怒ってたけど、俺だって引つ叩いた事は悪いと思ってるんだよ？」

「ホントか？いつもケツに蹴り入れられてるから、その恨みも溜まってたんじゃねーの？」

「おー、確かに、タツキーの言う通りかもねー」

そして、いつも通りの軽口も戻って来た。すると忍は窓の外を見て、何か考えるような仕草をする。

「……それに、解決策も自分の中では考えてるしねー」

何処か儂げで、悲しそうな表情でそう言う忍。

しかし、忍が部活に復帰出来るまでは、まだ時間が掛かる。

今日もパート練習。しかし、今日は何か違う。

教室には、トランペットパートのメンバーが全員集まっている。そして、教壇の上に中世古が立っていると言う状況だ。

「……取り敢えず、話を聞いてくれてありがとうね?」

中世古が、教壇に立ち先生の真似事をしてそう言う。

「い、いえ。香織先輩がそう言うなら……」

うちの一人、吉川が困惑の表情でそう返す。

「……それで、なんの用事でしようか?」

そして、もう一人、高坂はいつも通り鉄仮面を貼り付けて、中世古にそう返す。

そんな態度に吉川は頬を膨らませて、高坂の方を睨んだ。

「今日は、演奏じゃ無くて話をしようと思って」

「話?」

中世古のその言葉に、滝野が反応した。

すると、中世古は黒板の前に立ち、可愛らしい字体で黒板に文字を書き始めた。

「もー私たち、何回もあの子に振り回されてるから、ここで一回吐き出した方が良くと思うの」

そう言い終わると、黒板に書かれた文字が露わになる。

そこには、” 第一回、秋川忍の悪口を言っちゃおー会議 ” と、可愛いらしい文字で書いてあった。

それを見て、パートメンバーの面々は呆然としている。

「今は秋川君、部活に出れないからねー。あの自由人を、今日は皆んなで愚痴っちゃおーって、会議です」

しかし、そんな空気を気にすることもなく、中世古はそう言い放った。

「……なんの意味が……?」

そう聞いたのは、高坂の方だった。中世古の意図が分からず、困った様な顔をしている。

「そのまんまの意味だよ? 優子ちゃんは、いっぱい出るかな?」

「そーですねー。まず何かから言えば良いですかねー？ありすぎて迷っちゃいますよー」

対して吉川は、随分と楽しそうだ。普段から一番忍からの被害を被っているのは彼女だ。ここいらで全て吐き出すつもりかも知れない。

「……あの、私、そんな暇があったら練習」

「大事な事だよ」

うんざりした高坂が席を立とうとすると、中世古がそれに被せる様に真面目な口調でそう返して来た。

「……高坂さんって、秋川君の事、どれくらい知ってる？」

そして、薄く、困った様に笑って中世古はそう聞く。

「……すごい上手いと思います。ソロコンの賞を取る実力者なだけあります」

「違うなあー」

すると、中世古は首を振って高坂の言葉を軽く否定して来た。

「トランペットだけの実力じゃ無くて、中身の方。あの子がどう言う人間なのか。何か知ってる？」

諭す様に、中世古は高坂に向かって続けてそう聞く。対して高坂は少し考える様に俯いた後、反発する様に中世古を見つめる。

「……関係、無いじゃないですか。そんなもの、演奏になんら」

「関係あるよ」

そしてピシャリと、中世古は高坂に対してそう言い放った。いつもとは違う彼女の姿に、高坂も少し鉄仮面を崩してたじたじとなる。

「……吹奏楽ってね、一人じゃ演奏出来ないの。自分の音突き詰めるのも大事だけど、周りの音も聴かないといけない。それは、高坂さんにも分かる？」

「……………」

諭す様な中世古の言葉に、高坂は無言を返す。思い出していたのは、中学最後のコンクール。せっかく自分のベストを尽くしたのに、全国に届かなかったあの演奏。死ぬほど悔しくて、当時は何が悪いのか分からなくて、涙を流した。

あの時、自分には何が足りなかったのか？

「高坂さんの音って、綺麗だよねー。」孤高”って感じで。私もすごくなって思う。……でもね、それだけじゃ全国には行けないと、私は思うな？」

コンクールメンバーは、最大55名。その中で、高坂麗奈は実力が突出していると言っていていいだろう。野球で言うならば、エースだ。しかし野球と違って、吹奏楽は”エース”だけが強くても、コンクールでいい結果は出せない。高坂がエースとして力が発揮できる場所は、12分あるプログラムの中でたった1分でしか無い。

その他がバラバラであつたら、エースである高坂の演奏なんて、一瞬で霞む。

吹奏楽は、総合力の音楽。それは、紛れもない事実なのだ。

「……今日は、高坂さんにトランペットパートのみんなの事をよく知ってもらいたくなって思って、こう言う会議を開いたの。音って、その人の性格がよく出るって言うでしょ？」

「……はい」

中世古の問いかけに、考え込む様にして一つ頷く高坂。ようやく、中世古の意図が汲み取れて来た様だ。

吹奏楽は、総合力の音楽。ならば、周りの音を聴いて、その人の出す音を理解しなければならぬのだ。それで無いと、ハーモニーは生まれない。

そして、それを可能にするためには、他の人間がどの様に音楽に向き合っているか、どのような性格をしているかを知っておかなければならない。

「じゃあ、今日は無礼講で話しちゃおう。まずは、秋川君に何か言いたい人ー？」

「はいはい！アタシから言いまーす!!」

そして、明るく中世古がそう言うと、水を得た魚の様に吉川が食いついてくる。

……いつも忍にどれだけ迷惑を掛けられているのだろうか？

「えーっとー、まずアイツってデリカシー無いじゃないですかー」

こうして、本人のいないところで秋川忍に対する愚痴大会が始まった。

ユーフォの子

高坂麗奈は、真っ直ぐだ。

彼女は生粋のトランペッター。自分が目指すその場所に、何がなんでも到達しようと努力する。

周りの音はどうでも良い。自分が上手くなれば、自分が特別になれば、それで良い。そんな考えを持つ少女だった。

それで良いと彼女自身思っていた。

「……久美子、……アツキー先輩って、どう思う?」

「アツキー先輩?」

部活終わりの帰り。電車待ちの駅のホームのベンチで、高坂は茶髪気味の癖っ毛の強い女子生徒を久美子と呼び、そう聞く。

「アツキー先輩って、秋川先輩の事?」

高坂に呼ばれたこの久美子と言う少女は、本名を黄前久美子と言った。1年生のユーフォニアムのコンクールメンバーである。

高坂とはひよんな事で仲良くなり、今では親友と呼べる間柄になっている。

高坂の質問に黄前は腕を組み、頭の中で忍の事を思い浮かべる。

「……あんま分かんないや。アツキー先輩、アタシ話した事ないし」

「……そう」

黄前がそう返すと、高坂から少し落胆した様な声が出た。

「……オーデイションの事?」

すると、黄前からそんな言葉が出て来た。それに高坂は「……うん」と、ひとつだけ返事を返す。

「うーん、何て言うんだろうな、……アツキー先輩って、単純なんだと思う」

「単純?」

黄前の言葉に、首を傾げる高坂。

「うん、単純。良いものは良いって言うし、悪いものは悪いって言う。そこに私情は無くて、いや、私情はあるんだけど、何て言うか

……」

話した事は一度も無いが、忍は部内でもかなり目立つ存在だ。合奏でもあれこれ何やらおかしな事をしているのは黄前も見えていたので、忍に対するイメージと言うものは持っていた。

「おうおうおう、随分と言ってくれるねー、一年」

すると、二人の背後から突然、男の声があった。黄前は「うえああ?!?!」と変な声を上げてベンチから飛び上がり、咄嗟に声の方向へと振り返る。

そして、人生が終わった様な、真っ白な表情になった。

「先輩に単純なあ、どう言う了見だいつと」

そこには、絶賛部活停止中の、秋川忍の姿があった。

「あ、あのあの!えつと!その!!」

「まーまー、取り敢えず落ち着きんさいな」

取り乱す黄前に対し、忍はカラカラと笑いながらそう言う。そして、少しして黄前が落ちつきを少々取り戻すと、今度は恐る恐ると言った感じで忍の顔を見る。

「……あのー……因みに何処から聞いてましたー?」

「高坂さんが俺のことを黄前さんに聞いた時から」

つまり、最初からと言う事だった。再び慌てた黄前は、必死に頭を下げる。

「あ、あのあの!、違うんです!これはなんて言うか、悪口じゃ無くて褒め言葉と言うか……」

「……そっか、俺は単純でバカでろくでなしだったんだな……どうしてこんな事になってしまったのやら……」

黄前の反応を見て、これでもかと言うぐらいいわざとらしく落ち込む。完全に面白がっているが、付き合いの無い黄前からしたら本気で落ち込んでいる様に見える、さらにあたふたしてしまっていた。

「……アツキー先輩。久美子、困ってますよ?」

すると、隣に居た高坂がいつも通りにそう言う。彼女は忍と同じトランペットのパートメンバーなので、ある程度忍の性格も知っている。

「もー、つれないねえ、高坂さん。ここは一緒に黄前ちゃんを精神的に追い詰める場面でしょー？」

「なるほど……」

残念そうに忍がそう言うと、合点が行ったかの様に高坂はそう呟く。その光景を見てようやく揶揄われている事が分かった黄前は、肩をガックシと落とした。

「……はあ、騙されてたんですね。アタシ」

「あつははは！良いねー、その反応！黄前ちゃん、よく面白い子って言われない？」

そして、忍は大きく笑って黄前にそんな事を言う。どうやら随分とこの少女を気に入ったらしい。

「そう言うのはあすか先輩で間に合ってます。って言うか、アタシの事知ってるんですね」

それに、ジト目を向けながら黄前はそう返した。まだ初めましてで3分も経っていないが、なんだか小慣れた様なやり取りをしている。

「うん、なつきちからユーフォに面白い子が居るって話も聞いてたし、実際面白かったからねー」

対して忍は、ひょうきんにそう言い放つ。

黄前は不思議な気持ちになっていた。なんというか、距離感を縮めて来るのがメチャクチャ早いのに、それが嫌に感じない。

黄前久美子は、知らない人とはある程度一線を画すタイプなのだが、この秋川忍は、”それでも良いや”と思える様な何かを持っている様に黄前は感じた。

「オーディションねー。どうしよつか？」

そして、忍が一つ、ため息をついてそう言う。やはり話はバツチリ聞かれていたらしい。

それならばと、そんな感情になっていたからか、黄前は一步踏み込んだ質問を、忍にした。

「あ、アツキー先輩は、……オーディション結果に納得してるんですか？」

「してるよ」

返事は、すぐに帰って来た。あまりにもあっけらかんと言い放った為に、黄前の反応が遅れる。

「……え？してるんですか？」

「だからしてるって。何？もしかして黄前ちゃんも滝先生が鼻屑したとか思ってる？」

聞き返して来た黄前に対し、困った様に笑って今度は逆に忍が質問した。

「い、いや、そんな事は無いと思うんですけど……」

そして、黄前は彼女特有のどっちとも付かない発言をする。本音は晒してくれない様だ。

「まー高坂さんが居る手前、言いにくいよねー」

ケラケラと笑って、忍はそう言い放つ。と言うか、高坂が居る前で言えるはずもない。そして、続けて次に忍が発した言葉に、黄前は驚く事となる。

「俺が納得してるのは、高坂さんが俺より良い音を出していたからだよ？それだけ」

「……そうですか」

黄前の目を見て真っ直ぐそう言い放った忍に対し、彼女はそんな事しか返せなくなってしまう。

これは、本物だ。

それが、この5分足らずのやり取りで、黄前が感じた事。何処までも愚直。そしてこれほどに真っ直ぐなトランペッターを、黄前はもう一人知っている。しかし、高坂とは何か違う。それは何なのだろうか

？

「という事で、俺としてはもうオーデイションとかどうでも良いんだけどねー」

尚もケラケラと笑って、忍はそう言い放つ。

一見、忍は高坂と同じタイプだと思つた黄前だが、彼の在り方は少し違う様に思えた。だがそれが何かは、まだ彼女にも分からなかった。

『まもなく、2番線に――』

すると、電車の接近を知らせるアナウンスが鳴り響く。どうやら今いるホームと、逆の方向らしい。

「あ、やっべ。そろそろ来る。俺、逆の方向なんよね。じゃあ、俺も帰るわ。じゃあにー」

そして、それだけ言い残すと忍は反対側のホームに行く為に、黄前達に手を振って階段を駆け上っていった。

それに二人も手を振り返す。

「……ねえ、麗奈？」

そして、忍の姿が見えなくなると、黄前は高坂にそう尋ねる。

「……何？」

「アッキー先輩って、不思議な人だね？」

独り言とも取れるその黄前の発言に、「……うん、そうだね」と、高坂は一言だけ返した。

本心

今日もパート練習。

合奏で集中出来る状態では無い。滝先生が無言を貫いているが故、部内の不信感はかなり溜まっていた。

しかし、変わった事が一つある。

トランペットパートの雰囲気だ。正に騒動の渦中にあるこのパートなのだが、意外にも雰囲気は良かった。

何故ならば、中世古がチームを立て直そうと奔走してくれたからだ。オーデイション前でも何処かまとまりの無かったトランペットパートだが、最近は全員で集まって意見を交換したり、互いの欠点などを指摘し合ったりしている。

そう言う話し合いの場を、中世古が設けたのが大きかった。

個人練が多かった高坂が、パート練に顔を出す様になって来た。あまり高坂と反りが合わなかった吉川が、自ら高坂に話しかける様になった。

吹奏楽は、一人では出来ない。

そんな意識が、トランペットパートの中で生まれてきたのだ。

しかしそれとは別に、不安もまだ残っている。

一つは、秋川忍はコンクールに出れるのか？

吉川に対する暴力。理由があつたとはいえ、滝先生が居る目の前で叩いたのだ。

皆、口には出さないがそれを心配している。実力者である忍がコンクールに出ないのは、実に痛い。早く部活に復帰してくれと言うのが、パートメンバーの総意だった。

そしてもう一つは、オーデイションの結果。

吉川は納得していない。忍と話して心のどこかではそうではないと分かっているが、未だに滝先生が鼻屑したのでは無いかと言う疑問も拭い切れていない。

そして、納得してないのもう一人。

三日月の舞のソロパートを、個人練で吹く少女が一人、中世古香織だ。もう終わったはずのオーディションなのに、ソロは高坂で決まった筈なのに、彼女はまだこうしてソロパートの練習をしている。

それは何より、彼女が納得していない一番の証拠でもあった。

「おー、音、良くなったですねー」

すると、中世古の後ろから声が聞こえた。聞き覚えのある声に一瞬肩を震わせ、中世古は声の方向へと振り向いた。

「……秋川君……」

いつも通り、ひょうきんに。そこには、笑顔で中世古に話しかける忍が居た。

「高坂さんとはまた違うんですねー。こう、なんて言うか、包むと言うか、柔らかい感じの。香織先輩らしいって言うか」

身振り手振りをして、忍は中世古の音に対してそう感想を述べる。相変わらずな彼の姿に、中世古は少し噴き出してしまった。

「あははっ、ありがと。でも良いの？部活停止中でしょ？こんなところ先生に見つかったら……」

「大丈夫、大丈夫。部活には出てませんから。今は一生徒として親交のある先輩に話し掛けてるだけです」

少し心配そうに中世古がそう尋ねると、ケラケラと笑って忍はそう返した。物は言い様、反省はあまりしていない様である。それに対して中世古は困った様に笑った。

「そっか。じゃあ、私も吹奏楽部員としてじゃなくて、一人の可愛い後輩として、秋川君を見れば良いんだねー」

「可愛いじゃなくてカッコいいですよー」

中世古が揶揄う様にそう言うと、ひょうきんに忍もそう返す。やはり前と変わらずいつも通りの忍だ。

そして、一步、忍は中世古の方へと近付いて行き、何処か真剣な表情で中世古を見る。

「納得、してないですか？」

あまりにもあつげらんかと、忍はそう言い放った。
いきなりの彼の発言に、中世古の瞳が少し揺れる。

「……してるよ。今は全国を目指さなきゃだもん。だから皆んなを一つにまとめなきゃ」

「そうじゃなくて」

すると、中世古の言葉を遮る様に、忍は言葉を被せた。

「香織先輩自身がです。あのオーディション、本当に全部出し切つて、高坂さんがソロで良いやつて、納得しましたか？」

真つ直ぐ、中世古の目を見て、忍はそう尋ねる。それに耐えられなかったのか、中世古は一瞬目を逸らしてしまった。

「……秋川君は、納得してるの？」

そして、苦し紛れの様に中世古はそう返す。

「してますよ。俺は高坂さんの演奏を聴いて、納得しました。今、この三日月の舞を一番理解してるのは、彼女だって。だから不満も不信感も全くないです」

忍は尚も中世古を真つ直ぐ見据えてそう言い放つ。それが嘘ではない事は、彼の性格を良く知っている中世古も分かった。

「……本当に秋川君は真つ直ぐだね」

「どーも。それが取り柄なので」

中世古は困った様に笑ってそう言う。それに、忍も軽く笑ってそう返した。

やっぱり、彼は不思議な人だ。

中世古も忍とは付き合いが長いが、ここまで純粹で真つ直ぐな人は見た事がない。だからこそ、自分の本音を言いたくなると思うものなのだろう。

「……私、今年で最後なんだよね……」

真剣な顔つきで忍を見つめ、そう言い放つ中世古。雰囲気が変わった事を忍も察し、中世古の言葉に耳を傾ける。

「まだ出し切つてない。まだ納得してない。今年で最後なんだから、悔いが残らない様にやりたい」

ポロポロと、化けの皮が剥がれる様に、代わりに感情が剥き出しになっていくかの様に、中世古は独白する。

それを、忍は真剣に見つめている。

「だって最後だもん。ここで終わりたくないんだもん！ここで終わったら、後悔しちゃう！だから!!」

口調が、激しくなつて来た。いつも柔らかな笑顔を浮かべて、先頭に立って皆をまとめ上げる彼女が見せる本心。

やっぱり、彼女もソロパートが吹きたいのだ。

「もう一回やり直せないかなつて、どこかで思つてる……」

そして、最後は萎れる様になつて、そう呟いた。中世古の右手を見ると、震えながら強くトランペットを握りしめている。

それを見て、忍の心が決まった。

「……香織先輩。もしオーディション、やり直せるとしたら、また挑戦したいって思いますか？」

そして、俯き気味の中世古に、優しい口調で忍はそう問いかける。それに彼女は、無言で頷いた。

「……もしそれが、残酷でさらに傷付く結果になったらとしても？」

「……うん、したいよ」

忍が確かめる様にそう聞くと、中世古は顔を上げ、忍の目をしっかりと見つめてそう返した。

彼女は、本気だ。それがわかる様な、真っ直ぐな瞳。

それを見て、忍は満足そうに笑った。

「そっかそっかー。良いですねー、正に燃えたぎる闘志って感じですよ。……分かりました。部活停止が明けたら、滝先生に言ってみます。」

よ」

「言うって、何を？」

忍がしようとしてる事がまだ分からないのか、首を傾げてそう聞き返す中世古。

そして忍の次の発言に、中世古の心臓は一つ、大きく跳ねる事になる。

「もう一回、”みんなの前”で再オーディションをやってくれないかって、聞いてみます」

例えそれが、さらに残酷な結果を招く事になったとしても。

復帰報告

「はい。では、今日で部活停止期間は終了です。部活に復帰しても構いませんよ」

「はい。どーもすいやせんでしたー。これからは粉骨砕身頑張つて行くつもりでありますー」

職員室、忍がもうこの学校に入つてから何枚目になるか分からない反省文を滝先生に渡し、それを確認した先生から、部活復帰の許可が下る。

反省の色があまり見えない忍に対し、滝先生は困った様に笑った。

「もう少し、反省の色を見せてほしいのですけどね。松本先生は、まだ秋川君に対して怒ってますから」

「してますってー。こう見えて吉川ぶん殴った事ちよつと後悔してるんですからー」

しかし変わらぬ忍がひょうきんにそう返すと、滝先生は一瞬だけ表情を曇らせる。

「……吉川さんとは、……その……」

何処か言いにくそうに、滝先生はその話題に触れようとする。

「ちゃんと仲直りしましたよ？アイツも悪いと思ってるみたいで、おあいこって事になりました」

それを察したのか、忍の方からそう言い放った。それを聞いて、「そうですねか……」と、何処か安堵の混ざった様な返しを滝先生はする。

そして、少しの沈黙。滝先生はまだ何か言いたいのか、少し考える様な顔をして俯いている。

「……どうしたんですか？」

普段見せない表情をする滝先生に忍も違和感を感じ、そう尋ねる。そして、少し俯いたまま、後悔する様に滝先生は語り始めた。

「いえ、今回のコンクール。秋川君には貧乏くじを引かせた形になつてしまったなと」

「貧乏くじっ？」

滝先生がそう言うと、忍は首を傾げてそう返す。忍には滝先生が何を言いたいのかまだ分からなかった。

「……秋川君は、オーディション結果に納得してますか？」

そして、滝先生は顔を上げ、忍の目を見据えてそう聞く。

「はい、してますよ！良いですよね。高坂さんのソロ。あの曲のイメージにぴったりで！」

そして、忍はさもそれが当然かの様に、そう返した。

それに少し滝先生はホツとした様な顔になる。

「……そう、ですか……実は、私も心配だったのです。秋川君は去年ソロコンの賞を取った。だから、この結果に納得行つて無いのではないかと。今回の自由曲も、高坂さん最良の選曲と捉えられているのでは無いかと」

そしてポツリポツリと、独白する様にそう述べる滝先生。そんな先生の姿に忍は驚いていた。

忍の中での滝先生のイメージは、音楽に厳しく、妥協しない先生。だからこそ、失礼ではあるがこんな人間っぽいところがあるのが意外だったのだ。

だからこそだろう。普段鉄仮面を貼り付けて、悪魔の様な指導をする滝先生が、弱みを見せた。それを見て忍は驚いた表情から、少し微笑んだ顔に変わる。

人と言うのは、ギャップに弱いのだ。

「……滝先生、三日月の舞って、良い曲ですよね」

そして、優しく問いかける様にそう言い放つ。忍の突然のその発言に、「……はい、私もそう思います」と、少々驚きながらも滝先生はそう返した。

「カッコよくて、壮大で、それでいて美しくて」

すると、忍は三日月の舞について語り出す。それに、滝先生も黙って耳を傾ける。

「トランペットソロだけじゃなくて、オーボエソロ。序盤のパートごとに目まぐるしく変わる主旋律。中盤の低音の見せ場。みんなに見せ場がある。」トランペットだけが目立っても、どうしようもあり

ません”」

身振り手振りど、コンクールの自由曲について熱く語る忍。そこには、誰がソロパートが吹くかどうかのこのと言う事ではなく、純粋にあの曲がコンクールで金賞を取るに相応しいと言う感情から来るものだった。

「滝先生はこの曲を”全員”が完璧に演奏出来れば、全国に行けると思っただけですよ？」

「……はい、もちろんです」

真つ直ぐ、滝先生を見据えて忍がそう言うと、先生もそれに応える様に忍を見つめ返してそう返した。その言葉に、忍は満足そうな笑顔を浮かべた。

「じゃあ、そんな事言わないで下さい。」この曲で良かった”って、俺たちに思わせて下さい。……確かに、俺はあのソロパートと相性が悪かったのかもしれませんが、でも、あの曲がコンクールで演奏するのに相応しく無いとは、微塵も思っただけですよ」

忍のその言葉に、滝先生は一瞬目を見開く。

ここまで音楽に純粋な子は、滝先生も初めて出会ったかもしれない。

プライドも、自尊心も、一年にソロパートを取られた悔しさも、全て受け入れて、忍はこう言い放ったのだ。

滝先生がこの三日月の舞を自由曲に選んだ理由。それは、トランペットのソロパートを軸にした選び方をした訳ではなく、この曲の全体を見て、この曲を完璧に、”皆んな”で演奏すれば、全国へと行けると確信したからである。

吹奏楽は、一人では出来ない。

それを一番理解しているのは、紛れもなく秋川忍だった。

「……そう、ですね。生徒に気付かされるとは、私もまだまだですね」

忍の本心を聞くと、滝先生は薄く笑ってそう言う。どうやら先程の発言が失言だったと、忍に気付かされた様だ。

「いいですよん。まあ、そう言う事で自分は納得してるんです」

そして、いつも通りひょうきんに、そう忍は言い放った。しかしそれも束の間、忍は再び真剣な顔つきになる。

「……ただ、納得してない人は、まだいるっぽいですよ?」

試す様に続けて忍がそう言い放つと、滝先生も真剣な表情に変わった。

それは、ここ最近の合奏練習の雰囲気で滝先生も感じ取っている。オーデイションの結果に、部内で不信感が募って来ている。

「……ええ、解決策は、あるにはあるのですが、……しかしそれでは……」

「……香織……中世古先輩が、傷付くと?」

滝先生が言い淀んだところに、ズバリと忍がそう言い当てる。その言葉に滝先生は再び驚いた様な表情になった。

「……そこまで読まれていましたか……確かに中世古さんにとっては高校最後のコンクールです。ですが、何度も言う様に私たちは全国を目指しています。……なので私はそれでも、高坂さんが適任だと思っっています。……ただ、そのやり方では……」

公開しての、再オーデイション。それは、現実をまざまざと見せつける事に他ならない。

それ即ち、中世古香織の心を折りかねる事になるかもしれないと、滝先生は危惧していた。

だからこそ、この様に悩んでいる。

「……大丈夫だと、思いますよ?」

そんな滝先生の葛藤に、忍は薄く笑ってそう返した。それを聞いて、滝先生は考え込む様な仕草をする。

「……先日、かお……中世古先輩と話したんですよ。」あのオーデイションに、先輩は納得してるんですか?」って

それを見て、忍は続けてそう言い放った。

「……………彼女は、なんと?」

忍のその言葉に、滝先生はそう聞く。

「納得してない。出来る事なら、もう一回オーディションをやり直したい」って言ってました。……………確かに、再オーディションをすれば先輩は傷付くかもしれませんが。……………でも……………」

そして、ひとつ深呼吸をすると、滝先生を射抜く様に、忍は見つめる。

「やらなかったら、それ以上に香織先輩が後悔する事になると思います」

それは、1年間中世古が面倒を見てくれたからこそ、言えるセリフだった。

付き合いで言えば、滝先生より忍の方が長いのだ。彼女の性格を理解しているからこそ、この提案だった。

そんな忍の姿を見て、滝先生も覚悟を決めた様に顔を上げる。

「……………分かりました。では、再オーディションの提案は、私からする事にします。……………元々考えていた事ですが、秋川君がそう言うなら間違いないでしょう」

そして、いつも通り薄く笑って、滝先生はそう言い放った。

再度

「づあゝ あゝ あゝ あんゝー!! あゝ つぎーぜんゝ ばいゝ!! よがったでずー!!」

「どうどうどう、ヨッシー。泣きすぎだつて」

部活復帰初日。パート練の教室で、吉沢が号泣しながら言葉になつてない声を出す。滝の様に涙を流すそのあまりの号泣っぷりに、忍も少し引き気味だった。

しかし、それは号泣される程に忍が慕われていると言う裏付けでもある。それが忍にも分かっているのか、そんな吉沢を宥める様に頭を軽くポンポンと叩いた。

「なんか、いつも通りつて感じだな」

相変わらずひょうきんな忍の姿に、滝野は困った様に笑ってそう言う。

とりあえずは、忍が復帰出来たことに皆安心していった。やっぱり彼がいると、パート内が明るくなる。

「……それで、コンクールには出れそうなの？」

すると、今度は加部が心配そうにそう聞いて来た。部活に復帰出来たは良いが、問題はここだ。

加部のその言葉に、皆生唾を呑む。

「コンクールは出て良いって。滝先生も松もっさんも、そう言うってくれたよ」

忍のその言葉に、皆安堵のため息を漏らす。とりあえずは最悪の事態は避けられた様だ。

「よ、良かったー。滝先生の前で優子ちゃん引つ叩いたから、どうなることかと思つたよー」

そして、笠野が一安心という風にホツと一息つく。それを聞いた当事者の吉川は、忍に叩かれた右頬を触る。

「……そう、アタシは秋川に傷付けられちゃったの……だから、もう

お嫁に行けないわ……」

そして、わざとらしく落ち込んでそう言い放った。完全に揶揄っている。

「あ、アツキー先輩！こ、これは責任を取らなきゃいけないんじゃない……!!」

「なんでヨッシーが嬉しそうなんだよ」

そんな光景を見て、目を輝かせて吉沢は興奮気味にそう言う。それに忍はすぐさまツツコミを返した。

雰囲気は、大分良くなっていた。忍としては最悪も覚悟していたのだが、意外にもギスギスしている感じはない様に思えた。

「はいはい、じゃあ、もう練習始めるよ？」

そして、中世古が締めるようにそう言い放つ。一同、「はい」と返事すると、パート練習に移る。すると、いつもと違う光景が忍の目に入った。

「おっ、高坂さん。今日はパート練出るんだねー？」

興味津々に、高坂に対して忍はそう聞く。いつもなら個人練に行ってる彼女がパート練習に出ている事が、忍には新鮮に映った。

「……はい。……吹奏楽は、周りの音も聴かないといけませんから」

そして、楽譜の準備をしながら高坂は何処か照れ臭そうにそう答える。それを見て、忍は意外そうな表情に、中世古は満足そうに微笑んだ。

「はい。じゃあ、この後の合奏練習まで、音合わせをやるっか？」

「はい」

久々に復帰したトランペットパートが何か変わっている事は、忍も感じていた。

そして、部活後半からの合奏練習。忍たちトランペットパートが音楽室に入ると、少々騒めきが起こった。

やっぱりか、と言う風に忍は苦笑いになって、席に着く。

(もしかして、想像以上にヤバイ?)

そして、隣に座った滝野に対し、小声でそう聞く。

(ああ、ここ最近はまともに合奏練習が出来てない。皆んな集中力が切れてる)

(……自分の事じゃ無いのに、どうしてこうも過敏に反応するのかねえ……)

少し呆れも混ざった声色で、忍は小声でそう言い放った。皆、トランプットパートの方をジロジロ見ている。

ヒソヒソと、話し声が聞こえる。会話の内容なんて、大体想像できる。

こんな中でトランプットのパートメンバーは合奏練習をしてたのかと思うと、忍の中で少し苛立ちの感情が湧いた。

そして、全員が集まったのを確認すると、部長である小笠原が、教壇に上がる。そして、パンパンと2回手を叩き、みんなの注目を集める。

「はい、えっと、もう少ししたら先生が来ると思うけど、その前に皆んなに話があります」

小笠原の真剣な表情を、部員も感じ取ったのか、全員耳を傾ける。

「最近先生について、根も歯もない噂をあちこちで聞きます。……そのせいで集中力が切れてる。コンクール前なのに、このままじゃ金はおろか、銀だって怪しいと私は思っています」

小笠原のその言葉は凶星なのか、目を逸らす者、少し俯く者、バツの悪そうな顔をする者など、反応は様々だ。

「一部の生徒と知り合いだったからと言って、オーディションに不正があった事にはなりません。それでも不満があるなら、裏でコソコソ話さず、ここで手を挙げて下さい。私が先生に伝えます」

そして、小笠原は全体を見回し

「オーディションに不満がある人」

部員に対して、そう聞く。

この話は、忍が部活に復帰したら、小笠原がやると決めていた事

だった。不信感を皆に、公の場で聞き、是非を問う。

中世古との約束を反故にする程、小笠原はへっぴこでは無い。

そして、少し間が空いた後、最初に手を挙げたのは、吉川だった。それを皮切りに、部員の何名かが続けるように手を挙げる。それを確認して、小笠原は「……はい」と、一言呟く。

ガラッ

その時、音楽室の扉が開いた。

「先生……！」

良いと言うべきか、悪いタイミングと言うべきか、滝先生が入ってきたのだ。

「今日はまた、ずいぶん静かですね。……この手は？」

そして、いつもと違う音楽室の雰囲気を感じ取ったのか、滝先生がそう聞く。

「オーディションの結果に不満が……んぐっ！何すんのよ！秋川！！」

吉川が皆まで言う前に、忍が片手で吉川の口を一瞬押さえる。

「学習しろ。バーカ」

噛み付く吉川に対し、小馬鹿にするように忍は吉川に対しそう言い放った。しかし、それで言いたい事は伝わったのか、薄く微笑んで滝先生は入り口の扉を閉める。

「なるほど。……今日は、最初にお知らせがあります」

そして、そう言いながら滝先生は皆んなが見える位置まで移動するように、教壇の方へ近づく。

「来週ホールを借りて練習する事は、皆さんに伝えてますよね。そこで時間を取って、希望者には再オーディションを行いたいと考えています」

滝先生がそう言い放つと、音楽室が騒めき出す。吉川も、高坂も、その他のパートの人でさえ驚いている。

しかし、中世古香織、ただ一人だけは、真剣にその言葉に耳を傾けていた。

「前回のオーディションの結果に納得が行かず、もう一度やり直し

て欲しい人は、ここで挙手して下さい。来週”全員”の前で演奏し、”全員”の挙手によって、合格を決定します。……”全員”で聞いて決定する。これなら異論は無いでしょう。……良いですね？」

全員と言う部分を強調するかのようには、滝先生はそう説明する。全員が聴いてる場での再オーディション。

「では、聞きます。再オーディションを希望する人」

続けて滝先生が、そう問い掛ける。もし落ちれば、自分の実力の無さをまざまざと見せつけられる結果になる。心が折れるかもしれない。その後も立ち直れないかも知れない。

……でも、それでも、中世古は……

「ソロパートのオーディションを、もう一度やらせて下さい」

椅子から立ち上がり、手を真っ直ぐに挙げて、目を真っ直ぐ滝先生に向けて、中世古はそう言い放った。

その光景を見て、吉川は泣きそうに、高坂は気の強そうな表情で、小笠原は何処か心配そうに。

そして忍は、悲しげな、それでいて慈愛の籠った、なんとも言えない笑みを浮かべていた。

それを確認して、滝先生は一つ頷く。

「……分かりました。では、今ソロパートに決定している高坂さんと二人。どちらがソロに相応しいか、再オーディションを行います」

こうして、トランペットソロの再オーディションが行われる事が決定した。

感想

とりあえずは、ひとまず元に戻った。

滝先生が提案した再オーディション。それで、部員たちは納得した。

もう一人、忍はソロオーディションに出ないのかと言う疑問もちらほら出たが、本人が「自分は納得している」と合奏練習で自ら言い放った為、事態は収まった。

して、その再オーディション。中世古と高坂。その二人が、また争う事となった。1分超の、目立つソロパート。中世古は覚悟を決めて再オーディションを希望したが、もちろん高坂も譲るつもりはない。同じパートの熾烈な争い。誰もがトランペットパートはギスギスした雰囲気になっていと思うだろう。

「うわ、秋川。何よその弁当。茶色ばつかじゃない」

「うっさい。今日の弁当係は俺なんだから、自分の好きなもの入れて良いの」

しかし、意外にもトランペットパートは雰囲気良かった。

肉率がかなり多い忍の弁当の中身を見て、いつもの様に吉川が突っ掛かり、忍が子供の様にそう返す。

夏も本格化して来た7月の初め。休日の練習と言うものは、朝から夕まで一日中だ。

その間のお昼時の1シーン。今はトランペットパートの教室で、メンバー全員で一緒にご飯を食べている。

「それによく見る吉川。下の方にキャベツ入ってんだろーが」
「少なすぎるっつーの」

弁当の中身を見せつける様にして得意げに忍はそう言うが、吉川にバツサリと言いい切られる。

雰囲気の良いは、中世古が尽力してくれたおかげもあるが、この二人のやり取りのお陰でもあった。本人達に自覚があるのかは微妙なところだが。

そんな光景を、滝野や加部は「またか」と言う風に見つめ、中世古

はニコニコと微笑んで見ている。

吉沢に至っては「尊い……」とボソリと呟き、恍惚な表情で二人のやり取りを見ていた。なんだか怖い。

「アツキー先輩って、弁当作るんですか？」

すると、高坂も忍の弁当を見ながら、興味本位でそう聞く。雰囲気の良いは、彼女が変わった事もあるだろう。中世古に”吹奏楽は一人じゃ出来ない”と諭されてからは、どこか丸くなった印象を受ける。気の強さは相変わらずだが。

「もちろん。毎日日替わりで、俺と凜花と親父がローテーションで」

「……凜花？」

忍の口から出た初めて聞く人の名前に、高坂は首を傾げる。

「俺の妹。毎日違う人間が作ってるから、味に飽きが来ないのよねん」

高坂の質問に、忍がひょうきんにそう返す。弁当を作れる事が意外だったのか、高坂は少し驚いた表情になっていた。

「こんな胃もたれしそうな弁当渡されて、妹さんも可哀想ねー」

すると、今度は吉川が馬鹿にする様にそう挑発して来た。

「はあー!?言うたな!?じゃあ、一つ食ってみろや!」

そんな挑発に、簡単に乗る忍。ならば食べてみると、自信満々に自作弁当を吉川に差し出した。

「どうせ大した事ないでしょー?」

対して尚も馬鹿にする様に、吉川はクツクツ笑ってそう言う。そして弁当から忍の作った唐揚げを一つ摘み、口に入れる。それを味わう様に吉川が何回か咀嚼すると

「……意外とイケるわね……」

すぐさま吉川は、掌返しをかまして来た。

「だろ?」

そんな反応を見て、得意げに忍はそう返す。

「……………ヴっ!!」

そしてその光景を見て、吉沢は限界を迎えていた。

午後からのパート練。昼休みは和気藹々としていたトランペットパートも、始まれば張り詰めた緊張感を持って練習に励む。

そしてそこには、個人練も含まれている。ライバル心が無くなったわけではない。争っているどちらか二人がソロパートを吹き始めると、空気はひりつく。

しかし、そこにはギスギスした感情は無い。お互いに正面から音をぶつけ合い、互いの音を聴いて自らを高めていく様な、そんな健全な争いでもあった。

「……………うん、ますます良くなった。燃えてるねー、高坂さん」

「ありがとうございます」

屋上、いつもの場所でソロパートを吹いた高坂に忍が誉めると、対して高坂は一礼して一言、それだけ返した。

「孤高な音に滑らかさが加わった感じ。こりや、香織先輩大変だねえー」

面白い様にカラカラと笑って、忍はそう言い放った。それを見て、高坂は不敵に笑う。

「もちろん、ソロを譲る気は微塵もありませんから」

「おー、強気。いいねえー、高坂さんらしいよー」

そんな高坂の強気な態度に、嬉しそうに忍はそう返した。それを見て高坂は少し複雑そうな表情に変わる。

「……………分からないんですよね」

「何が?」

彼女にしては珍しくなにか言い淀んでいる姿に、忍は意外そうな顔を
をする。

「……………アツキー先輩って、1年の頃は香織先輩にお世話になったん

「ですよ?」

すると、高坂は確かめる様な口調で、忍にそう聞く。

「うん、香織先輩、優しいからねー。1年の時ゴタゴタがあつた時も、分け隔てなく話し掛けてくれたんよなー」

それに対し、思い出すかの様に、忍はしみじみとそう言い放つた。それを聞いて、高坂はさらに複雑そうな表情になる。

「……じゃあ、香織先輩が吹くべきだと思わないんですか?」

そして、真っ直ぐ忍を見つめて、高坂はそう聞いて来た。

「うーん、今の時点では高坂さんかな?俺の主観だけど」

忍は素直にそう返す。含みは無い様に、高坂には映つた。しかし、やはり引つ掛かりがある。それからか、高坂は少し表情を曇らせた。

「……香織先輩は、”良い人”です。皆んなから慕われている。それでも、私がソロで良いと言えますか?」

「言えるよ。それとこれとは、話が別でしょ?」

即答。さも当たり前前かのように、忍はそう言い放つた。それを聞いてホツとした様に、高坂は一つため息をついた。

「やっぱり、アツキー先輩は、アツキー先輩ですね」

そして、何処かスツキリとした表情で高坂はそう言う。

「それって褒めてる?」

「さあ、どうでしょう?」

「うっわ、生意気ー」

そんな軽いやり取りをして、高坂は再び空に向かって、ソロパートを演奏し始めた。

「……どう?、あすか?」

「良いんじゃないの?」

一方、こちらは校舎裏。ここでは、中世古のソロを田中が座って聴いていた。

「またそれー?前聞いた時も同じ事言ったよー?」

田中の感想に、不服そうに中世古はそう返す。

「同じだから同じ事を言うの。良いは良い。それ以上は無い。それに、決めるのは私じゃ無いよ」

相変わらず曖昧な返しをする田中に、中世古の眉間に少し皺がよる。

「……じゃあ、聞き方変える」

中世古の声色が、少し変わった。

「あすかは、どっちが適任だと思う？」

そして、田中を真っ直ぐ見つめて中世古はそう言い放った。

「上手い方がやるべきだと思うよ？ 滝先生はそう言う基準で決めるみたいだし」

「……高坂さんの方が良いって事？」

尚ものらりくらりと質問を躲す田中に対し、直接的に中世古がそう聞き返す。

「だからそれを聞いてどうするのー？ 決めるのは私じゃ無いんだよー。……それに」

そう言つて田中は立ち上がり、射抜くような目線を中世古に向ける。

「それを聞きたいなら、香織と同じパートで音に馬鹿正直な子が一人居るでしょー？」

田中がそう言い放つと、中世古は少し考え込む様な仕草をする。確かにそうだ。しかし、彼女が今知りたいのは、それでは無かった。

「……確かにそうだね。……でも、知りたいの。あすかが個人的にどう思ってるか」

中世古は、田中に憧れの様なものを抱いている。だからこそ、個人的に彼女がどう思っているのかを知りたいのだ。

「良いの？ 言つて？」

対して田中は、ひょうきんにそう返す。それに中世古は少し考えた後、

「……ううん、言って欲しくない。冗談でも、高坂さんが良いとか」
「言っていないでしょ？そんな事」

そんな中世古の独白に言葉を被せる様に、田中はそう言い放った。

「それとも貴様、我が思考を読む能力者か!？」

そして、オーバーなりアクションと共に場違いな事を続けて言い放
つ。

しかし、おちやらけたその言葉は、遠回しに……

「……じゃあね」

そして、今度こそ田中は中世古に背を向けて、その場を去る。その
田中の背中を見届ける中世古の顔は、少し微笑んでいる様に見えた。

エゴと愛

「では、明日はホール練習です。本番を想定して、良い練習をしましょう」

「はいー」

滝先生がそう声をかけると、今日の練習が終わる。

「パートリーダーと楽器運搬係は残ってください。明日の段取りを話します」

「はい」

続けて小笠原がそう声をかける。そして、各々音楽室の片付けを始める。

「ありがとうございました」

「あ、……うん」

そんな中一言、高坂が軽く会釈して吉川にそう言うと、その横を通り過ぎて行く。吉川は、そんな通り過ぎた高坂の背中を、ジツと見つめていた。

「……………」

そしてその光景を、忍はバツチリと見ていた。

”だからもう、一年生や秋川君を無視するのは、辞めてあげて下さい！お願いします！”

吉川は、思い出していた。それは中世古が去年、当時の3年生に対して必死に頭を下げていた光景。

亀裂が決定的になっていた当時の3年生と1年生の間を、何とか取り持とうとしていた彼女の姿。そんな光景を、思い出していた。

下駄箱の前、ブーツと吉川は突っ立っている。練習が終わってからこの様に気の抜けた様な、何か考え込む様な状態のままだ。

「……吉川、何ブーツとしてんの？」

そんな吉川に、声を掛ける人物が一人。その声の方向に、ゆっくりと彼女も顔を向ける。

「……なんだ、秋川か……」

そこには同じく下校しようとしていた、忍の姿があった。

「明日ホール練なのに、ブーツとしてるコンクールメンバーが居たもんでね。……どうせ、明日の再オーディションの事でしょ?」

忍がそう言うのと、吉川は一瞬肩を震わせる。しかしその反応で充分だったのか、忍は困った様に笑った。

「吉川、今日は一緒に帰るべや」

そして、優しく問いかける様に忍はそう提案して来た。

「何飲む?」

「……炭酸以外」

「あいよ」

近くの公園、そこに併設された自販機で忍が2本、飲み物を買う。彼はオレンジジュース。

「……何でブラックコーヒーなのよ……」

そして吉川には高校生にはまだ早いであろう、ブラックコーヒーを買って渡した。

「良いじゃん、ブラックコーヒー。大人っぽくて」

不服そうな吉川に対し、揶揄う様に笑って忍はそう言い放つ。

「……大人じゃないわよ。アタシ」

しかしと言うべきか、やはりと言うべきか、吉川にはいつものキレが無い。何か考え込む様に、そう返した。

そして、そのまま近場のベンチに二人して腰掛ける。

公園では先ほどの子供たちが遊具で遊び、その光景を忍はぼんやりと見ている。対して吉川は、暗く俯いたままだ。

「……ねえ、秋川。アンタは高坂と香織先輩、どっちが吹くべきだと思おう?」

すると、最初にその話題に触れたのは、意外にも吉川の方だった。「そうだね、……やっぱり高坂さんかな？ここ最近でさらに音に磨きがかかった」

忍は少し考えた後、そう答える。それに対し、吉川はさらに表情に影を落とした。

「……………やっぱそっか」

変わらない。やはり何処までも素直。答えがわかっているても、吉川は複雑な気分だった。

「吉川は、まだ香織先輩？」

すると今度は逆に忍からそう聞かれた。

それに吉川はコクリと、一つ頷く。

それを見て、今度は忍が少し悲しそうな表情になった。

「……………香織先輩って、良い先輩だよね」

「……………」

忍の問い掛けに、吉川はだんまりを決め込む。

「去年あんな事があって、俺もお世話になった。普通の人じゃ、あんなこと出来ないよ」

「……………そうね」

続けての忍の問い掛けに、今度はそれだけ返した。

「誰だって、香織先輩に吹いてほしいと思うだろうね」

「……………だったら」

「でも、それだけでソロパートが決まったら、香織先輩が納得しないと思う」

吉川の言葉を上から被せる様に、忍はそう言い放った。それに吉川は再び黙ってしまう。

「だって、俺たちは全国目指してるんですよ？じゃあ、実力主義で行かなきゃいけない。もしソロだけ鼻負があって香織先輩に決まったとしたら、一番納得しないのは絶対香織先輩だと思う。……………それは、吉川が1番知ってるでしょ？」

「……………」

優しく問いかける様にそう言う忍に対し、吉川は何も返せない。そして、忍は、真っ直ぐと吉川の顔を見る。次に彼が発した言葉に、遂に吉川は気付かされる事となる。

「……………吉川のそれはさ、本当に香織先輩を思つての事？」

正に心臓を鷲掴みにされた様な、そんな感覚。口から『そうだ』と言う言葉が出ない。

分かっている。何処かで理解している。

”香織先輩にソロパートを吹いて欲しい”と言うこの気持ちは、エゴなのだろうと。

優しい先輩。憧れの先輩。そんな先輩のソロパートが見たいと言う気持ちが強すぎて、本人の気持ちを考えていない。

忍のその言葉によって、吉川は遂に受け入れてしまった。理解してしまった。

この感情は香織先輩の為では無く、彼女に憧れた自分の我儘なのだろうと。

「……………じゃあ、……………つて、……………のよ」

すると、吉川は震える声でそう呟く。聞き取れなかった忍が「ん？」と返すと、勢いよく顔を上げて忍を睨みつけた。

「じゃあどうしろつて言うのよ!!アンタだつて、去年の香織先輩を知つてるでしょ!?!」

そして、自分のエゴを受け入れた事が引き金になってしまったのか、感情を爆発させる様に声を荒げる吉川。

「香織先輩はあんなに頑張つて!あんなに素敵な音が出せるのに!!何でこんな事になんなきやいけないのよ!!!」

涙を流して、吉川は悲痛の叫びを上げる。しかし、忍はそれを真っ直ぐに、目を逸らさず彼女の言葉を受け止めていた。

「絶対香織先輩が吹くべきなのに!!香織先輩だつてソロパートを吹きたがつてたのに!!なんで!なんでアンタはそんな事が言えるのよ

!!!

そして、吉川は忍の両肩を掴み、縋るように、救いを求める様に、大粒の涙を流しながらそう叫ぶ。

「分かってる!!分かってるわよ!……この気持ち、香織先輩の為になんない事なんて……」

憧れが強すぎるが故、思い入れが深すぎるが故、そこに”私情”が入る。エゴだけでは無い。それは、紛れもなく吉川の中世古に対する”愛”から来るものだ。

でも、それは中世古の為にはならない。

全て吐き出した吉川は、肩を掴んでいた両手をそのまま忍の胸に当て、忍の胸に顔を埋めた。まるで涙を隠す様に。

忍は、そんな吉川の手を優しく握る。

「言いたい事、全部言えた?」

そして優しく吉川に対してそう問い掛ける。吉川は啜り泣きながら、忍の胸に顔を埋めたまま一つ頷いた。

そして忍が握った手に少し力を入れて離そうとすると

「……今はダメ。もうちょっと、このままでもいいさせて」

吉川がそれより力を強めてそう言って来た。そんな彼女に、忍は「……うん」と一つだけ頷く。

そして忍の胸に顔を埋めたまま、再び啜り泣く声が聞こえて来る。

その後は、結局吉川が落ち着くまでこの状態のままだった。

「……………落ち着いた?」

「……………うん、ありがと」

どれくらい経っただろうか。吉川が忍の胸から離れると、ようやくぶりに彼女の顔が露わになる。

やはり泣き腫らした様で、目は真っ赤になっていて、鼻先も少し赤

みを帯びていた。

「公園なんかで泣いちやうから、いろんな人に見られちゃったよ」

「ここ選んだのはアンタでしょ？」

そして、いつも通りの会話も戻って来た。吉川の顔は泣いた後でひどいものだが、何処か晴れ晴れとした表情に見えた。

「泣いたら喉乾いちやった。コーヒーは趣味じゃ無いけど、しょうがないわね」

そして、まだ開けてない夏の気温でぬるくなったコーヒーを、吉川は開ける。

それをグイッと一気飲みする様に、口の中に流し込んだ。

「あー………苦っ………」

一言、どこか悲しげに、吉川はそれだけ言い放った。

結果

ホール練習当日。夏らしく、茹だる様な暑さだ。

今日は貸切での練習ということもあり、ガランとしたホール内は、何処か違和感を覚えると同時に、変な特別感もある様に感じる。

「楽器来ましたー！手の空いてる人は、手伝って下さい！」

そして、ホールに楽器を積んだトラックも到着し、1人の男子部員が声を掛けた。

それを聞いた滝先生は、部員に声を掛ける。

「はい、では、準備を始めましょう。中世古さん、高坂さん」

「はい」

「二人は準備は良いので、オーディションの用意を」

「……はい」

滝先生がそう言うと、部員たちは練習の準備に、高坂と中世古はトランプケースを持って再オーディションの準備へと向かう。

「……アツキー。行かなくて良いのか？」

すると、一緒に練習の準備をしていた滝野が、忍に対してそう聞いて来た。

「行くって、どこに？」

そんな滝野に対して、忍は心底不思議そうにそう返す。

「そりゃ、……あれ、この場合どっちに行っただ方が良いんだ？」

恐らく滝野はどちらかを励ましに行っただ方が良いのでは無いかと提案したかった様だが、忍がどちらを応援しているのかが分からず、首を傾げてそう言った。

「どっちかを激励しろって事？しないよ。そんなの」

すると、意外にもドライな返答を忍はした。滝野もそれが意外だったのか、少々驚いた顔になっている。

「しないって……二人とも同じパートメンバーだろ？アツキーは今回ソロ吹かないけど、実力はあるんだから励ましに行ったら嬉しいもんじゃねーの？」

そして、少し不服そうに滝野はそう言い放った。

「いらないよ。と言うか、寧ろそれはお節介。あの二人がこのオーディションに賭ける思いは知ってるし。今更行ったって意味ないでしょ?」

それに、困った様に笑って忍がそう返す。その言葉に滝野は納得した様な表情になって、「……ああ、そうだな」と、一言だけ言い放った。

「今はあの二人をそつと見守る事。それに、励ましたら頭にデカいリボン付けた奴と、低音の一年で面白い子がもう行ってるだろうしねー」

そして、ケラケラと笑ってそう言うと、忍はせつせととパイプ椅子の準備を進めた。

「……どうですか?」

「うん、大丈夫」

一方こちらは、ホールの裏口。そこでは、中世古がオーディションの準備をする様子を吉川が聴いていた。

「準備とかあるから、優子ちゃんはもう行って?」

そして、中世古は柔らかなく微笑んでそう言った。

「……はい」

一つ、吉川がそう呟くと、準備のためにホール内へと足を進めていく。

「……あの」

しかし、その足を一旦止めて、吉川はそう言って再び中世古の方を振り返った。

「何?」

それに少し首を傾げて、中世古は薄く笑ってそう聞く。そして、吉川はどこか寂しげな表情で口を開いた。

「……香織先輩の音、アタシは好きです。……今回のオーデイション、それを目一杯聴かせて下さい。……結果はどうであれ、香織先輩が全てを出し切れる様、アタシは応援してます」

寂しげに、しかしどこか吹っ切れた表情で、吉川はそう言い放った。その言葉を聞いて、中世古は少し驚いた表情になる。

「……ありがと、優子ちゃん。なんか、雰囲気変わったね？」

「そ、そうですか？」

「うん、ちよつと大人っぽくなった」

そして満足そうに笑って、中世古はそう言い放った。

今まで”香織先輩の吹いて欲しい”と言う一方的な感情から、”香織先輩が納得するなら”と言う感情に変わった。吉川のその心境の変化を、中世古も感じ取ったのだ。

「……私も、悔いのない様にやるよ」

一つ、中世古が覚悟した様にそう呟く。それを見て、吉川は彼女に向かつて何も言わずに一礼だけする。そして、その後は振り返る事なく、建物内へと戻って行つた。

中世古の視界から見えなくなると、吉川は足を早める。まずは早歩きに。しかし、それでは足りないのか、今度は小走りに。それでも足りないのか、遂には走り出してしまった。

すると吉川の目の前に、一人の男の背中が目に入った。

「ホールって、デカイから何処にトイレがあるか分からんのよなー」
パイプ椅子の準備を終え、その合間に行つたトイレから戻る途中で、忍はそんな独り言を呟く。

これから楽器の準備と言うところで、それが終われば、まずはオーデイションだ。

「ステージって光がバチバチに当たって、結構暑いんよなー」

少し曇めつ面になって、忍は悪態をつく様に、独り言を続ける。

「いくらクーラー効いてるからって…おわっ!？」

すると、背中に突然衝撃が走り、咄嗟に忍は振り向こうとする。誰かがぶつかって来た様だ。

「振り向かないで。こっち向いたらタダじゃおかない」

しかしそうする前に、そのぶつかって来た本人が、震えた声でそう言い放つ。

忍もその声を聞いて、誰だか一瞬で理解する。

背中にしがみつきながら、少し啜り泣く様な声が聞こえた。

間違いない。吉川だ。

「……………」

忍は、何も言わなかった。何があったのかは、なんとなく彼にも察しがついた。だからこそ、何も言わない。しかし、それで正解だった。そして少し経った後、落ち着いたのか、吉川はゆっくりと忍の背中から離れる。

「……………準備、行くわよ」

「そりゃ、こっちのセリフ。さっきまでサボった分、きっちり働いてもらうよん」

吉川がそう言うと、忍はいつも通りひょうきんにそう返す。そんな彼の姿に安心した様に少し笑い、吉川は忍の隣に並んでホール内まで一緒に戻って行った。

「ではこれより、トランペットソロパートのオーデイションを行います」

滝先生がそう言うと、ピリツとした緊張感が張り詰める。

今ステージ上に立っているのは、二人。中世古と高坂。他の生徒は、観客席からその光景を見つめている。

「両者が吹き終わった後、全員の拍手によって決めましょう。……

良いですね？中世古さん」

「はこ」

滝先生がそう尋ねると、中世古の返事が返ってくる。

「高坂さん」

「はこ」

高坂も同様だ。

「ではまず、中世古さん、お願いします」

「……はい」

先攻は中世古から。トランペットを構え、ピストンの確認をする。一息ついて、震える唇をなんとか抑える。そして、自分のタイミングで息を吸う。

—————
♪—————、♪、♪—————……

ホール内に響く、ソロの旋律。皆、真剣にそれを聴く。目を瞑り、音だけに集中する。忍も、滝先生も、小笠原も田中も。吉川は、祈る様に手を合わせてその音を聴いていた。

「……ありがとうございます」

ソロを吹き終わると、中世古はそう言つて一礼する。

良い演奏だったと、各々から拍手が起こった。それを見て中世古はホツとした様な表情を浮かべる。

「では次に、高坂さん、お願いします」

「はい」

そして、後攻の高坂。滝先生の問い掛けに強気な返事を返すと、そのままトランペットを構える。すぐさまブレスを開始し、中世古と同じ場所の演奏を開始した。

—————
♪—————♪—————……

最初の1フレーズ。いや、最初の1音。

それだけでも十分だった。目を瞑っていた他の部員たちが、一様に目を見開く。

音が、違いすぎる。

同じソロパートでも、こんなに違うものかと。

確かに、中世古のソロは上手かった。そのままソロパートを彼女が吹きますと言われても、誰しものが納得するだろう。

しかし、それ以上に高坂は……

「ああ、残酷だなあ……………」

誰にも聞こえない声で、忍はそう呟く。ステージ上の高坂を真つ直ぐ見据えながら、悲しげに、しかしどこか喜色も混ざった、なんとも言えない表情を浮かべていた。

そして吉川は、そんな高坂の演奏を聴いて、再び目を瞑ってしまおう。

「……………」ありがとうございます」

そして、中世古と同じく吹き終わって一礼をする。

拍手は、起きなかった。それ以上に、皆圧倒された。そんな演奏だった。

「では、これよりソロを決定したいと思います」
遂に結果が決まる。

「中世古さんが良いと思う人」
滝先生が、そう問い掛ける。

パチパチパチ

真つ先に席を立って拍手をしたのは、吉川だった。それを見て、中世古は柔らかく微笑む。

同じく小笠原も座ったままだが、拍手をしていた。
「……………」はい、では、高坂さんが良いと思う人」

次に、高坂。

パチパチパチ

最初に立って拍手をしたのは、黄前だった。真つ直ぐ高坂を見据え、強い意志を持って拍手を送っている。

パチパチパチ……………」

そして、次に拍手を送ったのは、忍だった。

それを見て、中世古は少し驚いた後、”やっぱりか”と言う風に微

笑む。高坂も少々驚きながら会釈を返し、吉川はその光景から視線を逸らす様に俯く。

「はい、……………中世古さん」

そして、滝先生は一つ間を置いた後、中世古の名前を呼ぶ。それに「……………はい」と、彼女も返す。

「あなたが、ソロを吹きますか？」

その言葉に、部員は一様に驚く。最後の決断。それを滝先生は中世古本人に聞いたのだ。

沈黙。立ち尽くしたまま、中世古は少し俯く。そして、答えが決まったのか、意を決した様に顔を上げると――

「吹かないです。……………吹けないです」

何処か吹っ切れた表情で、そう言い放った。

「……………先輩？」

その言葉に、吉川が悲しげな表情になる。彼女も理解したのだろう。う。

今、この瞬間。中世古香織は納得したのだろうか。

「ソロは、高坂さんが吹くべきだと思います」

そして、中世古は薄く笑って、高坂に対してそう言い放った。

「グスっ……………先輩い……………」

その言葉に、吉川から涙が溢れる。

『先輩は、トランペットが上手なんですね』

『上手じゃ無くて……………好きなの！』

いつしか、吉川が見た光景。中世古に心底惚れ込む事となった、その光景。

それを思い出してしまったのか、吉川は大粒の涙を流し始める。

「……………うあああん…！うああああん!!!」

人目も憚らず、大声を上げて吉川は泣き出した。

「……………高坂さん」

「はい」

そして、滝先生は高坂に、確認する様に問い掛ける。

「あなたがソロです。……………中世古さんでは無く、あなたがソロを吹く。……………良いですか？」

「……………はい！」

滝先生の問い掛けに、高坂は力強く返事を返す。

その返事は、ソロオーデイションに落ちた中世古の思いも背負っている様にも聞こえた。

幕間：距離感

北宇治高校吹奏楽部。女子部員の多い部活らしく、練習をしっかりしているとはいえ、無駄話や雑談などをする事も多い。

その中には、もちろん恋愛話も盛り込まれている。ホルンパートのあの子は、あの先輩の事を好きだとか、サックス隊のあの子は、同じクラスメイトのサッカー部の男子が好きだとか。そんな話題で盛り沢山だ。

しかし、その中でも特に話題に上がりやすい人物達が、トランペットパートに居る。

「秋川、ここの出だしなんだけど……」

「ん？、……ああ、62小節の出だし？」

互いの頬が引っ付きそうなほどの距離感で、同じ楽譜を見合う二人。

この秋川忍と吉川優子は、部内で話題になる事が一番多い。

距離感の近さ。遠慮の無さ。普段からのじゃれ合い。あの二人が会話を始めると、途端に彼らだけの世界を作り出すのだ。

「アツキー先輩と優子先輩って、付き合ってるのかな？」

だからこそ、恋バナに飢えた女子高生達の餌食になる。2、3年生はその光景を見慣れたものだが、1年生には新鮮に、魅力的に映る。

低音パート一年。黒髪のショートカットが特徴な、チューバ担当の加藤葉月と言う少女が、パート練の途中でそんな事を言い出す。

「絶対そうだと思います！あの二人、仲良いですもん！」

そんな加藤の呟きに興奮気味に返す少女が一人。同じく低音パート1年。明るいショートカットにウェーブのかかった髪型をした、コンバス担当の川島緑輝と言う少女だ。

緑輝と書いてサファイアと読む。

「先輩達は、何か知ってますか？」

同じく興味津々と言った感じで、加藤は先輩のチューバ担当の二人に対してそう聞く。

「うーん、どうだろうねえ……お互い気があるのは確かみたいだけど……」

その一人、おっとりとした雰囲気少女、2年の長瀬梨子は頬に手を当てて考える様にそう言う。

「……今のところは付き合ったとか、そう言う話は聞いてないな」

もう一人、少し無愛想な顔をした大きな体格が特徴の、同じく2年の後藤卓也もそう返した。

「えー!?あれですか!?!」

衝撃の事実、加藤が驚きの声を上げる。他パートの人間から見ても、あの二人は特別な関係だと思わせるような会話を普段からしているのだ。

加藤の反応に同意する様に、長瀬は少し笑って頷く。

「あの二人って去年からあんな感じだったからねえー。」トランペットパートに「いつもケンカしてるカップルがいる」って。だからアツキーが部活に復帰した時は、優子ちゃんもすっごい嬉しかったと思うよ?」

思い出す様にしみじみとそう語る長瀬。

「へー。じゃあ、優子先輩は大変だなあ……」

すると、その長瀬の言葉に反応したのは、同じ低音パートの黄前だった。何処か他人事の様子にそう呟く。

「え?なんで?」

そんな黄前の言葉の意味が分からず、加藤が首を傾げる。

「んー、なんって言うか、アツキー先輩ってモテるタイプだと思うんだよね。あの性格だし、あがた祭りでも一年の子に誘われてるところ見たし」

「確かに、見てるだけでも楽しい先輩ですよー」

黄前が持論を述べると、川島がそれに同意してきた。確かに忍はモテる。あの気さくでひょうきんな性格は、人に好かれやすい。

「うん、だから、アツキー先輩がフリーだって分かると、アタックする子も増えるんじゃないかな?」

続けて黄前はそう言う。彼女の言う通り、忍はまだフリーだ。その

性格に惚れて、吉川以外に告白する者が現れるかもしれないと言うのが、黄前が大変だと言う理由だった。

「大丈夫だと思っけどなー。アタシは」

すると、今度は中川がヘラヘラと笑ってそう返す。

「まあ、そうだと思いますけど、もしもって事が……」

そんなお気楽そうな中川に対し、川島が少し心配そうな顔つきでそう言う。

「あの二人って、いつもあんな感じだけど、二人きりになるともって凄いいんだよー？」

そして、さらに面白いる様に、ニヤついた顔で中川はそう言い放った。

「そ、そんなにですか？」

一つ、ゴクリと生唾を呑み込み、川島が興味を隠さずそう聞く。自分達が居る場所でさえ胃もたれしそうなやり取りをしているのだ。

二人きりだと、どんな感じなのだろう？

「……聞きたい？」

「是非!!」

わざとらしく勿体ぶる様に中川がそう聞き返すと、すぐさま加藤と川島が飛び付いてきた。

それはいつ頃か。中川夏紀がそれを目撃したのは、個人練から楽器室に向かって帰る途中の事だった。

「なー吉川」

「んー?、何ー?」

とある教室。そこから、男女の会話が聞こえる。聞き覚えのある声だったので、気付かれない様にしてその教室を覗き込むと、そこに居たのは忍と吉川だった。

教室には、その2人しかいない。

「壁ドンつてき、やられた事ある？」

「はあ？何よいきなり」

いきなりの忍の問い掛けに対し、怪訝そうな顔で吉川はそう返す。

「いや、言われたんだよ。壁ドンをすると征服感を感じて自分に自信が持てるようになって、何をすることも上手く行く様になるって」

「何それ？言われたって、誰に？」

「タツキー」

「今すぐ忘れたほうがいいわよ。そんな世迷言」

忍から話の出元を聞いて、吉川は吐き捨てる様にそう言い放つ。机を挟む様に互いに座っており、忍は楽しそうに吉川に話しかけ、吉川はうんざりしながらも満更でも無さそうにしている。相変わらず距離感が近い。

中川はそんな光景を面白がる様に、隠れて様子を伺う。

「えー？でもなんか気になるじゃん。吉川は気になんない？」

「別に。つてか、なんで壁ドン？」

興味津々にそう聞く忍に対し、吉川は冷めた様子でそう返す。

「壁ドンされた女の子は皆んなしおらしくなるから、それで自信が付くらしいよ？」

忍のその言葉を聞いて、吉川は挑発的に笑う。

「馬っ鹿ねえ。アンタなんかの壁ドンでアタシが墮ちる訳ないでしょ？」

言葉通り馬鹿にする様に吉川がそう言うのと、案の定忍はその挑発に乗った。

「お、言ったねー。じゃあやってみる？」

「良いわよ。来てみなさいな」

なんだかんだ言って、吉川もノリノリな様だ。互いに席を立って、

壁の方へと歩く。意図的に壁ドンする為に。

「つてか、壁ドンってどうやんの?」

「フツーに片手を壁に当てれば良いんじゃない?」

ムードもへったくれもあつたものでは無いが、とりあえず吉川は壁に背をくっ付け、忍はそれに対面する様に立つ。

「じゃあ、どうぞ?」

「うい、じゃあやるよー」

吉川の合図に、気の抜けた返事を忍は返す。

そしてドンつと、音を鳴らす様にして右腕を肘まで壁に付け、壁ドンを実行。お互いの目をじっと見つめる。

近い近い。と、中川は心の中でツツコミを入れた。

「……………」

「……………なんか、違うわね」

微妙そうな顔でそう言ったのは、吉川だった。その言葉に忍も考える様な仕草をする。壁に手をつけたまま。

「なにが違うんかな?」

忍も思つたものとは違つたのか、首を傾げてそう返した。お互いの鼻先が触れそうなぐらい近い距離感なのに、恥ずかしがっている様子が全く無い。

なんだこれ?と、中川はさらに心の中でツツコミを入れる。

「あ、セリフが無いからじゃない?」

すると、吉川が閃いた様な顔になってそう言ってきた。それに忍も納得した様な顔になる。

「なるほど……………じゃあ、何のセリフがいいかな?」

「それはアンタが考えなさいよ」

吉川にそう返され、その状態のまま忍は左手を顎に当てて再び考える仕草をする。右手は壁ドンしたままだ。

そして、言うセリフが決まったのか、忍は吉川の耳元まで口を持って行き、耳打ちをする。

教室の外からそれを見ていた中川には、忍が何を言ったのかは分からない。

しかし少しだけ、吉川の耳が赤くなっているのが確認できた。

「……まあ、合格」

「おっしやー」

ようやく忍が顔を離して壁ドンをやめると、吉川は満足そうに微笑んでそれだけ言う。

それに忍も満足そうにガッツポーズを返した。

「どうだった？壁ドン」

そして、その笑顔のまま忍は感想を聞く。

「アンタだったから、あんまドキドキしなかった」

「うっわ、ひっど」

その後は何事も無かったかの様に、いつも通りの会話に戻って行った。

「……………本当に付き合っていないんですか？その二人」

話を聞き終えた加藤が、少し頬を赤らめてそう聞く。他のメンバーも同じ気持ちなのか、何とも言えない表情をしている。

「だよねー。はよくっ付けてーの」

ただ一人、中川だけは、へらりと笑ってそう言い放った。

ライバル心

暑い。茹だる様な暑さだ。

オーデイション騒動も終わり、夏休みに入った。早朝から夕方まで練習、練習、練習。

コンクールに向けて、たった12分の一瞬に向けて、何日も何ヶ月も掛けて死力を尽くす。空調が効いている音楽室であっても、その熱気は止まることを知らない。

「トランペット。ここは大きく、ダイナミックにですが、雑に吹いては音が崩れて台無しになります」

「はい!!」

合奏練習、滝先生からの指摘が飛ぶ。トランペットだけでは無い。木管、ホルン、低音。全ての音を滝先生は一音も聴き逃さずに、次々と指摘を重ねる。

「全員で、一つの旋律に音を合わせて。ここで崩れればその後の曲も台無しになります」

「はい!!」

コンクールに近づけば近づく程、長くなる練習が足りないと感じる様になって行った。

「……暑つつ……あー、もう水無くなった」

そしてパート練、滝野が空になった水筒を飲み干して面倒臭そうにそう言う。

「水汲みに行つて来な。ほつとくと直ぐやられるよ」

それに、うちわで顔を仰ぎながら忍がすぐさまそう返す。

夏に楽器を吹けば、運動部と同じく水の摂取量がかなり増える。それ程にエネルギーを使うのに加え、暑さで水分を持っていかれるからだ。油断すると直ぐに熱中症になる。

滝野もそれは充分承知なのか、忍の言う通りに水筒に水を入れに行

こうと、席を立つ。

「はーい!!差し入れてーす!!」

すると加部と吉沢が、クーラーボックスを持ってきた。

コンクールメンバーから外れた、チーム『もなか』と命名された彼女らは、本メンバーのサポートの様な仕事もしている。なので偶にこうして飲み物の差し入れをする事もあるのだ。

「お、ラッキー!ちようど無くなったところなんだよなー」

滝野は手間が省けた幸運からか、嬉しそうにクーラーボックスに近寄る。

そして加部がその蓋を開けると、氷水の中に入ったお茶やジュースなど、色とりどりの飲み物が入っていた。

流石に炭酸飲料は無い。

「おー、沢山。どれにしようかねー」

中身を確認した忍が、悩む様にそう言い放つ。

「私、ぶどうジュースで良いかな?」

まずは中世古がそう言つてぶどうジュースを。

「じゃあ、俺はふつーにこれで」

後で口をゆすぐのが面倒だと思つたのか、滝野はお茶を。

「じゃあ、アタシはミルクティーにしちやおー」

そして吉川はミルクティーを。

「じゃあ、俺(私)は、オレンジジュースで」

2人の声がハモリ、同時にそのペットボトルを取る。

忍と高坂だ。

2人が同じペットボトルを握つたのは、ほぼ同時。

一瞬時が止まった様に見えるが、どちらかが手を離す様子は無い。

「……高坂さんや、ここは一つ、先輩を立てるべきだとは思わんかえ?」

諭す様な口調で、忍はそう言い放つ。笑顔であるのだが、目は笑っていない。

「……アツキー先輩こそ、ここは先輩としての懐の深さを見せつけるところじゃないですか？」

対して高坂は、慄然とした態度でそう返す。同じく笑顔だが、目が全く笑っていない。

どちらも譲る気は無いらしく、互いに変な違和感がある笑みを浮かべながら、握っているペットボトルに力を入れる。

そんな光景を、“またか”と言った風に、他のパートメンバーは見つめていた。

コンクールに近づくにつれ、忍と高坂は燃え上がる様にしのぎを削るような関係になって行った。

どちらも実力者。音の性質が違うとはいえ、基礎技術に関しては群を抜いている。

そして、高坂も忍も、互いの演奏能力を高く評価している。互いに実力を認め合っているからこそ、ライバル心が生まれるのだ。

夏休みに入り練習が多くなって来た今、2人の音がバチバチにぶつかり合う様になって来たのだ。

その原因は、合奏練習での出来事にもあった。

「はい、ではこのパートを1人ずつ。高坂さんから」

「はい」

ある日、合奏練習中に滝先生にそう言われ、高坂は高らかにそのパートを吹く。

「良いですね。彼女の今の演奏の様に堂々と、強気に吹いてください」

頑張つて無表情を取り繕っているが、滝先生に褒められて頬がひくひくと緩んでいる高坂。

「……………」

それを忍は、面白く無い様な表情で見つめていた。

——そして、またある日。

「では、前の小節から。秋川君、吹いてみてください」

「はい」

今度は忍が滝先生にそう言われ、1人、トランペットの音色を優しく奏でる。

「素晴らしいですね。彼みたいにはここは優しく。寄り添う様に音色を奏でて下さい」

滝先生に褒められ、得意げな顔を隠そうともしない忍。

「……………」

その光景を見て、今度は高坂が少し眉間に皺を寄せる。これだけでも、2人の関係性が見て取れるだろう。

要するに、2人とも負けず嫌いなのだ。

目立ちたがり屋、気の凶太さ、そして負けず嫌い。トランペットを吹くにあたっての必要な要素は、2人とも持ち合わせている。

自分の音が1番。

その自信は、プライドとも言うべきか。だからこそ、自分より上手いと他人が褒められると、良い顔をしない。

ライバルと認め合っているなら尚更だ。

「ここは公平に。勝負事で決めようじゃないか……………」

「良いですよ。何にします?」

そして、遂にはトランペットだけで無く、こう言うしようもない様な事でも争う様になって来た。

と言っても、ギスギスした感じでは無いので、雰囲気は悪くない。

忍の人柄のお陰もあるだろう。

「…………そうだね…………」ハイトーン対決」とか、どう?」

「…………良いですよ」

忍がそう提案すると、高坂もそれに乗っかる。この対決は、どこまで高い音を安定して出せるか。

まあ、遊びみたいなものだ。

しかし当の本人たちは真剣も真剣。普段クールで鉄仮面を貼り付けている高坂も、やる気に満ちた表情をしている。

負けず嫌いもここまで来ると天晴れである。

「5秒間安定して音を出せたら成功ね。はい、じゃあ高坂さんから」
楽しそうに忍がそう言うのと、高坂はトランペットを構えて音階を一つずつ上げていく。

トランペットの高音の上限というのは、演奏者によって変わる。つまり、技量がある人間であればある程、高い音が出るのだ。

—————
♪—————
—————

一つ一つ、高い音を綺麗に出していく高坂に、パートメンバーから「おー……」と感嘆の声上がる。

「……どうですか？」

綺麗な高音を出した高坂が、得意げな笑みを浮かべて忍にそう言い放つ。

「いいのー？まだ出そうだけど？」

それに対し、挑発する様に忍はそう返した。

「高い音が出せても音が安定してなかったらダメですから。……アッキー先輩が私より高い音を出したら、また出します」

「うっわ、相変わらず生意気ー」

不敵に笑ってそう言う高坂に対し、忍はケラケラと笑ってそう返した。

しかし、そんな事を言われて北宇治1の目立ちたがり屋なこの男が黙っている筈がない。

「おーっし、ここは一つ、先輩の威厳というものを見せつけなければ」

「アッキー先輩！頑張ってください!!」

続けて忍がそう言うってトランペットを構えると、吉沢から応援の声
が飛ぶ。それに軽く応えようと、忍は高坂と同じく、一音ずつ音階を上
げていく。

—————
♪—————
—————

そして、高坂の吹いた4つ上の音階を忍は出した。

「…………どう？」

勝ち誇った様な顔で、忍は高坂に対しそう聞く。

「……………」

そんな忍の顔が気に入らなかったのか、高坂は再びトランペットを構えた。

♪ー、♪ー、♪ー

ブレそうになる音を抑えながら、高坂は捻り出す様に高音を出す。なんとかと言う感じで、忍より一つ高い音を出した。

♪ー

しかし、それを嘲笑うかの様に、忍はもう一音高い音を出す。

それを聴いて高坂はその美形な顔が崩れるほど、表情に皺が寄った。

「じゃあ、オレンジジュース貰うよん」

自慢げ、ドヤ顔。そんな言葉がぴったりの表情を浮かべ、オレンジジュースを手取る忍。

その光景に、高坂は一層眉間に皺を寄せて、険しい顔になる。

「……………次は、負けないし」

そして、拗ねる様な口調で、高坂は吐き捨てるようにそう言い放つ。

「……………どっちも子供ね」

そんな茶番を見て、吉川はボソリと、聞こえない声でそんな事を呟いた。

兄妹

コンクールが近づいて来た。誰もが足りないと感じる練習。パート練でも、各々課題に必死に取り組む。

「……どう？」

「途中から音が飛んでるところがある。コンクールでやったらそれ目立つよ」

音を出した吉川が忍に感想を聞くと、忍は忖度せずに思った事をそのまま返した。文句も言わず吉川はそれに一つ頷き、再び同じフレーズを繰り返して吹く。

「……どうよ？」

「今度は音が死んでる。音程は合ってるけど、それじゃ厚みが出ない」

正に真剣そのもの。普段ならここで突っ掛かる吉川も、その時間すら勿体ないと感じているのか、考えるように一つ頷き、またそのフレーズを繰り返す。

それに、忍も真剣に付き合う。

足りない。

練習時間が足りない。演奏技術が足りない。体力が持たない。

吉川が感じているのは、焦りだった。

トランペットパート、実力者が3人も居るのだ。中世古、高坂、そして忍。この実力の突出した3人が居るからこそ、吉川は焦りを感じる。

自分の音と、その3人の音を聴き比べて、否応にも音の違いを見せつけられる。

上手くなりたい。足手まといになりたくない。

コンクールが近づくにつれて、吉川の中にそんな気持ちが芽生え始めていた。

「……あー！もう!!また音飛んだ!!」

遂にはその焦りに、苛立ちも含まれる様になって来たのだ。

「落ち着け吉川。焦ったらもつと集中力途切れるよ?」

そんな吉川を宥める様に、忍はいつもの様にそう言う。そしてクルダウンしろと言わんばかりに、水筒を吉川に手渡した。

「分かっているわよ!……つぷはあ!あー、生き返る……」

「おっさんみたいな事言うな」

忍から渡された水筒を一気に喉に流し込むと、ようやく一息つく吉川。かれこれももう何時間も吹きっぱなしだ。

「もう一回、やるわよ」

そして、すぐさま練習に戻る。そんな吉川を見て忍も「うん」と一言だけ返すと、トランペットの音がまた校内に響き渡った。

「おかえりー兄ちゃん。今日も遅いねー」

忍が家に帰りリビングに入ると、ソファアーに寝そべってテレビを見ていた凜花に、感心した様にそう言われた。

「ただいまー。コンクール近いしねー。いくら時間があっても練習が足らんですよ」

しかし疲れた様子を見せる事もなく、忍はいつも通り飄々とそう返す。

部活の時間も長くなり、ここ最近は毎日帰るのが19時を過ぎるくらいになって来た。

忍は学生バッグをリビングに置き、そのまま台所へと向かう。

「親父何時に帰ってくるの?」

「今日は8時過ぎくらいだっつー」

「りよーかい」

そんなやり取りをしながら、忍は冷蔵庫を開けて中身を確認する。

「晩飯何にするー?」

「うーん、なんでもいいよー?」

「なんでもいいが1番困るんよなー」

冷蔵庫の中身を確認しながら、忍はそう返す。中を見てみると、

空っぽとまでは行かず、まだ買い出し行かなくて良さそうだ。ふと、忍の目に余っていた鶏肉が入った。

「お、鶏肉あんじゃん」

「え？、ほんと？じゃあ唐揚げがいい！」

「さっき何でもいって言ってなかった？」

手のひらを返しすぐさまリクエストをして来た凜花に、すかさず忍がツツコミを入れる。

「揚げ物って、後始末が面倒なのよねん」

「いいじゃん、兄ちゃんの唐揚げ美味しいし」

少々渋る忍に対し、凜花がねだる様な口調で頼み込んでくる。

秋川家の夜ご飯は、ローテーション制だ。今日の夜ご飯と、明日のお弁当の当番。これを当番で回して行く。

今日は忍が当番の日なので、この様に献立について色々思案しているのだ。

「んー、分かったよ。じゃあ今日は唐揚げね」

「やたっ」

美味しいと言われた事が決め手だったのか、凜花のワガママに忍の方から折れて、今日の夜ご飯が決まる。すぐさま手を洗い、制服のまま準備をし始めた。

「あ」

すると、忍が何かに気付く。

「……片栗粉無いじゃん」

どうやら衣に使う用の片栗粉が無いらしい。独り言の様に、忍がそう呟く。

「凜花、買って来い」

「えー!？」

そして、未だにリビングのソファでテレビを見ていた凜花に対し、忍はそう言い放つ。案の定、凜花は嫌そうな声を上げた。

「えー、じゃ無いよ。無かったら唐揚げになんないじゃん」

正論をぶつける忍に対し、渋々と言った感じで凜花はソファから立ち上がる。凜花としても今日はもう唐揚げの気分なので、おつ

かいに行つてくれる様だ。

「片栗粉だけで良いの？」

リビングから出る前に、凜花は忍に対しそう聞く。

「うーん、みりんとマヨネーズも少なくなってきたから、買つて」

「りよーかーい」

忍からそれを聞いて、凜花は近所のスーパーマーケットへ行く為に、玄関へと向かった。

「かけっこ、とびっこ、元気っ子♪」

近所のスーパー。地元民しか知らない様な店内BGMを一緒に口ずさみながら、凜花はカゴを持って買い物をする。

と言つても、頼まれたものは3点だけなので、そこまで時間が掛かる訳では無い。

慣れた足取りで調味料を取って行き、カゴに入れて行く。凜花もこのスーパーには昔からお世話になっているので、どこに何があるかは完璧に把握していた。

「あれ？、あの人って……」

すると途中、凜花の目に見覚えのある人物が写った。自分より恐らく年上の女性。一瞬しか顔を合わせた事は無いが、それでもその特徴的な頭に付けた大きなリボンは、印象に残っていた。それに北宇治の制服を着ている。

確か兄はもう仲直りしたと言つてた筈だ。そんな会話を思い出した凜花は、挨拶をしようと生鮮コーナーに居るその人物に近付いて行く。

「こんにちはー」

「え？、あ、こ、こんにちは？」

凜花が挨拶をすると、女性は戸惑いながら挨拶を返す。どうやら向こうは凜花の事を覚えてないらしい。

確かにあの時はずっと俯いていたので、凜花の顔を覚えて居ないのも無理はない。

「あれ？、覚えてませんか？……えっと、吉川優子さん、でしたよね？あがた祭りでトランプペットを貸しました。秋川凜花と申します。」
そう言つて、礼儀よく凜花は一礼する。それを聞いて、女性は「あー!!」と、合点があつたかの様な声を出した。

「あの時の!!いやー、ごめんねー!あの時はあんまり顔を見てなかつたから……」

凜花に話しかけられた少女、吉川はようやく思い出したのか、少しテンション高めでそう言う。

「いえいえ、あの時は少ししか顔を合わせてなかつたので。兄がいつもお世話になってますー」

対して凜花は、ペコリともう一つお辞儀をしてそう返す。それに慌てて吉川も一つ、お辞儀を返した。

「い、いえいえ、こちらこそ。……にしても、秋川の妹さんかあ」
そして吉川は、まじまじと凜花を見てしみじみとそう言う。

「?、何か変ですか?」

どこか吉川の発言に含みを感じた凜花は、首を傾げる。

「ああ、いや、兄と違ってすつごい礼儀正しい子だなーって」

そして吉川はストレートに、身内に対して失言とも取れる発言をした。

「あははっーまあ、兄があんなんですからねー。私がすっかりしなくちゃって思う時もあるんですよー」

しかし、それが凜花には好印象だったのか、嬉しそうにそう返す。思った事がそのまま口から出る人なんだなと、凜花は思った。

「えっと、凜花ちゃん、だっけ?あの時はトランプペット貸してくれてありがとねー」

吉川がそう言うと、凜花はニンマリとした笑顔になる。

「あー、いえいえ。兄の”彼女さん”ともなれば、どうって事ないですよー」

そして、凜花のその言葉を聞いて、吉川は一瞬にして固まる。

「……あれ？、違いましたか？」

吉川からの反応が無かったので、凜花はまずったかなと言う風に続けてそう聞き返した。その言葉に、ようやく吉川は反応する。

「えい！あ、あー……か、勘違いさせちゃったかな！秋川とアタシはそんな関係じゃ無いわよ！、た、確かに少しぐらい仲は良いけど、そう言う関係じゃ……」

顔を真っ赤に染めて、最後の方は萎れる様にしてそう言う吉川。分かりやすいなと言うのが、凜花の吉川に対する第一印象。

秋川凜花と言う少女は、人の心の機微に敏感なところがある。吉川とはあの祭りの日に一瞬だけ顔を合わせただけの関係だが、それでも彼女が忍に気がある事は、この短い会話の中で見抜いていた。

しかし、そこに突っ込むほど、凜花は空気の読めない人間では無い。他人様の恋愛事に第三者が口を挟むほど、鬱陶しい事は無いと彼女も分かっているからだ。

「あははっ、そうでしたか。すみません、早とちりで。……それで、吉川さんもお使いですか？」
なので凜花は別の話題を振る事にした。

「う、うん。お母さんからちよつとね。凜花ちゃんも？」
そんな凜花のフォローを知ってか知らずか、吉川は助かったと言う風な表情に変わり、凜花の話題に乗っかる。

「はい、兄からちよつと頼まれましたね。後は会計だけです」
「うっわ、アイツ妹をパシリにしてんのー？」
吉川は凜花が忍に良い様に使われていると思ったのか、同情する様にそう言う。

「いえ、ほんのちよつとした買い物ですから。今日の夜ご飯当番は兄なので、足りないものを買ってくる様に頼まれたんです」
困った様に笑って説明する凜花の話聞いて、吉川は意外そうな表情に変わった。

「へえ、アイツ、夜ご飯とかも作るんだ」

「当番制ですけどね。唐揚げ用の片栗粉が無いからってお使いを頼まれたんですよ」

そんな吉川に、薄く微笑んでカゴの中身を見せながら凧花もそう返した。それを見て吉川も納得した様な顔になる。

「なるほど。アタシももう会計だけなの。せつかくだし一緒に行こっか？」

「ええ、行きましょう」

社交的で明るい人だなと言うのが、続けて凧花が吉川に抱いた印象。気さくで面倒見も良さそうだ。これは兄が好きになる理由も分かるなど、心の中で納得する凧花だった。

「凧花ちゃん家って、ここから近いの？」

会計を終え、スーパーから出た2人が並んで歩きながら、吉川がそんな事を言う。

「はい、歩いて5分ほどです。吉川さんも近いんですか？」

「アタシは少し遠いかな？南中の学区だから、こっから1駅くらい先なの」

そんな他愛もない会話をしながら、夜道を歩く。ちゃんと会話を始めてまだ10分程度だが、2人とも社交的だからか、自然と会話をこなししていた。

「それと、アタシの事は下の名前で呼んでもらって良いわよ？」

「え、良いんですか？」

すると、吉川から気さくにそんな事を言われる。凧花としてはまだ早いのでは無いかと思っただが、吉川は首を一つ縦に振った。

「こう言うのは早い方が良いの。それにアタシ、吉川ってあまり呼ばれ慣れてないから、そっちの方がしっくり来るのよね」

尚も気さくに微笑んで、吉川はそう言う。明るい上に魅力的な人だなと言うのが、凧花が抱いたもう一つの印象。人間的にかなりしっかりしている人の様だ。

「そうですね。ならお言葉に甘えて、これからよろしくお願いします。優子さん」

そして凜花は、ペコリと軽く頭を下げた。最高の優良物件。これは、是が非でも兄とくっついて貰わなければ。

そんな事を凜花は考えていた。

「よろしく、凜花ちゃん。じゃあ、アタシこっちだから」

すると、いつの間にか駅前のロータリーまで来ており、吉川は駅の方を指差してそちらに向かって行く。

「あ、優子さん、最後に一つ良いですか？」

「ん？、何ー？」

凜花が駅に向かう吉川を引き止め、ニヤリと笑顔を浮かべる。凜花はあまりお節介を焼くタイプでは無いが、面白い事なら兄と同じく大好きだ。だからこそだろう。最後の最後に特大の爆弾を投下して行った。

「今後とも兄をよろしくお願いします。……兄ちゃん、優子さんの事絶対好きだと思いますよ？」

面白がる様に、揶揄う様に凜花はそう言い放つ。礼儀は正しいが、こう言うところはやはり兄妹揃って似ている様だ。

オーバーワーク

刻一刻と、コンクールに近づいて行く。北宇治の音楽の形が、出来上がって行く。ここ最近では、通しで合奏練習をする事が増えた。それに比例するように、滝先生の要求も益々レベルアップして行く。

「ホルン、音がまだバラついています。もっと周りの音を聞いて合わせて」

「「はい!!」」

ある日は、ホルンパートが餌食に。

「トロンボーン、今出だしがズレたのは誰ですか?」

「……………」

滝先生がそう聞くと、塚本が無言のまま手を挙げる。

「もうコンクールまで時間がありません。こんなところで躓いてもらっては困ります」

「……………」

ある日は、名指しで個人的にダメ出しを。

指導も、明らかに厳しくなった。たった一音でも、ズレを逃さない。

そして、トランペットパートは……

「トランペット。今の高音の部分、音を飛ばしたのは誰ですか?」

「……………」

滝先生に指摘され、吉川はまずったと言う表情で手を挙げる。

「ここはトランペットの見せ場。1人がミスをすれば全体に響きます。完璧に吹けるようにして下さい。練習で出来なければ、本番では絶対出来ませんよ」

「……………」

少し俯きながら、何かを噛み殺すようにして吉川はそれだけ返す。それは、指摘された悔しさからか。それとも不甲斐ない音を出す自身に苛ついてか。

いずれにせよ、吉川は苦戦を強いられていた。

そんな彼女を、中世古は心配そうに見つめる。

「それでは、先程と同じ場所から。サククス。……さん、はい」

しかし、悔しがる暇もなく、滝先生は合奏練習を続ける。全国へと行くには、1人の部員だけを構っている暇は無い。

その後の吉川は、必死の形相で合奏練習について行くのが精一杯だった。

そして、パート練。各々が課題に取り組む為に、今日は個人練をしてる者が多い。高坂はソロパートの練習。滝野と笠野は音を合わせる為に一緒に吹いている。中世古は連符の部分为重点的に。

そして吉川は、滝先生に指摘された部分を何度も何度も繰り返し吹いていた。

遂にはぶつ通しで水分もろくに摂らず吹き続けていたからか、吉川の目が霞んで来た。暑さにやられまいと両目を指で擦ると、再びトランペットを構える。

「吉川、やり過ぎ」

だが、忍は目敏くその光景を見ていた。オーバーワークだと感じた忍は、演奏がストップした合間に吉川に短くそう言う。

「うっさい。後もうちよつとなのよ。今休憩したらこの感覚が無くなつちやうじやない」

しかし、吉川は聞く耳を持つとうとしない。ここ最近は何かに取り憑かれた様に、ずっと練習をしている。

まるで何かに焦っている様に。

「……優子ちゃん、休憩しよう？」

すると中世古もそれを見ていたのか、吉川に対してそう提案する。

「香織先輩……いえ、もうちよつとやります」

いつもなら中世古のイエスマンに成り果てるところだが、中々に頑固な様だ。何度か指運を確認すると、再び吉川はトランペットを構えた。

「ダメ。ちゃんと休憩も取らないと」

しかし、それを良しとしない中世古が、少し強い口調でそう言う。そんな彼女の強い押しに、吉川はようやくトランペットを下げる。

「……………はい……………」

尊敬する中世古にそこまで言われては吉川も従わざるを得ない。そして、水分を取ろうとして水筒に口を付けるが、もう無くなっていた様で少し苛ついた様子で水を補給しに行こうと席を立ちあがった。

ポタツ、ポタツ……

「ちよ、ちよつと優子ちゃん!!」

すると、そんな光景を見て、中世古が慌てた様子で吉川に対してそう言う。

「?、どうしたんですか?香織先輩?」

自分の異変に吉川は気付いてないのか、首を傾げてそう返した。

「鼻!!、鼻血!!」

「え?、あ、ええ?!?!」

中世古の指摘でようやく吉川も気付く。どうやら猛暑の中練習し過ぎたせいで、のぼせて鼻血が出てしまった様だ。

「吉川。とりあえずベッドに座っとけ」

「うん、分かったー」

保健室、連れ添いで吉川を連れて来た忍が保健室に入ると、忍は鼻に詰めるティッシュが無いか探ながらそう言う。

対して吉川は、上を向いて血が垂れてこない様に鼻を押さえながら、ベッドの方へ向かって行った。

「上向くなって。益々止まなくなるぞ?」

「え、そうなの?」

忍の指摘に、鼻をつまみながら意外そうな反応を示す吉川。

「うん、下向いてないと血が出続けるんだって」

「なんでそんな事知ってんのよ……」

「俺も子供の頃は良く出したからな。母さんに教わった」

そんな会話をしながら忍が棚からティッシュを取り出すと、吉川のところまで持つて行く。

「ティッシュ鼻に詰めるなよ。傷口が開くかもしれないから」

「分かった」

吉川が忍から受け取ったティッシュを2、3枚取ると、下を向いて今度はティッシュで鼻を押さええる。

「鼻血出るまでって、どんだけぶっ通しで吹いてたんだよ」

ある程度落ち着き、今度は保健室に置いてある冷蔵庫に向かいながら、忍はそんなツツコミをした。

「うっさい。そんなに吹いてないわよ」

そんな忍に対し、鼻を押さええているからか、少し変な鼻声になって吉川はそう返す。

「まあ、苦戦してるのは最近のお前見て分かってたからね。……それぞれで?上手くいきそう?」

そして冷蔵庫の扉を開け、中身を物色しながら忍は続けてそう聞く。

「……上手くいさせるわよ」

それに対し、吉川は強気な返答をした。そして忍はある物を取り出し、また吉川の方へ近づいて行く。

「そりゃ良かった。でも、熱くなり過ぎちやダメ」

「ちべたっ……!」

冷蔵庫から取り出した保冷剤を吉川のおでこに当てながら、忍は諭す様にそう言い放つ。

頭を冷やせと言う事なのだろうか、そう感じ取った吉川は少し不服
そうな顔になった。

「そのまましばらくね。……なあ、吉川。何を焦ってるの？」

そして、忍は続けてそんな事を聞く。

「……………別に、焦ってなんか無いわよ」

そんな核心を突く様な忍の問い掛けに、目線を逸らして吉川はそう
返した。

流石に本人の目の前で”アンタの足手まといになりたく無い”と
言える程、吉川の心は素直では無い。

「……………そう？、まあ、言えないんなら良いや」

吉川が何かに焦ってるのは忍も気付いていたが、本人が言いたがら
ないのならば仕方が無い。

しかしそれも度が過ぎると、今度は周りが心配し始める様になるの
だ。

「でも、香織先輩や周りを心配させちゃいけない」

困った様に笑って、続けて忍はそう言い放った。

「……………それについては、悪いと思ってるわよ」

吉川もそれは分かっているのか、痛いところを突かれたと、バツの
悪そうな顔になってそう返す。

今の吉川は上手くなりたいと言う気持ちと、足手まといになりたく
無いと言う気持ちで埋め尽くされている。

だからこそ、焦りが生まれる。

行き過ぎる練習で周りに迷惑を掛けてしまっただけじゃないと、彼女
自身も分かっているが、それ以上にコンクールで少しでも多く貢献し
たいと言うのが、吉川の本心だった。

『ダメです！久美子ちゃん！上向いたら！』

『え、ええー？、そうなの？』

『うん、アタシも中学時代テニス部で出した事あるけど、ホントは下

向いて押さえた方が良いんだって』

すると、保健室の外。廊下から声が聞こえてくる。人数は恐らく三人。

会話の内容からして、運動部の誰かが怪我でもしたのだろうか？忍がそんな事を思っていると、保健室の扉が勢い良く開かれた。

「失礼しまーす！ちよつとティッシュとか貰いに来ましたー！ってあれ？トランプペットの……」

「あ、低音の……」

保健室に入ってきたのは3人。低音。パートの加藤と川島。そして、吉川と同じく鼻を押さえている、黄前だった。

保健室にて

「黄前ちゃんも鼻血？」

鼻を押さえて入って来た黄前を見て、忍は少し驚いた表情でそう尋ねる。

「え？、あ、はい！のぼせちゃって……」

尚も鼻を押さえながら、鼻声で黄前はそう返した。

「そっか。うっわ、制服汚れちゃってんじゃない。替えの着替えとか持ってる？」

「い、いえ。今日は持って来て無いです……」

忍が心配そうにそう聞くと、黄前は困った様にそう返す。吉川と違って黄前は鼻血が出ていた事に気付くのが遅かったのか、制服が少し血で汚れていた。

「うーん、そっちの2人は持ってる？」

「いえ、私は……葉月ちゃんは？」

「アタシも今日は持って来て無いです……」

忍が他の1年2人にそう聞くと、加藤と川島も首を振ってそう返す。忍はどうしたものかと首を捻って考える。流石に血が付いた制服のまま合奏練習と言うのは気が引ける。

「アタシの体操着、使って良いわよ」

すると、今度は吉川が鼻を押さえながらそう言う。

1年生の3人にはその言葉が意外だったのか、一様に目を丸くした。

「……なによ、そんなに嫌なわけ？」

そんな反応に、ぶすつとした顔で吉川は続けてそう言い放った。それに対し黄前が鼻を押さえながらあたふたする。

「え!? あ、いえいえ！嫌じゃないです！ただちよつと意外だったって言うか……あゝ！……」

慌てて取り繕う黄前だったが、最後の最後でボロが出た。

そんな光景を見て、忍が嘔き出す。

「ぶっ、あつははは！あー、やつぱ黄前ちゃんは面白いねえ。吉川、お前結構1年から怖がられてる感じなの？」

「うっさいわねえ！好きで怖がられてるわけじゃないですよー！」
おちよくる様に忍が吉川に向かつてそう言うのと、案の定立ち上がった忍に噛み付いて来た。その弾みで止まり掛けていた鼻血が、再び吉川の鼻から出て来る。

「こら、いきなり立つな。また出てきただろーが」

それを見て諭す様に忍が吉川の肩を掴むと、そのままベッドの上に座らせる。

「原因はアンタでしょーがっ！」

「いでっ！」

そして吉川は片手で再び鼻を押さえ、もう片方の手で忍にゲンコツを喰らわした。

「それで、どうすんの？そのまま合奏練習出ても良いけど、皆から変な目で見られるわよ？」

再びベッドに座り直すと、視線を黄前に向け直してそう言い放つ。

「あ、えーつと……じゃあ、借りても良いですかね？」

「最初からそう言いなさいよ」

「あはは……面目無いです……」

おずおずと言った感じでそう言う黄前に対し、吉川は太々しい態度でそう返す。

怖くはあるが案外面倒見の良い先輩などと、黄前の中でイメージが変わりつつあった。

「じゃあ秋川。アタシの体操着持って来てくれる？」

「良いよー。5組だっけ？」

そして吉川がそう言うのと、忍も快くそう返す。

「うん、窓際の席に袋が掛けてあると思うから、取って来て」

吉川がそうお願いすると、「あいよ」と一つだけ返し、保健室の扉へ向かう。

「あまり一年を怖がらせちゃダメだよー？」

「しつこい。早く行きなさいな」

保健室から出る直前。そんなやり取りをしながら、忍は吉川の体操着を取りに行くために、教室を出る。

その光景を、感心する様に1年の3人は見ていた。

「……なによ？」

なんだか生暖かい視線を感じた吉川は、忍が出て行くとその視線を向ける3人の方へ顔を向けて、居心地の悪そうにその一言だけ言い放つ。

「あー、いや、何て言うか……」

「お腹いっぱいって言うか……」

加藤と黄前。その2人は、なんとも言えない顔になって、そう言い放つ。

普通、異性に自分の体操着を持ってこさせるか？相変わらずの距離感の近さにどう反応して良いのか分からない様だ。

「あの一！優子先輩って、アツキー先輩とどう言う関係なんですか!？」

すると1人、川島が興味津々と言った感じでそう聞いて来た。

「ちよっ!？」

「みどりちゃん!？」

いきなりの川島のぶつ込みに、加藤と黄前は少し慌てる。

「ど、どう言う関係って、……秋川と？」

いきなりそんな事を聞く川島に、吉川もたじたじと言った感じでそう返す。それに川島は大きく頷いた。

「はい！優子先輩、アツキー先輩とあんなに仲が良いので気になります!!」

これでもかと言うくらい目を輝かせながら、グイグイと行く川島。それに吉川も困った様な苦笑いになる。

「な、仲良いつて……そんな風に見えないでしょ？いっつも言い合

いしてばっかじゃない」

「違いますー！違うんです!!そーじゃ無いんですー!!」

合奏中の吉川と忍のやり取りと関係をどう言葉で表して良いのか分からないのか、もどかしそうな仕草をする川島。

「久美子ちゃんと葉月ちゃんも分かりますよね!?!」

「ええ!?!」

「私たち!?!」

そしていきなり川島にそう振られ、2人ともびっくりした様な表情を浮かべる。

なんとか答えを出そうと、2人して頭をフル回転させる。

「え、えーっと、何て言うか……言い合ってるんですけど、見てて悪い気分にならないって言いますか……」

黄前は当たり前障りのない様にそう言う。

「そ、そーだねー、アタシも同じ気分ですー!」

それに同調する様に、加藤もそう言い放った。

「だそうです!優子先輩!実際のところどうなんですか!?!」

なんだか変なテンションになって来た川島が、吉川に詰め寄って興奮気味にそう聞く。

同じトランプペットパートの1年にも、こう言う子が居たなど、吉川は漠然と頭の片隅で思い出していた。

「……それって、付き合ってるとか付き合ってる無いかの話?」

「はいー!」

念の為にと吉川がそう聞くと、川島が即答する。それに対し吉川は観念しましたと言う風に、一つため息をついた。

「なら、付き合ってる無いわよ?残念だったわね?期待してた答えと違うみたいで」

どこか投げやりに、少し早口で吉川はそう言い放つ。口調は涼しいものだが、さつきより顔が赤くなっているのを、川島は見逃さなかった。

「そうですか。……じゃあ、アツキー先輩の事、どう思ってますか？」

続けての川島の問いかけに、吉川は一瞬固まる。そして、少し考え込む様な仕草をした後、川島らを見据えた。

「……そうね。質問に質問を返すようで悪いけど、アンタ達にはどう見える？」

正に見事なカウンターパンチ。吉川優子は、頭が回る方の人間だ。ここでそう言えば、自分を怖がっている1年は解答に困る。付き合っている様に見えると言えば良いのか、それともそれ以外の答えがあるのか、言葉に迷う。

それを見越して、彼女はそんな事を言ったのだ。中々に良い性格をしている。

現に、黄前と加藤は言葉が出てこない。

「私は優子先輩とアツキー先輩、お似合いだと思いますよ？」

しかし、通用しない相手も居る。川島が躊躇無くそう言い放つと、それが予想外だったのか吉川は少々驚いた表情になった。

「……そう？アンタにはそう見えるんだ」

「はい！だって、お二人ともすごい仲が良いですもん！」

吉川の問いかけに川島は純粹にそう答える。

この3人の中で唯一、川島だけが吉川に対して怖いと言うイメージを抱いて無い。だからこそ、この様にズケズケと踏み込んで行けるのだ。

話した事もない人に対して、マイナスなイメージを絶対持たない。そんな川島の人柄に触れたからか、吉川は薄く微笑む。

「そうねえ……ぶつちやけ言くと、アタシは好きよ？」

そして白状する様に、吉川は遂に言葉でそう言い切った。あつげらかと、さも当然であるかの様に。

その言葉に川島だけでなく、黄前と加藤もどこか興奮を隠し切れていない様子だ。

「や、やっぱりーい、いつから好きなんですか!?!」

ここからはもう川島の独壇場。こんな活きの良いエサに、恋バナが大好きな女子高生達が食い付かない訳がない。

黄前と加藤も興味津々と言った感じで耳を傾ける。

「い、いつからとかはあんま覚えてないかなー? いつの間にかって感じ」

「そうですか! じゃあ、今すぐにでも付き合いたいですか!?!」

「も、もう! そんなガツガツ来ないの!」

恋の暴走機関車と化した川島に対し、軽くチョップを加えて吉川はそう返す。

そして、少し考え込む様な仕草をすると、意地悪そうに微笑んで3人を見やる。

「そうね……あつちから告白して来たなら、考えない事も無いわよ?」

自分から絶対に告白しないと言う子供じみたプライドでもあるのか、吉川はそんな少し捻くれた返しをした。

焦り

「はい、持って来たよー」

保健室、川島による尋問の様な恋バナもそこそこに、廊下から気の抜けた忍の声が聞こえると、同時に扉が開く。

「あ、ありがとう」

今まで話題になっていた男が再び現れたので、何処かやりにくそうに吉川は言つて、忍から体操着を受け取る。

「……何?、変な顔して?」

「べ、別に? アンタが変わり者だって話をしてたのよ」

様子がおかしいと感じた忍がそう聞くと、吉川は上手く話題を逸らす。

「えー? そうでもないと思うけどなー」

「自覚が無いところが重症ね」

それにまんまと忍が騙されると、いつもの様に吉川は軽口を言う。

「まあ、いいや。それで?、鼻血止まった?」

「うん、アタシは大丈夫」

忍がそう聞くと、吉川は鼻の辺りを確かめる様に手で顔を触りそう答える。

「黄前ちゃんは?」

「私ももう大丈夫そうです」

対して黄前も大丈夫そうさ。

「りょーかい。まだあと10分くらいはそのままの方が良いよ。俺は先に練習に戻るから、また出て来たらしばらくじっとしといてね」

大丈夫だと判断した忍は、2人に向かってそう言う。

「分かった」

それに吉川も一言そう頷く。

「アンタ達ももう戻りなさい」

そして、続けて加藤と川島に向かってそう言い放った。

「分かりました。久美子ちゃん、もう無茶しちやダメですよ?」

川島が吉川の指示に頷くと、黄前の方を向いて宥める様にそう注意した。

「うん、分かってるよー」

それに困った様に笑って黄前はそう返す。

「良いねー、川島さん。こっちのデカリボンにも注意してやってよ」

「よ・け・い・な・お世話だつてーの!!」

「いだいっ!!」

そして揶揄う様にして忍も乗つかる様にそう言っていると、調子に乗るなと言わんばかりに吉川のタイキックが炸裂した。

「あはは……じゃあ、アタシたちはこれで失礼します!」

そんな光景をみて苦笑いで加藤がそう言っていると、保健室に吉川と黄前を残して、3人は保健室から出て行った。

……沈黙。

ムードメーカーである忍と川島が居なくなった事により、なんとも気まずい空気が流れる。

そもそも吉川は中世古派で、黄前は高坂派だ。お互い確執があるわけでは無いが、ソロパート騒動の一件もあり、2人とも話づらそうにしていた。

「……アンタ、滝先生に言われたところ、苦労してるんだってね?」

しかし、そこは先輩である。話題を振ったのは、吉川の方だった。

「え?、あー、はい。ちよつと難しくて……」

それに黄前も、辿々しくではあるがそう返す。

滝先生に言われたユーフォニアムの連符の部分。本来ならばコンバスのパートの部分を、ユニゾンでやってくれと滝先生から注文を受けたのだ。

そして黄前は、それに苦戦していた。

「焦ってる?」

「……はい。かなり」

吉川が直接的にそう聞くと、黄前は俯き気味にそう答えた。それに

吉川は困った様に軽く笑う。

「気持ちに分かるわ。同じ楽器なのに自分よりすごい上手い人がいるんだもん。なんで自分は出来ないんだろーなーって、思うわよね」
「……………」

自虐的にも聞こえる口調で、吉川はそう言う。それに黄前も返す言葉が出ない。凶星を突かれたからだ。

現に、先輩の田中あすかが滝先生に言われた部分を完璧に吹きこなしているのも、黄前が焦る理由の一つでもあった。

「アタシも分かるのよ。こっちにはお化けみたいに上手いのが2人もいるからね。どうしてもそいつらの音とアタシの音を比べちゃうと、劣等感が出て来ちゃう」

どこか仕方のないと言う風に、しかし心底悔しいと言う感情も混ざった声で、独白する様に吉川はそう言う。

彼女のその言葉を聞いて、遂に黄前は理解した。

ああ、この先輩も、今私と同じ気持ちなのだろうなど。

「…………先輩は、上手くなりたいですか?」

そんな吉川 of 感情を知ったからか、俯きながら黄前は彼女にそう聞く。

「当たり前じゃない。こんだけ吹いてんだから、上手くなってないと暴れるっつーの」

対して吉川はさも当たり前かのようにそう答えた。

「ですよ。私も上手くなりたいです」

それにホツとした様に、黄前もそう返す。そして吉川はベッドに仰向けになる様体を倒すと、恨めしそうに天井を見上げる。

「あーあ。…………なんで自分より上手い人間って、存在するんだろーねー?」

「…………ホントに、その通りですよー…………」

同じく黄前も仰向けになって、吉川と同じ様に天井を見上げながらしみじみとそう返す。

2人に共通してるのは、上手くなりたいと言う気持ち。そして、その上手くなりたいと言う理由も、また同じ。それだけで十分だった。目指す場所は明確にそこに、すぐ近くに存在しているのに、どれだけ手を伸ばしても届かない。

そんなもどかしさが、2人の共通点だったのだ。

「2人は黄前ちゃんと同じ低音パートだよな？確か川島さんと、加藤さん？」

一方こちらは校舎内の廊下。こちらも先輩らしく、話題を振ったのは忍の方からだった。

「はい。本名は川島緑輝と申します」

「さ、さふあ？」

日本人の名前とは思えない川島の自己紹介に、忍はもう一度聞き返してしまふ。

「……サファイアです。あ、あんまりその名前で読んで欲しくないので、みどりって呼んでいただけると……」

それに、川島は困った様にそう返した。それを見て忍は少しまずつたなど言う表情になる。

「り、りよーかい。じゃあ、みどり氏でいつか。確かコンバスだよな？いつも上手いから、こつちも助かってんだよねー」

このままでは気まずいので忍が手放してそう褒めると、川島は恥ずかしそうに、しかし嬉しさも混ざった様な反応をする。

「そ、そうですかー？あんまりコンバスって褒められる事無いんで、嬉しいですよー」

「まあ、あんま目立たないからねー。でも、コンバスあるだけで音の厚みが全然違って来るんだよねー」

そして忍がそう言うと、川島はこれでもかと言うくらい目を輝かせた。

「そうですねー！そんなんです!! やっぱりアツキー先輩は凄いです! コンバスの良さを分かってくれる人って、少ないんですよ!!」

そして、川島は急にテンションを上げて興奮しながら忍の言葉に全面的に同意して来た。

「お、良いねー。みどり氏はコンバス好きなの?」

そんな川島に引く事なく、逆に興味津々と言った感じで、忍はそう聞く。オリジナルのあだ名付きで。

「もちろん!! 世界一愛してます!!」

しかし、そんな事は川島にとってどうでもいいのか、高らかにそう宣言した。

「そりゃ良い。俺も、みゆきを世界一愛してるんだわ」

対して忍も、満足そうにそう返す。

「み、みゆき?」

しかし、いきなり忍の口から出た女性の下の名前が出て来て、加藤が首を傾げてそう聞く。

「俺のトランペットの名前。もう何年もの付き合いになる彼女よん」

「みゆきちゃん! カワイイです!!」

「でしょ?」

興奮気味にそう言う川島に対し、忍は自慢げにそう返す。

あれ?、もしかしてこの2人って、すごぶる相性が良い?

やけに息が合ったやり取りを見て、加藤はそんな感想を抱いた。

「で、加藤さんは、確かチューバだっけ?」

すると、今度は加藤に対して忍がそう聞く。

「あ、はい! 加藤、加藤葉月です! チューバやっています!」

「おー、元気いいねー。じゃあ、カトちゃんていつか。チューバって言うのと、ゴツツと長瀬さんのところか。して、カトちゃんは経験者?」

元氣よく自己紹介する加藤に対し、忍は満足そうにまたまたオリジナルのあだ名をつけて、加藤に対し続けてそう聞く。

「いえ、アタシは高校からの初心者です」

「ほー、なるほど。じゃあ、ちゃんとあの2人に教えてもらってる？」

「はい！梨子先輩は優しいですし、後藤先輩もちよつと無愛想ですけど、しっかりと教えてくれます！」

忍の問い掛けに対し、加藤は楽しそうにそう返す。

「だっはっははは！まー確かにゴツツはあんまり笑わないからねー。硬派っぽいけど、あれでも結構初心なところがあるんだよー？」

「えー!?そんなんですかー!?!」

ここには居ない後藤の話題で盛り上がる2人。かなりノリの良い少女の様だ。

「それで、どう?、カトちゃんはチューバ好きになった?」

そして、期待する様な眼差しで忍は加藤に対しそう聞く。

「はい!!チューバは周りの音を引き立てる役目、アタシが皆んなを支えなければなりませんから!」

加藤は、屈託の無い笑みで、得意げにそう返した。

その言葉を聞いて、忍は更に嬉しそうな表情に変わる。

「そっかそっか!!そりゃよかつた!!良いねー。やっぱチューバが好きな人の元で教わると、弟子も好きになるもんなんだねー」

しみじみと、感慨深くそう言う忍。その言葉を聞いて、加藤は少し照れくさそうに頬を掻いた。

「じゃあ、好きならもつと上手くなないとねー。好きな楽器で更に上手くなると、もつとその楽器が好きになるよ?」

そして、続けて忍はそう言い放つ。その表情は、正に純粋な笑顔で、

本心から言っている言葉なのだと、加藤も直ぐに理解出来た。

「分かりました！アッキー先輩の言う通り、邁進努力いたします！」

「うむ、頑張るが良いぞー？」

嬉しそうに、加藤が敬礼をしてそう言うと、忍も満足げにそう返す。

この時点で忍のお気に入りリストに入った様だ。

「楽器をやるならまず自分が使う物を好きになんないかからね。……でも、上手くなりたいてって気持ちが行き過ぎてその楽器を嫌いになっちゃダメだよ？」

そして、忍は続けて加藤に対しそんなアドバイスを送る。それに加藤も「はい!!」と元気よく返事を返す。

忍のその言葉は、ここには居ない保健室に居る2人に向かって言っているようにも聞こえた。

お礼

今日も練習。ここ最近は何口数も少ない。何故なら話している暇があれば吹き続けると言う選択肢を取るからだ。

合奏練習はもちろんの事、パート練習も各々出来ないところ、足りないところを必死に補おうと楽器の音だけが響き渡る。

♪♪♪、♪ー♪、♪♪

「どう？」

「いい感じ。音も出る様になってる」

「……いよしっ！」

そしてトランペットパート。吉川の演奏に忍がそう評価を下すと、気持ちのいいガッツポーズを決める吉川。

朝から夕方までのぶっ続けの練習により、吉川のレベルアップは相応なものになっていた。

「本当に上手くなったねー、優子ちゃん」

「香織先輩！ありがとうございます！」

すると、中世古も吉川の音を聴いていたのか、笑顔でそう感想を述べて来た。

「最近、優子ちゃん凄い頑張ってるから当然かな？このままじゃ私より上手くなっちゃうかもね？」

「そ、そんな事無いですよ！香織先輩に敵う人間なんて居ません！もう、マジ！エン！ジェル！ですから!!」

褒められた嬉しさからか、過剰に中世古を持ち上げる吉川。いつも通りに戻った彼女に、中世古も安心した様に微笑んだ。

「あははっ、良かった。最近優子ちゃん、なんだか思い詰めた様な演奏してたからね。心配してたんだよ？」

「そ、そうですね？あんまりそんな自覚無かったですけど……」

口ではそう言ってるが心当たりがあるのか、少し目線を逸らして吉川はそう返した。

「コンクールまであと10日、この調子で頑張ろうね！」

「っ!!はい!!香織せんぱあい!!」

中世古が笑顔でそう言うと、後ろの方にハートマークが付いてそんなほど甘えた声を出して、吉川は返事をした。

そして、合奏練習。

「テナー、バリトン、ユーフォ。ここ重要です」

「はいー！」

「7小節前からもう一度。ここのバリトン、もっとクリアに」

「はいー！」

「前にも言いましたよ、この曲はホルンがカッコいい曲です。分かってますか？」

矢継ぎ早に滝先生からの注意、指摘が飛ぶ。その殆どが良い物では無い。まだ求められる音に届いてないと言う事なのだろうか。

そして、今度はトランペットパートの方向に顔を向ける。

「トランペット吉川さん」

「はいー！」

滝先生に名指しで呼ばれた吉川は、少し強張った声で返事をする。

「今のを常に吹ける様に」

いきなりの滝先生の褒め言葉。褒められるとは露ほども思っていなかった吉川は、一瞬呆けたような顔になる。

「返事は？」

「あ、は、はい!!」

滝先生に再度そう問われ、勢い良く返事を返す吉川。それは、ここ最近ずっと練習していた部分だった。

腰の辺りで、誰にも見えない様に小さくガッツポーズをする。しかし、隣で吹いていた忍はそれを見ていた。

吉川の肩を叩いて、何も言わず一つ拳を突き出す。それに気付いた吉川が一瞬驚いた顔になるも、突き出した忍の拳に軽く小突いて返し

た。

「では、154小節から」

その後も、合奏練習は続く。

「秋川、この後空いてるでしょ？」

「空いてる事もう決定なの？」

今日の練習も終わり、楽器の片付けをしていると、吉川が忍に向かってそう言う。もつとこう、ロマンチックな放課後の誘い方とかもあるのではないだろうか？

「何？、先約でもあるの？」

「一応、タツキーと帰る予定なんだけど……」

「どうせ一緒に帰るだけでしょ？滝野にはアタシから言っとくから、今日は付き合って」

何やらいつもよりグイグイ来る吉川に、片付けをする手を一瞬止めて少し驚いた様な表情になる忍。

「……何よ？」

そんな忍の表情に、微妙な顔をしてそう言い放つ吉川。

「いや、珍しいなーって思っただけよ。タツキーには俺から言っとくから」

「りょーかい。さんきゅー！」

いつもより上機嫌な様子でそう返す吉川。まあ、機嫌のいい理由は忍もわかっている。今日の合奏練習で滝先生に褒められたからだろう。なんとも分かりやすいなと思いつつ、忍は片付けを続行した。

「で、どこ行くの？」

「決めてない」

「はあ？」

そして帰り道。どこに行くのかと忍がそう聞くと、吉川から即答で返事が返ってくる。

あつちから誘っておいて、何も予定を決めてないとはどういう見だろうか？

「秋川はどこ行きたい？」

「いや、まあどこでも良いけど……」

吉川の問い掛けに、しどろもどろにそう返す忍。なんだか妙に優しい。絶対何かあるなと忍は勘繰る。

「うーん、どこ行こっか？」

しかし、それにしても吉川は自然体に見える。彼女があまり演技が得意で無い事は忍も知っているの、吉川が何を考えているのかますます分からなくなっていた。

「どこでも良いなら、ちよつと腹減った」

なので、忍は一つ探りを入れてみる。本来ならここで突っ掛かったりする筈なのだが……

「お、良いわねー。じゃあ、近くのハンバーガー屋さんにも寄ろっか？」

「お、おう……」

やっぱりなんだか吉川の様子がおかしい。今日みたいに上機嫌でも、いつもなら忍が喋る度に突っ掛かって来るのが道理なのだが、今はやけに丸い。そんな彼女にやりにくさを覚えながら、忍は言われるがままについて行った。

「何頼む？」

「え？、じゃあ、ポテトとシェイクを……」

近所のファーストフード店。順番待ちの間、吉川が忍に対してそう聞く。それに遠慮気味に忍はそう答えた。

「りよーかい。じゃあ、アタシが奢ってあげる」

「え!?!いいの!?!」

吉川の口から出た衝撃の発言に、心底驚く忍。

「何よ?、アタシだって、奢ることぐらいあるわよ」

そんな忍に対し、困った様に笑ってそう返す吉川。……この少女、本当に吉川優子だろうか?

「はい、ポテト二つと、シェイクが一つ、ドリンクが一つですわね」
そんな事を考えていたら、吉川はさっさと注文を済ませて会計を終わらしてしまった。

「…………吉川お前、熱でもあるのか?」

テーブル席に对面になる様に座ると、忍が吉川のおかしさにそれとなく触れる。

「はあ?、いきなり何よ?」

少し深刻そうな表情でそう言う忍に対し、吉川は不思議そうな顔をしてそう返した。

「いや、だって今日の吉川、妙に優しいから……」

そして、遂に忍は直接的にそう言う。それに対し吉川は軽くチョップを忍に食らわせた。

「いてっ」

「変な事考えてんじや無いの。今日のはお礼よ」

薄く笑って、吉川はそう言い放った。彼女のお礼と言う言葉に、忍は首を傾げた。

それを見て、吉川は言葉を続ける。

「アンタにはここ最近アタシの演奏をよく聴いてもらったからね。そのお礼。……何?アタシが何か企んでるとでも思った?」

「うん。だってそうでもなきや、吉川がこんな優しいはずないし」

「ほんつと失礼ね、アンタ」

互いに頼んだポテトを頬張りながら、忍の直接的な発言に苦笑いになってそう返す吉川。

「でも、そう言う事なら、別にお礼なんかしなくても良かったのに」
忍はシェイクを飲みながら、遠慮がちにそう言う。

「アタシがやらなきや気が済まないの。せつかく奢ってんだから。黙って奢られときなさいよ」

こう言うところは、吉川の人柄だろうか。普段は粗暴で感情的になりやすい彼女だが、それ故に情に深く、義理堅い。

そんな彼女の気遣いに、忍も嬉しくならない訳がない。

「ほほー、そつかそつか。じゃあもつと贅沢しとけば良かったかなー」

口ではそう言ってるが、表情は喜びの色を隠そうともしていない。そんな忍の表情を見て、吉川もニツコリと笑顔を返す。

「もう、調子に乗らないの。いいから早く食べちゃいなさいよ」

その言葉は照れ隠しか、笑いながらも少し頬を赤く染めて吉川もそう返した。

「……………ねえ、秋川」

すると、そんな表情から一変、どこか真剣な表情で、吉川は忍に対してそう言う。

「……………何？」

そんな吉川に忍も真剣な顔つきで、吉川の言葉に耳を傾ける。

「……………コンクール、絶対決めるわよ」

そして、覚悟を持った表情で、吉川はそう言い放った。それに忍も薄く笑う。

「……………当たり前じゃん」

コンクールまであと10日。吉川も忍も、この為に死に物狂いで練習をして来たのだ。

忍のその笑顔は、挑戦的な笑みの様にも映った。

手綱

秋川家の朝は、あまり早くない。何故なら一家揃って朝に弱いからだ。しかし、その日は少し違った。

時刻は朝の5時。1人、いつもより早い時間に秋川家の長男は起きていた。

「…………ふあああ……………」

大きなあくびをしてから、リビングで朝食の準備をする忍。

今日はコンクール当日。吉川と一緒に音出しをしようと誘われ、こうしていつもよりかなり早く起きたのである。

「…………ふあああ…………早いねー、兄ちゃん」

すると、凜花もパジャマ姿のまま、忍と同じくあくびをしながらリビングにやって来た。

「んー、本番だからねー。色々準備とかもあんのよ」

未だ寝ぼけ眼のまま、そう返す忍。眠そうではあるがクマもなく、睡眠はバツチリの様だ。

「凜花は？今日来んの？」

「うん、北宇治午後からでしょ？眠いからもうちよつと寝る……………」

「りよーかい。朝ご飯もう作つとくよー」

「ありがとー……………」

眠そうな声で凜花がそう言うと、再びリビングから出ていく。

「…………よしっ」

朝ご飯用の味噌汁の味見をしながら、誰もいない台所で忍は真剣な顔でそう呟く。大丈夫。いつも通り。そんな気持ちも込められている様にも見えた。

「おーっす、ちよつと遅れた」

「おはよ。分かってんならチョットは反省しなさいよ……………」

まだ殆ど誰も来ていない音楽室。忍が気の抜けた声でそう挨拶を

すると、吉川も困った様にそう返す。

「集合時間が早過ぎんだよ。まだ6時前じゃん」

「いいじゃない。アンタん家、ここから近いんでしょ？」

「近くても朝が弱い人間にはこの時間帯は拷問なのですよ……」

ぶつくさ文句を言い合いながらも、音出しのために2人して準備をする。本番前だと言うのにあまり緊張してる様には見えなかった。

「じゃあ、合わせんべ。チューニングrbから」

「りよーかい」

そして雑談も程々に、今日朝1番の楽器の音が校内に響き渡った。

「はい、みんな聞いてー、聞いて下さーい！」

そして7時前。メンバーが揃っているかを聞く為に、小笠原が声を掛ける。

「各パートリーダー、自分のパートが揃っているか確認して下さい。

トランペット」

「います」

「パーカス、問題なーし！」

「フルート、全員居ます」

小笠原の問い掛けに対し、各パートリーダーからメンバーが揃っている旨の報告が来る。

いつもと違うやり取り。それだけでも、コンクールが近づいている事を実感する。

「ええと、7時過ぎにトラックが来るので、10分前になったら、積み込みの準備を始めます。楽器運搬係の指示に従って、速やかに楽器を移動して下さい」

「はいー」

小笠原の指示に、チームもなかから返事が返ってくる。

「楽譜係」

「はい、今から譜面隠しを配ります。各パートリーダーは取りに来

て下さる」

「受け取ったら各自無くさない様にねー」

「楽器運搬の人は、こっちに集まって下さーい！」

コンクールの為か、少し慌しい雰囲気音楽室。各自に譜面隠しが配られる。

「はい、優子ちゃん」

「ありがとうございますー！」

「秋川君も」

「どもっす」

中世古も、トランペットパートのメンバーに譜面隠しを渡して行く。忍は持って来た楽譜に早速譜面隠しを被せて、どんなものかと調子を確かめていた。

「アッキー！楽器運びに行くぞー！！」

すると、滝野から声をかけられる。忍も楽器運搬の係なので、もう行かなければならない。

「うん！分かったー！吉川、俺の楽譜と楽譜隠し持つといて」

「良いわよ。早く行きなさいな」

忍が吉川にそう言うと、吉川はその二つを受け取ってそう返す。

「さんきゅ」

そして、軽く感謝の言葉を述べると、忍は音楽室から出て行った。

「お前ら、気持ちで負けたら承知しないからな！分かったか！！」

「「はい！！」」

正門前。副顧問の松本先生から身が引き締まる様な檄を飛ばされ、皆勢い良く返事を返す。もう楽器の運搬も終わり、後はバスに乗り込むだけと言う状況だった。

「……っはあ、すみません、お待たせしましたー！」

すると、そんな松本先生とは対照的に、慌てた様子で滝先生が走ってやって来た。

「全員、揃ってますか？」

「ええ」

「そうですか……」

そんな滝先生に少し呆れた口調で松本先生がそう返す。滝先生も今日はコンクールなので、タキシード姿だ。

それに一部の生徒から少し黄色い声上がる。

「先生、ちよつと良いですか？」

すると、手を挙げて小笠原が滝先生にそう聞く。

「どうぞ」

「森田さん」

「はい！」

そして、チームもなかの1人、森田が袋を用意し始めた。

「えー、私たちサブメンバーのチームもなかが、皆さんへのお守りを作りました。今から配りますので、どうぞ受け取って下さい！」

「イニシャル入りです」

森田の説明に、同じくチームもなかの中川が付け加える様にそう言う。

すると、少しの歓声と共に拍手が湧いた。

「はい！弘恵先輩！」

「ありがとうございます！」

「私、L・OじゃなくてR・Oだよー？」

「へボン式？」

手作りのお守りに、各々の反応を見せる。そしてトランペットパートは、加部によってお守りが渡されて行った。

「はい、香織先輩！」

「ありがとうございます。嬉しいよ」

「いえいえ、あ、沙奈先輩！どうぞー！」

「ありがとうございます！」

「でー、はい。こっちが滝野ね」

「おう、サンキュー！」

イニシャルが入っただけの簡単なお守り。しかし、それでも嬉しい

ものは嬉しい。

そして加部は少しニヤつくのと二つ同時にお守りを出し、吉川と忍の前に差し出した。

「はい、君たち2人はコレ。色違いだけどお揃いの柄だよー?」

ニヤついた顔のまま、加部は揶揄う様にそう言う。それを聞いて吉川は少し顔が赤くなった。

「お、お揃いって……どうせ夏紀の仕業でしょ?」

「……せいかい。——ふっ——」

「ひえあ!」

そんな吉川の背後から、バレない様に耳に息を吹きかける中川。案の定、吉川は素っ頓狂な声を上げた。

「おー、これ作ったのなつきちなの?よく出来てんねー。サンキュー」

「いやいや、お礼には及びませんよ。お二人の幸せを願って、丹精込めて作りましたので」

意地悪そうな笑みを浮かべて、忍の感想にそう返す中川。

「余計なお世話だってーの!!もう、何でアンタはこう、人の嫌がる事ばっかすんのよ!!」

対して吉川は案の定、中川に噛み付いて来た。そんな光景を見て、忍と吉川以外のトランプットのパートメンバーは微笑む。

吉沢は頬を赤く染めて両手で自分の鼻と口を隠す様にその光景を見ていた。

「えー、皆んな行き渡りましたか?」

すると、小笠原が確認する様に、皆に聞こえる様にそう言う。それに吉川と忍も、彼女の方へと顔を向けた。

「まず、毎日遅くまで練習する中、全員分用意するのは本当に大変だったと思います。ありがとうございます、拍手!」

そして小笠原がそう言うのと、再度拍手が起ころ。それにチームもなかの面々は少し照れくさそうな表情を浮かべた。

「では、そろそろ出発します」

お守りが行き届いたのを確認すると、バスに乗り込む為に小笠原が

指示を出そうとする。

「小笠原さん」

「はい？」

「部長から皆さんへ、何か一言」

すると、滝先生から無茶振りの様な事を言われた。

「え!?、私ですかあ!？」

案の定、小笠原は困った様な声を上げる。いきなりの事で言葉を用意してなかった様だ。

「いよっ!待ってました!部長さん!」

そして、ここぞとばかりに田中が茶化して来る。

「茶化さないの!代わりに話させるよ?」

「こほんっ、では、ユーフォの歴史について……」

「それは良いから」

相変わらずの部長と副部長の漫才に、周りから軽く笑いが起こる。

「えっと……」

そして、何を言おうかと、少し戸惑った後、小笠原は口を開いた。

「えっと、今日の本番を迎えるまで、色んなことがありました。……

でも今日は、今日できる事は、今までの頑張りを、思いを、全て演奏にぶつける事だけです。それでは皆さんご唱和下さい!」

そして、小笠原は拳を突き上げる仕草をする。

「北宇治ファイター!!」

「!!「おー!!」!!」

小笠原の掛け声に、皆元気良くそう返した。

「さあ、会場に、私たちの三日月が舞うよ!!」

「!!「おー!!」!!」

そして続けて田中が言い放った言葉に、勢いでもう一度皆から良い返事が返ってくる。

「はしやぎ過ぎだ!!」

さつきより大きな声でそう言ったからか、松本先生から注意の声が飛ぶ。

しかし滝先生も同じく声を上げていたので、バツの悪そうに人差し

指を口元に当てて静かにする様ジエスチャーをする。

程よい緊張と緩和により、皆もちょうど良く肩の力が抜けていった。

「隣、座るわよ」

「え？」

そして、バス移動。吉川がそう言うと、忍の返事を聞く前にそのまま隣に座る。

「なんだよ、また香織先輩の隣座れなかったの？」

さも当たり前前かのように隣に座った吉川に対し、忍は揶揄う様にそう聞く。

「まあ、それもあるけど？アンタにこれを返さなくちやいけないからね」

対して吉川は、涼しげな顔でそう返した。そして、吉川はバッグを開くと、朝に預けた楽譜と譜面隠しを出す。

「おー、すまんすまん。忘れてたわ」

「楽譜なしでどう演奏すんのよ」

「大丈夫、大丈夫。飽きるほど練習したから、頭には全部入ってるから」

いつものやり取り。この会話をするだけでも、2人はリラックスした状態になれる。

ある意味での共存みたいなものだった。

「じゃあ、ちよつとくらい楽譜に落書きしても構わないわよね？」

すると、吉川はニコリと笑みを浮かべて、バッグの中からボールペンを取り出す。そして、忍の楽譜を開き、端の方に文字を書き込んで行った。

”絶対金賞、全国!!しつかりしなさい!!”

たった一文。それだけ書くと、吉川は満足げに忍に楽譜を返す。普通なら”ガンバレ!”やら”応援してる!”などの言葉を書くはずなのだ、”しつかりしなさい”とは、何とも彼女らしい。

少し雑な男子特有の文字列の中に、可愛らしい女子の文字が追加された。

「……ありや、楽譜の中にまで吉川にケツ叩かれちゃった」

言葉では冗談めいてそう言う忍だが、表情は喜びの色を隠し切れない。

「当たり前じゃない。アンタは手綱握ってないと、すぐどっか行っちゃうんだから。それはアンタに対する首輪みたいなもんよ」

そして、吉川は小声で、忍にしか聞こえない声で、ニコリと笑ってそう言い放った。

直前

「うわっ、暑っっ！」

「ちよっと酔った……」

「大丈夫？」

ホールに着くと、様々な反応が出て来る。緊張してる者、真夏の猛暑に文句を言う者、バスで酔って少し顔色が悪い者。

会場に着くと、他の高校の人達でごった返しているのが確認出来る。この中から京都代表に選ばれるのは、たった3校。

皆、この日のために練習を積み重ねて来たのだろう。何処かそわそわしているのは、北宇治だけでは無かった。

「はい、各パートリーダーは、もう一度全員揃っているか確認。終わったら、楽器を確認して下さい」

「はい！」

ホール内、小笠原からそう指示が飛ぶと、各々準備を始める。刻一刻と、本番に向けての実感が湧いて来る。

「楽器運搬の人ー、先に移動しまーす！」

「あ、はい！」

楽器運搬に足を走らせる者、指運を確かめる者、楽器に埃が無いか確かめる者。その一つ一つの仕草が、本番に近づいている事を実感する。

「……………」

「タツキー、緊張してる？」

すると、何やら難しい顔をしている滝野に対し、忍が軽い感じで話しかけた。

「え？、あ、ああ。何って言うか、去年はこんな感情無かったから、ちよっと不思議な感じって言うか……」

緊張の面持ちだが、何処か困惑も混ざった様な声色で滝野はそう言う。

「そんなくらい練習したって事でしょ？緊張してるって事は、そんな

らい練習したって事だよ。” あんだけ練習したんだから、絶対に本番では失敗出来ない”。多分、タツキーは今そんな感じなんじゃないの？」

忍にそう言われて、滝野は少し驚いた様な表情になる。これだけズバリと当てられるとは思ってなかった様だ。

「……さすが、ソロコンを受賞した奴は言う事が違うな。アツキーはそんな緊張してないのか？」

そして参りましたと言う風になって滝野がそう聞くと、忍もそれにニツコリと笑う。

「いいや、してるよ。でも、それ以上に興奮してる。今日はホールに沢山人が来るからね。その連中に俺の音を聴かせられるって思うと、緊張以上にワクワクすんべよ」

屈託の無い笑みを浮かべて、忍はそう言い切る。それに対して滝野は、「……アツキーは強いな」と、薄く笑ってそれだけ返した。

「すみません」

「あ、はい。そろそろ、移動しまーす!!」

「「はい!!」」

すると、係員が小笠原に話し掛け、控室に移動する。控室は、最後に後出しのできる場所だ。そこで各々チューニングを済ませ、本番に臨む。

「では、この扉を閉じたら、音出しして構いません」

係員がそう言うのと、滝野先生は一つ頷き、控室の扉が閉まる。そして、すぐさま皆チューニングを開始する。

チューナーを使って、自分の音が合っているか確認する。

「音合ってない……」

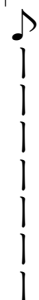
「大丈夫！落ち着いて！」

「聞いて聞いて！、もう一回……」

そんな会話も聞こえる。皆、最高の音を出す為に耳を研ぎ澄まして楽器の調整をする。

すると、滝野先生が手を挙げて、一回演奏を止める。そしてコンマスの鳥塚にアイコンタクトを送ると、最初はクラリネットの音でチュー

ニングb（ベ）の音が鳴り響く。



クラリネットの音に続く様に、他の楽器からも同じ音が出る。滝先生は目を瞑ってその音に耳を傾ける。

綺麗な倍音。空気が震えるその音は、ペットボトルの水面さえも震わせる。

そして数秒。各々チューニングを終えると、滝先生はゆっくり目を開いた。

「……よろしいですか？」

「はい」

滝先生の問いかけに、すぐさま返事が返ってくる。

「えーっと……」

そして何か言おうと滝先生は少し考える様な顔をするが、何も思い浮かばなかったのか、困った様に微笑んだ。

「実は、ここで何か話そうと思って、色々考えて来たのですが、あまり私から話す事はありません」

そんな気の抜けるような言葉に、部員達は一瞬困った様な表情を浮かべる。

「春、あなた達は、全国大会を目指すと決めました」

そして、滝先生は言葉を続ける。

「向上心を持ち、努力し、音楽を奏でて来たのは、全て皆さんです。誇って下さい」

そう言うと、滝先生はポンと一つ、手を叩く。

「私たちは、北宇治高等学校吹奏楽部です。そろそろ本番です。皆さん」

そこまで言うと滝先生は一つ、間を置く。

「会場をあとと言わせる準備は出来ましたか？」

滝先生の問いかけに、部員達は真剣な眼差しを滝先生に向ける。それに先生は尚も薄く笑う。

「初めに、戻ってしまいましたか？私は聞いているんですよ」
そして優しい声で、滝先生はもう一度聞く。

「会場をあつと言わせる準備は出来ましたか？」

「「はい!!!」」

今日一番の、勢いのいい返事。それに滝先生は満足そうな笑みを浮かべた。

「それでは皆さん、行きましょう」

そして、滝先生自ら控室の扉を開け、

「全国へ」

この中で一番の自信満々な表情で、そう言い放った。

「うっわ、なんで今日こんな多いのー？」

「休日だからでしょ？」

一方、こちらはホールの観客席。一生懸命良い席はないかと探しているのは、凜花と滝野の妹、さやかだった。

祭りで一気に仲良くなったこの2人は、他校の間柄でありながら、この様に一緒にコンクールの見学をしに来る程に仲良くなっていた。

「あ、あっちの方、よく見えそうじゃない？」

そしてホールの中に入ると、凜花が真ん中辺りの空いてる席を指差して、そう言い放った。

「そうだね。あっちからなら、忍先輩もよく見えるかなあ……」

「おー、さやかちゃん、ウチの兄ちゃんにゾッコンでありますな。お兄さんの方も応援してあげればー？」

少し頬を赤らめてそう言うさやかに対し、揶揄う様にそう返す凜花。

「兄さんは良いんです。それより忍先輩だよ！早く席取らなきや！」

しかしさやかにとっては自分の兄より忍の方が気になるのか、少し興奮気味で席の方へと進む。対して自分の兄がアイドルの様な扱いを受けている事に、少し苦笑いになる凜花。しかし、身内がこうも人気だと、悪い気はしないのであった。

「あ、すみません。ここ、良いですか？」

「え？、あ、はい。どうぞー」

先に席に座っていた女性に一言断りを入れると、「どうもー」と一つ返して凜花とさやかは隣同士で席に座る。

「北宇治、何番目だったけ？」

「確か亀岡東の次だから……後三番目」

さやかがそう問いかけると、凜花がプログラムを確認しながらそう答える。

「まだ少しあるねー。忍先輩、緊張してないと良いなー」

「あははっ、兄ちゃんに限ってそんな事ないない」

心配気味にそう言うさやかに対し、凜花は軽く笑ってそう返す。凜花も忍が緊張でガチガチにならないタイプなのを知っている。

ホールの雰囲気吞まれて実力が出せない事は無いだろうと、凜花もリラックスした様子だ。

「あれ？、君たちも北宇治の演奏聴きに来たの？」

すると、横の席から唐突にそんな事を話しかけられる。2人ともその声の方向に顔を向けると、先ほど断りを入れた女性がこちらを向いてこやかにそう言って来た。

「はい。北宇治で兄が出ますので、それを見に来たんです」

そう返したのは、凜花の方だった。女性は凜花より年上と分かる体つき。しかし大人ではなく、忍と同じ年齢の様に見える少女だった。その少女は黒い髪をポニーテールにまとめていて、快活そうな印象を受ける。

「そっかー、私も実は北宇治の生徒なの」
そして、笑顔で少女は言い放った。

「へー、そうなんですか！じゃあ、お友達が出るとかですか？」
それに対し嬉しそうに凧花はそう聞く。こんな偶然もあるものなのだなと。対して一瞬少女は顔を強ばらせたが、すぐに笑顔に戻る。
「うーん、まあ、そんな感じ。それでそれで？お兄さんは何の楽器を吹いてるのかな？」

すると少女は、話題を逸らすようにそう聞く。しかし、それは少女にとって悪手だった。

「2人とも、兄が北宇治の2年でトランペットを吹いているんです。
滝野と秋川って、知ってますか？」

秋川と言う言葉を聞いた瞬間、少女の顔が一瞬にして凍りつく。

「え、えっと……わ、私、何かまずい事言っちゃいましたか？」

その表情を見て、何か失言でもしたのかと、少し焦ったように続けて言う凧花。

「え？、あ、い、いいや!?何でもないよ!……そっかそっかー。」
「アツキー」の妹さんか……

口ではそう言ってるが、表情はバツの悪そうな、申し訳なさそうな顔を隠せてない少女。どうやら思った事が顔に出るタイプの子らしい。

「……えーつと、差し支え無ければ、兄との関係を教えてもらっても良いですか？」

それに対し凧花は、遠慮がちに肩をすくめてそう聞く。それに少女は少し考える様な仕草をした後、口を開いた。

「まあ、お兄さんとはちよつと縁があつてねー。……私、”傘木希美”って言うの。よろしくね」

そして表情を笑顔に戻すと、少女は続けて自己紹介をして凜花に握手を求めた。

「よ、よろしくお願いします」

そんな傘木に違和感を感じながらも、凜花は握手を返した。

『それでは、これより吹奏楽コンクール、京都支部の大会を行います。まずはプログラム1番、京都府立舞鶴商業高等学校』

すると、コンクールの開始を知らせるアナウンスが場内に響き渡った。

「……とりあえず、曲を聴こっか？」

「は、はい。そうですね……」

傘木が周りに聞こえない様に小声でそう言うと、凜花も同じくらいの声量でそう返す。

結局は傘木希美と言う少女が何者かは凜花には分からなかったが、取り敢えず演奏に耳を傾ける事にした。

結果

もうすぐ始まる。

暗転したステージ上。楽譜の準備をし、演奏に向けて皆席に座る。ステージ上からは、観客の顔が良く見える。今日は休日も相まつてか、かなりの人数がいる様だ。

ここにいる皆が、北宇治の演奏を聞く。

そう思うだけでも、忍の心臓が高鳴る。緊張と、興奮と、仄かな切なさ。その切なさは、今までやって来たものをここで全て出すと言う一瞬、たった12分間で全てを曝け出すと言う健気さから来るものだろうか。

恐らく、ここにいる全員がそう言う気持ちなのだろう。地に足はついていない。しかし、どこか現実離れた様な、不思議な気持ち。

絶対良い演奏になる。

そんな確信が、忍の中にあつた。

すると照明が、眩しいくらいにステージを照りつける。空調が効いている筈なのに、照明の光によってとてつもなく暑く感じる。しかし、今はその暑ささえもエネルギーに変えられる。

今この瞬間、主役は自分達だ。

北宇治の演奏で、この観客達は度肝を抜かれる事になる。

『プログラム5番、北宇治高等学校吹奏楽部。課題曲4番に続きまして、自由曲、堀川奈美恵作曲、三日月の舞。指揮は、滝昇です』
淡々と流れる、場内アナウンス。滝先生がそれに一礼すると、場内から軽く拍手が起きた。

そして、滝先生はゆつくりと、壇上に登る。どこからでも、滝先生の姿がはつきりと見える。それだけでも、北宇治のメンバーは少し安心する。

壇上から周りを見回して準備が出来ている事を確認すると、滝先生は両腕を上げる。それを見て、皆一斉に楽器を構える。

プログラム4番。課題曲、プロヴァンスの風。一定のリズムで、音を奏でる。皆、自分の出す一音一音に、魂を込める。たった12分。されど12分。

全国への切符を掴む為、この一瞬に全てを賭ける。”全国へ行けたら良いな”から、”絶対に全国へ行く”へ。

皆、滝先生に乗せられた。吉川も、中世古も、高坂も。あまつさえ忍でさえも。しかし、嫌々やらされた訳ではない。

最初は楽しく吹ければ良いやから、あの先生を見返してやるへ。そして、見返してやるから、もつと上手になりたいへ。

いつしか、部員全員が自ら全国へ行くにはどうしたら良いのかと考える様になった。

音のズレは無い。滝先生の指揮に合わせて、全員完璧な演奏を奏でる。

演奏が始まってから2分少々。短い課題曲が終わる。ここからが本番だ。滝先生が楽譜のページを一枚捲ると、題名欄に”三日月の舞”と書かれた文字が見える。

そして、再び手を振り上げると……

———
♪ー、♪ー♪、♪ー♪♪
———

自由曲、三日月の舞。その出だしを飾るのは、トランペットの主旋律だ。吉川が最初に苦戦した部分。しかし今は全員、音の粒が揃っている。高らかに。大きく、綺麗に。

続いて木管による連符。トロンボーン、ホルンの息のあつた掛け合い。その後に来る、主旋律が目まぐるしく変わるパート。

何度も、何度も何度も何度も練習した部分。

ズレは無い。緊張も無い。皆、北宇治の演奏に聴き惚れている。

「うっわ、すっげー………」

「うん、すごい………」

ポツリと一言、凜花とさやかもそう呟く。北宇治の演奏に、圧倒さ

れている。

「……………」

そしてそれは2人の隣に座る少女、傘木も同じだった。

演奏も中盤。100小節から、110、120小節へ。再び冒頭のファンファーレを繰り返し、一旦曲を区切る。

そして、ソロパート。ここからは、エースの出番だ。

滝先生が手を送り合図をすると、高坂が高らかに演奏を奏でる。孤高な音。しかし、独りよがりでは無い。

孤高でありながら、優しく包み込む様な、そんな音。あれから、さらに磨きが掛かった。

隣でそれを聴く中世古も、そんな音に微笑みを見せる。忍は、聞き惚れる様に目を瞑ってその音に耳を傾ける。

「……………綺麗……………」

「……………うん」

そんな音に、ため息混じりの声を凜花とさやかも出す。

「……………いいなあ……………」

ポツリと横の席で、そんな声が出たのを、凜花は聴き逃さなかった。

そして終盤。全員で、音を合わせる。クライマックスに相応しく、フォルテツシモをふんだんに使ったダイナミックな演奏。

あと少し。もうちよつと。全てを出し切れ。そんな思いから、皆一層演奏に気合が入る。

ひとつに重なった管楽器がクレッシェンドの最高点を目指して全速で突き進み、重厚な音圧と共に終わりを告げる。

終幕。滝先生が最後に手を振り下げると、演奏が終わった。

そして、一瞬間を置き、滝先生が立つ様に促す仕草を見ると、メンバーが立ち上がると同時に拍手が湧いた。

終わった。全て出し切った。

どこか夢見心地。そんな中、北宇治に満遍なく拍手が送られた。

そして、結果発表。

正直この瞬間の方が、演奏前より緊張してると言っても良いだろう。

「秋川」

対して忍は、未だに演奏の余韻に浸る様に、呆けた表情をしていた。

吉川の問いかけにも、反応を示さない。

「ちよつと秋川！、聞いてる？」

「え？、……ああ、吉川……」

再度、吉川に肩を揺さぶられ、ようやく反応を示す忍。

「何ボーツとしてんのよ？もう発表始まるわよ？」

「うん、そっか」

緊張気味の吉川に対し、忍は何とも気の抜けた返事を返した。

「……アタシ達、金賞取れるわよね？」

「大丈夫じゃない？」

「もう、何でそんなに他人事なのよ！」

なんだか発言に身が入ってない忍に対し、吉川は頬を膨らませながらも一度忍の肩を揺らしてそう言う。

「んー、なんて言うか、本当に渾身の演奏だったからね。そんな心配する事も無いんじゃない？」

「それでも！心配なのは心配なの！」

「もー、吉川は心配性だなあ」

「アンタが凶太過ぎるだけよ……」

この期に及んでマイペースな忍に対し、困った様な顔になって、吉

川はそう返す。

『それではこれより、吹奏楽コンクール。結果発表を行います』

「来たー！」

ホール内に響いたアナウンス。それに、場内から騒めきが起こる。皆、緊張の面持ちで発表を待つ。発表は、目の前の”吹奏楽コンクール”と大きく書かれた看板の上から、それより大きい紙を垂らして発表される。

吉川は今にも泣きそうな顔で。中世古は祈る様に手を合わせて。そして忍は、一瞬も目を離さずその光景を見ている。

わああああ
!!!!!!

結果発表の紙が垂らされると、すぐさま歓声が湧く。北宇治はどこだ？忍は目線を泳がせ、どこに北宇治の名前があるかを探す。

「やった!!やったよ!!!秋川!!!」

横で、吉川が涙声でそんな事を言うのが聞こえる。それに反応した後、忍が再び結果発表の方へと目を向けると……

「……………金だ……………」

金賞 北宇治高校

そう書いてあった。それを見て、忍はようやく笑顔を見せる。

「おい！見たか吉川!!金!!金だつてよ!!!」

「さつきから何回も言つてんじゃない!!アタシ達金賞よ!!金賞!!」
忍が吉川の肩を揺らして興奮気味にそう言うと、吉川も忍の肩を掴み返して、それよりもっと興奮した様子でそう返す。

「なんだよ！やっぱり最高の演奏だったんじゃない!!」

「当たり前でしょ!!何の為にあんなだけ練習したと思つてんのよ!!」

何だか変なテンションになって来た忍に対し、それに引き摺られる様に吉川も声を張り上げてそう返す。

結果発表前の気丈な態度は何処へ行ったのか、忍は感情を全面に押し出して喜んでいた。

『えー、この中より、関西大会に行く学校は……』

そして、ここからだ。大会関係者のアナウンスがホール内に響き渡る。

それに、吉川も中世古もまた祈る様に手を合わせた。忍もこの時ばかりは、緊張の面持ちでいる。

金賞を取ったのは良いが、関西大会に出れる学校はたった3校。そして最初の代表校が発表されると――

わあああああ
!!!!!!

再びの大歓声。その歓声の中心は、北宇治からだった。

真夏の自由人 記念撮影

忍は、思い出していた。

「なー、母ちゃんって何でそんな上手いの？」

「当たり前前じゃない。忍よりもずーっと長い間吹いてるんだから、まだまだ負けないわよっ。」

遙か昔の記憶。まだ自分が幼かった頃の記憶。河川敷でトランプットのお手本を見せられ、母親に羨望の眼差しを向けている自分を。

「じゃあ、もつと練習して上手くなれば、母ちゃんみたいに上手くなるる？」

「さあ、どうかねー？母さんより練習すれば上手くなるかもしれないけど」

「えー？じゃあ、もつと練習しなきゃじゃん」
嫌そうに忍がそう言うのと、忍の母は困った様に笑う。

「それじゃあ、ずっとお母さんが忍より上手いままかなー？もしかしたら凜花にも追い越されちゃうかもねー？」

そして揶揄う様にそう言うと、忍は膨れっ面になる。

「それは嫌。なら、もつと練習する」

幼心から、拗ねる様に忍はそう言い放つ。どうやら負けず嫌いは、この時からの様だ。

「うん、よろしい。でも、1番は音楽を好きになる事。上手いかないからって、トランプットを嫌いになっちゃったりしたら、お母さん悲しんじゃうから」

「そんなん、嫌いになる訳ないじゃん!!」

満面の笑みを浮かべて、すぐさまそう答える忍。

記憶の断片にある、微かな記憶。

その時、母親がどんな表情をしていたのか、忍にはイマイチ思い出せない。

全てが懐かしい。忍が感じているのは、ただそれだけだった。

「秋川ー!!写真ー!!」

青空。茹だる様な暑さの元、忍の耳にそんな言葉が入って来る。声の方向へと顔を向けると、吉川が手を振って忍の事を呼んでいた。それを見て我に返った忍は、皆が集まっている方向へ足を進める。

「はいーポーズ取ってー!」

コンサートホール前。記念写真にと、北宇治の面々がカメラマンに写真を撮られている。

そこでカメラマンが何度か写真を撮影して、具合を確かめる。

「はいーでは北宇治高校の皆さんー!集合写真を撮りまーす!!」

そして、カメラマンの掛け声と共に北宇治の吹部メンバーがゾロゾロと集まり始めた。

「賞状は、誰か持つてー!」

「わ、私は良いよ……」

何だか慌ただしい様子だ。金賞を取ったことによる記念写真。嬉しいと言う気持ちよりも、本当に関西大会に行けるのかと言う、まだ何処か実感の湧いてない部員の方が多かった。

「吉川、なんかポーズ取れば?」

「はあ?、ポーズって……」

隣に並んだ吉川に忍が揶揄う様にそう言うと、吉川は少し考える仕事をする。

「両手を広げて、喜びを表すとか……?」

「弱い。弱いよ吉川……!!」

吉川がありきたりな回答をすると、神妙な顔で忍はそう返した。それに吉川は不服そうな顔になる。

「……じゃあ、アンタはどんなポーズ取るのよ?」

「もちろん、1番目立つポーズ。……吉川、写真で1番目立つのつて、1番高い場所に居る奴なんよ」

何か企む様な笑みを浮かべ、忍は吉川にそう言い放つ。

「それで吉川、良い案があるんだけど……」

そして、続けて忍は吉川に対し耳打ちをし始めた。

「こつち見てー！何か、ポーズ取ってー！」

カメラマンがそう声をかけると、忍と吉川はアイコンタクトをして、突然忍がしゃがみ込む。そしてすぐさま吉川が忍の肩に吉川が足をかけると、タイミング良く忍は立ち上がる。

「はーいー！」

そして、カメラマンのその掛け声と共に、写真が撮られる。

皆、一様に喜びを表すポーズを取っている。

しかし、その中で一つ。異様に存在感を放っている二人組が存在した。

撮られた写真には、忍が吉川の事を肩車し、その吉川が両手を広げてポーズを取っている、明らかにふざけているとしか言いようが無い写真が撮られていたのだ。

確かに目立っては居るが、何というか、ベクトルが振り切っている。

もちろん、この後松本先生に叱られたのは言うまでもない。

「次この様な事したら、承知しないからな!!」

「す、すみません……」

「すみませんっす」

長々と松本先生の説教を受け、ようやく解放される忍と吉川。

吉川は反省していると言った感じだが、忍はあまりその色を見せない様だ。

「……アンタのせいよ」

「吉川だって、ノリノリだったじゃん」

松本先生が去ると、吉川は反省してる様子を崩して、ジトツとした目線を忍に向けて恨み節を言う。

それに対し、忍はいつも通り軽くそう返した。

「兄ちゃん!!」

すると、遠くの方から聞き慣れた声が聞こえて来る。忍と吉川もその方向に顔を向けると、手を振ってこっちに向かって来ている凜花とさやかの姿が確認出来た。

「凄かったねー!!北宇治の演奏!!」

凜花が近寄ると、興奮を隠し切れない様子で、そんな感想をくれた。

「つたりめーだろ。この勢いで関西大会も一撃撃破よ」

「大会を撃破してどーすんのよ」

適当な事を抜かす忍に対し、すぐさま吉川がツツコミを入れる。

「あ、優子さん!-こんにちはー!」

そして、凜花は続けて吉川に対し、元気に挨拶をする。

「こんにちは、凜花ちゃん。今日来てたんだねー」

それに吉川も、笑顔でそう返した。

「し、忍先輩!!格好良かったですー!」

すると、今度はさやかが熱い視線を向けて忍にそう言う。

「おー、さやかちゃんも来てたんだねー。そりゃ光栄な事ですなー」

それに対し、忍も満更でも無さそうな表情でそう返す。

その光景を見て、吉川は一瞬ムスツとした様な顔になった。

「何?アンタの知り合い?」

しかし、すぐさまいつも通りの表情に戻り、吉川は忍に対しそう聞く。

「タツキーの妹さん。あがた祭りで知り合ったんだよ」

それに対し、忍もそう返すと、「……ふうん」と、吉川はそれだけ言った。どうやら「そう言う関係」では無さそうだと、吉川はホツとした

様な表情になる。

「それより、タツキーの方行つてあげた方がいいんじゃない？」
すると、忍が滝野が居る方を指差しながらさやかに対しそう言う。
それにさやかはブンブンと勢い良く首を横に振った。

「兄の事はどうでも良いんです!!私、本つ当に感動しました!!忍先輩の吹く姿、写真に収められなかったのがすっごい残念です!!」

目をこれでもかと言うくらい輝かせて、さやかは忍の手を取って無茶苦茶距離を詰めてそう言う。対して忍は満更でも無さそうに。凜花は少し困った様に笑い、そして吉川は、思い切り顔を引き攣らせていた。

「もう、凄いです!!この世にこんなカッコいい人が居ていいのかわつてくらい素敵で……あ、もちろん普段の先輩も凄くカッコいいですよ!?!でも、今日の先輩は特別って言うか……」

そして、次々に発射されるマシンガンの様に、さやかは忍の魅力について本人の前で嬉々として語る。なんともメンタルの強い事だ。

何だか既視感があるなど、忍は隣にいるデカいリボンを付けた少女をチラリと見て、さやかに対しそんな感想を抱いた。

「こちら、さやかちゃん。あんまり興奮しちゃダメだよー?」

「ああん!忍せんぱーい!」
すると、そんな光景を見かねて、遂に凜花はさやかの首根つこを掴み、無理矢理忍から引つ剥がす。

そして、吉川にだけわかる様に凜花はウインクをした。どうやら2歳も年下の後輩に気を使わせてしまった様だ。それに吉川は少し申し訳なさそうな顔になる。

「もー、ほつとくとすぐ暴走するんだから……とにかく兄ちゃん、優子さん、関西大会進出、おめでとうございます」

凜花は一步引くと、改めて2人に対し祝福の言葉を述べ、一礼する。

「おう、サンキュー」

「ふふっ、ありがと」

それに対し、吉川と忍も一言、感謝の言葉を述べる。

「ほら、さやかちゃんも」

「うう……おめでとうございますう……」

そして、忍から引つ剥がされて拗ね気味ではあるが、さやかも渋々と言っただけでそう言った。

「はいー！みんな集まってー!!」

すると、小笠原から集合するよう号令が掛かる。

「あ、じゃあ、私たちもう行きますね。兄ちゃん、ちゃんとしなきゃダメだよ!」

「?、何を?」

「なんでも!じゃあ、失礼します!!」

最後になんだか含みのある言葉を残すと、凜花は再びさやかの首根っこを掴んでその場から離れて行った。

「……ホントに、出来た妹さんね」

「だろ?、俺もそう思う」

2人が人混みの影に消えると、吉川はしみじみとそう言う。それに忍も自慢げにそう返した。

「……はあ、なんか、意外なところにライバルが現れたって感じ」

「?、何が?」

すると、唐突にそんな事を言い出した吉川に対し、忍は首を傾げてそう聞く。

「何でも。それより、また遅れて松本先生に怒られる前に行くわよ」
しかし、それを教えてもらえないはずもなく、吉川は忍の手を取って引つ張るように集合場所へと向かって行った。

唯一のオーボエ

「ただいまー」

「あ、おかえり。兄ちゃん」

時刻は夕方。忍が家に帰って来たのはコンクールが終わってしばらくした後だった。

「遅かったねー。何？優子さんともデートしてたの？」

「違う違う。一回学校帰って、今後の予定を言われたのと、また練習」

「あー、関西大会出たからねえー。またしても練習漬けだ」

ご愁傷様と言う風に、凜花はそう言う。関西大会出場を決めたことにより、学校に一旦戻り新たな予定表が配られた。

その予定表は、空白が目立つ物だった。何も言わなくても練習。と言う事なのだろう。意識の変化は、まさに劇的だ。

「あ、凜花。8月の17日から3日間は、俺居ないから」

すると、忍の口からそんな言葉が出る。

「え、何で？」

「合宿。近くの施設を借りてやるんだってさ」

そして、その予定の中には合宿も含まれていた。夏休み中の3日間、集中的に音楽をする。関西大会に向けての詰めと言う事だ。

「だからご飯とかは親父と上手くやりくりしてくれい」

「了解。おとーさんにも言っときなよー？」

「うい」

そんなやり取りをすると、忍はリビングに座り、テレビのリモコンをいじる。

『では聞いていただきましょう。明静工科高等学校の演奏です』

すると、あるチャンネルで関西大会に出た一校の演奏が放映されていた。

明静工科高校。全国金賞常連の、吹奏楽の強豪校だ。

「あ、明静だ。って事は、”まさつち”もいるのかな？」
それを見て、凜花が反応する。

「うん、こん中に居るんじゃない？『今年も俺は1stや』って、自信満々に電話で言ってたし」

頬杖をつきながら、テレビの音量を少し上げて忍はそう言う。どうやらこの高校に知り合いでも居る様だ。

「……あ、今年明静、『俗謡』やるんだ」

そしてテレビから演奏が流れ始めると、感心した様に忍はそう言う。

「うっわ、明静の十八番じゃん。こりゃ、北宇治も厳しーんじゃないのー？」

「さあね。なる様になるんじゃない？うっわ、相変わらずカッコいい曲だなー」

椰揄う様にそう言う凜花に対し、飄々と返す忍。それよりも、この高校が出す音に夢中の様だ。

「あ、まさつち居た」

そして途中、カメラに抜かれた1人のトランペット奏者を指差して、忍はそう呟いた。

「ふああああ………」

朝に弱い忍にとって、夏休みの練習の開始時間というのは、あまり嬉しいものではない。

しかし、今日はそんな練習の開始時間よりも、かなり早めに来ていた。

「……何でこんな早く呼び出すんだよ………」

吉川に呼び出されたのだ。『明日、6時までには学校に来なさい』。端的な、それでいて何だか圧を感じる様な、そんなメールが昨晚来た。

朝に激弱な忍にとってこの時間に起きると言うのは、苦行に近い。しかし無視すると面倒な事になるのは忍にもわかっていてるので、こうして渋々登校している。

校門の前の坂を気怠そうに登っていると、「おーはよっ」と、聞き覚えのある声と同時に、後ろから肩を軽く叩かれた。

「おっす……吉川……元気なこって」

「アンタは相変わらず朝弱いのねえー」

眠い表情のまま忍が挨拶を返すと、吉川は困った様に笑ってそう言う。それに忍は眠い顔から少し顔を顰めた。

「分かってんなら、もうちよつと寝かして欲しい……」

「だーめ。今日は音聴いてもらう為に呼び出したんだから」
しかし、必死の訴えも虚しく、簡単に吉川に却下された。

「つてか、この時間まだ音楽室空いてないでしょ？」

そして、駄々をこねる子供の様な口調で、悪態を吐く様に忍は続けて抗議する。

「大丈夫よ。多分もう”みぞれ”が来てるし」

それに吉川は、何ともない様にそう返す。

「あー、”よろみー”かー。確かにいつも早いよなー。今度、早起きのコツとか、聞いてみよっかな？」

「……あんまり期待した答えは返ってこないと思うけど？」

「……確かに」

苦笑いで吉川がそう言うと、同じく苦笑いで忍もそう返す。

「つてか、みぞれの事そんな呼び方してんの、アンタだけよ？」

「えー？良いと思うんだけどなー。このあだ名」

その後は他愛もないやり取りをしながら、2人は校門を跨いで行った。

「ほらね、もう音出ししてる」

「ええー？まだ6時過ぎたばっかじゃん」

上履きに履き替え、階段を登って行くと、木管楽器の音が聞こえてくる。

この優しくて繊細な音は、オーボエの音だ。

「相変わらず、音は外さないな」

「そうね、みぞれ上手いし」

忍が、遠くで聴こえるそのオーボエの音をそう評価すると、同意する様に吉川もそう言う。

「そんなもって、なんか淡泊」

そしてもう一つ、忍はその音をそう評価する。その言葉を聞いて、吉川は少し顔を顰めた。

「……淡泊って、何よ？」

少し不服そうな声で、吉川はそれだけ言い放つ。

「そのまんまの意味。去年聴いた時は、もつと感情的な演奏してたと思うんだけどねえ……」

そんな吉川の問い掛けに何か考え込む様な表情で、忍はそう返す。やはり、直球すぎる。忖度や鼻息がないのは悪い事ではないが、こゝもバツサリ言い切られると、吉川としては複雑な心境だ。

「吉川はどう思う？」

そして、忍は吉川の方へ顔を向け、このオーボエへの感想を再度求めた。

「……………ノーコメント」

しかし、吉川は難しそうな顔をして、それだけ返した。

「おはよー。みぞれ」

「おっすー。よろみー」

音楽室に入ると、教室にいたのは1人の少女だった。それを聞いて一旦オーボエの演奏を止めると、少女は忍と吉川の方へゆっくりと顔

を向ける。

「……………おはよう」

鎧塚みぞれ。それが少女の名前だ。細身の体にしなやかな髪。白い肌は、どこか儂げな雰囲気纏っている。

2年生である彼女は、北宇治唯一のオーボエ担当だ。三日月の舞のオーボエソロも、彼女が吹いている。

そんな彼女に、すぐさま吉川は近づいていった。

「相変わらず、みぞれは早いわねー」

「……………うん」

「ソロのところ練習してたの?」

「……………うん」

「へー。オーボエ、みぞれだけだもんねー」

「……………うん」

何だか、吉川の方が一方的に喋ってる感じだ。しかし、それで良いのか、2人ともやりにくそうにしてる感じは無い。

「……………珍しいね」

すると、鎧塚が唐突にそんな事を言い出した。

「?、何が?」

それに対し、吉川が首を傾げてそう聞き返す。

「……………アツキー。いつもギリギリだから」

そして、顔を楽譜の方へ向けながら、鎧塚はそう言い放った。

「いつもとは失礼な。あんまり遅刻はした事無いじゃん」

「それがダメだって言ってるのよ」

不満げにそう言う忍に対し、吉川がすぐさまツツコミを入れた。

「ってか、何でよろみーそんな早く来れんの?お婆ちゃんより起きるの早いんじゃない?」

そして、今度は忍が逆に鎧塚に対してそう言う。

「……………私は、朝起きれるから……………」

「つかー！、羨ましいー！その体質、半分でいいからわたくしに分けてくれませんかのおう？」

「体質のせいにしてんじゃ無いわよ!!」

「いでっ!!」

朝起きれないのを体質のせいにする忍に対し、吉川のタイキックが炸裂した。いつも通りである。

「……………それで、2人は何しに来たの？」

すると、鎧塚はあいも変わらず楽譜と睨めっこしながら、そう聞いてくる。

「練習よ。みぞれと同じ。アタシ達外で吹いて来るから、みぞれも頑張っつてね！」

「……………うん」

吉川の激励に対し、鎧塚は一言、それだけ返した。そして、吉川と忍は外で吹く為に椅子と楽譜台を持って教室を出ようとする。

「あ、そうだ。よろみー」

すると、思い出したかの様に忍は鎧塚に向かってそう言う。

「……………何？」

それを聞いて、鎧塚は視線を楽譜から忍にゆっくりと移す。

「よろみーつて、”まだ”オーボエ好き？」

そして、忍は真っ直ぐ、見据える様に鎧塚に対してそう尋ねた。

鎧塚は一瞬俯き、再び顔を譜面に向け直すと、

「……………分かんない」

耳をすまさないければ聞き取れない様な、か細い声でそれだけ言つて、再びオーボエを吹き始めた。

傘木希美

「……………どう？」

「どうって、何が？」

屋上、朝早くから個人練のための準備をしていると、吉川がそんな事を聞いてくる。

「みぞれよ、みぞれ。アンタにはどう見える？」

「どう見えるって……………いつも通りに見えたけど？」

何を言いたいのかわからない吉川に対し、首を傾げながら忍はそう返した。

「……………ホントに？」

繰り返し吉川がそう聞くと、忍は少し怪しむ様な顔になる。いつもなら物事をハッキリと伝えるのだが、今の吉川は何やら迷っている様に忍には映った。

「……………何がどう見えるのか言わないと分かんない。どしたの吉川？ここ最近なんか考えてる事多いけど」

そしてここ最近、吉川は鎧塚を気に掛ける事が多くなっていた。確かに吉川と鎧塚は同じ南中出身であるし、仲が良い事も忍は知っている。

しかし、それに輪を掛けるように、最近は鎧塚の事を過剰とも言えるほど気に掛けている。

「……………案外鈍いのね。良いわ。どうせバレるし、教えてあげる」

そして、複雑そうな面持ちで吉川は忍の方を見ると、言いにくそうに口を開いた。

「……………希美が、部活に戻りたがってるらしいわ」

「希美？……………って、”かさみー”の事？」

忍がそう聞き返すと、吉川はコクリと一つ頷く。

「おー、いいじゃん。かさみー、フルート好きだったし」

忍は少し嬉しそうにそう言う。それに反比例する様に、吉川はさら

に表情を曇らせた。

『お願い!!アツキーが説得すれば、あの先輩達も変わると思うの!!!』

吉川は、思い出していた。去年、3年生とは別の教室で練習していた自分達に何度も何度も来ては、その度に忍に頭を下げて必死にそう懇願していた傘木の姿を。

本人に他意はない事は吉川もはつきりと分かっているが、それでも忍が一度部活から離れる一因を作ったのは、紛れもなく彼女だ。だからこそ、複雑な心境にもなる。

「……アンタは、希美に対して何も思わないの?」

吉川は、暗い声で忍に対しそう聞く。

「思わないのって、何が?」

しかし、忍は尚も首を傾げてそう聞き返した。忍自身、傘木に対して何か恨みがある訳でもない。戻りたければ戻ればいいじゃないか。そんな楽天的な考えであった。

そんな能天気な忍に対し、吉川は軽くため息をつく。

「………何でもない。希美、みぞれと仲良かったでしょ?」

そして、話題を鎧塚の方へと戻した。

「あー、確かに。どっちかって言うと、よろみーの方がかきみーにベツタリだった気が……」

対して忍も、思い出したかのように言う。

「そこは分かるのね。……まあ、それが関係あるって感じよ」

「……ますます分かんなくなってきたんだけど」

深刻そうな表情でそう言う吉川に対し、忍は怪訝そうな表情に変わり、そう言い放った。

「……皆んな、アンタみたいに強い人間じゃ無いの。……とにかく、この事、みぞれに言っちゃ絶対ダメだからね?」

「そりゃ、またなんで……」

「何でも。分かった？」

忍の疑問を被せる様に、吉川は圧をかける様にそう言う。何だか只事ではない雰囲気を感じ取った忍は、黙って頷く事しか出来なかった。

「では、今日も練習を始めていきますが、今日は皆さんに一人、紹介したい人がいます」

いつもの様に合奏練習が始まる前、滝先生は唐突にそう言う。とある部員から「おー、まさか、婚約者？」などと小声で冷やかしの聞こえて来る。

「どうぞ」

滝先生がそう言うと、音楽室の扉が勢い良く開いた。

「失礼しまーす！」

入って来たのは、滝先生と同じぐらいの年齢に見える男性。短パンに派手目のシャツと、随分とラフな格好だ。

「彼はこの学校のOBで、パーカッションのプロです」

「プロ!？」

「マジで!？」

滝先生がそう説明すると、案の定パーカスから興奮気味の声が入る。

「夏休みの間、指導してもらおう事になりました」

「橋本正博と言います。どうぞ、よろしく!」

そして、橋本と名乗った男性が一礼する。

「あだ名は橋もつちゃん。こう見えても滝君とは大学で同期です！滝君のことで知りたい事があれば、どんどん聞きに来てね!!」

なんともキャラの濃い人物の登場に、部員達は少々面を喰らう。しかし、明るい人柄で取っ付き易そうではあった。

「あれ、反応薄いなー」

「余計な事言わなくていいですよ」

そんな自由な橋本先生に、滝先生から注意が入る。しかし、そんな事は御構い無しにと、橋本先生は喋り続ける。

「滝君モテるでしょー。女子にキャーキャー言われてんじやないの？」

「はい、吹奏楽部以外の女子には」

明るくそう聞く橋本先生に対し、部員の1人が苦笑いでそう返すと。音楽室に笑いが起こった。

「あつはは！吹部女子には人気無いかー！ごめんなー、滝君が口悪いのは昔から——っ痛っだ!!」

「余計な事は言わなくて良いと言いましたよ」

他人の個人情報をベラベラと喋る橋本先生に対し、滝先生は橋本先生の足を踏んづけて口を塞ぐ。

それにまた、笑いが起こった。

「良いね、橋もっちゃん」

「何でもうあだ名で呼んでんのよ」

パート練習。忍が嬉しそうにそう言うと、すぐさま吉川からツッコミが入る。

「どうやら忍はあの先生の事が大層気に入ったらしい。」

「なんか、パーカス！って感じの人じゃない？ナツクル先輩をそのまんま大人にした様な……」

「あー、それは分かるかも」

忍がそう言うと、今度は中世古が同意して来る。正に打楽器担当のイメージ通りと言うのが、橋本先生への第一印象だった。

あの格好でドラムを叩かれても、なんら違和感はない。

「それにー、あの先生と仲良くしたら、滝先生の隠された情報も手に入るかもよー？」

「それ手に入れて、アツキーはどうすんだよ」

面白い様にそう言う忍に対し、またまた滝野がツツコミを入れる。

「んなもん、面白そうだから。滝先生の好きな食べ物とかー。滝先生の趣味とかー。滝先生の好きな女の子のタイプとかまで聞けちやったりして」

忍のその言葉に、高坂が一瞬反応した。

「うっわ、まるで恋する乙女じゃん。……アツキー、もしかしてそう言う趣味？」

「ああ……バレてしまったか……!!……因みに、タツキーもターゲットよん」

そして、いやらしい目線をわざと滝野に送ると、「キモっ！」と、滝野からそれだけ返ってきた。

「アツキー、ちよつと良い?」

するとドア付近、教室の外からそんな声が聞こえた。忍もゆつくりとその声の方向へ顔を向けると、そこに居たのは中川だった。

「お、なつきちじゃん。どしたの?」

何だか妙に真剣な顔つきだ。しかし、忍はいつも通りにひょうきんにそう返す。

「ちよつと相談があるんだけど、今いい?」

「長くなりそう?」

「それは……アツキー次第……かな?」

忍の問い掛けに対し、何だか曖昧な回答をする中川。いつもへらりとしている彼女が真剣な顔つきになっているのを見て、忍も少し考えを。そしてパートナーである中世古にアイコンタクトを送ると、彼女も一つ頷いた。

「まあ、良いよ?……で、何の用でさ?」

そして、薄く笑って、忍はそう言う。

「ありがと。じゃあ……」

それに軽く礼を言うと、中川はその場を譲る様に少しズレる。

そしてそこに来る様にそのドアの死角から現れたのは……

「傘木……!」

「希美ちゃん!」

黒髪を後ろでまとめた少女。上履きの色から、2年生だと言うことが分かる。

その少女の登場に、皆驚いていた。中世古も、笠野も、滝野も。

「何で希美が……!!」

そして、その中で一番衝撃を受けていたのは、吉川だった。

「ありや、かきみーじゃん。久しぶりー」

しかし、忍はいつも通りだ。どこか気の抜ける声を出してその少女、傘木希美に対して、軽く挨拶をした。

許可

傘木希美にとって、秋川忍とは。

「秋川君はさ、何でトランペット吹いてるの？」

「？、何でって、好きだから？」

互いに仲良くなるのには、時間は掛からなかった。入部して1週間も経たない内に、気さくに話し合う様な関係になっていった。

「傘木さんも、フルート好きだから吹いてんじゃないの？」

「もちろん！アタシはこの北宇治で絶対全国行くの！！」

まだ北宇治の吹部の現実を目の当たりにする前、一年の頃。机の上に座りながら自前のフルートを自信満々に見せつけ、鼻高々に宣言する傘木。

それを見て、忍も楽しそうな笑顔になる。

「おー、やる気満々ですな。こりや、将来の部長も決まったかなー？」

「あははっ、ないない。アタシ、そんな器じゃないから。それにまだここに入学したばっかの一年じゃん」

何かと早とちりな忍の発言に、顔の前で否定する様に手を振ってそう返す傘木。

「ノンノン、俺には分かるのですよ。近い未来、傘木希美は北宇治の吹部に必要不可欠な人材になるのだと」

「あっははー！何それー？嘘くさっ！」

わざとらしく忍がそう言うと、笑いながら傘木はそう返す。

両者とも明るい性格だ。相性で言えば悪いわけが無い。

そして、この時に秋川忍の代名詞とも言えるあだ名が付けられた。

「なら、お互い仲良くした方が良いねー。……親しみを込めて、これから”アツキー”って呼んでもいいかな？」

「もちろん。じゃあ傘木さんは……えーつと、”かさみー”でいいか？」

「いいねー！それ!!カワイイ!!」

これが、忍と傘木の距離感。

傘木希美にとつて秋川忍は、唯の吹部の仲間なのか、それとも友達なのか、あるいは……

「お願い！アタシを、吹部に復帰させて下さい!!」

深く頭を下げて、忍に対しそう言う傘木。

「はあ？何で俺？」

して忍の方は、訳が分からないと言う風に、困った表情でそう返す。しかし忍の反応も正しい。彼はこの部活の部長でも副部長でも、ましてやパトリーダーでも無い。そんな一部員に、何故わざわざこんな事を聞いて来るのか。

すると、傘木は頭を下げたまま、理由を述べる。

「アツキーの許可が欲しいの！……アタシが原因で一度アツキーが去って行った事は分かってる。……だから！もう一度部活に戻る時は、絶対にアツキーに許可を取らなきゃって」

「じゃあ何で、今の時期なのよ？」

すると、そんな傘木の言葉を遮る様に、確かな苛立ちを孕んだ声が教室に響き渡る。皆、その方向に顔を向ける。

「……………優子ちゃん……………」

中世古が複雑そうな表情で、吉川に対してそう言った。

「今、北宇治は関西大会に向けて大事な時期なの。そんな中、一度辞めた部員が戻って来たら、どうなるか分からない訳？」

「……………」

吉川の突き刺す様な問い掛けに、傘木と中川は黙りこくる。それに對し忍は、軽くため息をついた。

「何イラついてんだよ吉川」

「イラついてない!!」

諭す様にそう言う忍とは逆に、ムキになる吉川。

吉川が感じているのは、確かな憤りだった。部活に戻るのには構わな
いが、何事もタイミングと言うものがある。自分が今部活に戻れば、
部員達にどんな影響が出るか。それを傘木は考えられていない。

吉川が苛ついてしている原因は、考えも無しに部活に戻ろうとする傘木
の計画性の無さにあった。

「……………まあ、良いんじゃない?別に、俺は戻っても良いと思うけ
ど」

しかし忍はそんな事を考えてないのか、気の抜けた声でそう言う。
そんな軽い感じの忍に対し、中川は少しムツとした。

「ちよつとアツキー。希美は本気で」

「かさみーはさ、まだフルート好き?」

そして中川の言葉を上から被せる様に、忍はそう聞く。
尚も頭を下げ続けている傘木の瞳が、少し揺れた。

「……………うん」

一言。捻り出す様に、傘木はそれだけ返す。

「じゃあ、戻れば良いじゃん。それだけでも、戻ってくる価値はある
と俺は思うよ?」

さも当たり前かのように、忍はそう言い放つ。

秋川忍は、部内の人間関係に聡い方では無い。傘木が部活に戻りた
いならば、勝手に戻ればいいでは無いか。本人がそうしたいと考えて
るならば、周りなんて気にする事は無いと忍は考えている。

そんな忍の言葉に、ようやく傘木は顔を上げる。

「……………ありがと。アツキー」

そして泣きそうな声で、傘木は一言、礼を言った。中川もホツとし
た様な表情を浮かべている。

しかし、吉川はどこか納得の行っていない表情をしていた。

「じゃあ、この話終わり。一年生共が困り切った顔してるから、練習に戻るよん」

そしていつも通り飄々と、軽い感じで、忍はそれだけ言い放った。

「結局、かきみーはまだ部活に戻らないの？」

「うん、あすか先輩の許可も貰うまでは、戻らないって決めてるらしいわね」

数日後、忍が練習終わりにいつもの様にトランプペットの手入れをしながらそう聞くと、同じく手入れをしていた吉川からそう返ってくる。

しかしあれから、傘木が部活に復帰する事は無かった。

理由は、副部長である田中あすかからの許可が出ないからだ。

傘木の中では忍の他にもう1人、部活復帰の許可を貰うと決めている人物がいた。

それが、田中あすか。

忍はあっさりとは復帰の許可を出したが、田中はのらりくらりと傘木の事を躲す様に、彼女に対して復帰の許可を出さなかったのだ。

「てか、戻りたいなら勝手に戻れば良いのに。何で俺とあすか先輩に許可なんか取りに行くんかね」

「女の子はそう言うところ複雑なの。……現に、アタシはどっちかって言うのと反対だし」

忍の疑問に吉川がそう返すと、忍は少し微妙そうな表情に変わった。

「てか、何で吉川は反対なの？確かに去年3年生と揉めて辞めて行ったのは事実だけど、もう昔のことだし良いんじゃない？」

前に吉川が言った通り、今は関西大会に向けての大事な時期だ。傘木が今復帰してもコンクール云々とはならない事は忍も分かっていた。

る。

『アタシ、コンクールには出れなくていいの！今の北宇治をサポートしたいって思ってるから』

自分に頭を下げて来ていたあの日。忍はその言葉を本人から聞いていた。彼女は今年のコンクールに出るつもりやらは無い。なら、サポートの部員が増える事もあり、傘木を部活に復帰させたくない理由は無いと思うのだが。

「……別に理由があんのよ。……この前、みぞれの音について希美が関係してるって言ったでしょ？」

「うん。で、それが？」

深刻そうにそう言う吉川に対し、忍は首を傾げる。

「ほんつと鈍いわね。……まあ、アンタが気にする様な事じゃ無いわ。とにかく、希美のことに関しては一旦忘れなさい」

「そんな言い方されたら、ますます気になんじやん」

本当の理由を吉川は知っているのか、言葉を濁す様な態度を取る。対して忍はそこまで言われて気にならない訳がなく、不服そうな表情になった。



すると、何処からか楽器を吹く音が聞こえてくる。フルートの音。
「あれ、これって……」

忍がそう呟く。コンクールの曲では無い。その音色は美しく、それでいて儂げな旋律。

だったんじん
韃靼人の踊り。

元々はロシアの歌劇、『イーゴリ公』の劇中歌であるこの曲は、美しい旋律が特徴の曲だ。

「……………希美ね」

一言、吉川が顔を顰めながらそう言い放つ。
しかし、その表情とは裏腹に演奏は上手い。儂げな旋律を、十二分に表現出来ている。

「……でも、何でこの曲？」

恐らく外で吹いてるのだろう。窓の外を見ながら、忍はそう呟く。

「アタシ達の中学最後のコンクール曲なのよ」

言い捨てる様に、吉川は不機嫌な表情を隠そうともせずになんかそう言う。

「吉川のとって、南中？……あ、確かかさみーと同じだったか」

忍がそう問い掛けると、吉川は黙って頷く。

「……はあ……全く、何考えてんだか」

田中に対するアピールでもしているのだろうか？しかし、吉川はそんな傘木の出す音に対して、眉間に手を当てて困った様にそう言い放った。

不安材料

「秋川、今日練習終わったら暇でしょ？」

翌日、8月10日。早朝。朝とは言え少し汗ばむほどに暑い中、吉川が忍にそう尋ねる。

「……何でもう決めてんのよ」

前にもこんな事があったなと思いつつ、寝ぼけ眼のまま忍は遅れてツッコみを返した。

「この事を話す為に今日も早くから呼び出したのよ。何？もう予定入ってんの？滝野と一緒に行くとか？」

明らかかなデートの誘いだが、吉川はいつも通りだ。

わざわざ今日も朝早くから呼び出し、予定が無いかを聞いてくると言う事は、そう言う事なのだろう。

なら、もうちよつと恥ずかしがるとか乙女な部分を見せてもいいのではないだろうか？

「いや、まだ誘われて無いけど……」

そんな気持ちさが表情にも出てるのか、微妙な顔つきで忍はそう返す。

宇治川花火大会。

あがた祭りに続く、宇治の夏のイベントだ。毎年8月のこの日に開催され、家族連れや友達同士。そしてカップル同士で盛り上がる。

吉川の性格上、こう言う事で緊張しない事は忍も何となく分かっていたが、こうもケロッとしていると、なんだか悔しい気持ちも沸いてくる。

「吉川だって、今日こそ香織先輩と行くんじゃないの？あがた祭りじゃフラれてたし」

なので忍は吉川がムキになる要素を持ち出し、小馬鹿にする様にする言う。

すると、吉川は案の定ムツとした様な表情に変わった。

「香織先輩は今関係ないでしょ？アタシはアンタに今日暇か聞いてんの。で、どうなのよ？」

しかし顔は渋いが、噛み付いてくる様子は無い。そんな彼女に、忍は意外そうな表情になる。

「そりゃ、暇だけど……」

「じゃあ良かった。なら、部活終わったら6時に宇治駅集合ね」

そして薄く笑うと、まるで当たり前前かのように、吉川は忍にそう言い放つ。

「う、うん。分かった」

本当にいつも通りだ。

しかもなんだか妙に落ち着いている。そんな吉川に困惑しつつも、忍は素直に吉川の言葉に頷いた。

「おーす、よろみー」

「おはよ、みぞれ。今日も早いわねー」

まだ早朝の音楽室に入ると、いつも通り鎧塚がいの一歩に教室に来ていて、音出しをやっていた。

「……………おはよう。……………今日も2人？」

相変わらず、全く感情の無い声色で、鎧塚は挨拶を返す。

「そーそー。聞いてよよろみー。吉川つてばまた早朝に呼び出すんよー？これって嫌がらせされてるって事よなー？」

「……………そうなの？優子？」

出会って5秒で愚痴る様に忍がそう言うと、鎧塚は視線を吉川に向けている。

「んな訳ないでしょー！アンタもみぞれが真に受ける様な事言わないの！！」

「いでっー」

そして、吉川の肩パンが忍の左肩にヒットした。

「それで、みぞれ。パートの先輩とかから、”復帰の話”とか聞いている？」

すると、吉川は少し真剣な表情になって、鎧塚に対して問い掛ける。

少し暈した様な問い掛け方だ。

「……何の話？」

対して鎧塚はなんの話か分からず、無表情のまま少し首を傾げてそう返す。

「いや、……そっか、どうしよっかな……」

その反応を見て、吉川は少し考える様に顎に手を当てた。

傘木希美が部活に復帰したがっている。

その情報は、どうやらまだ鎧塚の耳には届いてないらしい。

すると、再び音楽室の扉が開く音がした。入って来たのは黄前と高坂の2人。どうやら同じく朝練に来たようだ。

「おー、おっすー。2人とも早いねー」

「おはようございます」

「はようございます」

忍が軽く挨拶をすると、2人からも挨拶が返ってくる。

そして準備の為に、それぞれの席に行き楽譜やら楽器やらの用意をする。その間、お互いに会話をすることはなく、なんだか気まずそうな空気が流れた。

「………優子」

すると、そんな沈黙を破って、鎧塚が声を出す。それに吉川も「ん？」と返すと、誰もが予想だにしない言葉を鎧塚は続けて言い放った。

「仲悪いの？その2人と」

「え!？」

「え、!？」

その言葉に驚いたりアクションを取ったのは、吉川と黄前だった。高坂は相変わらず鉄仮面を貼り付け、忍は心底面白がる様な表情になっている。

「ええ、えーつとー……」

案の定、黄前は困惑していた。こう言う時は当人でない人間が一番

気まずい思いをする。

「……ふっ、そうなんですか？先輩？」

そして高坂が挑発するようにそう言うと、

「……さあー、どうなんだろうねー。後輩？」

吉川も含みのある笑顔でそう返した。

「ええーつとー。仲良いって言うか、悪いって言うかー」

黄前はなんとかこの空気をどうにかしようとしてるのか、あたふたと言葉を選ぼうとしている。

「そうねー。毎日毎日トランプペットパートでは、あの2人による熾烈な闘いが繰り広げられているのですよー」

「ちよつと!!アツキー先輩!!!」

しかし、空気の読めない男がこの中に1人。

ケラケラと笑って忍がそう言うと、黄前がさらにあたふたした様子でそう返した。

「だから、今も2人の中では怨嗟の気持ちが沸々と沸いてるんだと思うよー」

「もー！テキトーな事言わないでください!!」

そして、ベラベラと出まかせを躊躇なく、惜しげもなく言い放つ忍。もつと場を掻き乱してどうするのか。黄前はもう困り切った顔になっている。

「ふ、普通！、普通です!!アツキー先輩の言った事は全部テキトーで、普通の先輩後輩の関係って言うか……」

「………ふーん」

黄前が必死にフォローする様にそう言うと、興味なさげに鎧塚はそれだけ返す。自分から聞いておいてこの反応。どうやら彼女も人を振り回すタイプの人間らしい。

「じ、じゃあ、ちよつと外で練習してきますー！行こー」

そして遂にこの空気に耐えられなくなった黄前は、高坂の肩を持つてそそくさと音楽室から出ようとする。

「あれだけ色々あったのに、ホント、みぞれは部内の人間関係に疎い

よね」

対して吉川は少し困った様に笑って、鎧塚にそう言う。

「……だって、興味無い」

「まあ、それがみぞれの良いところなんだけどさ」

それは自身の音の為だろうか。ともかく、この鎧塚みぞれと言う少女は自分に関係のない人間にあまり興味を持たないタイプな様だ。

吉川とは似ても似つかない性格。しかし自分の持つていない強さや魅力というものに、人間は惹かれる。吉川が鎧塚を気に掛ける理由は、そこにあった。

そして吉川は、鎧塚の耳へ顔を近づけると、周りに聞こえない声で耳打ちをした。

「……さっきの話、希美の事なんだけど」

吉川のその言葉に、鎧塚の瞳が揺れる。

「希美……」

「うん……希美がね、部活に戻りたいって言って来たらしいの」

続けての吉川の言葉に、鎧塚はいつもの無表情から、何かに怯える様な表情に変わる。

「……………そう……」

そして落胆する様に視線を落とすと、鎧塚はそれだけ言い放つ。

吉川が傘木の部活復帰に反対な理由が、少しずつ見えはじめて来た。

付き合う？

北宇治高校吹奏楽部のオーボエは、たった一人しか居ない。それが、鎧塚みぞれ。

繊細でほんの少しの息の強弱で音色が変わってしまうその楽器と同じく、鎧塚の心もまた繊細であった。

傘木希美と鎧塚みぞれ。

この2人は、南中学校と言う同じ中学の出身。学年も同じ、そして高校も同じ。この2人の関係は、複雑怪奇と言っても差し支えない。

「よろみーはさー。ここのオーボエソロどうやって吹きたいの？」

「……………分かんない」

合奏練習の休憩中、忍がいつも通り鎧塚に対してそう聞くと、なんとも無機質な返事が返ってくる。

「分かんないかー、まあ上手いんだけどさー。今のよろみーって、なんか楽譜通りなんだよねー。もっところ、”私の音を聞け!”みたいな感じで吹かないのー？」

「……………それも、分かんない」

「分かんないかー」

少し俯き気味でそう返す鎧塚に対し、困った様にそう言う忍。

秋川忍にとって鎧塚みぞれは、木管随一の表現力の持ち主だと思っていた。

儂く繊細な音を奏でるオーボエにおいて、その存在感は部内でも群を抜いている。

演奏技術もさる事ながら、感情を音に乗せることが非常に上手い。

正に”情”。そういう意味では、鎧塚の音楽性は限りなく忍に近いものだったのだ。

そう、去年までは。

「じゃあよろみーはさー、今の演奏で満足してる？」

「……………分かんない」

「分かんないかー」

だからこそ、鎧塚にシンパシーみたいなものを感じているのだろう。こうして忍は鎧塚に構っている。

「……………じゃあ、質問変える。今、この人に自分の音を聴かせたいとか、そういう人は居る？」

そして忍が続けざまにそう質問すると、一瞬鎧塚の瞳が揺れた。

「……………ここには、居ない……………」

ここには居ない。

それは一体、どういう意味なのか、誰を指しているものなのだろうか。その時の忍にはそれが分からなかった。

しかし、”聴かせたい相手が居る”という事は、忍にも読み取れた。

「……………そつか、でも聴かせたい人が居るなら、その人が聴く時の為に更に練習しなきゃねー」

軽い口調で忍がそう言うと、鎧塚は視線を下げて無表情の顔を少し歪ませる。

「……………アツキーは？」

そして俯いた表情のまま、今度は鎧塚からそう聞いて来る。

「何が？」

「聴かせたい相手。居るの？」

そして今度は真っ直ぐ忍の目を見据える様に、鎧塚はそう聞いてくる。

「もちろん。って言うか、俺の音を全ての人間に聴かせたいと思ってるよん」

当たり前。それが自分の仕事だと言わんばかりに、忍はそう言い放つ。そんな回答に、鎧塚は「……………そう」と、短くそれだけ返し、再び俯いてしまった。

「はい、今日はここまでです。各自、出された課題をクリアするよう

にして下さい」

「はい!!」

そして、今日の合奏練習が終わる。滝先生が音楽室から出て行く
と、皆この後の予定について話し始めた。

「じゃあ、アタシ六地藏の駅で待つてるね」

「姫先輩! 浴衣姿楽しみしてます!!」

花火大会当日と言うこともあってか、何やら音楽室も浮ついた雰囲気
になっている。

「あのー、アッキー先輩?、今日予定あたりってー」

すると、おずおずと忍に話しかける生徒が一人。夏服のリボンから
察するに一年生、確かサックスパートの子だ。

「残念。先約がおりますので」

「や、やっぱりー!」

瞬殺され、ガックシと肩を落としながら去って行く一年生。今日は
あがた祭りの時みたく、予定が入って無いと言う事はない。

上機嫌に、軽い足取りで約束を交わした少女の元へと歩みを進めて
行った。

「吉川ー、一回家帰るー?」

「うん、浴衣着て行くから。ちよつと集合時間より遅れるかもしれ
ない」

トランプットの片付けをしながら、吉川はそう返す。浴衣と言う言
葉を聞いて、忍は興味津々と言った様な表情に変わる。

「おー、浴衣ですかい。あがた祭りん時は見れなかったからねえ」

「なーに?、そんなにアタシの浴衣が見たいの?」

「バーカ。どんだけ似合っていないか確かめてやんだよ」

ここで素直にならないのが忍らしいと言ったところか。音楽に対
しては真っ直ぐだが、恋愛沙汰に関しては吉川と同じく少し捻くれて
いるらしい。

「はっ! じゃあアンタにはアタシの浴衣姿、写真撮らせてやんな
い」

「べ、別にいいし。目で保存しとくし?」

意地悪な事を言う吉川に対し、わざとらしく動揺して強がる忍。
そんなやり取りをまだ全員が居る音楽室でやるもんなので、なんだか生暖かい視線が2人に向けられていた。

「なんでこのクソ暑い中、また3階まで階段登らにやいけんのじゃい……」

悪態を吐きながら、校舎の階段を恨めしそうに登る忍。

音楽室にスマホの忘れ物をしてしまい、こうして1人、階段を登っている。

吉川に取って来てくれないかとダメ元で頼んでみたが、帰って来た返事は「張つ倒すわよ」の一言のみだった。当然である。

—————
♪—————、♪♪—————、♪—————
—————

すると、楽器の音が聴こえてきた。今日は祭りの日なのに熱心なものだなど忍は感心したが、どうやらそうでは無い様だ。

「……また、かさみー吹いてんのかな?」

昨日聞こえてきた、韃靼人の踊り。

吉川の世代が、中学最後のコンクールで吹いたという曲。

それをフルートで奏でているという事は、傘木が吹いている事で間違いは無かった。

音楽室に向かうには途中の渡り廊下を通らなければならない。

少し足早に音の方向へと歩みを進めると、1人、屋根のついていない渡り廊下で、傘木が楽器を吹いていた。

「……あ、アツキー」

傘木が忍に気付くと、演奏を止めて顔を忍の方へと向ける。少し動揺しているようにも見えた。

「おー、かさみー。練習熱心な事ですねー」

対して忍はいつも通り、気の抜けた返事を返す。それを見て傘木はホッとしたように一息ついた。

「コンクール曲でもなんでもないけどね。……あれ、今日早くない？」

そして、傘木は首を傾げてそんな事を聞いてくる。

「花火大会の日だから早めに終了。滝先生もそこまで鬼じゃないのよん」

忍がそう言うと、傘木は少し落胆した様な表情になる。

「あー、じゃああすか先輩もう……」

「うん、多分帰ったと思うよ？」

忍がそう言うと、心底残念そうに「そつか……」と、傘木は返した。「アツキーは？残って練習？」

しかし、そんな暗い表情も束の間、無理やり明るくする様に、傘木は顔を上げる。

「忘れもん。これから祭りだつっーのにテンション下がるわー」

変顔とも取れる渋い顔でそう言う忍に対し、傘木が少し嘖き出す。

「ぷっ、あははっ、こんくらいでテンション下がってどうすんのよー。そつかー、お祭りだもんねー。アツキーは今年どうすんの？」

「吉川と行く」

忍がそう言うと、少し驚いた様に傘木は目を見開いた。

「へえ、意外。優子と行くんだ」

「そんな意外？」

結構なりアクションで傘木が驚いたので、忍は聞き返してしまふ。

「あー、うん。だって、アツキー一回優子の事ビンタしたって聞いてたから……」

傘木がそう言うと、今度は忍が驚いた表情になった。

「ええ!?なんでそんな事かさみーが知ってんのさー!？」

「あんだだけ大騒ぎになれば噂も耳に入るよー。ってか、よく優子がビンタなんかされて許したね」

「ビンタされてもおかしくない事をアイツは言ったの。吉川だつて反省してるみたいだし。……まあ、今となってはいい思い出ですわ」

思い出すかの様に、しみじみとそう言う忍。

その反応を見ただけでも、2人の中だけにしか分からない事もある

のだろうと、傘木は納得した。

ビンタされて仲が深まるとは、奇妙な事もあったものである。

「相変わらず2人だけの世界作っちゃってー。このこの!」

傘木は揶揄う様に、肘で忍の脇腹を小突く。彼女も一年の頃に吉川と忍のやり取りを見ている。それに忍も満更でも無さそうな表情になっていた。

「んで?、もう告白とかしたの?」

「いや、ただだけど?」

そして本質を突く様な傘木の問い掛けに忍がそう返すと、傘木はまた落胆した様な顔になった。

「えー?、何?アツキー、優子の事好きじゃないの?」

確かめる様に、微妙な顔つきで傘木はそう聞く。ここで恥ずかしがったり、しどろもどろになったりすれば、まだ理由も分かるのだが

「いや、好きだけど?」

しかし帰ってきた返事はあまりにも単純、まるでそれが当たり前か様な忍の回答。

そんなあまりにもサツパリした忍の発言に、傘木は目を丸くした。

「?、好きなら告白しないの?」

「だって、こっちから告白したらアイツ絶対調子に乗るじゃん。『アタシは告白されちゃったからね』とか、普通に言いそうじゃない?」

「……まあ、優子なら言いそうね」

そんな事を言う吉川が簡単に想像できてしまったのか、苦笑いになつてそう返す傘木。

「なんかそれが嫌」

「そんな子供みたいな……」

そんな理由で告白しない人間がこの世の中存在していたのかと、片手で頭を抱える傘木。

しかもこの男、告白して振られる事なんて全く考えていない。

「……じゃあ、優子とは付き合わない訳?」

呆れた様に傘木がそう聞くと、忍は少し考えた後、ニンマリと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「……………そうだね、あっちから告白してきたら、考えない事もないかな?」

付き合うという事実に行き着くには、まだ少し時間が掛かりそうだ。

恋愛観

「うっわ、暑くないの?」

「女の子の浴衣を見た第一声がそれ?」

待ち合わせの駅、合流するや否や忍がそう言うと、吉川が不服そうにそう返す。

「うそうそ、カワイイカワイイ」

「もつと感情込めなさいよ」

「……すっげー可愛い……」

「やっぱウソくさいわね」

「どう言ってもダメじゃん」

いつも通りのコントを展開する2人。

祭り仕様の吉川は、少し大人びて見える。浴衣のせいだろうか、それともいつも下ろしている髪を上でまとめ上げていて、うなじが見えるからだろうか。

トレードマークのリボン今日は外しているので、それも大人っぽく見える一因となっていた。

「吉川、ポーズ取って?」

「え、こっう?」

すると、忍から唐突にそんな事を言われ、言われるがままに吉川は顔の前でピースサインを作る。

パシャッ

「何勝手に撮ってんのよ」

そして、許可も取らずに、忍はスマホを取り出して吉川の浴衣姿を写真に収めた。

「文句言われる前に一枚。……ほー、よう似合つとりますなー」

「え、ホント?、見せて見せて」

撮った写真確認しながら忍がそう言うと、スマホの画面を覗き込むように吉川も覗き込む。

「えー、もつと可愛く撮ってよー」

「じゃあ、もう一回」

しかし写り方が不服だったのか、もう一枚とねだる吉川。

写真を撮らせないと言うのはなんだったのか。再びもう一枚、今度はバッチリとポーズを決める。

「どう？」

「あんま変わんねーな」

写真を撮られた吉川がそう聞くと、スマホの画面を見ながら首を傾げてそう呟く。

「お世辞でも可愛いって、言いなさいっよー！」

「いでっ!!」

そんな気配りのかけらもない忍に対し、肩にパンチを喰らわす吉川。

「まあ、アンタらしいけど」

しかし、ここでお世辞を言われても、それはそれで不服だ。こうして忍が裏表無く本音で話してくれるのは、吉川にとって何より心地の良いものだった。

「何する？」

「まずは遊ぶべや」

屋台通りまで来ると、人は多めだが、あがた祭りの時よりかは少ないように思えた。8月のど真ん中である。暑さで来ない人も居るのだろう。

「いいわねー。じゃあ勝負しない？あれで」

忍の提案に吉川も乗り、とある屋台に向けて指をさす。そこには、屋台の屋根の下でしゃがみ込み、何やら夢中になっている人達が確認出来た。

「おー、かたぬき」かー。やった事ないなー」

「アタシ、あれ得意なの。とりあえず行きましょ？」

そう言っつて、吉川は忍の手を取り、その屋台の方向へと歩いて行く。なんだかんだ言っつて、吉川はこの祭りをとことん楽しむ様だ。

「おじさん！、2枚下さい！」

「あいよー」

吉川がそう言うと、溝が彫られた白色の2枚の板と、それを抜くための画鋏が手渡される。

「結構簡単そうじゃない？」

「これがそうも行かないのよねー」

渡された板は縦横2センチほどの小さいもの。その中に、何やら絵の様なものが彫られている。それを画鋏を使って、上手く型を抜けという事だろう。

「とりあえず、アタシが見本見せるから、見てて頂戴」

そうして吉川はやる気満々と言う風に浴衣の袖を捲ると、しやがみ込んで町内会用の長机の上で、型抜きを始めた。

カツカツカツカ……………

何というか、凄まじく地味な絵面だ。

一心不乱に彫られた線に沿って、画鋏を打ち付けて行く。この型抜き、一瞬でも気を抜くと力加減を誤って中の絵まで折ってしまう事がある。吉川はそうならないためにも、無言で型を抜くことに全集中を注いでいた。

浴衣と言う派手な衣装を着て、しやがみ込み丸まって一心不乱に画鋏を打ち付けるといふ地味な絵面は、側から見たらなんともシユールなものとなっていた。

「……………吉川……………」

「……………話し掛けないで……………」

セリフだけ見ればまるでケンカ中のカップルの様だが、彼らは今、型抜きをしているだけである。

「あー！割れた!!」

しかし、そんな集中も虚しく、パツキリと中の絵を割ってしまう吉川。

「あーあ。あとちよつとだったのに」

忍がそう言うと、プルプルと肩を震わせる吉川。全身全霊を掛けた

数分。それが一瞬にして真つ二つ。これが型抜きの恐ろしいところだ。割ってしまった時の喪失感は一瞬じゃ無い。

そして吉川の性格的に、これで諦められる筈が無かった。

「おじさんーもう一枚!!」

「あいよー」

ヤケクソ気味に100円を屋台のおっさんに渡し板を受け取ると、すぐさま先ほどの様にしやがみ込む。

「アンタも。ほら、やんなさい!」

「ぶきつちよやなー、吉川は。俺がお手本を見せてやるべよ……」

吉川にそう促されると、忍は吉川の隣に同じ体勢でしやがみ込む。

祭りは、まだ始まったばかりだ。

祭りに限らずイベントの日は、同じ学校、同じ部活の人間を目撃する事が多い。

「花火って何時からだっけ?」

「19時過ぎくらいから」

浴衣を着たこの少女2人。黄前と高坂も、この祭りで知り合いと何度か顔を合わせていた。

「はい、久美子」

両手に持ったかき氷を片方、黄前に渡す高坂。それを受け取ると、何か目ぼしい屋台は無いかと2人して歩き始める。

「やーっぱ、カップルが多いなあ……」

「別に、私は塚本と一緒に良かったけど」

なんとなしにそう呟く黄前に対し、揶揄う様な言葉を返す高坂。それに黄前は困った様に苦笑いになった。

「あはは、そう言う事じゃ無いよー」

「何それ、適当……」

期待していた反応とは違ったのか、不服そうにそう呟く高坂。

低音の黄前とトロンボーンの塚本は幼馴染同士。

お互いに気があるのは高坂も気付いていたので、この様に揶揄うのである。

「久美子は、その……どうなの？」

「んー？どうなのってー？」

「塚本。私、ハッキリしないのは嫌いなんだけど」

ピシヤリとそう言い放つ高坂に対し、黄前はへらりとした笑顔を崩さない。

「んー、そこまでハッキリさせる事もないんじゃないかなって、アタシは思ってるよ」

「はあ？、何よそれ？」

曖昧な黄前の回答に、少し呆れた様な表情になる高坂。

「何て言うか、今そうするのは焦り過ぎって言うか、まだなんだよねー」

「？、変なの」

尚も曖昧な言葉を続ける黄前に対し、それだけ返す高坂。

高坂は、真っ直ぐな人間だ。一度コレと決めたら、そこまで一直線。それは音楽も、勉強も。

そして恋すらもだ。

「あ」

すると、何かを見つけたのか、黄前がある屋台に視線を向けてそんな声を上げる。

「何？」

つられて高坂もその方向へと顔を向ける。

「……優子先輩とアッキー先輩だ」

”射的”と書かれた屋台下、吉川と忍が楽しそうに射的用の銃にコルクを詰めている様子が確認出来た。

「やっぱ、あの2人だね」

「そうね」

そんな光景を見て羨ましがる様な、納得した様な温かい視線を送る2人。

「……麗奈はさ、ハッキリしないのは嫌いって言ってたよね？」
すると、黄前が高坂に対し突然そんな事を聞いてくる。

「……うん、そうだけど？」

「アタシ、優子先輩とアツキー先輩の関係性、好きなんだよね。麗奈が言う様にどうにもハッキリしない関係なだけどさ、それがどうにも自然体って言うか、”ああ、この2人はこのままで良いんだろうな”って思えるくらい互いに信頼し合って……」

黄前がそう言うと、高坂も少し考える様な表情になる。

「……少し、分かるかも。あの2人、パート練でも遠慮とか建前が無いって言うか、優子先輩がアツキー先輩に見せる顔は、アタシたちに見せる顔とは絶対違うし、アツキー先輩が優子先輩に取る態度は、絶対私たちには取らないものだから」

それは、付き合っている言う事実が無くとも、お互いに”特別な存在”だと認識している事に他ならなかった。

忍は吉川に対して過度に絡んだり、過剰に距離が近かったりするが、それを他の女性にする事は絶対に無い。

そして吉川もキツイ態度を忍に取り続けているが、忍が話し掛ける度に、他の誰から話し掛けられる時よりも声が明るくなる。

そんな光景を、高坂も毎日の様に見続けているのだ。

高坂麗奈は、真っ直ぐだ。だからこそ、ハッキリとさせたがる。しかしこの2人の関係性を見て、嫌悪感を抱く事は全く無かった。

「あの2人にしか分からない世界があるんだろうね。曖昧だからこそ、出来る関係性ってのがあるのかな？」

「……分かんない」

高坂は互いにじゃれ合いながら射的で遊ぶ2人を見て、そう呟く。

ハッキリさせたがるのは、悪いことでは無い。しかし恋愛においては、高坂の中でそれが変わりつつあった。

何故なら彼女の中で、自分が思いを寄せる滝先生と”あんな感じになれれば良いな”と、そんな気持ち芽生えていたからだ。

「それに、あの2人、お互いの好意にもう気付いてると思うよ？」

すると、意地の悪そうな笑顔で、黄前がそう言い放つ。

「そうなの？」

その言葉が意外だったのか、高坂は少し目を丸くする。

「うん、なんて言うか、あの2人って、鈍感な訳じゃないと思うんだよね。……でも、今の関係性が心地良いから、”わざと” そう言う関係にならないんだと思う」

黄前のその言葉に、高坂は納得した様な顔つきに変わった。

「なんだか胸の奥につつかえていた違和感が、スツキリ取れたような気分だった。」

色恋沙汰に関しては捻くれた者同士の恋愛事情。あの2人は、この曖昧な関係性を”楽しんでる”のだろうと。

「……久美子って、そう言うところ、よく見てるよね」

「そうかなー？」

感心したようにそう言う高坂に対し、へらりと笑って謙遜の言葉を返す黄前。

そう考えると、あの吉川優子と秋川忍の関係性は、ベストと言っても良いのかもしれない。

花火大会

「大分遊んだわね」

「飯もいっぱい食ったしな」

一通り遊び、一通り食い、花火が打ち上がる時間が近づくにつれ、祭りも盛り上がりを見せる。人通りも増え、河川敷には少しでも良い場所で見ようとして、場所取りをしている人で溢れかえっていた。

「うっわ、人多い……どこで見よっか？」

キョロキョロと辺りを見回し、吉川がそう言う。

「大吉山でも登る？」

冗談めいてそんな提案をする忍に、吉川は少し顔を顰めた。

「真夏に浴衣で登山なんて、正気の沙汰じゃ無いわよ」

「確かに。でも、こんな人多い河川敷で見るともなあ……」

これだけ人が多いとなると、雰囲気もへったくれもあつたものではない。せつかくのデートなのだ。どこか2人きりになれる特別な場所は無いかと忍は考えを巡らせていた。

しかし、そんな考えが一瞬で吹き飛ぶ様な言葉が聞こえる。

「……アタシんちはどう？」

忍の横から緊張した声色でそんな言葉が聞こえる。忍も一瞬その言葉が理解出来ず、「え？」と素っ頓狂な返事を返してしまう。

「だ、だから、アタシんちはどうって言ってるの！」

忍が吉川の方へ顔を向けると、その声の主は真っ赤に顔を染め上げていた。

「どうやら相当勇気を出しての発言だったらしい。」

「……う、ウチ、少し高台に家があるから、2階のベランダから良く花火が見えるの。こ、こんだけ人が多かつたら、花火なんて楽しめないでしょ？」

所々声を上擦らせながら、吉川は何とも無いよう努めてそう言う。しかし、それが逆に違和感を持たせていた。

「そ、そりゃあ、良いけど……いきなり来て大丈夫なの？」
忍もそんな提案をされるとは露ほども思っていなかった。
心の準備もできてないまだ17にもなってない少年は、しどろもどろにそう返す。

「……うん、お母さんとお父さん、今日遅いから」

心臓が止まる。一瞬、頭の中が真っ白になる。まさか漫画やアニメでありがちなセリフを自分が言われることとなるとは、忍にとっても完全に予想外だった。

期待であるか、不安であるか、それとも、また別の感情か。

忍の心の中は、そんな言い表すことのできない初めての感情に振り回されていた。

「よ、よ、よ、吉川。お、お前、そ、それって」

今まで誰にも見せたことがないくらい動揺する忍。いつも通り、飄々と。そんな忍のイメージが一瞬で崩れる程、秋川忍と言う男は普段とはかけ離れた顔を見せている。

そう。この男、恋愛において攻められるのには滅法弱いのだ。

そんな初めて見る忍の様相を見て、吉川はしめたとばかりにほくそ笑む。

「な、何緊張してんのよ？へ、変なことでも考えてんじやないんじやないでしょーね!」

しかし、吉川もオーバーヒート寸前だった。平静を装おうに必死だが、全く形になっていない。

吉川が忍を花火大会に誘った時にそこまで緊張してなかったのは、ここにある。

何故ならば忍を花火大会に誘えたら、その流れで彼を自宅に誘うと吉川は決めていたからだ。

吉川にとっては、祭りに誘う事よりも自宅に誘う方が何倍もハードルが高い。自分のパーソナルスペースに異性を入れる事なんて初めての経験、それは祭りで一緒に遊ぶ事より重要な事だった。

つまり祭りは建前で、本命は自分の家で忍と2人きりになる事だったのだ。

それを祭りの熱に充てられた中、勢いで誘う。吉川の作戦はこれだ。

しかし、予想よりも緊張感や恥ずかしさはあった。はしたない女と思われてないだろうか？それで忍に引かれたりしてないだろうか？

そんな葛藤もありながら、勇気を振り絞って吉川は忍を自宅に誘った。

「考えてねーよー……よ、吉川がいいって言うなら、行くけど……」
普段見せることのない真つ赤な顔を見せながら、忍はそう返す。

忍は吉川優子のことが好きだ。異性として、1人の女性として。そんな彼女から自宅に来ないかと誘われた。行かない理由なんてない。しかしこんな素直ではない言い方をするのは、吉川に対する捻くれた恋愛感情があるからと言ったところであろうか。

だがそんな情け無い回答で十分だったのか、吉川は頬を赤らめながらも満面の笑みを返した。

「そう、じゃあ行くわよ。あと30分もしたら花火が上がり始めるんだから、着いて来なさい」

上機嫌な声色を隠そうともせず、吉川は忍の手を取って河川敷とは反対の方向へと歩みを進める。

繋がれている手は互いに温度が上がりすぎていて、2人ともその異変に気付かなかった。

「ど、どうぞど？」

「お、お邪魔します……」

吉川に入る様促され、忍は少し遠慮がちに吉川家へと入って行く。山腹の斜面に建てられた洋風の一軒家。2階からは良い景色が見れそうさ。

しかし、今の忍にはそんなことを考える余裕なんて無い。自宅とは

違う雰囲気。匂い。心が休まる筈がない。

「とりあえず、何か飲む?」

2人してリビングに入ると、吉川が台所の冷蔵庫を開けながら、忍に対してそう聞く。

「お、お構いなく……」

そんな忍は、リビングのソファの上で縮こまる様に座っていた。

「何遠慮しちゃってんのよ。アンタらしくも無いわね」

吉川は自宅に帰ったと言う安心感からか、祭りの時ほど緊張していなかった。寧ろリラックスしている様に見える。

「初めて来る家なんだから、こんなもんでしょ」

「アンタにそんな態度取られると、どうも気色悪いのよ」

いつものキレが無い忍に対し、吉川はストレートにそんなことを言う。

「……吉川のせいなのに」

「何か言った?」

「何でも」

ボソツと言った忍のその言葉は、どうやら吉川の耳には届いて無かった様だ。

「……まあ良いわ。はあ……今日は遊んだわね」

2つのコップに麦茶を入れると、吉川はそれをリビングまで持って行き、忍の隣に座る。

「……最近練習しかしてなかったから、良い息抜きになったわ。

……秋川もそうでしょ?」

「ま、まあ……」

吉川の問い掛けに対し、ぎこちなくそう返す忍。どうやらこの雰囲気気にまだ慣れない様だ。

「あんな子供みたいにはしゃいじゃって、少し恥ずかしかったんだから」

麦茶を一口飲むと、吉川は困った様に笑ってそう言う。それに対し忍は少しムツとした様な顔になった。

「良いじゃん。楽しかったんだし。吉川も楽しかったでしょ?」

「そりゃ、楽しかったけど……」

やり返す様に忍がそう聞くと、今度は吉川が少し素直では無い反応をする。

「……………」

「……………」

そして、少しの無言。

いつもいつ会話が途切れるのかと思うほど喋っているこの2人だが、今日はやはりと言うべきか、会話が続かない。

意識しているからだろうか、それともいつもとは違う雰囲気困惑しているからだろうか？

そして無言になると、やっぱり意識してしまう。

忍が吉川を見やる。今日は浴衣を着て髪を団子に纏めているからか、ヤケに大人っぽく見える。

祭りの会場で見た時よりも、ずっと緊張する。

「……………何よう？」

そんな忍の視線に気付いたのか、吉川は怪訝そうな顔を忍に向けた。

「……………何でもない」

よそよそしくそう言って視線を外す忍。祭りの会場ではあんなに自然体で接していたのに、吉川の家に来た途端にこれだ。

祭りの雰囲気に加え、誰にも邪魔されず2人きりになれた。

まさに理想的な展開だが、そうならなかったで2人とも何をしたいのか分からないと言うのが、このムズムズする雰囲気の正体だった。

「……………秋川はさ、なんで今日の誘いに乗ってくれたの？」

口を開いたのは、吉川の方だった。相当勇気を振り絞って言った言葉なのか、顔は真っ赤で忍の顔をまともに見れてない。

「な、なんでって、吉川が誘ってきたから……………」

いきなり核心を突くような吉川の言葉に、忍も動揺を隠せていな

い。

「他の子達からも誘われたでしょ？……アンタ、なんでか知らないけどモテるし」

「……………別に、それは吉川が最初に誘ったから……………」

照れを隠す様に、忍は目を逸らしながらそう言う。

「本当に、それだけ？」

しかし、それを逃すまいと、吉川は忍を見つめてそう聞く。

真っ直ぐな瞳、吸い込まれそうなほどの綺麗な水色の瞳で吉川は忍を見据える。

少し頬を赤らめたその表情は期待なのか、不安なのか、それともまた別の感情なのか。よく分からない顔をしている。

そんな瞳で見つめられ、忍はその顔から一切目線を逸らすことが出来ない。

何故ならそれ程に魅力的な表情だったからだ。こんなものを見せられて、本心を隠し通せる訳がない。

「……………嘘。吉川としか行かないって決めてた」

するりと、自然とその言葉は出て来た。気障ったらしく、全身が痒くなるほどの言葉であるが、言い切ってみれば照れはあるがどこか心地良い。達成感にも似た感情が忍の中にあつた。

それを聞いて、吉川の瞳が揺れる。

「……………ふふっ、そう……………そっか……………」

そして、嬉しそうに、本性を暴いてみせたと、達成感丸出しの表情で吉川はクツクツと笑う。

ようやく秋川忍の自分に対する本音が聞き出せた。

感覚ではなんとなく分かっていたが、こうして言葉で聞くと何もかもかなぐり捨てたくなるほど嬉しい。

ドンっ

すると、腹の底に響く様な重低音が聞こえて来る。馴染み深いその破裂音は、紛れもなく花火の音だ。

「あ、始まったみたいね」

「う、うん」

どこか吹っ切れた様な清々しい表情で言う吉川に対し、忍はまだ心の整理ができてないままだった。

しかし、それに追い討ちをかける様な言葉が、吉川の口から出る。

「2階、行きましょ？アタシの部屋からなら、花火が綺麗に見えるわ」

特別

「やっぱり、ここからは綺麗に見えるわねー」

吉川家の2階のベランダ。彼女、吉川優子の部屋に併設されたベランダから見える景色は、空が良く見えた。

高台に建てられた家の為、遮るものが何も無く、遠目には陽も沈んだ紫の空色を薄くなぞる様に山の稜線が見える。

そしてその濃い紫色のキャンバスに彩りを加える様に、花火が一発。

シチュエーション、コンディション、雰囲気。全てが完璧と言って良い中での、花火鑑賞だ。

「すごいな、良く空が見える」

そんな絶景の中の花火を見て、忍は感嘆の声を漏らす。

「でしょ？実はアタシ、この花火大会に行った事が無かったのよね。だって家から見えるし、今日だって見るのはここって決めてたんだから」

それに吉川が自慢げにそう返した。なるほど、あの人混みの河川敷で見るよりかは、こっちの方が何倍も良い。

何より、ここなら2人きりだ。

「吉川は毎年こんな特等席で見てるの？羨ましいですなー」

そんな花火に夢中になりながら、忍はケラケラと笑いながらそう聞く。先程までの緊張は何処へやら、無邪気に花火を楽しんでいる様にも見える。

「そうよ、羨ましいでしょ？ここが一番景色の良い場所。友達でも滅多に連れてこない場所なんだから」

吉川も視線を花火に移し、今度はしみじみとそう言う。

その反応だけでも、この場所が吉川優子にとって特別な場所な事が分かった。

「じゃあ、俺はその特別な場所に入れたって訳だ」

「そう言う事。感謝しなさい」

そんな軽いやり取りをすると、2人して夜空を見上げる。

打ち上がる花火は美しい。去年も同じ様な花火を見たが、今年はそれよりももつと美しく見えた。

好きな人と一緒に見ているからだろうか？この特別なシチュエーションがそんな錯覚を起こさせるのだろうか？

そんな花火を目に焼き付けんと、2人は夜空に夢中になる。

今日は特別な日になる。

言葉は交わさないが、2人にはそんな確信が共通してあった。だからこそ、それを脳裏に刻み込もうと、五感を研ぎ澄まして一瞬も見逃さまいと夜空に集中する。

花が咲く。息を呑む。そして一瞬の静寂。次に打ち上がるのはどんな色形の花なのか期待する。そして、また咲く。その繰り返し。

そんな一瞬の美しさには、切なさや儂ささえ覚える。

だからだろうか、人肌が恋しくなる。

「……秋川、もつとこっち来て」

消え入りそうな、切なくか細い声で、吉川はそう呟く。忍はその声を聞き流す事なく一歩、吉川に近づく。

互いの肩が少し触れた。

「……手、握って」

言われるがままに、忍は黙って吉川の手を握る。互いに顔は見ない。花火に集中してるからだろうか？……いや、違う。見れないのだ。打ち上がる花火の美しさに充てられたまま、この独特な雰囲気呑まれたまま、ある種の勢いで恥ずかしさを誤魔化しながらこんな事をしている。

そうでなければ吉川がこんな事を言う筈がない。忍がこんな直接的に動くはずが無い。花火と言う免罪符を手に、2人は普段、やろうとしても恥ずかしくて出来ない事を今している。

だからこそ今、互いに顔を見てしまつては羞恥心が戻ってきてそれが崩れてしまうと、2人は直感しているのだ。

花火が打ち上がる時間はおよそ20分。その間、2人は自分たちだけの世界に没頭する。色とりどりの花火を、どこかフワフワとした感覚に陥りながら、それでいてしっかりと記憶する様に見つめる。

「……………」
「……………」

遂には言葉も交わさなくなった。花火の破裂音が鼓膜に響き渡る中、2人が感じているのは、確かな心地良さだけだった。

「……………終わった？」

最後の一発、今日一番の花火が夜空に消えると、名残惜しそうに忍がそう言う。

「……………みたいね」

それに対し、吉川も少し寂しそうな口調でそう返した。

今まで耳に鳴り響いていた独特な破裂音が聞こえなくなると、何やら変な喪失感を覚える。一気に現実を引き戻される様な感覚に陥ると、忍は握っていた吉川の手を離れた。

「こんな良く見える場所があんなら、去年も来ればよかったよ」

そして、忍はようやく顔を吉川の方へと向け、軽く笑いながらそう言う。

「来年また来れば良いでしょ。過ぎた事をとやかく言うんじゃないの」

そんな忍に対し、諭す様に吉川はそう言い放った。

すると吉川は、何か考え込む様な表情になる。

「……………ねえ、秋川」

「ん、何？」

どこか思い詰めた様な、不安がる様な声色で、吉川は忍に話しかける。言おうか言わまいか、そんな感情が読み取れる悩む仕草だ。

そして、意を決した様に吉川は忍に対して口を開く。

「秋川にとって、アタシはどんな存在？」

顔はほんのり赤く、少し照れてる様に見える。しかし、それ以上に

何かを確かめる様な、期待する様な眼差しだった。

対して忍は、少し考える。答えなんて出ている様なものだが、その言葉を口に出すのは忍としては何か違う様な気がした。だから、その代わりとなる様な言葉を使うことにした。

「そうだね、”特別” って言っておこうかな？」

”特別”

その言葉の意味は、あまりにも広すぎる。秋川忍にとって吉川優子は特別。

では、何が特別なのか。他の人間とは違う何か。しかし、それを考えても答えは出ない。そんな曖昧な言葉が、この特別と言うものなのだ。

しかし、吉川にとってはそれで十分だった。

「そう。そっか、良かった……」

満足そうに、安心した様に、何より納得した様に吉川はそう呟く。吉川にとってその言葉は、何よりも欲しい言葉であった。

ここで”好き”と忍が答えても、吉川はあまり感動しなかったかもしれない。何故なら、吉川優子は恋愛沙汰において少し捻くれているからだ。

女性は、特別扱いされる事に何より嬉しさを感じる人が多い。

忍のその言葉は、吉川にとってストレートに告白されるよりも、何倍も嬉しいものだった。

「……吉川は？お前にとって俺はどんな存在？」

すると、今度はお返しと言わんばかりに忍が同じ事を聞く。

しかしそんなものは忍と同じく、答えなんて決まっている。

「そうね。アンタと同じく、特別よ。アタシにとって、アンタは特別。代わりなんて居ないわ」

受け取りようによっては愛の告白とも取れる発言。それを恥ずか

しげもなく堂々と言い放つ吉川。

そんな自信満々な彼女に、忍は薄く微笑んだ。

「……そっか、良かった良かった」

ストレッチな吉川の告白に、必死に照れを隠しながらなんとか言葉を出す様にそれだけ返す忍。

何度も言うようだが、忍は恋愛面において責められるのに滅法弱いのだ。

「……でも、今のままじゃ特別感は薄いと思わない？」

「え？、そ、そうかな？」

すると、吉川は何か違和感がある様な言葉を口にする。忍もそれを感じ取ってか、困惑した表情でそう返した。

「うん、そう。だから、もつと互いに特別と思わせる”何か”が欲しいの」

「……欲しいつつたつて、どうするのさ？」

忍が難しそうにそう聞くと、吉川はニヤリと笑った。

「……そうね、アンタこれからアタシの事、下の名前で呼びなさい」

「……………え？」

あまりにも意外な提案に、気の抜けた声が忍から出る。

「”優子”って呼びなさいって言ってんの。アタシもアンタの事はこれから”忍”って呼ぶ事にするわ」

少し恥ずかしそうに、吉川はそんな説明を付け加えた。

「……良いけど、なんでまた急に……」

対して忍は少し困惑した様なりアクションを取る。

「アタシがそうしたいの。正直もう苗字で呼ばれるの嫌。お互い特別ならその証明として、下の名前で呼び合おうって事よ」

付け加える様に、吉川はそう言い放つ。しかし照れが隠せていない。証明だのなんだのともっともらしい事を言っているが、その実好きいな下に下の名前で呼んでもらいたいという心が透けて見える様だ。

しかしそうしたいのは、この男もまた同じだった。

「分かった。じゃあ、今日から優子って呼ぶ事にする」

”優子”

その言葉を聞いて、吉川の肩が一瞬跳ねる。自宅に好きな人を呼ぶくらい度胸があるのに、どうもこんな単純な事で感情が昂るらしい。

「よろしく、し、忍。……あー、なんかまだ慣れないわね……」

「そんな無理に言わなくても……」

「ダメ。もう決めた事だから」

特別な2人の関係。秋川忍と吉川優子のこの関係は、普通の恋愛とはまた違った独特なものだった。

名前呼び

祭りの熱は、翌日からの練習によって一瞬にして掻き消される。浮ついた心のリセット。

北宇治は全国を目指している。練習、練習、また練習。あまりの忙しさに、昨日の雰囲気なんて何処かに吹っ飛んでしまっていた。

「……もうちよつと大きく出した方が良いかな？」

「うーん、あんまり目立ちすぎるとそれはそれで……」

そして、今はパート練。トランペットパートでも互いに音を確認かめ合って、改善点や感想を言い合う。

二人一組で交互に演奏し、感想を言い合うこの練習法は、中世古が考えたものだ。

パート内の結束力を高める狙いもあるが、自分で自分の音の評価するよりも、他の人から聞く評価により、新しい発見もある事もある。

「……どうかな？」

「うーん、最後の方が息が苦しそうですね。少しだけですけど音がブレています」

そして、今は中世古と忍が互いに音を確認かめ合っていた。中世古が感想を聞くと、忍が具体的なアドバイスを送る。

相方は日替わり制。

この練習はコンクールメンバーだけでなく、そのサポートメンバーであるもなか組も加わる。

今日は忍、中世古のペア。滝野、加部のペア。笠野、吉沢のペア。そして高坂、吉川のペアで練習を行っていた。

しかし、一部禁止されているペアもある。それは2組。

忍、高坂の組み合わせと、中世古、吉川の組み合わせだ。

前者は互いのライバル意識が強すぎて、いつの間にか互いに音を確認かめ合うと言うよりも、どちらの方が上手く吹けるかと言う、目的とは大きくかけ離れたバトルを展開し始める為、禁止された。

そして後者は、まあ予想通りと言うべきであろうか、吉川の中世古最頂が酷いのだ。基本口から出る言葉は、“まじエンジェル”。そん

な語彙力が低下し切った状態で褒め言葉しか言わないので、すぐさま禁止された。

「どう聴こえる？・後輩」

「悪く無いと思いますよ？・先輩」

一方こちらは吉川、高坂のペア。挑発する様に吉川がそう言うのと、上から目線で高坂がそう返す。

意外な事に、この二人の相性は悪くは無かった。

そもそも二人とも気が強いタイプに加え、音楽にも真面目に取り組んでいる。ソロオーディションの一件で仲違いしている様に見えるが、性格的には相性が最悪という事は無いのだ。

「そう？・エース様に褒められるなんて、光荣ねー」

「そりやどうも。まあ、まだまだな部分も多いですけどね」

わざとらしくエースと言う言葉を強調する吉川に対し、高坂は無然とそんな言葉を返す。

「はっ、あははは……………」

……………多分、仲が良いのだろう。高坂の粋なジョークみたいなものだ。……………お互いに乾いた笑いを返しているが。

「あははっ、あの二人は相変わらずだねー」

そんな光景を見ながら、中世古は他人事の様子に笑う。

「原因は香織先輩っすよ？」

それに対し、忍がツツコミを入れた。

「まあ、そうなんだけど、あんまりギスギスした感じじゃないから」どこかしみじみと言った風に、中世古はそう言う。

「んー、そうすね。……………まあ、”優子”も高坂さんも丸くなったって事じゃないですか？」

そして忍は二人から楽譜に視線を戻し、適当にそう返した。

「そーだねー……………ん？」

すると、今の忍の言葉に違和感を感じたのか、中世古は疑問の声を出す。あまりにも自然だったので流してしまいそうだったが今、忍は

確かに……

「秋川君。優子ちゃんの事、下の名前で呼ぶ様になったの?」

少し意地悪そうに笑って、中世古は揶揄う様に忍にそう聞く。

「え?、あ、はい。昨日そう呼べって言われたので」

対して忍は焦る事もなく、さっぱりとそう返す。

「へえー。って事はー、花火大会の時かな?」

「おー、正解です。エスパーツか?先輩」

中世古に名前呼びする事となったキツカケを当てられ、感心した様な声を出す忍。

まあ、思い当たる節といえぱそれくらいしか無いのだが。

「それで、どうだったの?」

すると、吉川に聞こえない様に中世古は口元を隠す様にして小声でそんな事を聞く。興味津々と言った様子だ。

「どうって、何がです?」

それに対し忍も同じく、口元に手を当てて小声でそう返す。

「花火大会だよ。優子ちゃんと、何かあったの?」

「……まあ、あったって言いますか……」

流石に昨日の吉川の家であった出来事を言うのは憚られる。あの特別な時間を他の人に話すのは、忍としては少し抵抗があった。

どう言おうかと忍は目を瞑って頭を捻る。しかしその仕草で二人の元へと近づいて来る人影に気づかなかった。

「ちよーっと良いですか?香織先輩」

聞き覚えのありすぎる声が耳に入り、二人ともその声の主の方向へと顔を向ける。

そこには、笑顔なのだが目が完全に笑っていない吉川優子の姿があった。

「な、何かな?優子ちゃん」

初めて見る吉川の姿に、中世古は少したじたじとなる。

「ちよつとその馬鹿借りて良いですか？」

「馬鹿ってなんだよ。まあ、”優子”に馬鹿って言われたって何も悔しくないけ「良いから来なさい!!」」

忍の反論を遮る様に吉川がそう言うのと、忍の腕を強引に掴んでパート練の教室から出て行く。

そんな吉川の顔は、遠目から見ても分かるくらい真っ赤になっている。

「……絶対なんかあったじゃん……」

その光景を見て、加部が呆れた声でそう呟いた。

「馬っ鹿じゃないの!? アンタ?!?」

教室から離れた廊下。誰も聞いてない事を確認すると、吉川は忍に對して開口一番、罵声を浴びせる。

声が大きすぎて反射的に忍は耳を塞いでしまった。

「馬鹿ってなんだよ、何も悪いことしてねーだろーが」

對して忍は、心底不服そうにそう返す。何が悪いのか分かっていない様子だ。

「名前よ名前!!なんでみんながいる前で下の名前で呼ぶのよ!?!」

「?、呼べって言ったの優子じゃん?」

「普通皆んなの前で呼ばないでしょ!?!」

口で責め立てる吉川に對し、忍は何がいけないのかと言う風に首を傾げる。

忍は鈍感ではないが、周りの人間関係には疎い。つまり、”あの状況で吉川を下の名前で呼んだら、噂が一気に広まる”と言う思考が抜け落ちているのだ。

周りに流されないと言うのは、時にこう言うデメリットを生む事も

ある。

「なんでみんなの前で呼んじゃダメなんだよ?」

「噂になるでしょーが!!今までずっと苗字呼びだったんだから、いきなり変わったら誰だって怪しむでしょ!」

忍の疑問に吉川は怒りながら説明するが、それを聞いて忍は更に不思議そうな顔になる。

「……別に、噂になっても良くない?」

そして、当たり前かのように忍はそう言い放った。

「……………へ?」

それに対し、気の抜けた声を返す吉川。しかしそれに構う事なく、忍は続けて言葉を出す。

「噂にならない様に変に苗字呼びに戻す方が俺は嫌。優子が下の名前呼び合うって決めたんだから、みんなの前でも堂々してりや良いじゃん」

忍の本質を突く様なその言葉に、吉川はハツとした様な表情に変わった。

「……まあ、そりやそうだけど……」

そして渋々と言った感じで、忍の言葉を受け入れ始める。

「じゃあ良いじゃん。どうせコソコソやってもいつかバレるだろうし、最初からどこでも名前呼びにした方が良くない?」

最後に忍がそう言うと、それが胸にスツと入ったのか、観念した様に吉川は一つため息をついた。

「……はあー……分かった。悪かったわね、こんな事で時間取らせちゃって」

「別に。もう合奏練習も始まるから行くべや」

吉川が軽く謝り、忍がそう返すと、二人して教室に戻って行く。

この後、パートメンバーから質問の嵐に会うのは、また別の話。

プール

夏休み。世間はお盆休みに入り、北宇治高校もほとんどの部活動が休みになっている。

しかし、校舎にはそんなものは関係ないとばかりに、合奏の音が響き渡る。

「……はい、Lからのフォルテツシモ、音が濁らない様にして下さい」

「はい!!」

通しの合奏が終わり、滝先生から注意が入る。

「スネアは、ロールだらしくならない様に」

「はい!」

滝先生の隣に居た臨時コーチの橋本先生からも、パークスに注意が飛ぶ。

「では、本日の練習はここまでにします。明日からはお盆休みに入りますが、その後、すぐ合宿です。体調管理にはくれぐれも注意して、風邪などひかない様にして下さい」

「はい!!」

滝先生がそう締めると、今日の練習が終わる。明日からの二日間は吹奏楽部もお盆休み。

この日だけは、学校を閉めると言う事で練習が出来ないのだ。

そしてそれが明けると、すぐさま合宿に入る。

「では、合宿の予定確認するから、パートリーダーは集まって下さい!」

小笠原が立ち上がりそう言うと、パートリーダーは集まり、その他の部員は片付けを始める。

「プール?」

「うん、プール。一緒に行かない?」

そんな中、いつもの様に忍がトランプペットの手入れをしていると、吉川が遊びに誘って来た。

「何人が誘ってんのよ。友恵と秋子ちゃんと……あとみぞれも誘っ

ただ、多分来ないと思う」

しかし、デートのお誘いではない様だ。吉川は指を折って誘った人物を確かめる。

「えー、絶対人多いじゃん」

しかし、忍は少々面倒くさそうにそう言う。だがそれは天邪鬼の様なもので、本心は行かない気など全く無かった。

「何ワガママ言ってるのよ。せっかくの休みなんだから、アンタも来なさいよ」

吉川は引く気は無いらしい。少し呆れた様な顔でそう言い放つ。忍の本心を吉川も見抜いているのだろう。

「まあ、暇だし良いけど。他に誘った人とか居る？」

この様に口では素直ではないが、行く気は満々だ。

「居ないけど？」

そんな忍に対し、首を傾げて吉川はそう返す。

「じゃあ、タツキーも誘って良い？」

「滝野？……まあ、良いけど」

忍の提案に吉川は少し間を置いて、了承の返事を返した。

最近は滝野と遊ぶ機会が少なかったもので、デートじゃないなら丁度いいと言う感じだった。

「オーケー。行くの明日？」

「うん。時間決まったら、連絡するわ」

「はいよー」

何とも気の抜けたやり取りだ。しかし、プールに行くと言う事は水着姿が見れると言う事だ。忍だって健全なる男子高校生。好きな人の水着姿を見たいと言う気持ちはある。

「水着、着てくんの？」

努めて冷静に、忍はいつも通りにそう聞く。

「当たり前じゃない。なーに？そんなに見たいわけ？私の水着姿？」

対して吉川は、少し小馬鹿にする様にへらりと笑ってそう聞き返す。花火大会の時と同じだ。

「アホ。似合ってるのか確かめてやんの。明日の為に今日の夜ご飯は少なめにしといた方がいいんじゃないのー?」

「よ・け・い・なお世話だっつーの!!」

「いだっ!!!」

相変わらずデリカシーの欠片もない忍の発言に、吉川のパンチが炸裂した。

「人多い……」

「お盆だからな」

当日、水着に着替えた忍がそう呟くと、同じく水着姿の隣に居た滝野から至極当たり前の返事が返って来る。

プールは案の定人だらけで、活気に溢れていた。

「……アツキー、あの子はどうだ?」

「……ちよつと痩せすぎ」

そしてやはりと言うべきであろうか、こんな所に来れば健全なる男子高校生は下世話な話もする。

女性陣の登場を待つ間、遠目で水着の女の子を眺めながら、楽しそうに談義を交わす。

「ほう。じゃあ、あっちの子は?」

「良いねー。ちよつと性格がキツそうなのも良い。うわつ、隣の人めつちや美人さんじゃね?」

「うわつ、本当だ。大人なお姉さんって感じじゃん」

「タツキー、思い切ってナンパしてみれば?」

「子供扱いされて終わりだろ」

段々と談義に熱が入り、あれやこれやと話の盛り上がる二人。女子の多い吹奏楽部に所属していると、こう言う話もし辛い。

今日はその鬱憤を晴らすかの様に、二人とも水着の女の子達に釘付けになる。

しかしそれに熱中し過ぎて、背後から忍び寄る殺気を纏った鬼に、

二人とも気付けなかった。

ドカツ!!

「いっで!!!」

後ろからの衝撃と共に、断末魔を上げて勢い良くうつ伏せに倒れる忍。いきなりの出来事に滝野が咄嗟に振り向くと、右足裏を忍に向けて、額に青筋を浮かべている吉川の姿があった。

「どうやら思い切り忍の事を蹴飛ばしたらしい。」

「アタシ達を差し置いて別の女に視線を向けるなんて、良い度胸じゃない?し・の・ぶ!」

そして、そのまま前に倒れた忍の背中をサンダルで踏んづけ、挑発する様にそう言う吉川。

「痛い痛い!!ごめん!ごめんて優子!!」

やはりと言うべきか怒っている。忍は必死に吉川の足をタップしていた。

「……全く、最初からこんなじゃ、先が思いやられるわ」

呆れた口調で吉川がそう呟くと、ようやく忍の背中から足を離す。ようやく立ち上がるこの出来た忍は、ゆっくりと吉川の方へと振り返った。

「……おー、水着……」

感心した様に水着姿の吉川を見つめてそう呟く忍。今日の吉川はいつもなら降ろしている髪を両サイドでまとめ、どこか開放的な雰囲気だった。

そして黄色を基調とした水着。上にTシャツを着ているのが少し勿体無いが、それも良いアクセントとなっている。

「……なにジロジロ見てんのよ?」

忍にじっと見つめられ、少し照れ臭そうにそう言う吉川。しばらく見つめると、納得した様に忍は頷いた。

「案外似合ってる」

「最初の2文字が余計よ」

少し微妙な忍の褒め言葉に対し、すぐさまツツコミを入れる吉川。いつも通りのやり取りに、吉川の背後に居た加部が苦笑いになっている。その隣に居た吉沢は、顔を赤くしてなんだかニヤついた表情を浮かべていた。いつも通りである。

「あれ？なんだ、アンタ達も来たんだ」

すると、聞き慣れた声が聞こえ、一同その方向に顔を向ける。そこには、吉川と同じスタイルの水着姿の中川が居た。

「おー、なつきちも来てたんだ」

意外そうな表情をして、最初に忍が話し掛ける。

「うん、友達とね。アンタらは何？デート？」

そしていつもの様にへらりと笑って、揶揄う様に中川はそう言う。初手でこのおちよくり。吉川が反応しないわけがない。

「……どう見たらデートに見えんのよ」

心底不服そうな表情で、吉川が突っ掛かる。

「あれ？……じゃあアツキーとはお遊びだったんだ？なら、アタシが貰っちゃおうかなー？」

「勝手に変なイメージ付けてんじゃないわよ!!」

「イメージってか、事実でしょー？」

「何が事実よ!？」

まだプールに来たばかりだと言うのに、すぐさま口論を始める二人。せっかくのお盆休みだと言うのに、そこで見られる光景は部活の時と同じだった。

プールサイドヒストリー

高校生の体力というのは、底なしのものがあつた。普段、早朝から陽が沈む時間になるまで部活漬けの毎日でも、遊ぶ元気があつたと言つたのは若さ故の特権であらうか。

「くらえ！水中ブロー!!」

「甘い!!ウオーターウォール!!」

「何っ!？」

して、こちらは忍と滝野。滅多に來ないプールに來てテンションがあつて居るのか、小学生の様なごっこ遊びをして居る。

男と言つたのはいつまで経つても子供なのだ。

「あはは、男子は元氣だねえー」

「……反応するんじや無いわよ。知り合ひと思われちゃ恥ずかしいでしょ……」

そんな光景を、プールサイドの日陰で中川と吉川は見つめて居た。

中川はいつも通りへらりと。吉川は呆れた様な顔でそう言う。

「……てか、何でアンタが居んのよ？友達居ないの？」

いつの間にか同行して居た中川に対し、吉川は鬱陶しそうにそう聞く。

「余計なお世話。待ち合わせしてんのよ」

中川はその待ち合わせして居る友達と連絡を取り合つて居るのか、スマホを弄りながらそう返す。

「待ち合わせ？誰と？」

「……うっさいなあ……」

深く突っ込んで來る吉川に対し今度は中川が鬱陶しそうにする。そして何処か言いくさそうに、口を開いた。

「希美だよ。傘木希美」

「……希美……」

中川の口から出た人物の名前に、吉川は少し表情を曇らせる。その

表情を見て、案の定中川はバツの悪そうな顔になった。

「だから言いたく無かったのに……アンタ、希美の事嫌いでしょう？」

「……別に、嫌いじゃ無いけど……」

確かに嫌いでは無い。しかし、色々思うところがあるのも事実だ。

「ホント、アンタって顔に出やすいよね。……まあ、結果的にだけど、アツキーが一度部活に来なくなったのも、考え様によつては希美のせいだしね」

「……………」

中川に凶星を突かれてしまったのか、少し眉を顰める吉川。

「……別に、忍は関係無いわよ。それよりも……」

無意識にその先を言おうとした事に気付き、吉川はハツとした様に口を抑える。

「……………何でもない。今の事は忘れなさい」

「はあ？そこまで言われて気にならない訳ないでしょ？」

「うっさい。何でもないったら何でもないの」

「……………何それ……」

意地でも言わないと言う風な吉川の態度に対し、不服そうにそう返す中川。

「……………アンタだつて知ってるでしょ？アツキーが部活に来なくなった途端、糸がプツリと切れた様に反発してた部員が辞めて行った」

そして、話を忍の話題に戻す。

「……………」

中川の独白の様な言葉に、吉川は黙って耳を傾ける。そんな事、知っている。何よりあの時一番ショックを受けたのは、紛れもなく吉川だったのだ。

「……希美はその事を今でも後悔してるの。『アタシのせいでアツキーや皆が辞めて行った』って」

そして中川も、吉川の忍に対する想いは知っている。忍が一度部活を去って、酷く落ち込んでいた姿を見ている。

そんな状態になってしまったからこそ、傘木は責任を感じている。

あの事件で一番罪悪感を感じているのは、当事者の傘木希美なのだ。

「だから許してあげて、お願い」

その両方の思いを知っているからこそだろう。中川は立ち上がり、吉川に対して深く頭を下げた。

「……別に、アンタに頭を下げて貰わなくて良いわよ」

「でも……」

「確かに希美に関しては色々思うところがあるけど、もう終わった事よ」

さっぱりと、何ともない様にそう言い放つ吉川。それを聞いて、中川はようやく頭を上げた。

「……ありがとう」

「……だから、礼とかいらさないから……」

いつもなら絶対に出る事のない中川からの直接的な感謝の言葉に、むず痒そうな表情を浮かべる吉川。とことん素直ではない様だ。

「……アッキーが復帰の許可を出してくれた時、すっごい救われたって希美は言ってた」

「大袈裟じゃない？」

中川の言葉に復帰の許可を出しただけでそれはどうなのかと、苦笑いになって吉川はそう返す。

「フルートが好きなら戻れば良いじゃん」って言われたのが凄く嬉しかったんだって。初めて吹いた時の事を思い出せたって」

「……そんな事、考えたこともないわよ」

「そう？ 初心って大事だと思うんだけど？……ある意味アタシは希美に憧れて吹奏楽始めたからね。」 原点 っつて楽器を吹くモチベーションにならない？」

「……アタシは、何となしに中学から始めただけだから」

少し目を伏せる様にして、中川の問いかけにそう返す吉川。自分がトランペットを吹き始めた理由は、一体何なのだろうか？ そんな事、

とうの昔に忘れてしまっていた。

「……そう」

少し寂しそうな表情を見せる吉川に対し、中川はそれだけ返す。まあ経験が長ければ長いほど、始めたキツカケなんて忘れてしまうものなのだろう。

「じゃあ、アタシ行くわ。希美待たせちゃうし」

そして、そのまま荷物を持ち上げると、中川はその場から去って行く。対して吉川は、何か考え込む様な表情をしていた。

「あー、やっぱ久々にプール入ると楽しいわ」

「部活で行く暇なんて殆どないからな」

しばらくすると、プールから上がった忍と滝野が、喋りながら戻って来た。

随分と遊んできた様で、もうすでに薄らと日に焼けている。

「俺、ちよつとジューズ買ってくるわ」

「おー、いつてらー」

そんなやり取りをすると、そのまま滝野は自販機の方へと向かって行く。そして忍一人、吉川の元へ戻って行った。

「ただいまー。あれ？、なつきちどつか行つたの？」

「うん。友達と会うんだって」

忍がそう聞くと、簡単に吉川はそう返す。しかし、忍は吉川の異変にすぐさま気付いた。

「……なに難しい顔してんの？優子？」

「……してない」

「お前って本当に顔に出やすいな」

中川と同じ様な事を忍に言われ、今度はぶすつとした様な表情になる吉川。やっぱり顔に出やすい様だ。

「……忍は、何でトランプペット吹き始めたの？」

「はあ？」

突然真面目な話をして来た吉川に対し、素っ頓狂な声を返す忍。

「そう言う話をアイツとしてたの。アンタは覚えてる？自分がトランペット吹くようになったキツカケ」

そして何か期待するような、それでいて不安も混ざったような目で吉川はそう聞く。

「まー、覚えてるよ。母さんが市民楽団でトランペットやってたからね。その影響」

プールで濡れた髪やら体やらをバスタオルで拭きながら、そう答える忍。

「てか、何でそんなこと聞くのさ？」

至極真つ当な忍の質問に、吉川は考え込む様な表情になる。

「アタシは始めたキツカケが曖昧だから、ちよつと気になったのよ。アタシがトランペットを吹いている理由はなんなのかなーって」

悩みが表れている様な吉川の発言に、忍は心底不思議そうな表情に変わる。

「別に、キツカケなんて忘れても良いんじゃない？今は吹いてて楽しいんでしょ？」

そして当たり前かのように忍がそう言い放つと、それは盲点だったのか、吉川は目を丸くする。

「そう言うものなのかな？」

「そう言うもんでしょ」

トランペットを吹くのが楽しければそれで充分。そこには過去も未来も関係無い。それが秋川忍の考え。

”今”、この瞬間に自分が音に対してどう向き合っているか。

それは、忍が昔から肝に銘じている事でもあった。

「……アンタって、ホント音楽だけにはストイックと言うか……」

「だって余計じゃない？」

忍の良さは、ここにある。普段はおちやらけ、やりたい放題の彼だが、ひとたび音楽の事となると誰よりも真摯に向き合い、誰よりも真

剣に取り組むのだ。

「それで、忍はお母さんの影響でトランペット始めたって言ってたわよね？やっぱり上手いの？」

続いて吉川は忍の母について聞く。この忍の音楽に対する考え方を教えたであろう母親は、どんな人物なのかと気になったのだ。

「もちろん。何でプロじゃ無いかって思うくらい上手かったよ。今でも目標は母さんだし」

「へえー、アンタがそう言うほどの実力者ねえ。確か市民楽団に居るんだっけ？今度聴いても良いかしら？」

吉川が興味津々にそう言うと、忍は少し困った様に笑った。

「えっ、あー、うーん………そういや言ってたか………」

まですつたと言う風に忍がそう言うと、吉川は首を傾げる。

そして、少し言いにくそうに忍は口を開いた。

「俺の母さん、もう死んじやってるんだよね」

「……………えっ？」

今までの話が全て消え去ってしまう様な、忍の発言に、吉川の頭は真っ白になってしまった。

母親

「忍は、トランペット好き？」

「うん、好き」

「そっか、良かった」

それはいつだったか。無機質に感じるほど白い病室で、とある親子が会話をしていた。母親の方はベッドから上半身だけを起こした状態。

忍と呼ばれた子供の方は小学5年生ぐらいだろうか、まだまだ幼さの残る顔立ちをしている。

「じゃあ、お母さんとどっちの方が好き？」

「……トランペット」

親子でありがちな、意地悪な質問。反抗期の子供らしく、忍はふいつと顔を逸らしてそう答える。しかし母親はそれに怒る事は無かった。

「ありゃ？、悲しーなー？ついこの間までお母さんって即答してくれたのに」

少し意地悪な笑みを浮かべて、母親はそう言う。この年頃になると揶揄われている事も理解しているので、忍は更に不機嫌そうな表情になった。

「昔の話じゃん。もういいでしょ？そんな事！」

「もー、素直じゃ無いんだからー」

ムキになる忍に対し、母親はケラケラと笑ってそう返す。病人とは思えない様な澁刺とした女性だった。

「じゃあ、お母さんが死んじゃっても悲しまないのかなー？」

「……全然。へーきだし」

続けて揶揄う様にそう言う母親に対し、忍は見栄を張るかの様に、気丈にそう返す。

しかしそこは子供。本心では無いことが丸分かりだった。

「あら悲し。こんな子に育てた覚えは無いんだけどなー？」

そしてわざとらしく落ち込む様子を見せる母親。それに忍は少し心配する様な表情に変わった。

「……………やっぱ悲しい」

子供の想像力というのは豊かなもので、自分の母親が死んでしまった時を想像してしまったのか、今度は素直にそう言う忍。

「……………そっかそっか。お母さん嬉しいなー」

それを聞いて、母親は嬉しそうな笑みを浮かべる。

「もう、変な事言わないでよ。退院したら、また一緒に吹くんでしょ？」

そして恥ずかしがる様に忍がそう言うのと、今度は母親が少し言葉に詰まってしまう。表情を見ると、瞳が少し揺れていた。

「……………そうだね。一緒に吹くもんね」

「……………泣いてんの？」

震え声でそう返す母親に対し、忍が心配そうにそう尋ねる。その顔を見られまいと母親は一瞬忍から顔を背けると、「ふうー……………」と一息ついて再び笑って忍の方へ向き直った。

「もうちよつとだから我慢してね？もうちよつとだから……………」

そして忍の頭を撫でながら、母親は名残惜しそうに、自分に言い聞かせる様にそう言い放つ。

子供と言うのは、案外鋭い。

このやり取りが、”お母さんはもう先が長くないんだな”と、忍が確信した瞬間だった。

失言。まずったと言う風に、吉川は顔が青ざめて行く。思い返せば、おかしな所はいくらでもあった。毎日家族日替わりで弁当を作っている事。スーパで凧花と出会った時も、夜ご飯は忍が作っていると言っていた。それに加え、忍の口から母親の話が出るなんて殆ど無かった。そして今、忍が母親の話をする時も、全て過去形だった。身内の死という、大きすぎる地雷を吉川は踏んでしまったのだ。

「えっと……その……」

人間、こういう場面に直面すると、言葉が出なくなってしまう。

「……なんつー顔してんのよ。そんな気に病む事でも無いでしょ」

すると、忍は苦笑いになって吉川を慰める。気を遣ってくれているのは丸分かりだった。

「でも……」

しかし吉川はなんとも言えない表情でそう返す。悲しむというよりは、困惑していると言った感じだ。わざとでは無い。なら、謝れば良いのか？しかしそれは吉川にとって少し違う様な気がした。

「……もう5年も前の話だからねえ。もう自分でも受け入れてるっ
ての」

すると、何処か遠くを見つめる様にして、忍はそう呟く。それは、初めて見る顔だった。

秋川忍は、明るい性格だ。それはもう、底抜けに。普段のパート練でも、去年上級生から嫌がらせを受けた時でさえも、彼は明るく振る舞っていた。

そんな彼が初めて見せる、寂しげな表情。

それを見て。吉川は理解した。それ程に、忍にとって母親は大きな存在だったのだろうと。受け入れてるとは言っていたがその実、まだ寂しさが残っているのだろうと。

「え、えっと、その……し、忍!!」

「は、はい?」

いきなり吉川から名前を呼ばれ、中途半端な返事を返す忍。

吉川は頭の中でどの言葉が一番忍にとって良いのかを巡らせる。

「ぎ、寂しくない？」

しかし、どの様な言葉を掛けていいのか分からず、こんな事を聞いてしまった。

「うーん……寂しい、のかな？……今は凜花も親父も居るし楽しいんだけど、ふと思いで出すと、ちよつと変な感じになる時もあるよ」

少し考える仕草をして、忍は吉川の問い掛けにそう返す。やっぱりいつもの表情とは違った。

「そっか……ねえ、忍」

「何？」

「えっと、その……」

吉川は続けて何か言葉を出そうとするが、口籠ってしまふ。何か力に、寄り添える事は無いかと考えを巡らせている様だが、中々答えが出ない様だ。

「ただいまー。って、あれ？中川は？」

すると、タイミングが良いのか悪いのか、滝野が片手に缶ジュースを持って帰ってきた。

「おー、タツキー。なんか友達と待ち合わせしてんだってー」

いつものへらりとした表情に戻り、忍はそう返す。

「そっか。じゃあどうする？まだ遊ぶ？」

「もちろん。休みなんて今日と明日しか無いんだから、時間ギリギリまで遊ぶべよ」

滝野がそう聞くと、忍は挑戦的な笑みを浮かべてそう返す。まだまだ体力は余っている様だ。

「まだ流れるプール行ってなかったでしょ？そっち行かない？」

「お、いいな」

忍の提案に、滝野も遊ぶ気満々なのか、すぐ乗っかる。

「おーい！」

「アツキーせんぱーい!!」

すると、遠くの方から加部と吉沢も戻って来た。

「おかえりー。今から流れるプール行くけど、一緒に行く?」

「お、いいねー。アタシ達も行こっか?」

「ですね!」

忍から誘われ、加部と吉沢も同意する。

「優子も、せっかく来たんだから泳いで行くべや」

そして忍はニコリと笑って、吉川の方へ向き直ってそう言う。先程まで重い話をしていたので「ああ、うん……」と、吉川はどこか気の抜けた生返事を返してしまった。

「あい。じゃあ、出発ー」

忍が声を掛けると、加部、吉沢、滝野の3人は流れるプールに向かって歩いて行く。吉川は上にTシャツを着ていた状態なので、そそくさと上を脱ぎ始めた。

「……心配してくれてありがとね」

そのタイミングを見計らったかのように、ポツリと、吉川にだけ聞こえる様に忍はそんな言葉を呟く。

それに対し、少しだけ目頭が熱くなる吉川だった。

合宿開始

短いお盆休みは瞬く間に過ぎ、それが明けるとすぐさま合宿に入る。近くの施設を借りての2泊3日での詰め込み。

合宿と言えばワクワクする者もいるかも知れないが、部活動に所属している人間から言わせれば、地獄の始まりと同じなのだ。

「はいー、UNOって言ってるじゃないー」

「ああー、んだよもー!」

そして今、合宿所まで行く移動のバスの中では、忍と滝野、塚本と言う男子組が暇潰しにと、移動中のバスの中で器用にカードゲームをしていた。

バスの中なのに良く酔わないものだ。

「……アンタら、遊びに行くんじゃないのよ?」

その光景を見て、ひとつ前の席に居た吉川が少し呆れた様な表情で注意する。

これから地獄に向かうと言うのに気楽なものである。

「良いじゃんかよー。合宿始まったら遊ぶ暇なんて殆ど無いんだしー」

対して忍は、少しぐらい良いではないかと言う風に、口を窄めて屁理屈を述べる。

それを聞いて、吉川は額に青筋を浮かべた。

「今からでも気を引き締めなさいって言ってるの!もう、没収するわよー!」

「ああ!、もう少しで上がったのに!」

そして強引に、もう少しで上がったであろう忍の手札を奪う。

「あはは……相変わらずだね」

「そうね」

別の席、そんなやり取りを聞いていた黄前が苦笑いでそう言うのと、隣の席に座っていた高坂が一言、それだけ返す。

最早こんな光景が日常になる程、この2人のコントは部活に馴染ん

でいた。

「おおー……広い……」

合宿所に着くと、滝野が感心した様にそう呟く。練習室は北宇治の音楽室と比べ、2倍以上はあるかと思われるほどの広さだった。

「これなら、トロンボーンをユーフォに当てる事もないんじゃない？」

「あはは……そうですね。久美子の小言も聞かなくて済みそうです」

揶揄う様に忍が塚本に対してそう言うと、心当たりが沢山あるのか、苦笑いになってそう返す塚本。

トロンボーンのスライドアタックが無いだけで、互いに伸び伸びと演奏が出来ると言うものだ。

「おはようございます」

「おぎつす！」

すると、滝先生も練習室にやって来た。忍達に軽く挨拶をすると、男子組も挨拶を返す。

「早いつすねー滝先生」

まだ準備中で練習が始まる前だがもう来ている滝先生に対し、感心した様に忍がそう言う。

「ええ、美智恵先生に全て任せるわけにはいきませんからね」

「良いつすねー。顧問の鑑です！」

「何様だよアツキー」

偉そうにそう言う忍に対し、滝野からツツコミが入った。

「いえいえ、やりがいのある仕事ですから。苦ではありません。……それに、私には妻も子供もいませんからね」

すると、滝先生はニコリと笑ってそう言う。

「仕事くらいしか、やる事が無いんですよ」

そして続けて少し寂しそうにそう言うと、滝先生は練習室の中に

入って行った。

「やっぱスペースがあると吹きやすいな」

「そうね。窮屈さが無くなるし」

練習前、合宿所の雰囲気、具合を確かめながら各々合奏練習の準備をする。

やはりいつもとは違う環境で吹くとなると一層身も入るのか、皆早く練習をしたかったと言った雰囲気だ。

そしてそんな練習室に滝先生が入って来て、いつもの様に段の上に立つ。

「では、まず練習を始める前に、皆さんに紹介したい方が居ます。どうぞ」

しかしすぐさま練習とは行かず、滝先生がそう言うと言った練習室の扉が開かれ、1人の女性が入って来た。その人物を見て、部員から騒めきが起こる。

その人物は滝先生と同一年ぐらいの女性だろうか、滝先生の横に立つと、ひとつお辞儀をした。

「今日から、木管楽器を指導して下さい、新山聡美先生です」

そして、滝先生からその女性の紹介がなされる。

「新山聡美と言います。よろしく」

新山先生はそう言うと、ニコリと人の良さそうな笑みを浮かべた。滝先生と同一年ぐらいだからだろうか、大人の雰囲気をつた女性。「木管!?!」「やった!」などと、木管パートから喜びの声が聞こえる。

「午後は、木管は第二ホール。パーカッションと金管は、こちらで練習します。新山先生は若いですが、優秀です。指示にはきちんと従う様に」

「優秀だなんて、褒めても何も出ませんよ?」

滝先生がそう言うと、新山先生が冗談めいてそう返す。

「いえいえ、本当の事を言ってるだけです」

「まあ、滝先生にそう言ってそう言っていただけると、嬉しいですよ。なんだか小慣れたやり取り。そんな光景を部員の前で見せるので、騒めきが一層大きくなる。」

「なにになに!？」

「マジなやつ!?マジなやつ!？」

なんだか良い雰囲気の二人に、もう根も歯もない噂話を始める部員達。

「あら、強力過ぎるライバルが出て来ちゃったわねー」

すると、吉川が隣にいた同じパートの女子に、揶揄う様に小声でそう言う。

「……………」

対してその女子、高坂は死んだ魚の様な目をして、無言を返すのみだった。

「タツキー。今日は滝先生に散々言われてたねえ」

「厄日だよ。よりにもよって苦手なパートを重点的にやるとか」

そして夕食。パートで区切られた席では、今日1日の練習を振り返り、あーだこーだと意見を交わす。

トランプパートパートの席で夕飯のカレーを忍が頬張りながらそう聞くと、滝野がゲンナリとした表情でそう返した。

「もう一回お願いします」って言葉、今日だけで何回聞いたことか。合宿だからいつもより滝先生も厳しくなってるのかねえ?」

「あー、それ。木管も同じだったよ」

忍がそう言うのと、今度は加部が会話に入ってくる。

「木管って、新山先生?」

「うん。滝先生と同じでニコニコしてるんだけど、”もう一回”って言葉が何回も出てて、皆んなゲンナリとした顔になってたよ」

加部はサポートメンバーで他パートを行き来する事もあるため、木管パートの練習を覗く事もあった。して、その木管パートの練習はと

言うど、滝先生に負けず劣らずの厳しさだったと言うことだ。

「ほう……なる程……似たもの同士ってやつですかい。やつぱあの二人って、そういう関係なのかねー?」

忍が興味津々にそう言うど、高坂の肩がピクンと跳ねた。

「バカ言つてんじゃないわよ。噂だけで邪推するんじゃないの」
すると、諭す様に吉川がそう言つて来る。

「……でも、歳も近くて話題も合う……!!条件は揃つてるんでないか!？」

続けて面白がる様に忍がそう言うど、反比例する様に高坂の表情がどンドン青ざめていった。

そんな彼女を見ていた吉川は、面倒臭そうに一つため息をつく。

「はあ……そりやアンタの妄想でしょ?滝先生と新山先生が付き合つてるなんて事実、今のところ無いんだから変なこと言わないの」

高坂があまりにも落ち込んだ態度を取るので居た堪れなくなったのか、吉川はフォローする様にそう言った。

「まー、そーなんだけどね。明日にでも、滝先生に聞いてみよつかなー?」

「だから、やめなさいって!」

相変わらず自由過ぎる忍に対し、気苦労の絶えない吉川であった。

罪悪感

「はい、革命ー!!」

「はあー!?ちよつと待てアツキー!!タンマタンマ!」

夕食も終え、ここは男子の寝室。エネルギーの有り余った男どもの夜は終わる事なく、日中の合奏練習の熱気にも勝る勢いで、トランプゲームをしていた。

「はい、俺上がりー。タツキー、また大貧民ね」

「ぎっけんなよ!もー!!」

今日何回目か数えるのも億劫な程、大貧民をこなしている滝野が哀しき雄叫びを上げる。

「あらあら、大貧民が何か戯言を言ってますわよー?」

「そうですわねー。無様ですわー」

忍が挑発する様にそう言うのと、乗っかる様にパークスのナツクルこと田邊がそれに乗っかる。

それで神経を逆撫でされた滝野は、手元にあつた枕を忍に向かって思い切り投げつける。

「うぶっ!!……つたなこの!!」

「ぶえっ!!」

そして忍がやり返しのために投げた枕は滝野には当たらず、3年とトロンボーンパートリーダーの野口に当たった。

「こんの、お前!!」

そしてそれが皮切りとなり、大富豪そつちのけで今度は枕投げ大会が始まる。それに便乗する様に一年の塚本や瀧川も加わり、もう大騒ぎとなっていた。

ガチャリ!!!

すると、勢い良く入り口の扉が開く。

「貴様ら!!こんな時間に何をして……うぶっ!!」

「「「あ……」」」」

誰が投げたか分からない枕。その軌道は、一番当たってはいけない人の顔に直撃した。

「……………貴様ら、全員表へ出る」

それは枕が当たったからなのか、それとも怒りで染まっているのか。般若の様な表情を浮かべ、枕をぶつけられた松本先生が震える声でそう言い放った。

「……………何してんの？」

「反省。あと30分」

廊下で正座している男どもを見て、吉川が軽蔑した様な目線に向けてそう言うと、忍が反省の色を一切見せずにそう返す。

「また何かやったの？」

「ちげーよ、今回はタツキーだよ」

「アツキーもだろ……………」

全責任を滝野になすりつけようとする忍に対し、すぐさま滝野本人からツツコミが入った。

「なんで俺まで……………」

そこには、絶対に巻き込まれたただけであろう後藤の姿も見える。その状況を察し、吉川は「はあ……………」と一つ大きなため息をついた。

「相変わらず元気な事で。明日も明後日もあるんだから、程々にしときなさいよ?」

「徹夜したって動けるよ」

呆れた様に吉川がそう言うと、なんとも無い様に忍は生意気な返事を返した。

「少しは反省しなさいってのー!」

「いだーい!!足触んのは無しだ!!」

そんな忍に対し、吉川は揶揄う様に正座でダメージを負っている忍

の足を突く。

やはり反省の色はあまり無い様だ。

「あー……まだ痺れる……」

松本先生による正座から解放され、少しふらついたぎこちない歩き方をしながら、忍は自販機へと向かう。ジャンケンで負けたので、男子組の飲み物を買わなければならないのだ。

合宿所の自販機は休憩室にある。廊下から忍がその入り口の扉を開くと、そのテーブルの一角で、電話をしている少女の姿が確認出来た。

「うん、うん。……どうかな?」

その少女は電話で会話しながらも忍の存在に気付き、軽く手招きをする。忍もそれに従って、少女の方へと歩いて行った。

「うん、……そんな事ないよ。……分かった。じゃあね」

そしてそう言うと、少女は電話を切る。

「松本先生にこっ酷く怒られたんだって?アツキー?」

「えー?もうその話広まってんの?なつきちは耳が早いですなあ」

揶揄う様にそう言う少女、中川に対し、忍は困った様に笑ってそう返す。

「相変わらずだねー。悪事も程々にしときなよ?」

「分かってますよー」

中川の忠告にそれだけ返すと、忍は自販機の前へと歩みを進める。

「……ねえ、アツキー」

すると、中川はどこか真剣な口調で、忍の事を呼ぶ。

「んー?何ー?」

中川の問いかけに対し、忍は自販機にお金を入れながら、気の抜けた返事を返す。

そして少しの間が空いた後、中川は思い詰めた様に口を開いた。

「……………希美の事、どう思う?」

「え、希美って……………かさみーの事?」

いきなり傘木の名前が出てきて困惑したのか、聞き返してしまう忍。

「うん。アツキー、希美の事恨んでないかなって思ってた……………」

申し訳なさそうな顔で、そんな事を聞く中川。それに対し、リクエストされた飲み物のボタンを押しながら、忍は大きいため息をついた。

「はぁー……………なつきちはさ、俺がかさみーの事恨んでると思ってるの?」

「……………恨まれてもおかしく無い事を、希美はしたと思ってるよ」

缶ジュースを取り出しながらそう言う忍の問い掛けに対し、中川は目を逸らしながらそう答える。その言葉を聞いて、忍は再び一つ、大きなため息をついた。

「あれは結果論じゃん。確かに結果的には当時の3年生と対立が深まる事になったけど、かさみーのせいじゃ無いでしょ?」

こんな話、パート練習で傘木が忍の元へ謝りに来た時に解決した筈だ。当時の事を忍はもうどうとも思ってた無いと、本人の前で言った筈なのだが……………

「……………じゃあ、なんであすか先輩は……………」

「……………どう言う事?」

ポロツと、中川の口から意外な人物の名前が出る。自販機から飲み物を取る手を止め、顔を中川の方へ向けて忍が突っ込む様にそう聞くと、まずったと言う風に中川は口を塞ぐ。

しかしもう後の祭り。中川は観念した様に口を開いた。

「……………あすか先輩が希美に復帰の許可を出さないのは、アツキーも知ってるでしょ?」

「うん。……………って言うか、何であすか先輩?戻りたいなら勝手に戻ればいいじゃん」

これは傘木が忍の元に謝りに来た時もそうだが、忍にとっては何故傘木が副部長である田中あすかに拘るのか、全く分からなかった。

「……あの子、部活を辞める時にね、あすか先輩に相当キツイ事言われたんだ」

「……キツイって、何言われたのさ？」

悲痛な表情でそう言う中川に対し、忍はそう聞く。そして言おうか言わまいか少し悩んだ後、中川は腹を決めたように口を開いた。

「『アツキーを辞めさせておいて、自分だけ逃げるつもり？』ってね。それが相当堪えたみたい」

「……」

当事者である忍は、何も言えなかった。確かに自分自身はもうあの事については水に流している。しかし第三者がそれを許すかどうかは、また別問題。

忍の頭に浮かんでいたのは、傘木が謝りに来た時、何とも言えない複雑な表情をしていた吉川の姿だった。

「……それが、かさみーがあすか先輩にこだわる理由？」

「……うん。でもね、同時に引き留めてくれたのも、あすか先輩なの。『今希美ちゃんが辞めたら、アツキーに対して顔向け出来なくなるよ』って。……でも、希美は自分だけ部活をやり続ける罪悪感に耐えきれなくなつて、辞めて行った」

「……」

そんな理由があつたと知って、再び言葉を失ってしまう忍。

たればだが、忍は後悔していた。もしあの時勢いに任せて自分が部活を去らなければ、傘木も部活を辞める事は無かつたのでは無いかと。

「……実はね、希美に部活に戻らないかって言ったの、アタシなんだ」

そして、中川はカミングアウトする様にそう言う。対して忍は、意外そうな顔になった。

「え、そうなの？……てつきりかさみーが自分から戻るって言い出したのかと……」

「……うん、むしろ逆。アタシが誘った時、最初は断られたんだ。」

『アツキーに見せる顔がない』って」

中川にそう言われ、バツの悪そうな顔になる忍。

「そんな事思わなくても……」

「そういう子なの。希美は。アツキーも知ってるでしょ？」

中川にそう言われ、口籠もってしまふ忍。

傘木希美と言う少女は、常に人の中心に居れる程、リーダーシップの強い人間だ。

そしてそれに応じるように責任感も持ち合わせている。

あの事件での秋川忍に対する”罪悪感”。それを一番感じているのは、紛れもなく傘木だったのだ。

「でもね、それじゃダメだって思ったんだ。そのままだと希美が一生後悔すると思ったから」

「……だから、なつきちはかさみーを部活に戻そうと？」

「うん。それから何回も何回も説得して、ようやく希美も部活に復帰するって言ってくれた。……でも、あすか先輩は……」

「……復帰の許可を出してくれないと……」

その先を読んだように忍がそう言うと、中川は一つ、大きなため息をついて空を仰いだ。

「なあんでだろーなー？『アツキーの事ですか？』って聞いたら、そうじゃないって言うし……」

寧ろそれ以外に理由は無いと思っていたのだが、そうでは無いとすると、何が原因で田中が傘木の部活復帰に許可を出さないのか、中川には見当も付かなかった。

2日目

合宿も2日目。練習は初日より濃密に、厳しく行われる。早朝から合同での声出し。その後はパート練習。

そして午後からは、ひたすら合奏練習だ。

「では、10回通しに移ります」

「はー」

10回通しとは、計12分ある課題曲と自由曲を休み無し連続で10回、通しで演奏する。12分間ぶっ続けで吹いて2分休憩。そしてまた12分吹く。その繰り返し。

2時間半を悠に超える演奏。正に体力との勝負。一瞬でも気を抜くとすぐさま滝先生の注意が飛ぶので、常時神経を張り詰めなければならない。

なので最後の方は、返事を返す余力も無くなる程疲弊する。

「では、20分休憩にします」

「「あー……………」」

ようやく地獄の演奏ループから解放され、各々から安堵にも似たため息が出て来る。

「……………」

「……………忍?」

皆グロッキーになっている中、忍はジツと何か考えるように楽譜を見つめていた。

吉川はそれにすぐさま気づき、声を掛ける。

「ん?、ああ、ちよつとね。もうちよつとで掴めそうなんだけど

……………」

「掴めるって、何が?」

何だか的を得ない忍の発言に対し、吉川は首を傾げる。

「うーん、曲の感じ…………じゃ無いけど、なんて言うか、もっと色んなことが出来そうって言うか……………」

「?、今の自分の演奏に不満な訳?」

尚も曖昧な言葉を繰り返す忍に対し、更に吉川の疑問は深くなる。

「いや、むしろ逆。今まで吹けなかったところが、吹けてる感じ。……なんだけど、凄く違和感があるのよねん」
ひょうきんにそう言う忍だか、表情は困惑し切っていた。
調子は悪くない。むしろ良い方だ。しかし、今現状の演奏に違和感を覚えている。だからこそ、”もう少しで掴める”との言い方をしたのだ。

「……変なの。吹けない部分があるとかじゃ無いの？」
「どうもそんな感じじゃ無いんだよなあ……」

天井を見上げ、その違和感がなんなのか分からず居心地の悪そうな表情を浮かべる忍。

「分かんないから、ちよつと外で吹いてくるわ」

考えるより吹いて確かめる方が早いと判断したのか、忍はそう言つてトランペットを手に持ち、練習室から出ていく。

その光景を吉川は心配そうに、対して高坂は無表情で見つめていた。

「……やっぱり、何か違う……」

一フレーズを吹き終わり、自分の演奏にそんな評価を下す忍。何度も練習した部分でミスも見当たらないが、忍には何だか自分の演奏が淡泊になっているような気がした。

「おー、悩んでるねー、少年」

すると、吹き終わったタイミングを見計らったかの様に、忍の後ろから声が聞こえる。

「あ、橋もっさん」

ゆっくり振り返ると、そこには臨時コーチの1人である橋本先生が居た。

「……盗み聴きは良くないですよぞえ？」

意外な人物の登場に少しばかり驚くも、忍はいつも通りにひょうきんにそう返す。

「悪い悪い。良い演奏が聴こえて来たもんでね。……それで？君は何を悩んでるのかい？」

軽く笑って橋本先生がそう言うと、忍も困った様に笑った。

「何か変なんですよね。調子は良いんですけど、音に違和感があるって言うか……」

考え込む様な仕草で忍がそう言うと、橋本先生は心底驚いた様な表情になる。

「今の演奏でかい？……確か秋川君、だっけ？君はいつからトランペット吹いてんの？」

「5歳の頃からなんで、10年ちよいです」

「そっか、10年かあ……」

忍のその言葉を聞き、今度は橋本先生が何やら考え込む様な仕草をする。

橋本先生は、プロのパーカス奏者だ。つまりは彼の周りの一緒に仕事をする人間も、一流の演奏技術を持っている。それ即ち、普段から最高の音を聴いていると言う事であり、音の良し悪しを判別できるという事でもある。

そんな彼が聴いた忍の音とは……

「正直、驚いてるよ。今聴いた限りだと、秋川君の演奏は高校生レベルじゃ無い。……むしろ下手なプロを名乗る人間よりも上手いかもしれない」

橋本先生の褒め言葉に、大きく目を見開く忍。

「ホントですか？またいつもの冗談だったりして？」

「いや、これは本心だよ。僕だってプロだからね。何の音が良いのか悪いのかぐらい分かるよ」

いつもの冗談を飛ばす姿とは違い、橋本先生はしっかりと忍を見据えてそう言い放つ。

満更でもないのか、忍は照れる様に頬を掻いた。

そして、続けて橋本先生は口を開く。

「……君の感じている違和感は、実はものすごい良いことなんだ。楽譜通り、自分の感情を乗せる様に演奏は出来てるんだけど、”何か”が足りない。……これは、本来ならプロがぶち当たる壁なんだけだね」

楽器の熟練度と言うのは、言わずもがな経験がモノを言う。プロになれるレベルに研鑽を積んで来た人間にしか、この感覚は分からない。

”楽譜通りに吹く”のは、もういつでも出来る。目指すのは、その先。

「それって、自分だけの唯一無二の音楽を創り上げている証拠なんだよ」

そこからは、”楽譜以上の自分の理想の音にどれだけ近付けるか”と言う話になって来るのだ。

それを身につければ、橋本先生の言う通り唯一無二の”自分にしか出せない音”が完成する。

そして秋川忍と言う男は、その領域に手を伸ばしつつあった。

「……秋川君は、もう進路とか決めてるの?」

「え?」

不意に、橋本先生からそんな事を聞かれ、気の抜けた返事をしてしまった。

「トランペットの学科に良い先生が居る大学があつてね、もし良ければなんだけど、興味ないかなーって」

「え?、う、うーん……考えた事も無いですネ」

橋本先生から進路の話をされて、タジタジとなる忍。

彼はまだ2年生。いきなりこんな事を言われても、まだ呑み込めないと言うのが本心だった。

「ああ、ごめんごめん。いきなりだったし、まだ2年生だもんね。今の言葉は忘れてくれて良いよ」

「あ、あはは……………」

カラカラといつも笑い浮かべながらそう言う橋本先生。それに対して忍はどう反応して良いのか分からず、苦笑いを返してしまつた。

「…………滝君から聞いたけど、秋川君は去年のソロコンで最優秀賞取つたんだってね？」

すると、今度はソロコンの事について聞かれる。

「ええ、まあ。偶々ですけど」

「またまたー。謙遜しないで良いよ。…………って事はやっぱり、秋川君はソリスト気質なのかな？」

「どうですかね？合奏で合わせるのも悪くは無いと思いますけど」

本人に自覚は無いが、忍は自分の奏でる音楽の世界観に他人を惹き込む能力が群を抜いて高い。

つまりソリストの素質は十二分に持っているのだ。

「良いねー。広い視野を持つ事は大事だよ。…………でも、今の演奏を聴いた限りだと、俺はソロで吹く方が秋川君の魅力が出ると思うんだよねー」

「褒めすぎですよー、橋もっさんー」

橋本先生にベタ褒めされ、満更でも無さそうな表情を浮かべる忍。相手はプロである。

そんな人からこの様な言葉を貰えるのは、かなり嬉しい事だった。

「…………随分と長く喋っちゃったね。ごめんなー。貴重な休憩時間を無駄にしちまって」

すると、橋本先生は自身の腕時計を確認して、申し訳なさそうにそう言うて来る。もう既に所定の休憩時間の20分が経とうとしていた。

「いえいえ、それ以上に良い話が聞きましたから」

「おー？調子の良いこと言うじゃ無いの？」

「事実ですよん」

それぞれ軽口を返すと、忍は足早に練習室へと戻って行った。

信用

「今の感じで良いですが、この曲は、単純なトリフラットメジャーが随所にある曲です。そこを綺麗に合わせる様、意識しましょう」

「はいー」

その後も合奏練習は続く。今度は通し練習では無く、滝先生が確認する様に要所要所のパートを繰り返し練習する様な形態となっていた。

「あと、スネアが少し後ろに感じるよー。もっと前に！」

「はい!!」

橋本先生からも注意が入り、田邊が元気の良い返事を返す。

「それと、ティンパニ！」

「はい！」

「今のところ、ワンテンポ早かったろ」

「……はい！」

「今そんな事やってどうすんのー？罰金ものだよ？」

「はい！」

「では、もう一度頭から」

滝先生に求められる音は、日に日にレベルが高くなって行く。次は関西大会。どこまで行ってもまだ足りないと思うのは、先生だけでなく部員もだ。

「なあ、滝君」

すると、演奏の合間に、橋本先生が滝先生に声をかける。

「オーボエのソロ、あれで良いの？」

続けて橋本先生がそう言い放つと、滝先生は考え込む様に、新山先生は困った様に笑った。

「いやー、音も綺麗だし、ピッチも安定してる。けどねー、一言で言うと……」

そして橋本先生が頭を掻いて北宇治唯一のオーボエ奏者、鎧塚みぞ

れに視線を移すと、

「ぶっちゃけつまらん。ロボットが吹いてるみたいなんだよ」

「……………ロボット?」

橋本先生のその言葉に、鎧塚は首を傾げてそう返した。

「楽譜通りに吹くだけだったら、機械でいい。鎧塚さん」

「はい」

「君はこのソロをどう吹きたいと思っている?何を感しながら演奏してる?」

橋本先生の問いかけに少し鎧塚は俯くと、

「……………三日月」

一言、それだけボソリと呟いた。

「じゃあもつと三日月感出さないとー」

「……………善処します」

「善処って言い方してる時点でダメなんじゃ無い?もつとこう、感情出せない?」

「……………すみません」

橋本先生の問い掛けに対し、再び俯いてしまう鎧塚。そんな光景を吉川は不安そうに、忍は真っ直ぐ真剣に鎧塚を見つめていた。

「謝る必要はないよ。クールな女の子って魅力的だと思うし」

そんな鎧塚に対し橋本先生は慰める様にフォローを入れる。

「でも、このソロはクールでは困る!!世界で一番上手いアタシの音を聴いて!!ぐらいじゃないとー!」

そして今度は感情のこもった口調でそう言い放った。

「……………誰かさんに似てるわね」

「……………俺って、あんな感じなの?」

「良い機会だから自覚すれば?」

そんな光景を見て、隣同士の吉川と忍が小声でそんなやり取りをし

ていた。

そして橋本先生は言葉を続ける。

「正直君たちの演奏はほとんど上手くなってる。強豪校にも引けを取らないくらいにね。でも表現力が足りない。それが彼らとの決定的な差だ。北宇治はどんな音楽を作りたいか、この合宿では、それに取り組んでほしい」

「はい!!」

橋本先生が最後に締める様にそう言うと、部員から返事が返ってくる。

「橋本先生も、偶には良いこと言いますね」

滝先生からも、感心した様な言葉が出て来た。

「いや、偶にはは余計だろ？ 僕は歩く名言集だよ」

いつも通りに軽口を飛ばす橋本先生に対し、部員からクスクスと笑い声が起こる。

しかし、鎧塚は考え込む様な表情をして俯いたままだった。

「アツキー先輩、そろそろお風呂行きますよ」

「えー？ もうそんな時間ですかい」

時刻は午後5時半。今日の練習も終わり、部屋でのんびりしていると、塚本が忍に対してそう言う。

「二応、一緒に入らなきゃいけない決まりですから。松本先生に見つかったらまた座らせられますよ？」

「……………ういー」

松本先生の名前を出され、忍は渋々と起き上がってお風呂の準備をする。

本来なら疲れを取るための入浴。しかしお風呂の時間であっても遊びたがると言うのは男子高校生の性みなのもので……

「……………くくくくつ」

イタズラの犠牲になっているのは、テナーサックスの1年の瀧川という少年。

シャワーで頭を洗っているところ、その背後から気付かれないように忍が追加のシャンプー攻撃を喰らわしている。

使い古されたイタズラなのだが、どうもこの瀧川と言う男子生徒は鈍い性格のようで、何の疑問も持たずに永遠とシャンプーの泡を洗い流していた。

そして他の男共も、その光景をニヤニヤしながら見つめている。

キユッ

しかし30秒以上も泡まみれのままだと流石に気づいたのか、瀧川は一旦シャワーの元栓を閉める。そして温度調整のノズルを最低温度まで回すと……

「だー!!冷たい冷たっ!!」

後ろに立っているであろう忍に向かって、再びシャワーの元栓を開けた。

「だはははは!!因果応報アツキー先輩!!バチが当たったんすよ!!」

尚も泡まみれの頭のまま、瀧川は冷水シャワー攻撃を忍に浴びせる。子供の遊びの様な光景だが、彼らはもう高校生である。少しぐらいは落ち着いて欲しいものだ。

「ふいー……………やっぱ疲れた身体には湯船に浸かるのが一番ですなあ……………」

「さっきまでちかおと二気に遊んでたじゃねーか」

それから少しして、湯船に浸かりながらおっさんの様な言葉を口にする忍に対し、隣に居た滝野からそんな言葉が返ってくる。

本来なら学年で入浴時間が分けられるのだが、男子は人数が少ないのでお風呂の時間が長く取れる。

1〜3年まで合同で入っている男子組は、のんびりと施設のお風呂を楽しんでいた。

「明日で最後かー、なんか早かったねえー」

「本当な。……まあ、思い出したくない事ばっかだけだな」

日中の練習の苛烈さを思い出したのか、苦笑いになって滝野はそう返す。

「そう？俺は楽しかったけど」

「アッキーはトランプペット吹ければ何処でも楽しいだろ？」

「まあ、そうだけど。……でも、いろんな経験は出来たと思うよ？普段部活していると、こうやって他パートの人達とあんまり話す機会なんて無いし、環境が変わった事で演奏にも一層身が入ったからねえ」

忍がしみじみとそう言うと、滝野も納得した様に頷く。

「……レベルアップしてるのは感じるよ。考える間もなくなっただけひたすら演奏してたからな。もう楽譜でいちいち確認しなくても身体が覚えちゃってる」

冗談めいて滝野がそう言うと、忍も同意する様に軽く笑った。

「……それでアッキー。少し聞きたい事があるんだが……」

すると、滝野はなんだか面白がる様な表情になり、小声で忍に対してそう聞く。

「？、何？」

対して忍は首を傾げる。女子高生程では無いが、彼らも同じ思春期の男子高校生。

色恋沙汰の一つや二つ、話をするものだ。

「お前、吉川とどこまでいったんだ？」

ニヤついた顔で滝野がそう聞くと、忍は少し顰めっ面になる。

「冷やかして聞くんなら、教えてやらない」

「そー言うなよ。もう部員の中では周知の事実みたいなもんなんだから。もう付き合ってたんだろ？」

続けて滝野がそう言うと、忍は一つため息をついた。

「付き合ってたないよ。告白もしてないし、されてもない」

忍のその言葉に、滝野は心底驚いた様な表情に変わる。

「マジかよ。もうとつくに付き合ってると思っただけだな。なんか付き合わない理由でもあんのか？」

滝野がそう聞くと、忍は少し考えるような素振りを見せる。

「……………いや、なんて言うか、このままで良いんじゃないかなって。無理に付き合って関係壊れるのも嫌だし。優子だってそんな感じだし」

「……………なんじゃそれ、変なの。好きなんだから付き合えば良いじゃん」

忍が吉川の事を好いている事なんて、滝野はもうずっと前から知っている。

しかし、忍の性格上、ヘタレて告白に踏み切れないと言う感じでもない様に思えた。

「違うんだよタツキー。……………なんて言うのかな？付き合ってたって、何か響きが嫌じゃない？」

「はあ？…何で？」

忍がそう聞くと、滝野は心底困った様な表情を浮かべて首を傾げる。

「付き合うって、他の男女に目移りしない様に、互いに縛り付けようって事でしょ？……………それって、相手を信用してない事と同じじゃない？」

「……………考えすぎだろ」

好きなら付き合えば良いじゃないか。

そんな固定概念を持っている滝野からしたら、この2人の奇妙な関係性は理解できないものなのかも知れない。

他の男に目移りする筈が無いんだから、わざわざ“付き合う”と言う契約を交わさなくても良い。寧ろ、それをすると相手に失礼。

そんな、吉川に対する絶対的な信頼。

なので忍にとって付き合うと言う事は、“吉川優子を信用していない”事と同義なのだ。

「……多分優子も、同じ感覚なんだと思う。言葉にはしづらいけどねー」

「……俺には、その感覚は分かんねーな」

考え方によっては、少し歪とも言える忍と吉川の関係。

理解はできるが納得は出来ないと言うのが、滝野の答えだった。

線香花火

2日目の夜は、花火の時間が設けられている。

キャンプファイヤーを囲んでの合宿の数少ない憩いの時間として、誰も彼も楽しんでるものばかりだ。

だからこそ、そうで無い人間は逆に目立つと言うもので……

「何しけた顔してんの？優子」

賑わいを見せるキャンプファイヤーから少し離れた場所で考え込むように座っていた吉川に対し、忍が花火を持ってそう聞く。

「……何でも無いわよ」

「お前って、ホント嘘つけないタイプよな」

言ってる事と表情が真逆な吉川に対し、忍は困った様に笑ってそう返す。

「……うるさいわねえ、お節介は結構よ」

対して吉川は不服そうな顔でそう返す。

「まあ、そう言うなって。せつかく花火持って来たんだし、一緒にやんべや」

そして忍は持って来た線香花火を一本、吉川に渡した。

「……花火って、綺麗だけど残酷だと思わない？」

「なんだよいきなり。詩人みたいなこと言うな？」

2人してしやがみながら線香花火をしていると、吉川が柄にも無い事を言ってきた。

「良いでしょ、偶にはこう言うのも。綺麗なのに、一瞬しかその魅力を発揮出来ない。燃え尽きたら、あとはバケツの中に入れられるだけの存在だし」

ボーッと線香花火を見つめながら、吉川は淡々とそう呟く。

「なるほど、そう言う考え方もありかな……そう考えると、なんかコ

ンクールと似てない？」

「え、なんでそこでコンクールの話が出てくるのよ？」

忍から意外な言葉が出て来て、吉川は目を丸くする。

「だって、毎日毎日練習してんのに、その真価を出せるのはホールでのたった12分でしょ？正に一瞬の輝きって感じで、花火っぽいじゃん」

「……なるほど」

忍の言葉に、納得したように頷く吉川。コンクールの良さを聞かれて、答えられる人は恐らくほとんど居ないだろう。

ここまで演奏の努力をして将来の役に立つかと言われれば、素直に首を縦には振れないし、毎日毎日キツイ練習をこなして臨んだとして尚、どの目線から言ってるのか分からない審査員から、評価シートに散々なことを書かれることもある。

ここまで聞けば、何故コンクールに全力を注ぐのか理解出来ない人もいるかも知れない。

しかし、彼らはそのコンクールに全力を注いでいる。

たった12分の一瞬の為に、自分達の全身全霊の美しさを音に乗せる。

それが将来的に間違っていないようとも、酷評されるかもしれない頭の中で理解していても、そこに全力で突き進む。

その健気さに、かけがえの無い美しさが生まれるのだ。

理屈では無いのだ。例えを言うならば、野球部の人間に『何故プロになれないのに甲子園を目指しているのか』と聞いているようなもので、北宇治のメンバーの中でも、プロの音楽家になる人間なんてほんの一握りだろう。

しかし、それでも、皆コンクールに向けて、全力で打ち込んでいる。一発、どデカイ花火を打ち上げる為に。

そして何かに対して打ち込んだと言う事は、大きな財産となる。

「……優子が悩んでるのって、コンクールの事？」

パチパチと音を立てる線香花火を見ながら、優しい口調で忍はそう尋ねる。

「半分正解、かな？……みぞれの事よ」

対する吉川も、線香花火を見ながらそう答えた。

「よろみー、……て事は、今日橋もっちゃんに言われた事？」

忍にズバリと言いついては、素直に頷く吉川。

「……あの子、繊細だから。今日言われた事で気に病んでないか
なって……本人はなんとも無い様だったけど……」

吉川は心配そうに呟く。鎧塚みぞれは、北宇治唯一のオーボエ奏者だ。彼女がダメになると、オーボエのソロを吹ける人間は居なくなる。

それに鎧塚は吉川と同じく南中の出身だ。それも吉川が気に掛ける一つの理由でもあるのだろう。

「なんか、よろみーって線香花火みたいよなー」

「は？いきなり何よ？」

少し勢いが無くなって来た線香花火を見ながら忍がそう言うと、吉川は首を傾げてそう返す。

「儂げで、繊細で、目を離したらポトつと落ちちやいそうな、どつか危うい感じ。よろみーにピツタリじゃない？」

「……まあ、確かに言ってるかも」

対して吉川も、線香花火を見ながら考え込む様にそう呟く。北宇治唯一のオーボエ奏者は、この線香花火の様に今にも消え入りそうな儂さと危うさを持ち合わせている。

「あ」

そして忍が名残惜しそうな声を上げると共に、線香花火の玉が地面にポトリと落ちる。

それは、あまりにも呆気ない光景だった。

「あーあ、終わっちゃった。もつと頑張れよ、線香花火クン」

「花火に根性求めてどうすんのよ……あ」

すると、吉川の線香花火の玉も地面に落ちて行った。

2人の線香花火が終わったのを確認すると、忍は背伸びをする様に立ち上がる。

「よろみーが線香花火なら、優子は、ロケット花火って感じだね」

そして、忍は揶揄うように吉川に対してそう言い放った。

「はあ？、ロケット花火い？」

いきなり自身が花火に例えられて、不思議そうな表情を見せる吉川。

「うん、ロケット花火。だって、一度着火したらどこまでも飛んで行くじゃん。向かう先は香織先輩に一直線！しかし、いつも受け流されるのだ……」

「余計なお世話よ!!」

口の減らない忍に対し、すぐさまツッコミを入れる吉川。

「……じゃあ、アンタはネズミ花火ってどこね」

すると、今度はお返しと言わんばかりに吉川がそう言い放つ。

「へえ、その心は？」

「そのまんまよ。あっちこっちフラフラ、何処へ行くか分かったもんじゃ無い感じがそのまんまじゃない」

「ははっ、返す言葉もねえや」

正にピッタリの花火の擬人化を言い当てられ、軽く笑ってそう返す忍。

「じゃあ、香織先輩は？」

「香織先輩はそりやもう一番大きい打ち上げ花火よ。……いや、そもそも花火と比べる事自体失礼。香織先輩より美しいものなんて無いんだから」

そして中世古の話になると途端に饒舌になる吉川。いつも通りである。

「タツキーは？」

「バケツの水」

「花火ですら無いじゃん」

その後は、誰があの花火つぽいやら、そんな話題で盛り上がる2人だった。

花火も終わり、就寝時間を迎えると、先ほどまでの騒ぎが嘘かの様に静まり返る。

合宿の疲れもあり、皆グツスリと寝ている者ばかりだ。

しかしそんな中、合宿所の渡り廊下を一人歩く影が確認出来た。忍である。

そして中庭の方まで足を運ぶと、そこに設置されたベンチに腰掛ける。上を見上げると、田舎の光景らしく、星空が綺麗に見えた。

ボーッと、忍はその光景を見つめる。

『秋川君は、もう進路とか決めてんの?』

今日の昼、橋本先生に言われた言葉。そんな事を、忍は思い出していた。

「……プロ、ねえ……」

一言、そんな事を呟く忍。彼はまだ2年生。進路を決めるのはまだ時期尚早かも知れないが、忍の頭の中で橋本先生のその言葉がなんだか引つ掛かっていた。

「……アツキー、プロになるの?」

「うえあ?!?」

突然、横から声が掛かり、素っ頓狂な叫び声を上げる忍。咄嗟に声の方向に顔を向けると、いつの間にか隣に鎧塚が立っていた。

「い、いつからいたの?」

「……アツキーが来る前からだけど……」

「全然気付かなかった……」

表情に変化がない顔をこてんと傾げる鎧塚。

「まーいいや。どしたのよろみー?こんな時間に」

そして忍は、薄く笑って鎧塚にそう聞く。

「……リズムゲーム。……眠れないから」

そう言う鎧塚が持っているスマホには、確かにゲームの画面らしき

ものが表示されていた。

「……それで、アツキーはプロになるの?」

続けて鎧塚は忍に対してそう聞く。

「うーん、……どうかな? 悩む以前にまだ分かんないってのが本心かも。まだ2年生だし」

手で後頭部を掻きながら、そう答える忍。それを聞いて鎧塚は「そう……」と、一言だけ返した。

「……とりあえず、お隣どうぞ?」

無言の時間が嫌だったのか、忍はベンチの間隔を開け、鎧塚に対してそう言う。彼女も無言のまま、忍の隣に座った。

「音無しでやってんの? リズムゲーム」

「……うん」

「楽しい?」

「……そこまで」

「じゃあ、ただの暇潰し?」

「……そうかも」

会話が成り立たないと言うのは、この事を指すのだろう。基本的に忍が一方的に話している状況だ。

鎧塚みぞれと言う少女は、内向的な少女だ。基本的に忍とは真逆の人間性である。しかし何故か忍はそれを苦にしていない。

どれだけ鎧塚から淡白な返事が返ってこようと、すぐさま話題を見つけては鎧塚に振った。

「……アツキーは、なんで吹いてるの?」

すると唐突に、会話の途中で鎧塚から逆に質問が飛んで来た。いきなりの問い掛けに忍も少し驚く。

「吹いてるって、トランペット?」

「……うん、この前、どうやってオーボエ吹きたいのか、私に聞いて来たから、アツキーはどうなのかなって……」

鎧塚の問い掛けに、忍は腕を組んで考える。恐らく、今日の合奏練習で橋本先生に言われた事も関係してるのだろう。

つまりは、あのソロパートをどのように吹けばいいのか、鎧塚自身も決めあぐねているのだ。

「……俺の個人的な感想だけど、楽器を吹く理由って、人それぞれだと思うんだよね」

「……どう言う事？」

抽象的な忍の言葉に、鎧塚は首を傾げる。

「上手くなりたいって理由にも色々あるって事。例えば『誰よりも上手になりたい』って気持ちで吹く人も居るし、『自分の理想に少しでも近付きたい』って理由で吹く人も居る。後は……そうだね、『自分の音を聴かせたい人が居る』とかもそうかな？」

「……アツキーは、どれなの？」

忍の説明を聞いて、鎧塚は答えを待ち侘びるようにジッと忍を見つめる。

「今言ったこと全部。俺は誰よりも上手くなりたいし、自分の音にも拘りたい。そして全世界を俺の音で魅了するのが、最終目標なんですぞえ」

相変わらずひょうきんに、しかし、確固たる信念を持って忍はそう言い放つ。

それを聞いた鎧塚は、考え込むように俯いた後、ゆっくりと視線を忍に移した。

「……それって、誰か一人の為に吹くだけでも良いの？」

救いを求めるような、そんな瞳。

少しばかりだが、この言葉で鎧塚の音楽の本質が見えて来たように忍は感じた。

「全然アリ。よろみーがそうしたいなら、絶対そうした方が良いよ」

そんな鎧塚に対し、真っ直ぐ彼女を見据えて忍はそう言い切る。

いつも無表情な彼女の顔が、少しばかり安堵の表情に変わった気が

した。

「……………ありがとう。私、もう寝るから」

そしてそれだけ言うと、鎧塚はベンチを立ち、宿舎の中へ向かう。

「うん、おやすみー」

「……………おやすみ」

忍が別れ際にそう言うと、鎧塚からも一言返事が返ってくる。先程よりも、声が柔らかくなってるように感じた。

明静のエース

「関西大会での演奏の順番が決まった」

合宿も終わり、ここは音楽室。松本先生の声が響き渡る。それを聞いて、部員から「来た……！」やら、「どうか一番じゃありませんように……」などの騒めきが起きる。

「静かにしろ……それで、北宇治高校は……」

松本先生の言葉に、皆真剣に耳を傾ける。

「16番目の演奏になる」

松本先生がそう宣言すると、再び教室が騒つく。23番中16番目。コンクールでは後の順番の方が印象に残りやすいと言われる為、悪くない順番だ。

「あの、他の高校は……」

すると、1人の部員からそんな質問がなされる。それを聞いて松本先生は『余計な事は考えるな』と言わんばかりにその部員をキツと並んだ。

しかし、滝先生は関係無いとばかりに口を開く。

「主な強豪校ですが、大阪東照は前半の3番目。秀大附属は12番目、そして明静工科は私たちの前、15番目になります」

「「ええ!?!」」

滝先生がそう述べると、部員から驚愕の声上がる。全国レベルの次に演奏なんて、プレッシャーどころでは無い。

「何ー?強豪校の次だからってビビってんのー?」

すると、揶揄うように橋本先生からそんな言葉が掛けられる。それに同意する様に「そりゃあ、まあ……」と、部員の誰かが弱音をこぼした。

「関係ない関係ない。関西大会と言ったらどこ向いても強豪校ばかりなんだから!」

「橋本先生の言う通りです」

軽い口調で橋本先生がそう言うと、滝先生も同意して来る。

「気にする必要なんてありません。私たちはただいつもと同じ様

に、演奏するだけです」

「「「はい!!」」」

締める様に滝先生がそう言うのと、部員達から元気の良い返事が返ってくる。

関西大会まで、後10日を切っていた。

「ただいまー」

「あ、兄ちゃんお帰りー」

今日も日が暮れるまで練習し、忍が家に帰ると、凜花がエプロン姿で出迎えた。

「今日の夜ご飯なにー?」

そんな凜花に対し、忍は靴を脱ぎながら献立を聞く。今日は凜花が夕飯の当番だ。

「生姜焼き。お米はいっぱいいるっ!」

「うん、よろしくー」

「あいよー」

そんなやり取りをして、自室にバッグを置き、一息つく様にベッドに座る忍。関西大会が近づくにつれて、日に日に練習時間が伸びて来ている。それでも練習が足りないと思うのは、今日発表された関西大会の演奏順が関係していると言ったところだろうか。

ヴー、ヴー

すると、ズボンの右ポケットから振動を感じる。誰かが電話を掛けて来た様だ。スマホの画面を確認すると、その発信主は忍も良く知っている人間だった。すぐさま通話ボタンを押す。

「もしもし?」まさっちゅ?」

『おー、繋がった。久しぶりやなあ忍。元気しよるかあ?』

スピーカーから聞こえて来たのは、元気そうな関西弁の男の声。

「久しぶりって、この前電話したばつかじゃん」
それに対して忍は慣れた様にそう返す。

『あら、そうやったっけ？まあええわ。ほいでな、関西大会の順番決まったんやけど』

「うん、俺も今日聞いた」

『ホンマか！なら話も早いわ。北宇治、ウチの次やってんな』

どうやらせっかちな性格のようで、電話越しの男は矢継ぎ早に会話を進める。

「うん、皆んなビビってたよ。『明静の次なんてー』ってね」

『あつははは!!なんやそれ、しようもない事でビビりよんなー』

「なんせ初めての関西大会ですから」

快活に笑い飛ばす男に対し、忍も冗談を返す。

「で、明静はどうなの？今年も大丈夫そう？」

『当たり前や。従兄弟のよしみとして教えたる。今年の明静は最高。後に演奏する連中が可哀想で仕方ないわ』

挑発的な声が電話越しから聞こえる。それに対し、忍もニヤリと笑った。

「ほーん、大した自信ですなあ、……でもそれより良い演奏したら、明静の演奏なんて霞んじやうかもねー」

『はっ！抜かせ！今年は自由曲で『俗謡』やるんや。明静ウチの他にあと

2枠、せいぜい恥ずかしい演奏せんよう頑張りや』

男は相当な自信家の様で、電話越しだがその自信満々な表情が思い浮かぶ様な口調でそう言い放つ。

「まー、頑張るとするよ。まさっちだつてトランペット、明静の1stなんでしょ？恥ずかしい演奏しないでよ？」

『そりやお互い様。北宇治の演奏ん時は忍がミスせんか見張つといたるわ』

「明静は北宇治の前で演奏するんだから、そんな事出来ないっつーの」

『あつははは！そりやそうやな!!まあええわ。取り敢えず話はそれだけな。凜花ちゃんと修介叔父さんにもよろしく言うといてな?』

「うん、わかったー」

嵐の様な会話を終え、忍は通話の終了ボタンを押す。そしてベッドから立ち上がり、リビングの方へと向かって行った。

「先風呂入るー?」

「いや、先に食べるよ」

リビングに来るともうすぐ晩飯と言ったタイミングだったので、忍は凧花にそう返し、食器やら何やらを出して晩飯の準備を手伝う。リビングには、生姜焼きの良い匂いが漂っていた。

「いただきますーす」

「いただきます」

秋川家の食卓は、基本凧花と忍で2人きりな事が多い。母はもう他界してるし、父親はいつも帰ってくるのが20時過ぎなので、時間が合わないのだ。

「あ、関西大会、順番決まったよ」

「お、やっど?で、北宇治何番目?」

付け添えのサラダにドレッシングを掛けながら忍が思い出した様にそう言うと、興味津々に凧花が聞いてくる。

「23番中、16番目」

「んー、結構良い順番だね」

一口、生姜焼きを口にしながら、明るい表情でそう返す凧花。

「で、俺らの前が明静」

「うっわ、プレッシャー」

続けて忍がそう言うと、今度は困った様に笑う凧花。

「オマケに今年の明静、十八番の『俗謡』やるからねえ。さつきもまさつちに変な煽られ方したし」

「え?、さつきの電話って、まさつちだったの?」

「うん」

先程、忍が電話していたのは分かっていたがそれが従兄弟だと分かって、予想外の表情を見せる。

『それでは、全国常連、明静工科の部員さんにインタビューをしてみましよう!』

すると、良いタイミングと言うべきか、点けていたテレビから吹奏楽の特集番組でもしているのだろう、女性アナウンサーの声が聞こえて来た。

『まずは、木管楽器! やっぱり綺麗な音ですねー』

アナウンサーはそう言いながら、部員達にインタビューをして行く。

「……北宇治にはこんなの来なかったんだけどなあ……」

それを見ながら、忍はわざとらしく口を窄めて文句を言う。

「明静だからインタビュも来るんじゃない? 北宇治も全国常連になれば、テレビの取材とかも来るでしょ?」

「一体何年後にそうなるかねえ……」

他人事のようにそう言う凛花に対し、憂う様に忍はそう返す。

『おー、なるほど……では、この明静工科で、エースみたいな人って居ますか?』

そして再びテレビの方へと顔を向けると、アナウンサーが明静の部員に対してそんな質問をしていた。

『あー、まさっちですかね?』

『やね。やっぱ篠田くんやろか?』

木管楽器を持っていた部員がそう言うと、カットが切り替わる。

『こんにちはー、君が篠田くんですか?』

画面が切り替わり、アナウンサーがそう聞くと、質問された男子生徒はニコリと笑ってカメラに向かって軽く手を振る。

短髪に少し日焼けした肌は、明るい印象の好青年と言った感じで、片手にはトランペットを握っている。

『彼、篠田正和くんはなんと、2年生でありながら明静のトランプットの1stを務めているんです!』

仰々しく紹介するアナウンサーに対し、照れ臭そうな表情を浮かべるまさつちこと、篠田正和。

「いいなあ、まさつち。俺もあんな綺麗な人にインタビューされたい……」

「やめてよ、デレデレした顔でインタビュー受ける兄ちゃんなんて見たくないし」

そんなまさつちを見て羨ましがる忍に対し、凜花は冷静にそう返した。

このテレビに映っている篠田正和と言う男は、忍と凜花の従兄弟に当たる。忍の母親の兄の息子で、奇しくもこの兄妹と同じトランプット吹きだ。

そして、強豪校で2年生ながら1stを担当している通り、実力は相当なものであった。

「あ、そういやまさつちが凜花と親父によろしくって言ってたよ」

「そうなの? 今度会ったらこつちもよろしくって言つといて」

「うん、まー、次会うのは関西大会の会場だろうねー」

その後は夜ご飯を食べながら、他愛も無い話をする。

しかしこの篠田正和と言う男が、今後忍の前に大きな壁となって立ちはだかる事となる。

不穩



早朝、忍が階段を登っていると、聞き慣れたオーボエの音が聞こえてくる。朝が弱くとも慣れれば早起きも出来ると言うもので、忍は足取り軽く、その繊細な音を聴きながら音楽室へと向かっていた。

「……この辺り、もう少したつぷり目で吹いてみたら？」

「……それが、感情って事？」

忍が音楽室に入ると、先客が居た。同じ楽譜を見合わせながら、吉川と鎧塚はソロパートの部分を試行錯誤している。

「おーっす」

「あ、おはよ」

忍が挨拶をすると、吉川も挨拶を返して来た。

「苦労してる感じですかい？」

楽譜の用意をしながら、忍は2人に対してそう聞く。

「苦労って言うか……」

吉川は考える様にそう呟く。悩んでいるのは十中八九、橋本先生に指摘された、オーボエのソロパートの部分だろう。

感情を音に乗せる。

技術を求めれば、この壁に当たる事は幾らでもある。どの部分を、どの様に吹きたいのか。その答えを見つけ出すのは、演奏者本人が自分で見つけ出すしか無いのだ。

「……………アツキーは、感情って何か分かる？」

すると、鎧塚の口から随分と抽象的な質問が飛んできた。吉川が微妙な顔つきになっている。

「感情……感情ねえ……楽しいとか、悲しいとか、その時の感情が音に出るとはよく言うけどねえ……」

対して忍も、考え込む様にしてそう呟く。

「案外そう言うのって、自分よりも周りから見ても貰った方が気付かされることもあるんよな」

「……そうなの？」

忍の答えに、こてんと首を傾げる鎧塚。

「客観的に聴いてくれる人も大事って事。例えば……優子は俺の音を聴いてどう思う？」

「え？、うーん、そうねえ……アンタ、気分で音が変わる時があるから、なんとも言えないけど、楽しそうってのは何となく分かるかな？」
いきなり忍に振られ、思った事をそのまま口に出す吉川。

「おー、そりゃ光栄なことって。……まあこんな感じで、自分自身で納得するより、周りからの意見も受け入れながら感情を理解して行くつてのも一つのやり方かな？音楽は人に聴いてもらって初めて成り立つからねえ。その聴いてもらう人の声つてのは重要だよ？」

客観的に自分を見つめられる人間というのは、案外少ない。だからこそ、周りの声が必要となってくる。そこから気付かされる事なんて、幾らでもあるのだ。

「……………じゃあ、私の音は、アツキーにはどう聴こえる？」

すると鎧塚は、顔を楽譜から忍の方に向けて、そう聞いてきた。その質問に、吉川は何処か心配そうな表情をしている。

忍は、絶対に音に嘘をつかない。そんな彼が感じる鎧塚の音とは

……

「……橋もつちゃんもつと感情を乗せろって言ってたけど、俺もそれは間違つて無いと思う。……でもそれ以上に、なんだか迷つてる様な、ちよつと悲しげな演奏に、俺は聴こえるかな？」

真つ直ぐ、鎧塚の目を見据えて、忍はそう言い放つ。それを聞いて吉川は、少し顔を顰めた。

「……………取り敢えず、それぞれの吹きたい様にやってみよ？……ちよつとアタシ達はちよつと外で吹いてくるから。……ホラ、行くわよ」
すると、吉川は忍に催促する様に、楽譜台と椅子を持たせる。

「……うん、分かった」

一言、鎧塚はそれだけ返すと、再びソロの部分の音を吹き始める。やはりその音は何処か空虚で、悲しげを纏った音のように聴こえた。

「……………みぞれ、希美の事ダメなの」

「……………え？」

渡り廊下。楽譜の準備をしながら、唐突に吉川はそんな事を言ってきた。あまりにも突然の言葉に、忍の表情は驚きに染まり切っている。

「アンタにはもう伝えておこうと思ってね。……あの子、希美に依存してる感じだったでしょ？」

「えっと、ケンカでもしたの？」

未だ驚きを隠せていない表情で、忍はそう聞く。去年、まだ傘木が部活に所属していた頃は、かなり仲が良かった様に見えたのだが……

「……違うわ。寧ろ逆。何も希美はしなかったの」

「何もしなかったんなら、なんでよろみーは……」

ここまで聞いて、何故鎧塚が傘木の事がダメなのか、忍には全く分からなかった。すると吉川は一つ大きな溜息をつき、観念した様に口を開く。

「……………何もしなかったから、あの子は希美の事がダメになったの。希美が辞めて行った時、みぞれは何も聞かされて無かった。あの子にとって、希美は……………」

その先を言おうとして、吉川は口籠ってしまふ。

「おはよー」

すると、聞き慣れた声が聞こえる。2人とも咄嗟にその方向へと顔を向けると、中世古と部長の小笠原の姿があった。

「おはようございます」

慌てて忍と吉川も挨拶を返す。

「早いねー、まだ2人だけ？」

「いえ、中にみぞれがいるはずですよ」

小笠原の問い掛けに、吉川がそう返す。落ち着いた表情を見る限り、どうやら話は聞かれていなかった様だ。

「そっか、関西大会まであと少し、お互い頑張ろうね」

「はい！」

忍と吉川が返事を返すと、小笠原と中世古の2人は音楽室へと向かって行った。

「……………ともかく、今みぞれと希美を合わせるのはまずいの」

2人が行ったことを確認すると、吉川は再び話を戻す。

「……………もしかして、あすか先輩がかさみーの部活復帰に反対なのも……………」

「うん、あすか先輩も気付いてるんだと思う」

そんな理由だったとは、忍は全く予想していなかった。それと同時に、あることを思い出していた。

『……………それって、誰か1人の為に吹くだけでも良いの？』

合宿の時、救いを求める様な瞳でそう言って来た鎧塚。ならば、彼女にとってその相手とは……………

「……………複雑だねー。あの2人」

「……………ほんと、そうね」

そう言う2人の表情は、明るいと呼べるものでは無かった。

朝練が終わり、午前はパート練習や個人練に入る。忍は中庭の方で個人練をしていた。

鎧塚の事情を吉川から聞いたが、その事に構っている暇は無い。自分の課題もまだ残っている。その一つ一つを完璧に、自分の理想に近

づく為に集中して吹く。

しかし、タイミング悪く、その少女はやって来てしまった。

「……………やっぱ上手いね。アツキーは」

トランペットを吹く手を止め、忍はその声の方向へと顔を向ける。

「かきみー……………」

少女、傘木希美は、少し悲しそうな表情をしていた。

「あすか先輩？」

「うん。でも、もう関西大会だから、今日で終わり。本番前に来ると、邪魔かなーって、夏紀とも話したんだ」

忍がそう聞くと、困った様に笑って傘木はそう返す。

「……………そっか」

吉川から話を聞いたからか、忍は何処かやりにくそうにしていた。

「……………えつとね、だから、アツキーにもお礼言おうかと思って……………」

「お礼？」

傘木の言葉に、首を傾げる忍。

「うん、アツキーに『フルートが好きなら戻れば良いじゃん』って言われて、アタシ本当に気が楽になったの。……………あすか先輩には認めて貰えなかったけど、アツキーに認めて貰えたってだけでも、良かったなって思ってたんだ」

「そんな大層な……………」

恩人の様な扱いをされているのが居心地が悪いのか、何処かやりにくそうにする忍。

「ううん、嬉しかったの。だってアタシにとって、アツキーは”憧れ”だから」

真っ直ぐ、忍を見据えて恥ずかしげもなくそう言い放つ傘木。

傘木希美にとって秋川忍は、”憧れ”だ。上手くて、自由で、あつたかくて、寄り添う様な、そんな演奏。

何より心の底から音楽を楽しんでいる。そんな姿勢に、傘木は憧れたのだ。

「だから、最後にお礼だけ言つところかなつて。……迷惑だったかな？」

「迷惑じゃ無いけど……」

尚もやりにくそうにする忍。普段なら調子に乗つて天狗になるところなのだが、色々な感情が渦巻いている様だ。

「そう、良かった！ありがとね！それだけ言いたかつたんだ」

そう言つてニコリと笑う傘木。その表情に、忍は何も返せなかつた。

「あ、そう言えばみぞれ」

すると、悲しげな表情から一転、明るい表情に変わつて傘木から続けてそんな言葉が出る。

「え、よろみー？」

「うん、あの子唯一のオーボエだから。今個人練してるのかな？」

「……多分ね」

「じゃあ、様子見てこよつかな？」

すると、軽い感じで傘木がそう言い放つ。

「え、今？」

「うん、なんか、感情込めて吹く様に言われてて悩んでるつて。おかしいでしょ？あの子、性格は淡々としてるけど演奏はすごい情熱的で、感情爆発つて感じだったでしょ？」

「……そうだね」

傘木がそう言うと、忍も同意する様に頷く。去年、傘木がまだ部活に居た頃は、鎧塚の演奏は上手い以上に魅力的な演奏をしていた。それが、傘木が居なくなつた途端、音に色が無くなつた。淡白で、悲しげな音。理由は、明確だ。

なら、その殻を破るのは、この傘木希美と言う少女しか居ない。

「……………よろみー、多分2階の廊下で演奏してると思うよ?」

鎧塚が傘木の事がダメなのは、忍も理解している。しかし、それでもこの2人は会って、話をした方がいい。

直感的に、忍はそう感じたのだ。

「そうなの?じゃあ、ちよつと行ってみるね!」

最後にそれだけ言って、傘木はその場を離れる。そしてそれを追う様に、忍はトランプットを置いて傘木の後をういて行った。

存在

涼しげな澄んだ青空とは対照的に、真夏の暑さは増して行く。

そんな中でも、北宇治高校の校舎では様々な楽器の音が響き渡る。1人、廊下でオーボエを吹く少女が居た。

何を考えて、何を思っただけで吹いているのか、その表情からは分かり得ない。

そんな少女に、近づく人物が1人。

「なんか、久しぶりだね」

その問いかけに、鎧塚はゆっくりとその声の方向へと顔を向ける。

「みぞれ」

傘木が、鎧塚に話し掛けた。鎧塚はその目の前の人物を認識すると、その儂げな顔を大きく歪ませる。

「ちよ、みぞれ!?!」

結果は、最悪と言って良かった。ガシャンと、大きな音を立てて、楽譜台が倒れる。

取り乱した鎧塚は、その場から逃げる様に走り去って行く。

何事かと、近くの教室から顔を覗かせる部員達。

そしてその光景を、吉川は目撃していた。

「待って!、みぞれ!」

傘木は、走り去って行く鎧塚を追おうとする。しかしそれをさせまいと、吉川は強く、傘木の左手首を掴んだ。

「やめて……!!」

「優子……?」

吉川の表情は、怒りに染まっている。その顔を見て、傘木は困惑し切った表情に変わった。

「よろみー!」

一瞬遅れて、忍が到着する。しかし、その声に耳を傾ける事なく、鎧塚は忍とすれ違う様に、走り去ってしまった。

「どう言ってもりよ……!」

傘木をキツと睨め付けて、吉川は傘木に詰め寄る。

「ちよっと！希美が何したって言うの！」
すると、同じくその光景を見ていた中川が、吉川に詰め寄る。

「……何もしてない……だから怒ってるの!!」

それに対し、今までの感情を爆発させる様に、吉川はそう叫んだ。
「はあ？」

中川には吉川が何の事を言っているのか分からず、素っ頓狂な声を上げる。

「とにかく、早く探さなくちゃ……!」

そう呟いて吉川は、鎧塚が何処へ行ったのかと、考えを巡らせる。

「優子!」

すると、戻って来た忍が吉川に話し掛けた。

「!、忍!みぞれが……」

「分かってる。かさみーによるみーの場所教えたのは俺だ。どこ行ったのか探して来る」

皆まで言う前に忍がそう言うと、吉川は深刻そうに頷く。

「お願い。あの子今、慣れない子と会うの、ヤバいから」

夏休み、吹奏楽部と僅かな文化部しか居ない校舎内を、忍と吉川は駆け回る。

鎧塚みぞれにとって、傘木希美は……

一つ一つ、教室を探し回る。真夏の暑さで汗だくになりながら。

『……それって、誰か1人の為に吹くだけでも良いの?』

しかし見つからない。一体、何処へ行ったのか。

『あの子、性格は淡々としてるけど演奏はすごい情熱的で、感情爆発って感じだったでしょ?』

色々な事を、忍は思い出して居た。

鎧塚にとって、傘木は……

「……同じじゃん……！」

悪態を吐く様に忍はそう呟く。この教室にも、あの教室にも居ない。

鎧塚が楽器を続ける理由。それを忍は理解した。そんな焦りからか、忍の表情に焦りが出て来る。

そして辿り着いたのは、校舎の端。理科室の扉を開けると、啜り泣く様な声が聞こえた。

忍はゆっくりと、その声の方へと歩みを進める。教壇の影、そこに蹲るように、鎧塚は膝を抱えていた。

「……よろみー」

忍が話し掛けると、鎧塚の肩がピクンと跳ねる。

「……よろみーは、何が怖いのか？」

しゃがみ込み、同じ目線で、忍は鎧塚に対して優しい口調で尋ねる。

「……希美に会うのが、怖い……」

消え入りそうな声で、鎧塚はそう答える。

「それは、なんで？」

忍は落ち着かせようと、優しい口調を崩さずにそう聞く。

「……分かっちゃうから……現実を……！」

対して鎧塚の声は、怯え切っていた。

「現実？」

忍がそう聞き返すと、独白するように、鎧塚は口を開いた。

「私にとって、希美は特別。大切な友達」

「……そうだね」

「……私、人が苦手。性格暗いし、友達も出来なくて、ずっと1人だった」

「……」

鎧塚の独白を、忍は黙って、真剣に耳を傾ける。

「……希美はそんな私と仲良くしてくれた。……希美が誘ってくれたから、吹奏楽部に入った」

ポツリポツリと。拙いが確かに、思い出すように、鎧塚は語る。

「……嬉しかった。毎日が、楽しくって……」

鎧塚にとって、傘木の存在は他人からは計り知れない程大きいものなのだ。

そして、その感情を忍は知っていた。

「……よろみーは、かさみーが好き？」

忍がそう聞くと、鎧塚は黙って一つ頷く。

「でも希美にとって、私は友達の一部。沢山いる中の1人だった……」

「……」

「だから……！部活を止めるのだったって知らなかった……！！」

再び、鎧塚の感情が乱れる。

鎧塚にとって、傘木は大きすぎる存在。しかし傘木からすれば、鎧塚は……

「私だけっ……！！知らなかった……！！」

「それは……」

鎧塚の思いを知り、言葉に詰まる忍。

「相談一つ無いんだって、私はそんな存在なんだって知るのが、怖かった……」

鎧塚みぞれにとって、傘木希美は全てと言って良い。それは依存か、それとも執着か。自分の全てをぶつけられる唯一無二の存在。

そんな彼女に見捨てられたと言うのが、鎧塚の感情の全てだった。しかし、それならば、何故鎧塚は……

「……じゃあ、何でよろみーはオーボエ吹くの？」

忍は鎧塚をジッと見据えてそう尋ねる。彼女の誰か1人の為だけに吹きたいと言うのは、紛れもなく傘木の事だ。

ならば、傘木が辞めた時点で鎧塚が楽器を吹く理由は無いはずなのだ……

「……楽器だけが……楽器だけが……！私と、希美を繋ぐものだから……！！」

遂に出た、鎧塚の本心。

楽器を止めれば、オーボエを吹くのを止めれば、傘木の中に、鎧塚の事なんて綺麗さっぱり無くなってしまおう。そんな偏執的な恐怖心が、鎧塚が楽器を続ける理由だった。

「……合宿の時、よろみーは『誰か1人の為に吹くだけでも良いの？』って俺に聞いたよね？」

忍がそう聞くと、鎧塚は黙って頷く。

「なら、それを聴いて貰おうよ。……辞めてから、かさみーの前でオーボエ吹いてないでしょ？」

「……でも、それも拒絶されたら……」

震える声で、鎧塚は言い放つ。

「……それに、アツキーは私と違うから……私は、アツキーみたいな生き方は出来ない……」

正に水と油。鎧塚みぞれと秋川忍は、真反対な性格と言っている。しかし、一つだけ、鎧塚と共通する部分があった。

「……それは違うかな。……よろみーの『誰かの為だけに吹きたい』って、俺も昔そうだったんだよね」

「……そうなの？」

カミングアウトする様に忍がそう言うと、鎧塚はゆっくりと顔を上げる。

そして今度は忍の方が、思い出すように語り始めた。

「うん。その人に憧れて、認められたくて、そりやもう必死に練習したよ。そんな時は俺がトランペットを吹く理由なんて、それしか無かったからね」

「……それで、その人には認められたの？」

救いを求めるような眼差しで、鎧塚はそう聞く。それに対し忍は一つ、深呼吸をした。

「認められる前に死んじゃったよ。病気でね」

悲しげに、諦めの感情も含んだ声で、忍はそう言い放つ。それに対し、鎧塚は絶句してしまった。

自分の音を一番聴かせたい人は、もうこの世には存在しない。それがどれだけ、虚しくて悲しいものか、鎧塚には想像出来なかった。

「……だから、聴かせたい人が居るってのは、幸運な事だと思うよ。しかも同じ学校で同じ部活に居たんでしょ？ チャンスなんていくらでもあるじゃん」

薄く笑って、続けて忍は鎧塚に対してそう言う。聴かせたい相手が居ると言うことは、何とも幸運なことか。

忍の話を聞いて塞ぎ込んでいた鎧塚の心が、少しながら揺れた。

「はあ、はあ……いた……!!」

すると、教室の入り口。大粒の汗をかき、息が乱れた状態の吉川が現れた。

誰の為に

「みぞれ……みぞれ……！みぞれ！」

何度も名前を呼びながら、吉川は鎧塚の元へと駆け寄る。

「もう、何やってんのよ！心配かけて……！」

「ごめん……」

「……まだ、希美と話すの、怖い？」

吉川は優しく問い掛ける。それに、鎧塚は怯えるように頷いた。

「……だって、私には、希美しか居ないから……！……拒絶……されたら……！」

「……っ!!」

鎧塚の言葉を聞いて、両肩を掴む吉川の手に、少し力が入った。

「……何でそんな事言うの？」

震える声で吉川はそう言う。その言葉を聞いて、鎧塚はずっと俯いていた顔を吉川に向ける。

「そしたら何?!みぞれにとって、アタシは何なの!?!」

感情を露わに、吉川は叫ぶように鎧塚に問いかける。

「……優子は、私が可哀想だから……優しくしてくれた。……同情してくれた……」

鎧塚は再び目線を下げ、消え入りそうな声でそう言う。その言葉を聞いて、吉川はさらに感情を露わにした。

「バカ!!アンタマジで馬鹿じゃないの!?!」

吉川はその両手で今度は鎧塚の両頬を掴み、俯いた顔を無理矢理上げるようにして、自身の方へ顔を向けさせる。

「優子……」

「アタシでも良い加減キレルよ?!誰が好き好んで嫌いな奴と行動するのよ!?!私がそんな器用な事出来るわけ無いでしょ!?!」

グニグニと鎧塚の頬を弄りながら、押し倒すように吉川は鎧塚の上に覆いかぶさる。

「部活だっていつもそう！何でもっと自分勝手に吹かないのよ!! 本
当に希美の為だけに吹奏樂続けて来たの!! あんだけ練習して、コン
クール目指して、何も無かった!？」

吉川の問い掛けに、ハツとしたように目を見開く鎧塚。

「後ろのバカを見てみなさいよ！去年あんな事起こして、それでも
勝手に部活に戻って来て！自由に、楽しそうに演奏して……！アンタ
もそれぐらいワガママになってみなさいよ!!」

吉川は目に涙を溜めながら、鎧塚に対して訴えかけるようにそう言
う。

「府大会で、関西行きが決まって！嬉しくなかった!?! アタシは嬉し
かった!! 頑張ってきた良かったって、努力は無駄じゃなかった！中学
から引きずったものから、やっと解放された気がした!! みぞれは何
も思わなかった!?! ねえ!!」

感情露わに。そんな吉川に釣られる様に、鎧塚も目に涙を浮かべ
る。

「嬉しかったっ……！……でも……！それ以上に申し訳なくて……
!! 希美や、辞めて行った子に対して……!! 喜んで、良いのかなって!」
鎧塚がオーボエを続ける理由。それは、殆ど傘木希美の為だ。しか
し、心の奥底、ほんの少しの部分では、皆と同じ自分の為に、自分が
音楽を楽しむ為に。でなければ、彼女は部活なんてとつくに辞めてい
る。

「良いに決まってる!!」

消え入りそうな鎧塚の独白に、力強く吉川はそう返す。そして
ゆつくりと鎧塚の腕を掴んで上体を起こすと、

「良いに決まってるじゃん……だから、笑って?」

優しく、微笑んで吉川はそう言う。鎧塚にとってそれは救いの言葉
か、大粒の涙を流し始めた。

「……うっ、うぐっ……うう……!!」

「ちよ、みぞれ……！……どうして泣くのよ……」

泣き出した鎧塚対し、吉川は困惑しながらも慰める様にそう言う。そしてこの吉川と鎧塚の話を聞いていたのは、教室に居る忍だけでは無かった。

「……………どうする?」

廊下。少し微笑みながら、中川は一緒に話を聞いていた傘木に対してそう言う。

「……………大丈夫」

考える様に少し間を置くと、傘木はそう返して教室の中へと入って行った。

「かさみー……………」

傘木に気付いた忍がそう呟くと、鎧塚の肩が一瞬揺れる。

「希美……………ちゃんと話したら?」

そして吉川は、優しく背中を押す様に鎧塚に対してそう言った。まだ少し怯えが残っているが、鎧塚は傘木の前に出る。

「……………あすか先輩が、これ持ってけて……………」

傘木は手に持っていた楽器を鎧塚に見せながらそう言う。

木管の中でも特に繊細な技術が求められるオーボエ。正に彼女にピッタリの楽器だ。

「アタシ、なんか気に障る事しちゃったかな?……………アタシバカだからさ、なんか、心当たりが無いんだけど……………」

「……………どうして……………」

まだ怯えは残っている。それでも、少ない勇気を振り絞る様に、鎧塚は口を開いた。

「どうして……………話してくれなかったの……………」

「え?」

「部活、辞めた時……………」

「だって、必要無かったから」

さも当たり前かのように、傘木はそう言う。

「……………え?」

その言葉に、鎧塚は顔を上げて傘木の顔を見る。

「だって、みぞれ頑張ってたじゃん。アタシが、腐ってた時も、誰も練習してなくても、1人で練習してた。……そんな人に一緒に辞めようとか、言える訳ないじゃん」

傘木にとって鎧塚は、ただの友達の人なのかもしれない。しかし、傘木希美は情に厚い人間だ。その数多く居る友達の1人であろうと、しっかりと鎧塚がどの様に音楽に向き合っているのかをちゃんと見ていた。

「……だから、言わなかったの？」

「うん……」

傘木のその答えは、完全に鎧塚の頭の中に無かったのか、呆けた様な顔をしている。

「！、もしかして、仲間外れにされたって思ってた？」

心配そうに傘木がそう言うと、鎧塚は再び目に涙を溜めた。

「っ、なんで、違う！違うよ……!!全然違う、そんなつもりじゃ……いきなり泣き出した鎧塚の肩を掴みながら、あやす様に傘木は慰める。対して鎧塚は首を振った。

「みぞれ……ごめんね？」

「……ごめん……」

「え、どうしてみぞれが謝るの？」

「私ずっと、避けてた……！勝手に思い込んでっ！怖くて……!!」
大粒の涙を流しながら、独白する様に鎧塚はそう言う。

「ごめんなさい……」

「みぞれ……」

「ごめんなさい……!」

「みぞれ!」

泣き止まない鎧塚に対し、肩を揺らしながら何度も鎧塚の名前を呼ぶ傘木。

「……ねえ、アタシね、府大会見に行ったんだよ？」

そして、今度は諭す様に傘木がそう言う。

「皆んなキラキラしてた。鳥肌立った……!聴いたよ?みぞれのソ

口！……カッコよかった!!」

「……ホント？」

手放しの傘木の褒め言葉。ようやく鎧塚が顔を上げる。

「ホントに決まってんじゃない。中学の頃から、みぞれのオーボエ好きだったんだよ。」

そう言つて、傘木はオーボエを鎧塚の前に差し出す。それを大事そうに、鎧塚は受け取った。

「何かさあ、キューーンつとしてさあ！」

鎧塚みぞれの出す音は、正に”情”と言つて良い。感情を音に乗せるのが抜群に上手い。そんな音を、傘木希美は知っている。だから、もう一度……

「聴きたいな！みぞれのオーボエ!!」

鎧塚の肩が震える。でもそれは、怯えから来るものでは無い。愛おしそうに、オーボエを握りしめ、ゆつくりと顔を傘木に向ける。

「うん……！私も、聴いて欲しい……!!」

そう言う彼女の顔は、微笑んでいた。



夕陽の差す校舎に、楽器の音が聞こえる。

儂くも柔らかくて包み込む様なその音は、オーボエの音だ。

「こんな風に吹けるんだ」

渡り廊下。その音に聞き耳を立ててるのは3人。中川が感慨深くそう言う。

音に、色が付いた。

今まで無味無臭の機械の様な音に、命が加わった。

これが、鎧塚みぞれの演奏者としての本質だ。

「結局みぞれの演奏は、ずっと希美の為にあったんだね……」

「……まあね」

楽器を吹く理由は、人それぞれだ。自分の為、何かに勝利する為。

そして、人の為。

鎧塚の演奏は、正に人の為。それが前面に表れてる様な演奏だった。

「……希美には勝てないんだなあ。一年も一緒に居たのに」

決して嫉妬している訳では無い。しかし、自分の為だけに吹いても
らえると言う、羨ましさはあった。

「そんなの、当然でしょ？希美はアンタの100倍良い子だし」

「そーね。アンタの500倍は良い子よね」

揶揄う様な中川の言葉に、吉川も不服そうにそう返す。

「でもさ、みぞれにはアンタが居て良かったと思うよ」

そう言うと、中川は薄く微笑んで目線を吉川に向ける。いきなりの
褒め言葉に、吉川は恥ずかしそうに顔を背けた。

「……………」

そしてもう1人。忍はポーツと、何処か遠くを見つめる様にして、
黙ってその音を聴いていた。

『どう!?今のは良かったでしょ!』

『そーねー。でも母さんの方がまだ上手かなー?』

記憶の片隅にある、僅かな思い出。それを噛み締める様に、オーボ
エの音を聴きながら、忍はオレンジ色に染まった空を見つめていた。

「……………忍?」

これほど静かな忍も珍しい。そう思った吉川は、少し心配そうにそう聞く。

「ん？……ああ、なんだか懐かしいなって……」

吉川の言葉で我に返った忍はゆっくりと彼女の方へと顔を向ける。寂しそうな、それでいて言葉通り懐かしむ様な、何とも言えない表情をしていた。

「……懐かしい？」

「……うん。そんな気がする」

一言、それだけ返すと、忍は再び空へと視線を移す。

この時の吉川には、忍が一体何を見据えているのか、分からなかった。

前日

「ホルン、シの低音符、もう少しください」

「はい!!」

「トロンボーン、バッキングの縦、注意して下さいください」

「はい!!」

夏の暑さにも負けずに、練習は続く。

滝先生からの指示にも、一層熱が入る。やることは変わらない。

詰めて詰めて、最高の音を見つけるまで、音楽室に籠る。

「では、今の点に注意して、もう一度最初から行きます。本番を意識してください。もう一度言います。本番です」

関西大会は、もう明日にまで迫っている。

練習が終わる。今日は明日への準備もあり、早めに切り上げる。これが終われば明日演奏するのは全国大会を賭けたホールでの演奏になる。

「良いですか? 皆さん」

問い掛ける様に、滝先生がそう言う。明日は本番だ。皆、滝先生の話す言葉に耳を傾ける。

「明日の本番を、あまり難しく考えないで下さい。我々が明日するのは、練習でやってきたことをそのまま出す。それだけです」

「はい!!」

滝先生がそう言うのと、元気のいい返事が返ってくる。

「……それから、夏休みの間コーチをお願いしていた、橋本先生と新山先生は、本日が最後になります」

「ええー!?!」

突然の滝先生からの発表に、部員達から、落胆とも取れる驚きの声が上がる。

「最後に一言、お願いします」

滝先生の言葉に2人とも頷くと、最初に新山先生が教壇に立つ。

「約3週間、短い間でしたが、確実に皆さんの演奏は良くなったと思います」

こう言う場合は、やはりしんみりすると言うもので、まだ言い終わってないのに木管パートの何人かは泣きそうな顔をしていた。

「その真面目な姿勢は、私自身見習うべきものが沢山ありました。明日の関西大会、胸を張って楽しんで来て下さい！」

新山先生がそう言い終わると、木管パートの方から啜り泣く声が聞こえた。

次は、橋本先生だ。

「えっと、僕はこんな性格なので、正直に言います。今の北宇治の演奏は、関西のどの高校にも劣っていません！自信を持って良い!!」

元来の明るさか、それともしんみりとした空気が苦手なのか、橋本先生は明るく語る。

「この3週間で表現が実に豊かになりました！特に、鎧塚さん！」

「はい？」

橋本先生に名指しで呼ばれ、困惑気味の返事を返す鎧塚。

「見違える程良くなった！……何か良いことあったのー？」

「……………はい！」

「おー！いいねえ！今の彼女の様に、明日は素直に自分達の演奏をやり切ってください！期待してるよー!!」

そう言っつて橋本先生が教壇から降りると、拍手が起こる。

パーカスでお世話になったであろう田邊が引くほど号泣していた。

「起立！ありがとうございます!!」

「ありがとうございます!!」

そして締めめに小笠原から号令が掛かると、関西大会前最後の練習が終わった。

「ただいまー」

誰も居ないと分かっているにもかかわらず口に出してしまうのは、癖になっっているからだろうか。そう言っただけでもない家の中を、忍はパタパタと歩く。

明日は遂に関西大会。いつもなら凧花が話し相手になっただけなのだが、今日は忍が早く帰ったこともあり、家に1人きりだ。

バッグを自室に置き、忍はリビングに入る。そしてその一角、洋風の部屋にあまり似つかわしく無い仏壇の前に、忍は座った。

「……………全国、行けるかもだつて」

誰に話している訳でも無い。独り言の様に、忍は仏壇の前に座って呟く。

「皆んな必死で練習してたよ。……去年とは人が変わったみたい」

そう言いながら忍は慣れた手つきで蝋燭に火をつけ、線香を立てる。そこから合掌、手を合わせて数秒目を瞑る。

「……………明日、結果が出たらまた報告するよ」

そして一言。それだけ言うと、忍は仏壇から立ち上がる。

「ただいまー」

すると、同時に玄関から声が聞こえる。凧花が帰って来た様子だ。

「おかえりー」

忍がそのままリビングに入って来た凧花に声を掛けると、少し驚いた様な表情になった。

「あれ？兄ちゃん今日早いね？」

「明日本番だしね。準備とかもあつて早めに終わったよ」

「あ、そっか」

そう言いながら、凧花は颯爽とソファーに寝転びテレビのリモコンを握る。すると、何やら匂いを嗅ぐ様な仕草をした。

「あれ？兄ちゃん線香なんか立ててたの？」

線香の香りが鼻に付き、仏壇の方を見ながら凧花がそう言う。

「うん。明日本番だし、母さんに報告しようと思って」

「……………そつか。じゃあ、あんまり下手な演奏出来ないね？」

なんとも無い様にそう言う忍に対し、少し寂しげな表情で、凜花がそう返す。

「そーだねえ。……で、凜花は明日来るの？」

しみりとした空気になるのを嫌ったのか、話題を変える様に忍がそう聞く。

「え？、うん。府大会と同じで、さやかちゃんと。午後からだよね？」

「うん、16番目だから、3時くらいかな？」

「あー、明静のまさつちの演奏も聴きたいから、ちよつと早めに行くかも」

「了解」

そんな会話をしながら、忍は自室へ戻ろうとリビングのドアへと向かう。

「……………兄ちゃん」

すると、後ろから再び凜花から声を掛けられた。忍が振り向くと、ソファーに寝転がっている凜花も、忍の方へと顔を向ける。

「……………全国、行ってよね」

そして忍の目を真っ直ぐ見据えて、凜花はそう言い放った。

「……………もちろん」

そんな凜花に対し、片手を上げてガッツポーズを作る様にして、忍も激励に返事を返す。それを見て、凜花は満足そうに微笑んだ。

「よろしい。友達に兄が全国行ったって、自慢もしたいしねー」

「素直に応援してくれやい」

冗談ぽくそう言う凜花に対し、少し困った様な笑顔で忍はツツコミを入れた。

緊張

周りを見渡せば、テレビやイベントで見たことのある強豪校の制服がゴロゴロいる。

関西大会の会場。その中に、北宇治の制服も堂々と映えていた。

「先輩！午前の結果、見てきました！」

一年のチームもなかの一人が、そう言って駆け寄ってくる。

「どうだった!?!」

「東照を含めた3校が金でした。それから、立華は銀だったみたいですよ」

強豪校の一角である立華が銀だったという報告にちらほらと不安の声が上がる。

橋本先生がいつか言ったように、関西大会なんて周りを見ればどこも強豪校。それ即ち、どの高校も落ちる可能性があると言うことだ。

「ほらほら、私たちに、他の学校を気にしてる余裕なんて無いよ？今は、演奏の事に集中して」

すると、部長の小笠原からそんな声が掛けられる。彼女の言う通り、

今は自分の事に集中しなければならない。

「どっどっ」

「ええ感じ。ウチのは？」

待機室。少しピリついた空気の中、最後の音出しをしているのは、明静工科だ。流石全国常連とだけあって、緊張しているとゆうよりは、淡々と演奏に向けて準備をしている雰囲気だ。

「明静工科の皆さん、準備してください」

すると、係員がそう声をかける。

それを聞いて、明静の生徒達は一斉に演奏を止めた。そして、一人の少女が立ち上がって前に出る。

「はい。もうすぐ本番やけど、皆んな緊張しよるか？」

明静の部長さんだろうか？髪をポニーテールに纏めた少女が皆に聞こえるようにそう言う。

しかし緊張するどころか、明静のメンバーは誰もが挑戦的な笑みを浮かべる者ばかりだった。それを見て、少女は満足そうな笑みを浮かべる。

「うん、ええな。やけど、油断はせえへんように！『ウチらは強豪校やから』って舐めてかかると、足元掬われるで！気合入れえよ！」

「「はい！！」」

これが、王者たる風格と言うものであろうか。気合の入った返事をする、明静の部員達は堂々と、待機室から舞台袖に移動する。

途中、待機室前で、明静の次の高校が待っているのが確認出来た。

「明静だ……」

「オーラやばっ……」

明静の次。北宇治高校の面々から、感嘆にも、緊張にも似たような声が出る。その横を堂々と、明静の生徒達は通り過ぎて行く。

途中、忍の目に、見知った顔の人物が映った。その人物も忍に気がき、近付いてくる。

「おー、忍。緊張しよるかー？」

気さくに忍に話し掛けたのは篠田正和。忍の従兄弟だ。

「ちよつとね。まさっちは？」

「しよる訳無いやろ？まだ関西大会や。こんなところで緊張しよつたら話にならん」

篠田は言葉通り自信満々と言った感じで、忍にそう返す。

「ははっ、相変わらず自信家だねえ。慢心したら足元掬われるよ？」

「はっ！慢心やない。自信や」

お互いに軽口を飛ばす2人。

「そーいや、凜花がまさっちによろしくって言ってたよ」

「ホンマか？今日も来とんか？」

「うん、明静の演奏も聴きたいって言ってたから、もう席についてる

と思う」

「ははーっ！凛花ちゃんもええもん見れて幸運やなあー！」

カラカラと笑いながら会話を続ける篠田。本番直前だと言うのに、表情には緊張が全く感じられなかった。

「何しよんね!!まさっち!!」

すると、明らかに怒りを含んだ声が両者の耳に響く。声の方向に目を向けると、先ほどの部長さんがジトつと篠田を睨めつけていた。

「おー、怖……ほな、鬼ババにしばかれる前に行くわ」

イタズラっぽく笑って篠田がそう言うと、そそくさと明静の集団に消えて行く。対して忍は「頑張つてねー」と、どこか気の抜けたエールを送った。

「……知り合い?」

すると、真横でその会話を聞いていた吉川からそんなことを聞かれる。

「知り合いって言うか、従兄弟。俺らと同じ2年生でトランペットの1stやつてるよん」

「ふうん、2年で明静の1stねえ……」

何か考え込むように、少し俯いて吉川はポツリと呟く。少し表情が強張つてる様にも見えた。

「……緊張してる?」

「うん。結構してる」

忍がそう聞くと、包み隠さず吉川はそう答える。分かりきっていた事だが、そう言う意味では明静も実力主義の高校だ。

そしてその事実は、全国に行く為に全力で他校を潰しにかかって居ると言う事に他ならない。

「……優子は全国、行きたい?」

続けて忍がそう聞くと吉川はギュツと、トランペットを持つ手に力を入れる。

「……当たり前じゃない。放課後も夏休みも殆どの時間を費やしたんだから、それくらいに対価じゃないと」

練習、練習、また練習。ここ数ヶ月の記憶は、それで埋め尽くされ

て居る。ならば、今度はそれを自信に変換すれば良いだけだ。

「……………そうだね。俺も行きたい」

忍も同じくトランペットを強く握り締め、そう返す。

大丈夫。練習でしたことをそのまま出せば良いだけだ。

「では北宇治高校の皆さん、今の高校の演奏が終わるまで中で音出しをして大丈夫です」

大会の係員がそう言うと、北宇治のメンバーは待機室へと入って行った。

独特な緊張感が支配する中、待機室では音出しをして居る。何度もチューニングを確認し、直前まで指の運びや音の具合を確かめている。

「はい、止めて」

滝先生が皆にそう声を掛けると、音が止んだ。

「一回だけ、深呼吸をしましょうか」

どうやらこの重苦しい緊張感に滝先生も気付いているらしく、リラックスにとそんな提案をする。

「大きく息を吸ってー……………」

掛け声と共に、メンバーは大きく、ゆっくりと息を吸う。

「吐いてー、吐いてー……………吐いてー……………気持ちを楽しにしてー……………笑顔でー！」

促す様に滝先生はそう言うが、皆から返ってきたのは少しぎこちなさが残った可笑しな笑顔だった。

「私からは以上です」

満足そうに滝先生がそう言うと、「ですよねー」やら、「まあ、らしいけど」などの小声が出る。

「部長、何かありますか？」

「え？」

いきなり滝先生から振られ、小笠原が素つ頓狂な声を上げる。

「先生！」

しかし、声を上げたのは副部長の田中の方だった。

「はい、田中さん」

「部長の前に、少しだけ」

そう言つて田中は皆の注目を集める様に立ち上がった。

「去年の今頃、私達が今日この場に居ることを想像出来た人は、1人もいないと思う。2年と3年は色々あつたから特にね」

田中の言葉に、皆真剣に耳を傾ける。

「それが、半年足らずでここまで来ることが出来た。これは紛れもなく滝先生の指導のお陰です。その先生に感謝の気持ちも込めて、今日の演奏は精一杯全員で楽しもう！」

「「はいー」」

田中が鼓舞する様にそう言つと、勢いのあるいい返事が返つてくる。

「……それから、今の私の気持ちを正直に言つと、私はここで負けたくない」

それは本音か、田中の雰囲気少し変わった。

「関西に來られて良かった。で終わりにしたくない。ここまで来た以上、何としてでも次へ進んで、北宇治の音を全国に響かせたい！」いつも飄々としている田中が、訴え掛ける様にそう言い放つ。本心を曝け出さない彼女のその言葉は、今だけは信じられる説得力があつた。

「だからみんな、これまでの練習の成果を今日、全部出し切つて！」

「「はい!!」」

そんな言葉に充てられてか、もう一度皆からも気持ちの入つた返事が返つてくる。

「じゃあ部長？例のヤツを」

そしていつも通りの口調に戻り、田中は小笠原に対してそう言う。

「え、あ、はいーでは、皆さんご唱和くださいー！」

そう言って小笠原が一拍置くと、
「北宇治ファイター……!!」
「「おー!!」」
「「」」

関西大会

舞台袖、刻一刻と、北宇治の出番が近づく。

「明静、俗謡だ……」

「やばっ……」

舞台袖からも、前の明静の演奏は聴こえてくる。曲の題名は、『大阪俗謡による幻想曲』。明静の十八番ともあり、やはり上手い。分かりきっていた事だが、圧を感じる様な堂々とした演奏だ。

「やっぱり上手いなあ……」

「ああ、誰だよ。顧問変わって下手になってるとか言ってた奴！」

篠田が言っていた『今年の明静は最高』と言う言葉は、どうやら嘘ではなかったらしい？じわじわと、その圧に飲まれる様に、弱音がちらほら出始める。

全国を賭けた関西大会。

そのプレッシャーに、北宇治はまだ慣れてないのだ。

「……忍？」

そんな中忍は、何処かブーツとしていた。変に感じた吉川が声を掛ける。

「……ん、何？」

吉川に声を掛けられて我に返ったのか、少し遅れて忍は返事を返す。

「……アンタも緊張してる？」

いつも通りには見えない忍の様子に、吉川は心配してそう尋ねる。

「……緊張してるけど、変な感じ。……なんか、よくここまで来たな。……みたいな」

「……何ここで終わりみたいな事言ってるのよ、私達は全国行くんですよ？……アンタがそんなんじゃない、こつちまで調子が狂うじゃない」

弱気になっているわけではなさそうだ。しかし柄にも無い事を言う忍に対し、吉川は櫂を飛ばす様にそう返す。

「……そうだね。うん、今日もいつも通り。観客にウチの演奏見

せつけんべや」

いつも通りのセリフ。しかし忍のその言葉は、自分自身に言い聞かせている様にも聞こえた。

『プログラムN.O. 16番、京都府代表、北宇治高等学校吹奏楽部』
場内にアナウンスが鳴り響くと、拍手と同時に滝先生が一礼する。

「……来た！」

「ああ、こつちまで緊張する……」

観客席では、北宇治のメンバー以上に緊張の面持ちでステージを見つめる凧花とさやかかの姿があった。

「北宇治、全国いけるよね？」

「大丈夫……兄ちゃんなら……」

さやかかの問いかけに対し、凧花は祈る様にそう返す。

そして一瞬の間の後、滝先生は両手で構える。それに対し、北宇治のメンバーも楽器を構える。

そして、滝先生の手が振り上げられると同時に、北宇治の全国へと向けた戦いが始まった。

「楽器は重いもんから運んでー！」

「終わった人からホールの席に着いてなー！」

一仕事終えた明静では、緊張から解放されたからか、リラックスしたムードが流れている。篠田も自分の仕事を終え、トランペットをケースに閉まっているところだった。

「ええ演奏やったな。まさつち」

すると、背後から声を掛けられる。篠田がそれにゆっくりと振り向くと、先程篠田に注意していたポニーテールに髪を纏めた少女が居た。

「やる？ 叶恵かなえもクラリネット、ええ感じやったなあ」

「おー、ウチのエース様に褒められるたあ、光栄やなー」

篠田に話しかけているのは、明静工科吹奏楽部の部長である、八嶋叶恵やしまかなえと言う少女だ。

「まあ、あれだけの演奏やったら、全国は確実やろ。次の北宇治が崩れんとええけどな」

ケラケラと笑いながら、篠田はそう言う。

「そーいや舞台袖行く前に北宇治の子となんやら話よったな。知り合い？」

すると、思い出したかの様に八嶋がそんなことを聞く。

「従兄弟や。北宇治でトランペットやっとなるから、ちいと声掛けた」
篠田がそう返すと、八嶋は納得した様な表情になる。

「なるほど……ほいならもう席行つててええで。後はウチらがやっどくわ」

「お？ええの？」

「身内やろ？早よ行つてやりや」

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいますわ」

そう言うと、篠田はトランペットケースを八嶋に預け、足早に観客席へと向かつて行つた。

「お、もう課題曲終わる頃かいな」

席に着きながら、誰にも聞こえない様小声でそう言う篠田。タイムリグよく、自由曲が終わってこれから課題曲と言うところだった。

「さあ、どんなもんや、北宇治」

そして、篠田のその眩きと同時に、自由曲である『三日月の舞』の演奏が始まった。

出だしは、好調。トランペットの主旋律は粒が揃っており、大きな乱れもない。

序盤から中盤にかけて、連符の激しいパートが続くが、皆音が合っている。どこもかしこも散々練習した部分だ。

そして、一旦曲が区切られると、エースの演奏が始まる。

トランペットソロだ。

府大会の時よりも、更に良くなっている。演奏の正確さが更に増したソロパートだった。

トランペットソロの、ゆったりとしたリズム。次はそこに合わせる様に、クラリネットの旋律が入る。

その後に来るのは、オーボエソロ。短くはあるが、色が付いた、優しい演奏。鎧塚の奏でる緩やかなメロディだ。

舞台袖では、傘木が熱いものが込み上げるのを我慢するかのように音を聴いていた。

中間部が終わり、曲は後半部分に入る。テンポは速さを増し、皆、一層演奏に気合が入る。ミスは許されない。

一音一音、確実に。集中している。ここまで完璧だ。クライマックスに向けて、音はどんどん凄みを増して行く。ここまで来ればあと少し。

だからだろうか、誰しもがミスをするなんて、考えもしなかった。

一音、完全に音を外した、金管の音が聞こえる。

トランペットは花形の楽器だ。その派手な音は、一度音を外すと途端に悪目立ちをする。

もうクライマックス。そんな中間こえて来たその飛んだ音は、紛れもなくトランペットから聴こえてきてしまった。

その音に中世古も、滝野も、笠野も。そして吉川も、本番中ではあるが動揺を隠し切れていない。

そう、その音を飛ばしてしまった張本人は、秋川忍だった。

ネガティブトランペッター

関西大会が終わり、夏休みももうすぐ終わる。

残暑と言うにはまだ早すぎる時期ではあり、茹だる様な暑さは変わらないが、それでも北宇治高校の校舎には楽器の音が響き渡っていた。

「うん、今のはいいんじゃないかな？」

「そう？・けっこー苦戦した部分だからねー」

トランペットのパート練では、互いに音を聴かせ合う練習をしている。五月蠅い蝉の音に混じり、吉川と加部がそんなやり取りをしていた。

「……どう、かな？・高坂さん？」

「テンポがズレない様に意識しすぎていて、音が単調になりすぎます。もっと強弱を付けてください」

「……相変わらず辛口……」

一方こちらは、高坂と滝野。無表情で淡々とそう言う高坂に対し、滝野は苦笑いでそう返す。

教室には、1、2年生しかいない。中世古と笠野が居ないトランペットのパート教室は、何故だかやけに広く感じる。

しかし、部屋が広く感じる理由は、もう一つあるのだが……

「……………忍」

思い切り顔を顰めて、吉川は顔を教室の端に向け、鬱陶しそうな声でそいつの名前を呼ぶ。

「……………」

しかし、教室の端つこで縮こまる様に座っているそいつは無言を返す。皆に顔を見られない様に壁に向かって体育座りをしていた。

そんな男を見て、わざとらしく吉川は大きなため息を吐く。

「ハア……………何やってんのよっ…」

「……………人間辞めて、ゴミ箱になれないかなと思って」

消え入りそうな情けない声を出してその男、忍はそう言う。

「……………なれそう?」

「……………たぶん」

どうやら重症の様だ。吉川はもう一度大きなため息を吐くと、忍の方へと近付いていく。

「もう3日も経ってんじゃない。いつまで落ち込んでんのよ?」

「だって…………」

「だってクソも無いでしょ?いつまでもそんなんじゃない、香織先輩が気を悪くするじゃない?」

「……………」

吉川の問い掛けに、忍は無言を返す。

「しよ、しようがないですよ!誰だってミスする事はありますし!私だって何回もミスしますし!!」

すると、フオローをする様に、吉沢がそう言う。本来なら今日は吉沢と忍のペアで練習をする予定だったのだが、ご覧の有り様なので吉沢は困り果てていた。

「もう!アンタがそんな調子でどうすんのよ!ホラ!練習するわよ!!」

「い、嫌だ!!俺はもう少しでゴミ箱になれるんだ!!」

無理矢理教室の隅から引っぺがそうとする吉川に対し、忍は頑固にもその場を離れようとしなない。

「もう!ほんつとに頑固なんだから!!」

梶子でも動かない忍に対し、困り果てた表情でそう言う吉川。

もう朝からずっとこの調子だ。

落ち込む気持ちも分からないではないが、それにしても異様な落ち込み様だった。

「ただいまー」

すると、教室に2人の生徒が入って来た。

「あ、香織先輩、沙奈先輩」

それに加部が反応する。教室に入ってきたのは、3年生の中世古と笠野だった。

「3年生だけでって、何話してたんですか？」

滝野が2人に向かってそう聞く。今まで中世古と笠野は3年生だけで会議をやるという事で、席を外していたのだ。

「うん、私たち、これから受験もあるしね。このまま、部活を続けるか”どうかの話し合い”」

滝野の問いかけに。笠野がそう答える。

「え、このタイミングで辞める人なんて居るんですか？」

そして今度は、吉沢が心配そうに尋ねる。

しかし中世古は、すぐさま首を振った。……と言う事は……

「もちろん居ないよ。せつかく”全国”に行ったんだから。全員、全国大会が終わるまで部活は続けるって事になったよ」

中世古がそう言うと、ホツとした様に、皆胸を撫で下ろす。

北宇治高校吹奏楽部の結果は、金賞。そして全国大会出場。

結果だけ見れば素晴らしい成績だが、そこには少々”運”も絡んでいた。

関西大会の全プログラムを終え、関西大会に進めるのは2校は確定。あと1校は評価が割れると言った感じだった。

確定は明静工科と大阪東照。どちらも大阪の名門で、ほぼ完璧に近い演奏を披露した。この2校が、頭抜けて関西大会を突破したと言っても良いだろう。

そして問題はあと一校。秀塔大附属と、箕輪仰星。そして、我が北宇治高校。前の2校がミスなく演奏し切れていれば、北宇治の全国出場は無かっただろう。と言う事は、その2校が北宇治と同じくミスを犯したと言う事だ。

そしてここから、運が絡んでくる。

ミスを犯したタイミングだ。

12分間の演奏において、序盤の演奏と言うのは非常に重要な

る。完璧に演奏すれば、そのまま流れに乗って行けるし、そこで一つでもミスを行そうならば、その後の演奏がズルズルと崩れる事も大いにあり得る。

そして秀塔大附属と箕輪仰星の両校は、不運にも序盤でミスが出ってしまった。

秀塔大附属はその後なんとか持ち堪えたが、箕輪仰星の方はその後演奏が崩れてしまった。

一つの演奏ミスで全体が崩れる事は、吹奏楽をやっているならば良くある。『ミスをした』と言う事実が演奏中に頭に重くのし掛かり、その後の演奏に集中出来ないのだ。一つの楽器だけがミスをしたとしても、それが連鎖の様に連なり、全体が崩れる。それが吹奏楽、しいては団体演奏での怖いところでもある。不運にも、それが関西大会で起こるとは誰にも予想が出来ない訳だが。

しかし、北宇治にとってはそれが幸運であった。

忍が音を飛ばしたのは、後半もクライマックスの部分。それまでは、完璧な演奏をしていた。もうあと少しで終わりかと言う部分でミスしても、その後に崩れる事は無い。その前に曲が終わるからだ。結果、大崩れになる前に北宇治の演奏は終了した。それが北宇治にとつての最大の幸運だっただろう。

「えっと……秋川君は何してるの?」

「ゴミ箱になるらしいです」

しかし、ミスを行したと言う事実が消える事は無い。中世古が心配そうに尋ねると、呆れた声で吉川がそう返す。

中世古も最後の最後で忍が大ポカをかました事は知っている。パートリーダーであるからか、はたまた元来の性格からなのか、中世古はすぐさま忍に近寄る。

「なーにしているの? 秋川君?」

明るく、そして優しい声で中世古は忍に問い掛ける。流石北宇治1の人格者と言ったところであろうか、普通の人間ならその可憐な容姿と菩薩の様な性格に絆される筈なのだが……

「……香織先輩、俺はもうダメです。トランペットを吹く、いや、持

つ資格すらありません……」

なんともネガティブな発言。壁に話し掛けている様だ。

いつもの様子とはかけ離れている忍の姿に吉川は心底呆れた様な表情になり、中世古は困った様な笑顔を浮かべる。

「誰だつてミスはするよ。秋川君が上手いのは部員全員が知ってるんだから、次に向けて気持ちを切り替えられないかな？」

「……だつて、一番いいところで音飛ばしたし……」

中世古は優しく問い掛けるが、忍の落ち込み様は変わらない。ここまでネガティブになつている忍を見るのも初めてなので、パートメンバーもどう対応していいのか分からない様だった。

「……俺、もうコンクールメンバーから外れます」

するといきなりの忍の発言に、その場に居た全員がギョツとする。

「そ、それは極端過ぎじゃないかな？内容はどうあれ全国大会に行けたんだから、もっと自信持とうよ？」

慌てた様子で、中世古がそう言うも、

「あそこでやらかした人間にどうやって自信持てつて言うんですかー!!」

何を言つてもネガティブな返事が返つて来る。なんだか拗ねている子供をあやしているかの様だ。

そんな忍に対し、遂に吉川のイライラは頂点に達してしまった。

「あーもー!!ウザい!!!つべこべ言わず吹きなさいよ!!!いつまでもウジウジされると気持ち悪いのよ!!!」

無理矢理に腕を掴み、強引に吉川は練習させようと忍を引っ張ろうとする。

「だから俺辞めるんだつて!!!」

「じゃあなんで今日部活来てんのよ!!!」

「無理矢理連れて来させたの優子だろ!!!」

そして喧嘩が始まる。そんな光景を、高坂は死んだ目で見つめていた。

「ぶっ、ははははは!!」

「笑い事じゃ無いんだけど……」

夕方。駅のホームには、2人の少女が会話をしている。話を聞いた黄前が大きく笑うと、不服そうな顔で高坂がそう返す。

「あはは……あー、でもごめん、……ぶっ、面白くって……」

まだ笑いが止まらないのか、黄前はただ口を抑えながら必死に笑いを堪える仕草をしている。

「でも、思ったより深刻じゃなくて良かったなーって」

少し楽観的とも取れる黄前の発言に対し、高坂はさらに不服そうな表情になる。

「……そう? アツキー先輩、辞めるとか言ってたけど」

「優子先輩が辞めさせないでしょ。と言うか、本当に辞める気だったらそもそも部活に顔を出さないとと思うけどなあ」

「そりゃ、そうだけど……」

黄前はそう言うが、高坂の表情は依然として険しいままだ。そんな彼女を見て、優しい口調で黄前は問い掛ける。

「麗奈はさー、アツキー先輩があの時ミスしたのを怒ってんの?」

自分が不機嫌な事をズバリ当てられて少し面を喰らうが、直ぐに高坂はいつも通りの無表情に戻る。

「……ミスした事には怒ってない。いつまでも引き摺ってるのが気に入らないだけ」

高坂麗奈は、まっすぐな人間だ。自分が高みに登るためには、後ろを振り返っている暇なんて無い。ミスをしたも、その次に行くために前を向けばいいでは無いか。

そんな理路整然とした、彼女らしい考え方。しかし黄前は薄く笑う。

「……麗奈らしいね。……でも、アツキー先輩の気持ちも、よく分かるかも」

「久美子まで……」

どちらの味方にも付かない黄前に対し、高坂は少々眉間に皺を寄せ
る。

「アツキー先輩で、何故かみんなから人気なんだよね」

「……それが何？私とは正反対って言いたい訳？」

忍の部内の評価を持ち出す黄前に対し、高坂は少々顔を顰める。

「違うって。……アツキー先輩って、そういう意味ではすごい”人
間っぽい”んだと思う。麗奈とかはちよつと浮世離れしてる感じで、
”強い女性”って感じでしょ？だから”憧れ”とかは抱きやすいん
だけど、身近には感じないんだよね」

「……悪かったわね。無愛想で」

黄前のなんとも直接的な物言いに、さらに不機嫌になる高坂。

「そうじゃ無いって。でも麗奈と比べてアツキー先輩って、どつか
庶民的って言うか、なんか”共感”しやすいんだよね。ミスしてそん
だけ落ち込んでるのもそうだし、そう言う”弱い”ところを曝け出せ
る人って、結構私は魅力的だと思うな？」

部室内での出来事を思い出す様に、黄前は呟く様にそう言う。

忍の本質は、”自然体”と言えば良いだろうか。基本的に自分を取
り繕う事が無いので、リーダーシップが無くとも周りから信頼を集め
やすいのだ。

『この人には裏が無いんだろうな』と思わせる自然体の魅力。それ
が秋川忍と言う一人の人間性だった。

「……そうかな？」

しかし高坂はそれが理解できないのか、微妙な顔つきでそう返す。

「うん、だからアツキー先輩が嫌いって言う人は居ないし、あの時皆
の前で優子先輩をビンタしても、受け入れられてるんじゃないかな
？」

この物事を俯瞰から見れる能力は、黄前の特徴と言って良いだろ
う。同じユーフォにそう言う先輩が居るからか、結構的を射た分析で
あった。

不調

「……………秋川君」

「……………はい」

合奏練習。音楽室、もうこれで何回目だろうか、演奏を止めた滝先生は忍を射抜くように見つめる。

「……………さつきと同じ箇所です。これで3回目ですよ？貴方の実力はこんなものでは無いはずですよ」

「……………」

滝先生の淡々とした問い掛けに、忍は無言を貫く。音楽室では、視線が忍一点に集まっている。驚きや、心配がる様な眼差しを向ける者ばかりだ。

忍の状態は、最悪と言って良かった。下手なのでは無い。集中し切れてないのである。吹けば吹く度に音の荒さが目立ち、その度に滝先生が演奏を止める。

こんなにも演奏を止められるのは、コンクールに向けての練習をし始めた頃以来では無いかと言うほどであった。

合奏練習で名指しで注意されるのは、割と屈辱的な事だ。それがプライドの高い者となると、その悔しさは人一倍強くなる。

俯き気味で滝先生の注意を聞く忍の表情は、無表情ではあるが必死にその顔を作っている様にも見えた。

「もう一度、前の小節からです。全国に行けたからと言って、ここで終わりではありません。ここで気を抜けば、全国の舞台で北宇治は恥を晒す事になります。そうならないためにも、「先生」

すると、滝先生の言葉を遮る様に、忍が声を上げる。

「……………はい、なんででしょう？」

「……………個人練、行ってきて良いですか？」

忍のその言葉に、音楽室が少々騒つく。よく自由人と言われる忍ではあるが、滝先生が赴任してきてからは合奏練習に出ない事などなかったからだ。

「……理由は、ありますか？」

「今のままだと合奏練習にならないからです。集中出来てないメンバーが居ても邪魔なだけでしょ？……少し、頭でも冷やして来ようかと」

冗談めいて忍はそう言うが、表情は暗いままだった。それを見て、滝先生は少し考える様に黙り込む。

「……分かりました。落ち着いたらで良いので、自分が良いと判断したら合奏練習に合流して下さい」

「ありがとうございます。……じゃあ、ちよつくら外で吹いてきます」

いつも通りを装って、忍は楽譜台を持って逃げる様に音楽室から出て行く。そんな背中を、部員達はじっと見つめている。

「やっぱあんときミスしたからかなー？」

「まあ、ちよつとしたら元通りになるんじゃない？アツキーだし」

アツキーの事だ。いつかはひよこつといつも通りに吹いている事だろうと。そんな楽観的な空気が、音楽室には流れていた。

ただ1人、吉川優子を除いて。

「……ただいまー……」

いつもより勢いの無い弱々しい声で、忍は家の扉を開ける。見るからに調子は良くないが、無理も無い。

今日は一日中あんな調子だったので、演奏どころでは無かった。合奏練習でもミスを連発し、滝先生にも何度も注意された。

個人練なら誰も居ないから集中出来るだろうと思っただが、それもダメ。まさに八方塞がりと言った感じであった。

「あー……」

トランペットケースを置き、学生バッグを放り投げ、それと同じ様に自身の身もベッドに放り投げる忍。

こども上手くないのがストレスになるものかと。

うつ伏せの状態ですボンのポケットから取り出したスマホの画面をなんとなくに見てみると、自転車に乗ってる間に掛かって来たのか、着信履歴が一件あった。

「……うっわ、まさっちじゃん」

こう言う時はメールで済ませてくれないだろうか？そんな内心も含まれているかの様に、忍はそう呟く。

しかし無視するわけにもいかないのです、すぐさま忍は折り返し篠田に電話を掛ける。

「……もしもし？まさっちっ」

『あー、忍？良かった。シヨックで電話に出れんレベルになっと思うたわ』

開口一番、突き刺さる様な篠田の物言いに、苦笑いになる忍。

『とりあえずはおめでとうや。関西大会。途中からしか北宇治の演奏聴けんかったんやけどな』

「……聴いてくれない方が嬉しかったんだけどなあ」

『だはは！そんな事を返せる余裕があんならまだ大丈夫や！』

電話越しの篠田は明るい口調だ。しかし、彼なりの励ましさと思うと、忍の口元も少し緩んだ。

『ああ言うのは何処の高校でもあり得る。もちろん、明静^{ウチ}でもや』

「……でも、ミスしたのは俺で……『まあ聞けや』

忍が弱音を吐く前に、篠田は言葉を被せる。

『……忍がそない落ち込んでる言うんは、その分練習しよったつちゆう事や。……俺も本番でミスった事があるさかい、気持ちは分かる。でもそればっか思い出しよると、音が出んようになるんや』

「……」

篠田の言葉に、忍は黙って耳を傾ける。今日一日、集中とは程遠いコンディションで忍は演奏した。分かっている。忘れたくても、頭の何処かではあのミスがチラついて来るのだ。

『……忘れるとは言わん。でも、忘れるぐらい目の前の音楽に集中せんと、沼にハマって抜け出せんようになるで』

電話越しに聞こえる篠田の声は、いつの間にか真剣なものへと変

わっていた。それに忍も「……うん」と、一言だけ返す。

『言いたい事はそれだけや！ほいなら、電話切るで！』

「あ、ちょーまさっ！……切れた……」

忍が礼を言う前に、篠田からの通話が途切れる。相変わらず嵐の様な彼に、忍も困った様に微笑んだ。

「……………兄ちゃん？」

すると、部屋の入り口から声が掛かる。忍が振り向くと、少し心配そうな顔をした凜花が居た。

「あー、ごめん凜花。今日俺が飯の当番だったな」

すぐさまスマホをポケットにしまい、忍はベッドから立ち上がろうとする。

「あー……………いいよ。今日アタシが作つといてあげるから」

すると、少し照れも混ざった様な、何とも言えない声で凜花はそう言う。

「……………氣い遣つてくれてんの？」

「そのとーり。兄ちゃん、昔からトチると凹むでしょ？だから、妹であるアタシがフォローするのだ」

そんな照れを隠す様に、凜花はひょうきんに、冗談っぽく腰に手を当ててそう言う。

「……………うっせ。凹んでねーし」

吐き捨てるように忍はそう言うも、表情にはちゃんと出ていた。それを見て、凜花はニンマリと笑顔になる。

「顔に出てんの。ともかく、今日はアタシが作るから、兄ちゃんはベッドで泣いてていいよ？」

「今……で泣いてやるーか？」

いつも通りの会話。そんなやり取りを交わし、凜花は少し安心するのだった。

「……なんでアンタが居んのよ?」

「いいでしょ?アタシもポテト食べたかったんだし、それに、アンタに聞きたい事もあったしねー」

一方、こちらは学校からほど近いファーストフード店。そこでは、珍しい組み合わせが見られた。

いや、いつも会話はあるのだが、この様に学校帰りに友達のような事をしているのが珍しいだけである。

互いに席に座ると、会話を切り出したのは頭に大きなりボンを付けた少女だった。

「で、聞きたい事って何よ?」

その少女、吉川が面倒臭そうにそう言う。

そしてもう1人、少女は気怠そうな手つきでポテトを一口に頬張ると、吉川に目を向ける。

「……アッキー、ダメそう?」

その少女、中川夏紀の問い掛けに、少し吉川の顔が強張る。

「……ダメって、何よ?」

「そのまんまの意味。……あんなに外すアッキー。アンタも見えないでしょ?パート練ではどうだったのかなーって」

「……なんでそんな事アンタに言わなきゃいけないのよ?」

こんなこと言われる筋合いは無いと、吉川は顔を顰めてそう返す。しかし、中川は更に視線を強くした。

「アッキーの手綱握れんの、アンタだけでしょ?アンタがフォローしてやんなきゃ、誰がアッキーを立ち直らせんのよ?」

「……………」

中川の問い掛けに、吉川は少し考える。

分かっている。と言うか、そうであるべきだと、吉川自身も思っている。

秋川忍を立ち直らせるのは、自分しか居ないと。

だが吉川の中には、一つの懸念があった。

「……分かってる。分かってるけど、正直私もどうしたら良いのか

あまり分かって無いのよ」

「はあ？」

珍しく弱気な事を言う吉川に対し、中川は呆けた様にそう返す。

「……どっかで私も楽観視してたんだろーね。」あの秋川忍が壁に当たると「答が無い」って」

「……だからアンタが……だから分かんないのよ」

中川が皆まで言う前に、吉川は声を被せる。

「アイツが落ち込んだところなんて見た事無いから、どんな声を掛ければいいのか分かんない。優しい言葉を掛ければいいのか、それともケツを叩いて無理矢理立ち上がらせればいいのか。どっちもやってみただけ、どれも違う様な気がしてね」

「……」

独白の様にそう語る吉川に対し、中川は何も言えなくなってしまう。

「アイツの事一番知ってるのはアタシだと思ったけど、まだまだ知らないことばかりね」

そして、自虐する様に吉川がそう言う。しかし、表情を見るとそんなに悲観的でも無かった。普通なら自分の好きな人が悩んでいると悲観的になるものだが、吉川の様子を見る限りどうもそんな感じでは無い様に中川は感じた。

「……あまり、ショックじゃ無さそうだけど？」

恐る恐るだが、中川はそう聞く。

しかし、次の吉川の言葉でその理由を知る事となる。

「え？だって今まで知らない一面が見れたじゃない。どっちかっていうと、私は嬉しいかな？」

当たり前かの様に、吉川はそう言い放つ。知らない一面が見れて、嬉しいというのは分からないでもないのだが……

「うっわ、彼氏が悩んでるのにそういう事言う?」

状況が状況だ。好きな人が苦しんでるのを見て喜ぶとはこれいかにと、中川はそう返す。

「それとこれとは話が別。もちろん立ち直らせるわよ。今はどうすればいいか分からないけど、絶対に忍には立ち直ってもらおう。……それが私の役目って訳じゃ無いけど、私にしかそれは出来ないと思ってるから」

「……出来るの?」

「出来るじゃくて、するの。私の全部を懸けてでも、忍には立ち直ってもらおう」

決意を持った眼差しで、吉川はそう言い切る。

その言葉を聞いて、中川は遂に理解した。

吉川優子にとって、秋川忍は自分の全てを捧げてもいいと思える程の存在なのだろうと。

そして、忍は絶対に立ち直ると確信に満ちた”信頼”を寄せているからこそ、この状況でも彼女は悲観的になっていないのだ。

「……アンタ達って、何か互いに重いよね」

「はあー!?!なによそれ!?!」

『全てを懸ける』なんて言葉がスラリと出て来る辺り、この言葉がピッタリなのだろう。しかしそれ程信頼し合える関係だと思おうと、少しだけ羨ましく感じる中川であった。

スランプ

校舎に、トランペットの音が響く。

残暑も残る9月の初め。夏休みが明けた校舎内は賑わいも増し、様々な音が増えた。

野球部のバッドがボールを叩く音。体育館から響くバスケットボールの小気味良いリズム音。どこぞの文化部やら帰宅部が談笑している音。

そんな音に混じる様に、トランペットのソロが聴こえる。

「吹部かなー?」

「じゃない? 全国行ったんでしょ? 凄いよねー」

他人事の様子に、女子生徒2人がそんな会話をしている。

北宇治高校吹奏楽部が全国に駒を進めた事は、この学校の生徒であればほとんど知っている。

これといって突出した部活動が無かった北宇治高校にとって、吹部が全国に行った事により、どこか浮ついた空気が流れていた。

吹部になんら関係無い彼女達にとっては、この音が上手い様に聴こえるのだろう。実際、メロディを奏でられてる時点で素人目にはとてもなく上手く聴こえるものだ。

「アタシも今から吹部に入ろっかなー?」

「あははーそれ名案! 履歴書も派手になるしねー!」

冗談混じりにそんなやり取りをしながら、女子生徒2人は「帰りゲーセン寄ろー」やら、「駅前のパンケーキ屋寄らない?」などと、他愛も無い会話をしている。これもまた、10代の青春なのだろう。

「……………」

一方、こちらは校舎裏。そこでは先程まで校舎に響かせていたトランペットの演奏を止め、考え込む様に俯く男が居た。忍である。どうも自分の音に納得して無い様だ。

ひとしきり考えた後、もう一回吹こうとマウスピースを口に近づけるも、途中で止めて力が抜ける様にだらんとトランペットを持つ手を

下げる。どうやら吹くのを辞めてしまった様だ。

スランプは、忍にとって初めての経験だった。

今まで吹けていた。今まで完璧だった。その音が脳裏に焼き付き、今現状の音と比べて、どうしても劣等感が生まれてしまう。

吹けば吹くほど、乱れる音が気になり、さらに集中力が削がれ、また乱れる。そんな地獄の様な悪循環に忍は陥っていた。

アスリートは、自分が最高の状態だった頃の感覚が忘れられないと言う。だから自分の最高だった状態に戻そうとするも、これが中々上手くないらしい。それがスランプのロジックだ。

今の忍はそれに当てはまっていてると言っている。吹けば吹くほど自分を苦しめる。しかし、それ以外に解決方法を見出せない。

結果、がむしやらに吹いている様な状態が、今の秋川忍だ。

「……やっぱ苦勞してるんだね。アッキー」

「……かさみー……」

迷走。不調、モチベーション低下。そんな状態の忍に話し掛けたのは、傘木だった。

「アッキー、最近調子悪いから……」

「まーね。でも、ぼちぼち良くはなつて来てるかも？」

「え、そうなの？」

気丈に忍はそう答えるが、殆どが嘘である。スランプ脱出の糸口も見つかって無い様な状況だ。

しかし傘木はそんな忍の嘘に気づかず、ほっとした様に胸を撫で下ろす。

「良かったー！もうここ最近ずっとそんな調子だったから、心配してたんだー。全国大会までにアッキーにはいつも通り戻って貰わないとって」

「心配かけてしまった様ですなー」

精一杯の仮面の笑顔を貼り付け、忍はそう返す。

いつも飄々として自由気ままな性格の忍であるが反面、打たれ弱い部分もある。最近では全くスランプから抜け出せない為か、こうして

本心を隠すまでになってしまっていた。

「うん！だから良かった！だってアツキーは私の憧れだから！」

「っ!!」

満面の笑みでそう言う傘木に対し、少し動揺を見せる忍。いつもなら調子に乗る様なその傘木の言葉は、今の忍にはプレッシャーでしか無い。

「じゃあ、アタシ行くね！」

そしてそれだけ言うと、吹っ切れた様な表情で傘木は校舎裏から消えて行く。それを見送ると、忍は邪念を払うかの様激しく首を横に振り、再びマウスピースに口を付けた。

翌日、早朝。誰も居ない音楽室の鍵を忍は開ける。自分がスランプなのはもう分かりきってる。そんな情けない自分をどうにかしたいと、忍は誰よりも早く朝練に顔を出していた。いつも朝は弱くギリギリまで寝ている忍が、今日は一人で朝一番乗り。その表情には、陰りの他に焦りも含まれている様に見える。音楽室の中に入ると、足早にトランペットと楽譜台の用意をする。

「…………アツキー…………？」

すると一足遅れて、鎧塚も教室に入って来た。いつもならこの時間に居るはずもない忍の姿を見て、少しながら驚いている。

「…………あ、おっすよろみー。今日は俺が一番乗りだよん」

一瞬遅れて、忍は鎧塚に挨拶を返す。

「…………おはよう。…………珍しいね？」

忍がこの時間に来るのが相当意外だったのか、珍しく鎧塚から話題を振る。

「うん、偶には朝吹くのも良いかなーって」

「…………ふうん」

忍がそう言うと、鎧塚はそれだけ返す。

「……………」

「……………」

そして、しばしの無言。いつもなら話し掛けるのはいつも忍の方かなのだが、今の忍にはそんな余裕も無かった。

「……………これから外で吹くの?」

すると、またしても鎧塚からそんな事を聞かれる。鎧塚から話題を振られるとは露ほども思ってたなかった忍は、かなり驚きながらも「え? あ、うん」と返事を返した。

「……………そう、じゃあ」

「う、うん。行つて来やす」

相変わらず言葉が少ない。忍はそれだけ言うと、楽譜台を持って音楽室を後にしようとする。

「……………アッキー」

すると、ふいに鎧塚が忍を引き留めるそれに忍も、「ん、何?」と返す。そして次に鎧塚の口から出て来た言葉は、忍にとって意外なものだった。

「……………トランペット、好き?」

真つ直ぐ、鎧塚はそのクリツとした大きい目を忍に向ける。

「……………うん」

対して忍は少し考えた後、それだけ返す。それを聞いて、鎧塚は薄く笑った。

「……………そう、良かった。じゃあ、がんばって」

それだけ言うと、鎧塚はケースからオーボエを取り出し、淡々と演奏の準備を進める。

今のは幻だったのか? そう思いながら、忍は少し困惑した様な声で「ありがとね」と言い残して、音楽室から出て行った。

「今年の文化祭に関してですが……………」

学校が始まれば、夏休みの様に一日中練習というわけにもいかない。今はクラスのLHRの時間。議題は、もうじき迫る文化祭の出し物の話だった。一年に一度きりのイベントだからか、クラス内が少々賑わっている。

「では、クラスの出し物で何かやりたい人は居ますか？」

文化祭の実行委員長がそう聞くと、チラホラアイデアが出てくる。クラス内ではこの議題に積極的な者、あまり文化祭には興味を示さないのか、つまらなさそうな顔をしてる者など様々だ。

「おい」

そんな2年3組の教室。滝野が前の席に座る忍にそう聞くと、忍の返事は返ってこない。

「おい、アッキー。聞いてんのか？」

「んえ？ああ、タッキー……」

再び少し強めの口調で滝野が呼ぶと、ようやく忍は振り返った。

「何ボーツとしてんだよ。もうじき文化祭なのに。アッキーらしくも無い」

「あー、うん。考えてる考えてる」

心配そうに滝野がそう尋ねるも、忍はどこか上の空で生返事を返す。

本来なら忍の性格上、文化祭などのイベントは心の底から楽しむタイプなのだが、滝野も忍の異変に気付いていた。

「……………何て言うか、意外と不器用なんだな。お前」

そして、困った様に笑って滝野はそう言う。

「……………どう言う事？」

そんな滝野の悪口に少し眉間に皺を寄せて、忍は反論口調でそう返す。

「感情を隠すのが下手過ぎんだよ。関西大会の前と後じゃ別人みたいに見えるぞ？」

「……………」

凶星を突かれたのか、あからさまに目線を逸らす忍。

「……………まー、無理も無いかもな。俺だってアッキーと同じ状況に

なったら、どうなるか分かんねーし」

「……別に、落ち込んじゃいねーよ」

拗ねる様にそう言う忍に対し、またしても滝野は困った様な笑顔を浮かべる。

「また顔に出てる。……とにかく、悩んでんなら誰かに相談してみろ。俺じゃなくても良いから。……言うだけで多少は楽になるぞ?」

そう言って、滝野は忍の肩をポンポンと叩く。

同性でここ最近の忍を一番見てるのは、紛れもなく滝野だ。同じクラス、同じパートメンバー。一緒に遊んだり帰ったりもする仲だ。一緒にいる時間はもしかしたら吉川よりも多いかも知れない。

「……何か、タツキーっぽく無いね?」

「はー!?どう言う事だよ!?!」

それは照れ隠しか、忍は冗談混じりにそう返す。しかし、親友とも呼べる人にそう言われると、無性に嬉しくなる忍であった。

足止め

職員室。滝先生はイヤホンを着け、パソコンの画面を食い入る様に見つめている。

映像で流れているのは、他校の演奏映像。明静工科、名工大附属、埼玉共栄。どれも今回全国へと駒を進める学校の演奏だ。

一通り聴き終えると、滝先生はイヤホンを外し、「ふう……」と一息つく。

「お疲れ様です。滝先生」

すると、その光景を見ていた松本先生から声を掛けられた。

「お疲れ様です。松本先生」

いつもの様に滝先生も柔らかい笑みを浮かべて、そう返す。

「……他校の演奏ですか」

「ええ。やはり全国常連とあって、かなりのレベルです。学ぶことも多いですよ」

パソコンの画面を二人して見ながら、そんなやり取りをする滝先生と松本先生。

「……学校の吹奏楽は、顧問一人で大きく演奏が変わると言いますが、まさか全国大会とは」

「ここに赴任する事になって、演奏を初めて聴いた時から、ポテンシャルがあるのは分かっていましたから」

滝先生は目線をパソコンからどこか遠くを見やる様に窓の外に向け、しみじみと語る。

「中世古さんや田中さんは、強豪校にも劣らない実力を持ってましたし、そこへ高坂さんや川島さんが入って来てくれました。身近に手本となる存在があれば、後は各個人がどう意識するかです」

「……秋川はそこにいませんか？」

「え？」

意外な松本先生の返しに、滝先生は目を丸くする。すると、柄にもなく松本先生は恥ずかしがる様な仕草を見せた。

「ええ、いや、あの子は去年からずっと音楽だけには真摯で真面目でしたから」

言い訳をする様にそう言う松本先生を見て、少し笑い出してしまう滝先生。

「滝先生！何も笑う事は……」

「いえいえ、すみません。……そうですか。何となく、松本先生が彼には厳しいのが分かりました」

「だから、そう言う事では……!」

松本先生は必死に弁明しようとするが、もう後の祭りだった。滝先生は揶揄う様に言葉を続ける。

「松本先生、最後までソロパートに秋川君を推してましたもんね。あの時は私に『ソロパートの件は一任する』と言ってくれましたが、本当は秋川君に吹いて欲しかったのでは無いですか?」

「ち、ちがつ……!!」

滝先生がそう言うと、松本先生は困った様な表情を浮かべて少し顔を赤らめる。そして、一つ間を置いた後、観念した様に松本先生は口を開いた。

「……私のエゴかも知れませんが、あの子は去年色々ありました。……自らの意思でソロコンに挑んで賞を取って、誇れる事なのにあまり良い目で見られなかった。……ですから、あの時とは違う今の部活で、思う存分楽しんで吹いてもらいたいです」

「……そうですか」

松本先生の独白の様なその言葉に、滝先生はそう返す事しか出来ない。

去年の事件は、滝先生も耳にしている。しかし、その状況を自らの目で見ているはいない。

その点では、松本先生の方が忍の事をよく見てると言っても良い。去年忍が上級生に対して暴力を振るった時も、松本先生は誰よりも叱つたし、誰よりも心配していた。

そして何より、あの時力になれなかった自分に後悔の念を抱いていた。

「……なら、秋川君には早く元通りになって貰わないといけませんね」

一言、また薄く笑って、滝先生は呟く様にそう言う。毎日生徒の演奏を聴いているのだ。忍のスランプが一向に良い方向に向かわない事を、滝先生も危惧していた。

「お願いします。私には滝先生程の指導力はありませんから、どうかしてあの子の力になって欲しいんです」

ぺこりと一礼して、松本先生はそう言う。

「いえいえ、一人の生徒が苦しんでいるのですから、手を差し伸べるのは当たり前です」

そしていつもの様に笑って滝先生がそう返すと、松本先生は顔を上げて困った様に笑った。

「……本来なら一人の生徒を贖済するのは、指導者として失格なのですがね」

「ええ、ですから、ここでの会話は聞かなかった事にします」

「……本当、助かります」

そう言って、誰もいない職員室で笑い合う二人。意外にも忍の事を一番気に掛けているのは、松本先生なのかも知れない。

青空。残暑も厳しい宇治の街。そこに位置する北宇治高校の屋上では、またまた一人の男が個人練習をしている。

最近は何ト練でもめつきり顔を出さなくなった。そんな中、苦しむ様に、もがく様にその男、秋川忍はマウスピースに口をつける。

「そんな顔で、良い演奏が出来るとは思いませんが」

すると、横から女性の声が聞こえる。一旦吹くのをやめてその声の

方向に忍が顔を向けると、複雑そうに忍を見つめる高坂の姿があった。

「……なんか、最近色んな人に話し掛けられるね」

困った様に笑って忍がそう言うのと、高坂の眉間に少し皺が寄った。

「……アッキー先輩のその顔、私は嫌いです」

「いきなり失礼じゃない？」

喧嘩越しにそう言う高坂に対し、忍は心底困った様な表情を浮かべる。

「……パート練習ですよ。教室では香織先輩達が待ってます。……」

優子先輩も。……教室に戻りましょう」

いつもは『孤高』と言う言葉がピツタリな高坂が柄にも無い事を言うので、少し驚く忍。

「……いや、いいよ」

「はっ」

しかし、忍はすぐさま顔を伏せてしまう。それを見て、高坂の眉間にさらに皺が寄った。

「今俺が帰ったら、多分パート練にならない。高坂さんなら分かるでしょ？」

ここ最近のスランプですっかりやられてしまっているのか、弱気な発言をする忍。

それを聞いて何かがキレたのか、高坂は一步詰め寄る様に忍へと近付く。

「……見損ないました」

「え？」

いきなり雰囲気ガラッと変わった高坂に対し、忍は少々困惑気味になる。

「私にとって、アッキー先輩はライバルだと思ってました……!」

ゆらりと、一歩ずつ近づいて、高坂はそう言う。

「それが何ですか?『俺が帰ったらパート練にならない』?そんな心配される筋合いはありません!」

段々とヒートアップしてくる高坂に、呆気を取られる忍。

「こんな弱つちい男に気を遣われるなんて、虫唾が走ります!!私
がライバルだつて認めた人間はもつと自由で、楽しそうに吹きます!!」

「ちよ、高坂さん?」

感情を爆発させる様に、高坂は忍を睨みつける。

「そんなんじや優子先輩に愛想を尽かされるのも「ちよつと麗奈!!」
すると、暴走しかけた高坂を咎める様に、癖毛の強い女子生徒が慌
ててこちらにやってくる。

そしてすぐさま高坂の腕を掴み、強引に校舎の中へ引つ張つて行こ
うとする。

「ちよ、久美子!!私まだ言い終わつて無いんだけど!!」

「い、良いから!!ご、ごめんなさい!!アッキー先輩!!私たちもう行き
ますんで!!」

そう言つて、黄前は引きずる様に高坂を校舎内へと引つ張つて行
く。

忍にとつて、高坂麗奈は闘争心や負けん気は強いが、あまり感情を
表に出さないタイプだと思つていた。

そんな彼女が初めて見せる一面。

「……………なんだったんだ……………」

あまりにもその姿が衝撃だったのか、忍は呆然とそんな言葉しか出
てこなかった。

「それでは、今日の練習はここまでです。各自、今日言われた事を忘
れない様に」

「「「はい!!」」」

いつもの様に滝先生がそう声をかけると、今日の練習が終了する。
忍はそそくさと片付けを始め、足早に帰ろうとする。

「アッキー、ちよつと良い?」

すると、同じく片付けをしていた中川に呼び止められた。今日とて
滝先生に散々注意を受けた。その恥からか、忍はさつさと片付けて逃

げる様に帰ろうとしていたのだ。

「えっと……」

「良いでしょ？この後暇そうだし」

何だか有無を言わせない雰囲気の中川に対し、「う、うん」と、圧に負ける様に返事をしてしまう忍。本心は早く帰りたくて仕方がないのだが、中川を無下にするわけにもいかない。

そして中川が隣の音楽準備室に忍を連れ込むと、言いにくそうに口を開いた。

「えーっと、何話そうとしてたんだっけ？」

しかし、彼女の口から出て来た言葉は意外も意外。それに、忍はずっこけそうになる。

「話があるんじゃない……」

「え？あー、なんつーの？話があるっちゃあるんだけど、何て言うかー……」

言いたい事があるから呼び出したのでは無いのだろうか？何だか話題を探している様な中川の態度に、更に忍の頭に疑問符が浮かぶ。

「あ、そう言えば文化祭！アツキーのクラスって、何やるんだっけ？」

そして、ようやく話題を見つけたのか、全く予想外の質問が飛んで来る。

「え、何って……フツーに焼きそばの屋台やる事になったけど……」

「へー、そっかそっかー。ウチらのクラスは喫茶店やるっぽいんだー」

……何だか違和感しか感じない会話だ。そんな事を考えながら、矢継ぎ早に飛んで来る中川からの質問に、忍は答えていくのだった。

そして、十数分の会話の後、中川はスマホの画面を確認して時間を確かめる。

「……よし、もう良いかな？」

小声でそう呟くと、スマホをしまい、中川は再び忍の方へと顔を向ける。

「もう良いよ。ありがとね。話聞いてくれて」

「え？突然？」

いきなり中川から解放された事に、また呆気にとられる忍。ここ最近はこの事ばかりだ。

「うん。待つてると思うから、もう帰って良いよ」

「待つてると何が……」

「それは良いの。とにかく、帰んな帰んな」

先程の引き留める様な会話とは一転、今度は帰る様に促してくる中川に対し、困惑し切った顔を浮かべる忍。

何が何だか分からないまま忍が準備室のドアを開けると、「あ、アツキー」と、中川に再度呼び止められた。少々面倒臭いと思いつつも、「何？」と、忍は振り返る。

「優子にだけは、本心を曝け出しても良いと思うよ？」

「はい？」

いきなりの事で何を言ってるのか忍には理解出来ず、素っ頓狂な声を上げる。

「何でも。それより行った行った。もーアタシの役目は終わったから」

「何だよ、それ……」

相変わらず何がしたいのか分からない中川に対し、困った様にそう言う忍。結局中川が何が言いたいのか分からないまま、忍は準備室から出て行く。

ともかく、これで帰れる。忍はバッグと手入れたトランプケットケースを音楽室から持ち出し、昇降口へと向かう。

結構長い間話していたからか、校舎内の人は疎になっていた。最近練習が終われば真っ先に帰っていた為、何だか懐かしさを覚える。

そして、昇降口に着くと、一人の少女が待っているのが忍の目に入った。下駄箱の前でじっと、頭の上に大きなリボンをつけて佇んでいる。

間違いない。

「あ、やっと来た」

その少女、吉川優子は忍の姿を見つけると、優しい笑顔を浮かべてそう言って来た。

内心

「遅いわよ」

下駄箱の前で忍を見つめながら、吉川はそう言う。

「いや、ちよつとなつきちに絡まれて……」

別に待ち合わせの約束をした訳でもないのだが、言い訳する様に忍はそう返す。

「うん、知ってる」

「え?」

「だって夏紀にアンタを止めてもらう様頼んだの、私だもん」

悪びれもせず、そう言い放つ吉川。対して忍は吉川が何をしたいのか分からず、怪訝そうな表情を浮かべている。

しかしそんなことも構わず、吉川は言葉を続ける。

「アンタ、最近部活終わったら真っ先に帰っちゃうでしょ? 朝練だとあまり時間取れないし……だから、癪だけど夏紀にアンタを足止めしてもらおう様言ったのよ」

「何でそんなこと……」

暗い表情で忍がそう聞くと、吉川は勝ち誇った様な笑みを浮かべた。

「言ったでしょ? 私にとって、アンタは”特別”だって」

恥ずかしげもなく、まるで当たり前かの様に吉川はそう言い放つ。

「……………同情?」

しかし、それを素直に受け取れないのか、忍は依然と暗い表情でそう返した。

それを見て、吉川は困った様に笑う。

「何卑屈になってんのよ。アンタらしくも無い。……とにかく、アンタこの後暇でしょ?」

「……………暇じゃ無いって言ったら?」

「無理矢理連れてく。凜花ちゃんにも今日は遅くなるってもう伝え
たから」

「どうやら身内への根回しも完璧らしい。そこまでされては流石に
忍のNOとは言えなかった。「分かったよ……」と、素直に頷く。

「よろしい。じゃあ、今日は一緒に帰るわよ」

いつしか、同じく下駄箱の前でこんなやり取りがあったなど、ふと
思い返す吉川。もつとも、その時は立場が逆だったが。そんな事を思
い出したのか、帰りに寄る場所が吉川の中で決まった。

「……………ここって……………」

「意趣返し。何飲む？」

吉川が連れて来たのは、とある公園。その自販機の前で、吉川は何
の飲み物を選ぶのか催促してくる。

その公園は、いつしか忍が吉川を連れて来た公園。ソロパートの間
題でいっぱいになった吉川を、忍が吹っ切れさせた場所
でもあった。

「……………何でも」

「はこよ」

別に特別何かを飲みたい気分でもなかったもので、忍は適当にそう言
う。そして軽く返事を返すと、吉川はお茶を、そして忍には……

「……………これも、意趣返し？」

あの時吉川に渡したのと全く同じ、ブラックコーヒーを手渡され
た。

「そうよ。とにかくここで話すのもなんだし、あつちに座りましょ
う？」

そしてあの時と同じベンチを指差して、吉川はそう言った。

「……………」

「……………」

ベンチに座ると、しばし無言が続く。忍は考え込む様に俯いてるが、吉川はさほど緊張してる様に見えない。

あの時とは真逆の光景だった。

「……忍は、私の事どう思ってる？」

優しい口調で、吉川は忍にそう問い掛ける。忍にとっては意外な質問だったのか、少々驚いた様な表情を見せる。

「……今言わないとダメ？」

「うん。今聞きたい」

吉川は真つ直ぐ忍を見つめ、強めにそう言う。今言わなければタダじゃおかないと言った様な口調だ。しかし、今の忍には何故だかそれが心地良かった。

「……変わらないよ。特別」

忍がそれだけ言うと、吉川は満足した様に笑った。

「そう、ならちよつと聞かせて？……今忍は、トランペット吹いてて楽しい？」

続けて真つ直ぐ忍を見据えて、優しく問い掛ける様に吉川はそう言う。

忍の瞳が少し揺れた。

「……………楽し」「嘘は許さないわよ」

釘を刺す様に、上から言葉を被せる吉川。思わず忍は言葉を吞んでしまう。

「いや、嘘じゃなくて、本心を隠すことはして欲しくない。……アンタにとって、私は特別なんでしょう？なら、アンタの本心が聞きたい。……それがどんな言葉であっても、私は受け入れるから」

そう言つて、吉川は左手を忍の右手に被せる。その言葉を聞いて、ようやく忍は顔を上げる。そして、恐る恐るではあるが、ゆっくりと顔を吉川の方向へと向けた。

「もう一度聞いわよ？……忍は今、辛い？」

優しく、それでいて射抜く様な瞳。吉川の瞳は、綺麗な水色。そんな目が、忍を見つめる。しっかりと、一瞬も逸らさず。

『優子にだけは、本心を曝け出しても良いと思うよ?』

忍は、先程中川に言われた事を思い出していた。熱いものが込み上げてくるのを我慢しながら、忍はなんとか言葉を発する。

「……しんどい」

震える声で、忍はそう呟く。そして一度弱音を吐いてしまうと、もう止まらなかった。

「分かんなくなってきた。自分の音も、どうやって吹いてたのかも。吹けば吹くほどしんどくなってきた、……正直もう辞めたいって思ってるかも。でも……でも……」

初めて、秋川忍という人間が涙を流しているのを見た。

一緒に泣きそうになるのを必死に堪えながら、吉川は忍の言葉に耳を傾ける。

「辞めたく無いなあ……また楽しく吹きたいなあ……」

ボロボロと、大粒の涙をこぼしながら、忍は継る様に言葉を溢す。そして、助けを求める様に吉川の顔を見ると……

「ねえ、優子。……俺、どうすれば良いと思う?」

クシャクシャな顔で、忍はそう聞いてくる。何もかも、初めて見る忍の顔。

吉川優子にとって、秋川忍は特別だ。だから忍の事を一番理解しているのは私だと、何処かでたかを括っていたのかも知れない。

いつも明るくて、弱音なんて絶対吐かなくて、とてつも強く強い人。でもそうじゃ無いと分かると、今まで我慢して来た涙が溢れて来

た。それは同情か、それとも気づいてあげられなかったと言う申し訳ない気持ちなのか、吉川には分からない。

「……分からない」

震えた声で、吉川はそう返す。

「……そっか、分からないよね」

答えが返ってくるわけでも無い。そんな事は分かっていたが、少し空い気持ちになる忍。

今の忍にどうアプローチして良いのか、吉川には分からない。しかしそんなぐちゃぐちゃな感情の中でも一つ、吉川の中で決めている事があった。

「分からない。……でも、一緒に居る」

「……え？」

一緒にボロボロと泣きながら、鼻声で吉川はそう言う。

「辛いんでしょう？ だったら一緒に居る。アンタには絶対楽しく吹いてもらう……！ トランペットを辞めるなんて、私が絶対に許さない！」

泣きじやくりながらも、強い決意を持って吉川はそう言う。その言葉に、感化されたのか、忍は強引に袖で涙を拭いた。

「……辞めるなんて言っただけ」

「嘘、辞めそうだった」

「だから、辞めないよ！」

「でも！ 辞めそうだった！」

お互いに泣いて変なテンションになって来たのか、今度は子供の様な喧嘩を始める二人。

周りが見えてないと言うのは、こう言う事を言うのだろうか。そこに、見知らぬ少女が近づいて来ている事も知らずに。

「……お姉ちゃん達、ケンカしてるの？」

「「え？」」

予期せぬ方向からの第三者の介入。喧嘩していた二人の声がハモった。

「……ケンカ、よく無いよ？ あかりも良くまー君とケンカするけ

ど、すぐ仲直りするの」

ここは公園だ。まだ夕方の時刻。子供達もまだはしゃいで居る時間だ。ベンチでこんな話をしていれば、嫌でも目立つ。

そんな二人の心配をしてくれたのか、この少女は話し掛けて来てくれたのだ。見ず知らずの大人二人に声を掛けられるのは、子供の特権と言ったところだろうか。

少女に諭されて一気に目が覚めたのか、一気に顔が赤くなる二人。

「ああーいや、これはケンカとかそう言うんじゃない?!」

「違うー違うーえっと、その、何で言うか……ケンカごっこみたいなもんだから!!」

いい歳した高校生が二人して、二桁にも満たないであろう少女に必死に弁明している。

「……じゃあ、今ここで仲直りして?」

すると、少女はニコツと笑ってそんな事を言ってくる。

「まーくんと仲直りする時はね?どっちかがぎゅー!ってするの!するとね!魔法みたいに仲直り出来るんだよ!」

純粹。正にその言葉がピッタリなほど、目を輝かせて少女は続けて熱弁する。

「ぎゅーって………」

二人の言葉が再びハモる。流石にぎゅーを人前、しかも年端も行かない少女の前でするのはかなり抵抗がある。

すると、吉川は何かを閃いたのか。意地の悪そうな笑みを浮かべて、忍の方向へと身体を向ける。

「……意趣返し」

それだけ言って、吉川は両手を忍の前に差し出す。

そうだ。前にこの公園に来た時は、逆だった。あの時忍に胸を借りたのは吉川の方だ。

なら、今度は自分が……

しかし忍にはまだ抵抗があるのか、躊躇する様な態度を見せる。

「……仲直り、しないの？」

すると痺れを切らした吉川が、どこか甘えた声でそう言う。

そんな彼女を見て忍はようやく、腹を決めたのかゆつくりと吉川の方へと近づいて行く。

「はい、なーかなーおりー♪」

そんな光景を見て、少女は満足げにそう言う。

「あかりー！」

すると、遠くから友達だろうか。少女を呼ぶ声が聞こえた。

「あ、まっつてー!!」

少女はすぐさま反応し、「じゃあまたね！」とそれだけ言い残して、その場を去る。

残されたのは、女子高生に頭を胸の辺りで抱き抱えられている、情けない男子高校生の姿だった。

「………すごい恥ずかしいんだけど」

「………じゃあ、辞める？」

忍がそう言うと、少し頬を赤らめた吉川が揶揄う様にそう言う。

しかし、耳を真つ赤に染め上げながらも、忍は首を横に振った。

「いや、もうちよつとこのままでいい」

そう言つて、忍は吉川にされるがまま、彼女に身を委ねる。

そんな光景は、ほったらかしにされているブラックコーヒーも甘くなりそうだった。

相談

「うーん、取り敢えず、意識しないで吹いてみたら？」

「それが出来ないから困つとるんですよ」

忍がパート練に復帰した。調子はまだ元通りになっていないが、それでもこうして顔を出す様になったのは、目の前の少女のお陰と言って良いだろう。

「うーん……どうしたものか……」

腕を組み、難しい顔をしてその少女、吉川は呟く。音が上手く出せない苦しみはあるが、こうして悩みを共有してくれる人間が居ると、忍も途端に心が軽くなった。

最近は自分よがりで塞ぎ込んでいた心が、今は前を向いている様な気がする。

「取り敢えず、もう一回吹いてみて？」

「おーけい」

そう言つて、忍はマウスピースに口を付け、演奏を始める。

しかしまだ、音が安定してなかった。

「全然ダメだね」

「そうね。……うーん、どうしたものか」

淡々と、忍は自分の演奏にそう評価するが、落ち込んでいる様子は無い。少なくとも、思い通りに演奏出来ないストレスで悪循環にハマる事は無くなっていた。

「では、今日の練習はここまでです。今日はピッチの部分を重点的にやりました。その感覚を忘れない様、お願いします」

「はい!!」

今日も時間までみっちり、練習を終える。ここからはいつものように片付け。そして滝先生は音楽室から出て行く。そのタイミングを

見計らった様に、ある女子生徒が声を掛けた。

「……あの、少し良いですか？滝先生」

神妙な顔をした吉川が、滝先生に声を掛ける。

「はい、何でしよう？吉川さん」

珍しい人が来たなと思いつつも、滝先生はいつも通りの対応をする。

「えっと……先生って学生時代、金管だったんですよね？」

「はい、吉川さんとは違って、トロンボーンですが」

滝先生がそう返すと、少し緊張した様子で、吉川は続けて質問をする。

「……スランプと言うか、自分の思い通りに音が出なくなった事って、ありますか？」

「……スランプ、ですか……」

真剣な眼差しでそう聞いてくる吉川に対し、滝先生は考え込む様に腕を組む。

滝先生もこの質問の意図は察している。十中八九、忍の事だ。今日とて散々ミスをした。滝先生自身も、忍のスランプの事は重めに見ている。

それにエース格が一人抜けるのは、実に痛い。ひとしきり考えると、滝先生は難しい顔で口を開いた。

「……音楽にも、スランプはあります。……実は私は、音楽から離れていた時期があるんです」

滝先生がそう言うのと、吉川は驚きの表情に変わる。

「そ、そうなんですか？」

「はい。スランプと言うよりかは、音楽に対して何もやる気が起きなくて……向き合おうとする度、何と言いますか、気持ち沈んで行くんです」

ゴクリと、吉川は生唾を飲む。普段は淡々としている滝先生だが、吹奏楽、音楽に対しての情熱が凄まじい事は彼女も知っている。

そんな人でさえ、一度音楽から離れた事があると聞くと、少々顔が強張った。

「ど、どうやって克服したんですか？」

吉川がそう聞くと、言葉を探してるのか、滝先生は顎に手を当てて、少し考える。

「……………私の場合、”時間”に解決してもらった部分が多いかも知れません。今思えば、一度音楽から離れて、色々考える事も増えたんだと思います。それからふとまた始めようと思って、今に至りますかね」

「そうですか……………」

時間。確かにその手もあるかも知れない。心の傷を修復するには、ある程度時間も必要だ。

しかし、全国大会は待つてくれない。それはどうしようもなくなった時の最終手段だ。

「……………すみません。あまり良いアドバイスでは無かったですね」

そんな吉川の心中を察したのか、申し訳なさそうに謝る滝先生。慌てて吉川も「い、いえ……………」と返す。

「……………私のようにする必要はありません。恐らく私と秋川君のスランプは、少し意味合いが違うと思いますから」

「……………」

吉川は少し俯いて考える。本来なら時間を置くのが一番良いのだろう。荒療治で悪化するよりは、そっちの方が賢明だ。

しかし、吉川にはそれで全国大会までに忍が立ち直れるとは思えなかった。

「……………新山先生と橋本先生にも、聞いてみます。……………特に橋本先生はプロですから、そういう場合のメンタルケアにも詳しいはずですよ」

滝先生がそう言うと、吉川は深々と頭を下げる。

「ありがとうございますー！」

一言、吉川がそれだけ言うと、滝先生は「いえいえ」と、笑顔で返す。

「相談は大事です。私だけでなく、パトリリーダーの中世古さんや、副顧問の松本先生も居ます。一人で抱え込まないで下さいね」

「……………はい!!」

諭すように滝先生からそう言われると、吉川は元気の良い返事を返す。

これだけ心配して貰えるだけでも、先生に相談して良かったと思う吉川であった。

「しかし、これだけ想って貰えると、少しばかり秋川君が羨ましくなりますね」

「……………え?」

これで話は終わり。吉川もそう思っていたのだが、滝先生はニコリと笑ってそんな事を言う。

「これだけ心配してもらってるなら、是が非でも全国大会までには立ち直って欲しいものです」

「え、あ、いや!違いますよ!!いや、違くは無いですけどっ、違うっと言うか…………、とにかく違うんです!!」

そんな分かりやすい滝先生の言葉にも動揺する吉川。勢いで相談したは良いが、こうなる事をあまり考えていなかったらしい。

「では、あまり秋川君を心配してない?」

「だから、違うんですっ!!」

その後は、ショートしてしまった頭で「違うんです」と言う言葉を繰り返す、吉川の姿があったとか。

そして練習が終わり、ここは駅前の書店。

吉川はそこである本を探していた。

ここ数日、忍の状態を見て来たが、彼のスランプは技術的なところから来ているものではない。精神的なところから来るものだ。

吉川にはスランプの経験など無い。

だからこそ、解決策が見つからないのだが、黙って見ているというのは、吉川自身許せない。

ならば知識が必要。そう思い立って寄ってみたのは良いが……

「……どれを参考にすりや良いのよ……」

本棚の前にズラリと並んだ文庫本たちを見て、眉間に皺を寄せる吉川。

ざっとタイトルを見てみるも内容はてんでバラバラで、『アスリート』の『メンタルケア』やら、『10の習慣、ストレスフリーの生き方』やら、精神医学に基づいたと言う、何やら小難しそうな本や、果てには自己啓発本の様な物まである。

一個一個、手に取ってパラパラとページをめくってみるが、何一つ吉川にはピンと来なかった。

「……言ってる事が誰一人として合っていないじゃない」

そりやそうだ。人間星の数ほど居て、その数だけ考え方も違う。

この本の作者たちは自身の実体験を基にこのような本を書いているのかも知れないが、それは彼ら彼女らの価値観での話だ。

しかし高校生である吉川にはまだそれが分からないのか、本を取る度に眉間に皺が寄るばかりだった。

「……優子ちゃん？」

しばらく本と睨めっこをしていると、吉川の耳にそんな声が聞こえる。難しい顔のまま呼ばれた方向へと顔を向けると、少し驚いた様な表情をして首を傾げる、中世古の姿があった。

「か、香織先輩!？」

予期せぬ人物の登場に、反射的に吉川は読んでた本を後手に隠す。

「隠さなくて良いよ。……秋川君でしょ?」

しかし、バッチリと見られていたらしい。困った様に笑って中世古がそう言くと、吉川の顔がみるみる赤くなっていた。

「そ、そんなんじや……」

真つ赤な顔で否定するが、それは答えを言っている様なものだ。

「ふふっ、分かりやすいなー。優子ちゃんは。……今日は珍しく一緒に帰らなかつたからどうしたのかなーって思ってたけど、そう言う事だったんだね？」

「えっと……」

揶揄う様な中世古な言葉に、尚も顔を赤くしてどもる吉川。

中世古は恐らく受験の為の参考書でも買いに来たのだろう。右手には数冊の冊子が握られている。

「……………私も手伝うよ」

すると、予想してなかつた言葉が中世古から出て来て、目を丸くする吉川。

「え、い、いいですよ！先輩は受験の参考書を買いに来たんですよね？私の我儘に付き合ってもらう訳には……」

気を遣っているのか、申し訳なさそうにそう言う吉川。しかし、対照的に中世古は笑みを浮かべる。

「私が優子ちゃんの我儘に付き合いたいの。……秋川君にはソロオーディションの時にお世話になったし、今のトランペットパートの雰囲気が良いのも、あの子のお陰だから。……何かお返ししないとね？」

そう言つて中世古は吉川の隣まで来て、彼女と同じく本を物色し始める。

そんな中世古の姿を見て、吉川の目頭が少し熱くなる。

『一人で抱え込まないで下さいね』

先程滝先生に言われた言葉、それを吉川は思い出していた。

「先輩……」

「もー、そんな顔しないの。ほら、こう言うのはどうっ？」

中世古は泣きそうになっている吉川の頭をポンと叩いて、優しい口調でそう言う。

それに応える様に吉川も目元を制服の袖で擦ると、中世古が差し出

して来た本のタイトルを見る。

そしてそれを見て、涙が一気に引つ込んだ。

「……これはあんまり参考にならないんじゃない……」

表紙ではシェフであろう人がコック姿で満面の笑みを浮かべている。

そこに記してあったのは、『食生活によるやる気の向上』と、絶対に音楽とは関係ないであろう事が予想されるタイトルだった。

原点

「……どう？」

「……良くなつて来たけど、まだまだダメ。ピッチが安定してない」
吹き終えた忍がそう聞くと、吉川からズバツと斬られる様な言葉が返ってくる。

パート練では、吉川が付きつきりで忍の様子を見るような形になっていた。1対1の聴き比べの練習も、吉川と忍のペアは固定されている。

何故なら、この様に忍の演奏に対して本心で評価を下すのは、吉川しか居なかつたからだ。

他のパートメンバーも、忍の本来の実力が高い事は知っている。だからこそか、スランプに陥った忍の前で遠慮して本心を言えないのだ。

「忍、吹いてる時って、やっぱり関西大会の事思い出すの？」

しかし、吉川には遠慮が無い。それは忍のスランプを本気でどうにかしようと考えてるからだろうか、自らの本心をぶつける様に忍と接している。

だが、忍としてはそれは一番ありがたい事だった。

「……そうなのかな？……分かんないけど、最初は大丈夫なんだけど、難しいところになつてくると、……なんて言うか、『ミスしちゃいけない』って思う様になるのかな？すごい緊張すんだよね」

悩みを共有してくれる人間が居ると言うのは、当事者からすればかなり心強い。変に気を遣われるよりも、一緒に解決に向かおうとしてくれている人が居るだけで、忍も本心を曝け出す事が出来た。

「……そっか……じゃあ、気分転換に他の曲でも吹いてみる？」

「……吹けるかな？」

少し不安そうな表情を見せる忍に対し、吉川は忍の肩をポンと叩く。

「吹く前から弱気になってどうすんのよ？ダメだったらまた別の方法探せば良いでしょ？」

真つ直ぐ忍の顔を見据えて、吉川はそう言う。

この言葉は、最近の吉川の口癖にもなっていた。スランプ脱出の糸口はまだ模索中だが、それを悲観的に捉えまいと、自分自身も奮い立たせる様な言葉だ。

「……うん、やってみる」

そんな気持ちに充てられてか、忍も再びマウスピースに口を付ける。

まだまだ暗いトンネルから抜け出すのには、時間がかかりそうだ。

「……はい、音合わせはこれくらいにしとこっか？午後から合奏練習だから、今からお昼ごはんまで個人練にしようと思うんだけど、いかな？」

中世古の問い掛けに、パートメンバーは一様に「はい」と返事を返す。

今日は休日。朝一番からパート練で吹き続け、今は午前10時を周ったところだ。ここから昼飯の時間まで個人練習と言うのが、今日の練習プログラムだ。

「俺、外で吹いて来ます」

「うん、頑張ってるね」

忍がそう言うと、中世古はそれだけ返す。すぐさま忍は楽譜台とトランペットを持って、パート練の教室から出て行くこうとする。

そしてそれを追う様に、吉川も立ち上がるが……

「あ、優子ちゃん。ちょっと良い？」

中世古に呼び止められた。

「はい？何ででしょうか？」

何か伝達事項でもあるのだろうか？中世古は吉川を手招きする。

それに従う様に吉川が近づくと、周りに聞こえない様にする為か、吉川の耳に顔を近づけた。

「今日は、秋川君一人で吹いてもらった方が良いかも」

小声で中世古がそう言うと、吉川は「え？」と言う素っ頓狂な言葉を返す。

「……優子ちゃんが秋川君を心配するのは分かるけど、偶には一人で吹かせてあげても良いんじゃないかな？……最近優子ちゃん、ずっと秋川君に付きつきりでしょ？」

「そ、そんなんじゃない……」

中世古の言葉に自覚が無かったのか、少し恥ずかしそうな表情を浮かべる吉川。

ここ最近、吉川が忍のスランプをどうにかしようと思っているのは、中世古も見ている。

しかし、それも行き過ぎると、今度は逆に忍にプレッシャーを掛ける事になりかねないと、中世古は危惧していた。

スランプ時のメンタリテイと言うのは本当に複雑で、絶妙なバランスを保たないと、途端に悪化する。

これだけ親身になってくれてるのに、自分のスランプは一向に良くならない。これでは申し訳が立たない。

そんな自己嫌悪に忍は陥るのではないかと、中世古は心配しているのだ。

「……優子ちゃんが色々やってくれてるのは、秋川君が一番分かってると思う。実際、それで秋川君が助けられてる部分はかなりあると思うよ。……でも、偶には秋川君自身の事も信じてあげないと」

中世古香織は、トランペットのパートリーダーだ。一番パートの状況を俯瞰的に見れるのも彼女だ。

そんな中世古の言う言葉には、説得力があった。

「……分かりました」

渋々と言った様子だが、中世古の言いたい事がちゃんと伝わったのか、素直に吉川は頷いた。

屋上では、忍があーでもないこーでもないと、難しい顔をしてトランペットを吹いていた。

1フレーズ吹いては納得いかず吹き直し、また納得いかず吹き直し……そんな事を繰り返していた。

「悩んでるねー！青少年よ!!」

すると、真後ろから声が掛けられる。いきなりの大声で少し驚くも、忍は声の方向へと顔を向ける。

「橋もっさん……」

再会で言えば、半月ぶりぐらいだろうか、相変わらずラフな格好をした橋本先生がそこに居た。

「滝君に聞いたよー。スランプだってねー」

「……ええ、絶賛スランプ中です」

相変わらずの橋本先生に対し、困った様に笑って忍も返す。

「今日は午後から合奏練習を見る予定だったんだけどね。早めに来てそうだったから来てみたんだけど、どうやら正解だったみたいだねー」

「?、なんでですか?」

「滝君に頼まれたんだよ。秋川君の様子を見てくれて。丁度個人練をやってる様だったから、本当に良かった」

あの時吉川と話した後、滝先生はすぐさま橋本先生に連絡していた。

橋本先生自身、忍に早々と音大を薦める程には彼の事を気に掛けている。ならばと休日に空いた時間を見つけて、こうして忍の前にまで来てくれたのだ。

「秋川君は、何がスランプの原因だって、自分自身で分かってる?」

真剣な顔で、橋本先生はそう聞く。対して忍は難しい顔をして、考える様に少し俯く。

「……………キツカケは、多分関西大会です。あの時盛大にミスをしましたから。……………でも、今は演奏してる時にその事がチラつく事は無いんです。だから何でこんなに上手く吹けないのか、自分でもあまり分かってないんです」

素直に、忍は橋本先生に対してそう答える。

橋本先生も腕を組んで、考え込む様に「うーん……………」と唸る。

原因。それをどうにかしない限り、スランプからは抜け出せない。橋本先生は考えていた。

しかしスランプの原因になった出来事は、忍の頭の中にはもう無いと言う。忍自身が自覚してないだけでも捉えられるが、彼の様子を見る限り、そうでは無い様に橋本先生は感じた。

なので、橋本先生は一つの提案をする。

「……………分かった。取り敢えず、今から吹いてもらおう事って、出来るかな？」

スランプ中の人間に人前で吹かせる。

本来ならあまり良い事では無いが、それを見る事で、何か解決策があるかも知れないと橋本先生は考えたからだ。

「あ、はい。良いですよ？」

対して忍は、なんともない様に軽く返事を返す。それに橋本先生は意外そうな反応を見せるも、すぐに元の表情に戻った。

「じゃあ、……………そうだね。辛いかも知れないけど、今自分が一番上手く出来ないと思う部分を、吹いてもらえるかい？」

「……………はい」

橋本先生の提案に少し間を置くも、返事を返す忍。そしてマウスピースに口をつけると、そのまま演奏を始めた。

♪ー♪ー、♪♪ー♪

出だしは、悪くない。

それが橋本先生が聴いた、忍の演奏の第一印象。ピッチも安定しているし、リズムも悪くない。

しかし、何かが足りない。

合宿に聞いた時の様な、心に来る何かが全く感じられない。そんな違和感を抱きながら、橋本先生は忍の演奏に耳を傾ける。

♪、♪♪♪ー♪♪

そして、演奏は連符の、難しいパートに入っていく。ここから、徐々に徐々に、音が乱れ始めて来た。

それを聞いて、橋本先生は段々と顔を歪ませる。

音が乱れるだけなら、まだ良かったのかも知れない。しかしそれ以上の問題を、橋本先生は見つけてしまった。

♪、♪……♪……♪……♪……♪……

音に、全く自信が感じられない。

合宿所で聴いた様な堂々とした音が、見る影も無くなっている。

今の忍の演奏に感じるのは、”自信”では無く、”不安”と”緊張”。恐る恐る吹いてる様な、そんな演奏。

関西大会前からのあまりの豹変ぶりに、橋本先生は手を前に出して忍の演奏を途中で止めさせる。

「……………ありがとう。……………辛い思いをさせたね」

「……………いえいえ、ここ最近はずっとこんな感じですから」
自虐的な笑みを浮かべて、忍は橋本先生にそう返す。

予想以上。と言うのが、橋本先生の正直な感想だった。プロとして活動して来て、何人かのスランプを見て来たが、ここまで調子を崩す人間は本当に珍しい。

しかし同時に、忍に対する”共感”も橋本先生の中に芽生えていた。

「……………僕もね、ある時期にスランプになった事があるんだ」

「え、橋もつさんがですか？」

意外そうな表情で忍がそう言うと、橋本先生は感慨深く頷く。

「自分の思った通りに叩けないんだよ。……頭の中では完璧なんだけどね」

「……………」

橋本先生の言葉は正に自身に当てはまるのか、忍は考え込む様に俯いて無言を返す。

症状としては、忍も同じだ。頭の中でのイメージでは完璧なラインを描いているのに、それに指や息が付いて行かなくなる。結果、指や息づかいばかりに意識が行ってしまい、さらに演奏が乱れる。

「……………橋本先生は、どうやって克服したんですか？」

そんな状態から、どうやってスランプを克服したのか。忍は真剣な表情でそう聞く。

「……………僕の場合は、ひたすら叩いたよ。……もちろん苦しかったけど、本当にそれしか方法が無かったからね。……でも、一つキツカケはあつたかな？」

「……………キツカケ？」

思い出を語る様に、橋本先生は呟く様にそう言う。そして、続けて先生が発した言葉に、忍の心臓が一つ、大きく跳ねる。

「……………秋川君は、”原点”って意識した事ある？」

「原点……………」

原点。

それは、何故トランプペットを始めたのか。何故始めようと思ったのか。

『……………かあちゃん、それなにしてんの？』

『んー、これ？これはね、トランプペットって言うの』

記憶の片隅にある、母親とのやり取り。そんな事を、忍は思い出していた。

そして、橋本先生は言葉を続ける。

「うん。僕がパーカス始めた理由って、情け無いけど」なんとなく
”だったんだよね。でもスネアやティンパニ叩いてると、どうも気分
が良くなつてさ、気付いたらハマってたって感じ。そんな事を思い出
しながら叩いたら、いつの間にかスランプじゃ無くなってたかな？」
誰でも最初は楽しく、面白そうに楽器に触れる。それが幾ら下手で
あってもだ。

その時を思い出せるかどうか。それが、橋本先生にとってのスラン
プ脱出の糸口だったのだ。

「……そうですか……」

忍は考える。確かに、吹き始めた最初は忍もその気持ちだったのか
も知れない。でも、それはもう10年以上も前の出来事だ。その時と
比べて、心は随分と大人になっている。自分が5歳の時の感情を思い
出せと言うのは、案外難しいのだ。

「忍……!!お昼……!!」

すると、屋上の入り口から名前を呼ぶ声が聞こえる。二人してその
方向へ顔を向けると、吉川が片手を上げてこちらに手を振っていた。
どうやらもうそんな時間だったらしい。

「……ありがとうございます。参考になりました」

忍はそう言つて橋本先生に対し一礼する。それに対し橋本先生は
ポンポンつと2度、忍の肩を叩いた。

「また何か聞きたい事があったら、いつでも聞いて来ていいよ。

……一応、これ僕の電話番号」

そう言つて、橋本先生はポケットから自身の電話番号が記されたメ
モ用紙を出して、忍に渡す。

「……ありがとうございます。また相談します」

そう言つて、忍は再び橋本先生に頭を下げる。

”原点”。橋本先生から言われたこの言葉が、今後の忍に大きく影
響される事となる。

台風

練習終わり。9月も中旬に入ると、夏の間は長かった1日が、段々と短くなってくる。

西日が街や自然を照らす中、忍と吉川は一緒に帰っていた。

ビュッ!!

すると、突如として突風が吹く。それに忍と吉川は反射的に顔を手で隠す仕草をした。

「台風、明日だっけ?」

「明日の夜ぐらいから。明後日の学校、休校になるかもって」
突風が収まると、互いにそんなやり取りをする。そしてしばらく二人で歩いていると、吉川が遠慮がちに口を開いた。

「……何話してたの?」

「何って?」

「屋上で橋本先生と話してたでしょ?言いたく無いなら言わなくて良いけど……」

吉川は極力傷付けない様にするためか、優しい口調でそう尋ねる。あの時の雰囲気で何となくスランプの事だとは彼女も分かっていたが、直接言うのは憚られた。

「……まあ、優子の思ってる通りだよ」

しかし、吉川の顔を見て察したのか、困った様に笑って忍はそう返す。相変わらず顔に出やすい様だ。

思ってた事を言い当てられ、吉川はバツの悪そうな顔をする。

「……吉川の原点って、何?」

すると、少し考え込む様な顔をして、今度は逆に忍からそう問い掛ける。

「はあ？・原点？」

忍の言葉が一体何の事を指しているのか分からず、吉川は困った様に首を傾げる。

「うん、橋本先生に言われたんだよ。上手く行かない時は原点に戻れば良いって。……優子はトランペットを始めたキツカケって、覚えてる？」

忍の問い掛けに、吉川は顎に手を当てて少し考える。

「……プールの時にも話したと思うけど、私は何となく始めたからねー。キツカケがこれって言うのは、無いかな？」

長らく間を置いた後、吉川は難しい顔でそう答える。しかしそれは、忍もプールに行った時に聞いた。

ならば、吹き始めた頃の吉川は、どうだったのだろうか？

「じゃあ、トランペットを吹き始めた頃はとうだった？……やっぱり、楽しかった？」

興味があるのか、いつもより明るい口調で忍は続けて質問する。

対して吉川は先程よりも難しい様な顔をして、「うーん……」と唸って今度は腕を組む。

初心者だった頃の自分。技術的には未熟もいいところであったが、それでも……

「……やっぱり、楽しかったかも」

当時の事を思い出しているのか、表情を柔らかい笑顔に変化させ、吉川はそう言う。

「下手だったわ。……でも、始めた頃は音が出るだけで感動したもんよ。それが音階を奏でられると、また感動して、そこからメロディが吹けるようになるよ、また感動して……その繰り返しだったかな？」

思い出す様に語る吉川に、忍は「そっか……」とだけ返す。

恐らく自分もそうだったのだろうと、忍も思い出そうとするが、やはり昔の記憶過ぎて、その時の感情を思い出せないでいた。

「……忍は、お母さんの影響で始めたのよね？」

すると恐る恐るだが、吉川はそう尋ねる。

「デリケートな話題だと彼女も分かっているが、それでも聞いた方がいいと思ったのだ。」

やはりと言うか、忍は少し寂しげな表情に変わった。

「……うん。でも、昔過ぎて思い出せないんだよね。始めたの5歳の時だし。……多分楽しかったんだろうけど、あまりその時の感情は分かんないや」

素直に、忍は困った様に笑ってそう返す。

吉川も一瞬落ち込んだ様に俯くが、何か閃いたのか、直ぐにハツとした様な表情に変わる。

「……じゃあ、初めて吹いた曲とか、覚えてる?」

自分が初めて覚えた曲。それを思い出す事で、当時の感情を思い出せるのかではないかと吉川は考えたのだ。

「初めて吹いた曲……」

忍は残っている記憶を手繰り寄せる。確か初めて覚えた曲は……

『じゃあ忍、今度は曲を吹いてみよっか?』

『なんの?』

『簡単な曲だよ?忍も知ってるでしょ?』

母親から教えてもらった、その曲は……

「見上げてごらん夜の星を……」

ポツリと、呟く様に忍はそう言う。

「……そう、中々メジャーな曲じゃない。……忍はその曲、好き?」
「……どうかな?最近吹いてないから、分かんないや」

吉川の問いかけに、複雑そうな表情でそう返す忍。

やはりデリケートな話題だったのかと、吉川は少し後悔していた。

「……ごめん忍」

落ち込んだ表情で、吉川は謝る。

「なんで優子が謝るんだよう？」

対照的に忍は笑ってそう返した。

「忍が嫌なら、もうアンタのお母さんの話題は出さないわ」

「だから、大丈夫だって」

尚も申し訳なさそうにそう言う吉川に対し、忍は宥める様にそう返す。

その表情を見て、吉川もホッと一息つく。それと同時に、察してしまった。

それは、秋川忍のスランプの原因。

いつかは、聞かなければならない。吉川自身もそう思っている。しかし、物事にはタイミングというものがある。

それは今の忍の状態をなんとかしたいと言う焦りだったのか、次に吉川から出た言葉は、今の忍の心を揺れ動かすには充分すぎるものだった。

「アンタのスランプの原因って、もしかしてお母さん？」

「……っ!!……」

忍は大きく目を見開く。

「……忍？」

「い、いや。その……」

明らかに動揺しているのが、吉川にも分かった。慌てて吉川がフオローの声を掛けようとする。

「えっと、しの「今日はもう帰る」

しかし、その前に忍が言葉を被せる。その様子は、明らかに拒絶が含まれていた。

初めて見る忍の姿に、吉川は固まってしまう。

「じゃあね。また明日」

そう言い残して足早に、吉川を置いて行く様に、忍は一人で前を歩いて行く。

そんな忍の後ろ姿を、吉川は呆然と見つめる事しか出来なかった。空はオレンジ色で、台風なんて来そうな気配でも無い。

しかし、それは嵐の前の静けさと言うものだろうか、妙な胸騒ぎを感じる吉川だった。

翌日、台風が近づいているためか、雲は淀んでいる。そんな中でも、練習は続く。

「今日は、台風が近づいているから、午前で練習終わりだつて。だから今から合奏練習だけ午前中いっぱいやって終了って感じかな？」

「はい」

中世古が説明すると、パートメンバーから返事が返ってくる。

台風は、今日の夕方から本格的に荒れる予報となっていた。なので今日は午前中に練習を切り上げると言う形になったのだ。

「……あの、アツキー先輩はどうしたんですか？」

すると、高坂が中世古に対しそんな事を聞く。

パート練習の教室にいるのは、現在7人。その中に、忍は居なかった。

その言葉に、吉川は大きく顔を歪める。

「……えっと、休み……だと思う。電話もメールも繋がらないから、これから来るかも知れないけど……」

中世古も心配そうな表情で、そう返す。

しかし、パートメンバーは不安の顔を隠し切れていない。

ここ最近の忍はスランプ続きだ。パートメンバーは忍が苦しんでいる姿を目の当たりにしている。

吉川は自身の携帯の画面を見る。何通もメールを送り、電話も何回も掛けたが、返事は無かった。

その事実が、益々不安にさせる要素となっていた。

「……とにかく、練習だよ。皆、集中してね」

「はい」

中世古が切り替える様に声を掛けると、パートメンバーからも返事が返ってくる。

しかし、そんな状況で練習に身が入ってる人間など、誰一人居なかった。

曇り空の天気。台風が近づいているからか、休日は観光客で賑わう宇治の街も、今日は人が疎だ。

雨はまだ降っていないが、風は結構強くなってきた。そんな中、宇治橋の上では、トランペットケースを肩に担ぐ、制服姿の少年が橋の欄干に手を乗せ、ボーッと、何処か遠くを見つめていた。

「少年！何やってんだ？もう台風来るぞ！」

声を掛けたのは、警察官。バイクで見廻りをしていたら、もう台風が来ると言うのに、橋の上で思い詰めた様な少年を見て、思わず声を掛けたのだ。

「……………」

しかし少年は無言を返す。それに対し、警察官は困った様に笑った。

「何があつたか知らないけど、悩んでるならおじさん聞くぞ？一緒に交番まで行くか？」

優しい口調で警察官のおじさんがそう言うと、ようやく少年は反応を見せる。

「……………初めて、吹きたくないって思ったんですよ」

「え？何だつて？」

ボソリと、呟く様に言ったその言葉。警察官にはそれが聞き取れず、もう一度聞き返す。

「いいです。……すみません。俺、もう帰るんで」

そう言う少年は一人、歩き始める。帰るとは行つたが何処へ向かつてるのか、自分自身でさえ分からなかつた。

「……気を付けろよ！まだ若いんだから、思い詰めるなよ！」

随分と小さく見える背中を見ながら、警察官はその少年に対して声を張り上げる様にそう言う。

しかし、彼の耳には届いてないのか、覚束ない足取りで、その場を後にするのみだつた。

雨曝し

「え、兄ちゃん、部活出てないんですか？」

『そう、電話もメールも繋がらなくて……家にも居ないの？』

電話では、吉川と凜花がそんなやり取りをしている。吉川は携帯からだが、凜花はまだ自分の携帯を持っておらず、家の受話器で対応していた。

「いや、朝に部活行ってくるって出て行っただけですけど……」

『ー、その時、様子とか変じゃ無かった？』

受話器越しに吉川からそう聞かれ、凜花は考える。最近は落ち込んでいる事が多かったが、今日は……

「……少し、変でした。なんだか、いつも以上に元気に振る舞ってる感じがして……」

今朝の忍の様子に、凜花も違和感を感じていた。それを聞いて、吉川の顔が悲痛な面持ちに変わる。

『……ごめん。私のせいだ……』

受話器越しから、弱々しい声が聞こえる。

やはり、あの場で母親の事を聞いたのは不味かったのだと。後悔も含まれてる様な口調だった。

「……取り敢えず、私からも兄ちゃんに電話してみます」

何かあったのだろう。しかし、凜花は敢えてそれを聞かず、励ます様な口調に変わる。

『……うん、お願い。忍から連絡あったら、私の携帯に電話してくれるかな？』

「もちろん！帰ってきたら優子さんを心配させるなって、ぶん殴っておきますー！」

彼女なりの励ましなのだろう。明るい口調で凜花がそう言うと、吉川も自然と笑みが溢れた。

『ホント、凜花ちゃんは良い妹さんだね』

「それほどでもー」

そんなやり取りを交わし、「じゃあ」と、電話を切る吉川。そして今にも降り出しそうな空模様を見て、ポツリと呟く。

「……………探さなきゃ……………」

そう言つて、吉川は誰よりも早く片付けを終え、校舎を飛び出して行つた。

「はあ……………はあ……………(こ)も居ない……………」

心当たりがある場所は、しらみ潰しに探している。しかし、何処にも居ない。ファストフード店、ファミレス。何処か遠くに行つたのかと最寄駅の駅員さんに聞いてみるも、「分からない」と言われた。

「はあ……………はあ……………もー、何してんのよ、あのバカ！」

そんな状況に苛立ちを覚えたのか、悪態を吐く様に吉川はそう言う。その苛立ちは忍に対してなのか、それとも自分自身に対してなのか、分からない。

しかし、絶対に見つけなければならないと、吉川の中でそれは決めていた。

ポツッ

ポツッ

すると、冷たい感触が肌に伝わる。どうやら降り始めた様だ。しかし、そんなことも構わず、吉川は顔を上げて忍を再び探し始める。

「会つて、何か言わなきゃ気が済まないんだから……………!!」

台風が、近づいている。

『こちらは、防災宇治です。ただいま、強風注意報が、発令されています』

雨は強まり、次第に風も強くなっている。そんな中、吉川は傘もささずに忍の事を探していた。髪も服もぐっしりと濡れ、トレードマークの大きなリボンは水を吸って、項垂れる様に下を向いている。台風の影響か、外で出歩いている人間なんて一人として居ない。そんな中、傘もささずに歩き回る吉川の姿は、異様に目立った。

すると、前からカツパを着てバイクに乗った、警察官がやってくる。警官も吉川の存在に気付いたのか、彼女の前に来るとバイクを止める。

「ちよっと、お嬢ちゃん！何やってんの！もう台風来るよ!!」

「す、すみません……」

警察から怒られる事なんて初めてだったので、少し緊張気味で吉川はそう返す。

「何？家出？辛いんだったら、おじさん話聞くよ？」

「い、いえ、そう言うんじゃないんで……」

状況だけ見れば、そうとも言える事によく気付く吉川。

しかし、次に警官が言い放った言葉は、そんな事がどうでも良くなる程のものだった。

「さっきも、家出っぽい少年が居ただけだね。思い詰めてる様だったから、おじさん声かけたんだけど」その少年ってどこに居ましたか!？」

警官が皆まで言う前に、飛びつく様に吉川は詰め寄って言葉を被せる様にそう言う。

「え？何？君、あの子と知り合いなの？」

いきなり形相を変えて詰め寄る吉川に対し、警官も少したじたじとなる。

「そうですね!!だから！どこで見たんですか!？」

必死の形相で、吉川はそう聞く。その圧に負ける様に、警官は「う、宇治橋の上に居たよ」と返す。

「ありがとうございます!!それじゃ!!」

もうそこには居ないかも知れない。しかし、行って確かめないと吉川の気が済まなかった。

橋の方向に向かって吉川は走り出す。後ろから「危険だぞー!!」と声が聞こえたが、今の吉川にはそんなものに構ってる余裕は無かった。

さらに雨が強くなっている。風は強風から暴風に変わり始め、服の中も、靴の中も、果てにはバッグの中まで水浸し。

そんな状態でも、吉川は必死に忍のを探している。

「……居ない……」

橋の上には、誰も居なかった。その光景を見て、吉川は泣きそうな表情になる。しかしグツと涙を堪えて、辺りをキョロキョロと見渡す。

「……まだ、近くに……」

そして、今度は河川敷の方に向かって行った。

疲れた。

しんどい。

そして、ごめんなさい。

吉川の心は、それで埋め尽くされていた。吉川優子は、情に厚い娘だ。悩んでる人や凹んでいる人を見つけると、放っておけないタイプ。

ましてや自身が想いを寄せている人がそうなれば、見逃せる筈が無い。

力になれなくてごめんなさい。

一緒に居るって言ったのに、苦しめてごめんなさい。

探せば探す程、自責の念だけが積み上がって行く、しかし、探すのを辞めればもつと後悔すると、吉川は直感していた。

顔は雨でぐしょぐしょに濡れている。だから、泣いたって誰にもバレない。

雨と涙で酷い顔になりながらも、意地で吉川は忍を探す。

しかし、そんな想いを踏み躪るかの様な光景を、吉川は目撃してしまった。

「ああ……………」

大雨が降っているにも関わらず、その場にヘタリと座り込んでしま
う吉川。

河川敷、雨に晒されたベンチの上、そこに見覚えのあるものがある。

ベンチの上には、雨曝しにされた忍のトランペットケースだけが
あった。

一方

目を覚ましたら、いつの間にか自分の部屋にいる事が自覚出来た。ベッドで寝ていたのだろう。ゆっくり起き上がり、今の自分の姿を確認する。

「……あんまり覚えてない……」

いつの間にか制服から寝衣に着替えてたらしい。

と言うのも、あまり記憶が無い。……確か台風が来るから午前中で練習が終わる事になって、……それからどうしたんだっけ？私？

部屋を見渡すと、特段変わった様子もない。いつも通りの私の部屋だ。そして頭が冴えて来ると、徐々に記憶が蘇ってきた。

「……!!、忍は?!!」

先ずは外の様子を伺う。空模様はもつと酷くなっていて、台風らしく、風が部屋の窓を揺らしてガタガタと音を立てていた。

そして今度は枕元にあった携帯を確認しようとする。

「……あー、もうーなんで電源入んないのよ!!」

うんともすんとも言わない携帯に対し、私は焦りを隠せない。

目が覚めて記憶も戻ってきて、何か出来ないかと、意味もなく自分の部屋をキョロキョロと見渡す。

そして部屋の端、そこに置いてあったびしょ濡れのままのトランペットケースを見て、自分の顔が青ざめて行くのがハッキリと分かった。

そうだ。あの時ベンチで雨曝しにされた忍のトランペットケースを見て、私は彼を探す事を諦めてしまったのだ。

ああ、ダメだ。また涙が出てくる。

結局、それで心が折れて家に帰ってきてしまったのだ。でも未練がましく、そのトランペットケースを持って帰って来る辺り、私は弱い

人間なんだろう。

そう思うと、更に涙が止まらなくなった。

「……そうですか……はい、分かりました。ありがとうございます」
秋川家のリビング。そう言つて、凜花は家の受話器を置く。何軒か心当たりがある家に電話を掛けているが、どれもこれも空振り。忍の居場所は依然分からない。

何度か吉川の携帯にも連絡しようとしたが、電源が切れているのか、電話は繋がらない。

最悪のパターンが凜花の頭をよぎつたが、そんなネガティブな思考を振り払う様に、ブンブンと頭を横に振る凜花。

そして再び受話器を耳につけ、電話を掛ける。

「……もしもし、秋川です。滝野さんのご自宅でよろしいでしょうか？」

『え？、あ、凜花ちゃん？ごめんねー！すぐさやかと変わるからー！』
「あ、いえーあの!!」

凜花が電話したのは、滝野家だった。受話器の向こうの人は、母親だろうか？すぐさま『さやかー!!』と、受話器越しでも分かるくらいの大声が聞こえる。

さやかか忍にお熱な事を凜花も知ってる。出来れば台風の日に忍が家に帰って来てないのを知られたくないのだが……

『あ、もしもし？凜花ちゃん？どーしたの？』

そんな事を考えてると、もう電話の相手はさやかになってしまった。

まあ、バレルのも時間の問題だろう。それよりも忍がそこに居るかの方が、凜花にとっては気掛かりだった。

「そつちにお兄ちゃん居る？」

『忍先輩？居ないけど……』

「そっか……」

ほとんどダメ元だったが、居ないと分かり、途端に声を落ち込ませる凜花。

『……忍先輩と、何かあったの？』

受話器越しでもそれが分かったのか、心配そうにそう尋ねるさやか。

「……いや、ケンカとかじゃ無いんだけどね……」

さやかの問いかけに、口籠る凜花。彼女自身も、忍に対し罪悪感の様なものを抱いていた。一番身近な存在に居ながら、何故兄の異変に気付けなかったのだろうか。

そして少しの無言の後、口を開いたのは、さやかからだった。

『……凜花ちゃん。私ね、自分のお兄ちゃんの事、ウザいつて思ってるの』

「え？」

真剣な口調で、さやかはそう言う。彼女から出た意外な言葉に、凜花は素っ頓狂な返事を返してしまった。

『生まれた時からずっと一緒に暮らしてるからね。嫌でもダメなところが目に着いちやうの。……多分、あっちも同じ気持ちだと思う』

「……………」

さやかの言葉に、凜花は黙って耳を傾ける。

『……でも、やっぱり家族なんだね。ウザいけど、やっぱり気にしちゃうんだ。お兄ちゃんがどんな曲吹いてるかとか、この先あのお兄ちゃんに彼女は出来るのかなとか。……こんな事、本人の前じゃ口が裂けても言えないけどね』

最後は少し恥ずかしそうな口調で、さやかは言葉を続ける。初めて見る諭す様な口調の彼女に、凜花も言葉を返せないでいた。

『凜花ちゃんと忍先輩って、ホントに仲良いよね』

「……そうかな？」

羨ましがる様な口調でさやかがそう言うと、対して凜花は恥ずかし

そんな口調でそう返す。

『うん、あんだだけ素敵なお兄ちゃんが居たら、私なんかすぐブラコンになっちゃうよ?』

「あげないよ?」

冗談を飛ばすさやかに対し、凜花も困った様に笑ってそう返す。そしてさやかは再び真面目な口調に戻る。

『だから、どんなになっても忍先輩と凜花ちゃんは家族なんだよ。……凜花ちゃんと忍先輩が今どんな感じなのか、私には分かんないけど、それでも兄妹、家族にしか分からないものってあると思うから、側にいてあげて欲しいかな?』

それは同じ年。それに同じく2つ歳の離れた兄が居るからだろうか。凜花の兄に対する気持ちを一番理解してるのは、さやかなのかも知れない。

「……………うん、ありがとね。さやかちゃん」

そんなさやかの言葉を噛み締める様に、返事を返す凜花。

『うん、じゃあ、頑張つてね?凜花ちゃん』

「じゃあね。さやかちゃん」

そう言つて、電話を切る。

そして凜花は、荒れ模様の外を見やる。忍の家はここだ。ならいつかは帰って来る。その時に家族として、妹として、しっかりと話を聞いてあげなければ。

「……………今日は兄ちゃんの好きなもん、作つところかな?」

ポツリと呟いて、凜花は台所の方へと向かった。

外は大荒れ。台風は直撃し、木々や電線が大きく揺れている。そんな中、忍はどこに行く当てもなく、ただただ歩いていった。

もはや自分がどのルートを通つて、どこに居るのかさえもあまり分かつて居ない。全身はびしょ濡れで、しかしそんな事を気にする素振りも無く、淡々と忍は歩き続けていた。

頭がボーツとする。しかし、今はなんだかそれが心地よかった。だって何も考えなくて良いから。

自分を殴る様な雨が、辛い事を忘れさせてくれる様な錯覚さえ覚える。滝行をするとは、こんな気分なのだろうか。そんな的外れな事さえ考える始末であった。

ビツ、ビーン

すると、後ろから何やら音が聞こえる。クラクションの音だ。しかしそれに構う事なく忍は歩き続ける。

「おいー少年ー」

そして今度は、後ろから男の声が聞こえる。

ようやく自分が呼ばれていると認識した忍は、ゆっくりと後ろを振り返った。

「君、北宇治の生徒だろう？こんなところで何をしてるんだ？」

忍の目の前に映ったのは、少し背の高い、男性らしき姿だった。車のライトの逆光で、あまり姿がハッキリと見えない。

「……散歩です」

忍はそれだけ言うと、また前に向かって歩こうとする。

「ちよつと待たんか！」

すると、男は忍の腕を掴み、引き留める。こんな天候に学生が一人、傘もささずに彷徨っているのだ。

明らかに異様だと感じた男性は、心配心からか、咄嗟に忍を引き留めたのだ。

「……………取り敢えず、私の車に乗りなさい」

「……………誘拐ですか？」

親切心は嬉しいが、今の忍は一人になりたかった。なので心にも無い事を言ってしまう。

「もうそれで良いから。とにかく乗りなさい」

しかし、それすらも見透かした様に、男性は優しい口調でそう言う。

「……………車、濡れますよっ」

「良いから。その状態で外を歩き回られる方がよっぽど気分が悪くなる。とにかく乗りなさい」

そう言って男性は押し込む様に忍を助手席に入れる。突然の出来事に困惑しながらも、忍は素直にシートに座った。

そして男性も運転席に座る。

「……取り敢えず、私の家が近いからそこに行く。話はそこで聞きましょう」

車を動かしながら、男性はそう言う。それに対し、忍は「……はい……」と、それだけ返す。

車内は無言だった。

そりやそうだ。見ず知らずの男性に車に乗せられ、話す内容なんて思い浮かぶ筈がない。

そんな中、忍はバレない様に運転席に座るその男性の横顔を見る。先程は車のライトの逆光でよく分からなかったが、顔の皺や白髪混じりの髪を見る限り、結構歳を重ねている人の様だ。

齢60は過ぎていであろうか？しかし、背筋はしっかりと伸びており、座高の高さも相まってか、威厳も感じる様な人だ。

それと同時に、誰かに似ているな。と思ったのが、忍の第一印象だった。

運転している間、男性は全く話し掛けて来なかった。運転に集中している訳ではなく、気を遣って何も言って来ないのだろうと、なんとなく忍にも理解出来た。だからだろうか、無言の車内でも、不思議と気まずさは無かった。そして車は住宅地へと入り、一軒家の駐車場に男性は車を止める。

「着いたぞ。取り敢えず、タオルを持って来るから玄関で待ってなさい」

「あ、はい」

男性にそう促され、従うがままに忍は車から降りる。

そして家の前の玄関の扉まで来た時、その家の表札が忍の目に入る。

表札には、「滝」と言う文字が記してあった。

滝透

家の中は、至って普通の一般家庭と言つてよかつた。

玄関で男性からタオルを渡され、一通り拭き終わると、今度は男性の奥さんだろうか？ 同い年ぐらいのおばあさんがやって来た。

「こんにちはー」

「こ、こんにちは……」

忍の事を見て驚く訳でもなく、まるで近所の人と会つたかの様なテンションで挨拶するおばあさんに対し、困惑気味に忍も挨拶を返す。

「随分濡れたねー。お風呂入れるから、あつたまつて行きなさいな」

「い、いえ、そこまでお世話になる訳には……」

おばあさんは笑顔でそう言うも、流石に忍も見ず知らずの人の家でいきなりお風呂を借りるのは抵抗があつた。

「いいのいいの。こんなに若いお客さんなんて久しぶりだし、それに、今にも風邪ひきそうよ？」

「で、ですから……」

「人からの厚意は、しっかりと受け取っておきなさい」

おばあさんとそんなやり取りをしてると、今度は奥から先ほどの男性がそう言つて来る。そしてそれだけ言うと、洗面所の方へと消えていつてしまった。

何が何だか分からない忍は、ポカーンと呆氣に取られた様な表情をするのみだつた。

そんな男性に対し、奥さんは嬉しそうに微笑む。

「……実はね？ 夫からあなたの事、聞いてたの。メールで『びしょ濡れの北宇治の生徒を保護したから、お風呂入れておいてくれ』つてね」

「は、はあ……」

確かに、車の中で何やら携帯を弄っているのは忍も確認していた。

しかし、何故見ず知らずの人間にここまでしてくれるのだろうか？
ここに来るまでの途中、実は知っている人なのでは無いかと忍も必
死に記憶を掘り返していたが、やはり会った記憶など一度も無かつ
た。

それに家に入る前を見た”滝”と言う苗字も、自分の顧問の先生に
しか心当たりが無い。

「とにかく、せっかく沸かしたんだから、入って行きなさいな」

「そ、それでは、お言葉に甘えて……」

しかし、ここまでされては忍もNOとは言えない。未だに状況が飲
み込めないまま、流される様にお風呂に入って行った。

「……………どうすりゃ良いんだ……………」

お風呂から上がると、男性の服を借り、濡れた忍の制服はこの家で
乾かしてもらう事となった。

そして、現在忍は居間にちよこんと座っている。スタンダードな和
室に、中央に丸テーブル。そこに用意された座布団に座っている。続
いて男性の方も風呂に入って行ったので、しばらく待たされている感
じだ。

どうも落ち着かないので、忍は部屋をキョロキョロと見渡す。

やはり特段変な所は無い。一般家庭の、ごく普通の和室と言った感
じだ。

しかし、壁際。部屋の一角に賞状やトロフィーやら、そんな煌びや
かなものが保管されているスペースが確認出来た。

興味を持った忍は、そこへ近づいて行く。

賞状に記されていた年代は結構昔のもので、10年以上前のものが
殆どだった。

そして、そこに記載されていた表彰状の詳細を見て、忍は驚く事と
なる。

表彰状

指揮者賞 滝透殿

あなたは第〇〇回全日本吹奏楽コンクールにおいて
北宇治高校吹奏楽部を関西支部代表として導き
頭書の優れたな成績を収められました
ここにその栄誉を称えて表彰します。

「……………これって……………」

今、自分が通っている高校。それも同じ吹奏楽部の表彰状。
年代はやはり10年以上前のもので、その隣には写真らしきものがある。その写真もやはり、時代を感じさせる様な古いものだった。

「あら？、気になる？それ」

すると、いつの間にか部屋に入って来ていた先程のおばあさんから、声を掛けられる。

慌てて忍は頭を下げた。

「い、いえ。勝手に見てすみません」

「いいのいいの。10年以上前のが殆どだし、見られて困るものでも無いからねえ」

謝る忍に対し、おばあさんはケラケラと笑ってそう返す。

しかしそれよりも気になる事が忍にはあった。

「……………えっと、旦那さんって、吹奏楽部の顧問だったんですか？」
「ええ、と言っても、もう数年前に引退してしまっただけれども」

やはり違くない。忍も噂には聞いた事があった。

滝先生。いや、滝昇先生が赴任して来るずっと前。まだ北宇治高校吹奏楽部が強豪と呼ばれていた頃。

名門を率いていた、今の滝昇先生の父親でもある存在。

滝透（たき とおる）

昔の北宇治高校吹奏楽部を全国常連として導いて来た、名指導者だ。

「台風の中のあなたの制服姿を見て、無視出来なかったんでしょね。あの人、お節介なところがあるから」

おばあさんはにっこりと笑ってそう言う。なるほど、それならばここまで手厚くしてくれる理由も合点が行く。

彼、滝透は、忍にかつての教え子と重ね合わせていたのだろうと。

「……ありがとうございます。今更ですが、いつも滝先生にはお世話になっていきます」

そして、忍はおばあさんに対してそう言って深々と頭を下げる。

「あれ？やっぱり貴方達、知り合いだったの？」

てつきり赤の他人だと思っていたのか、驚きの表情でおばあさんはそう返す。しかし、次の忍の言葉で、更にその表情を驚きに変える事となる。

「いえ、お世話になっているのは、息子さんの方です。いつもの確な指導をして下さり、ありがとうございます」

「……………え？……………という事は、あなた昇の……………？」

「はい。俺、北宇治高校吹奏楽部2年の、秋川忍と言います」

忍がそう言うと、おばあさんは驚きの表情からすぐさま満面の笑みに変わった。

「あらー!!本当!!あなた、昇の教え子さんなの!!もう!それならそれで早く言ってくれば良いのに!!」

心底嬉しそうにおばあさんはそう言う。

「お父さんにも教えなきや……。あ、私、滝佳子（たき よしこ）と申します。息子がいつもお世話になってます」

続けてそう言って、おばあさん改め佳子さんは頭を下げる。

「い、いえいえ。こちらこそ……」

それに反射的に忍もそう返した。

「昇の教え子さんか……。……ちよつと待っててね！」

すると、そう言い残して満面の笑みで佳子さんは居間から出て行く。残された忍は、再び賞状の横にあった写真を見る。

若い頃の透さんはやはりと言うべきか、雰囲気はどこなく滝先生に似ている気がする。もつとも、息子と違って父親は幾分か眉間に皺が寄っている様に感じた。

そしてそれを一通り見て、忍は再び用意された座布団に座る。

しばらくすると、かなり早いペースの足音が居間に近づいて居るのが分かった。佳子さんが戻ってきたのだろうか？

「待たせたね。じゃあ、早速話を聞こうか」

襖を開けて入ってきたのは、透さんの方だった。しかも何故か妙に上機嫌だ。

忍と対面になる様に座り、少し忍をジッと見つめる。

「……君、吹奏楽部の子なんだって？」

「え、あ、はい」

恐らく佳子さんから聞いたのだろう。忍は素直に返事を返す。

「……手、見して貰えるかい？」

「ど、どうぞ？」

透さんに言われるがままに、忍は両手のひらを前に出す。そして医者が触診する様に、透さんは忍の手を触る。

「……君、トランペッターだね？」

「え、分かるんですか？」

ズバリと当てられ、忍は驚きの表情に変わる。

「左手の親指と薬指の腹の皮膚が硬くなっている。ここはトランペットを吹く人間が良くマメやタコを作る場所だからね」

流石と言うべきか、手のひらを見ただけで何の楽器を吹いてるかを当てられるとは。過去に何度も北宇治を全国に導いたその慧眼は健在らしい。

忍は、不思議と目の前の男。滝透と言う男に心を開きつつあった。それは北宇治の名顧問だったからだろうか？それとも手を見ただけでトランプを吹いている事を当てられたからだろうか？

今日初めて会った人間なのに、どうも自分の心が見透かされている様な気がする。

そう感じさせる程のものが、目の前の男性にはあると忍は感じた。

そしてその心すらもお見通しと言わんばかりに、透さんは口を開く。

「……君は、どうしてあの場所に居たのかな？」

帰宅

病室に居る。

もう何度も通った病室。

家族が揃っている。

誰もが悲しそうな表情を浮かべている。

その人達が目を向けているのは、ベッドの上の女性。その内の一人。秋川忍も、その女性をブーツと見つめていた。

女性は最期の力を振り絞るように一人一人に話し掛けている。凛花なんて、涙で顔がぐしゃぐしゃになっている。

そんな中でも、忍は泣けなかつた。いや、泣けなかつたと言った方が正しいだろうか。

あまりにも現実味が無さすぎて、茫然としているしか無かつた。

「……忍」

弱々しい声。油断すれば聞き逃してしまいそうなほどの消え入りそうな声で、女性は忍の名前を呼ぶ。

未だにブーツとしたまま、言われるがままに忍は女性の方へと近づく。

恐らく、最後の言葉なんだろうな。

頭が回らない中でも、それぐらいは忍にも分かつた。

だから、今は悲しみとか苦しみとかを捨てて、自分の母親の言葉に集中しよう。

秋川忍は、母親からの最期の言葉に耳を傾けた。

雨が降っている。風もまだまだ強い。

外はもう暗くなり始め、外を出歩く人なんて一人も見当たらない。

こんな中、自分は傘も刺さずに歩いて来たんだなど、何処か他人事のように車の中から窓越しにそんな感想を忍は抱いていた。

「ここは真つ直ぐで良いのかい？」

「あ、これの次の信号で左に曲がって下さい」

「は、いよ」

制服もある程度乾き、今は再び透さんの運転する車で、忍は家まで送って行ってもらっている。

バスも電車も台風でストップしていたので、透さんが気を利かせてくれたのだ。

自分がスランプに陥っている事を透さんに話した。

しかし、帰って来た言葉は、『自分でなんとかするしかない』という言葉だった。当然と言えば当然なのだが、やはり向かい合って一歩ずつクリアしていくしか無いと。

しかしそれよりも、もう一つ透さんに言われた言葉が忍には刺さった。

『君が今抱えている悩みを、親でも兄弟でも恋人でも良い。一番信頼出来る人に全部さらけ出しなさい』

秋川忍は、明るい人柄と良く言われる。元々そう言う性格と言うのもあるが、あまり弱みを他人に見せない一面がある。

だからこそ、透さんのその言葉が忍の胸にストンと落ちた。

一度だけ、弱みを見せた人間がいる。

何故あの時彼女に弱音を吐いたのか。一番気を許しているから？それとも自分が彼女に対して好意を持っているから？今の忍にはその理由が分からない。

ただ感覚的に、吉川優子になら弱音を吐いて大丈夫だろうと言う、根拠のない安心感のようなものを持つていたのかもしれない。

そう思うと、忍自身もなんだか気が楽になるような気がした。

「あ、ここです」

そんな事を考えていると、自宅が見えて来た。透さんは玄関の前にゆっくりと車を止める。

「すみません。送ってもらって」

「構わないよ。何かあったら昇にでも相談しなさい」

車の中で軽く一礼する忍に対し、激励する様に言葉を返す透さん。

「……本当にありがとうございます。では」

そう言っつて、忍は車のドアを開ける。そして雨に濡れないように玄関先まで来ると、車の方から「秋川君！」と、助手席のウィンドウを開けた透さんから名前を呼ばれる。

「今度、君の演奏を聴かせてくれるかい？」

そして、優しい笑顔で透さんはそう言っつて来た。

「……はい!!」

それに対して元気よく忍は返事を返した。

「……………遅いなあ、兄ちゃん」

暗くなってきた外を見ながら、凜花はそう呟く。

心当たりのある家には片っ端から電話したし、忍の携帯にも繋がらない。

「……………帰ってきたら、ちゃんと叱らないと……………」

風でガタガタと揺れる窓を見ながら、少し怒るような表情を見せる凜花。

台風の中連絡が取れないと言う不安もあるが、それ以上に吉川に心配を掛けた事に対して、凜花は少し怒っていた。

忍がスランプな事は凜花も知っている。

しかし、それとこれとは話が別だ。

だから忍が帰ってきたら、まずは……………

ガチャリ

そんな事を考えていると、玄関の扉が開く音が凜花の耳に入る。すぐさまリビングの椅子から立ち上がり、玄関へ向かって行った。やっと忍が帰ってきたのだ。

「……………おかえり。……………どこ行っつてたの？」

心配そうな表情で、凜花は忍を迎える。

「…………どこにも行けなかったよ」

そう返す忍は、やや自虐的に見えた。

「…………部活、行かなかったの?」

「うん、行かなかった」

探るように凜花が問い掛けると、包み隠さず忍はそう返す。

やはりそうだ。この兄はなんの連絡もせずに部活をサボったのだ。

「…………優子さんには連絡したの?」

少し低い声で凜花が責めるような口調でそう聞く。

「……………」

しかし、忍は顔を逸らし、無言を返した。

それを見て、凜花は忍の方へと近付いて行く。

「…………兄ちゃん、こっち見て」

「何を…………」

パンツ!

凜花に顔を向けると同時に、忍の頬に衝撃が走る。

凜花が忍の頬を叩いたのだ。

しかし痛くはない。全力で叩かなかったのだろう。だが、忍の心の

中では拳で殴られるよりキツイものがあった。

「…………痛いなあ…………」

「心配させたんだから、当然」

「……………」

叩かれた頬を右手で触りながら、忍はまたしても無言になる。そし

てその沈黙を破るように、凜花は口を開いた。

「…………兄ちゃんが最近上手く行ってないのは私も知ってるよ?…………」

でも、周りに迷惑はかけちゃダメ」

「…………別に、今日一日サボっただけじゃん」

諭すような凜花の説教に、不貞腐れたように忍はそう返す。

「今日サボっただけで何人がお兄ちゃんの心配をしたと思う? 優子さん、中世古さん、さやかのお兄ちゃん。…………顧問の滝先生だって、

心配だつてさつき家に電話が掛かって来たんだよ?」

「……………」

畳み掛けるような凜花の言葉に、再び忍は黙ってしまふ。

「……………」こんなにも兄ちゃんを気に掛けてくれる人が居るんだから、それを裏切るような事しちゃダメ。サボるんなら『今日サボります』つて連絡してからサボってよね」

「…………サボる事自体はいいんかい」

なんだかの外れな事を言ってる気がするが、それでも凜花の言葉は忍の心に大きく響いた。

「じゃあ、説教終わり!濡れたでしょ?お風呂沸かしてるから入ってきな?」

そして、ひとしきり言いたい事を言い終えると、凜花は普段通りの口調に戻る。

「うん、ありがと」

「それと、今日はハンバーグだから」

そして、なぜか自信満々に凜花は胸を張って続けてそう言う。気を遣ってわざわざ忍の好物を晩飯にしてくれたのだろうか?だとしたらこれはもう妹と言うよりかは…………

「…………なんか今日の凜花、お母さんみたいだな」

妙な懐かしさを覚えながら、忍は苦笑いでポツリとそう言い放つ。

「馬鹿な事言わないの。つてあれ?兄ちゃん、トランペットケースは?」

すると、凜花は忍が手持ち無沙汰なのに違和感を持ち、そんな事を聞く。

「……………あ」

凜花に言われて思い出したのか、今更忍はトランペットケースを持ってない事に気づいた。

風邪

9月。夏風邪、と言うには時期的に過ぎているのだが、それでも人間。いつ体調を崩すかは分からない。

ましてや前日に大雨を大量に浴びたのならば、そのリスクは高くなつて然りだろう。

「けほっ、けほっ………」

ベッドの上、1人の男がへばっている。

顔は紅潮して額には冷えピタのシートが貼ってあり、正に病人ですと言った様子だ。

「とりあえずアタシ学校行くけど、今日は安静にしときなよ?」

飲み物やゼリーをベッドの前に置いて、凜花はベッドで寝ている男、忍にそう伝える。対して忍は「うん………」と、力無く一言だけ返した。

「トランペットは学校の帰りに交番に寄って聞いてみるから」

「うん」

「おとーさん今日半勤だから、多分2時くらいには帰って来るから」

「うん」

ボーツとする頭で、凜花の説明に適当に返事を返す忍。

あからさまに元気がない姿を見る限り、本当に体調が悪そうだ。

「じゃあ、ちゃんと寝てなよ?」

最後にそう言つて、凜花は忍の部屋から出て行く。

風邪を引いた時の一人きりと言うのは、どうにも心細いものだ。シンと静まり返った部屋の中は、弱った体に追い討ちを掛けるように不安も覚える。

「けほっ、けほっ……あ……しんど………」

一言呟いて、そんな不安を紛らわせるように忍は布団の中に潜り込んで行く。

スランプに風邪っ引き。ここ最近正に踏んだり蹴つたりの忍だった。

月曜日と言うのは、どうにも心が沈んで行く。

これから5日間、社会の一員として会社、はたまた学校へと赴かなければならないからだ。

「ふあ〜……」

そんな月曜朝の通学路。校門の前では、気怠そうに中川が大きな欠伸をかましながら歩いていった。

ここ最近是全国大会に出場が決定したからか、部内でもどこか緩い雰囲気だ漂っている。御多分に洩れず、中川自身もどこか気が緩んでいた。

「んお？あれって……」

そんな中川の前に、見知った少女の後ろ姿が目に入る。そこまでは大きくないが、頭にデカデカと飾られているリボンには存在感を出すには十分過ぎるものだ。

悪い笑みを浮かべると、中川は気付かれないようにその少女の背後に忍び寄る。そして背後から少女の耳に口を近づけると……

「……………フツ」

耳元に、軽く息を吹きかけた。

「……………あれ？」

しかし、全く反応がない。

普通の人間、ましてや目の前の少女ならいつも良いリアクションをしてくれるのだが、今日は全くの無反応。

「ちよ、ちよつとー？挨拶してんだけどー？」

困惑気味に中川は少女に話し掛ける。その声でようやく気付いたのか、少女はゆっくりと中川の方へと顔を向けた。

「!?、ちよつとアンター！なんなのその顔!？」

少女の顔を見た中川はギョツとする。

目の前には目元にくつきりとクマが残り、明らかに顔色が悪い吉川の姿があった。

「ああ、アンタか……」

「アンタか、じゃなくて!!」

いつもなら絶対に聞くことのない低い声で応える吉川。

……いつも気丈な吉川がこんな状態になる原因なんて、一つしか思い当たらない。

「……アツキート、なんかあったの?」

「……関係ないでしょ?」

「……とりあえず、こっち来な」

本当に顔に出やすく助かる。一瞬で察した中川は吉川の手を引っ張って、校舎裏の方まで歩みを進めた。

「……………なによ?」

「なによじゃないよ。……アンタ、昨日何かやらかしたの?」

校舎裏、中川は真剣に吉川を見つめ、事情を聞こうとする。

「……………何もないわよ」

「嘘。アンタの顔見たら誰だってなんかあったって分かるよ」

「……………」

突き刺すような中川の言葉に、吉川は無言を返す。

本当にいつもと違い過ぎる。この前『絶対に立ち直させる』と息巻いていたあの気概は何処へ行ったのか。

落ち込みようとしては、ソロパート事件で忍がビンタした時以上に中川は感じた。

「……………黙ってちゃ分かんないでしょ?いつもの威勢は何処に行ったの?」

「……………」

優しく問いかけるも、吉川は俯いたままだ。

本当に何があったのか。遂には中川まで困惑の表情を浮かべた。

「ああもう！なんてタイミング！」

中川としてはまだまだ聞きたい事が山ほどあるのだが、それを嘲笑うかのようにHRのチャイムが鳴る。

「……………とにかく、昼休みになったらまたアンタの教室行くから！」
それだけ言い残すと、中川は吉川に背を向けて教室の方へ歩いて行った。

「……………え？、来ないって、どう言う事ですか!？」

「……………優子ちゃんなら分かるでしょ？」

後悔。

それは誰しもが経験するものであろう。あの時、ああしておけば良かった。あの時、違う選択肢を取っていれば良かった。

しかし後悔する頃にはもう後の祭りで、そこ残るのは自責の念しかない。

「……………さつき、先生から秋川くん部活辞めたって……………」

「そんな……………」

パート練習の教室。諦めた表情で中世古がそう言うと、吉川の顔が悲痛に歪む。

吉川優子にとつての後悔。それは……………

「……………冗談じゃ無いわよ。アタシ達になんも言わないで、勝手に居なくなるとかありえない！」

悲痛な顔を怒りの表情に変化させ、吉川はそう言う。まだ入部して半年も経っていないのだ。あの事件が原因であるのは分かりきっているが、それでも勝手に居なくなる事については吉川は納得が行かな

かった。

「絶対に連れ戻してやる……!!!」

「ちよつと優子ちゃん!」

中世古が止めようとするも、吉川は聞く耳を持たずパート練習の教室から出て行った。

昇降口まで走り、吉川はキョロキョロと辺りを見渡す。しかし、目当ての人間は居ない。下駄箱を確認すると、まだ靴が入っていたので校舎内には居るのだろう。

ここで待ち伏せしようか。そう思った直後だった。

「あれ?、吉川じゃん」

吉川は声のした方向に、咄嗟に振り向く。

そこにはいつも通りの忍の姿があった。あまりにも落ち込んでいる様子がなかったので一瞬呆けたような表情になるが、すぐさまキツと睨むように忍を見つめる。

「……………アンタ、部活は?」

「あれ、香織先輩から聞いてない?俺辞めたよ?」

あまりにもあつさりと忍は言い放つ。それを聞いて、吉川は心臓が締め付けられるような感覚になった。

「……………ホントに辞めるの?」

なんとか言葉を捻り出すように、震え声で吉川は尋ねる。

「うん、辞めるよ。あそこに居てもつまんないだけだし」

しかし吐き捨てるように、心底興味が無さそうに忍は言い放つ。

「……………」

そんな忍の態度に、遂に吉川は言葉を詰まらせてしまった。

どんな言葉を掛ければ良いのか。どうやって部活に引き留めれば良いのか。吉川には何も思い付かなかった。

「……………もういい?じゃ、俺帰るから」

最後にそう言つて、忍は吉川の横を通り過ぎて行く。遠くになって行

く忍の背中を見つめ何も言えないまま、その場で立ち尽くすしか無かった。

これが、吉川優子の後悔。

「授業終わったぞ」

「……………んえ？」

呆れたような声と共に、吉川は目を覚ます。

「……………次やったら欠席にするからな。部活が厳しいのは分かるが学生の本分は勉強だ。勘違いするな」

「あ、はい。……………すみません……………」

社会科の先生に小言を言われ、まだ起き切っていない声で謝る吉川。……………どうやら最悪の夢を見ていたようだ。時間はもう昼休みになっている。

一通り言いたいことを言い終えて先生がその場から去ると、吉川は再び机に突っ伏した。

「ちよつと、起きなよ」

すると、吉川の耳に聞き慣れた声が入って来る。

喧しいと思いつつ、渋々と再び吉川は顔を上げた。

「……………何よ？」

思い切り顔を擡めて、話しかけて来た中川に嫌悪感を隠そうともせず睨め付ける。

「……………アツキーの教室、行くよ」

「……………行かない」

「いいから、行くよ」

「ちよ、ちよつとー！」

渋る吉川を無理やり立たせ、中川は吉川を教室の外に出す。

「は、離しなさいよー！」

「嫌。アツキーに合わせるまで離さない」

嫌がる吉川を無理やり引っ張って、忍の教室まで歩く。ここまで強情な中川も珍しい。しかし、このままではダメだと言う直感的な衝動が中川の中にあった。

そして2年3組の教室の前まで一旦来ると……

「アンタ、ちよつとここで待ってなさい」

そう言っただけで中川は3組の教室を見渡す。しかし、目当ての人間は居なかった。

「ちよつと滝野！いい？」

そして中にいた滝野に中川は声を掛ける。思いもよらない人物の登場に、滝野は目を丸くしていた。

「珍し。何？」

「アツキーどく？」

中川がそう聞くと、滝野は困った様な表情を浮かべた。

「それがなあ、休みなんだよ」

「はあ？休み？」

予想外の滝野の言葉に、中川は素っ頓狂な言葉を出す。

「ああ。風邪だって。こつちからも何回も電話してんだけど、繋がらなくてさー。中川は何か知らない？」

「いや、知らないけど……」

吉川と会わせて絶対事情を聞いてやろうと息巻いていたので、中川は肩透かしを食らった様に、困惑の声を返す。

「うーん、分かった。ごめんね。いきなり来ちゃって」

「べ、別にいいけど……」

滝野にそれだけ言い残すと、中川は教室を出て行く。

絶対何かあった。そう確信した中川は、教室の外で待ってた再び吉川の手を掴んだ。

「ここでは、人が多過ぎる。」

「……………ちよつと来な」

聞きたいことや話したいことは山ほどある。ともかく人気の無い場所を目指して、中川は吉川の手を引っ張っていった。

中川夏紀

吉川優子と言う少女は、それはもういい反応をしてくれる。

背後から忍び寄り、ツンと背中を突いたり、耳元に息を吹きかける度に聞いたことのない様な情け無い声を出す。そんな反応が面白いものだから何度もそれを繰り返してしまふのだ。

しかし過去に一度だけ、何の反応も示さなかった事がある。

落ち込んでいるのは分かっていた。何せあんなだけ騒ぎになって、そのまま辞めていったのだ。周りも気を遣ってか、吉川に喋りかけようとする人間は殆ど居なかった。

だがそれを無視できないのが、中川夏紀と言う少女の性分だろう。その日もいつものように背後から近づいた。

「ふっ」

耳に息を吹きかけるが、反応は無い。

「あ、あれ？反応なしですかー？」

そう問いかけるも、吉川は反応するどころか中川の声に耳を傾けようともしない。

そして横から吉川の様子を見ると、中川は言葉に詰まってしまった。

何も声を掛けられなかった。

今の吉川にどんな言葉を掛ければいいのか、分からなかった。

結局、時間が経つにつれて吉川は元気を取り戻していったが、中川の中にはあの時声を掛けられなかったと言う事実が、しこりの様に胸に残っていた。

「……………アツキー、風邪だった」

「……………そう」

誰も居ない屋上へ続く階段。中川がそう言うと、吉川は俯いたまま

その一言だけ返す。

中川の表情は真剣そのもの。あの時声を掛けられなかった後悔があるからこそ、今の吉川を中川は放っておけないのだ。

「そうって……はあ……お見舞いに行かないの？」

「……………行つたって何も変わらないわよ」

普段の吉川からなら絶対に出ないであろう言葉が飛び出す。そんな彼女の姿を見て、中川の眉間に少し皺が寄った。

「何も変わらないって……アンタねえ、あん時『絶対に立ち直させる』って息巻いてたじゃん。嘘だったの？アレ」

「……………」

突き刺す様な中川の問いかけに、吉川は無言を返す。しかし彼女の表情を見て、やっぱり忍との間に絶対何かあったんだろうという事は中川にもすぐに分かった。

「……………ケンカしたの？」

「……………そんなんじゃないわよ」

ケンカじゃ無いならなんなんだろうか？事情を知らない中川は益々困惑の表情を浮かべる。

「……………黙ってちゃ分かんないでしょ？本当に何があったの？」

意地でも何があったのかを言おうとしない吉川に対し、中川は問い詰める様にそう言う。

「……………アンタには関係無いでしょ？」

「関係ないね。でもほっとけないよ。アツキーをどうにか出来るのは、アンタしか居ないんだから」

真つ直ぐ、吉川を見据えて中川はそう言う。

しかし対照的に吉川は目線を逸らす様に俯いたままだった。

「……………もう、いいかなって」

「え？」

消え入るように言ったその吉川の言葉は中川の耳に届かなかったのか、もう一度聞き返す。

「……………もう疲れちゃった。アイツに振り回されんのも、何も出来ない自分にも」

なんとも弱気な発言。本当にこの目の前の少女は吉川優子なのだろうか？

そんな諦め切った事を言う吉川に対し、中川の中で沸々と怒りの感情が沸き上がって来た。

「……諦めんの？」

「……………」

突き刺す様な中川の問いかけに対し、尚も俯いたまま吉川は無言を返す。

「アンタにとってアツキーの存在は、その程度だったって事？」

「……………」

尚も問い詰めるも、吉川から返ってくるのは無言。

「…………ぎっけんな」

そんな吉川の反応を見て、遂に中川の堪忍袋の尾が切れた。

ズカズカと吉川に近寄り、両手で彼女の肩を強く掴む。

「アンタが諦めたら、誰がアツキーを立ち直らせんの？」

顔を吉川に近づけ、声を荒げる中川。

彼女は1年生の頃から、ずっと忍と吉川の関係を見て来ている。だからこそ思う。”この2人は、特別な関係なのだろう”と。

「あの自由人を何とか出来んのは、アンタしか居ないでしょ!?それとも何!?またあん時みたいに後悔したい訳!」

後悔。中川のその言葉に、吉川の肩がピクンと跳ねた。

「アタシは嫌だ!!もうあん時みたいな後悔はしたくない!!アンタは違うの!」

強く握る吉川の肩を揺らし、悲痛に中川は訴える。

中川夏紀と吉川優子は、しばしば犬猿の仲と呼ばれる。しかし、互いを認めていないかと問われると、それは違う。

だからこそ衝突するし、ケンカ紛いの事もする。

互いに意識し合っているからこそ、性格的に合わないとしても放っておけないのだ。

「こっち見るバカ!!」

そして、中川は両手を挟む様にして吉川の両頬を掴み、そのずっと

俯いていた顔を上げさせる。

その表情は、あの時忍が辞めて行った時と同じ表情をしていた。そんな吉川の表情を見てしまい、中川の目が潤む。やっぱり、このままにはしておけない。

「アンタはいいの!? あん時みたいにまた何も出来ずに終わってアツキーが離れて行っても!!」

「……………」

「もう次は無いよ!? アンタがここで諦めたら「うるさい!!」すると、強引に中川の手を払い除け、説教を遮る様に吉川が叫んだ。いきなりの叫びに中川は少し怯む。

「うるさい! うるさい!! アンタに何が分かるのよ!? 忍の事を何も知らない癖に!!」

「だからアンタが!!」

「分かってる!! でも……………!! でもお……………!!」

吉川が目がじんわりと滲む。

吉川優子はスランプの経験など無い。それでも忍の不調をどうかしようとしていた。

「何も出来ない……………!!」

しかし、今までそれが改善されなかった事実が、彼女の中の罪悪感を大きくしてしまった。

「私がつ……………! 私が、あんな事言っちゃったからつ……………!!」

そして、自ら忍の地雷を踏んでしまった事。

「忍はつ……………!! ダメになって……………!!」

さらに雨曝しの忍のトランプケースが、吉川の心を折らせた決定打になってしまった。

ポロポロと涙を流しながら、独白する様に吉川は声を荒げる。

後悔、後悔、後悔。

「あの時と、何も変わって無いんだなつ……………!!」

正に後悔しつぱなし。これでは、あの時忍が部活を去って行った時と何も変わらない。

その事実は、吉川優子と言う一人の少女の心を折らせるには十分過

ぎるものだった。

「……じゃあ、また後悔するつもり？」

でも、それでも、中川夏紀は諦め切れない。ここで諦めれば、それは一生の後悔になる。そんな絶対的な確信が中川にはあった。

「ここで全て投げ出してっ！またあん時みたいになりたい訳!？」

「じゃあどうしろってのよ!？」

「分かるかそんなもん!!!でもアンタじゃないとダメなんだから!!」
感情が溢れ出したからか、はたまた吉川の涙に釣られただけなのか、中川も大粒の涙を流す。

「アンタは……！アンタはアツキーじゃないとダメなんだからあ
……!!」

継るように、切実に中川は訴える。

秋川忍には吉川優子が。

吉川優子には秋川忍が。

絶対にこの2人は1つでないといけないのだ。

屋上での前の階段で、ボロ泣きしている2人の少女。人気の少ない場所とは言え、それでもこれだけ叫べば音は響く。

だからだろうか、それともただの偶然だろうか。もう1人、それはこの場においての切り札と言ってもいいだろうか。

髪をショートに切り揃えた少女が、2人に近づいて行った。

「……あ」

最初にその少女に気付いたのは、中川。

「……声、廊下まで聞こえてたよ?」

そこには少し困ったように笑う、中世古香織の姿があった。

いつも通り

「か、香織先輩……」

予期せぬ人物の登場に、慌てて吉川は涙を拭く。

「……………ごめんね？盗み聞きするつもりは無かったんだけど……」

「い、いえ……………」

こんなところを見られるとは思っていなかった。どう返していいのか分からず、吉川は曖昧な返事をしてしまう。

「……………今日、秋川くん休みなんだったってね？」

「き、聞いてたんですか……………」

忍が休みだと言う事を知っているとと言う事は、中川と吉川の会話をほぼ最初から聞いていたのだろう。恥ずかしさからか、吉川の顔が少し赤くなった。

「……………秋川君と、何かあったの？」

「それは……………」

吉川は口籠もり、少し無言の時間が流れる。中世古香織はトランペットのパートリーダーだ。こんな場面を目撃して、見逃せる筈がない。

「……………言えない？」

「……………」

優しく問いかけるも、吉川から返ってくる答えは無言。

そんな彼女を見て、困ったように中世古は微笑んだ。

「……………私ね？本当に優子ちゃんが羨ましいなーって思う時があるんだ」

「へっ」

すると、中世古から言葉通り羨ましがる様な口調でそんな言われ、吉川は素っ頓狂な返事を返す。

そして中世古は懐かしむ様に、慈しむような微笑みに表情を変える。

「なんだろうーなー？……嫉妬してるのかな？優子ちゃんと秋川君つて、絶対に二人にしか分からない世界を作るよね？」

「そ、そんな事は……」

「やっぱ、自覚ないか」

吉川にその自覚は無い。しかし忍と話していて、接していて心地いいのは事実だった。

それは、何故だろうか？

「それが羨ましいの。……だって、素敵でしょ？それって、無意識の内に互いの事を一番深く理解し合ってるって事なんだから」

「それは……」

中世古は、この二人の関係性を一番身近で見ていると言っても過言では無い。

一人の先輩として。トランプペットパートのリーダーとして。

一つ上の先輩だからこそ、「見守る」と言う俯瞰的な視点でこの二人の関係性を感じ取れるのだ。

「……ホントに、羨ましいなーって思うよ」

だからこそ、羨ましく思う。俯瞰的に、冷静に見れるからこそ、吉川優子と秋川忍の間には自分が入り込む余地がないのだろうかの痛感する。

完成された二人の関係。そこに羨望を覚えるのは、必然と言えるだろう。

「だから、私はそんなに心配してないんだ」

そんな二人を間近で見てるのだ。だからちよつとやそつとの事などで崩れる事は無いと、中世古には確信があった。

ならばやるべき事は……

「……後は、優子ちゃんがいつも通りにするだけだと思うな?」

「いつも通り……」

いつも通り。

忍に対して、自分はいつもどの様に接していたか?どのように関わってきたか?

思い返せば、簡単な事ばかりだ。

自然体に振る舞い、ありのままの姿を曝け出す。

口が悪いとか、すぐ手が出るとか、いつも忍に突っかかるとか、思い返せばロクなものでは無い思い出ばかり。

『なー、吉川』『いつで!!強く蹴りすぎだっつーの』『そうだね、特別って言うっておこうかな?』

しかしそんな吉川優子を、秋川忍と言う男は全て受け入れてくれたのだ。

今回だって、そうに違いない。

「……うっ……ひっぐ……」

それを理解すると、吉川の涙が止まらなくなった。

秋川忍という存在は、正に自分の一部なのだ。中世古の言葉でそれを理解した。

「……もー、泣きすぎだって……」

慰めるようにそう言う中世古も、涙声を隠し切れていない。

1番可愛がっている二人の後輩。大丈夫だと分かっているでもその両者が苦しんでいるのを見て、心が痛まない筈がなかった。

でも、中世古にはまだ吉川に伝えなきゃいけない事がある。

「……だから、秋川君は優子ちゃんじゃないとダメなの」

中川は、しきりに吉川に対しアッキーは『アンタじゃないとダメ』と言った。

「私でも、中川さんでもダメ。だって……………」
「だってそれは……………」

「私たちには、優子ちゃんと秋川君の世界に入り込めないもん」

お互いに1番理解してる者達でしか分からない感覚だから。

秋川忍と言う一人の人間を1番理解しているのは、吉川優子しか居ないから。

それは中世古だけじゃ無くて北宇治高校吹奏楽部のメンバー全員が知っている事だ。

そんな簡単な答えに、吉川は今更気付かされたのだ。

「うぐっ……………えぐっ……………」

人生で、こんなに泣いたのなんて初めてだろう。

もらい泣きか、中川も中世古もつられるように泣き出している。しかしそれは、今まで溜まっていたものを全て出すのには十分なものだった。

嵐が過ぎ去った後の空は、今までのどんよりとした空模様から一転、どこまでも透けるような青さを見せる。

正に台風一過と言うべき空模様は、今の吉川優子の心をそのまま現していると言って良いだろう。左手には飲み物とゼリーを。

右手には、トランペットケースが握られている。

足取りは軽い訳ではないが、重くはない。

心が軽い訳ではないが、重くはない。

まるでそれが当たり前かのように、一步一步吉川は目的地に歩みを進める。

今日は部活を休んだ。やらなければならない事があるからだ。

しかしその為の覚悟も、気負いも無い。だって、ただ落とし物を届けに行くだけだから。

自分が拾った好きな人の落とし物を、ただ届けに行くだけ。

後はパパッと病人の世話をして帰ればいいだろう。届けに行く相手は昨日の台風で風邪を引いたみたいだし。

宇治橋を越えて、少し入り組んだ住宅地の中に入って、少し進んだところに、彼の家がある。

至って普通の、2階建ての一軒家だった。

初めて来る、しかも好きな人の家の筈なのに、不思議と緊張は全くない。

家の前に”秋川”との表札があったので、ここで間違い無い筈だ。一息付き、吉川は家のインターホンを押す。

ピーン、ポーン……………

ベルを鳴らしてから数秒。反応は無い。

病院にでも行ってるのだろうか？まあ、それなら、帰ってくるまでここで待てば良いだろう。

そう思った瞬間だった。

『…………はい』

インターホン越しに、男性の声が聞こえる。忍より少し低めな声だ。

「あ、こんにちは。北宇治の吹奏楽部の吉川と言います。…………忍くん居ますか？」

『あー、忍のお見舞いかい？今開けるから待っててね』

そう言うとお話は途切れ、まだ数秒後に玄関の扉が開いた。

「どうも。こんにちは」

「い、こんにちは」

出てきたのは、少し白髪の混じった初老とまでは行かないも、年相応の威厳を感じる眼鏡を掛けた男性。十中八九、彼の父親だろう。

「わざわざ済まないね。遠慮なく上がっていいよ」

「お、お邪魔しまーす…………」

忍と会う事自体に緊張はしないが、初めて来る家に上がると言うの

やはり緊張するもので、吉川は少し縮こまりながら秋川家へと上がって行った。

「お茶出すよ。何がいいかな？」

「あ、いえいえ！なんでも……」

忍の父親にリビングに通され、吉川は広めのソファにちよこんと座っている。

中身も普通の一軒家という感じだ。しかし自身の家とはやはり環境が違う部分もあるようで、いつもとちがう匂いや慣れない家具の配置に、少しばかり吉川の心は落ち着かなかった。

それからか、キョロキョロと吉川は辺りを見回す。特段変わった様子も無いが、視線の端。居間の奥に見える空間。

息を呑むと同時に、吉川はそれから目が離せなくなってしまった。

「仏壇が珍しいかい？」

「え？……あ、いえ！そんな事は……」

その言葉で、ようやく吉川は我に返る。視線をテーブルに向けると、グラスに入れた麦茶が、自分の前にあつた。

「す、すみません。いただきます……」

おずおずと、何処かまだフワフワした感覚のまま、差し出された麦茶に口を付ける吉川。

「いえいえ。……それで、忍には会ってくかい？」

すると、忍の父親からそんな事を言われる。その言葉でやっと本来の目的を思い出したのか、吉川の表情がハツとしたものになる。

「あ、は、はい！忍君は、今どこに……」

「2階の自分の部屋にいるよ。……呼んでこようか？」

「い、いえ！自分でいきます！」

先を立ち上がり、忍の父親の提案に食い気味にそう返す吉川。

「そうか。ならよろしく頼むよ。部屋は2階の奥の方の部屋だからね」

「は、はい。ありがとうございます」

そう言っ、吉川は再びトランプケースとお見舞いの袋を持ってリビングから出て行く。そして2階への階段を上がり廊下の奥まで歩を進めると、”忍”と端的に書かれたドアがあった。

間違い無い。ここだろう。

2つ程深呼吸をし、吉川はその扉を2度ノックする。

「忍、くるっ。」

優子

部屋の中から返事は無い。吉川がもう一度ノックして「忍ー？」と呼ぶも、反応は無かった。

「……………入るわよう？」

おそらく寝ているのだろう。音を立てないようにゆっくりと、吉川はドアを開ける。

部屋の中は眠る為か、カーテンを閉め切っており少し薄暗かった。その部屋の端。窓際に配置されたベッドの上には、布団が盛り上がっている。

ゆっくりと、吉川は歩みを進める。

「……………寝てる？」

覗き込むように、吉川は忍の寝顔を見つめる。

「……………ふふっ」

少し、吉川の様子が綻んだ。

「……………んえ？」

すると、ようやくというべきか、忍が反応を見せる。

「……………起きた？」

「……………」

まだ寝ぼけてるのか、半目のまま忍はブーツと吉川を見つめる。

「……………あー、優子？」

「何寝ぼけてんのよ？せつかくお見舞い来てあげたんだから」

まだ寝ぼけ眼の忍に対し、困ったように笑って吉川はそう言う。目を擦り、ゆっくりと忍は上体を起こす。

「……………しんどくない？」

「うん、だいぶ良くなった」

まだ寝ぼけ顔であるが、顔色は悪くなさそうだ。

そして忍は吉川の顔を見やり、薄く微笑む。

「……………なによ？」

「いや……………なんか1日会わなかっただけなのに凄い久しぶりに感じ

て」

「……………奇遇ね。私もよ」

長かった。会わなかったたった1日。色んなことがあった。それを身に染みて感じているのは、紛れもなくこの二人だった。

「……………これ、落とし物」

そう言つて、吉川は右手に持っていたトランプペットケースを忍に差し出す。

「……………優子が持ってたんだ」

まさか吉川が持っているとは露とも知らず、忍は驚いた表情を見せる。

「……………大事なみゆきちゃんでしょう？ちゃんと持つときなさいよ」

「……………うん、ありがとう」

ケースを受け取り、それを大事そうに抱える忍。少し、無言の時間が流れる。

「……………母さんには挨拶した？」

そう言つて沈黙を破つたのは、忍の方だった。

その言葉に、吉川の心臓が一つ跳ねる。

「……………まだ。お父さんだけ」

「そっか、後で挨拶しときなよ？」

「……………うん」

そして、またしても無言の時間が流れる。吉川も、なんと会話を切り出していいものか分からなかった。

コン、コン

すると、再びドアがノックされる音が聞こえてきた。

『起きてるか？』

「あ、うん。起きてるよ」

忍の父親がやって来たのだろう。扉は開かず、そのまま会話を続ける。

『買い物行ってくるけど、何かいるか？』

「えつと……じゃあ飲み物」

『……分かった。他に寄る場所あるから、ちよつと帰るの遅れるぞ』
「うん、りよーかい」

それだけ言い残すと、後は階段を下る足音だけが聞こえる。足音が完全に聞こえなくなつたのを確認すると、忍は少し微笑んだ。

「……ウチの親父、気が利くでしょ？」

「え？」

いきなりそんな事を言う忍に対し、素っ頓狂な返事を返す吉川。
それに構わず、忍はベッドから体を起こす。

「まあ、いいや。ちよつと良いから、一緒に挨拶しよつか？」

「え？……あ……」

忍のその言葉で、ようやく吉川は理解する。おそらく、二人きりにする為に忍の父親は出掛けて行つたのだろうと。

そして挨拶とは、仏壇に手を合わせる事なのだろうと。

線香の香りがする。

この匂いが鼻につくだけでセンチメンタルな気分になるのは、何故だろう？

二人して手を合わせる仏壇の前。遺影に写る女性は、亡くなるにはまだ若すぎる程の年齢に感じる。それでもその写真の中の表情が満面の笑みであれば、少しは救われるものだろうか。

「……よく、笑う人だったの？」

写真の中の女性は、名を“花澄”と言った。

「うん。つて言うか、笑うのが好きな人だったんだと思う」

思い出すように、しみじみと忍は返す。

今はその笑顔は写真の中でしか見れない。その虚しさはいくら時間を経とうとも、変わることは無い。

「そう……楽しい人だったのね」

「うん。多分、優子とも合つたと思うよ」

そう。ここでするのは、全てたられればの話。

「アンタに似たのかな？」

「逆。俺が母さんに似たの」

もし生きていれば、吉川とどんな会話をしてたのだろうか？

「家族の中で一番、喧しかったし。……俺らみたいな子供よりだよ？」

「それは……賑やかどころじゃ無さそうね……」

もし生きていれば、忍のこれまでをどの様に見て来たのだろうか？

「家族で一番元気だったのにねえ……」

全てはたられればの話。

そこに残るのは悔しさでも、悲しさでも無い。

「なあんで、死んじやっただらーなあ……？」

ただただ、虚しいだけだった。

「……………っ!!」

諦める様な忍の呟きにつん、と、吉川の目頭が熱くなる。

やっぱり、忍にとって母親は……

「……………忍は、お母さんの事好き？」

泣き出すのを、声が震えそうになるのを必死に堪え、吉川はそう聞く。

「うん。もう何年も前に死んじやってるのに、まだまだマザコンみたい」

しかし忍のその返しで、遂に我慢出来なくなってしまうた。

ポロポロと、決壊するかの様に吉川は涙を流す。

「……………泣いてんの？」

「ぐずっ……………うっさい……………」

拗ねた子供の様に、吉川はそう返す。

しかしそれに忍は満足そうに、柔らかい笑みを浮かべた。

「優子って、よく泣くよね」

「ずずっ………悪かったわねえ………すんっ………泣き虫で」

「誰も悪いとは言っていないよ」

確かに、忍の言う通り吉川優子と言う少女は良く泣く子だろう。ソロパート事件の時も、傘木と鎧塚の一件の時も、彼女は泣いていた。でもそれは、ただの泣き虫では無い。

「……俺、優子を好きになって良かったよ」

その言葉は、忍の口から自然と出た。

突然の忍の言葉に、泣き顔ながらも吉川は驚いた表情を浮かべる。

「だって、ここまで人の為に泣ける人、見た事ないもん」

吉川優子は、良く泣く。

しかしその涙は、全て人の為に流した涙だ。中世古も、鎧塚も。

そして、今回の忍も。

彼女の涙は、全て自分以外の人の為に流したものだ。

そんな強くて”優しい子”に、秋川忍は心底惚れ込んでいるのだ。

「ありがとね。優子」

もう流れていた涙が、忍のその言葉で更に止まらなくなる。

吉川自身、その自覚があった訳では無い。自分の思うがままに、自分がやりたい様に今までやって来た。

結果それが、吉川優子という一人の人間性を表したただけだ。

そして、それを忍は1番理解していただけ。

「ううっ………ぐずっ………じのぶう………」

いつの間にか、二人は抱き合っていた。吉川は泣きじやくる顔を忍の胸に埋める様に、身を委ねている。

少し、忍も泣きそうになる。

しかし、泣かない。それはほんのちよつぴりのプライドか。それとも好きな人の前で泣けないと言う、かわいい強がりか。

いずれにせよ、二人の間のわだかまりなんて、綺麗さっぱり無くなっていた。

「……優子、外出ようか？」

「……え？」

すると、忍から思ってもいなかった提案をされる。

「ちよつと、吹きたくなっちゃった」

夕暮れの宇治川、河川敷。2人の男女が、隣同士で座っている。男の子の方は、トランペットを握っている。夕日に照らされて、白金のその楽器がキラキラと反射していた。

「やっぱりここで吹くのが一番いいね」

演奏の準備をしながら、呟く様に忍はしみじみとそう漏らす。

「……そうなの？」

「うん。小さい頃からここで吹いてるから、なんか落ち着く」

思い出は沢山ある。父親との思い出。凜花との思い出。

そして、いつも一緒にここで吹いていた母親との思い出。

「何を吹くの？」

吉川がそう聞くと、忍は柔らかく笑って吉川に顔を向けた。

「俺が初めて覚えた曲」

それだけ言うと、忍は確認する様にチューニングの音を出す。真つ直ぐで、綺麗な音だ。

「……じゃあ、行くよ」

「……………うん」

一言、吉川がそれだけ返すと、忍は演奏を始めた。

見上げてごらん、夜の星を

小さな星の

小さな光が

ささやかな幸せを、うたってる

たった数フレーズ。忍が、初めて覚えた曲。

簡単な曲だ。しかし、何よりも心を動かされる様な、そんな音色。

「……………どう?」

吹き終わると、忍は吉川に感想を求める。

「うん、良かった」

一言、簡潔に吉川はそれだけ返す。

「そっか、そりゃ良かった」

「うん、アンタらしかったわ」

「へえ、そりゃどう言う意味?」

ひょうきんに忍がそう聞くと、今度は吉川の方が柔らかい笑みを浮かべ、忍を見据える。

「ちよつと悲しいけど、暖かった」

その言葉は、忍が壁を乗り越えた証でもあった。

覚醒の自由人

数日後。秋晴れの季節。少しは過ごし易い季節になって来ただろうか？

そんな放課後の北宇治高校には様々な音が聞こえる。野球部の声出し。バスケット部がドリブルをする音。帰宅する生徒達が談笑する音。そして、楽器の音。

「はい、そこまで」

合奏練習。滝先生が演奏を止める。

「トロンボーン、134小節からの繋ぎ、もう少し滑らかに出来ますか？」

「はい!!!」

「ホルン、もっと音を下さい。木管に負ける様では話しになりませんよ?」

「はい!!!」

滝先生の指導は、相変わらずだ。淡々と事実を。出来なければズバツと。忖度は無い。もう何ヶ月も同じ曲を吹いているが、まだまだ研ぎ澄ませる部分が多い。

そして、次に滝先生の視線は、トランペットパートに向いた。

「秋川君」

「はい」

名指しで、滝先生は忍を見つめる。

「おかえりなさい。やっと戻って来ましたね」

柔らかく微笑んで、安堵する様に滝先生はそう言う。

一瞬、何を言われたのか分からず、忍は呆けたような表情になる。

「……聞こえませんでしたか？今の音を常に心掛ける様に」

「えっ、あ……は、はい!!」

滝先生に再度聞かれ、ようやく言われた事を理解したのか、慌てて返事を返す忍。

やっと、やっとここまで戻ってきた。

自分のことでは無いのに、中川や吉沢などの数名はもう泣きそうな顔になっていた。

「それでは合奏練習はここまでです。全国に行つたからと言って、情け無い演奏は出来ません。皆さん、気を引き締める様に」

「「はい!!!」」

言葉通り締めるように滝先生が声を掛けると、すぐさま音楽室の整理が始まる。

と、思いきや、

「やったじゃん！アツキー!!」

「ぐずっ……せんぱあい……良かったですう……」

「うおっーちよ、来過ぎ……」

片付けもそのまま、忍は他の部員からもみくちやにされる様囲まれてしまった。

「……………」

そしてその光景を、高坂は真剣な表情で見つめていた。

その後も、全国大会に向けての練習は続く。忍の演奏は、日を追うごとに良くなっていった。スランプに関しては、完全に克服したと言って良いだろう。

そして、新たな視点も見えてきた。それは、一度どん底に落ちたからこそ、見えるものだった。

「今日は個人練。自分の課題に取り組む様に」

「「はい！」」

パート練。中世古がそう言うと、各々自分の準備に取り掛かる。今日は一日個人練習。楽譜を確認する者、指運びを確認する者、もう音出しを始めてるものなど、教室は忙しなくなる。

「……………」

そんな中、忍はただ自分の持つトランプペットを、じっと見つめていた。

「……………忍？」

そんな様子に目敏く気付き、優子が声を掛ける。

「ん、何？」

「こっちのセリフよ。何ボーツとしてんの？」

「ああ、いや。…………今なら違う音が出せるんじゃないかなって」

「違う音？」

一体忍が何を言いたいのかわからず、優子は首を傾げる。

「…………うん。今までとは違うやつ。…………なんだろう？言葉じゃ説明できないうや」

また妙ちくりんなことを言い始めたと、優子は困った様に眉毛をハの字にさせる。

しかし、忍が何かを掴みかけているのは、優子にも分かった。

「…………吹いてみれば？」

「……………なに吹こうか？」

「うーん、そうねえ……………」

腕を組んで、優子は考える。別に何でも良いが、忍の音の性質的に超絶技巧の難題曲というよりは、情に訴えかける様なゆったりとした曲の方がいいだろう。しかし、それを聞かれてパツと浮かぶなど…………

「……………あ……………」

一つ、あった。と言うよりは、優子自身がもう一度その曲を聴きたかった。

忍の耳に顔を近付け、耳打ちをする。

「……うん。良いね」

納得した様に忍も頷くと、すぐさまトランペットを構える。そして、確かめる様に一音出すと、すぐさま演奏に入る。

—————
♪—————♪—————♪—————♪—————♪—————
—————

奏でるのは、”見上げてごらん夜の星を”。

河川敷で吹いた曲。忍が、初めて覚えた曲だ。

そのメロディが聞こえてきた瞬間、パートメンバーの全員が一斉に忍の方向へと顔を向ける。

初めて聴く音だ。

中世古も、高坂も、滝野も。あまつさえ優子でさえも、忍からこんな音を聴いたことは無い。

寂しげな音だった。

それでいて、なんだかあつたかい音。

一言で表すなら、”哀愁”。哀しさと、切なさと、少しの懐かしさ。

忍のトランペットは、”情”のトランペット。感情を音に乗せるのが抜群に上手い。

でも、今までの忍の音は、”楽しむ”という形での”情”でしかなかった。

だって音楽は楽しむものだから。

怒ったり悲しんで吹いたりしたら、勿体無い。

でも、それだけじゃ足りない。

それは、喜怒哀楽の”楽”の部分でしか無い。

悲しい音楽もあれば、怒りを感じる様な激しい音楽だってある。

技術では無い。

喜怒哀楽。自分の感情全てを、音に変換できるか。

そして秋川忍は今、その一步を踏み出したのだ。

吹き終わると共に、静寂が訪れる。

人は、本当に感動すると言葉を失うと言う。

パートメンバーの7人。その全てが作業を止め、言葉を失い、釘付けになる様に忍を見つめていた。

「……秋川君、今のつて……」

演奏の余韻が残る中。なんとか絞り出す様に、中世古が今の演奏について触れる。

「……どうでしたか？」

マウスピースから口を離し、満足そうに笑って、忍は感想を聞く。いつもの、ひょうきんな彼だった。

「うう……ぐずつ………凄がっただでずう……」

号泣してそんな感想を言ってきたのは、吉沢だった。

「どうどうヨッシー。そんな泣くことないっしょ」

あまりにも泣いているので、演奏の余韻などどっかに消え去ってしまい、ようやくいつものパート練習の雰囲気に戻る。

しかしその中でも、高坂だけは何か考える様に忍の方を見つめていた。

「おつかれー、アッキー」

「おつー」

最後の部員が出て行き、忍は音楽室に一人残される。朝に強くない彼は、こうして下校時間ギリギリまで残ることが多い。

それでも吹き足りない時は、河川敷で吹いたりするのだが。

「帰るわよ忍」

「はいよー、待ってー」

しかし最近、優子も一緒に残る事がほとんどだ。

まだ荷物をまとめている忍を、横で待っている。

「なんだ？ 貴様らまだ残っていたのか？ もう閉めるぞ」

すると、ドア付近から声が聞こえて来た。二人ともその方向へ顔を

向けると、鍵を持って腕を組む松本先生が居た。

「おー、松もっさん。今退きますんで少々お待ちを……」

「松本先生だ！馬鹿者!!」

相変わらぬ忍に対し、松本先生のカミナリが落ちる。しかし忍にはノーダメージの様だ。

「あははっ、すみません。では」

「お疲れ様です」

学生バッグとトランペットケースを担ぎ、それだけ言い残すと忍と優子は音楽室を出ようとする。

「……ちよつと待て」

すると、脇を通り過ぎようとする忍を、松本先生は呼び止めた。

「？、なんですか？」

珍しいこともあるものだど、忍は少し驚いた表情を見せる。

対照的に、松本先生はなんだか言いにくそうにしている。そして意を決したように、口を開いた。

「………あー、なんだ。お前はよく頑張ってると思うよ」

「………はい？」

松本先生から出てきたいきなりの褒め言葉に、忍は怪訝な表情を浮かべる。

「………なんでもない」

もう一度言う胆力は無かったのか、頬を赤らめてしな垂れるようそれだけ言う松本先生に対し、忍はニンマリと笑顔になる。

「………ツンデレですかあ？」

挑発的なその言葉に、案の定松本先生は乗ってしまった。

「バカモノ!!!いいからさっさと帰れ!!!」

「あはは!!じゃあ、お疲れ様ですー!!!」

尚も楽しそうな忍に対し、追い払うかのように二人を帰らせる松本先生。

しかし口調とは裏腹に、その口元は緩むのを我慢出来ていなかった。

「やー、ツンデレだったね」

「あんな松本先生、初めて見たわよ」

昇降口に向かう途中も、二人の話題は先程の松本先生で持ちきりだった。

まるで武士のようなあの先生があんな姿を見せるとは誰も思わな
いだろう。

「明日また最後まで残ろうかねえー?」

「もうあんな態度取らないと思うわよー? って、あれ?」

そんな会話をしながら、昇降口に着くと、一人の少女が待ち構えていたかの様にそこに立っていた。

「あれ? 高坂さん?」

もう下校時間なんてとつくに過ぎている。しかし目当ては貴方だと言わんばかりに、高坂はジツと忍の事を見つめていた。

「……やっとなりましたね。アツキー先輩」

「んー、待たせたつもりもないけど……」

飄々と忍はそう返すも、高坂は真剣な空気を崩さない。

そして、まずはと高坂は優子の方を見やる。

「……優子先輩、ちよつとアツキー先輩、借りていいですか?」

「良いわよ。後でちゃんと返してね」

「俺の意見は?」

なんだかレンタル用品みたいになっているが、優子からそれを聞いて高坂は再び忍の事を真剣に見つめる。

「じゃあ、アツキー先輩。……少し良いですか?」

「……分かった。手短かにね?」

忍も只事では無い雰囲気を感じ取ったのか、少し真剣な面持ちでそ
う返す。

こうして、忍と高坂は校舎裏の方へと進んで行った。

秋らしく、ひぐらしの声が聞こえる。

日が暮れるのも夏場より早くなり、西日の当たらない校舎裏は結構な暗さとなっていた。

そこに対面する、男女二人。

「……アツキー先輩、面倒臭いので端的に言います」
わざわざ二人きりになって、高坂が伝えたい事。

「……………なにかな？」

そしてそれは、忍自身も全く予期していないものだった。

一つ深呼吸をして、高坂は口を開く。

「ソロパートのオーディション。私ともう一度受けてくれませんか？」

再びの

なんだか、妙なことになってきた。

「また再オーディション？」

「ねー。しかもやりたいって言い出したの、高坂さんだって」

「何で自分から不利になるような事するんだろ？」

トランペットソロパートの再オーディション。

この時期で、トランペットソロが変わるかもしれない。

もう全国大会に出場が決まった中での再オーディション。

それは、再び部内を騒つかせるのには十分だった。話題はどれもこれも、忍と高坂の再オーディション。普通ならこのタイミングでの配置転換なんて言語道断。もし忍にソロパートが変われば、他パートの繋ぎなども変わってくるかも知れない。

「いいでしょう。もう一度、再オーディションをしましょう」

しかし滝先生自身は、このオーディションに前向きだった。

それは、一体どの様な意味があるのか。全国大会直前でのその選択は、非常にリスクな選択だ。

意外な事に、言い出したのはもうソロパートに決まっている高坂からの申し出だと言うではないか。

分らない。何故高坂麗奈自身が、忍に対して自らも一度オーディションを申し込んだのか。

「……………久美子、聞いている？」

「え？、あ、うん。ごめん。ボーツとしてた」

日も暮れた駅前のコンビニ。高坂の問い掛けで、ようやく我に返る黄前。

高坂派、と言うわけでは無いが、黄前は彼女の事を特別視している。だからこそ高坂の方がソロパートを吹くべきだと思っているし、前回のオーディションでは結果そうだった。

じゃあ、もうその勝負は終わったはずなのに……

「オレンジジュースの果汁って、絶対100%の方が良いわよね？」

「あはは……そう、なのかな？」

が、目の前の少女はびっくりするぐらいいつも通りだ。そんな高坂に対し、黄前は少し顔を引き攣らせる。

「……………なに悩んでんの？」

あからさまに顔に出ている黄前に対し、疑う様な口調で高坂はそう言う。

「べ、別にそんなんじや……」

「嘘。久美子って顔に出やすいから」

そう言い切る高坂に対し、観念した様に黄前は一つため息をついた。

「……………麗奈には敵わないなあ……………」

「……………オーディションの事？」

「……………うん」

ズバリ高坂に言い当てられ、素直に黄前は頷く。彼女だって、絶対にソロパートを吹きたい筈だ。では何故、わざわざ自分から不利になる様な状況にしたのか。

「なんで、麗奈の方から申し込んだのかのかなーって」

「……………久美子なら、分かると思っただけだなー」

勿体ぶる様に態とらしく残念がる高坂に対し、黄前も不服そうな顔を見せる。

「……………じゃあ、教えてよ」

「ふふっ、しょうがないね」

そう言う高坂は、本当に無邪気に、楽しくてしょうがないといった表情をしていた。

「私、やっとアツキー先輩と戦えるんだなって」

そしてその表情に、今度は闘志が加わった。高坂の表情を見て、黄前は息を呑む。

「ずっと思ってたの。アッキー先輩、まだ全然本気じゃ無いなって。……多分、アッキー先輩自身はそれに気付いてないと思うけど」
確信があるのか、自信満々という風に高坂はそう言い切る。しかし、黄前には忍が本気を出していないとは思えなかった。

「……何で、麗奈はアッキー先輩が本気出してないって分かるの？」
今の忍でも、相当な技量を持つている様に思える。そして、手を抜いてると思えない。

それでもまだ本気を出せてないと、何故高坂は気付けたのだろうか？

「分かるよ。だってアッキー先輩、あんなだけ技術があるのに、出す音は一緒だったもん」

「……………」

黄前は首を傾げる。出す音が一緒？技術を持つてるなら、それこそ多種多様な音が出せると思うのだが……

「ふっ、久美子にはまだ早かったかもね」

「む、なんかそれ、ムカつく」

勝ち誇る様にそう言う高坂に対し、不服そうな表情で黄前は返す。それと同時に、解る者にしか解らない世界もあるんだなど、少し羨ましい気持ちになるのだった。

「やっぱ、オレンジジュースは果汁100%に限るわ」

「そう？私はそんなに違い分からないから良いけど」

そして、いつも通りなのはこの男もであった。

こちらは駅のホーム。ペットボトルのラベルの成分表示を見つめてしみじみと言う忍に対し、ズズッとカフェオレを飲みながら心底どうでも良さそうに優子はそう返す。

「分かってねーなー優子よ。ここに添加物があるか無いかで全然味が変わって来るのに」

「ふーん。どんくらい変わるの？」

「国産牛と外国牛くらいの差はある」

「分かるようで分からない例えね……………」

相変わらず自由に、思った事がそのまま口から出る忍。

そんな彼に一つ、優子は軽くため息をついた。

「またオーデイションするつてのに、全く緊張感無いわねえ」

「別に、緊張なんか全くしてないしねー」

言葉通り、ヘラリと笑って忍はそう返す。それに対し、優子は少し疑う様な表情を見せる。

「ホントに？じゃあ高坂の事を打ち負かす自信があるつて事？」

確かに最近の忍はスランプを抜け出してから絶好調だ。だからこそ、そこまで気負う事も無いのだろうか？そう思う優子だったが、それに対して小馬鹿にする様に、忍は首を横に振る。

「分かってないなー、優子よ」

「……………じゃあ、なによ？」

勿体ぶる忍に対し、少し不満げな表情を浮かべる吉川。彼は、高坂の申し入れを受け入れた。そうでないなら、他の理由は何なのだろうか？

「だって俺、高坂さんに勝とうなんて思ってもないし」

彼がオーデイションを受けるに至った本当の理由。それは高坂に勝とうとか、ソロパートをもう一度奪い取ろうとか、そんな理由では無い。

「ただ単に、俺が今あのソロパートを吹いたら、どうなるか気になっただけだよ」

純粹に、今の自分がソロパートを吹いたら、どんな音楽が完成するのかが気になっただけ。

そこには競争意識なんて、忍の中には微塵も無かった。

「……………それだけ？」

「うん、それだけ」

優子の問いかけに、忍は即答する。

それは疑いも何も無い、清廉潔白な”自分の音”だけを追求する1人の少年のワガママと言えば良いだろうか。

そしてそのチャンスが、偶然にも転がり込んできただけなのだ。

「……ホント、アンタって音楽だけには……」

優子は困った様に笑ってそう呟く。そもそも忍には、最初から高坂と勝負する気なんてさらさら無い。

「素直過ぎるんだから」

ただ、進化しつつある自分の音に、忍自身が好奇心を抑えられないだけなのだ。

オーディション前日

金曜日。北宇治高校に響く音は変わらない。運動部の声掛け、体育館で聞こえるシューズが擦れる音。雑談の声。

「はい、そこまで」

そして、楽器の音。

滝先生が声を掛けると、一斉に音が止む。

「今日はここまでにしましょう。明日は土曜日なので、机はそのままでもいいです」

「はい!!!」

いつも通りの吹奏楽部の練習。しかし、何処か独特な緊張感も纏っていた。

「明日は午前中、この教室でもう一度トランペットのソロオーディションを行います」

その理由は、忍と高坂の再々オーディション。

競い合う環境があれば、不思議と周りも自然と締まるものだ。

「今回も皆さんで決めていただくので、欠席はしない様お願いします」

「はい!!!」

決め方は、中世古の時と同じく両者が吹いて全員で決定するという方法。しかし、今回は噂も陰口も無い。どちらが吹くのかと言う話題は出るが、前の様に根も歯もない噂が立つことは無かった。

だからこそ、皆明日のオーディションに注目している。実力者と実力者の真っ向勝負。

高坂麗奈と秋川忍。どちらが奏者として上か。

「それでは、失礼します」

そう言って、滝先生はいつも通り教室を出て、すぐさま片付けが始まる。

皆、口には出さないが興味を隠しきれない様子だった。

「どうなるんだろうねー?」

「明日のオーデイション?」

「まさかこの時期にやるとはねー」

そしてそれは、この3人も同じ。帰り道の道中、田中が他人事のようにそう言うのと中世古が返し、その会話に小笠原も加わる。

「ズバリ! 一番2人を見てきた中世古さんはどう見るでしょう?!?」

相変わらず面白いがる様にそう言う田中に対し、困った様に中世古は笑み浮かべる。

「うーん……正直分かんないかな? 私もどっちが吹く事になるのか、分かんない」

「えー? なにそれー? つまんない」

曖昧な回答をする中世古に対し、ぶーぶーと田中は文句を垂れる。しかしその言葉通り、パトリリーダーである中世古もどちらの音の方が良いのか分からなかった。

「だって本当に分かんないんだもん。あすかはどうなの?」
すると、今度は逆に中世古がそう聞く。

「えー? アタシー? アタシは上手い方が吹くと思うけどなー?」
「もー、またそれー?」

前回の時と同じ様な事を言う田中に対し、困った様に中世古は返す。相変わらず本音は晒してくれない様だ。「もう」と、しよがなさそうに中世古はそう言うのと、今度は小笠原の方に視線を向けた。

「晴香はどう?」

「え!?! わ、私!?!」

「そりやそうよ。ペットのパーリーと副部長が言ったんだから、部長のお気持ちも聞かせなさいよー」

驚く小笠原に対し、便乗する様に逃さないと言った風に横から小笠原の両肩を掴む田中

そして「うーん……」とひとしきり考えた後……

「……私は、アツキーの方がいいと思うなー」

呟く様に、そう言い放った。それを聞いて、田中は意外そうな顔を見せる

「へえ、そりやまた、何で?」

「……………何だろうなー、雰囲気っていうのかな?最近のアツキーって、前とはちよつと変わった気がして」

「はあ?なにそれ?」

難しそうにそう言う小笠原に対し、田中は首を傾げる。

「私、滝先生が来るまで教壇に上がって指揮する事があるじゃん?」

「それが?」

「結構、見えるんだよね。あの人が何してるかとか、今日はあの子いつもより下向いてるから調子悪そうだなとか。……………それでかな?最近のアツキーって、前とは違う気がして……………」

「……………はーん、なるほどー」

どうも曖昧な小笠原に対し、納得した様に田中はそう言う。しかし小笠原には違和感を感じるだけで、その正体には気付いてなかった。

「……………考え方を、少し変えたんじゃないかな?」

しかし一人、忍の変化に気付いた者が居る。中世古だ。

「考え方?」

しみじみとそう言う中世古に対し、小笠原は首を傾げる。

「うん。今までの秋川君って、楽しそうに吹いてたでしょ?」

「……………まあ、それがアツキーの代名詞って言うか……………」

小笠原の言う通り、それが忍の音楽だと誰しもが思っている。

しかし中世古はどこか遠くを見つめるように、アンニュイな表情を見せた。

「うん。でも、秋川君自身、無理してる部分もあったと思うんだ」

中世古のその言葉に小笠原は意外そうな、対して田中は納得が行った様な表情を浮かべる。

「多分、秋川君にとつては無意識なんだろうけど、音楽が嫌いにならない為に無理に明るく振る舞ってたんだと思う。……だって、去年上級生達からあんな仕打ちを受けたら、普通は音楽を嫌いになっても不思議じゃないでしょ?」

「……まあ、そうだけど……」

去年のことを思い出したのか、少し暗めな表情で小笠原がそう返す。

忍が去年、上級生達から散々な目に遭わされても明るく立ち振る舞うその姿に、中世古はずっと違和感を覚えていたのだ。

「秋川くんにとつて、音楽は『楽しいものじゃない』って言う気持ちは何処かにあったんだと思う。……憶測だけどね」

「……じゃあ、楽しく吹かなくなったって事?」

訝しむ様に小笠原がそう聞くと、中世古は首を振って否定する。

「ちよつと違うかな?……上手く言えないんだけど……」

「……?」

何か考える様な仕草を見せる中世古に対し、小笠原は首を傾げる。

「まあ、それも明日わかるでしょ?」

沈黙を破るように田中がどこか他人事の様になつて、中世古も「そうだね」と、神妙な面持ちで返した。

「……まあ、私としては問題さえ起こさないとありがたいんだけど」

今までの忍の悪行を思い出しているのか、小笠原は少し顔を引き攣らせてそう言う。

「そんな時はまた大変だねー?部長殿?」

「もー、また他人事なんだから……」

相変わらずヘラヘラしながら言う田中に対し、困り顔を浮かべる小笠原。

「でも」

しかしそれも束の間、何処か遠くを見つめるように、田中は表情を変えろ。

「あんだだけ自由に吹けて、ちよつと羨ましいかなー？」

何かを諦めた様にそう言う田中の表情は、少し寂しげだった。

「……………？、あすか？」

それに目敏く気付き、中世古が心配そうに田中の顔を覗く。

「ううん、いやー、それより明日のオーディション、みんなどつちに手を上げるんだろーねー？」

だがそれも一瞬。誤魔化すように、いつもの何処か掴みどころのないヘラヘラとした笑みを浮かべて、田中はそう言う。

今のは幻だったのだろうか？

いつもとは明らかに違う表情を見せた田中に対し、中世古の少し胸がザワついた。

選択

音楽室には、独特の緊張感が漂っている。

普段と変わらないいつもの音楽室の光景。しかし、今日是否が応でも緊張感が張り詰める。

「では、これから再オーディションを行います」

淡々と、滝先生はそう言う。

今日は、トランペットソロパートの再オーディション。前回のホールでのオーディションに比べれば派手さは無いが、それでも皆内心気が気でない。高坂は忍に勝てるのか？はたまた忍が勝つのか？二人してどのような音を奏でるのか？

「それでは皆さん、後ろを向いてください」

滝先生がそう言うと、少し教室内が騒つく。

「え、演奏を見ないんですか？」

一人の女子生徒が困惑気味にそう尋ねると、滝先生はコクリと頷いた。

「ええ。今回は音だけを聴いて、皆さんに判断して貰います。順番もどちらが先に吹くかは教えません。」音のみ”を聴いて、良いと思った方に手を挙げてください」

滝先生の言葉に、部員達の顔が一層張り詰める。

”自分達で、決めろ”

言葉ではそう言うが、それを実際にしろと言われると案外酷でもある。それも実力が拮抗している者同士。

「さあ、皆さん。後ろを向いて目を瞑って下さい」

滝先生に促され、大半の部員が困惑しながら指示に従う。

そして全員が後ろを向いたのを確認すると、滝先生は今日の主役を呼ぶ。

「それでは前半の方、どうぞ」

その言葉と同時にガラリと扉が開く音が聞こえ、スタスタと歩く音が聞こえる。どちらなのか、足音だけでは分からない。

「では、始めて下さい」

合図を送ると、少し静寂が包む。自分のタイミングを測っているのだろう。そして仄かにブレスの音が聞こえると、トランペット特有の乾いた音が、耳に響いてくる。

強気な音だ。

この三日月の舞のソロパートは、三日月の照りつける草原で月へと旅立つ主人公へとヒロインが優雅に、そして孤高に踊っているシーんと忍は例えた。

ならば、今奏でているこの踊りは、気丈に振る舞う強い女性の舞と言えればいいだろうか。

”私は大丈夫だから、貴方も月で頑張っておいで”

そんな声が聞こえてきそうな踊り。もう離れ離れになるのの一つの涙も見せずに、悲しみを抑えて美しい自分だけを見せる健気な女性の踊り。

その音はとても美しく、とても強かった。

弱気なんて一切見せない、ただただ自分の想い人の為に最高の自分を見せる強い女性。

目を瞑っても、その光景が浮き上がる様な演奏だった。

ソロパートは1分弱。演奏が終わると、何とも言えない余韻が教室を支配する。

「……………ありがとうございました。それでは、後半の方」

滝先生がそう言うと、足音がまた一つ増える。次は後攻。

埃を飛ばしているのか、楽器に息を吹きかける音が聞こえる。

「では、どうぞ」

同じ様に滝先生が合図を送ると、前半と同じくブレスの音が微かに聞こえる。ここまでは前半と同じ。しかし、次に聞こえてきた音は、

前半とは全く違うものだった。

切ない音だ。

それは、前半に奏でたヒロインとは全く違うもの。

離れ離れになる想い人に対し、哀しさを切なさが堪え切れな
い。

あの人はもう行ってしまおう。

どうしようもないものだとか分かっていて、自分はそれを受け入れて
いる筈なのに、どうにも心の整理が付かない。そんな少しの矛盾を含
んだ切なさ。

そんな、哀しさを含んだ涙の踊り。

でも、行かないでは言えない。だから、せめて最後に見てもらおう
この踊りで、あの人の心に残って貰おう。

少しのイジらしさも含んだ、なんともやるせ無く、なんとも心苦し
い踊り。

だがその踊りは、何よりも美しく聴こえた。

「……………」

演奏が終わり、シンと、教室が静まり返る。

来るのはまたしても余韻。明らかに違う二つの音。そしてその二
つの中から、”自分達”で選ばないといけない。

「……ありがとうございました。それでは、目を開けて下さい」

滝先生がそう言うのと、ゆっくりと目を開く。さあ、これはどちらに
手を上げれば良いのか。

「それでは、挙手で決めていきましよう」

初めての

少し、涼しくなってきただろうか？

9月も後半に入り、そう感じるこの頃、蟬の声も少なくなってきた夕暮れの河川敷。まだひぐらしの鳴き声が聞こえるあたり、秋を感じさせる。

そんな心地の良い夕暮れの河川敷に、二人の少女が居た。一人は体育座りで川をボーッと見つめ、一人は仰向けに寝そべてボーッと空を見つめていた。

「……………やられた？」

体育座りをしている少女。黄前が依然川を見ながら、隣で空を見ているに少女に対し問いかける様にそう聞く。

「……………うん。一発KOって感じ」

何処か吹っ切れた様な、声でその少女、高坂麗奈はそう返す。

「……………凄かったね。アツキー先輩」

「……………そうだね。私、こうなるって何処かで分かってたんだと思う」
話題はオーデイション。

結果は、秋川忍の圧勝。

「……………はあ、やっぱり、あの人って『特別』なんだな」
一つため息をついて、羨ましがるように高坂はそう言う。

自分になりたい。自分が辿り着きたいと心底願うその『特別』を今日、高坂は目の当たりにしたのだ。

「……………やっぱり、悔しいの？」

心配そうに黄前がそう言うと、高坂はそれに頷く。悔しさは、もちろんある。でも、それ以上に――

「悔しいけど、清々しい感じ。あんな演奏聴かされちゃったんだもん」

それ以上に、悔しさすらも置き去りにされてしまう程、凄まじい演奏だった。

そういう高坂の表情には、悔しさ以上に憧れも混じっている様に見える。

「……………いいなあ……………」

ポツリと、黄前がそう呟く。

「……………何が？」

その言葉が何を意味してるのか分からず、高坂が聞き返す。

「いや、2人とも、違う世界にいるなあって……………」

「……………はあ？なにそれ？」

「今日、二人の演奏を聴いてて一瞬で分かったんだ。『あ、こっちが麗奈で、こっちがアツキー先輩の音だな』って。……………どっちもらしいって言うか、ちゃんと”自分の音”を持つてるんだなーって」

オーディションでは目を瞑っていてどっちが演奏してるのか分からなかった。その中でも、誰がどの音なのか、あの場にいた部員はほぼ分かっていただろう。

それに、出していた音はそれぞれ違った。

「……………フォローしてくれてんの？」

「いや、そうじゃ無いけど……………」

「違いで言えば、”上手さのベクトル”とでも言えば良いだろうか？」

兎にも角にも、忍の演奏を聴いて、高坂自身が”自分じゃ無くても良いや”と納得しているのは事実だった。

「はあ……………来年も、あの人いるのかあ……………」

だからだろうか、普段なら絶対に聞けないであろうセリフが、高坂の口から漏れた。

「……………決まったね」

「……………決まったわね」

一方、こちらは公園。いつものベンチで忍がそう言うのと、オウム返しのように優子がそう返す。

「こういう時って、喜んだ方が良いのかな？」

オーデイションは大差で忍に決まった訳だが、そもそももう一度ソロパートを吹くとは思っていなかったなので、現実味があまり無いと言うのが忍の本心だった。

「いいでしょ。せっかく吹けるんだから、喜んできなさいよ」

「あんまり現実味が無いのがなあ……………」

微妙な顔でそう言う忍に対し、優子は忍の肩を軽く押す。

「シヤキつとしなさいな。……………それとも、自分の納得行つた演奏じゃなかった訳？」

「それは無い」

優子がそう聞くと、忍は即答する。そしてオーデイションの演奏を思い出す様に、ベンチの背もたれに寄りかかる様、忍は上を向いた。

「最高だった。今までの演奏の中でも一番だと思う」

「……………じゃあ、なんでそんな淡白なのよ？」

「言つたでしょ？現実味が無いって」

益々分らない。

最高の演奏をして、最高の手応えだったのならば、もっと喜んでもいいのではないだろうか？

「じゃあ、どうしたら喜ぶ訳？」

「うーん、そうだねえ……………」

優子の問いかけに腕を組んで、忍は考える。

ふと思いついてみると、オーデイションが終わってから今までなにも特別な事をしてない事に忍は気付いた。

「俺、喉とか乾いたかなーって」

自販機を指差して揶揄う様に忍がそう言うのと、その言葉が意外だったのか、優子は少し嘖き出した。

「何？」褒美寄せって？」

「飲み物じゃ無くても良いぞ？」

「偉そうにしてんじゃないわよ」

軽く笑いながらそう言って、再び優子は忍の肩を小突く。

「そうねえ……」

しかし、ここまで忍が四苦八苦している様を、優子は間近で見ている。た。

ならば、それ相応のご褒美というものを用意してあげなければ。

「……忍、こつち見て？」

少し甘えた、何処か艶っぽい声で、優子は忍の名前を呼ぶ。

「ん、何？」

言われるがままに、忍が優子の方を見た瞬間

唇に、柔らかい感触が伝わった。

正に不意打ち。身構えていなかった忍は、一瞬大きく目を見開く。互いに無言。それは一瞬の出来事で、状況を理解する前に、その時間には終わる。

「……………いきなり過ぎ」

ポツリと一言、真つ赤な顔で、なんとか平静を装いながら忍はそう言う。

「……………不満？」

綺麗な水色の目を揺らして、してやったりと言った表情で、薄く微笑んで優子はそう返す。しかしうっすらと、その白い肌が仄かに紅潮していた。

「ううん、大満足」

それに照れながらも満面の笑みを返して、忍はそう返す。

「自販機の飲み物よりは、良かったでしょ？」

「いきなりはずるいかなーって」

「それじゃつまらないでしょ？アンタのそんな顔なんて、滅多に見られないんだから」

さらに揶揄う様に優子がそう指摘すると、忍の顔が更に赤くなつた。

「……………あー、そんなに俺、酷い顔になってる？」

「私にとっちゃ魅力的よ」

「も、もういい。分かった。分かったから……………」

何度も言う様だが、忍は恋愛において責められるのに滅法弱いのだ。

それを理解してこんな事を言ってくるあたり、確信犯である。

しかし、やられっぱなしでは忍の性に合わない。

「因みに、ファーストキスだからね」

「それは良かった。私もファーストキスよ」

だが優子の見事なカウンターパンチに、再び忍は項垂れる。もう、どうにもこうにも後手に回る。優子って、こんなに強かったらどうか？忍の中ではそんな疑問符ばかり浮かんでいた。

「ねえ、忍？確認」

すると、優子は真つ直ぐ忍を見据えて、真剣な口調でそう聞く。

「な、何?」

次は何をされるのだろうか。身構えて、忍は次の言葉に耳を傾ける。

「私は、アンタにとって特別よね?」

「……そりゃ、もちろん」

優子の問いかけに、本心で忍はそう返す。

それを聞いて、満足そうに優子は微笑んで立ち上がった。

「そう、良かった。聞きたかったのはそれだけ」

夕日に照らされながらそう言う優子の笑顔は、見惚れるのには十分過ぎるものだった。

幕間：文化祭①

文化祭

学校イベントの1つでもあるこの行事。

北宇治高校では9月の後半に実施される。普段生徒しか見かけない校舎内には、私服を着た老若男女の姿が見える。普段とは違う光景。それが一層特別感を醸し出すのだろうか、校内はお祭りの雰囲気染まっていた。

「焼きそばいかがですかー!!」

「200円でーす!!」

そんな中、プラカードを持って中庭を歩く男が2人。

2年3組の出し物、『超??絶!スーパー激焼そば!!』の宣伝をしているのは、忍と滝野だった。

「反応悪いなー」

「やっぱ名前が悪いんじゃないの?」

しかし道行く人は素通りする者ばかりだ。それもその筈、唯の男子高校生がプラカードを掲げて大声を出したところで、大した効果はない。

「やっぱ、花がねーからかな?」

「花って、どうすんのさ?」

こう言うのは女性がやるに越した事は無いのだが、生憎タイミング的に忍と滝野しか宣伝に回れなかった。

結果、ただの制服を着た男子高校生が振り向かれる訳もなく、この惨状に至っているのだ。

「あと40人くらいかね?」

「うっわ、まだまだじゃん」

指を折りながら忍がそう言うのと、滝野がゲンナリとした顔でそう返す。

何故こんな事になってるのか、時間は30分前まで遡る

「ちよつとー!?全つ然お客さん来てないんだけどー!?」

屋台の前。頭に三角頭巾を付け、忙しく焼きそばを作りながらそう言うのは、忍たちと同じく吹奏楽部のパーカス担当である大野美代子だった。

「言つたつてねえ……」

「まあ、こんなもんだろ」

しかしこの2人にとっては他人事の様で、大野の説教は全て右から左に流れている様子だ。不甲斐なさ過ぎる両者に対し、大野は額に青筋を浮かべる。

「お客さん集めるのがアツキーたちの仕事でしょー!?ただでさえかなり安く売ってんのに、売れなかつたら元も子もないじゃない!?」

「言つたつてねえ……」

「まあ、こんなもんだろ」

しかし大野の訴えは2人に届かない。考えることを辞めたかの様に、同じ事を繰り返す。そしてそれが更に大野の神経を逆撫でしてしまった。

「やる気出せつて言つてんの!!もう!!」

「言つたつてねえ……」

「まあ、こんなもんだろ」

どれだけ言つてもやる気を出さない2人。コピペもここまで来るとシニールである。だがついに堪忍袋の尾が切れたのか、大野は「……分かった」と静かに呟き、焼きそばを作っていたヘラを2人に向けてる。

「じゃあこうしよう。ノルマは50人!!」

「はあ?」

突然具体的な数字を出す大野に対し、2人とも素っ頓狂な表情を浮かべる。

「50人集められたら、後は自由にしていよいよ」

「お、まじ?」

「よっしや「ただし!!」」

しかしそれで終わりだとは言わせんとばかりに、大野は言葉を被せる。

「集められるまでは宣伝して貰うからね!!」

「……………え?」

そして現在。あれから30分経って、成果は5人。

このままだと午前中どころか、午後も丸々潰れる勢이었다。

「どうするよアツキー」

「うーん、何処かに良い花は転がっていないものか…………」

頭を捻り、忍は考える。午後には優子と一緒に回る約束しているのだが…………

「何やってんの?アンタたち?」

「あ、花いた」

タイミング良く、吉川優子と言う花が現れた。

「……………私は何をさせられてんの?」

「良いから良いから、そのまま…………」

忍に流されるまま、優子は一番人通りが多いであろう中庭のど真ん中にあるベンチに座らされる。

確かに目立つが、忍が何をしようとしてるのか、優子には見当も付かない。

「ウチの焼きそばタダで食べさせてあげるから、ちょっと待ってて」

「はあ、別にそれは良いんだけど…………」

焼きそばを2つ用意しながら何処か楽しそうにそう言う忍に対し、困惑気味に優子はそう返す。

また妙な事をやり始めた。

優子がそう思ったのも束の間、もう1人の影が忍たちに近づいて行った。

「あー、いたいた。やっと見つけたよアツキー。何？焼きそばタダでくれるって？」

へらりと、飄々とした笑顔を浮かべながらその少女、中川夏紀は忍たちに近づいて来る。

「げっ……」

中川の姿を見て、優子の表情が一瞬にして険しいものになった。

「おーっす、なつきち。取り敢えずここ座って座って」

優子の隣をポンポンと叩き、忍は中川に座る様促す。

「何？早食い対決でもしろっての？」

不服そうな表情を見せる優子に対し、中川は随分と楽しそうだ。用意された焼きそば2つと水を見て、そんな事を聞く。

「正解。まあでも俺とタツキーでやっても盛り上がるんないからねえ。そこでお二人の力をお借りしたい訳ですよ」

「おー、良いねー」

「……なんでアンタは乗り気なのよ……」

いきなり連れてこられたにも関わらず乗り気な中川に対し、少し引き気味に優子はそう呟く。

「もちろんタダとは言わないよ。勝った方にはご褒美用意してあげるから」

「へえー。何くれるのさ？」

不敵に笑ってそう言う忍に対し、同じく笑って中川もそう返す。そして少し考える様に忍は顎に手を当てる。

「そうだね……じゃあなつきちが勝ったら、これからのお祭りにかかるお金、全部こっちが持つよ」

「……ははーん、それは魅力的」

「タツキーが」

「なんで俺!？」

強引に巻き込まれた滝野から、抗議の声が上がった。

「まあまあ、代わりに優子が勝ったら同じ条件で俺が優子に奢るから」

そんな滝野を宥めるように忍は説明を付け加える。

つまりは早食い対決に中川が勝てば、滝野が中川に対して食費を持つ。優子が勝てば忍が優子に対して食費を持つと言う事だ。

「なるほど……どっちかが勝てば、どのみち今日はタダ飯が食い放題ってわけね？」

「そう言う事」

「……良いわよ。その話、乗った」

挑戦的な笑みを浮かべて優子がそう言うのと、中川も不敵な笑みを浮かべる。

「はっ、上等」

どうやら彼女もやる気満々の様だ。

「……あの、俺の意見は？」

ただ1人、滝野だけが納得の行っていない表情を浮かべていた。

『ささーっ!!寄ってらっしやい見てらっしやい!!ここにおりますは世紀の早食い大食い女子2人!!』

拡声器を使い、まるで落語家の様な口調で忍は中庭に居る人の注目を集めさせる。

『挑戦しますは2年3組の”超??絶!スーパ―激焼そば!!”。太めの麺に濃いめのソースがよく絡み、200円とは思えない満足感を味わえる至高の逸品でございます!!』

他とは全く違う宣伝をし始めたのが効果的だったのか、「なにになに?」やら「何か始まんのか?」など、周りを囲む様に人も増えてきた。

ちやつかり焼きそばの宣伝もしている。

『向かって右にありますは2年5組、大将、中川夏紀!!目が追いつかないほどの速さで胃袋に掻き込むその姿から、”スピードクイーン”の異名を持つ彼女!!今回もその圧倒的速さで力を見せつけるのか!? 皆さん、盛大な拍手を!!』

見事なまでのデタラメな忍の語りに、周りから拍手が沸き起こる。当の中川は緊張感のかけらも無くヘラリと笑って観客に対して手を振っていた。

『続きましてその逆!!挑戦者!2年6組、吉川優子!!彼女は!

……えーつと……結構食べれます!!以上!!』

「何で私のはそんなテキトーなのよ!!」

忍の雑過ぎる説明にすぐさま優子がツッコむと、今度は観客から笑いが起きた。

掴みは完璧。観客の反応に、しめたと言わんばかりに忍はほくそ笑む。

『さあ、この世紀の一戦!!勝つのは果たしてどちらか!?みなさん注目です!!』

ここまで来ると、周りの観客はかなり多くなっていた。50人は優に超えている。

『さあ始めましょう!!位置についてー!!』

忍が掛け声をかけると、2人とも身構える。今日1日のタダ飯が掛かっているのだ。2人の表情は真剣そのもの。

『GO!!』

合図と同時に、2人して一斉に焼きそばを頬張る。食べる速度は同じ。

『さあ、始まりました第一回早食い女王決定戦。まずは2人とも焦ってる様子ではありません。解説の滝野さん。これは?』

『ええ、互いに様子を見てるんでしょう。どちらが先に仕掛けるのか見ものですね』

そして男子2人は実況の様な茶番を繰り広げていた。そもそも早食いに戦略も何も無いのだが。

『おつとここで中川選手、水を飲んだ!!仕掛けると言う合図なのか!?それとも挑戦者に対して挑発してるのか!?』

『早いですね。吉川選手、焦ってます』

『さあ、吉川選手、必死に追う!!今のところ中川選手が一步リードと言うところか!?』

ただの早食い競争なのだが、妙に上手い忍の実況によって会場は徐々に盛り上がってきた。

『中川選手は水と焼きそばを交互に食べながらスピードを落とすし、せん!!対して吉川選手!!これはちよつと厳しいかー!?』

『差が付いて来ましたね』

ペースで言えばこのまま中川の勝利は確実。しかしそれも束の間、中川の手が突如としてピタリと止まった。

『おつと中川選手!!いきなりのペースダウン!!これは一体どうしたのかー!?』

『あー、水の配分を考えてませんでしたねー』

『なんとなんと!!まだ焼きそばが残っていると言うのに水はもう切らしてしまったあー!まだ焼きそばが残っていると言うのにつ!!』

そしてそのタイミングを見計らったかの様に、優子が追い上げを始める。

『さあそして!これを待っていましたと言わんばかりに吉川選手が追い上げる!!』

『良いですよー!吉川選手、まだ水が残っています!私の財布事情的にも頑張つて欲しいです!』

『さあ吉川選手必死に追い上げる!!中川選手も必死に逃げる!!残りほんの僅か!!どっちだ!?中川か!?吉川か!?』

『いけー!!』『がんばれー!!』

ヒートアップして来た鬨に、遂に周りの観客からも声援が飛ぶ。ただの早食い競争なのに。

『中川選手ペースが上がらない!!対して吉川選手は水を上手く使っている!!さあどっちだ!!栄光のタダ飯を掴むのはどっちなのか!?』

そして両者残り一口。これを飲み込めば勝者が決まる。

『勝つのはどっちだー!?!?』

そして先に立ち上がったのは、

『中川だー!!中川夏紀っ!!やはり女王!!クイーンの称号は伊達では
ありませんっ!!』

立ち上がり、ガッツポーズを決める中川の姿がそこにはあった。

『まさに死闘!!まさに名勝負!!ああ、吉川選手!ゆつくりと項垂れ
ています!!』

「いいぞー!!」「ナイスファイトー!!」

そして会場のボルテージは最高潮にまで達していた。

何度も言うがこれはただの早食い競争である。

『今後もまた、この2人の闘いが続いて行く。そんな事を感じさせ
る名勝負でしたねー、滝野さん』

『ええ、確かに見応えはありましたが、今後の私の財布が心配です』
『ありがとうございます。因みに今回の早食いで決戦に使用した”超
??絶!スーパー激焼そば!!”は中庭、2年3組の屋台で出店しておりま
す。太めの麺に濃いめのソースがよく絡み、200円とは思えない満
足感を味わえる至高の逸品でございます。売り切れ次第の終了とな
りますので、お買い求めの際はお早めにお願ひします!』

最後に忍が宣伝をすると、観客の足は遠のく。もともと、その向か
う先の殆どが2年3組の屋台なのだが。

一仕事を終えると、忍は激闘を終えた2人の元へと近づいて行っ
た。

「お疲れー。いやー、良かったよー」

「……良かったよじゃ無いわよ!何よあの実況!すっごい恥ずかし
かったんだから!」

満足そうにそう言う忍に対し、優子はかなりおかんむりの様だ。

「まあまあ、これも経験って事で。一応これでノルマはクリアした
し」

「ノルマあ?」

「大野つちから50人集めて来いって言われてたの。それ終わったら宣伝抜けて良いって。多分今のでその倍くらいは屋台に並んでる筈だから」

「……………なるほど。私たちはそれに良い様に利用されたって事ね」
不貞腐れた様にそう言う優子に対し、困った様に忍は笑う。

「まー良いじゃん？お詫びに何か奢ってあげるから」

「……………全部奢んなさいよ」

尚も機嫌を直さない優子は、むすつとした顔を忍に向けてそう言う。

「もー、分かったよー。もう俺、当番終わりだから、一緒に回るべや」
「うん」

宥める様に忍がそう言うと、優子はようやくよくベンチから立ち上がった。

「じゃあ、俺たち行くわ。なつきちも協力してくれてありがとうねー」
そして、忍は中川の方に顔を向けてお礼を言う。

「ううん、いいよー。アタシも楽しかったし」

対して中川はいつも通りだ。ヘラリと笑みを浮かべてそう言う。

「じゃ、後はタツキーに任せるよー。じゃあにー」

最後にそれだけ言い残すと、忍と優子はその場から離れて行く。それを見送ると、中川はニンマリとした笑顔を滝野に向ける。

「じゃあ、滝野。今日一日よろしく」

「……………はい……………」

財布に何円入ってただろうか？そんな事を思いながら、なんとも言えない顔で返事を返す滝野であった。

幕間：文化祭②

制服以外の人間が居る校舎内と言うのは、なんとも違和感を覚える。まあそれが文化祭の特別感を出しているのにもひと役買っているのだが。

校舎内には各クラスの出しものがズラリと並んでおり、廊下は装飾やら呼び込みやらでいつもの何倍もの賑わいを見せていた。

「ちよ、ちよつと優子……！まだいくなって……！！」

「はっ、なにビビってんのよう……さっきの勢いはどうしたの？」

して、こちらは忍と優子。薄暗い部屋の中、2人きりの空間。弱気な忍に対し、挑発するように優子がそう言う。

賑わっている外とは対照的だ。

「こ、この先は俺も分かんないから……」

「そんなん私だって同じよ」

尚も弱気な忍に対し、痺れを切らした優子が自分から動こうとする。

「は、離れちやダメだつて！」

「はいはい、ここに居ますから。どこにも行きませんよー」

段々と理性が乱れていく忍に対し、余裕綽々と言った感じで優子はそう返す。

2人の体は密着している。もつとも、忍が抱きついていると言った方が正しいのだが。

「いい？お、俺の合図で行くから」

「はいはい、お好きなタイミングでどうぞ？」

そして、忍はゆっくりと

「待ってって……！言ったのに……！！」

「だあああああああああああ!!!」

一步踏み出すと、白装束に扮した高坂が現れ、凄まじい声量の叫び声を上げる忍。

そう。ここは1年6組の出しもの。オバケ屋敷だ。

「あーっはははははは!!!」

「笑ってんじゃねーぞ。こっちは大真面目だ」

外に出ても、優子の笑いは止まらない。オバケ屋敷とは言っても所詮文化祭なので子供騙しもいいところなのだが、忍には効果抜群だったようだ。

「だって……っ!!……ぷふっ!!…高坂につ、『だああああ』って……!」

優子はなんとか笑うのを堪えているようだが、全く形になっていない。

それがますますバカにされてると感じたのか、忍の顔が益々不機嫌になって行く。

「……だから散々止めようって言ったのに……」

忍としては絶対に入りたくなかったのでオバケ屋敷の入り口で散々ゴネていたのだが、そんな反応をされて優子が黙っているはずもない。

彼女自身はオバケやら幽霊やらに耐性があるので、嬉々として無理矢理忍をオバケ屋敷に押し込んだのだ。

それがこの結果である。

「あはははははっ……もー、なにそんな事で拗ねてんのよ?……でも、意外だったわねえ。アンタ、ああいうのダメなのね」

「……人には苦手なもの一つや二つありますうー!」

興味津々にそう聞く優子に対し、尚も拗ねた口調で忍は返す。中々機嫌を直さない忍に対して、困ったように優子は笑った。

「あ、アツキーせんぱーい！優子せんぱーい！」

すると、廊下の奥から、手を振ってやってくる2人の姿が確認出来た。吉沢と加部だ。

「おーおー、お2人さんは随分と楽しんでますなー」

近づきながら揶揄うように加部がそう付け加える。

すると、しめたと言わんばかりに優子は意地の悪い笑みを浮かべた。

「そうね。ちょうど忍の弱点も発見出来たし？」

「弱点？」

勿体ぶる優子に対し、加部と吉沢は首を傾げる。

「秋川忍は怖いものが相当お嫌いなご様子で」

ついさつき出て来たオバケ屋敷の出口を指差しながら、優子はそう言う。

「えー!?アツキー、オバケとかダメなのー!？」

加部は意外と言った表情で、しかし面白がる様にそう言う。

「……別に?ちよつとだけだし?こんなん子供騙しだし?」

「その子供騙しに何回も悲鳴上げてたじゃないの」

「うるせー!バーカ!!」

遂には言い詰められて、子供の様な文句しか返さなくなった。

そんな2人のやり取りを見て加部が吹き出す。

「あははっ、相変わらずだねー。まあ、いいや。お2人さんはもう5

組の出し物には行つたー?」

「いや、まだよ?」

加部の問いかけに、優子が首を振る。

「メイド喫茶だったよ。衣装可愛いかったなー。みぞれとかも居るから行ってあげれば?」

「そうね……ありがと。行ってみるわ。じゃあ、そっちも楽しんでねー。……ほら、いつまでも拗ねてないでアンタも行くわよ」

それだけ言い残すと、優子は忍の手を握って歩き出す。

それを見送ると、加部は感心する様に微笑んだ。

「……あの2人、また距離近くなったかな？ねー、秋子ちゃ……ってなんかニヤついてない？」

「……これが、ギャップ萌えってやつですか……」

加部の隣では、恍惚な笑みを浮かべ、満足げにそう呟く生物の姿が確認された。

「……あのー、中川さん？ちよつとは加減してくれてもいいんじゃないですかねー？」

「なに言ってるの。まだまだ余裕あるでしょ？男気見せてよ！男気！」

「男気だけじゃ現金は錬成出来んぜよ……」

一方、こちらは中川と滝野。

お財布の方はコツテリと搾り取られているらしく、このままでは次のお小遣いまで学校の水道水で過ごさなければならなくなってしまうそうだ。

「あははっ、冗談冗談。もうアタシもお腹いっぱいだしねー」

流石に中川も滝野の財布を空にするほど鬼では無い。その言葉に滝野はほつと一息ついた。

「お礼って訳じゃ無いけど、アタシのクラスの出し物のところに行くー？」

すると、思い出したかのように中川がそんな提案をしてくる。

「中川って、5組だったよな？出し物なんだっけ？」

「メイド喫茶」

「メイド喫茶……」

メイド姿の女の子達を想像しているのか、少々滝野の鼻の下が伸び

た。

「ちよつと滝野ー？顔に出てんよー？」

「おつと済まない。まだ早かったな」

だらしない顔から一転、キメ顔で滝野はそう言うのと、中川は吹き出す。

「あははっ、なんだ、滝野って意外と面白いんだねー」

「……意外ってなんじゃい」

中川の微妙な褒め言葉に、同じく微妙な表情で滝野はそう返した。

「んー、1年の頃とかはさー、なんて言うか影が薄い？つてゆーか？そんな感じだったけどねー」

「……まあ、それは否定しない」

心当たりがあるのか、苦笑いで滝野はそう返す。そして、思い出す様に言葉を続けた。

「同じパート、同じクラスにキャラが濃すぎるのがあるからな。それに引つ張られたんじゃね？」

「あははっ、そりや違くないねー」

いつもの様にヘラリと笑って中川は適当にそう言う。

忍が与える周りへの影響力と言うのは、どうやらこう言うところにも出ているらしい。

忍の話題が出て来たからか、中川の中でふとある事が気になった。

「そーいやあの2人、今頃何やってんのかなー？」

「フツーに周ってんだろ。吉川はともかくアツキーはこう言うの楽しむタイプだし」

「そーだねー。アツキーに振り回されてるアイツの絵が思い浮かびますわー」

面白がる様にケラケラと笑い、中川はそう言う。

それに対し、困った様に滝野は笑った。

「あれでまだ付き合っていないって言うんだもんなあ……」

「そーそー。早くくっつけてーの」

滝野の眩ぎに対し、悪態を吐く様に中川がそう返す。

この2人は、優子と忍のことをずっと見ている。中川は優子を。滝

野は忍を。

「でもあの2人がくっ付いたら、アタシの楽しみが減っちゃうな？」

「確かに、それはあるかもな」

だからこそ、通じ合うものがあるのだろう。

少し無言の後、何気なく口を開いたのは、中川の方だった。

「……滝野ってさ、彼女いる？」

「は？いきなり何？」

突拍子もない中川の言葉に目を丸くする滝野。少し動揺している様に見える。

「気になったの。で？いるの？」

「……いねーけど……」

「そっか、居ないか」

「……………」

沈黙。まさかこんな空気になると思わなかったのか、中川の頬が少し赤くなっていた。

「じよ、冗談冗談!!なに变な雰囲気になってんの!」

「そ、そういう風にしたのはそっちじゃん!」

「うるさいなあー!滝野だって、ドキツとしたんじゃないのー?」

「……………」

「黙らないでよー!!!」

こっちでは、新たな恋が始まろうとしていた。

「……ウエイトレスさん、注文を……」

「……はい」

「……えっと……じゃあ、このパンケーキとクリームソーダを……」

「………はい。………優子は？」

「え？じゃあ、私は……ショートケーキとコーヒーで」

「………分かった……」

2人から注文を受けると、鎧塚は足早に厨房へと向かって行く。

「………案外、ああいう接客も新しいかもしれない」

「んな訳ないでしょ」

真剣な顔つきでそう言う忍に対し、すぐさま優子からツツコミが入る。

2年5組の出し物。『キyun☆キyun メイド喫茶レジエンス』では、恐らく世界一接客に向かないであろう人間が注文を取っていた。

「おい、あの子の接客良かったよな？」

「ああ、俺あんな態度で注文取られたことねーよ。………なんか、すげー凄かった」

………もつとも、その新しすぎる接客スタイルは他の客に意外にも好評らしい。

主に男子が。

「………なんだろうーね。壊滅的な接客なんだけど、不思議と嫌じゃないって言うか……」

「人柄よ。みぞれ、いい子だし」

「なるほど。優子があれやったら一瞬で客が離れるな」

「くたばれ」

「いだっ!!」

いつも通り口の減らない忍に対し、すぐさまゲンコツが飛んだ。

「あはは、あれでも随分喋れる様になった方だよー？」

すると、今度は傘木が2人の元へとやって来た。

「え？あれで？」

他の客の対応を見ても『はい』と『分かりました』言っていないのだが。

「うん、最初の頃なんかお客さんをジッと見つめたまま棒立ちしてたんだから」

「それは……客からしたら溜まったもんじゃないわね……」

苦笑いになって優子がそう返す。

「だけど緊張してる感じじゃないんだよねー。凶太いのか繊細なのかどっち？って感じ」

「まあ、みぞれらしいって言うか……」

鎧塚としては接客なんてやった事もないし、受けた事もほとんどないので、何をすればいいのか分からないと言うのが実情だった。

「………もったいない」

すると、ポツリと忍がそう呟く。

「………忍？」

また変な事考え出したと、面倒臭そうな顔で優子が反応する。

そして忍はゆっくりと立ち、鎧塚の方へと近づいていった。

「よろみー、もったいないよ……!!」

鎧塚の前に立ち、熱のこもった声でそう言う忍。対する鎧塚は首をコテンと傾げるのみだった。

「俺が接客のイロハと言うものを教えてしんぜよう……」

「………よろしくお願いします」

無表情だが、なんだかんだ言ってる鎧塚もノリノリのようだ。ペコリと、忍に対して一礼する。

「まずは入店！お客様が入った時!!よろみーはなんて言う？」

「………いらっしやいませ？」

「そう!!でもそれだけじゃ足りない……まずはポーズから!!こう!!!」

そう言つて、忍は極限まで内股をキメ、上目遣いのポーズを決める。
「うわぁ……………」

その光景を見た優子が引いた声を出す。隣では傘木がゲラゲラと笑っていた。

「……………」

真似する様に鎧塚が同じポーズを取る。

「そう!!そしてこう言うのだ……………」
『ご主人様あ!お帰りなさいませえ……………!』

「「うわぁ……………」」

そして今度はその場にいる男性客から引いた声が上がった。優子に至つては羞恥心が限界に達したのか両手で顔を覆っており、傘木に至つては息が出来なくらい笑っている。

「「しゅじんさま……………おかえりなさいませ……………」」

こんなクソほど恥ずかしい挨拶なのに、鎧塚はなんとも無い様に忍の真似をする。

「感情がこもつてない!!もつと!!」
『ご主人様あ!お帰りなさいませえ……………!』

「「おえっ」」

「あーっはっはっは!!!」

「……………最っ悪……………」

そしてこのカオスな光景は、中川たちが来るまで続くのであった。

問題

「では皆さん、合奏は今日を含めて、予定表の◎の日に重点的に行います。よろしいですね？」

「「はー」」

「では、今日はこれで終わります」

「「ありがとうございます！」」

滝先生がそう締めると、音楽室の片付けが始まる。

新しく配られた予定表。そこには、全国大会に向けた練習とは別の、いつもとは違う項目が追加されていた。

9月の最終土曜日。そこには、『駅ビルコンサート』と言う文字が記されている。

すると、付け加える様に部長の小笠原が口を開いた。

「当日は京都駅の吹き抜けになつている広場で演奏します。あと、まだ秘密ですが、実は駅ビルコンサートには、聖良女子と明静工科も出場します」

その二つの高校の名前が出ると、少し教室内が響めいた。

「うっわ、聖良」

「嘘ー？」

明静工科は言わずもなだが、聖良女子も関西の強豪だ。その光景を見て、滝先生はポンと一つ手を叩く。

「良い演奏をする高校が2校も来るのです。全国大会も大事ですが、こう言う集まって演奏をする機会も大切です。ただ演奏するのはなく、他の高校がどう言う音を奏でているのか。勉強になるでしょう。そう言う意味でも、このイベントは重要だと、私は思いますよ」

滝先生がそう言うと、部員達は納得した様に頷く。

他の高校はどの様にして今の音を作り上げたのか？それは良い刺激になると滝先生は考えているのだ。

「……なるほど。駅ビルかあ……」

それに対し、忍は楽しそうにそう呟く。

駅ビル。しかも関西の大動脈である京都駅で演奏をすると言う事は、かなりの人も来るはずだ。

『音楽は、聴き手が居てこそ』と言う信念を持つ忍にとって、このイベントに心が躍らないはずも無かった。

「言うなれば、『ウエルカム・トウ・ザ・京都』だね」

そしてトランペットのパート練習。楽譜を確認しながら楽しそうに忍はそう言う。

「まあ確かに、京都は観光客多いからなあ。選曲も妥当って感じだしな」

それに対し、忍の意見に同調する様に滝野がそう返す。

「そー！そー！学園祭で吹いた『宝島』でも良いけど、やっぱ滝先生のセンスは光っておりますなー」

満足そうにウンウンと頷いて忍はそう言う。この浮かれ様を見る限り、忍としては今回の駅ビルコンサートで奏でる曲を随分と”気に入っている”様だ。

「何呑気なこと言ってるのよ？学園祭とは違う曲をやるって事は、その分練習しなきゃでしょーが」

そんな上機嫌な忍にすぐさま優子のツツコミが入った。

「まーそーだけど。でも、この曲だったら観光客は絶対ウチの演奏聞くでしょー？」

「そりゃそうだけど……」

「じゃあ、良い演奏をしないとね」

尚も上機嫌な忍に対し、今度は中世古がにこやかにそう言うて来た。

「それに全国大会もあるんだから、そっちにも集中しないとダメだよー。」

「そりや分かってますってー」

続けての論す様な中世古の言葉に、上機嫌で忍は返す。

「それに、今回は秘策があるんですよ」

すると何か企んでいるのか、ニヤリと笑顔を見せる忍。

「秘策？」

メンバーは忍が何をやろうとしてるのか分からず、一様に首を傾げる。

そして忍はその目線のある1人の少女の方へと移した。

「今回の駅ビルコンサートの1st、加部っちにやってもらおうと思っ」

忍がそう言うと、一瞬教室内が静かになる。

「……え？、それって……？」

その言葉に反応したのは、当事者の加部だった。案の定顔が引き攣り、声も震えている。

「そのまんま。加部っちが主旋律のリードをするんだよん」

「えー！?!?!?!」

そして忍が言った意味をようやく飲み込めたのか、加部は心底驚いた様な叫び声を上げた。

「えつと……この部分って……」

「ああ、そこは連符だね。盛り上がる様に音階を上げて行くから、最初はピアノで段々と強くしていった方がいいかな？」

「か、簡単に言わないでよー……」

次の日、同じくパート練習では、楽譜と睨めっこをしている加部の

姿があつた。その横では忍がアドバイスを送っている。

加部を1stに据えると言う忍の計画は、あれよあれよと言う間に進んで行った。当事者の加部は『私なんかー』と全力で断っていたが、それが逆に忍に火をつける事になってしまったのか、勢いに押されて流される様に、その話は決まってしまった。

「そうだね、ここは決めて音を出すって意識じゃなくて、流れで出す感じで良いんじゃないかな？ほら、友恵ちゃんも音出しの時にやるでしょ？音階を順番に奏でるやつ」

そして忍に続く様にアドバイスをしたのは、中世古だ。

実は加部が1stに決まったのは、パートリーダーである彼女が忍の案に賛成した事も大きかった。

北宇治吹奏楽部随一の人格者である人間に推されたとなれば、加部も断る訳にはいかない。

結果加部を1stに推したこの2人が、主に面倒を見ていると言う構図だ。

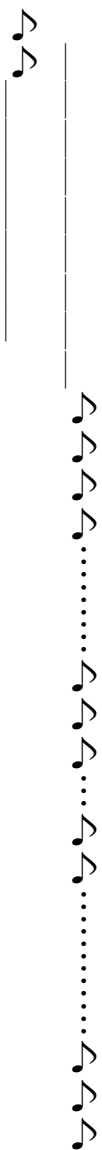
「うう……分かりました……」

しかし、加部はこの状況にかなり萎縮している様だ。

無理もない。彼女はこのパートのエースでも、ましてやコンクールメンバーでも無い。

そんな彼女が抱く感情は、『やっぱり私なんか』と言うネガティブなものだ。

そんな気持ちのまま演奏したとて、良い音が出るはずもない。



忍と中世古にアドバイスを貰った部分を吹こうとするも、中々繋がらない。

技術不足もあるが、それ以上に何か遠慮をしている様な、自信が全く感じられない演奏だった。

「……………やっぱり私……」

マウスピースから口を離し、シユンと項垂れながらポツリとそんな言葉を溢す加部。

それを見て、”やっぱりな”と言う風に忍は真剣な表情になった。「分かった。取り敢えず、今日はこの辺にしとこっか？」

優しくそう言ったのは、中世古だった。それに俯きながらもコクリと頷くと、加部はゆっくりと席を立つ。

「……わ、私、合奏練習の準備があるんで……ちよつと行つてきますね！」

そしてそれだけ言い残すと、逃げる様に加部はパート練習の教室から出て行く。

その光景を見て、忍は困った様に軽くため息を吐いた。

「……分らないわ」

そして今までの状況を見ていた優子が、ようやく口を開く。

「何が？」

対して忍はゆっくりと振り返り、優子に顔を向ける。

「友恵を1stにした事よ。今までずっとサポート役だったのに、いきなりこんな大役、荷が重すぎるでしょ？」

確かに優子の言う事は一理も百理もある。そもそもこう言う考えに至るのが普通だ。

今忍と中世古がやっている事は、加部に無駄にプレッシャーを与えている事に他ならない。

すると、忍は少し表情を険しくした。

「確かに優子の言う通りだね。……でも、あのままじゃ俺はダメだと思っただよね」

「……何がよ？」

真剣な表情でそう言う忍に対し、優子も表情が強張る。

「優子は、最近の加部っち見てどう思う？」

すると、今度は逆に忍の方から質問が飛んで来た。優子は少し面を食らうが、一瞬考える仕草を見せて口を開く。

「……頑張ってると思うわよ。コンクールメンバーじゃ無いけど、その分サポート役では頑張ってる。俺は、それがダメだと思っただよね」

すると、強い口調で忍は優子の言葉を遮る。流石の優子も息を呑んでしまった。

「いや、サポートでフォローしてくれるのは嬉しいんだけどね」

「……………何が言いたいなのよ?」

吉川は一層表情を険しくする。どうしてわざわざ忍が加部を1stで演奏させたがるのか。それは、次に出た彼の言葉で知ることとなる。

「最近の加部っちって、サポート役で満足してると思わない?」

凶星を突かれたような、そんな表情を見せる優子。

人間というのは、慣れる生き物だ。それは誰に対しても同じ。現に去年は緩み切っていた部活も、滝先生が来て練習が厳しくなった。最初こそは文句も出たが、今では文句を言う人間なんて1人として居ない。

それは、この環境に徐々に部員達が慣れていったからだ。

その環境に長く身を置けば、人間は適応する。それは部活動という小さなコミュニティでも同じ。

それを踏まえて、今の加部はどうだろうか?

オーディションがあつたのは、4ヶ月も前の話。それまでは、加部もコンクールメンバーに入ろうと必死に練習を積み重ねていた。しかし結果は落選。そこから加部はチームもなかと言うサポート役に回る。

何度も言うが人と言うのは、慣れる生き物だ。サポート役として4ヶ月。その間、彼女の中でどのような心境の変化があつたのだろうか?

「……はあ……そのまま、良かったのになあ……」

誰もいない廊下の隅。現実逃避をするように、加部がポツリと呟く。

そう。いつしか彼女は、『サポート役のままでもいいや』と思うようになってしまったのだ。

「……………」

言葉を失う優子。確かに違和感があった。最近の加部は、何をすることも遠慮がちだった。合奏練習やパート練習でも率先して準備などをしてくれるのだが、それに反比例する様にトランペットを吹いている姿はあまり見なくなった。

今まで抱いていたその違和感は、忍の言葉でピツタリとパズルのピースが嵌るように、優子の心の中にスツと入った。

「まあ、それが理由かな？……別に技術が云々って言う話じゃなくて、このままじゃ加部ちゃんがペットを吹きたがらなくなるんじゃないかなーって思ったんだよね」

少し困った様な表情を浮かべて、忍はそう言い放つ。そして、この違和感に気付いたのは、ここのパートリーダーも同じだった。

「そうだね。私も、秋川くんの言う通りだと思う。……確かにコンクールは実力勝負だけど、今回はイベントでしょ？ちよつと厳しいかなとは思うけど、友恵ちゃんにはここで満足して欲しくは無いから……」

「香織先輩……………」

中世古にもそう言われて、優子は少し考える。

確かに、サポートで満足するのであれば、それはそれで良いのだろう。しかし、楽器を吹くと言うこの部活において、本当に加部はそれで満足するのだろうか？

「……分かりました。そう言うことなら、私も協力します」

同じパート。同じ学年。同じ性別。私にしかできない事もあるはずだと、優子は中世古と忍を見据える。

確かにただのお節介かも知れないが、2人の言葉を聞いて優子もこのままではダメだと言うのが分かってきたのだろう。

「まあ、そこまで大きな問題じゃないとは思っただけどねー」
すると、いつも通りの飄々とした笑みを浮かべて、忍はそう言う。確かに1部員の問題であるし、言い方はキツいが加部はコンクールメンバーでも無い。しかし、ただ放っておけないと言う理由で、忍は加部を1stに添えたのだ。そこまで大きい問題とはならないだろう。

しかし、問題というのは、時に連鎖して起こるものである。

ガラツ!!と、教室の扉が勢い良く開かれる。そこには、ここまで走って来たのであろう、吉沢の姿があった。急いで来たのか、かなり息が切れている。

「ど、どうしたの？秋子ちゃん？」

何やら切羽詰まった様子の吉沢に対し、心配そうに中世古がそう聞く。

「はあ、はあ……香織先輩っ……!」

そして、吉沢は不安に染まったその表情を、中世古へと向ける。

「あすか先輩が……!!」

その問題は、北宇治を揺るがすのには充分過ぎるものだった。

愛情

田中あすかが、部活を辞めるかも知れない。

事件は、職員室で起こった。

田中の母親が、部活を辞めさせる様、滝先生に詰め寄ったのだ。

部活動というものは、本人の意思でやるものだ。しかし学生の本分は勉強。そんな常套句は誰でも知っているだろう。

でもそれだけでは、勉強だけでは人として成長し得ない。だからこそ部活動というものがある。一集団の中で、他人の考えに触れ、自分の考えを出し、そこから社会的な部分を構築して行く。

吹奏楽だけでは無い。野球、サッカー、美術部やその他。皆、そこに自分の意志で居るからこそ、部活動というものは成立する。

だとすると部活動を辞めるかは、本人の意志で決めるものなのだ。しかし、今回の田中の件は少々違う。

そこに入る、『親』という存在。

「あすか、ここで辞めると言いなさい」

普通なら、すぐさま『嫌だ』と言うだろう。しかし、田中は沈黙する。何処に彼女の意志があるのか、分からない。

「…………お母さん、私、部活辞めたく」

パンつと、職員室に引つ叩いた音が鳴り響く。

「……………なんで……………」

躑。我が子を愛するからこそ、手も出さずそれを正そうとする。しかし、愛情と言うのは、時に行き過ぎると大きく歪む。

「なんで私の言う事が聞けないの!!!」

厄介なのは、その歪みに本人が気付いていない事だ。

噂は一瞬にして広まった。

あれだけの騒ぎになれば、それも致し方ないだろう。しかしそれよりも、北宇治吹奏楽部の『核』とも言える存在が抜けるかも知れないと言う事実の方が、部員達の不安を煽っていた。

「……ど、どうかな？」

「うーん、ちよつとまだぎこちないかなー？形にはなつて来てるけど」

しかし、その中でも部活動は淡々と進む。昨日と同じく、忍は加部の演奏を指導していた。相変わらず自信無さげな演奏だ。

まずはこの内気な演奏をどうにかしないと、忍も考えを巡らせてるところだ。

「香織先輩はどう思いますー？」

「……え？あ、何かな？」

忍の振りにブーツとしていたのか、少し遅れて中世古が反応する。

「何って、加部っちの演奏すよ」

「ああ、うん。……そうだね。秋川くんの言う通りかな……」

忍の問いかけに対し、当たり障りのない事を言う中世古。やはり明らかに気が散っていた様だ。

「んー、もっと練習やなー」

「うう……」

忍がそう言うと、更にしよぼくれる加部。この自信の無さを変えないと先には進めないだろう。忍は腕を組んで「うーん……」と唸る。

「あーー!!!」

すると、今度は個人練をしていた優子から叫び声上がる。何か忘れてたと言う様な表情をしていた。

「時間!!合奏練習!!」

そしてビシッと教室内の時計を指差す。

その時間は、もうとつくに合奏練習の時間を過ぎていた。

「!!、ごめん!!私が……!!」

ハツとした表情を見せ、すぐさま謝る中世古。

こう言う時間の管理は、パートリーダーの仕事でもある。しかしそれも忘れると言う事は……

「と、とにかく！すぐ向かいましょう!!」

しかしそれよりも、今は合奏練習に早く合流しなければ。優子がそう言うのと、皆んなしてアセアセと移動を始めた。

「ゴメン!!私が時間を見てなかってせいで……」

部活が終了すると、すぐさま中世古がパートメンバーに頭を下げる。それを見た吉川があたふたとしながら慰め始めた。

「い、いいんですよ香織先輩。……それより滝先生ですよ!!一回遅れたぐらいでネチネチネチネチと……」

「時間に遅れたんで、当たり前かと」

「アンタも気付かなかったでしょうが!!」

なんだかイライラした様な高坂の直接的な物言いに、すぐさま優子が噛み付く。まあ、苛ついているのは別の原因なのだが。

「とにかく、今日はホントごめん!明日からはちゃんと気を引き締めるから!」

「か、香織先輩……」

尚も頭を下げる中世古に、言葉を詰まらせる優子。

そんな重たい空気が流れそうになる前に動いたのは、忍だった。

「まー、ともあれ。明日からまた頑張りましょうって事すよね?香織先輩?」

「……うん。ちよつと頼りないかもだけど、よろしくね?」

助け舟を出す様に忍がそう言うとうとうやく頭を上げ、少し申し訳なさそうな笑みを浮かべて中世古はそう返す。

そんな中世古を、優子は心配そうな目で見ていた。

「やっぱ、あすか先輩かな？」

「そーだろーねー」

帰り道。少し暗めの声で優子がそう言うと、いつも通りに忍がそう返す。

やっぱり今日の中世古は少し様子がおかしかった。合奏練習の遅刻もそうだが、その合奏練習でも滝先生に注意される場面が目立った。

理由は、言わずもなだらう。田中あすかだ。

しかし、様子がおかしかったのは中世古だけでは無かった。

「香織先輩だけじゃなくて他の部員もちよつとナーバスになってんじゃない？今日の合奏練習だつてどこか気が抜けてたしね。それでか今日高坂さん少し機嫌悪かったし」

「……少しは人のことも考えなさいつての……」

さっきの高坂の態度を思い出したのか、顔を顰める優子。しかし、部員の大半がそうなってしまうほど、田中あすかと言う存在はこの部で大きいものなのだ。

「……やっぱ、辞めるのかな？」

続けて、暗い表情を濃くして優子はそう続ける。普通に、田中の意志で辞めるのならば、ここまで部に動揺は広がらなかっただろう。

「分かんない。それを決めるのはあすか先輩だし」

「でも、あんだけ言ってくるなんて……」

しかし、今回は事情が違う。

家族が介入して来たのだ。本来なら首を突っ込まないのが道理だ。だがそれを破ってまで、田中の母親は部活を辞めさせようとしている。それなりの理由があるのか、それとも心配しているのか、あるいは別の理由があるのか。いずれにせよ、今回の事件は特殊で異質だ。

「……進路とかもそうだけど、俺は親父にそう言うの一切口を挟まれたこと無いんだよね」

「……そうなの？」

すると、少し遠くを見つめる様な表情で、忍は語り始める。

「うん。『お前この先どうすんの？』とかは聞かれるけど、それを喋って反対された事は一度も無いよ。……高校受験の時も、部活を一回辞めた時も」

「……………」

そんな忍の話を、優子は黙って聞く。

「多分、お母さんが死んでからそう言う事を色々考える様になったんだと思う。……だって一人で俺たちを育てなきゃいけないんだもん」

「……それなら、余計心配すると思うけど……」

優子の言う通り、それならば余計に子供に執着するのではないだろうか？

だってそれは、自分が愛した人が居なくなり、唯一残された心の拠り所なのだから。

「まーそーなんだけどさ。でも多分、親父は俺たちの事を”愛する子供”じゃなくて”一人の人間”として見てくれてるんだと思う」

自分の子供に対して、どう接するか。

それは、親としての永遠のテーマみたいなものだ。もちろん自分の子供に無関心であれば、その子供がまともに育つはずもない。

しかし逆もまた、問題が生じる。”愛情”が過ぎれば、今度はそこに”執着”が生まれる。”執着”が過ぎれば、それは子供を縛り付ける事になりかねない。

今の田中あすかのように。

「……………どっちの方が正しいのかな？」

「……………さあね」

そう。親子と言うものは、この微妙なバランスで成り立っているからこそ、第三者が介入する余地が無いのだ。

私なんか

「んー、やっぱ音が弱いなあ……」

「うう……」

パート練習。忍の指摘がつかくしと項垂れる加部。自信の無い彼女の演奏をどうにかしようかと奮闘してるのだが、結果はからつきし。一向に良くなる気配は無かった。

「もっと楽しそうに吹いてみなよ。今の友恵、眉毛がハの字になりながら演奏してるもん」

一緒に演奏を見てた優子からも優しく声が掛けられる。

「……やっぱ、無理だつて……」

しかし、やっぱり返ってくる言葉はネガティブなものだった。どうにか色々工夫をしてるのだが、今のところ効果は無い。俯く加部に對し、困った様に互いに顔を見合わせる優子と忍。

「あ、アタシはアッキーや優子みたいに上手く無いからねー。こんなもんですよ」

そして無理矢理笑みを浮かべて、逃げる様に加部はそう言う。

そんな加部に対し忍は少し顔を顰めた。

「……じゃあ、加部っちはずっとこのままでいいの？」

「ちよつと忍……!」

直接的な忍の言葉。優子は言い過ぎだと忍の事を睨む。

「……………」

対して加部は俯いたまま黙り込んでしまった。

彼女自身も葛藤しているのだろう。目の前の壁や困難に立ち向かうのは、相当な勇気が要る。

忍や優子はそれに慣れてる。それは元来の気の強さか、自信を持って居るからか。

しかし加部は

「お待たせ」

すると、パート練の教室に中世古が入って来た。声色はいつも通り

だが、何処か浮かない顔をしている。

「……どうでしたか？」

中世古に顔を向け、心配そうに優子が聞く。

「……分かんない。あすかは大丈夫って言ってたけど……」

こつちの問題も、まだ解決の糸口が見つからないままだった。

あまりにも噂が広まったため、中世古が事情を聞きに行っていたのだ。

『ごちやごちや言わないで』って……」

しかし、結果は空振り。

というよりも、田中自身がこの問題に首を突っ込ませようとしなかったのだ。”家族”の問題でもあるため、中世古も容易に口は挟めない。どこまで行っても話は平行線を辿っていた。

「そうですね……」

落胆の声色で落ち込む優子。

悪い方へ悪い方へ、話はどんどん流れていく。

「……とにかく、今日も部活に出てるから、まだ大丈夫だと思う。

……練習に集中しようか？」

中世古のその言葉は、自分自身に言い聞かせている様にも思える。

「はい……」

しかしそんな淡い期待を裏切る様に、次の日から田中あすかは部活に現れなくなった。

昔から何かに立ち向かうとか、何かを乗り越えるとか、そう言うのが苦手だった。

ただ単に、楽しく吹けていればいいやと。なあなあ、なんとなくでトランペットを吹いている。去年トラブルがあった時も、実力不足の私は蚊帳の外だったし。

でも蚊帳の外で充分。オーディションに落ちた時も、大して悔しさ

は無かった。だって私は、実力不足だから。こんなもんかと、すんなり受け入れられる。自分で言うのもなんだけど、面倒見は良い方だと思ってるから、その分サポートを楽しもうと、気持ちの切り替えも早かった。

私は、主役になんてなれない。

私は、そんな器じゃ無い。

『北宇治高校吹奏楽部、ゴールド金賞』

ある時、そんな感情に横槍が入った。

”いいな”って、思った。ただの憧れだ。でも、だってしようがないじゃん。席には演奏を聴きに来た観客で埋め尽くされていて、眩しいくらいにスポットライトを照らされて、その中で主役として自分が——なんて、考えただけでも気分が高まる。

でも、”私なんて”実力不足も良いところだし、それで苦しい思いをするくらいなら、ただの憧れだけで済ませておこう。

うん、それがちょうど良い。

『今回の駅ビルコンサートの1st、加部っちにやってもらおうと思ってる』

見透かされた。

それも、北宇治でもトップクラスの実力を持つ人に。

顔に出たのだろうか？それとも態度？

アッキーにそう言われた時、なんと言うか……色んな感情が一気に来た。

まず、不安。

私は実力不足。変な演奏をして恥をかくだろう。そんな演奏を皆んなに聞かせらんない。

次に、焦燥感。

実力の差が、こんなにもあるとは思わなかった。今の私は、ぶっちゃけ秋子ちゃんより下手だろう。そんな私が、どうやって吹けばいいのか？

そして、諦め。

こんな私が、1stを吹くなんて。

やっぱり、何かに立ち向かうとか、何かを乗り越えるとか、私の性に合って無い。

そんな諦めばかりの私が、どうして

「加部さん」

「……………」

「……………加部さん?」

「!、は、はい!」

滝先生に二度呼ばれ、加部がようやく反応する。

「どうしましたか?56小節からです。演奏して下さい」

今日は駅ビルコンサートの合奏練習。1stに任命された加部も合奏練習に加わっている。

初めての合奏練習。加部が緊張しない筈もなく、青褪めた顔になりながら滝先生の指導を受けていた。

落ち着かせる様に一つ深呼吸をすると、マウスピースを口に付けて演奏を開始する。しかし、そんな状態でいい演奏など出来るはずもない。

聴こえてくる音は、パート練習の時よりも数段酷いものだった。

数秒吹いた後、滝先生は演奏を止める。

「……………演奏になってません。……………加部さん、緊張するのも分かりませんが、貴女はこの曲で1stを担当します。……………それは分かっていますね?」

「……………はい……………」

俯き、今にも泣きそうな顔で加部はなんとか声を出す。

「……………音楽は、楽しむものです。……………しかし貴女の演奏からは、そ

れが全く感じられない。……苦しんで演奏している様にしか見えません」

「……………」

「凶星。滝先生の言葉に、加部は黙りこくってしまおう。」

「……………時間はまだあります。もう一度、音楽というものが何なのか、加部さん自身で考えてみて下さい」

「……………はい……………」

「では、続けます。今度は初めから、全員でお願いします」

「「「はい!!」」」

再び合奏練習が始まる。

そんな中、忍は加部を真剣に、優子は心配そうに見つめていた。

そして、予想通りと言うべきか、翌日パート練習で遂に加部の心が折れてしまった。

「……………あの、やっぱり、私、1st辞めます」

壁

教室の空気が段々と重くなつて行く。

パートメンバーの反応としては、無言。皆加部にどの様に声を掛けて良いのか分からなかった。

「……………そっか」

初めに口を開いたのは、忍だった。全員やりにくそうに口を紡ぐ中、忍は違和感を感じるぐらいいつも通りだ。

「……………やっぱ、自信ない?」

一つ、忍が優しくそう聞くと、加部は黙って頷く。

「や、やっぱり、私なんかじゃ役不足だし。…………それに、アツキーとかが吹いた方が、盛り上がるでしょ?」

「友恵…………」

無理やり貼り付けた様な笑みを浮かべて、独白する様に加部はそう言う。優子もどう声を掛けていいのか分からないようだった。

対して忍は困った様に後頭部を掻く仕草をした。

「うーん、役不足とかは正直どうでもいいんだけどねえ…………」

「だって…………」

加部は忍と目を合わせない。それは申し訳なさからか、自信の無さからか。

——違う。これ以上見透かされるのが怖いのだ。

「別に、加部つちがそれで納得するならいいんだけどさあ」

「……………してるよ」

「そうは思えないけど?」

「……………」

再び無言になる加部。間違いない。

これは絶対に見透かしている。しかし、詰め将棋の様に忍は言葉を続ける。

「加部つちの中で、音楽って何?」

「……………え?」

あまりにも抽象的な質問に、呆けた表情を見せる加部。

「いや、言い方変える。加部っちは今トランペット吹いてて、楽しい？」

「……………分かんない」

もう、何も分からない。

最初は楽しかったのだろう。だから吹奏楽部に入ったんだし。しかし、最近は…………

「俺はね、音楽って楽しい事だけじゃないと思ってるんだよね」
そんな加部の心を見透かした様に、忍は言葉が続ける。

「だって吹けなきゃ楽しくないもん。思い通りに吹けなきゃフラストレーション溜まるし。…………じゃあ、楽しく吹くためにはどうすりゃいいと思う？」

「……………」

分かってる。そんな事。

でも、それが出来るのは一握りの人間だけだ。加部はそのメンタリテイを持ち合わせていない。

「…………正直に言っちゃうけど、今の加部っちの”役不足”って言葉、俺には逃げてる様にしか聞こえないよ」

そんな彼女の葛藤を踏み躪るかの様な一言。

遂に加部は耐え切れなくなってしまった。

「友恵!!!」

優子の静止も聞かず、ガタンッと勢い良く席を立てて教室から出て行く加部。

追いつけないと悟った優子は、振り返って思い切り忍の事を睨み、詰め寄る。

「アンタねえ!!言い方ってもんがあるでしょうが!!!」

「ちよっと優子ちゃん…………!!!」

胸倉を掴んで凄む優子に対し、中世古が止めようとする。しかし忍は臆する事なく真つ直ぐと優子を見据える。

「なんだよ」

「……っ!!」

詰め寄る言葉が見つからない。

それほどに忍の言葉は正論的を得ていたのだ。でも、正論だけではどうにもならない事を優子は知っている。そんなもどかしい気持ちるをなんとか抑えながら、ゆつくりと掴んでいた胸倉を離す。

「…………アンタとは後で話すわ。とりあえず探してくる…………!」

先ずは加部だ。彼女の後を追う様に優子も教室から出て行った。

ああ、ダメだ。

完全に見透かされた。

逃げたい。逃げたい。逃げたい。

分かっていた。滝先生に言われた事も、さつきアツキーに言われた事も、耳が痛いくらいには分かる。

それを受け入れると、どうしようもなく涙が止まらなくなった。

あんなに直接言わなくてもいいじゃん。

やっぱり憧れるだけで良かった。やっぱり私なんかが出しやばるんじゃなかった。

こうして現実を突きつけられると、本当に辛い。技術なんかじゃない。実力云々の話ではない。

私は、ただ臆病なだけなのだ。

パート練の教室には、何とも言えない重苦しい空気が流れる。

しかし、誰も忍を責めようとは思っていなかった。忍の言う事はごもつともだ。

でも、誰も加部を責めようとも思わない。何かに立ち向かう、何かを乗り越えようとする勇気と言うのは、相当な覚悟が必要だとメンバーも知っている。

そうでなければ、全国大会出場という目標は達成できないから。

「……………ごめんね、私ごもつとちゃんとしてれば……………」

そして一番責任を感じているのは、このパートのリーダーである彼女だろう。後悔するように中世古が呟く。

「……………別に、香織先輩のせいじゃないですよ」

軽いため息を吐いて、忍はそう返す。

「ただ、ああでも言わないと、加部つちが気付かないんじゃないかと思つて」

後頭部を手で掻きながら、忍はそう続ける。

「……………気付かない？」

忍のその言葉に、滝野が反応する。

「うん。だつて加部つち……………」

忍が加部に1stを吹かせたがる理由。それは、ただの同情でやらせようとしてる訳ではない。

「つまんなさそうに吹いてたんだもん」

ただ加部が、つまんなさそうに吹いてたから。

それが忍にはどうも納得がなかなかかった。ただの惰性で音楽に向き合おうとしている加部を、どうしても受け入れられなかったのだ。

その言葉に皆息を呑む中、忍は言葉を続ける。

「本当につまなくなったら辞めればいいじゃない？でも、加部つちは辞めてない……………吹っ切れてないんだろーね。このまま辞める自

分と、諦めきれない自分がせめぎ合って、本当は何をしたいのか見失っちゃってる」

だからこそ忍は加部を1stにした。

秋川忍と言う男は、単純明快な男だ。良いと思えば良いと言うし、悪いと思えば悪いとハッキリ言う。だからこそ――

「俺にはそれが、なんか気持ち悪くて嫌だったただけだから」

今の加部の現状を、どうにかしたいと思っている。

「もう！何で私の周りって厄介な奴ばつかなのよ……!!」
廊下をズカズカと歩きながら、悪態をブツブツ口にして優子は加部を探す。

この前の鎧塚、前回の忍、そして今回の加部。どうも人探しに縁のある体質のようだ。

「ほんつと馬鹿なんだから……!!」

本当に頭に来る。何故優子がこんなにもイラついているのか。先程の忍のキツすぎる物言いもそうだが、それよりもムカつくのは……

「深く考えずに楽しくやんなさいよ……!!」

どっちつかずの加部に苛ついているのだ。

音楽をやる上でどっちが上手いとか、どっちが下手とか。

確かにそれも大事だが、そこに固執して自分を見失っているのが今の加部だ。そんな彼女に優子はもどかしさを感じている。

優子自身だって、自分を見失いかけた事がある。上手くなりたいと思いついて、高坂や忍を恨んだ事さえある。誰しもが高みに登れる訳ではない。違いは、それに立ち向かえる勇気があるかどうか。

「私でもメンバーに入れるんだから……!!」

形は違えど、加部の気持ちは優子には痛いほど分かるのだ。

「……………いた」

校舎裏。陽も当たらず、少し薄暗い隅つこに加部は居た。優子がその声を漏らすと、聞こえていたのか加部の肩がピクンと跳ねる。

「……………友恵、練習行こ？」

端的に。優しく優子が問いかけるも、拒否をするように加部は首を横に振る。

「……………あのバカには後でキツク言つとくから」

先程の忍の発言で傷ついているのだらうと、慰めるように優子はそういうも、また加部は首を横に振る。

「……………違うの。アッキーは悪くないよ」

加部のその発言に、優子は困惑の表情を浮かべる。そこまで分かってるなら、言いようはある。

「……………友恵は、忍や高坂みたいに自分に”才能”が無いから、やりたく無いの？」

尚も優しく、優子は問いかける。

「……………違う。……………怖いだけ」

遂に出た、加部の本音。

全てはここに詰まっている。才能の無さに折れた訳では無い。

「演奏するのが、怖い。皆んなが私の演奏を聴くのが、怖い。アッキーと達比べられるのが、怖い……………怖くて、しょうがないっ……………！」
震え声になりながら、加部は独白する。

怖くて辞めたい。逃げ出したい。

でも、ほんの僅か。心の奥底にある。彼女の願望が足搔いている。

「こんなんなら、”吹きたい”って思うんじゃないっ……………!!」
私も、あの舞台で。

覚悟も無いのに、そんな高望みをしてしまったから。

その中途半端さが、加部の中での後悔をどんどん大きくなってしまったのだ。

「……………私は、友恵にこのまままでいて欲しく無い」

しかし、吉川優子はそれを絶対に良しとしない。

「……………え？」

決意のこもった優子の言葉に、加部は顔を上げた。

すると、柔らかい笑みを浮かべて優子は言葉を続ける。

「……………私ね、上手く無いの。分かるでしょ？高坂や忍と比べたら、私の実力なんか全然だって」

「……………」

優子の言葉に、加部は黙って耳を傾ける。

「……………でも、それを理由にして辞めるのはもっと嫌。あいつらに敵わないと思っても、私は足掻きたいの。……………こういう気持ちって、バカだと思う？」

優子の問いかけに、加部はゆっくりと首を横に振る。

「……………ううん、凄いと思う。……………でも、私には、できない事だから……………」

「出来ない事無いよ。……………自己満足かも知れないけど、私は何かに挑戦したって証が欲しいんだろ？ね。自分の好きな楽器で思いっきり挑んで、玉砕してもそれで良いって思ってる」

思い出すように、優子は言葉を続ける。

……………分からない。どうして、そこに恐怖心が生まれないのか。

「なんで優子は、それを怖いと思わないの？」

救いを求めるように、加部はそう聞く。

「怖いと思うわよ」

「じゃあなんで……………」

やっぱり分からない。じゃあどうして、苦しむと分かっているその

道に進んで行くのか。

「でも、それ以上に、そこで何もしなかったら後悔するって思ってるから」

息が詰まる。

優子のその言葉で、気付かされた。

”今”から逃げる事は、おそらく簡単な事なんだろう。”辞める”って自分の口から言えば良いだけだ。しかし、そこから得られるものなんて一つもない。残るとすれば、『何故あの時向かい合わなかったのだろう』という後悔だけだ。

それを忍も、中世古も。

そして優子も理解している。

「だから、友恵にはもうちよつと頑張つて欲しいかな？」

加部には、そんな思いをして欲しくないから。今、辛い事から逃げれば、後でもつと辛い思いをするから。それを優子は分かっているのだ。

言いたい事は伝わった。それを理解すると、加部の目から涙が出てくる。

「うう……ぐずつ……出来るかなあ……？」

「うん、出来るよ」

泣き出した加部に対し、優子は優しく肩に手を添える。

そもそも、吉川は加部がこの大きな壁をのりこえたと、確信していた。何故なら――

「じゃなきや、アンタと友達なんかやってないわよ」

吉川優子と言う女性は、義理堅いからだ。

勇気

パート練習の教室には、いつも通りトランペットの音が聞こえる。皆、それぞれの”課題”に向けて必死に演奏を重ねる。”課題”と言うのは今、正に自分の目の前に立ちはだかる”壁”だ。

その壁に立ち向かうために、北宇治高校吹奏楽部トランペットパートの面々は必死にマウスピースに口を付けている。

「……どう？」

神妙な面持ちで加部がそう聞くと、忍は満足そうにニコリと笑った。

「かなり良くなった。でも最後の部分がまだ甘いかな？息がしんどくなるにつれて安定感が無くなって」

相変わらず、忍の評価に忬度は無い。良いところは褒めるが、悪いところは具体的にダメ出しをする。

「……分かった。もう一度やってみる」

真剣な面持ちで加部がそう言うと、再びマウスピースに口を付ける。

以前までの加部なら忍の今の言葉に折れていただろう。しかし、今の彼女にはそこから”どう克服しようか”と言うマインドが加わった。

何かに”立ち向かう”と言う勇気が加わった。

その覚悟だけで、加部の演奏はみるみる良くなっていく。言うなればがむしゃらと言う状態に近いのかも知れないが、燻っていた加部にとっては良い薬になっているのだろう。今、目の前の自分が演奏する楽譜に必死で食らいついているから、余計な事を考える暇も無い。

「……どう？」

「うん、さつきより良くなった。でもまだ」

こんな調子で、駅ビルコンサートまでの日は近づいて行く。

放課後、ある日の楽器室。そこには、おさげに髪を纏めた少女が深刻そうな面持ちで楽譜を見ていた。ページを捲るたびに、その表情はなんとも言えない複雑な表情に変わっていく。そこに、一人の男子部員が入って来た。

「あれ、部長じゃないですか」

楽器室に入った忍が、その楽譜を持っている少女、部長の小笠原に話し掛ける。小笠原は一瞬驚いたが、入ってきたのが忍だと分かるとホッとしたように一息ついた。

「なんだ、アッキーか。……珍しいね？楽器室に来るなんて」

忍は自前のトランペットを持っているので、楽器室に来る事は殆ど無い。小笠原の問いかけに対し忍は困ったように、しかし少し喜色も混ざったような笑みを浮かべる。

「加部っちがやる気出したんでね。ちよつとご協力をおと思って」

そう言って、忍は柵の奥をやり始める。それを見て、小笠原も困ったような笑みを浮かべた。

「聞いたよ、話。加部さん、1stやる気になったんだってね？」

「ちよつと荒療治でしたけどね」

小笠原の問いかけに、嬉しそうな声色で忍はそう返す。

あれだけ自信が無かった加部が、今日の合奏練習では人が変わったように生き生きとしていたのを小笠原も見ている。そして、その経緯も彼女の耳に入っていた。

小笠原は持っていた楽譜を少し強く握り締める。自信が無いのは、彼女も同じ。

「……実はさ、私も滝先生に言われたソロの件、やるかどうか迷ってるんだ」

独白する様に、小笠原がそう呟く。今回の駅ビルコンサート、小笠原も滝先生からソロパートをやらないかと打診されていたのだ。それを聞いて、忍の動きが一瞬固まった。

「……やれば良いじゃないですか。部長が本当にやりたいのなら」
「……そうなんだけどね。なんか引つかかると言うか……私がやって良いのかなって……」

弱気な小笠原の発言に対し、忍は軽くため息をついた。

「それを決めるのは部長ですよ。やる理由があればやれば良いし、やらない理由が無ければやんきやいい。部長がそうやって迷ってるって事は、どっかでやる理由を掴めそうなんですよね？……なら、それに素直になる以外は無いと思うっすよ」

「理由……」

小笠原は考える。自分の目の前にある楽譜を見据えながら。

「……アツキーは、あすかの事どう思う？」

「はっ。」

すると、小笠原からそんな言葉が出てきた。予期していなかった言葉に忍は呆けた表情を浮かべている。

「……これ、あすかの楽譜」

すると、小笠原が忍に持っていた楽譜を渡した。

「なんでここに……」

「……たぶん、家に置いとけないんだろうね。……さつき見つけたの」

小笠原の話聞きながら、忍は楽譜のページを捲る。そこには他の部員となんら変わらない、どこが重要とマーカーで色付けされたごく普通の楽譜だった。そしてそのページの端に書かれている、『目指せ全国』と言う文字。

「……私、思ってた。あすかは私達と違うところを歩いてるんだって。……あすかは、特別なんだって……」

なんだか後悔する様に、そう呟く小笠原。

「……別に、俺はそんなこと思った事無いですけどね」

対して忍は、田中への印象を素直に答える。

「……そうなの？」

「ええ。正直、俺あすか先輩とあんまり話した事無いですもん。」

パートも学年も違うし。だからちよつと分からないな。とは思いますが、俺が持つあすか先輩の印象って、そんなもんです」

「……………」

正直過ぎる忍の発言に、小笠原は黙ってしまふ。しかし構わず忍は言葉が続ける。

「…………でも、部長は違うんすよね？」

その問いかけに、小笠原は深く考える。彼女にとって、田中あすかとは。

正直、どうして田中が部長にならなかったのかと思つた事など、何度もある。能力は高くせに、自分の本音を絶対に曝け出さず、のりくらしと。しかし本質を見抜いているような、抜け目のない少女。だからこそ、『田中あすかは自分達とは違つて特別だ』と思ひ込んでいた。

「…………うん。でも、ちよつとあすかの事誤解してたかも」

しかし、この楽譜からはそれが感じられない。思い浮かぶのはごく普通に音楽に真剣に取り組み、ごく普通に全国を目指す一人の少女だ。

「…………そうですか」

決意のこもつた小笠原の言葉に、満足そうに忍はそう返す。

「うん。だから、ちよつと見せたい。あすかに頼らなくても大丈夫だよって。いつ帰つて来ても大丈夫だよって」

「ほー、さすが部長」

「もー、おちよくらないの！」

小馬鹿にする様にそう言う忍に対し、困つた様に笑つて小笠原はツツコミを返す。そして再び決意のこもつた表情を浮かべて、窓の外に顔を向けた。

「…………少しは、部長っぽいところ見せないかね」

部長

吹奏楽部に、不穏な空気が流れている。

田中あすかが、部活に現れない。明日はきつと来る。と言う淡い期待を抱きながらも、気が付けば来なくなってから一週間も経過している。

「うん、かなり良くなった。通しでも違和感無いね」

「!!、そうかな?……あー……やつとここまで来た……」

忍から合格点を貰い、加部は満足そうに言葉を漏らす。いつものパート練習。

「なにここで満足してんの?本番は駅ビルコンサートだよ?」

「うっ、そりゃあ、そうだけど……」

忍に確信を突かれ、微妙な表情になる加部。彼女のプラス要素もあつてか、トランペットパートは比較的明るい雰囲気に進んでいた。

「香織先輩はどうつすか?」

「え?、あ、うん。良くなったね?」

「もー、またそれですか?」

しかし、中世古はまだ何処か気が抜けていた。

心ここに在らず。彼女は優しい性格だ。他人の事を心配できるその性格は、今となっては前に進む為の枷になっている。

田中あすか自身は大丈夫だと周りに言っただけだが、これだけ事が大きくなると、その言葉すらも怪しくなってくる。居なくなつてから気付く、彼女の存在の大きさ。この先の部活は大丈夫なのだろうか?ちゃんと纏まるのだろうか?

そして事態は、最悪の方向へと向かって行く。

「香織先輩!」

慌てた様子で教室に入って来たのは、優子だった。走って来たのか、少し息が乱れている。それを少し整えると、不安げな顔で口を開いた。

「今、下で騒ぎになってるんですけど」

「……聞いた？あすか先輩……」

「うん。教頭先生が代理で退部届け受け取ったって……」

その噂は、一瞬で広まった。教頭先生が代理で退部届けを受理し、彼女が部活動から去るのはもう時間の問題だと。

騒ぎになるまではあつという間で、遂にはそれが演奏にまで影響する様になってしまった。

「なんですか、これ」

合奏練習。手を叩いて滝先生が演奏を止める。

いつか聞いた言葉。そこまで演奏の質が下がっているとまでは言わないが、滝先生その言葉には確かな苛立ちを孕んでいた。

「皆さん、ちゃんと集中してます？」

滝先生が問いかけるも、部員たちは無言を返す。

集中出来ない理由は明白だ。

「……あの」

「なんですか？」

そんな重苦しい空気の中、手を挙げたのは優子だ。ゆっくり立ち上がると、不安な眼差しを滝先生に向ける。

「あすか先輩の退部届け、教頭先生が代理で受け取ったって言う話は、本当なんですか？」

優子の問いかけに、少し間を置くと、滝先生は表情一つ変えずに口を開く。

「その様な事実はありません。……皆さんはこれから、そんな噂話一つ出るたびに集中力を切らして、こんな気の抜けた演奏をするつもりですか？」

暗く低い声。表情は変わらないが、先生自身が怒っているのは明白だった。そして、その話を聞きながら忍は少し眉間に皺が寄ってい

る。

「……今日は終わりにして、残りはパート練にしましょう」

このまま合奏練習を続けても無駄だと感じたのか、滝先生は吐き捨てる様にそう言うと、教壇から降りて教室から出て行く。

「先生……!!」

部長の小笠原が、引き留めようとするも、聞く耳を持たず滝先生はそのまま音楽室から消えていった。

「……なんだよ……」

「はあ……最悪……」

滝先生が出て行くと、愚痴を溢すように部員たちから不満の声上がり始める。雰囲気は、かなり悪い。一人の不安が重なる様に伝播して行き、誰も彼もが演奏に集中出来てない。

「……………」

そんな中、小笠原は自身の楽譜を見つめていた。書いてあるのは、色とりどりにマーカーペンで注意点が書かれ、端には「目指せ全国!」と書かれた、至つてごく普通の楽譜。

「……ちよつとは、部長だつてところ見せないかね……」

自分に言い聞かせる様に、誰にも聞こえない声でそう呟くと、小笠原は教壇へと足を運ぶ。

「皆んな、少しだけ時間くれる?」

そして注目させる様に教壇へと上り、皆に聞こえる様に声を掛ける。

「あすかが居なくなつて、皆んな不安になるのは当然だと思う。……でも、このままあすかに頼つたらダメだと思うの。……あすかが居ないだけで不安になつて、演奏もダメになつて、……部活つて、そうじゃ無い」

「……そんなの分かつてるよ……」

「でもさ……!」

再び部員たちから文句が文句が上がりそうになるが、それを忍が手

で制する。

「……私は、自分よりあすかの方が優秀だと思ってる。……だから、あすかが部長をやれば良いって、ずっと思ってた。……私だけじゃ無い。みんなも、あすかが何でも出来るから頼ってた。……あすかは特別だから、それで良いんだって……」

独白の様な小笠原の言葉を、部員達は黙って聞く。皆、心当たりがあるのだろう。文句を言うものは誰も居ない。

「でもあすかは、特別じゃなかった。私たちが、勝手にあの子を特別にしていた。副部長にパトリリーダーにドラムメジャーとか。仕事を完璧にこなすのが当たり前で、あの子が弱みを見せないから、平気なんだろうって思ってた」

俯きながら、過去のことを悔やむ様に小笠原は言葉を続ける。そして少し間を置くと、決意した様に顔を上げて皆んなを見据える。

「今度は私たちがあすかを支える番だと思う。あの子がいつ戻ってきてても良い様に」

今度は、自分達が。

今までの恩を、これから返していけば良い。助けてもらおう側ではなく、支える側で。

「もちろん、去年のこともあるから、ムカついている人もいると思う。あすか以外、頼りない先輩ばっかって感じてる子も居るかもしれない。……でも、それでも付いてきて欲しい」

小笠原晴香は、北宇治高校吹奏楽部の部長だ。

田中が居なければ、誰がこの部活をまとめ上げるのか。そして教壇から一步前に進むと、深々と頭を下げる。

「お願い、します」

「……あんまり、舐めないで下さい」

尚も頭を下げ続ける小笠原に対し、そう返したのは優子だった。小

笠原はゆっくりと頭を上げる。

「そんな事言われなくても、皆んな付いて行くつもりです！」
まるで当たり前かのように、優子はそう言い放つ。

「本気なんですよ？」

この一本気な性格こそ、吉川優子だろう。このタイミングでこの台詞が言えるからこそ、彼女だ。

「まあ、アンタの場合、自分の感情に正直過ぎるけどね」

すると、今度はそんなしんみりとした空気をほぐす様に、中川が茶々を入れてきた。

「うっさい!!」

「全く、誰に似たんだか」

そして、中川はその視線を忍に回す。

「だいたいアンタねえ！こう言う時は」

「あー、はいはい。これだからいい子ちゃんは」

「なにー!?!」

そして、いつものやり取りも戻ってきた。

その光景は、田中がいた頃と何ら変わらない、北宇治吹奏楽部の日常だった。

そして、職員室。

「バリサクソクの件ですね？」

「……はい。私にやらせて下さい……!」

私のお気に入り

今週末の京都は、雲一つない晴れ模様。

盆地であるからか、もう10月になろうと言うのに半袖の人達が目立つ。交通の大動脈である京都駅では、普段とは違う賑わいを見せていた。

今日の北宇治高校吹奏楽部のメンバーは、特別な青のTシャツを着て、この駅ビルコンサートへと臨む。

「あー!!凡ミスマンや!!うっわ、寄ったらコッチにミスが移るで!!」

「我は凡ミスマン!!貴様に全国大会でミスるよう呪いを掛けてやろうー!!」

「わー!!」

演奏前の待機時間。忍と篠田は子供がやる様な下らないじゃれ合いをしていた。

駅ビルコンサートには明静工科も来ている。篠田は他の高校の生徒達が居る中、忍の事を目敏く見つけすぐさま話しかけたのだ。

ただ駅のコンコースのど真ん中で騒げば目立たない訳もなく……

「アホ!騒ぐな言うたやろが!!」

「いだ!!」

すぐさま篠田の後頭部が引っ叩かれる。篠田の後ろを確認すると、関西大会の時も彼に注意をしていた髪をポニーテールに纏めた明静の部長さんが居た。

「北宇治さんも!こんな目立つ場所で騒いだら恥ずかしいわ!気いつけよ!!」

「は、はい」

まさか自身も怒られるとは思っておらず、何だか背筋が伸びてしまう忍。それだけ言い残すと、明静の部長さんは怒った様にズカズカと戻って行った。

「あーあ、相変わらずやなあ。ほんまあの鬼ババ、あたまが硬いわ」

「……なんか、嵐の様な人だね」

「かーちゃんかつちゅーねん。いっつもこんなごっつい目くじら立ててなあ、ホンマ油断出来ひんで」

両手を使って大袈裟に篠田は目を釣り上げる。こう言うオーバーなりアクションをするのは大阪人っぽいが、忍は釣られて笑ってしまった。

「相変わらずだねえ、まさっちは。今日だって全く緊張してないじゃん」

「アホ、してどないすんねん。せつかくの演奏やのに緊張なんぞしよったら勿体無いわ」

胸を張って篠田は自信満々にそう言う。この単純さこそ、彼の持ち味なのだろう。

「それよりお前や、忍。ホンマにスランプ抜け出したんか？」

すると、今度は真剣な顔つきで篠田はそんな事を聞いてきた。

電話などでは大丈夫と忍本人から聞いてはいたが、篠田はまだ忍の演奏を聴いてない。

「うん、多分大丈夫。少なくとも悩む事は無くなったよ」

何かを懐かしむ様に、薄く微笑んで忍はそう言う。

その表情を見て、篠田も何か察した様に薄く笑った。

「……ほうかい。ならええわ。まあ、お互い全国や。関西みたいなしよーもない演奏したら覚悟しとき？」

「うっわ、ここで脅す？」

「偶にはプレッシャーも必要や！ほいなら俺もう準備行くから、またな!!」

「うん、またねー」

相変わらず忙しい篠田に対し、困った様に笑って忍は手を振る。

「ちよつと忍ー？」

すると、今度は忍の背後から声が掛かる。振り向くと、困り切った表情を浮かべる優子がいた。

「なに？どした？」

「あれ、どうにかして頂戴よ……」

そう言つて優子が指を差す。そこには体育座りで縮こまっている

加部の姿があつた。忍も困つた様に笑うと、彼女の方へと歩みを進める。

「あー、ヤバイヤバイヤバイヤバイ……」
青ざめた顔で、呪詛の様な言葉をブツブツと口にする加部。

誰から見ても分かるくらい緊張している。

「緊張しておりますなー、加部っち」

「何でアツキー達は緊張しないのよー……」

相変わらずのいつも通りな忍に対し、羨ましがる様な口調で加部は言葉を返す。

「うーん、慣れてるから？」

「私は慣れてないよう……」

どんだんしよげて行く加部対し、これは困つたと頭を抱える優子。対して忍は柔らかに微笑む。

「緊張つて、実は悪い事じゃ無いよ？」

「え？」

予期していなかつた忍の言葉に、加部は俯いていた顔を再び上げる。

「だって、それぐらい加部っちが練習したつて事でしょ？あんなに頑張つたんだから、緊張するなんて普通だと思ふけどなあ」

「……そりゃ、そうだけど……」

だからこそ怖いのだ。あれだけ練習して頑張つて来たのに、それが本番で力を出せなかつたらどうしようかと。

「じゃあ、逆に自慢すればいいじゃん。」私の集大成を見ろー！”つて。ほら、復唱！

「わ、私の集大成を見ろー……？」

勢いに流され、忍の言われるがままにそう言う加部。しかし不満げに忍は首を振る。

「もっと勢い良く!!私の集大成をみろー!!」

「わ、私の集大成を見ろー!!」

「やかましい!!」

「いだいっ!!」

度が過ぎたのか、今度は優子によって忍の後頭部が引っ叩かれる。そんなコントの様な光景を見て、さっきまで不安一色に染まっていた表情から一転、加部は吹き出した。

「あはっ、あはははは!!」

今度はいきなり笑い出した加部に対し、忍も優子もキョトンとしている。

「あははっーごめん、なんか、二人見てたら緊張してんのがバカらしくなっちゃって……」

忍と優子は互いに顔を見合わせる。意図的にやったことでは無いが、どうやら加部の緊張は大分ほぐれたらしい。

「アッキーは相変わらずだね」

「うん、そうだね」

そんな光景を見ていた少女が二人。小笠原が感心した様にそう言うのと、中世古も同調する様に頷く。

「ほんと、アレを注意するこっちの身にもなって欲しいよ」

言葉こそ文句を言っているが、小笠原のその表情や口調に悪意は無い。寧ろしやうがないなと言う様な、満更でも無さそうな表情を浮かべていた。

「……香織はさ、アッキーって、特別だと思っ？」

「えっ？」

すると、何となしに小笠原がそう尋ねる。いきなりの問いかけに中世古も目を丸くしているが、少し考え込む様な仕草をした後、口を開いた。

「……多分、特別なんだと思う。あすかとは違う感じの。……そうだね……」

そこで一旦区切ると、中世古は薄く笑った。

「秋川くん自身がそんな事考えてないから、特別感は無いかも。……でも、話したら分かるの。あの子って、とことん素直で自分の考えや思ってる事がすぐ口から出ちゃうから。……そこは優子ちゃんと似てるどころかな？」

「……確かにそうだね」

先日の優子の舐めないで下さい発言を思い出しているのか、苦笑いになる小笠原。

「……でも、言ってる事は的外れじゃ無い。私たちが言い辛い事や尻込みしちゃう事も、自分が正しいと思っただらあの子はズバつと言えちゃう。……だから、秋川くんは特別なんだと思う」

「……………そっか」

中世古の言葉に、納得した様に頷く小笠原。

その姿は。去年の事件やここ数ヶ月の忍の行動が物語っている。

「ホント、優子ちゃんが羨ましいな」

「もー、またそれー?」

別に忍に恋をするわけではない。しかしその人間的な魅力が、忍を特別たらしめる理由になっているのは事実だ。

「あ……………」

すると、北宇治のメンバーの前を白の衣装を纏った集団が通り過ぎて行く。

「聖良女子……………」

今日の目玉とも言える全国の強豪校、聖良女子だ。

「流石全国常連だけあって堂々としてるね」

感心する様に中世古がそう溢す。しかし、小笠原は何かを決意した様に聖良女子のメンバーを見つめる。

「でも、私たちも全国出場だよ」

そう言うと、中世古は一瞬驚いた様な表情を見せるが、すぐさま薄く微笑む。

「……………うん、そうだね」

「そのとーり!」

「え?」

聞き覚えのある声。すぐさまその声の方向へと顔を向ける。

「あすか……………!!」

ひよこつと、まるでずつとそこに居ましたよと言わんばかりに、田中あすかはそこに立っていた。

「なによー？お化け見る様な顔してー」

「来れたんだね」

「すぐさま、中世古が近づいて行く。」

「言ったでしょー？迷惑は掛けないって」

会話を交わす内に、どんどん人が集まって行く。やっぱり、田中あすかはこの部活の”核”だ。

そんな光景を見て、小笠原は決意した様な表情を浮かべて田中に近づいて行った。

「あすか」

小笠原の声に反応し、田中も彼女に近づいて行く。

「……私、ソロ吹く事になったから」

そう言うと、小笠原は楽譜を田中の目の前に差し出す。

「……しっかり支えてね」

差し出された楽譜を受け取ると、不敵に田中は微笑んだ

「もっちらん！」

流れて来る曲は、『My favorite things』

和題にすれば、『私のお気に入り』

元々は『サウンド・オブ・ミュージック』と言うミュージカル映画の劇中歌だ。

そしてこの曲は、とある鉄道会社のCMの曲としても有名だろう。

京都への観光地誘致の目的として、この曲が使われている。曲に合わせて、京都の名所を存分に伝えるところもものだ。CMで馴染み深い音を聞いた事により、京都駅に行き交う人々は次々に足を止める。

「これって、CMのやつ？」

「上手いなあ……」

反応は三者三様。

しかし、ネガティブな感想を持つ観客はいない。軽快なリズム。そして上品な音の滑り。自分自身の”お気に入り”を、存分に聴き手に伝える。

いつか忍が言った『ウエルカム・トゥ・ザ・京都』と言う単語は、正にこの状況では最適解だろう。

加部友恵は、妙な興奮を覚えていた。

皆んながこつちを見て、皆んなが自分達の音に耳を傾けている。それも、自分が1stに立ってだ。つい30分前までは緊張でガチガチだったのに、今はえも言われぬ幸福感と、充実感に満たされている。忍か言っていた、音楽は聴き手がいてこそ。

それを彼女は今、全身に感じている。

表情も演奏も、緊張なんて微塵も無い。そんな彼女を見て、忍と優子は満足そうに微笑む。

やっぱり、音楽はこうでなくては。

そして、曲の後半。

この曲は同じフレーズを繰り返す曲ではあるが、難しさはトップクラスだ。

リズムは目まぐるしく変わるし、それを全体で合わせなければならぬ。前半は思いつきり軽快なテンポでとぼすが、後半になるとゆったりとしたテンポで合わせる。

そしてそこに、滑り込む様にソロが入る。

そのソロの主演は小笠原だ。

ソロのパートとしては、さほど難しくは無い。

しかし、小笠原は自身の全身全霊を込めてその部分を吹く。それは自分の為か、それとも観客の為か、それとも……

ソロパートを吹き終わると、観客から拍手が起きる。

ちゃんと伝わっただろうか？彼女”の心にちゃんと届いただろうか？小笠原の中ではそんな感情が渦巻いていた。

音楽への向き合い方。それは人それぞれだ。

自分の為に。あるいは聴き手の為に。あるいは特定の人の為に。

そうやって向き合う中で、自分の”お気に入り”を見つける。

そんな事を感じさせる、北宇治の駅ビルコンサートだった。

見学

駅ビルコンサートも終わり、北宇治高校吹奏楽部はいつも通りのコンクールに向けての演奏を続ける。

季節は10月に近づき、秋を感じさせる今日この頃。音楽室には、二人の少女が居た。しかし、北宇治の制服ではなく、別の学校の制服を着ている。

「よろしくお願いします！三室戸中から来ました！秋川凜花です！」

「よ、よろしくお願いします！大吉山西中から来ました！た、滝野さやかです！」

1人は元気良く、もう1人は緊張気味に挨拶をする。彼女らはまだ中学3年生。何故北宇治吹奏楽部の練習に参加しているのかと言うと……

「今日は、この2人が練習を見学します。基本は見て頂くだけですが、機会があれば演奏にも参加してもらおうかと思っています」

補足する様に滝先生がそう言う。

つまりは、凜花とさやかが北宇治の練習に参加をすると言うことだった。どうしてこの様な形になったのか。

事の発端は、数日前に遡る。

「ねー、兄ちゃん。北宇治の倍率って、どのくらいかなあ？」

秋川家のリビング。夕方のニュース番組を流し見しながら、凜花はなんとなくしに忍に対してそう聞く。

「さあ、俺が入った時はそうでも無かった気がするけど……」

今日の夜ご飯の支度をしながら、忍は答える。

「こんな事を聞くとは、もう凜花の中では心が決まったのだろうか？」

「ってか何？凜花、もう志望先決めたの？」

続けて忍がそう聞くと、凜花はソファから身を起こして、顔を忍へと向けた。

「うん。もう北宇治に決めた。私、あそこで吹くよ」

当たり前かのように、あっさり凜花はそう宣言する。一瞬料理をしている忍の手が止まったが、すぐに元通りに戻った。

「……まあ、凜花がそう決めたなら別に良いけど」

どの高校に行こうか凜花の自由なので、忍がとやかく言う事もない。

しかし北宇治の吹部に入ると決めたはいいが、それなら兄としては言う事がある。

「じゃあ、一回練習来てみれば？もう中学の部活もやってないんだろ？」

決めたのはいいが、それでも一度は体験なりしておくものだ。オーブンキャンパスでは無いが、それでも北宇治の吹部に属する気ならそれは必要だ。

「うーん、そーだねえー……じゃあ、さやかちゃんも連れて行こうかな？」

「え？さやかちゃんも北宇治なの？」

驚いた様子で忍はそう言うが、対して凜花は呆れた様な顔になる。

「そりゃ、あんだだけ露骨だと当たり前じゃん」

「露骨って、何が？」

「……気付いてないんだ。さやかちゃんかわいそー」

ジトつとした目線を忍に向け、非難するように凜花はそう言う。対して忍はまだ分からないのか、首を傾げるのみだった。

「……まあ、いいや。とりあえず練習は見てみるよ。兄ちゃんから顧問の先生に言つといてくれる？」

「おっけー」

そんなこんなで、凜花とさやかかの練習参加が決まったのだ。

「未来の後輩になるかもしれない2人です。皆さん、よろしくお願
いしますね」

「はい!!」

滝先生がそう言うと、部員達から気合いの入った返事が返ってくる。それを聞いて、凜花とさやかも自然と背筋が伸びた。

「ホルン！音がバラついています！ここは前回も注意した場所ですよ！」

「はい!!」

「クラリネット！オーボエと連携が取れてません！今更こんな事言
わせないで下さい！」

「はい!!」

滝先生の指導に、部員達はすぐさま返事を返す。北宇治高校吹奏楽
の練習は、いつも通りだ。

一つの音楽を突き詰める為、部員達の向く方向は同じ。だから滝先
生からのキツイ指導も、部員達にとってはなんて事は無い。

「……………」

しかし、凜花とさやかにとっては衝撃的な様だ。息を呑み、気圧さ
れる様に北宇治の練習を見学していた。さやかはその雰囲気にも呑ま
れて不安な表情を浮かべているが、凜花は気圧されながらも真剣に北
宇治の演奏を聞いている。

「はい。では、10分休憩にしましょう。次はオーボエソロの部分
からです」

「はい!!」

滝先生がそう声を掛けると、雀の涙ほどの休憩が取られる。それと
同時に、やっと凜花とさやかの肩の力が抜けた。

「……………ふうー、すごいねー北宇治。こっちまで緊張しちゃったよ」

「わ、私、ここでやっていけるかなあ……………」

凜花はまだ余裕がある様だが、さやかはすっかりと北宇治の練習に

圧倒された様だ。

「まあ、全国行くぐらいだからねえー。寝ても覚めても演奏、演奏、音楽の事しか考えられなくなっちゃうぞー?」

「も、もうー変な脅し方やめてよー……」

揶揄う様にそう言う凜花に対し、さらに困り顔を浮かべるさやか。初めて全国レベルの練習を目の当たりにして、2人とも少なからず衝撃を受けてる様だった。

「ふふっ、そんなに緊張しなくてもいいよ?」

そして、こんな時に声を掛けるのはやはり彼女だろう。

柔らかい笑みを浮かべて中世古がそう言うと、2人して少し顔を赤らめながら慌てて礼を返す。

「い、いえいえ! その、やつぱ全国は違うなーって! 中世古先輩の演奏も、すつごく綺麗でした!!」

その中でも、凜花は食い付く様に中世古に褒め言葉を送る。

忘れてるかもしれないが、そもそも凜花はあがた祭りで出会った頃からカオリストだ。

「あははっ、ありがとう。お世辞でも嬉しよ」

「お世辞じゃないですーもう、なんて言うか、中世古先輩の演奏する姿を見れるだけで私は嬉しいです!!」

「あ、あはは……」

まるでどこその後輩と同じ様な言葉を発する凜花に対し、苦笑いを返す中世古。しかし優子と同じくそこまで言われると嬉しくもある。

「ありがとう。……でも、中世古先輩だとちよつと寂しいかな?」

「え?」

ワザとらしく落ち込む中世古に対し、凜花は不安な表情を浮かべる。

そして、マドンナと呼ぶに相応しいその美しい笑顔を凜花に向けた。

「これからは下の名前で呼んでいいよ? 凜花 ちゃん?」

「……………あ、うっ……………」

どうやら中世古の言葉は凜花にクリティカルヒットだった様で、凜花は脳のキャパシティをオーバーして限界を迎えてしまう。

マドンナと言うあだ名の前に、“魔性”と言う二つ名を付けても良いのではないだろうか？

そんな事を感じさせるこの2人のやり取りだった。

見学②

「へえー、アツキーと滝野の妹かー。凜花ちゃんはちょっとアツキーに似てるかな？ さやかちゃんは……うん、まあこう言う兄妹も居るよね」

そしてトランペットのパート練習。凜花とさやかを見比べながら、加部は2人の印象を口にする。

「褒めてんのか貶してんのかどっちだよ」

加部の微妙な評価に、滝野からツツコミが入った。

2人ともどちらもトランペット希望だ。見知った顔も居るからか、合奏練習の時に比べれば凜花はあまり緊張していない。

「ちよつと吹いてみてよ！ 来年、後輩なるかも知んないし！」

「いいですよー」

「は、はいー」

続けて加部にそう言われて、凜花はリラックスした様子で、さやかは少し緊張気味に、返事を返す。

「やっぱりさやかはどこかまだ緊張が抜け切ってない様だった。

「ど、どっち先吹く？」

「どっちでもいいよー。さやかちゃんがやりやすい方で」

尚も緊張気味にそう尋ねるさやかに対し、気の抜けた声で凜花は返す。こう言う部分は流石忍の妹と言ったところだろうか？

演奏する事に対しての緊張はあまり無い様だ。

「あ、ありがと。……じゃあ先に吹くね」

そう言って吹く準備をして、さやかは一つ深呼吸をする。



やはり経験者であるからか、基本はしっかりとしている。緊張気味で音が少しブレているが。

「おー、流石経験者。ちょっと硬いけど土台はしっかりしてるねー」
そして最初に褒めたのは、忍だった。

「ほ、本当ですか!？」

忍に手放しに褒められ、途端に明るい笑顔を見せるさやか。それがきつかけとなったのか、さつきまでの緊張は何処へやら。水を得た魚の様に興奮した様子で忍に近づく。

「ありがとうございます!!でも、まだまだ忍先輩には届きません!!技術もそうですけどやっぱ表現力はレベチです!!そもそも私なんかと忍先輩を比べるなって話ですけどね!!あと合奏練習中もやっぱり忍先輩は――」

「はい。さやかちゃんそこまで。皆んな困ってるよー?」

「ああん!忍先輩!」

慣れた手つきで凜花に忍から引っ剥がされるさやか。演奏では緊張してたのに皆がいる前でよくやるものだ。案の定、優子が凄い顔になっている。

「兄ちゃんもデレデレしない!今は部活中だよ!!」

「で、デレデレなんかしてないけど……」

凜花に叱られ、バツの悪そうな顔をする忍。まあ女の子に褒められて悪い気はしないので、そこは許してあげても良い気がするが。

ともかく、次は凜花の演奏だ。

「あはは、次は、凜花ちゃんの演奏が聴きたいなー?」

中世古がそう言うのと、緩み切っただらし無い笑顔で凜花は浮かべる。

「はあい!香織先輩!見てて下さいね!私の演奏!!」

先程までのしつかりとした妹はどこへ行ってしまったのか、これ以上無い猫撫で声で凜花は返事を返す。やっぱり彼女もカオリストな様だ。

「……ん、ん……」

一つ咳払いをし、凜花の雰囲気が変わる。先程までの緩み切った表情とは一変、真剣にピストンの具合や管にホコリなどが付いてないか確かめる。

「はい、じゃあ行きまーす」

リラックスした様子でそう宣言すると、凜花はマウスピースに口をつけて演奏を始めた。

「すごい」

「ヤバっ、うつま」

パートメンバーの面々から、驚きを持って迎えられる。レベルとしては、完全に中学生の域を超えている。

彼女も忍と同じく5歳の頃からトランペットを吹いてきてきた。やはり楽器の演奏は”経験”がモノを言う。技術的な部分では、コンクールメンバーと遜色無い程だ。

そんな凜花の演奏を聴いて、加部と吉沢の表情が少しばかり強張った。

「やっぱり上手いね。流石秋川くんの妹さんかな？」

中世古がニコリと笑ってそう感想を述べる。しかし、凜花は少し浮かない顔だ。

「……うーん、ちょっとイマイチですね。安定してないところがありませんでしたし」

先程のカオリストぶりとは打って変わって、凜花は微妙な表情でそう呟く。あれでまだ納得行ってないのかと、パートメンバーは苦笑いを浮かべた。

「チューニングちゃんとやったか？」

しかし忍だけはいつもの光景の様で、凜花のトランペットを見ながらそう聞く。

「あー、それかも。いきなり吹いたしねー」

「ちゃんと準備してから吹けて」

「分かっているよう……あと低めの音も安定してなかったかな？」

「いつもと違う感じだった？」

「うーん……」

そしてメンバーそっちのけで兄妹で何処が悪かったなどの会話を始める。褒められたのに自分の演奏に納得しない辺りはやはり……

「……中身はそっくりかな？」

中世古が困り顔ながらも納得したように呟く。
この音に対してのこだわりは兄妹揃って同じな様だ。

「どうだった？北宇治」

そして時刻は夕方になり帰り道。並んで歩くのは秋川家の兄妹。
凧花に対して、忍はそう聞く。

「うん、良かった。やっぱり全国行く高校は違うねー」

満足そうな笑みを浮かべて凧花はそう返す。経験者である凧花の
目からしても、北宇治のレベルの高さには満足な様だ。

「そりやどうも。滝先生の指導も良かったろ？」

「うん。あんだだけ細かく指導してくれる人初めてかも。あとイケメ
ンだしねー」

ケラケラと笑いながら最後に付け加える様にそう言う凧花。滝先
生のイケメンはともかく、その指導力には凧花も目を見張るものが
あった。自身でも気付かない部分を滝先生が把握して、的確なアドバ
イスを送る。

「パートメンバーも面白かったろ？」

「そーだね。さやかちゃんのお兄さんも居るし、高坂先輩はやっぱり
めっちゃ上手かったし、優子さんも優しいからいいんだけど……」

不満がある訳ではない。しかし凧花としては一つ残念な事があつ
た。

「はあー……香織先輩、なんで今年卒業なんだろー……」

心底残念そうにため息をつく凧花。今日1日で随分と中世古にお
熱な様だ。

「ふーん。そんなにか？」

「はあ!?なに”そんなにか?”って!!来年香織先輩見れないとかこつ
ちとしてはあり得ないんだけど!!」

興味なさそうな忍に対し、声を荒げて反論する凧花。

祭りの日と今日で2日間しか会ってないのによくもここまで好き

になれるものだ。この人たらしぶりも彼女がマドンナと呼ばれる所以だろうか。

「しょうがねーだろ。……ってか香織先輩が居ないからって志望校変えたりしねーだろうな？」

「そりやないけど……はあ……私のモチベーションは真つ逆様だよ……」

がつくしと肩を落とし、大袈裟に落ち込む凜花。そんな妹の姿に忍も大きいため息をついた。

「はあ……まあいいや。……後は気になるところとか無かった？」

「うーん、気になるところかあ……」

忍にそう聞かれて、凜花は腕を組んで考える。トランペットパートはレベルも高いし問題無さそうだ。では、合奏練習。全体を見て、凜花が思う事とは……

「うーん、ちよつとだけど、低音が弱いかも」

凜花のその言葉に、忍は一瞬だけ眉を顰めた。

「あー、まあ、そーだよなあー……」

そして難しい顔をして呟く様に忍はそう返す。

「なにその返事？ 兄ちゃんらしくない」

いつもなら発言がハッキリしている忍が言い淀む姿を見て、凜花は訝しむ。

「ちよつとユーフォオの方に問題があつてね。……俺らだけじゃどうにもなりそうにないからどうしよっかなーって思つてるところ」

「はあ、そうなんだ。……で、問題って？」

「……フツーに、親子間の問題だよ。受験も近いしね」

言いにくそうに忍がそう言うと、何が起きてるのかなんとなく察したのか、凜花も神妙な表情になる。

「……そっか。ちゃんと話し合つて解決出来ればいいね」

「……」話し合う”、かあ……」

今日も来なかつたそのユーフォニアムの演奏者は、ちゃんと親と話

し合っているのだろうか？
凛花の言葉を聞いて、そんな事を思う忍だった。

自分の音

「うーん、そーだなあー……正直に感想を言わせてもらおうと、辛気臭い」

合奏練習。北宇治の演奏にそう評価したのは、橋本先生だ。

「学校が始まって練習時間が減っているのに、夏休みの頃の音を維持出来るのは凄いなと思う。……けど、あの頃よりみんな堅い！音がガチャガチャで、聴いててキツイ！」

「「はー！」」

橋本先生の率直な評価に、どこかしら元気の無い声で部員たちは返事を返す。

「もしかして全国だから緊張してるー？皆んな全然面白くなさそうだよ？滝くんみたいに怖い顔して」

「私は怖い顔なんてしませんよ」

「これだから自覚の無い人は困るなあ」

滝先生と軽めのやり取りをすると、橋本先生は再び目線を部員たちへと向ける。

「色々な学校の子に言ってるけど、僕、実はコンクールってあんまり好きじゃ無い。一生懸命やってるなら、金でも銀でも良いと思ってる。……まあ耳にタコかも知れないけど、”音を楽しむ”と書いて音楽。金だの銀だの意識して、縮こまって堅くてジメジメした演奏になつてたら、意味が無い。明るく！楽しく！朗らかに！！はい復唱！！」

「「明るく、楽しく、朗らかに……」」

突然の橋本先生の要求に、困惑気味に部員たちは復唱する。

「ハキッと明るく！！」

「「「明るく！楽しく！朗らかに！！」」」

その返事を聞いて、橋本先生は満足そうに頷く。

「はい。じゃあ気になったところを順番に言っていくと……まずユーフォ」

「は、はいー！」

橋本先生に呼ばれ、黄前が緊張気味に返事を返す。

「全然音聞こえて無かったけどー？……本当に吹いてた？」

「ふ、吹いてました」

「二人だからかも知れないけど、音小さいなあ。いつもの上手い先輩は？ホラ、赤メガネの」

「あすか先輩は、その……」

「今日は欠席です」

言い淀む黄前に対し、後藤が返事を返す。対して橋本先生は困った様に頭を掻く。

「この大事な時期にー？……まあ良いや。もっとちゃんと鳴らさない」と

「はい！……くしゅん！」

「大丈夫？」

「あい……ずびばせん……」

くしゅんをしながら黄前は返事を返す。その横にポツカリと空いた席を、滝先生は深刻そうに見つめていた。

「次、木管！」

「は、はい！！」

次に橋本先生は木管パートに目を向ける。

「一言で言うなら弱い！特にソロパートからの繋ぎ！」

先生がそう言うと、木管パートの面々は一様に苦い顔になる。

「正直、それだとトランペットのソロが霞むよ！せつかく秋川くんが良い演奏してるんだから、それをもっと活かさなきゃ！」

「は、はい！」

檄を飛ばす様な橋本先生の注意に木管パートの面々も真剣に返事を返す。

トランペットソロパートから音を繋ぐのは、ファゴットやクラリネットなどの木管パートだ。しかし、音が負けている。

たった一人のトランペット奏者に、5人の木管奏者が音で負けているのだ。木管と金管の違いと言うのもあるが、それでも忍一人の演奏に木管の奏者たちは付いていけて無かった。

「まあ、これくらいかな。細かく言えばもつとあるけど、さつきも言った様に音が堅い！明るく、楽しく、朗らかに！これを忘れない様に！いいね？」

「「はい!!」」

「それでは、今日の合奏練習はこれまでとします」

「「はい!!」」

締めるように滝先生がそう言うと、すぐさま音楽室の片付けが始まる。今日は忍も片付けの当番だ。トランペットをケースにしまい、先を立ち上がろうとすると――

「ああ、秋川くん。ちよつと良いかな？」

「はい？」

橋本先生に呼び止められた。

「ちよつと話したいんだけど……」

先程の合奏で何か気になるところでもあったのだろうか、忍は目を丸くする。

「んー、了解です。タツキー、ちよつと片付け頼んでもいい？」

「りよーかい」

滝野に了承を得ると、忍はトランペットケースを持って立ち上がる。

「ありがとう。ちよつと教室から出ようか？」

「?、はい」

何かここで言えない話でもするのだろうか。そんな事を思いながら、忍は橋本先生の後について行った。

「見違えたよ。本当に良い演奏するようになったね」

嬉しそうに、忍の肩をポンポンと叩いて橋本先生はそう言う。先生は忍がスランプから抜け出した後の演奏を今日初めて聴いたのだ。スランプの頃から忍の事を気に掛けて貰っている分、今日の忍の演奏は橋本先生にとっても嬉しい事だった。手放しで褒められて忍も満

更でも無さそうな表情になる。

「そ、そうすか？ありがとうございます」

「うん。正直、この前の演奏を聞いてたらもうちよつと長くなりそうかなって思ったんだけどね。ビックリしたよ。久しぶりに北宇治に來たらいつの間にかスランプ抜け出して、おまけにソロパートも変わってるんだからさー」

橋本先生としては正直、こんなに変わるとは思っていなかった。もう一皮も二皮も剥ける素質はあるとは思っていたが、こんな形でソロパートを吹くとは、プロとして見ても想像出来なかったのである。

「……ちよつとは掴んだかい？自分の音を」

合宿で橋本先生が言った言葉。楽譜通りのさらにその上。尋ねるように先生がそう言うと、忍は束の間考える素振りをする。

「うーん、……どうですかね。”掴んだ”と言うよりかは、”変わった”って感じですかね？」

「へえ！具体的に説明出来るかい？」

忍のその答えに、橋本先生も興味津々だ。そして考えが纏まったのか、視線を橋本先生に向ける。

「はい、なんて言うか、”演奏”が変わったと言うよりか、”意識”が変わったって感じです。今までは自分にとってトランペットを吹くって、『楽しまなきゃいけない』ってずっと思ってたんです。つましくなく吹いてたら、意味が無いって」

「ほうほう」

忍の説明に満足そうに橋本先生は頷く。

「スランプになった時は、そりやもう嫌だったです。全然楽しめななんですもん。……でも、なんて言うんですかね？音楽って、楽しいだけじゃないなって思うようになって……」

「……どう言う事だい？」

忍の話を聞くにつれて、橋本先生の表情も真剣になっていく。まさか、この子……

「……きつきの合奏練習、橋もっさんは明るく、楽しく、朗らかについて言ってたすけど、俺としてはそれ以外にも音楽になるんじゃないかと思っただんです。……例えば”悲しい”とか、”怒り”とか」

「……………」

橋本先生は、驚きを隠せないでいた。

普通なら、学生のする音楽なんて言ってしまうばたかが知れている。所詮部活だ。そこには生活も掛かってないし、高校生という立場上ここで音楽を辞めても進路なんていくらでもある。

つまり、音楽に自分の全てを捧げる必要性が無いのだ。

だからこそ橋本先生はあの場で部員達に”楽しめ”と念を押した。高校の部活では、それだけで十分だからだ。

しかし、目の前の少年は違う。

「そう考えると、スランプなんて大した事ないなって思えるようになったんです」

この子はもう既に、音楽に自分の全てを捧げようとしている。自分が感じた喜び、悲しみ、怒り。それを全て音に乗せて、聴き手に伝えようとしている。

そしてそれは、”自分の音”となり得る。

技術よりも大事な、意識の部分。そんなプロとしての絶対条件を、秋川忍と言う男はもう身に付けつつあるのだ。

「……………想像以上だよ」

絞り出すように、全身に立つ鳥肌を抑えながら、橋本先生はそう言う。

「うん。良い。凄く良い！高校生でここまで音楽と向き合う子！初めてだよ!!」

そして喜びを爆発させるように、再び忍の肩をガツシリと掴む。

「良かった！本当に良かった!!僕の目に間違いは無かったよ!!やっぱり君は素質がある!!」

「は、橋もっさん、近い……」

熱弁する橋本先生に対し、引き気味に忍はそう返す。するとそれでようやく我に返ったのか、ゆつくりと忍の肩から手を離して自分を落ち着かせるように一つ咳払いをした。

「ご、ごめん。つい興奮しちゃって。……でもほんと凄いや。高校生でそんな考えが出来る子、今まで見た事なかったから」

「……大袈裟じゃないですか?」

「大袈裟なもんか。……こりや滝くんが言ってた以上だね……」

そう言って、橋本先生は感慨深く腕を組む。

やはり彼は高校生レベルではない。寧ろ、下手なプロよりも……そう考え始めると、どうしてもこの子が表舞台に立つところを見てしまいたくなる。

「……合宿の時にも言ったけど、音大の件、考えてくれたかい?」

この子がプロになって、観客に演奏を披露するところを見てみたい。本当に音楽に没頭出来る環境を用意してあげれば、この子はまた更に化ける。橋本先生にはそんな確信があった。

そう尋ねると、今度は忍が腕を組んで考える。

「……音大ですか……」

正直、頭の片隅にはあった。スランプも抜け出し、余裕が出来た時点で自身の進路を考える事も多くなってきている。その上、田中がそれで親とトラブルを起こしているの、否が応でも考えざるを得ないのだ。

忍としては音大に行く事も良いと思っている。しかし、一つ引掛かることがあった。

父親は、自分が音大に行く事を良しとしてくれるだろうか?

影響される訳ではないが、ここ最近の田中を見てるからこそ、忍もそう考えるようになっていた。

それに一度は話しておかなければならない事だ。

「…………正直、自分は良いと思ってます。…………まだ家族と話していないので、決められません」

忍がそう言うと、橋本先生は優しく微笑む。

「…………そっか。いや、良かったよ。秋川くんの気持ちも聞けただけでも。悪かったね。長くなって。実は聞きたかったのはこの事なんだ。…………また何かあったら気軽に連絡してくれて良いからね」

「はいーありがとうございます!!」

最後にまた忍の肩を軽く叩いて、橋本先生は帰って行く。

学生全員に言える事でもあるが、忍の頭の中に「進路」と言うワードが、だんだんと大きくなっていった。

進む路

進路

進む路と書いて、進路。

自身が大きくなるにつれて、どの様に生きて行くか。それを決めるための意思表示とも言えば良いだろうか。

自分の意思で決めるそれは、多いに学生を悩ませる。年端も行かない17・18の少年少女が、初めて人生の岐路に立たされる。やりたいう事。成し遂げたい事。それが無かったとしても、漠然と描く自分の未来。

そんな未知の不安と戦うのが、進路だ。悩んで悩んで悩み抜いて、ようやく自分の中で決める。自分の意思で決める。どれが正解だなんて、誰も分からない。

そんな普遍的な悩みを、秋川忍も持っている。

『本日の京都の天気は……………』

秋川家。リビングに設置されたテレビには、天気の新コースが流れている。それと同時に聞こえてくるのは、鍋が沸騰する音。朝御飯の味噌汁を作っているのだろう。しかし、なぜか包丁の音は聞こえない。

すると、ガチャリとリビングのドアが開く。

「…………ふあ……………眠っ……………」

大きなあくびをして入ってきたのは、凜花だ。まだ開け切っていない目をキッチンの方へ向ける。

「おはよー……………兄ちゃん……………」

「……………」

「……………」

挨拶するも、返事は返ってこない。寝ぼけ眼を指で擦ってもう一度キッチンの方へ目を向ける。すると、沸騰し切った味噌汁が鍋から溢

れていた。それを見て凜花の目が一気に覚める。

「ちよ、ちよつと兄ちゃん!!火、火!!」

「……………え?あ、ああー!!!」

凜花の焦った声によく反応し、慌てて忍は火を止める。

「なにブーツとしてんの!火事になったらどーすんの!」

「ああ、うん。ごめん」

説教する凜花に対して生返事を返す忍。料理の途中でブーツとしていた様だ。

「ごめんて……………まあいいや。料理中は気をつけてよー?」

「分かってるよ」

返事を返すも、どこか気が別の方向に行っている。今日の忍は、朝からそんな感じだった。

「……………忍」

「……………」

「忍!!」

「え?、あ、はい!!」

そしてそれは部活の時間までにも影響していた。優子が何度か声を掛けると、ようやく返事を返す。

「ブーツとしすぎ。合奏練習行くよって言ってんじやない」

「あー、うん。そっか。そうだったね」

返ってくるのはまたもや生返事。そんな忍に対し、察したように優子は一つため息を付く。

「……………はあ……………また何か悩んでるんでしょ?」

見透かしたように優子がそう言うと、凶星を突かれた忍は少し眉間に皺を寄せる。しかしそのリアクションで十分だったのか、察した表情で優子は薄く笑った。

「部活、終わったら暇でしょ?一緒に帰るわよ」

こう言う時の忍は何か考えてるか、悩んでる時だ。それを彼女も分

かっているのだろう。」

優子の言葉に、忍は「うん」と素直に頷く。ここで意地を張っても無意味だし、それに忍の中ではこの悩みは優子にも話しておきたいものだった。

「なんか、いつつもこの公園来てるね」

「そうね。何かと縁があるのかしら？」

そして場所は、いつもの公園。茶化すように忍がそう言うと、優子は感慨深くそう返す。

思い返せばこの公園ではいろんな事があった。忍が優子の事を引つ叩いた時に仲直りした時。優子の中世古への執着を断ち切った時。スランプ中に忍が本心を吐露した時。

そして初めて2人が口付けを交わした時。

決めている訳ではないが、何かと大事な話をする時はここへ来ている。そんな出来事があったからこそなのか、これから進路の話をすると言うのに忍の心はあまり重くはなかった。

いつもの公園、いつものベンチに座り、心を落ち着かせる。

そして、考えが纏まったのか、忍はゆっくりと口を開いた。

「……………優子はさ、進路の事考えた事ある？」

今回は直接的に、本題に入るようだ。対して優子は、以外そうな表情を見せる。秋川忍と言う男は、良くも悪くも思ったら一直線な人間だ。

だから、進路に関しても悩まず自分が思ったように進むものだと思っ子も思っていた。

しかしそれと同時に、妙な嬉しさを覚える。

「……………アンタも、進路で悩むのね？」

ちよつと遠い場所に居ると思っていた、自身の想い人。

そんな彼も、私たちと同じような悩みを抱えているんだなど。嬉しい感情が表情に出っていたのか、忍の眉間に少しばかり皺がよる。

「……………悩んじゃ悪いかよ?」

「いや、少し安心した」

「安心して……………」

人の悩みを聞いて安心とは何事か。

しかし、言ってみるとどうも気分がスッキリとした。忍の中にあつた心のモヤモヤがスーツと晴れていく。

「橋もっさんにさ、音大勧められたんだ。良い先生がいるって」

するりと、自然に忍は相談する。それを聞いて、優子は少し驚いた表情を見せた。

「へえ、凄いいじゃない。この時期にもうお誘いなんで」

「うん。それで、優子はと思う?」

「どう思うって……………」

忍からのなんとも抽象的な質問。

『どう思う』と聞いてくるあたり、忍にも分からないのだろう。進路なんて、自分で決める事だ。それは吉川優子とて理解している。多分、忍の中では心はもう決まっているのだろう。それでも人間というのは不安になる生き物だ。

ならしてやれる事は、ほんのちよつと背中を押してあげるだけ。

ひとしきり考えた後、優子はゆっくりと口を開いた。

「私は、スゴいと思う。……………正直、自分の中では答えなんて出てるんでしょ?」

またも見透かした様に、優子はそう言う。それを聞いて、安心した様に忍は微笑んだ。

そう。秋川忍が唯一弱音を吐ける人物は、吉川優子だけなのである。

「……………さすが優子。……………そうだね。でも、ちよつと臆病になつてるのかも」

心の中では決まっている。しかし、それでも先の見えない未来というものに恐怖を感じる事は、必然と言える。その中で、自分で選んで決めるのが”進路”だ。

それを聞いて一瞬不安げな表情を浮かべるも、すぐさま優子は柔ら

実力

放課後。とある教室で、居残り練習をしている少年少女2人がいた。

少女の方はユーフォニアムを持ち、少年の方はトランペットを持っている。

「……どう、かな？」

「良いんじゃない？俺、ユーフォの事はあんま分かんねーけど、良い演奏だったと思う」

ユーフォを吹き終えた少女が不安そうにそう聞くと、少年の方は肯定的な感想を述べる。

「これならコンクールにも間に合うんじゃないか？あすか先輩には届かないかも知んねーけど、中川は中川のペースでやればいいだろ？」

「あはは、ありがと。滝野って、ホント褒めるの上手いよねー」

ユーフォの少女は名前を中川夏紀。トランペットの少年は名前を滝野純一と言う。何故この2人が一緒に練習をしているのか。

事の発端は数日前にまで遡る。

「田中さんが今月末までに部活を続けて行く事の出来る確証が得られなかった場合、全国大会の本番は、中川さんに出してもらおう事にします」

音楽室。滝先生がそう言い放つと、部員たちは声も発せず、様々な表情を見せる。単純に驚いた顔をする者、ついに来たかと深刻そうな表情を見せる者。

駅ビルコンサートが終わっても、田中あすかは部活にあまり顔を出さなくなっていた。それどころか、日を追うごとにユーフォの席には

空席が目立った。

全国は待つてくれない。田中あすかを待つている時間なんてもう残っていないのが現状。

だからこそ、滝先生はその様な判断を下す。

しかし、その穴を埋めるのは誰か？

当の本人。中川は、やはりと言うべきか、不安な表情を浮かべてる。そしてそれを、しっかりと滝野は見ていた。別に他のパートのいぎこぎだ。トランペットの自分には関係の無い事。しかし、何となく放つておけないと言う妙な感情が滝野の中にあつた。

「なあ、中川」

そして合奏練習が終わると、すぐさま滝野は中川に話しかける。

「何？」

「居残り練習、付き合つてくんねーか？」

「ごめんねー。滝野はコンクールメンバーなのに。アタシの練習に付き合つて貰っちゃつて」

「最初に付き合つてつて言ったのは俺だから。別に中川が気にする事じゃねーよ」

演奏後の楽器の手入れをしながら、中川の感謝の言葉に滝野は素っ気なく返す。

態度はぶつきらぼうだが滝野自身、この空間が嫌な訳ではなかつた。元々文化祭の時から少し気になってはいたのだ。

しかし今は状況が状況な上に、滝野としても素直に喜べないのが実情だった。

「おーいタツキー。帰るべやー」

すると、ドアの方から気の抜けた声が聞こえる。2人ともその方向へ顔を向けると、鍵を持った忍が立っていた。同じく居残りで練習を

していたらしい。

「あー、ごめん。すぐ片付ける」

「いいよいいよ。……それとも、俺お邪魔だった?」

忍が揶揄う様にそう言うと、少し顔を赤らめる滝野。

「馬鹿言つてんな。中川に迷惑だろ」

「あはは、アッキーは相変わらずだねえ。ともかく滝野、今日もありがとね。明日また!」

「おつかれー」

最後に挨拶をすると、中川は教室から出て行くこうとする。

「ああそうだ、アッキー」

すると何かを思い出したかのように、忍の側で一旦足を止めた。

「例の件、明日よろしく」

「……はいよー」

短く中川がそう言うと、一瞬間を開けて忍は返事を返す。

「……?」

しかし滝野には、そのやりとりが何を意味しているのか分からなかった。

「どうなるのかねえ……」

「どうもなんないだろ」

そして帰り道。憂うように忍がそう言うと、一緒に帰っていた滝野から素っ気ない返事が返ってくる。

「随分とドライじゃん。タッキー」

「……別にそう言うんじゃないよ。あすか先輩が来なかったら、中川が吹くだけだろ?」

口では素っ気ないが、少し考えてるような表情を見せる滝野。

「……まあ、なつきちが吹くのも良いんだけどさあ……」

忍が微妙な表情でそう言うと、滝野は少し睨め付ける様に忍を見やる。

「……役不足って言いたいのか？」

「そうは言っていないよ。でも、練度は違うよね？今までずっとコンクールの練習をして来たあすか先輩と、サポート中心でやって来たなつきちじゃ」

やはり直接的。忖度無しに忍はそう言い放つ。それを滝野も分かっているのか、バツが悪そうに目を背けた。

「って言うか最近のタツキー、随分となつきちに肩入れしてんじゃん」

「……………うるせー」

続けて忍がそう言うと、更に顔を顰めて滝野はそう返す。

「最近、合奏練習が終わったらなつきちの個人練、付き合っただけでるらしいじゃん？」

「だからうるせーって」

抑揄う様な忍の言葉に、鬱陶しそうに滝野はそう返す。

「まあ、そこは良いけどさ。……………どう？なつきち。本番までに仕上がろう？」

「……………」

忍の問いかけに、更に顔を顰めて滝野は無言を返す。

言葉は無いが、表情で答えている様なものだった。

「……………時間は無いよ。もしタツキーが本気でなつきちをどうにかしようとするなら、中途半端はやめなよ？」

「……………分かっているよ」

突き刺す様な忍の忠告に、俯いたまま滝野はそう返した。

「……………どう、かな？」

「どうって言われてもな……………俺はいいと思うけど……………中川的にはどうなんだ？」

別の日、練習終わりの教室。居残りで練習しているのは2人。演奏を終えた中川が不安げな表情でそう尋ねると、滝野はどっち付かずの

返答をする。

「もーダメ。ゼーんぜんダメ。そりやそうだよ。あすか先輩とアタシだもん。実力の差なんて、遠く及ばないって」

「……………」

自虐的にそう言う中川に対して、滝野は返す言葉が無い。心底残念そうに俯くばかりだった。

「もー、そんな顔しないの！滝野が練習付き合ってくれてるって言ったんでしょー？アタタが落ち込んでどうすんのよ？」

「だって……………」

「だってもうこうも無い……………正直、滝野だって全然ダメだって思ってるでしょ？」

「……………そんな事は……………」

核心を突くような中川の言葉に、何とか反論しようとする滝野。

「そんな事ねえよ。今からだって、十分間に合うだろ。……………あすか先輩には届かないにしろ、コンクールで演奏出来るぐらいには……………」

「あはは、滝野って、優しいんだね」

必死に弁明しようとする滝野に対し、中川は悲しそうに笑ってそう返した。

「……………アタシね、昨日アツキーに演奏聴いてもらったんだ」

「……………え？」

中川から忍の名前が出て来た。それを聞いて、滝野の中に嫌な予感が走る。

「もー散々だったよ。音が安定してないとか、指が全く追いついて居ないとか、息が全く持つて無いとか。……………アツキーって、DSなんだねー」

そう言う中川の口調は明るさを取り繕っているが、表情は反比例するように悲しいものだった。

忍は音楽に絶対嘘をつかない。だからこそ、中川は彼の評価を知りたかった。

しかしそこで忍が下した中川への評価とは……………

「……本当に、アタシって、まだまだなんだなあって……」

目を潤ませ、震えた声で中川はそう呟く。

そんな彼女を見て、滝野の中に生まれたのは、同情や悲しみではなく怒りだった。

なぜ、中川がこんな思いをしなければならないのか？

忍が中川の気持ちも考えずに演奏を酷評したから？ 田中が無責任にも演奏を彼女に押し付けたから？

それもあるだろう。しかしそれ以上に、自分の無力さが腹立たしかった。

「滝野はさ、コンクールで吹くの、不安って感じない？」

「え？」

すると。中川から抽象的な質問が飛んでくる。

「アッキーや高坂さんと比べて、自分なんか実力が足りないって、思ったりしない？」

「……そりゃあ、思うよ」

中川問いかけに、拳を握りしめて滝野はそう返す。彼だって、男だ。誰かに負けたく無いと言うプライドも持ち合わせている。

「今も必死こいて吹いてるけど、やっぱり届かないなって、思う事あるよ」

しかし、どうしても届かないと思う存在がいる。口では出さないが、彼も一番身近にいる同年齢、同パートの実力に嫉妬を抱いている。

「……そっか。そうだよね。なんか安心した」

そしてその感情は、中川も知っているものだった。田中はまだいいだろう。昔から上手くて憧れの先輩だ。しかし、もう一つ空いたその席に座っているのは、自分では無く年下の……

「アタシはさ、こう言うの向いてないんだと思う」

そして今度は吹っ切れた様に中川はそう言う。

「……何が？」

対して滝野には、彼女が何を言わんとしているのかが分からない。「誰かに勝つとか、誰かを引き摺り下ろすとか。……今だって、自分が演奏したいって気持ちより、あすか先輩に吹いて欲しいって気持ちの方が強いもん」

自分より他人。自主的な献身性。

中川夏紀と言う少女は、自分より他人を優先出来る子なのだ。

「だからさ、アタシは良いかなって」

「………そっか」

ここまで言われては、滝野も何も言えなくなってしまう。

「ありがとね。ここ数日練習に付き合ってもらっちゃって」

「……別に、大した事してねーだろ」

満面の笑みでそう言う中川に対し、照れを隠す様に滝野は目を背けながらそう返す。

「ううん。アタシ、あの時滝野に居残り練習誘ってもらえて嬉しかったよ。滝先生にああ言われた時、すっごい不安だったから。ああ、コイツ、優しいんだなーって」

「………分かったから。もう良いって……」

中川からの手放しの感謝の言葉に、更に顔を真っ赤にする滝野。

「……それより、あすか先輩の穴どうすんだよ？」

恥ずかしさを誤魔化すためか、無理矢理話題を変える滝野。しかしこの問題もまだ残っている。対して中川は不敵な笑みを浮かべた。

「そうだね。滝野の優しさに免じて、ちよっと頼みたい事があって」

本音

「あすかの家に？」

「はい。今週末、ユーフォの黄前さんが勉強しに行くらしいんで、何か香織先輩からアドバイスがあればなど」

話しているのは中世古と滝野。パート練習後、珍しく妙に真剣な顔つきで滝野から話しかけられたので何事かと思っただが、その話す内容も意外なものだった。

「うーん、私も何回か行ったきりだったけど……そっかあ……黄前さん、あすかにお勉強誘われたんだもんね」

どこか悲しいような、それでいて諦めるような何とも言えない表情で中世古は呟く。まるで『どうして自分は蚊帳の外なんだろうか』と言わんばかりに。

「と言うか、滝野くんってあすかと仲良かったっけ？」

しかしそれよりも、何故滝野が田中にそこまで気を掛けるのかが中世古にとっては不思議だった。学年も違く他パートの先輩なのではとんど接点は無い筈だ。

「え？ああ、いや。ちょっと中川に頼まれて……」

「中川さん？」

これまた意外な名前が出て来て、更に首を傾げる中世古。対して滝野は少し言いにくそうに口を開いた。

「えっと、なんて言うか中川って今、立場的にも辛い状況じゃないか？……別に協力ってわけじゃ無いすけど、何か出来ることがあればなー。とか思ってる」

少し目線を逸らして恥ずかしそうにそう言うと、納得したように中世古は薄く微笑む。なるほど。田中の為じゃ無くて中川の為だったか。

「……そっか。滝野くんって、優しいんだね？」

「べ、別にそう言うんじゃないっすよ！今回だって中川に頼まれたからで……」

「あはは、恥ずかしがらなくてもいいよ」

噂は中世古の耳にも入っている。文化祭以降、滝野と中川で話す事が多くなっているとか、ここ最近中川の居残り練習に付き合っているとか。

滝野だつて同じパートの後輩だ。彼女の性格的に、見過ごすと言う選択肢は無い。

「……そっかあ、じゃあ、ちよつとは協力しないとね?」

「ー、ありがとうございます!」

中世古の返事に、深々と頭を下げる滝野。

「……それに、私もこのままじゃ納得出来ないし」

確かに滝野の為でもあるが、中世古としてはそれ以上にこのまま田中を放っておけないと言うのが本心だった。

「それはそれとして……」

すると、中世古の笑みが揶揄うような表情に変わる。それを見て滝野の中に嫌な予感が走った。

「いつの間に、中川さんとそんな仲良くなったのかなあ?」

どうやら中世古も他の女子高生と同じく、色恋沙汰には目がないらしい。その後は尋問のように根掘り葉掘り質問攻めを受ける滝野だった。

「はあ……」

屋上でため息をつく女子が一人。

黄前久美子は悩んでいた。田中あすか直々にお勉強回に誘われたのである。それも田中の実家で、名指しに。

元々黄前自身も田中が何を考えているのか掴みきれないところがあつたのだが、今回は本当に分からない。

「あすか先輩はなんで……」

何故誘われたのか？ 目的はなんなんだろうか？ そもそもなんで私なのだろうか？ 同学年で仲のいい部長や香織先輩の方が良いんじゃないだろうか？

考えれば考えるほど分からないと言うのが、黄前の今の気持ちだった。

「コラ一年!! サボるな!!!」

「はー、はうえい!!!」

突然怒鳴られ、反射的に返事を返してしまう黄前。慌てて声の方向へ顔を向けると、ニヤついた顔を浮かべた忍がそこに居た。どうやら確信犯らしい。

「もー、アツキー先輩ですかー……驚かささないで下さいよー……」
そんな忍に対し、少し呆れたような声色で黄前は文句を垂れる。

「だってホントにサボってたんだもん。あとで滝先生にチクろーつと」

「そ、それはちよつとー……」

揶揄うような忍の言葉に黄前はバツの悪そうな表情を浮かべる。ただでさえ田中の件でゴタゴタしているのに、練習でも身が入っていないと知れたら何を言われるかたまつたもんじゃ無い。

「まあ冗談冗談。俺もパート練偶にサボる事あるし」

「人の事言えないじゃないですかあ……」

本当に自由人と言うか、自分のペースで話す人だ。思った事がそのまま口から出る人なんだろう。どこかの本音を絶対見せない先輩とは正に真逆の存在。ここまで対極な人間が存在するものかと、黄前は少し吹き出してしまった。

「おう、今度は笑い始めたでこの後輩」

「ふふっ。いや、なんか、全然違うなって」

「?、何が?」

尚も笑う黄前に対し、更に首を傾げる忍。

「あすか先輩とアツキー先輩を比べると、ホントに真逆なんだ

な—って」

「そうなの?」

「ええ、そうなんです」

今でこそ本音を見せない田中に苦勞しているが、真逆でも相当苦勞するだろう。すぐ口から本音が出るこの男を制御しないといけないのだ。吉川の苦勞も計り知れないものである。

「あ—あ。あすか先輩も、もっとアツキー先輩みたいに素直だと良いんだけどなあ……」

しかし、黄前にとつては今この素直さが羨ましくもあった。ここまです素直になつてくれれば、もつとやりようもあるのにと。

「褒めてる?それ?」

「ええ。もちろんです。アツキー先輩は素直で良い子ですよ—」

「なんかバカにしてるよねえ」

やっぱり、この人と喋ると不思議な感覚になる。

黄前久美子はあまり本音を表に出さない性格だ。そこは田中と似ているところでもある。

しかし、目の前の先輩はそれをこじ開けて来る。

ひょうきんな性格がそうさせるのだろうか?

……いや、ちがう。本人が本音全開でこちらにぶつかって来るので、こつちもそう言う雰囲気になつてしまうのだろう。

「アツキー先輩は、何ですか先輩は私の事誘つたと思います?」

しかし、ここで黄前は本音を出さない。探るように、忍にそう聞く。

「勉強会に?」

「はい」

黄前はジツと忍を見やる。本音がポロポロと出るこの人は、どんな答えを出すのだろうか?そんな興味本位も黄前の中にはあった。そして少し考えた後、忍はゆつくりと口を開く。

「正直、俺あすか先輩と仲良くないからね。あんまり分かんないつてのが答えになるかな?」

やっぱり、そう返って来た。なら、聞き方を変えてみよう。

「そうですか。なら、今のあすか先輩の立場が優子先輩だったら、どうします?..」

黄前の問いかけに、忍は心底驚いたような表情を見せる。

「.....あ、すみません!!今のは忘れていただけると.....!!」

失言と思っただのか、慌てて黄前は今のを無かった事にしようとする。対して忍は、心底嬉しそうに大きく笑った。

「あっはははは!!やっぱり黄前ちゃんって面白いねー!!」

「え、ええ.....?..」

黄前としては絶対に怒られると思っていたので、肩透かしを喰らった様な形になる。

そしてひとしきり笑ったあと、忍は黄前の目をハッキリと見据えた。

「アイツって、本音を隠すのが苦手なタイプじゃん?すぐ顔に出るしきあ」

「あ、あはは。そうですね.....」

心底楽しそうな忍に対し、苦笑いで黄前は返す。

「もしアイツがあすか先輩と同じ状況になったら、アイツ多分親と大喧嘩でもするんじゃない?その上で俺はどんどん喧嘩しろって言うかな?..」

「そんな吹っ掛ける様な事.....」

あまりにも斜め上な忍の回答に、黄前は更に表情を困らせる。

「するよ。まずは本音を聞き出して、優子がそれで辞めるって言えば辞めても良いと思うし。続けるって言えば絶対に続けさせる」

強い言葉で、忍はそう言い切る。あまりにも強い覚悟を感じたのか、黄前の方が息を吞んでしまった。

そして、先程の質問のお返しとばかりに、忍は黄前に聞く。

「黄前ちゃんは、あすか先輩の”本音”を聞いた?..」

「……まだです」

「そっか。じゃあ、黄前ちゃんの”本音”は？あすか先輩にどうなって欲しいの？」

「……………」

言葉を返せない。確かにあすか先輩の本音は聞き出せていない。しかしそれ以前に、まだ自分の本音をあすか先輩にはまだ……………

「忍ー!!!」

すると、屋上の出入り口から声が聞こえた。二人してその方向へ振り向く。

「何してんの!!パートの合わせやるわよ!!!」

少し怒り気味の優子が、あいも変わらず不機嫌そうな顔で手を振っていた。

「ごめんごめん!すぐ行くから!!……………じゃあ黄前ちゃん。そう言う事で」

それだけ言うと、忍は優子の方へと足を進める。

「あ、あの!アツキー先輩!!」

去り際、黄前が忍を呼び止める。

「何?」

「あ、あの!ありがとうございました!!」

そう言っつて、黄前は深々と頭を下げる。

「はいよ。どういたしまして。じゃあ、頑張つてね?勉強会」

一言。忍はそれだけ返すと、優子と一緒に校舎内へと戻って行った。

親

「どうなると思う？」

「あすか先輩の事？」

その日が来た。昼休み、2年3組の教室でそんな会話をするのは、いつものこの2人。

「ああ。黄前さん、上手くやってくれるかなあ」

「さあね。なる様になるんじゃない？」

憂うように滝野がそう言うも、対照的に忍はあっさりと返す。

今日は黄前が田中の家に勉強しに行く日。吹奏楽部の面々は、何処か期待している。

黄前久美子が、この状況をどうにかしてくれようとする。

「黄前ちゃんに全部任せるってのが、俺には気に入らないけどねえ」
だからこそ、忍はこの状況をあまり良く思っていないかった。聞けば傘木や鎧塚も黄前に伝言を頼んだと聞く。黄前が田中を説得してくれると思っているのか、彼女が田中の家で勉強会をやる噂が広まるに連れて皆、変な期待を黄前に掛けているこの奇妙な空気が忍は少し気に入らなかった。

「……でも、アッキーだって分かってるだろ？今の状況じゃ、黄前さんしか居ないって」

「分かんないね。決めるのはあすか先輩だし。そもそも黄前ちゃんにどうこうして貰おうってのがお門違い。……つてか、なんでタッキーは黄前ちゃんにそんな期待してんの？」

尚も不機嫌そうな顔で、忍は滝野にそう尋ねる。

「……何怒ってんだよ。……そりゃあ、コンクールだとあすか先輩に吹いてもらった方がいいから……」

「まあ、そうなんだけどさ。でもそれで黄前ちゃんに変なプレッシャー掛けるのは違うでしょ？」

「……そりゃ、そうだけど……」

突き刺すような忍の言葉に、滝野も困り果てた様な顔になる。

「一年に皆んなよつてたかつて、『あすか先輩をお願いねー』って、そんな雰囲気かスゲー嫌」

「……そんな言い方無いだろ……」

皆、意図的に黄前にプレッシャーを掛けている訳ではない。

それは忍も分かっている。だからこそ、行き場の無い怒りの様なものが湧いていた。

「あーもー、イライラする。ちよつとあすか先輩に会つてくる」

その苛立ちをどうにかしようと、こんな事になった張本人の田中に会いに行こうと、忍は席を立つ。

「ちよ、ちよつと待てアツキー！今じゃ無くていいだろ！」

足早に教室を出て行こうとする忍の袖を、滝野が慌てて掴んだ。

「とりあえず今日は黄前さんが行くんだから、お前が茶々を入れる様な事すんなって」

「……じゃあ、俺のこのイライラはどうすればいいわけ？」

止められた忍は不機嫌真つ逆様だ。

「今日の部活で思う存分ぶつけていいから」

宥める様に滝野がそう返す。

本当にこの自由人は、手綱を持つ人間が居ないとすぐ暴走する。

「あれ、香織先輩は？」

そして部活動。パート練習の準備をしながら、忍は隣にいる優子にそう聞く。

「黄前さんのところ。なんでもあすか先輩に会いに行く前にアドバイスだつて」

同じく楽譜台の調整をしながら優子はそう返す。

「黄前ちゃんに何をアドバイスすんの？」

「そりゃあ、……なんだろ？あすか先輩の好みとか？」

中世古が黄前にどんなアドバイスをしているのか、優子にも見当が付かない。

「好みって、なんの？」

「好きな男のタイプとか？」

「あすか先輩がそれ言うわけがないと思うんだけど」

「……確かに」

田中あすかと言う少女は、分からない部分が多過ぎる。

その中で、黄前は、どうアプローチをかけるのか。中世古も何とかしようとしているのは分かるが、心を開かない彼女の牙城をどうこじ開けるのか、見当もつかなかった。

「お待たせー」

そんな話をしていると、中世古が戻って来た。

「どうでしたか？黄前さん」

少し心配そうに優子はそう聞く。

「うん、一応菓子折りを渡しといたよ。幸富堂の栗まんじゅう」

「そうですか。……それで、あすか先輩は……」

「実はね、あすかと少し話したんだ」

すると、中世古から意外な言葉が出て来た。

その言葉に、パートメンバーは一様に中世古に注目する。

「な、何を……？」

「そんな大した話じゃ無いよ。部活の近況とか、テスト勉強の話とか、そんな感じ」

「そうですか……」

少し、重い空気が流れる。

やっぱり、黄前に賭けるしか無いのか。

「……本当は、私が何とかしないとなんだけどね」

「そ、そんな事ないです！香織先輩は頑張ってます！」

落ち込む中世古に対し、慌てて優子がフォローを入れる。

「……ありがと、優子ちゃん。……よし！じゃあ心機一転！練習しよっか？」

「「はいー」」

自分に言い聞かせる様に、中世古はそう言う。

「……………」

そんな中、忍はただ考え込む様に楽譜を見つめていた。

「どうなったんだろーな？」

「……さあね。なる様になったんじゃない？」

翌日。朝のHR。やはり話題は田中の様で、滝野の問いかけに対し忍は前と同じ様な返事を返す。

「相変わらず冷めてるな。……興味無いの？」

「下らないとは思ってるよ」

「……辛辣だな」

下らないとは、何に対してなのか。

勉強会に対してなのか、それとも田中あすかに対してなのか、その母親に対してなのか。

忍自身もそんな心のモヤモヤの正体が分からなかった。

「……まあ、何にせよ今週末まで。テスト期間終わってもあすか先輩が部活に来なかつたら……」

「……………」

最悪の結末。

しかもそれは、田中あすかが望んだ形では無い。

それがわかっている故に、皆歯痒い思いをしているのだ。

「ただいまー」

家に帰り、難しい顔をして忍は靴を脱ぐ。

帰宅途中も心のモヤモヤは晴れることなく、終始顰めっ面で忍は帰っていた。

「はあー……………」

家に帰ると、大きく一つため息を吐く。そのままリビングに向かうと、何やら話し声が聞こえた。

『じゃあ、ここにハンコでいいのか?』

『うん。願書はまだまだ先だろうから、また言うね?』

声からするに、父親と凜花だ。忍も気になってリビングのドアに手を掛けようとする、先に向こうからドアが開いた。

「ありゃ? 兄ちゃん? おかえり。ずいぶん早かったね?」

ドアを開けたのは、凜花だった。

「だだいま。テスト期間だよ。今週末までは帰ってくるの早くなるよ」

「あ、そっか。北宇治、今がテスト期間だったもんね。……今回は勉強しないと、兄ちゃんヤバいんじゃない?」

「うっせ」

押揃う様にそう言う凜花に対し、少し顰めっ面になって吐き捨てる様に忍は返す。

「お前だって大丈夫なのかよ、受験勉強」

「へーきへーき。兄ちゃんでも入れる北宇治だよ? 私はちゃんと対策しているのだ」

胸を張って自信満々にそう言う凜花。しかも何だかいつも以上に機嫌が良い。

「随分と機嫌がよろしい様で。親父となんの話してたの?」

親父と何かいい話でもしてたのだろうか?

「あ、進路希望の紙にハンコ押して貰ってたの。これ」

そう言つて、凜花は進路希望の調査書を見せてくる。

第一希望のところには北宇治高校。その他は空欄だった。

「他の欄空欄だけど……親父に突っ込まれなかったの?」

「全然。むしろおとーさんノリノリだったよ? 『そんなくらいの気持ちがあるなら大丈夫だー』って」

なるほど。凜花の機嫌が良いのはこの為だったか。子供2人を持つ父親としてそれはどうかとも思うが、忍は困った様に笑った。

「親父は相変わらずだな」

自由と言うか、放任と言うか。

忍は自身の2年前を思い出す。確か自分もあの時、進路希望を親父に伝えた時に2つ返事を貰った。

「……おかえり。忍」

すると長話過ぎたのか、親父の方から声を掛けられる。

「ただいま。今週末まで帰るの早いから」

「分かった」

短くそれだけやり取りをすると、忍はリビングの中に入って行く。

「ああ、丁度良かった。忍、そこ座りなさい」

すると、親父からリビングの席に座る様促される。

何の話をされるのか察したのか、少し、忍の心臓が跳ねた。そして対面する様に互いに座る。食事の時も同じ位置なのだが、今日は雰囲気全く違う。

そして、親父は淡々とその口を開いた。

「お前、高校卒業したらどうするんだ？」

父親

リビングがしんと静まり返る。

真面目な話だ。重苦しくはないがそれでも緊張感ぎ張り詰めるような沈黙。

忍は、まだ悩んでいるのだろうか？

「まだ決まってるかい？」

そんな忍の心を察してか、遠慮がちに忍の父はそう聞いてくる。

父親として自由に奔放と言う一面もあるが、忍と凜花の全く気に掛けていない訳ではない。

そのバランスを取るのが上手いのが、この秋川修介（あきかわ しゅうすけ）と言う男だった。

「……いや、決まってるのかじゃないけど……」

忍は言いにくそうにそう返す。

悩んでいるわけではない。

あとは親父に言うだけだ。

自分の将来を。

一つ、勇気を持って。覚悟を決めて。

そして一つ唾を飲み込むと、忍はゆっくりと口を開いた。

「親父。俺、音大に行きたい」

しっかりと自分の父親を見据え、ハッキリと忍は言い放つ。

少しの沈黙。

しかし、忍にとっては長すぎる様に感じる。どんな言葉が飛び出るのだろうか？ 反対されるのか？ 何故音大に行くのかと深掘りされるのだろうか？ 考えれば考えるほどネガティブな思考になって行く。

対して修介さんは腕を組んで少し考える様な素振りを見せる。

「……………」

そしてようやくと言うべきか、視線を忍に向けてゆつくりと口を開いた。

「そうか、分かった。何処の音大だ？」

「……………え？」

随分とあっさりとした返答をする修介さんに対し、忍は呆けたような声を返す。こんなにもすんなりと通っていいものだろうか？

「まだ決まってるのか？」

しかし目の前の親父は飄々としている。まるでその回答を予測していたかのように。

「い、いや、そうじゃなくて。……親父は反対しないの？」

「何が？」

「いや、俺が音大に行く事に」

普通の大学に進学するよりも、音楽大学に行く方がはるかに学費が掛かる。忍だって馬鹿では無い。橋本先生に音大を勧められてから、学費の事に関して自分である程度調べた。

だからこそ、父親がそれを許してくれるのか。そこが忍の中で引っ掛かっていたのだ。

そんな不安げな忍に対し、修介さんはそんな事かと軽く笑う。

「子供がいらん心配するな。お前の人生なんだから、お前が好きにしろ」

またもやあっさりと。こんなにもスツと通るものかと、忍は啞然とする。

「……………いいんだ」

「……………なんだよ、音大行きたくないのかよ」

少し困惑気味の忍に対し、修介さんも怪訝な表情を返す。
なんだか微妙な空いだ。

「いや、そうじゃなくて、……正直、もつと反対されるものかと。金も掛かるし」

忍がそこまで言うと、ようやく修介さんは合点が行ったかのような表情を見せた。

「……確かに、お前のお陰でウチの家計は圧迫されるかもなあ」

小馬鹿にする様にそう言うと、忍もバツの悪そうな顔になる。

「……じゃあ、なんで音大行って良いんだよ？」

拗ねる様な忍の問い掛けに、修介さんは満足そうな笑みを浮かべた。

「お前が行きたいからだろ？何年お前の父親やってると思ってるだ」

「……はっ、なにそれ」

激励なのか冷やかしなのか、よく分からない事を言う修介さんに対し、忍は半笑いを返す。

「お金の心配なんざ10年早いよ。俺は普段のお前を見て”音大に行かせてもいいな”って思ったからこう言ってるんだよ。齧れる内は親の脛齧ってる」

照れ隠しなのか、すこし捻くれた言い方で修介さんはそう言い放つ。

その言葉は、秋川修介と言う男が父親としてずっと忍を見てきた事への裏返しであった。普段から忍が何をしているか。何に取り組んでいるかを見ているからこそ、息子が音大へ行くことに理解を示しているのだ。

胸の中につつかえていたものが、やっと取れたような気がした。

今の忍を表すとすれば、この言葉が適切だろう。

こうもあっさり行くとは思わなかったが、それでも父親が自分の事を見てくれていたと言う事実には、無意識に忍の表情が綻ぶ。

「……ありがとう。親父」

その言葉は、自然と忍の口から出ていた。真っ直ぐ立ち上がり、修介さんに向かって深々と頭を下げる。

「何処の音大行くかは早めに決めておけよ？色々準備もあるから」

「……うん。わかった」

短く、そんなやり取りだけを交わす。

やっぱり、同じだった。

北宇治を受験する時も、部活を一度辞めた時も、秋川修介と言う男は一つ返事で良いと言った。今回の大学もそうだ。寧ろ高校より金の掛かる筈なのに、生活が圧迫されるかもしれないのに、まるで忍の事を見透かしたように修介さんは音大に行く事を否定しなかった。

”常に子供の意志が第一”

この考え方こそが、秋川修介の芯にあるのだろう。

そしてその意思を汲み取れるほど、普段から自分の子供が何を考え、どうしたいかを見ていると言う事だ。

「じゃあ、話終わり。今日は晩飯外にするか」

すると、真剣な雰囲気から一転、ひょうきんに修介さんはそう言う。

「？、なんで？」

秋川家では普段あまり外食はしない。するとすれば誕生日などの何か特別な事がある時のみだ。

忍がそう聞くと、修介さんはニコリと笑う。

「だって、凜花とお前の進路が決まったんだろ？こう言う時は贅沢しなきゃ」

「……ハッ、まだ決まった訳じゃないのに」

もう受かった気でいる修介さんに対し、軽く笑ってツツコミを入れる忍。……本当にこの父親はなんと言うか、自由奔放と言うか、テキトーと言うか。

しかし如何様にも心地が良い。

放置し過ぎず、干渉し過ぎない。

理想的な親と言うのはこう言う事を言うのだろうか？口には絶対に出さないが、そんな事を思う忍だった。

深夜、誰もいないリビングは少し広すぎる様にも感じる。凜花も忍ももうすっかり寝ている中、修介さんはまだ起きていた。久々に外食に行き、少しお酒を入れたのか、頬が僅かながら赤くなっている。

今日は2人の進路を聞いた。自分達の子供が自身で未来を考え、親である自分に打ち明けてくれた事は、父親である修介さんにとっては何よりも嬉しい事だった。

しかし、それと同時に寂しさも込み上げる。

自分で進路を決めて行くと言うのは、大人になって行くと言う事だ。そして大人になれば、当然ここからも巣立って行く。

いつも3人で食事を取るこの場所は、いつの間にか一人ぼっちになって行くのだろう。

そう考えると、修介さんの足取りは自然と居間の一角に向かって行った。そして仏壇の前に座り、懐かしむような、それでいて寂しい様な顔を浮かべながら、線香に火を付ける。

「……………音大、行きたいってさ」

独り言の様に、修介さんは呟く。

慣れた手つきで線香を立てると、仏壇の前で手を合わせた。

「凜花は北宇治。……………2人とも音楽やってると、お金が掛かって仕方ないよ」

そんな言葉とは裏腹に、修介さんは嬉しそうな表情を浮かべる。

「……………お前から見て、俺はちゃんと父親できてるかな？」

そして仏壇の写真を見つめながら、返ってくる筈もない返事を期待するかの様に独り言を呟いた。

「……………もうちよつと頑張んなきゃなー」

それは決意表明だろうか。最後にそれだけ言っていると、修介さんは立ち上がってリビングを後にした。